
デジモンアドベンチャー 転生したらこうなった

松上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー 転生したらこうなった

【Nコード】

N2884T

【作者名】

松上

【あらすじ】

テンプレ通り死んだ主人公の加藤 航。

原作知識を使い、HAPPY ENDを目指す！！

ヴァンデモン編、無事に終了。

ヴェノムヴァンデモン編、無事に終了。

メタルシードラモン編、無事に終了。

ピノッキモン編、無事に終了。

ムゲンドラモン編、無事に終了。

ピエモン編、無事に終了。

アポカリモン編、無事に終了。

無印、無事に完結。

ぼくらのウォーゲーム編、無事に完結。

デジモンカイザー編、スタート！

※この作品は矛盾やご都合主義が多々見られます。努力して無い様にしますが、全部無くせるのは無理なので矛盾やご都合主義が在ります。その辺りの事を気を付けて読んで下さい。

プロローグだよ！（前書き）

プロローグです！！

始めからご都合主義ですが気にしないでください！！

プロローグだよ！

皆さん初めまして……だよな？

俺の名前は加藤航かとうわたるって言うんだ。

歳はさっき迄は13歳だったんだが、たった今享年13歳になっ
てしまった。

何故かと言うと、まあ簡単に言ったら死んだからだ。

死んだ原因が交通事故と言う二次小説でよくあるテンプレな展開
で死んだ。

横断歩道を普通に歩いていたらトラックが突っ込んできて引かれ
て、そのまま死んじゃうと言う二次小説でのお決まりの展開で死ぬ
と言うテンプレ。

そして気付いたら全身白で覆われた爺さんが、俺に土下座して必
死に謝ってると言う変な状況。

取り敢えず話し掛けてみますか……

「すみません？」

「すみません!!」

「……おい。」

「すみません!!」

「聞いてんのか？」

「すみません!!」

ブチッ!!

「話を聞けや、このクソジジイがアアアア!!」

「ギャアアアアアアアアアアアア!!」

(暫くお待ちください)

「それで、何で俺に謝ってたんだよ?」

俺は某魔砲少女のO・H・A・N・A・S・H・Iをジジイにして、ジジイを正座させて土下座していた理由を話す様睨みながら言った。

「理由か?

「……怒らんでくれよ?」

ジジイが不安そうな顔をしながら、俺にそう言ってきた。

「良いから速く話せ。」

俺はジジイを睨みながらそう言った。

「実はの、お主を殺したのワシなんじゃ。テヘツ」

・

・

・

・

ブチッ!!

航「それが人に謝る態度か!?

ええ!!!?」

俺は更にジジイを睨んで、ジジイの服を掴んで叫んだ。
するとジジイは、怯えた顔をしながら俺に言ってきた。

「すまん!!」

じゃが先ず、殺してしまった理由を聞いてほしい!!!」

ジジイが両手を合わせて、俺に理由を聞いてくれる様頼んできた。
……其処迄言うんだから何かしらの理由があるんだろうと俺は思
って、仕方がなく（…………）ジジイの服を離した。

「分かった、理由を聞いてやるよ。」

俺がそう言うと、ジジイは突然胸を張って立ち上がった。

「実はの、ワシは神様なんじゃ！」

……神様（笑）ね、はい分かりました。

「な！？

お主、ワシの事を信じておらんな！！

しかも何じゃ“（笑）”って！？

速くとらんか“（笑）”を！！」

「……何で俺の心を読めてるのは知らないが、さっさと話せよ。

……それとも、もう一度O・H A・N A・S H Iされたいのか？」

「それでな……」

ジジイが偉そうに言ってきたので俺が睨んでジジイにそう言うと、
ジジイは正座をして話し出した。

本当にお前は神様かよ……

「ワシ等神には、人間の寿命が書かれた書類があるんじゃ。」

神様（笑）の所には、そんなスゲエ物があるのかよ……

「でな、お主は後60年は確実に生きる筈だったんじやが……」

・

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

じゃあ何で俺は、死んで此処に居るんだよ？

「それでな、うっかりお主の書類にコーヒーを溢しちゃった！テヘツ」

ブチッ！！

「一々そんな顔すんじゃねえ！！
気持ち悪いんだよ！！」

それにどうしてくれるんだよ！！

俺は未だ、やりたい事が沢山あったんだぞ！！

彼女一度も作った事も無いんだぞ！！」

「すまんかった！！」

じゃから、お主を別の世界に転生させるから許して！！」

俺がジジイの服を掴んで揺らしながらそう叫ぶと、ジジイが凄い事を言ってきた。

転生……だと……？

「そ、それって、二次創作の小説のテンプレみたいにな、能力をくれてアニメの世界に行く奴だよな？」

「勿論じゃ！」

……

航「ありがとうございます神様。（ペコッ）」

俺はジジイ、否、神様の服を離して頭を下げてお礼を言った。

「おっ、“（笑）”が消えたの。」

……それにしても態度が変わりすぎじゃが……まあ良いわい。
それで、何処の世界に行きたいんじゃない？」

神様の言葉を聞いて、俺は直ぐに頭を上げた。

「俺は“デジモンアドベンチャー”の世界に行きたい！！」

懂れてたんだよな、あの世界でデジモンと一緒に戦う事に。

「分かったわい。」

転生する世界はデジモンアドベンチャーの世界じゃな。
では、パートナーデジモンを二体選んでくれ。」

に、二体だと！？

「な、ならコロナモンとルナモンで！！」

パートナーと言ったらこの二体だろ!!

「よし、ならばデジモンを出すぞ!!」

神様はそう言うのと、右手を上にした。

そしたら、俺の前にコロナモンとルナモンが現れた。

「俺の名前はコロナモン、よろしくな!!」

「私の名前はルナモン、よろしくね!!」

二体が俺を見てきて、自己紹介をしてきた。

「俺の名前は加藤 航だ。

これからよろしくな!!」

「挨拶は済んだようじゃな。

それでは、デジモンアドベンチャーの世界に送るぞ。」

「頼むな!」

「それじゃあ二度目の人生を楽しむんじゃぞ!」

「おう!!」

「それじゃあ行ってらっしゃーい!!」

神様がそう言うのと、俺とコロナモンとルナモンの地面が無くなった。

「此処もテンプレ通りなんだアアアアア!!!!」

「航君助けてエエエエエ!!!!」

「次会ったら覚えてろよオオオオオ!!!!」

そして俺達は、デジモンアドベンチャーの世界に転生した。

プロローグだよ！（後書き）

次回はあのキャラが登場します！！

第一話だよ！（前書き）

今回は転生した後の説明ですね

楽しんでもらえたら幸いです

第一話だよ！

side 航

俺が“デジモンアドベンチャー”の世界に転生して、早四年の歳月が経った。

えっ、何で飛ばしたかって？

この世界に転生したら、俺は赤ちゃん姿だったんだよ！！

自我がしつかりはつきりあったから、凄く恥ずかしかったんだよ！！だから飛ばしたんだよ！！

以上！！

まあこの話はこれ位にして俺は今、俺は四歳（精神年齢は十七歳）で第二人生を楽しく過ごしている。

俺はお台場の原作の太一さん達が住んでいたマンションで過ごしている。

そして驚く事に、俺の家お隣さんが太一さんの家族と言うかなりのご都合主義なのだ！

何でも、俺の父さんと太一さんの父さんが小学校からの親友なので、かなり仲が良いみたいなのだ。

俺はてつきり太一さんと同じ年かと思ったら、太一さんは小学校一年生と言う俺より年上だった。

だが、太一さんの妹のヒカリちゃんと俺は同じ年だった。

俺は、光が丘でのデジモン事件（現実世界では爆弾テロ事件）が終わっていたと新聞で知った。

まあ別にデジモン見なくても、俺はパートナーデジモンが居るしな。

コロナモンとルナモンは、デジヴァイスの中で生活してもらって

いる。

最初にこの機能を知った時は、凄く驚いたぜ。

このデジヴァイスは、セイバーズのデジヴァイスの力を持っていたので、俺からしたら凄く嬉しい能力だな。

そして俺の部屋に、二つの紋章とタグあった事には正直驚いた。

コロナモンの方の紋章は信頼の紋章で、ルナモンの方は運命の紋章（とコロナモンとルナモンが教えてくれた）。

親は共働きで、父さんは太一さんの父さんと同じ仕事・母さんは近くのスーパーで午前中だけ働いている。

俺には兄弟や姉妹が居ないので、必然的に一人になる時が多い、否、毎日一人だ。

だがそんな時は、太一さんの家にお邪魔させてもらってる。

太一さんの家にお邪魔している時は、ヒカリちゃんと遊ぶ事がメインなのでヒカリちゃんとかなり仲が良い。

仲が良いって言ったら良いのだが……

この前太一さんの家で遊んでいたら、ヒカリちゃんが太一さんの母さんに「わたし、わたるくんとけっこんする！」と言った時は驚いて気絶した。

その時、ヒカリちゃん達に心配されたのは言う迄の無いが……原作では、タケル君と付き合っていると噂されていたが、俺がこの世界に転生して最初の原作ブレイクはヒカリちゃんの恋だったとは俺は正直な話驚いた。

まあ正直な話、俺はヒカリちゃんが一番アニメの中で好きだったから凄く嬉しいぜ。

後、コロナモン達とは時々一緒に特訓しているんだ。

幾らデジモンが戦うとは言え、自分は見てるだけなんて考えたくないからな。

なので、俺も筋トレや走り込みなどを毎日している。

だけど、筋肉を付け過ぎると身長が伸びないって聞いたからそこ迄がっちりと鍛えていない。

コロナモン達は成熟期迄進化する事が出来る……出来るのだが……
完全体には進化が出来なかった。

やはり原作の太一さん達同様、紋章に刻まれた意味をちゃんと理解しないと進化出来ないらしい。

でも成熟期と言えど、力なら弱い完全体に勝つ強さ（だと思う）
まあこれ位かな、説明しないといけないのは……

それじゃあ俺は、今からヒカリちゃんと遊ぶからまた会おうぜ！

！！

第一話だよ！（後書き）

次回は日常編です！！

お楽しみにー！！

第二話だよ！（前書き）

何故だろう・・・

もう一つ書いてる流星のロックマンよりこっちのネタが浮かんでくる
なんでだろう？

第二話だよ！

Side 航

「わたるくん、きょうはなにしておそぶ？」

「ヒカリちゃんがしたい遊びで良いぜ。」

俺は今、八神家にお邪魔している。

理由は、前（第一話だよ！）に言ったから言わないぞ。

そうそう、俺がこの世界に来て変わった事と言えば、ヒカリちゃんが思った事を口に出すようになった事だな。

これでヒカリちゃんが二年後に死ぬかもしれないという話は、完全……とはいかないが消えたと思う。

話を戻すぜ。

俺とヒカリちゃんは、太一さんとヒカリちゃんの部屋で何をして遊ぶか考えている。

まあ、俺は何でも良いんだけどさ……

「じゃあけっこんごっこをしよう！！」

わたしがおかあさんでわたるくんがおとうさんね！！」

・

・

・

・

な、なにィ！？
ひ、ヒカリちゃんと夫婦、だと……

「…………ふにゃあ」

ドタッ！！

そこで俺は意識を失った…………

sideヒカリ

「わ、わたるくん！？」

わたしがわたるくんにけっこうんごつこであそぼうっていうと、わたるくんがきゅうにたおれた。

「おかーさん！！」

わたしはなきながら、おかあさんをよびにへやをでた

……………

……………

……………

……

「ん？」

どうしたの、ヒカリ？」

「わ、わたるくんが、きゅうに、たおれちゃったの！！」

わたしはおかあさんにだきついて、なきながらおかあさんにいった。

「！？」

す、直ぐに行くわ！！」

おかあさんはわたしのはなしをきいて、わたしとおにいちゃんのへやにはしっていった。

わたしは、なきながらおかあさんのあとをついていった。

………

………

………

……

「……気絶してるみたいね。」

おかあさんがわたるくんのからだをさわりながら、ちいさいこえでそういった。

……きぜつってなに？

わたるくんはしんじょうの？

わたしは、なきながらおかあさんにきいた。

「おかあさん、わたるくん、しんじょうの？」

「……大丈夫よ、ただ少し寝てるだけだから。
だから安心しなさい、ヒカリ。」

わたしがきくと、おかあさんはわたしにわらっていつてきた。
おかあさんのことばをきいて、わたしはなきやんだ。

「ヒカリ、航君と一緒に寝てあげなさい。
そうしたら、航君も安心して寝れると思うわ。」

「うん!!」

おかあさんはわたるくんをわたしのべつどにねかせて、そのとな
りにわたしもころがった。

「それじゃあお休み、ヒカリ。」

「おやすみ!!」

わたしはわたるくんのをだきつきついてめをとじた。

・

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

「・・・知らない・・・否、今言うのは止めとこ。

……それより此処はヒカリちゃんのベッド？」

目が覚めると、俺が寝ていた場所はヒカリちゃんのベッドだった。
目を覚まして某決戦兵器のパイロットの台詞を言おうと思ったが、
知っていた天井がだったので言わなかった。

やはり、知らない天井の時にこの台詞を言わないとな！！

ガチャッ

「あら？

起こしちゃった？」

俺が自問自答をしていると、太一さんの母さんが扉を開けてきて、
俺に聞いてきた。

「いえ、今起きたばかりです。」

「そう。」

……それより何で気絶したの？」

俺がそう言うのと、太一さんの母さんが気絶した理由を聞いてきた。答えられるんだが……は、恥ずかしい内容だ／＼／＼／＼だ、だけど、ちゃんと答えないと不安にさせてしまう……なので俺は、顔を赤くしながら答えた。

「えっと、そ、その、ヒカリちゃんと何して遊ぶか考えていて、その、ひ、ヒカリちゃんが俺と夫婦ごっこしたいと言ってきて、だから、そのシーンを考えてしまつて、あ、あの、恥ずかしくなつて気絶したんだと思います。／＼／＼／＼」

めっちゃくちや恥ずかしい！！

俺が気絶した理由を話すと、太一さんの母さんは笑っていた。

「フッフ、そうだったの。」

良かったわ、何もなくて。

……それより航君、お腹空かない？」

太一さんの母さんに聞かれると、俺の腹の虫が鳴った。

「はい、かなりお腹が空きました。」

俺がそう言うのと、太一さんのお母さんは俺に頬笑んだ。

「ならお昼にしましょう。」

私、準備してるからヒカリを起こしてきてね。」

「分かりましたけど、ヒカリちゃんは何処に居るんですか？」

俺がそう聞くと、太一さんのお母さんは笑って答えてくれた。

「航君の隣に居るから起こして来てね！」

そう言っつて部屋から出ていった。

……隣に居る？

俺は、俺の隣をよく見た。

よく見たら、右側に小さな膨らみがあった。

「（まだ、幼稚園児だもんな！！）

一緒に寝てたけど、気絶してたから何もしてないもんな！！）」

そう心で思いながら、俺は布団を捲った。

そこには、俺の右腕を抱きしめていて幸せそうに寝ていたヒカリちゃんが居た。

「（こんな可愛い寝顔をしてるヒカリちゃんを起こさなきゃいけないって……

神様、俺は貴方を恨むよ……）」

「呼んだかのお？」

……一瞬あの駄神が頭に浮かんだが、俺は頭から削除した。

だけど太一さんの母さんを待たせる訳にもいかないので、俺はヒカリちゃんの体を揺らしながらを起こした。

「ヒカリちゃん、起きて！！」

俺は、開いている左手でヒカリの体を揺らしながら言った。
少しして、ヒカリが起きてくれた。

「おはよう！ヒカリちゃん。

良いゆめ」わたるくん！！」ひ、ヒカリちゃん！？」

俺が言い終わる前に、ヒカリちゃんが俺に抱き付いてきた。

「ひ、ヒカリちゃん！？／＼／＼／＼／」

「よかった、わたるくん、いきでてくれた。」

ヒカリは泣きながら、俺にそう言ってきた。

「（泣かせちゃった。」

某仮面ライダー曰く、飯を残す事と女の子を泣かせる事は男がしちやいけない事だったよな……）」

俺は、ヒカリの頭を優しくゆっくりと撫で始めた。

「わ、わたるくん？」

「大丈夫、俺はヒカリちゃんを残して死にはしないから。」

そうヒカリちゃんに言いながら、俺はヒカリちゃんの頭を撫で続けた。

ガチャッ

「航君、ヒカリは起き……お邪魔しましたあ。」

太一さんの母さんに撫でてる所を見られてしまった……
だけど、ヒカリちゃんが幸せそうなので別に良いか。

余談だが、あの後太一さんの母さんが俺の親にその事を伝え「何時結婚するんだ？」と聞かれた時は恥ずかしかった

第二話だよ！（後書き）

次回は原作入りです！！

しかし主人公はデジタルワールドには行きません！！

第三話だよ！（前書き）

今回から原作入りです！！
めっさ急展開ですが御了承ください！！

第三話だよ！

side 航

俺がこの世界に転生して早8年が経った。

また飛ばした事には、深く考えなくてもらいたい。

……まあそれは置いておいて、俺は小学校2年生で、今日は8月1日で夏休みの真っ最中だ。

つまり、今日のサマーキャンプ中に太一さん達がデジタルワールドに行く。

えっ？

俺は行かないのかって？

……当たり前だ。

ヒカリちゃんが風邪をで寝込んでいて家には誰も居ないのに、一人にさせる訳にはいかないだろ。

なので俺は今、八神家にお邪魔していて、ヒカリちゃんの面倒を見ている。

「ごめんね航君、私の所為でキャンプに行けなくて。」

ヒカリちゃんが、風邪の所為で顔が赤いが、俺にキャンプに行けない事を謝ってきた。

全く、ヒカリちゃんは他人第一は原作とは変わらないんだ……まず、自分第一にしてほしいぜ。

「謝るなよ。」

俺は、ヒカリちゃんと行きたかったから申し込んだだけだよ。

それに、ヒカリちゃんが風邪を引いてるのに俺だけ楽しくなんか出来ないよ。」

俺はヒカリちゃんの頭を撫でながら、ヒカリちゃんにそう言った。

「あ、ありがとうね／＼／＼／＼／」

ヒカリちゃんは、顔を更に赤らめて俺にお礼を言ってきた。

「（か、可愛過ぎだろ……）

と、取り敢えず俺は部屋の掃除とかしとくから、何かあったら呼んでくれよ。／＼／＼／＼／」

「う、うん。／＼／＼／＼／」

俺は顔を赤くしながら部屋から出た。

メタ発言だが、前回の話から急に飛んだから前回から今迄に起こった事を説明しとくぞ。

まずヒカリちゃんが三年前に死にかける話だったが、その日は俺も学校を休んでヒカリの傍に居た。

案の定、太一さんがヒカリちゃんを連れ出そうとしたがさせなかった。

まあその所為で俺は顔や腕を殴られ大怪我を負って病院に入院したが、太一さんが泣きながら俺に謝ってくれた。

ちゃんと反省してくれたので、俺はその事を許した。

話は変わって毎日筋トレをし鍛えた結果、体力もかなり上がって今じゃあ2kmを全力で走れる様になって、体の筋肉も最低限だが鍛えられた。

コロナモンとルナモンは頑張って修業した結果、成熟期で一週間は退化せずに過ごせる様になった。

以上！！

さて、話を戻すぜ。

俺は太一さんとヒカリちゃんの部屋から出て、リビングにあるテレビをつけてニュースを観た。

やはり、デジモン達がニュースの内容に映っていた。

俺はニュースの内容を聴きながらソファの下を見たら、やはり原作通りヒカリちゃんのデジヴァイスがソファの下にあった。

俺はヒカリちゃんのデジヴァイスをソファの下から取り出して、持ってきていた自分の鞆の中に入れた。

猫の・・・ミーク？だっけ？

まあ良いや、ミークに無くされたら困ったもんじゃないからな。

俺はそう思いながら時計を見た。

時刻は11時25分過ぎ

もう直ぐ、太一さんがデジタルワールドからコッチに帰ってきて此処に帰ってくる頃だな。

まあ俺が原作に介入するのは、ヴァンデモン編の後半からだけど

.....

そんな事を考えながら、俺は昼飯の準備をする為にキッチンに向かった。

太一さんの母さんには、昨日の内に家に了解を得ているので太一さんの家の物は勝手に使える。

そして昼飯を作ろうと気合いを入れた途端、インターホンが鳴った。

「(百%、太一さんだな)
はーい、今開けまーす。」

知っているが、敢えて知らない振りをしてはいけないから俺はそう言った。

そして扉を開けると、やはり太一さんが立っていた。
勿論、コロモンを持ってだけだな……

「た、太一さん！？
な、何で此処に？」

大げさに驚いたが、驚かないと怪しまれるから驚いた振りをしたんだぞ。

「あ、嗚呼、ヒカリの様子が気になってな。
それで途中で帰ってきたんだ。

あ、あははははは。」

太一さんはコロモンを持っていない手で頭を掻きながら、笑って俺にそう言ってきた。

……太一さん、嘘付くの下手過ぎですよ。

何で一人の為にバスを出してるの？ってなりますよ。
誰がどう考えたって、一発で嘘だって分かりますよ。

「太一、この子がヒカリちゃん？
でも、この子は男の子だよ。」

俺が心の中で太一さんに突っ込んでいると、コロモンが俺を見ながらそう言ってきた。

バカ！！

何で普通に喋ってんだよ！！

俺は驚いた振りをして太一さんを見ると、太一さんがコロモンの口を押さえて動揺しながらも俺を見てきた。

「……す、凄いだろ！

俺さ、ヒカ리를喜ばせる為に腹話術を練習したんだぜ。」

……可愛そうになってきた。
速くと家に入れてあげよう。

「分かりましたから、取り敢えず家に入ってください。
太一さん、コロモン（……）」

「な、何でお前がコロモンの事を!？」

俺がそう言うと、太一さんは驚きながら家に入ってくれた。

第三話だよ！（後書き）

次回はキャラ設定です！！

キャラ設定だよ！（前書き）

今回はキャラ設定です！！

キャラ設定だよ！

名前 加藤航 かとう わたる

性別 男

年齢 八歳

容姿 イナズマイレブンに出てくる回想編に出てくる吹雪 士郎

性格 優しい、照れ屋、切れるとヤバい

好きな人 もの 八神 ヒカリ、仲間を大切に思う人、仲間の為に命を懸ける人、アイス、冷し中華、ゲーム

嫌いな人 もの 仲間を平気で裏切る奴、人を馬鹿にする奴、人を傷つける奴、誰かの死、辛いもの、勉強

身長 ヒカリより3〜4cm高い

体重 30kg

備考 本作の主人公

神様のミスで死に転生した転生者
ヒカリの事が好きで両思い

コロナモンとルナモンが相棒

体は鍛えているがムキムキじゃなく必要な筋肉しか付けていない
体力は2kmを全力で走れるくらいある

勉強は嫌いだが転生者なので全国テスト1位をとる

スポーツ万能で時々太一のサッカーチームの試合に助っ人と呼ばれる事もある

一度切れたり、頭に血が上ると口調が変わり性格まで変わる

キャラ設定だよ！（後書き）

次回はオーガモン戦です！！
期待してください！！

第四話だよ！（前書き）

GAN TZを見ってきました！！

黒野格好良いが血がいつぱい出てたよ・・・

ちよっとびっくりした

第四話だよ！

side航

俺は太一さんと向かい合わせに座って、太一さんに現在進行形で睨まれてまーす。

「なあ航、何でお前はコロモンの事を知ってるんだよ？」

太一さんが俺を睨むを止めて、真剣な目になって俺を見てきた。
何で知ってるって聞かれても答えようが……

「……コロモンはコロモンでしょ？」

俺は原作のヒカリちゃんの言葉を言ったら、太一さんは黙り込んで何かを考え始めた。

ガチャッ

「航君、ご飯は出来た？」

すると太一さんとヒカリちゃんの部屋の扉が開いて、ヒカリちゃんが出てきて俺に聞いてきた。

そう言えば俺、昼飯を作ろうとしてたんだっただな……

「……ヒカリ。」

「太一、あの子がヒカリちゃん？」

太一さんがヒカリちゃんを見てヒカリちゃんの名前を言うと、コロモンがヒカリちゃんを見て太一さんの顔を見て太一さんに聞いた。ま、また話したよコロモンの奴……

「ば、バカ!!」

喋んなよ!!

ヒカリ、コイツはな!!」

「コロモンも一緒に来たんだ。」

太一さんがコロモンの口を押さえてヒカリちゃんに弁解しようとしたら、ヒカリちゃんが壁に体を預けて二人にそう言った。

出た!!

このシーンを初めて観た時は、謎が頭をうめつくしたなあ……

「ヒカリ迄……何でコロモンの事を？」

「だって、コロモンはコロモンでしょ？」

太一さんがヒカリちゃんに聞くと、ヒカリちゃんは俺が先程太一さんに言った言葉を太一さんに言った。

太一さんはヒカリちゃんの言葉を聞いて、何も話さなくなった。暫しの沈黙がこの家を包んだ。

……き、気まずい!

「……と、取り敢えず、昼ご飯にしましょう!

ひ、ヒカリちゃん、ちょっとこっちに来てくれ!」

俺は気まづくなったので皆にそう提案し、ヒカリちゃんを俺の前

俺はヒカリちゃんと手を繋ぎ・コロモンをヒカリちゃんと手を繋いでいない方の手でコロモンを持ってソファ―に座った。

「わ、航君、は、恥ずかしいよ／＼／＼／＼／」

「あっ、わ、悪い／＼／＼／」

俺はヒカリちゃんにそう言われて、素早く手を離れた。

その時、ヒカリちゃんが淋しい顔をした様に見えたが、多分気の所為だと思う。

しかし……めっちゃ恥ずかしい！！／＼／＼／／

「それにしても、お昼ご飯は何だろう？」

俺が恥ずかしがっていると、コロモンが涎を垂らしながら俺達に聞いてきた。

俺はティッシュを何枚か取り出して、コロモンの口から流れている涎を拭いた。

「多分、オムライスだと思うぜ。」

「何でオムライスだって分かるの、航君？」

俺がコロモンにそう言うと、ヒカリちゃんが顔を傾けながら俺に聞いてきた。

その仕草に俺は可愛いと思ってしまったが、絶対に誰もが可愛いと思う筈だ！！

……話が逸れたな。

でも何て言おうかな？

アニメ観てたから分かるなんて、口が裂けても言えないし……

「……さっき太一さんが、冷蔵庫から卵を沢山出してたからな。

卵を沢山使う料理って、そんなに無いからな。

あ、アハハハハ……」

「そうなんだあ。」

俺が考えた理由を苦笑いしながら言うと、ヒカリちゃんとコロモンは納得してくれた。

危ねえ、今のは流石に危なかった……

そう思いながら俺はテレビをつけた。

「次は最近起こった異常気象を纏めたニュースです。」

テレビをつけると、ちょうどデジモン達がニュースに出てくる所だった。

「おい、飯が出来たぞお!!」

太一さんが昼飯が作り終えたみたいなので、俺はテレビを消してコロモンを持ってテーブルに向かった。

やはり昼飯は、原作と同じでオムライスだった。

「航君の言う通りお昼ご飯はオムライスだ。」

ヒカリちゃんは、俺とオムライスを交互に見ながら驚いた声でそう言った。

良かった、オムライスで……

俺はそう思いながら椅子に座った。

「それじゃあ！」

「「いったきまーす!!」」

「いただきます。」

俺達は手を合わせ、“いただきます”と言って太一さんが作ったオムライスを食べ始めた。

アニメでも思っていたが、ご飯をがつがつ食べてる人は凄いな……

「美味しい。」

……お兄ちゃん料理出来たの？」

ヒカリちゃんは、太一さんが作ったオムライスを一口食べてそう感想を言った。

ヒカリちゃんの言う通り美味しい……だけどギリギリ勝った!!

「向こうの世界でヤマトに教えてもらったんだ。」

俺が太一さんに料理の味で勝った事を喜んでいたら、太一さんがヒカリちゃんにそう言った。

……太一さん、向こうの世界って言って良いんですか？

「コロモン。」

「何？」

「私のも食べて良いよ。」

……この後の戦いの為に、しっかり体力を付けてもらっとかないとな。

「コロモン、俺のもやるよ。」

「本当!？」

ありがとう!!」

コロモンは俺とヒカリちゃんのオムライスをもらうと、凄い速さでオムライスを食べ終えた。

食べ終えるのが速いよ……そう言えば次は確か……

「「ごちそうさま!!」」

そう言い終わると、コロモンが突然震えだした。

「コロモン、どうしたんだよ!？」

太一さんはコロモンが突然震えだしたので、凄い動揺し出した。デジタルワールドで一緒に居たんだから、もう少しコロモンの事を分かってあげましょうよ、太一さん。

俺はコロモンを持ってトイレに行って、コロモンをトイレに座らせた。

そして座らせた後、トイレのドアを閉めた。

「航、何でお前はコロモンがトイレがしたい事が分かったんだ?」

俺がトイレの扉を閉めると、太一さんが俺の前に来て聞いてきた。原作を知ってるから……って言えないし。

「主夫の勘!!」

「誰の主夫だよ!? 誰の!?!」

太一さんが俺に大声を出して突っ込んできた。
誰ってそりゃあ……

チラッ

「あっ……うん／／／／／」

俺がヒカリちゃんを見ると、ヒカリちゃんは顔を赤くして顔を下に向けて頷いた。

しまった、何で俺はこんな恥ずかしい事をしてんだ!!

俺はこんな大胆な男じゃなかっただろ!!

めっちゃ恥ずかしい!!／／／／／

「……質問した俺が馬鹿だった。」

太一さん、そんな事を言わないでくださいよ。

俺のガラスのハートが傷付きました。

まあ原作、否、昔よりはマシになったけどさ……

太一さんはそう言った後、ボタンを押して電話を掛け始めた。

多分、皆に電話を掛けたんだろ。

まあ……無駄なんだけどね。

俺はそう思いながらコロモンの後片付けしに、トイレの扉を開けた。

「航、ありがとう。」

俺がトイレの扉を開けると、コロモンは申し訳なさそうな顔をしながら俺にお礼を言ってきた。

「全く、トイレに行きたいなら行きたいって言わないと分からないぞ。」

俺が主夫になる男だったから良かったけどさ。」

俺はコロモンの体をトイレットペーパーで拭きながら注意した。

俺達に念力や超能力なんてものは無い。

だから、想いは口でちゃんと伝えないといけない。

俺はそう言いながらコロモンが使ったトイレを綺麗にした。

そしてリビングに戻ってみると、太一さんの姿は無く、既に自分のベッドで横になっていた。

俺はキッチンに向かって冷蔵庫で冷やされたスイカを八等分し、その内の三つを太一さんの所へ持っていった。

「どうしたんですか、太一さん。」

スイカを机に置いて太一さんに聞くと、太一さんは俺に顔を向けてきた。

「皆はまだ帰ってきてないみたいだ。

俺達だけ帰ってきたみたいだ。」

太一さんは、力の無い声で俺にそう言ってきた。

……これは原作以上にヤバいな。

少しだけど、助言をしときますか！

「なら、皆を迎えに行けば良いじゃないですか。」

「何!？」

俺がそう言うのと、太一さんは上半身だけを起こし俺を見てきた。原作通り、太一さんとコロモンがデジタルワールドに戻るとは限らない。

もし帰らなければ、ヴァンデモンの思い通りになってしまう。最終手段として俺がデジタルワールドに行けば良いのだが、これは本当に最終手段として使う手段だ。

俺と言うイレギュラーが存在するので、原作通りには進まない。だが、参考位には原作知識は使える。

参考は多い方が良いからな。

「皆が帰ってこないなら、太一さんが迎えに行けば良いじゃないですか。」

自分一人だけ、楽な思いをして太一さんは自分を許せますか？」

俺がそう言うのと、太一さんは顔を下に向けた。

「分からない、分からないんだ。」

助けに行きたいって言う俺も居るし、此处に残りたいって言う俺も居る。

……航、俺はどうしたら良い!？」

太一さんは、俺を真剣な目で見ながら聞いてきた。

……これなら大丈夫だな。

「良いですか太一さん？」

自分の運命は自分で決めるんです。

他人の俺じゃなく、太一さん自身で。

だから、自分で答えを見つけてください。」

俺はそう言って部屋から出た。

そしたら突然、電話が掛かってきた。

俺は直ぐに受話器を取った。

「もしもし？」

確かこの電話は太一さんの母さんからだったような……

「あっ、航君？」

良かった、太一さんの母さんだった……

「どうしたんですか？」

ヒカリちゃんなら熱は下がりましたから安心してください。」

俺はヒカリちゃんの体の状態を、太一さんの母さんに報告した。

「そう、やっぱり航君が居てくれて助かったわ！

ありがとね。

……ヒカリは起きてるかしら？」

「はい。」

今、テレビを観ています。

。代わりますね、ヒカリちゃん、電話だよ！！」

「分かった。」

俺はヒカリちゃんを呼んで受話器を渡した。

そしてヒカリちゃんは、俺から受話器を受け取り太一さんの母さんと話した。

そしたら突然、太一さんが部屋から出て来てヒカリちゃんから受話器を奪った。

そして暫くして……

「母さん……」

太一さんはそう呟いて電話を切った。

太一さんが電話を切ったと同時に、パソコンの画面に光子朗さんが出てきた。

「た…いち……さん」

「!？」

光子朗!!」

太一さんは、パソコンの前に行って光子朗さんと話した。

確か、この時の会話はベータモンの時に起こったんだよね……

現実世界とデジタルワールドの時差が余りにも有り過ぎてどれだけ時差が有るのか分からねえ……

取り敢えずテレビをつけときますか。

俺はテレビをつけてデジモンが出ているニュースにした。

そして太一さんと光子朗さをの話が終わり、太一さんがこっちに

来てテレビを観た。

「!？」

デジモンが……メラモンにユキダルモン、それにシードラモン。異常気象なんかじゃない。

全部、デジモンの所為なんだ……」

「お兄ちゃんも見えるんだ。」

太一さんが驚いていると、ヒカリちゃんが俺の隣に来て太一さんにそう言った。

すると太一さんは、俺達に顔を向けてきた。

「な!？」

ヒカリも見えるのか!？」

「うん……ずっと前から言ってたんだけど、航君以外誰も信じてくれなくて……」

「俺も見えますよ、太一さん。デジモン達の姿が。」

俺とヒカリちゃんがそう言うと、太一さんの顔は驚愕の顔になった。

「嘘だろ……」

ドッカーーン!!!

太一さんが驚いていると突然、大きな爆発音がして家が揺れた。

「な、何だ!？」

俺はヒカリちゃんを抱き絞め、怪我をしないようにした。

「大丈夫か、ヒカリちゃん!？」

「う、うん／＼／＼／＼／」

ヒカリちゃんは顔を赤くして言ってきた。

あつ、よく見たら俺がヒカリちゃんを押し倒してるみたいだ……
何やってんだ、俺はア!?!?／＼／＼／＼／

「お前等は此处で待ってろ!！」

太一さんはコロモンを持って俺達にそう言って、走って外に出ていった。

「お兄ちゃん……」

俺はヒカリちゃんの手を握って外に出た。

勿論、鞆とデジヴァイスを持ってだ。

外に出たら、太一さんがドリモゲモンを見つけたシーンだった。

「「太一さーん（お兄ちゃん）!?!?!」」

「!？」

な、何で来たんだよ!!

俺は家で待ってろって言っただろ!!」

太一さんは、俺とヒカリちゃんの肩を揺らしながら言った。
心配してくれるのは嬉しいが、急に出ていたら誰でも心配しますよ。

俺はそう思いながら横断歩道の先を見た。

「太一!!」

あれ!!」

コロモンが叫ぶと、太一さんは横断歩道の先を見た。

「!？」

オーガモン……」

俺は鞆の中からデジヴァイスを、二人にバレないように出して腰に装着した。

「（コロナモン、ルナモン、準備しといてくれ。）」

「（了解!!）」

そして信号が青になり、俺達にオーガモンが突っ込んできた。

俺はヒカリちゃんを押し倒して、ヒカリちゃんを護る様に自分の体でヒカリちゃんを覆った。

ドッカーーーン!!」

「太一、航、ヒカリ……ばいばい。」

アグモンはそう言って、デジタルワールドに消えていった。

「待ってよ、アグモン!!」

俺も行く!!

……航……」

太一さんが行こうとしたので、俺は太一さんの服を掴んだ。

「決まったんですか？」

「嗚呼……俺、皆の所へ行くよ!!」

俺が聞くと太一さんは真剣な顔でそう言ったので、俺は太一さんの服を離れた。

すると、太一さんの体は浮かんでいった

「お兄ちゃん!!」

「航、ヒカリの事を頼むぜ。」

「……任せてください、太一さん!!」

俺がそう言うと、太一さんは笑ってデジタルワールドに行った

「……これからが大変だぞ。」

これから数時間後に起こる事件を考えながらそう呟き、ヒカリち

やんの手を握って家に戻った。

第四話だよ！（後書き）

次回は太一達が帰ってくるまでの話です！！
お楽しみに！！

第五話だよ！（前書き）

今回は短いですがどうしても必要だったので書きました

見てください！！o r t

「……うん。／／／／／」

俺達はお互い抱きしめ合った。

ガチャッ

「ただいまー！」

ヒカリ、航君、ちゃん……お邪魔しました。」

み、見られてしまった……

「……見られたな。／／／／／」

「……うん。／／／／／」

俺達は顔を赤くしながらお互い離れた。

ガチャッ

「言ってくれば、私は入らなかったのに。」

「どうやって言えって言うんですか？」

「まあ、それは置いといて。」

俺がそう言うと、笑って話を変えた。

完全に今の話を無かった事にしたよ……
気にしちゃダメなんだろうが、俺は結構気にするよ

「ヒカリの面倒を見てくれてありがとね、航君。」

「いえ、俺がしたくてした訳ですから。」

俺はお礼を言われたが、俺はそう言った。
困ってる人が居たら、俺は必ず救ける。
それが、俺の想い人だったら尚更だ。

「航君ならヒカリの事任せられるわね!!」

「な!?!?!?!」

「えええええ!?!?!?!」

俺達、結婚が認めちゃったよ……

「す、すいません!!」

よ、用事を思い出したのでお、俺、か、帰ります!!?!?!?!

俺は顔を真っ赤にしながら八神家を出た。

幾ら何でも、あれは恥ずかし過ぎる!!

そ、それに、今は俺の事が好きでも、突然違う人を好きになるか
もしれない……

……なんか、悲しいな。

……まあ俺は転生者だから、全て上手くいく訳ないか。

「……航、太一達が帰ってくる場所は何処なんだ？」

俺が悲しんでると、コロナモンが俺に聞いてきた。

悲しんでる時間は、俺には無いな。

俺は必ず、皆を救う為に原作ブレイクをするんだ！！

確か、太一さん達が帰ってくるのは……

「確かキャンプ場から光が丘に迎うと思うから、多分、光が丘だ。

原作通りなら、光が丘にマンモンが出て来る筈だ。

そして、マンモンとの戦いで5年前にデジモンに会ってる事を皆が
思い出すんだ。

だから俺達も行こう、光が丘に！！」

「お金は？」

何を言ってるんだ、ルナモン。

財布なら鞆の中に……

鞆の中に……

あ、あれえ、入ってないなあ

Why?

……思い出せ、航！

財布を何処に直したんだ、俺は！！

あっ……

「……家だ。」

俺は無事に思い出したが、財布が家にあるので一度家に帰り、財布を鞆に入れて光が丘行きの電車の切符を買って電車に乗って光が丘に向かった。

第五話だよ！（後書き）

次回はマンモンとの戦いです！！
お楽しみにー！！

第六話だよ！（前書き）

今回はマンモンの話ですがあまり期待しないでください

第六話だよ！

Side 航

俺は電車に乗って、光が丘に来た。

「まだ、太一さん達は来て居ないみたいだな。」

時刻は午後二時過ぎだった

そしたら、車道から大型バスが来た。

そしてその中から、数人の子供が降りてきた。

「今はまだ、バレル訳にはいかないからな。」

そうやって俺は、コロナモンをデジヴァイスから出した。

「コロナモン進化だ！」

俺はデジヴァイスを持ってコロナモンに叫んだ。

そうすると、デジヴァイスが光り出した

「コロナモン進化ー！！」

・・・ファイラモン！！」

俺はコロナモンをファイラモンに進化させ、ファイラモンに跨り
光が丘の空を飛んだ。

「マンモンは何処に居るんだ？」

俺は空からマンモンを探していると、既にマンモンは太一さん達
と接触していた。

「……何かあったら嫌だから、ファイラモン頼むぜ!!」

「任せとけ!!」

そして俺達は太一さん達の戦いを見守った。

マンモンとの戦いはどんどん激しくなっていて、周りに在る物が次々に破壊されていった。

そして、バードラモンは太一さんと空さんを護る為にガルダモンに超進化した。

「シャドーウイング!!」

そして、ガルダモンは必殺技である“シャドーウイング”をマンモンに放ち、マンモンを倒した。

「無事に倒したみたいだな。

……それじゃあ帰るか!」

「良いのか、最後まで見なくて?」

「太一さん達が原作通りの行動を起こすなら、次にゲソモンと戦う筈だ。

ゲソモン相手なら、太一さん達だけでも大丈夫だろ。」

「……分かった、それじゃあ帰るか!」

俺は太一さん達を見ながら、ファイラモンに乗ってお台場に帰った。

side 太一

俺はガルダモンがマンモンを倒した時、ゲンナイのジジイの言葉を思い出した。

「選ばれし子供は現実世界に後二人居るんじゃ。
ヴァンデモンは、その二人を抹殺する為に現実世界に向かったんじゃない。」

俺達は、光が丘に来てマンモンと戦って数年前のデジモン事件を思い出した。

俺達選ばれし子供達は昔、光が丘に住んでいてデジモンを見ている……

そしてデジモンを知っている……

俺の頭にあの二人の顔が思い浮かんだ。

「ヒカリ……航。」

「太一、何か言った？」

幼なじみで俺の好きな相手、竹ノ内 空が聞いてきた。

「な、何でもないよ。」

「そう……なら良いけど。」

あの二人は選ばれし子供じゃない！！
幾らコロモンを知っていたとしても、アイツ等にはパートナーデ

ジモンは居ない!!

でも……

俺は、心のモヤモヤが取れないまま光が丘を後にした。

第六話だよ！（後書き）

次回はヒカリとデートみたいな話です

第七話だよ！（前書き）

今回も中途半端です！！

御了承ください！！

第七話だよ！

side航

俺はファイラモンに乗ってお台場に帰ってきたので、人気の無い裏通りに行ってファイラモンをコロナモンに退化させ、デジヴァイスに戻した。

「……航君、目の前で手品してる怪しい奴、デジモンだよ。」

ルナモンがそう言ってきたので、俺は目の前で子供達に囲まれてる奴を見た。

俺はソイツを知っている、否、知りすぎている。

ソイツはテイルモンの無二の友人で、ヒカリちゃんとテイルモンを護って死ぬと言う俺が好きなキャラベスト5で二位にランクインしているデジモン、ウィザーモンだった。

……勿論一位はヒカリちゃんだぜ。

俺はウィザーモンから離れる為に、その場を去ろうとした。

何故なら、ヴァンデモンの部下は光の紋章のコピーを持っている為、ヒカリちゃんのデジヴァイスが近付くと反応する。

俺はヒカリちゃんのデジヴァイスを持っている為、気付かれる可能性がある。

なので、俺は走ろうとした瞬間誰かに肩を捕まれた。

「……すまない、少し私と来てくれるか？」

……捕まったアアアアアア！！！！！！

俺はウィザーモンに、誰も居ない廃ビルの屋上に連れて来られた。

「俺に一体何の用だ？」

「……ま、まさか誘拐か!？」

「私はそんな事はしない!!」

俺は冗談で言ったのに、ウィザーモンは本気で否定してきた。
惚けただけなのに……

「それで、マジで俺に何の用？」

「単刀直入に言うよ。」

君は八人目の選ばれし子供かい？」

……素直に「はいそうですよ。」って言う奴が居るのか？

「なあ、余りにも急すぎるぞ、ウィザーモン？」

俺がそう言うと、ウィザーモンの顔が驚愕した。

「や、やはり君が八人目なんだな!!？」

……急すぎたのは俺だったな。

「そう警戒するなよ。」

それに、俺は八人目じゃないからさ。」

「……どうして君は、敵である私にそんな事を言うんだ？」

フッフッフツ、何故かって？

何故なら！！

「確かにデジモンは知ってるけど、俺は八人目じゃないから！！
以上！！」

・

・
・

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

「君って変わってるって言われた事あるでしょ？」

「……少なからず。」

俺がそう言っていると、ウィザーモンから同情した目で見られた。
何だよ！！

良いじゃん、少し変わってても！！

「……話を戻すよ。」

私が持っている紋章は反応してる。

何故なら、君がデジヴァイスを持っているからだ。」

ウィザーモンはそう言って、反応しているコピーの光の紋章を俺に見せてきた。

「……ウィザーモン、それコピーだからバグってんじゃない？」

コピーは本当だけど、バグってる事は嘘だ。

だがこう言わないと、ウィザーモンは帰してくれないかもしれないしな……

「……成る程、だからデジモンを知っている君に反応したのか。」

「そうそう。」

それに、選ばれし子供ってパートナーデジモンがいるんだろ？

俺さ、お前以外のデジモンと選ばれし子供以外のデジモンは見た事無いぜ。」

俺はウィザーモンに笑いながら言った。

「……その様だね。」

すまない、急に呼んだりして。」

「良いよ、別に。」

じゃあ俺は帰るわ。」

俺はそう言って屋上から去って、自分の家に向かった。

sideウィザーモン

……あの子は八人目じゃない。

これは確かな事だ。

だが何故、彼は私に怯えなかったんだ？

それに何故、彼が私とテイルモンの記憶を……？
……これは少し調べる必要があるな……

Side 航

俺はウィザーモンと別れた後、走って家に向かった。

「全く、まだ会うには速過ぎるだろ。」

俺は愚痴りながら自分の家の扉の前に来た。
そして扉を開けた。

「ただいまー。」

「「おかえりー！」」

・

・

・

・

今、二人の声が聞こえた様な気がする。

「母さん！」

誰か母さん以外に居るのか？」

俺は玄関で大声を出して母さんに聞いた。
マジで誰なんだ？

「貴方の将来のお嫁さんよお!!」

・

・
・

・
・
・
・

・
・
・
・
・

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

俺は大きな声を出して、リビングに全速力で走って向かった。

「航君、おかえり!」

「あ、嗚呼、た、ただいま。」

ヒカリちゃん、笑顔は可愛いが何故君が俺の家に居るんですか？

「ヒカリちゃんは貴方を待ってたのよ!。
良い奥さんね!。」

母さんは、笑いながら俺の事をからかってきた。

「な、何言ってるんだよ!!?」

お、俺達はまだ、けっ、結婚してねえよ!!／／／／／／／／／／

ま、全く、な、何を言っただ!!／／／／／／／／／／
き、気がは、速過ぎるだろ!!／／／／／／／／／／

「まだ……って事は将来はするんでしょ？」

「うっ!?!／／／／／／／／／／」

「／／／／／／／／／／」

母さんに言われ、俺達は顔を赤くした。
クソッ、何も言い返せねえ……
そう言えば明日は確か……

「ヒカリちゃん、明日一緒に出かけないか？」

「あら明日はデート？
良いわねえ若いって。」

母さんが突然、俺達の話に口を挟んできた。

「か、母さんは黙っててくれよ!!
……ヒカリちゃん、どうかな?／／／／／／／／／／」

もしダメなら、明日テイルモンに会わなくなってしまう可能性がある。
ある。

「……うん、良いよ♪」
……よっしゃアアア!!!!

「じゃあ早速、小母さんに言いに行こうぜ!」

俺はそう言って、ヒカリちゃんの手を握って隣の八神家に向かった。

「……と言う訳なんですが、良いですか？」

俺は太一さんの母さんに明日、ヒカリと遊びに行って良いか聞いている。

「ええ良いわよ！」

……でもヒカリ、無理しちゃダメよ？」

確かに熱が下がったとは言え、夏風邪はしつこいからな。

「うん!!」

「ただいまあー」

ヒカリちゃんが返事をしたと同時に、太一さんが帰ってきた。

さて、明日の為に速く帰らないとな……

俺が帰ろうとしたら

「航、お前に少し話があるから俺の部屋に来てくれ。」

俺は太一さんにそう言われ、手を捕まれて太一さんの部屋に（強制的に）連れて行かれた。

「（……俺って太一さんに何かしたか？
しかも、言ってる事とやってる行動が違うウウウ！！！！）」

俺は心の中でそう思いながら、太一さんの部屋に連れて行かれた。

第七話だよ！（後書き）

次回はゲソモンの話です！！

お楽しみに！！

第八話だよ！（前書き）

話が急・ご都合主義・短いです

本当にすいません！！

第八話だよ！

side 航

俺は太一さんに呼ばれた（無理矢理連れて来られた）ので、太一さんの部屋で座ってる。

「……航、お前って数年前に起こった光が丘の事件の事を何か知ってるか？」

成る程、俺が八人目の選ばれし子供だって疑ってるんだな……

「知ってますよ。」

光が丘でグレイモンとパロットモンが戦った事件でしょ？
それがどうかしました？」

「い、否、何でも無い。」

……悪かったな、呼び止めたりして。」

太一さんは笑いながら俺に言ってきた。

太一さん、それだけ動揺してたら説得力がありませんよ。

「じゃあ帰ります。」

それじゃあさよなら、太一さん。」

「あ、嗚呼。」

またな。」

俺は太一さんに挨拶をして部屋を出た。

俺は太一の部屋を出て、ヒカリちゃんと太一さんの母さんと父さ

んに挨拶をして家に帰った。

「（確か今晚、レアモンが東京湾に出てくるんだよね……。そして、光子朗さんが八人目の手がかりを手に入れるんだよね。……でも、ヒカリちゃんのデジヴァイスは俺が持つてるから、俺が東京湾に行かないといけないよね……。）」
「ただいまー！！」

俺はそう思いながら、自分の家の扉を開けてそう言った。

side 太一

……やはり航も、光が丘の事件を知っていた。
……しかも、戦っていたデジモンの種類まで知っていた。
……やはり八人目と九人目の選ばれし子供は、ヒカリと航なんじ
やあ……

……だけどヒカリに聞いたら、デジヴァイスは持ってないと言っていた。

……航はずっとお台場で過ごしていた。
もう何が何だか分かんねえー！！

「太一、大丈夫？」

コロモンが俺の顔を見ながら聞いてきた。

「あ、嗚呼。」

……なあコロモン？」

一人で考えててもしょうがない。
誰かに聞いてみるのも一つの手だ。
だから、俺はコロモンに話し掛けた。

「どうしたの太一？」

コロモンは、俺に話し掛けられたので真剣な顔になって俺を見てきた。

「俺さあ、八人目と九人目がヒカリと航なんじゃないかって思うんだ。」

「えっ!？」

ヒカリと航が選ばれし子供!？」

ば、バカ!!

俺はコロモンの口を抑えた。

「静かにしろ!!」

……確証は無いんだ。

だけど、あいつ等はお前の事を知ってたし、ヒカリは数年前にデジモンを俺と一緒に見てる。

航は見えないが、あの事件の真相を知ってたしデジモンの種類を知っていた。

お台場に居た航が、光が丘のデジモンを知ってる筈が無い。

だとしたら、俺はアイツ等が選ばれし子供だと思うんだ。

……お前はと思う？」

俺はコロモンに説明し質問するが、コロモンは困った顔をした。

「分からないよ……。」

でも、太一がそう思うんならボクは信じるよ、太一の事。」

コロモン……

「ありがとな、コロモン！」

「太一ー！！」

ご飯よー！！」

俺がお礼を言うところコロモンは笑顔になった。
それと同時に、母さんが俺を呼んだ。

「はーい！」

俺はコロモンを連れてリビングに向かった。

Side航

「いってきまーす！！」

「「いってらっしゃーい！！」」

太一さんとの話し合いから時間が随分経ち、今の時刻は午後七時。
もう直ぐしたらレアモンが東京湾に現れる。

俺は何時もこの時間は、体を鍛えに行くので怪しまれずに家を出
れた。

「此処からじゃ少し遠いな……」。

コロナモン頼む!!」

俺はコロナモンをデジヴァイスから出して、コロナモンに頼んだ。
すると、コロナモンのデジヴァイスが光り始めた。

「コロナモン進化ー!!」

……ファイラモン!!」

俺は、コロナモンをファイラモンに進化させた。

そして俺はファイラモンに跨り、東京湾に向かった。

「……俺一人じゃ八人目を演技できない。

ルナモン頼むぞ!」

俺はルナモンをデジヴァイスから出して、ルナモンの顔を見て頼んだ。

「任せて!!」

ルナモンは俺にそう言ってくれた。

俺はその言葉を聞いて安心して、視線を前に戻した。

そして俺達は無事に東京湾に着いた。

しかし既に、レアモンが東京に上陸していた。

俺はファイラモンから降りて、ファイラモンと別れてルナモンと一緒に埠頭を走りだした。

ファイラモンには“カブテリモンがピンチになったら助けてやって、それ以外は倉庫で待機”と言っておいた。

そして走っていると、ヒカリちゃんのデジヴァイスが反応し始めた。

「さぁルナモン、鬼ごっこの始まりだぜ!!」

俺がそうルナモンに言うのと、ルナモンはウキウキし始めた。

これだけ元気なら大丈夫だな。

……さぁ、俺達を見つける事は出来るかな？

ピコデビモン!!

光子郎さん!!

side 光子郎

僕はゲンナイさんに付けてもらった新機能で、デジモンが東京湾に現れたのを知り皆さんに連絡しました。

が、皆さんは既に寝てしまっていました。

ですので、僕とカブテリモンだけで東京湾に来ました。

そしたら、僕のデジヴァイスが突然反応し始めました。

「光子郎はん!!」

此処はワテに任せて、八人目を捜しに行ってください!!」

カブテリモン……

ありがとうございます!!

「お願いします!!」

僕はカブテリモンに頼み、カブテリモンから降りて八人目を探す為に走り出しました。

side航

俺は自分のデジヴァイスとヒカリちゃんのデジヴァイスの画面を見た。

「しっかり付いて来たな。
ルナモン、頼むぜ!!」

俺はルナモンにヒカリちゃんのデジヴァイスを渡した。

「十分後にファイラモンの所に集合な!!」

「了解!!」

ルナモンは俺からデジヴァイスを受け取って、俺と反対の方向に向かって走りだした。

俺は帽子を被り、ルナモンと反対の方向の方向に走りだした。

side光子朗

僕はデジヴァイスを見て驚きました。

「反応が二つある……って事は、八人目だけじゃなく九人目もこの近くに居るんだ!!」

僕はその事実を知って喜びましたが、二つの反応は反対の方向に動いていた。

なので僕は、右に行った反応を追い掛けました。ですが余りにも速いスピードで、僕がどれだけ走っても追いつきません。

です。僕が、先回りする事にしました。

そして、先回りが成功しました。
僕は直ぐに飛び出しました。

「そこ迄です!!」
「……な!?!」

ぼ、僕は驚きました。
な、何故ならそこに居たのは、ウサギみたいなデジモンが居たからです。

「やばい見つかった。」
「……なら、ティアシュート!!」

ウサギの様なデジモンは、透明なアワを僕の足元に撃ってきた。

「くっ、しまった!」

僕は煙が晴れる迄動けなかった。
そして煙が晴れると、そこには誰も居ませんでした。

「逃げられてしまいましたか……」

僕は悔しがりましたが、直ぐに気持ちを切り替えてカブテリモンの所へ戻りました。

side航

「あーあ、俺の方に来たのはピコデビモンかよ。」

俺の方に来たのはピコデビモンだった、が、本気で殴ったら気絶した。

よくヴァンデモンも、こんな雑魚を仲間にしておくな。

「航、迎えに来たぜ。」

そんな事を考えていたら、空からファイラモンが来た。

「私も居るよ!!」

訂正、ルナモンを乗せて来ていた。

「集合時間はまだの筈だが……」

俺は時計を見て時間を確認した。
しかし、集合時間はまだ先だった。

「俺はカブテリモンがレアモンを倒したから来た。」

「私は小さい男の子に見つかって逃げたら、ファイラモンと偶然会

って乗せてもらったんだよ。」

俺が悩んでいると、ファイラモンとルナモンが言ってくれた。
ルナモンが言った男の子ってのは、多分、否、確実に光子朗さん
だろう。

「まあ良いや、取り敢えず帰ろうぜ。
母さん達が心配してるかもしれないからな。」

俺がそう言うのと、ファイラモンは地面に着いて俺が乗れる高さ迄
屈んでくれた。

そして俺はファイラモンの背中に跨り、家に向かった。

side 光子朗

「光子朗はん、どうしたんでっか？」

カブテリモンが突然、僕に話し掛けてきました。

「今日、八人目と九人目のデジヴァイスの反応があったんです！！
そして今日、僕が会ったのは多分どちらかのデジモンです！！
明日、皆さんに教えないと！！！」

カブテリモンの背中に乗りながら僕は言った。

第八話だよ！（後書き）

次回はテイルモンとの接触の話です

お楽しみに！！

第九話だよ！（前書き）

今回はデスメラモン戦にいたるまでの話です！！

楽しんでもらえたら幸いです！！

第九話だよ！

Side 航

光子朗さん達との鬼ごっこをした翌日：

「いってきまーす！！」

「「いってらっしゃーい！！」」

俺は白のTシャツにグレーの半パンを履きカバンを背負って、母さんと父さんに挨拶をして外に出た。

そこには、少しお洒落したヒカリちゃんが立っていた。

「悪い、待ったか？」

「ううん、今からインターホンを押そうとしたから、全然待ってないよ。」

ヒカリちゃんが、笑顔で俺に言ってきた。

その笑顔に、俺は顔を赤くしてしまった。

ヒカリちゃんって、凄く優しいよな……

必ず護ってやりたい！

否、護ってみせる！！

「じゃあ行こうか！！」

俺はそう言って、ヒカリちゃんの手を握った。

「う、うん／＼／＼／＼／」

ヒカリちゃんは、顔を赤くして返事をしてくれた。
そして俺は、ヒカリちゃんとテイルモンが居る場所に向かった。

Side 太一

「いつてきまーす!!」

ヒカリが俺達にそう言って、航とデートに行った。
ハア、羨ましいよな、航とヒカリ……
俺も空と……振られたら俺、どうしよう……
今は考えるな、俺!!

「ねえ太一、そろそろ光子朗が迎えに来ちゃうよ。」

俺が一人で考えてると、アグモンが俺に言ってきた。
今朝、コロモンからアグモンに進化した。

俺は時計を見て、時間を確かめた。

アグモンの言う通り、後少して光子朗が迎えに来る。
しかし、今はそれ所じゃねえな。

ヒカリと航が選ばれし子供じゃないか、昨日の夜からずっと悩んでいる。

ピンポーン

俺の家のインターホンが鳴った。

「太一！」

光子朗君が迎えに来たわよー!!」

母さんが俺に大きな声で言ってきた。
取り敢えず……

「今から行くよ！」

今は忘れておこう……

Side 航

俺達は、原作でヒカリちゃんとテイルモンが会った場所に来た。

「取り敢えず、少し此処で涼んでから行こうぜ。」

「うん！」

ヒカリちゃんは、元気に俺に返事してくれた。

やっぱ可愛いよな。

そう思ってたら、白の体で尻尾にはホーリーリングを付けた猫・
テイルモンが前からやって来た。

ヒカリちゃんはテイルモンに話し掛けた。

「貴方……アグモンのお友達でしょ？」

ヒカリちゃんがテイルモンに話し掛けると、テイルモンは一瞬驚

いた顔をしたが直ぐに猫の真似をした。

が、俺はお前の事を知ってるし、ヒカリちゃんもお前の存在を知ってるからバレてるぞ。

「あれはテイルモンって言うデジモンだよ、ヒカリちゃん。」

俺がヒカリちゃんにそう言うと、テイルモンは走って何処かへ走って行った。

これで、俺とヒカリちゃんの事が頭から離れなくなっただろう。

「そろそろ行こうか、ヒカリちゃん？」

「何処に行くの、航君？」

俺がそう言うと、ヒカリちゃんは頭を傾けて聞いてきた。

こ、この仕草がまた可愛い。／／／／／／

しかも、無意識でやってるから余計に。／／／／／／

ヤバイ、頭が少しおかしくなった。

今から行く場所は、今日の昼から起こる事件の現場だ。

俺は笑顔でヒカリちゃんに言った。

「東京タワーだぜ！！」

俺はそう言って、東京タワーに向かった。

Sideテイルモン

何故アイツ等は私の正体を！？

ま、まさかアイツ等が八人目と九人目!?

……分らない。

だがあの女、何故か知っていた様な気がする……

「考え事ですか? テイルモン。」

こ、コイツは!!

「人の考えを読むなど何時も言ってるだろ、ウィザーモン!!!!
それから、話し掛けるなら夜にしろ!!!!」

全く、私達は早く八人目と九人目を見つけないといけないのに

……

「……実は九人目らしき人物を今、付けておりました。」

きゅ、九人目だと!?

「ソイツは一体誰だ!？」

私はウィザーモンに近付き、大きな声で聞いた。

「貴方を正体を知っていた、あの少年です。」

……アイツか!?

「何故アイツが九人目だと分かるんだ?」

「彼から、デジヴァイスの反応がしました。」

で、デジヴァイスだと!?!?
し、しかし……

「しかし奴には、デジモンが居なかったぞ!」

「……彼のデジモンは居ます。

私は昨日、彼と接触して彼と別れた後も彼を尾行し続けました。
そして漸く分かりました。

彼には、デジモンが二体居ます。」

に、二体だと!?!?

「それに彼は昨日、レアモンが倒された東京湾にも行き、ピコデビモンと接触し一撃で倒しました。」

ば、バカな!!

デジモンを倒す人間なんて初めて聞いたぞ!!

そ、それに一撃でなんて……

「これは私の推測ですが、彼は我々の事を知っている。」

「ど、どういう意味だ?」

奴が私達の事を知っている?

今日初めて逢ったのか?

「彼の心を覗いた時、私が貴方に初めて逢った時の事を、彼は知っていました。」

今迄一度も会った事のないデジモンの事を、普通知ってると思いますか?

彼は、他の選ばれし子供より速くデジモンと逢っています。

だから、私達にとって一番驚異なのは彼ですよ。

……これ以上話すとヴァンデモンに気付かれる。

私は彼を付けます。

……一緒に来ますか？」

「嗚呼。

……それに少し気になる事もあるしな。」

あの女……一体何故此処迄気になるのだ!!

私とウィザーモンは、アイツ等を追い掛けた。

第九話だよ！（後書き）

次回はデスメラモンとの戦いです！！

お楽しみに！！

第十話だよ！（前書き）

今回はデスメラモン戦ですが終わり方が中途半端です

御了承してください！！

第十話だよ！

Side 航

テイルモンと別れた後、俺達は東京タワーにやって来た。

「やっぱり大きいね！」

はしゃいでるヒカリちゃんも可愛い……

「……そろそろアイツが出てくる頃だな。」

「アイツって？」

どうやら俺の呟きは、ヒカリちゃんは聞こえていた様だ。

「い、否、何でもないぜ。」

「ふーん」

ヒカリちゃんはそう言うと、双眼鏡のある所に行った。

俺はヒカリちゃんの隣に行こうとしたら、急に気温が高くなった。後ろを見たら、コートを着たデスメラモンが立っていた。

「ちょっと、何でこんな暑い日にコートなんか着てんのよ！！」

文句を言ってる女の子・ミミさんが、デスメラモンに聞こえる位の大きな声で言った。

ミミさん、確かにそうですが、直ぐに口にして良いかどうかを確かめましょうよ……

それを聞いたデスメラモンは、コートを焼いて正体を現した。
俺は直ぐにヒカリちゃんの所まで行き、ヒカリちゃんを連れて外に出た。

「わ、航君!？」

ど、どうしたの!？」

「デジモンが東京タワーに現れたんだ!!」

もしあそこにずっと居たら、戦いに巻き込まれるかもしれない!!」

俺はそう言いながら、ルナモンをデジヴァイスから出した。

「ルナモン進化だ!!」

俺がそう言うと、デジヴァイスが光り出した。

「ルナモン進化ー!!」

……レキシモン!!」

「わ、航君にもデジモンが……」

ヒカリちゃんは、俺とレキシモンを交互に見ながら驚いていた。

「ヒカリちゃん、話は後でする!!」

取り敢えず俺達は隠れないと!!」

レキシモン頼むぞ!!」

「了解!!」

レキシモンはそう言うと、デスメラモンの所に行った。

side テイルモン

「やはり彼が九人目でしたね……」

ウィザーモンの言う通り、あの男が九人目だった。

「しかし、あいつのデジヴァイスは他のデジヴァイスと違う。

……デジモンをデジヴァイスに入れる事なんて、他の奴はしなかったぞ。」

他の奴は、今迄デジヴァイスの中にデジモンを入れるなんて事をしていなかった。

何故だ？

「しなかったんじゃない、出来なかったんでしょ。」

「どういう意味だ？」

「他の選ばれし子供のデジヴァイスと彼のデジヴァイスは、根本的に違うのでしょう。」

……確かにその考えた方が普通だ。

「それに先程、私は彼の心を覗いたと言いましたよね？
彼の心の中は凄い事だらけでしたよ。」

……凄い事だらけ？

「さっき彼は私の過去を知っていたと言いましたが、あれは彼の心に映し出された物でした。」

!?

「じゃ、じゃあ、アイツは……」

「……我々の事を全て知っていると先程言いました。後は貴方の思っている通りです。」

……これは詳しく調べる必要があるな。

「ウィザーモン、ヴァンデモンにはまだ報告するなよ。」

「勿論、私も彼には興味がありますから。」

ウィザーモンがそう言うのと、私は九人目とあの女を再び観察し始めた。

Side 航

俺達は東京タワーの裏側に行き、デスメラモンの戦いを見ていた。

「……航君もお兄ちゃんと同じなの?」

普通に考えればそうなるが、俺はイレギュラーなので太一さん達とは違う。

「そうであってそうでない。」

転生の話をする訳にはいけないので、こんな中途半端な答えしか言えない。

「……分かった。」

だから、何時か必ず話してね？」

「……分かったよ。」

そんな会話をしていたら、太一さん達がカブテリモンに乗ってやってきた。

side 太一

俺はカブテリモンに乗ってデスメラモンの所迄来た。

そこにはバードラモンとトゲモン、そして見た事ないデジモンが居た。

「あのデジモンは一体なんだ？」

「少し待ってください……。」

あれは、レキシモンと言うデジモンみたいです。

……デスメラモンと戦っている所を見ると、八人目か九人目のデジモンだと思います！！」

じゃ、じゃあ、何処かに選ばれし子供が居る訳だな！！

俺は東京タワーを単眼鏡を使って見た
そこには……

「ヒカリに……航……だと。」

東京タワーの裏側に航とヒカリが居た。
そして航の手には、デジヴァイスが握られていた。

「……太一さん？」

やっぱり、アイツ等が八人目と九人目だったんだ……

「太一？」

何でアイツ等は、俺に言わなかったんだ？

「太一さん！」

何でだよ……

「太一！！！」

「！？」

な、何だ？」

俺はヒカリと航の事で頭が一杯だったので、周りの声が聞こえて
なかった。

「ぼーっとしてる場合じゃありません！！」

今はアイツを倒す事が先決です!!」

光子郎が俺に注意してくれた。

……悪い、光子郎……

「行くよ、太一!!」

アグモンはそう言って、カブテリモンから飛び降りた。
すると、俺のデジヴァイスが光りだした。

「アグモン進化ー!!」

・・・グレイモン!!」

アグモンはグレイモンに進化し、デスメラモンを飛び蹴りをした。
デスメラモンは、グレイモンに蹴られて後ろに倒れた。

「メガフレイム!!」

「メテオウイング!!」

「チクチクバンバン!!」

三体の同時攻撃を受けたデスメラモンは、ダメージを受けるところか自分のエネルギーにして体を大きくさせた。

「こ、このままじゃ負ける!!」

グレイモン!!」

「分かった!!」

俺がグレイモンに叫んでグレイモンが頷くと、俺のデジヴァイスと紋章が光った。

「グレイモン超進化ー！！！！」

……………メタルグレイモン！！！！」

俺はグレイモンを超進化させ、メタルグレイモンにした。

「さっさと決着を付けてくれ！！」

メタルグレイモン！！！！」

早く倒さないと、航達が何処かへ行ってしまう！！

「俺が簡単に負けるわけないだろ！！」

デスメラモンがそう言った瞬間、レキスモンがデスメラモンを上空に蹴り飛ばした。

「今だ！！」

俺がそう言うと、メタルグレイモンの胸のハッチが開いた。

「ギガデストロイヤー！！」

メタルグレイモンの胸のハッチから二つのミサイルが出てきてデスメラモンに直撃し、デスメラモンを倒した。

デスメラモンが倒されると、レキスモンが東京タワーの裏に走って行った。

「メタルグレイモン！！」

俺はメタルグレイモンの背中に飛び乗って東京タワーに降り、航達が居た所に走って向かった。

「航!!」

ヒカリ!!」

俺がそう叫ぶと航とヒカリ、そしてレキシモンじゃないデジモンが一体居た。

第十話だよ！（後書き）

次回は航が太一とヒカリに自分のことを少し話します

第十一話だよ！（前書き）

今回は無理矢理したような話です

本当に申し訳ございませんでした！！！！！
o r t

第十一話だよ！

side 航

……遂に、太一さんにバレてしまった……

「航、ヒカリ……何で俺に、選ばれし子供だって事を黙ってたんだ？」

……俺は、選ばれし子供じゃないからですよ……太一さん。
ヒカリちゃんは、太一さんの言葉を理解していない顔だった。

「二人とも、黙ってないで答えてくれ！！
ヴァンデモンはお前達の命を狙ってたぞ！！」

……お前達？

ヒカリちゃんが命を狙われているのは、ヒカリちゃん自身が八人目の選ばれし子供だから……

だが、俺はパートナーデジモンを持っても選ばれし子供じゃないぞ……

俺が狙われる要素は、何処にも存在していない……

「太一さん、何故俺まで狙われないといけないんですか？」

俺は太一さんに聞くと、太一さんは呆れた顔になった。

「お前が九人目の選ばれし子供だからに決まってるだろ。」

・
・

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

「は？」

俺は間拔けな声を出して驚いた。

俺が……九人目？

ちよっと待って、俺はイレギュラーだよ、この世界には存在しない存在だよ。

何故俺の事を、ヴァンデモンや太一さんが知っているんだ？

……あの駄神だな、きつとそうだ、間違いない！！

「……お兄ちゃん、私はデジヴァイスを持っていないよ。」

ヒカリちゃんが太一さんに、不安そうに言った。

そう言えば、まだヒカリちゃんのデジヴァイスは俺が持っていたな。

それにまだ、ヒカリに返してなかったな。

「ヒカリちゃん、君のデジヴァイスは俺が預かっていたんだ。

だから、このデジヴァイスを君に返すよ。」

俺は鞆の中からヒカリちゃんのデジヴァイスを出して、ヒカリちゃんにデジヴァイスを渡した。

「な、何でお前がヒカリのデジヴァイスを？」

太一さんが、驚きながら俺に聞いてきた。
……もう限界、だな。

某中身は高校生、外見は小学生の探偵みたいに隠し通せると思っ
てたけど、無理だったな。

……話そう、俺の秘密を……
俺の全てを……

「…………それは、俺が転生者だからですよ。」

「「転生者？」」

太一さんとヒカリちゃんが、声を揃えて聞いてきた。

俺は話した……

俺が一度、死んだ人間である事を……

俺がこの世界に転生した転生者だと言う事を……

俺は本来、この世界には存在しない事を……

俺はこの世界の事、つまり原作の事を……

俺のパートナーであるコロナモンとルナモンの事を……

全て、俺の秘密の全てを太一さんとヒカリちゃん話した……

「……これが俺の存在です。」

……だから、化け物に接する接し方でも良いです。
避けてくれても良いです。

俺は、そうされてもしようがない人間ですから。」

俺は二人にそう言って無理矢理笑った。

転生者は必ずしも、その世界に受け入れてもらえるとは限らない。

俺は、転生した時から覚悟はしていた。

原作に介入すると言う事は、自分が転生者だとバレるリスクがあった。

それを覚悟して、俺は原作に介入した。

ハハハ、しかし、バレるのが速かったな……ハハハ……

……悲しい筈はないのに……

……覚悟はしていた筈なのに……

何で……

何で！

何で涙が出てくるんだよ！！

「航君！！」

ヒカリちゃんは、泣いている俺に抱きついてきた。

「ヒ、ヒカリちゃん？

な、何で俺に抱き付いてるんだ？

俺は普通の人間じゃないんだぜ？」

分からない……

俺は普通の、ヒカリちゃん達と同じ人間じゃない。

転生者・一度死んだ人間、それが俺だ。

なのに……

どうして、俺に恐がらずに抱き付いてくるんだ？

何故俺に、恐怖する事無く抱き付いてきたのか……

俺には分からない……

「航君。」

例え航君が一度死んでいても、例え航君が転生者であっても……私の好きな航君に変わらないよ!!」

ヒカリ……ちゃん

「航、お前のお陰でヒカリは無事に生きてる。

もしお前が居なかったら、俺はあの時ヒカリを殺していたのかもしれない。

ありがとな、俺達の世界に転生してくれて。

だから……自分を貶さないでくれ。」

太一……さん

俺は何てバカなんだ!!

原作を知っているからって!!

転生者だからって!!

俺は何でも出来ると勝手に思い込んで!!

結局俺は、一人じゃ何も出来ないじゃねえか!!

原作を知ってるからなんだって言うんだ!!

結局俺は、原作を途中から介入して!!

最初から介入していれば、エンジェモンは死なずに済んだかもしれないのに!!

ナノモンから空さんを救う事が出来たかもしれないのに!!

ピコデビモンの策略から、皆を守る事が出来たかもしれないのに!!

結局俺は、怖くて逃げてただけだったんだ!!

……生まれ変りたい、否、生まれ変わる、否、生まれ変わってみせる!!

もう二度と、後悔しない為に……

誰かの悲しむ姿を、二度と見ない様に……

自分から逃げない様に……

「俺は生まれ変わる!!

もう二度と、後悔しない様に!!

誰かの悲しむ姿を、二度と見ない様に!!

自分から逃げない様に!!

ありがとう、ヒカリちゃん!!

太一さん!!」

俺は真剣な目をして、自分と二人にそう誓った。

俺は絶対に偽善者にはならない!!

俺は生まれ変わる!!

「……そうか。

これからよろしくな、航!!」

「これからもお互い頑張ろうね!!

航君!!」

二人は笑顔で俺にそう言ってきた。

俺は二人の笑顔を見て、俺も笑顔になって二人を見た。

「嗚呼!!」

俺は頑張る、否、頑張ってみせる!!

絶対にこの世界を、HAPPY ENDで終わらせる為に!!

第十一話だよ！（後書き）

次回はテイルモンを説得する話です

第十二話だよ！（前書き）

今回はオリジナルですね・・・

オリジナルが嫌な方は回れ右！！

すいません調子に乗りましたort

第十二話だよ！

side 航

「太一さん、俺とヒカリちゃんが選ばれし子供だという事は、他の皆さんには秘密にしてくださいませんか？」

「な、何でだよ？」

俺が太一さんに言うと、太一さんは驚いた顔をしながら俺に聞いてきた。

まあ、普通は誰でもこんな事を言われたら驚くよな。

でも、秘密にしてもらいたいんだよ。

ちゃんと詳しく説明しないとな……

「ヒカリちゃんのパートナーデジモンが居ないのに、皆さんに話したらどうなると思いますか？」

多分、否、絶対にヒカリちゃんをボディガードしますよね？

そんな事したら、ヴァンデモン達が気付いてしまいますよね？」

俺がそう言うと、太一さんは頷いて理解してくれた顔をした。

が、直ぐに太一さんは頭に？マークを浮かべた。

「成る程……でも、どうして航の事も秘密にしないといけないんだ？」

成る程……

俺の事を秘密にする理由が分からないんですね……

俺の事を秘密にしてほしい理由、それは……

「……俺が転生者と言う事は、俺の口から皆さんに言いたいんです。それが、転生者である俺の定めだと思えますから。……それに、俺はヒカリちゃんと常に居ます。もし勘の良い人なら、ヒカリちゃんが八人目だと気付いてしまうと思うんです。」

太一さんが皆に言うんじゃない、俺の口からちゃんと言いたい。拒絶されても、虐待を受けても、ちゃんと俺の口から言いたい。これが最初の理由だ。

二つ目は、俺が九人目だと知ったら皆は八人目ヒカリちゃんを全力で捜すと思う。

なのに九人目である俺が、ヒカリちゃんの傍を離れなかったら光子朗さんの様な勘の良い人なら気付いてしまうと思う。

これが秘密にしてほしい理由だ。

俺はこれ等の事を、太一さんに詳しく説明した。

俺の話を聞き終わった太一さんは、俺に笑ってくれた。

「分かった。

お前達が選ばれし子供だったのは黙っておくよ。

だから航、ヒカリの事を頼むな?」

太一さんは、俺に頭を下げてヒカリちゃんの事を頼んできた。

「当たり前ですよ、太一さん!!」

「太一! 何処に行ったの?」

「太一さん!!」

俺が太一さんに言った瞬間、アグモンと光子郎さんの声が裏から

聞こえてきた。

「太一さん、アグモン達の所へ行ってください。
ヒカリちゃんの事は俺に任せて。」

俺がそう言うのと、太一さんは頷いてくれた。

「解った、ヒカリの事は頼むな！」

太一さんはそう言って、アグモン達の所に走って向かった。

「……帰るか、ヒカリちゃん？」

俺がヒカリちゃんに聞くと、ヒカリちゃんは俺の手を握ってきた。

「速く帰ろ、航君!!」

ヒカリちゃんは、笑顔で俺に言ってきた。

ま、また、ヒカリちゃんの笑顔に惚れてしまった／／／／／
大輔……ごめん。

俺、ヒカリちゃんの事が本気で好きなんだ。

お前には絶対に渡したくない、否、渡さないからな!!

「嗚呼!!／／／／／」

俺は顔を赤くして、ヒカリちゃんと手を繋いだまま東京タワーを
後にした。

Side 太一

「太一、何か良い事でもあったの？」

アグモンが顔を傾けながら俺に聞いてきた。

「どうしてそう思うんだ、アグモン？」

俺が聞くと、アグモンは笑って答えてくれた。

「太一の顔、朝の顔と比べると凄く優しい顔だから。」

……確かにアグモンの言う通りだな。

朝は航達の事で頭が一杯だったけど、それもさっき解決したからな。

「嗚呼、凄く良い事があったぜ！」

俺がそう言うと、アグモンは自分の様に喜んでくれた。

「それは良かったね！
で、何があったの？」

アグモンは俺に何があったのか聞いてきた。
だが俺は航と約束をした。
だから、それは教えない。

「秘密さ。」

俺がそう言うと、アグモンは怒りだした。

……アグモンって、本当に“喜怒哀楽”がはっきりしてるな。

「ずるいよ太一!!」

ボクにも少しくらい教えてくれたって良いじゃないか!!」

航は「自分の口から言いたい」と言った。

だから、俺が言えるのはこれだけだ。

「何れ>いずれ<……何れ>いずれ<解る時が来るさ。」

「???…変な太一。」

俺がそう言っていると、アグモンは頭に?マークを浮かべて俺に言った。

“変な太一”は余計だ、アグモン。

俺はそう思いながらカブテリモンの背中に乗って、東京タワーを後にした。

sideウィザーモン

……成る程、だから彼は私達の事を知っていたのか。

「……………」

……先程から一言も話さないテイルモンが気になる。

「どうしたんですか、テイルモン?」

私はテイルモンに聞いた。

テイルモンは、何かを思い詰めた顔をしながら私に答えてくれた。

「やはりアイツ等が八人目と九人目……だが私は、あの八人目を知っている様な……そんな気がする。」

先程も同じ事を言っていた様な……

そう言えば昔、テイルモンと最初に会った時に……
!?

「テイルモン、貴方は昔、“待っている人が居る”と言っていますんでしたか？」

「昔……そんな事を……私がか？」

テイルモンが聞いてきたので、私は頷き肯定した。

「はい。」

貴方は私を救ってくれた時、貴方は「誰かを待っていた。ずっと、ずっと待っていた。」と言っていました。」

私の推測が正しければ、テイルモンが待っていた“誰か”とは……

「待っていた……私は……ヒカリを……待っていた。
!?

私はヒカリを待っていたんだ!!」

や、やはりテイルモンは、八人目のパートナーデジモン!!

「なら速く行きましょう、ヒカリの所へ!!
まだ日は落ちていない。」

ヴァンデモンに知られる前に!!」

私がテイルモンにそう言うと、テイルモンは頷いた。

「急ごう!!」

ピコデビモンに見つかる前に!!」

私はテイルモンと一緒に、航とヒカリの後を追いつけた。

sideピコデビモン

聞いちゃった聞いちゃった!!

「まさかテイルモンが、八人目のデジモンだなんてな。

……まあ良い、速くヴァンデモン様にお伝えしなければ!!」

「そうはさせるか!!」

俺はヴァンデモン様にこの事を伝えに行こうとしたら、後ろから声が聞こえた。

俺は振り返ろうとした瞬間、俺は意識を失った。

sideファイラモン

やはり航の言う通り、ピコデビモンが居たな……

「取り敢えず、コイツはロープで括り付けとくか。」

俺は航から渡されていたロープを使って、ピコデビモンを東京タワーに括り付けた。

「これなら、明日迄は動けないだろ。」

俺はピコデビモンを見てそう呟いて、航達を追い掛けた。

side 航

俺は家に帰り、八神家にお邪魔している。

「航君のデジモンって確か、コロナモンとルナモンだったよね？」

凄いやヒカリちゃん、一度言っただけなのに名前を憶えてるなんて……

「そうだぜ、ヒカリちゃん。」

コロナモンは今、俺がお使いを頼んでるから居ないけど、ルナモンは居るぜ。」

そう言って俺は、ルナモンのデジヴァイスを腰から外してルナモンを外に出した。

「私、ルナモンって言うの！
よろしくね、ヒカリちゃん♪」

ルナモンは元気に、ヒカリちゃんに自己紹介と挨拶をした。

「よろしくねルナモン♪」

「今帰ったぜ！」

ヒカリちゃんとルナモンが挨拶し終わった瞬間、ファイラモンが退化してコロナモンになって窓から入ってきてそう言った。

「お疲れさん！」

ヒカリちゃん、コイツが俺のもう一体のパートナーの……」

「コロナモンだ！」

よろしくな、ヒカリ！！」

「こちらこそよろしくね！」

コロナモンも、ヒカリちゃんに自己紹介と挨拶をした。

俺はその光景を見ながら頬笑んで、窓の外を見た。

！？

「……どうやら、俺とヒカリちゃんにお客さんの様だぜ。」

俺は、窓に居るテイルモンとウィザーモンを見てそう言った

第十二話だよ！（後書き）

次回はテイルモンとウィザーモンと会話の話です

お楽しみに！！

第十三話だよ！（前書き）

今回はいつもよりも短いです

ただそれだけです・・・

第十三話だよ！

Side 航

俺達は今、ベランダに出てウィザーモン達と向き合っている。

「……それで今日は、二体仲良く此処へ来て、一体俺達に何の用なんだ？」

俺は余裕の喋り方をしているが、内心はかなり焦っている。

本来、この二体は原作通りなら今晚来る筈だった。

しかし、今はまだ夕方。

来るにしては余りにも速過ぎるからだ。

俺がそう考えてると、ウィザーモンが話した。

「久しぶりだね。」

石田 彰ボイスでそう言われると、何かテンションが上がる。

言ってなかったが、俺は石田 彰と水樹 奈々が好きだ。

声優の中ではの話だがな……

余計な話だったな。

取り敢えず、返事をしておくか……

「……それで、今度は一体何の用だ？」

俺がそう聞くと、ウィザーモンは少し笑った（様な気がした）

……何を考えてんだ、コイツは？

「否、今日は君達に話したい事が有って来たんだ。

……八人目と九人目の選ばれし子供にね。」

「!？」

俺は驚いた。

何故なら、俺が選ばれし子供だと言う事を知ってるのはヒカリちゃんを除けば、太一さんしか居ない。

太一さんがコイツ等に教えた可能性……

……それは無いな。

太一さんは、約束を必ず守ってくれる人だ。

だから、その可能性は0%だ。

……じゃあ何故、コイツ等は俺が選ばれし子供だと分かったんだ？

「……だけど、今は君には用は無い。

用があるのは……ヒカリさ。」

!？」

俺は直ぐにヒカリちゃんの前に立った。

「……警戒しないでくれ、話があるのは私じゃなくてテイルモンなんだ。」

ウィザーモンがそう言うと、テイルモンが一歩前に出た。

「私はずっと、ずっと待っていた。

だが、私は何時の間にか忘れてしまっていた。

……そして今日、全てを思い出した。

私はヒカリ、お前をずっと待っていたんだ。」

「私を？」

……成る程、原作より速く記憶が戻ったんだな。
そうと分かれば、ヒカリちゃんにさせる事は一つしかないな。

「ヒカリちゃん、デジヴァイスをテイルモンと一緒に触ってごらん。」

「一緒に？」

……分かった！」

俺がそう言うと、ヒカリちゃんはデジヴァイスをテイルモンの前に出した。

そして、テイルモンがヒカリちゃんの手の上からデジヴァイスに触ると、デジヴァイスが光りだした。

「……やはり、貴方達はこの運命だった。

……そうと分かれば、私がする事は一つだ。」

ウィザーモンはそう言って、何処かへ行こうとした。

多分、否、確実にヴァンデモンの所に紋章を取りに行くつもりなんだろう。

「待てよ、ウィザーモン。

紋章を取りに行くなら夜にしとけ。

今はヴァンデモンが居るから、行っちゃって返り打ちに会うだけだ。

……それに、夜なら俺も一緒に行ける。」

俺がそう言うと、ウィザーモンは振り返って俺を見てきた。

「……確かに九人目の言う通りだな。」

……きゅ、九人目って

「あ、あのさ、九人目って呼ぶの止めてくれないか？

俺には、加藤 航って名前があるからよ。

な、名前で呼んでくれないか？」

俺がそう言うのと、ウィザーモンは申し訳なさそうな顔になった（気がした）

「それは悪かったね。

それじゃあ航、今夜の夜に迎えに来るよ。」

「ヒカリ、また後で。」

テイルモン達はそう言って帰ろうとした。
そしたら……

「何でテイルモンが此処に居るんだ!!」

「助けに来たぞ、航、ヒカリ!!」

太一さんとアグモンが俺とヒカリちゃんの前に来て、二体を睨みながらそう言った。

……太一さん、アグモン、貴方達は今日最大のミスをしました。
……空気を読めないって言うミスをね。

第十三話だよ！（後書き）

次回はヴァンデモンのアジトに潜入です！！

次回もお楽しみに！！

第十四話だよ！（前書き）

たった四日でPV500000越え・・・

頑張ります!!!

第十四話だよ！

side 航

「航、ヒカリ！！」

ソイツ等は悪いデジモンなんだ！
だから、速くこっちに来て！」

「ヒカリ達には手を出させないぞ！！」

……太一さん、そう言ってくれるのは嬉しいんですが、テイルモン達は敵じゃありませんよ。

「太一さん、落ち着いて下さい。」

この二体は、俺達の敵じゃありませんから。」

俺がそう言うと、アグモンは驚いた顔をした。

「な、何言ってるの！？」

その二体「話を聞こう」太一……」

良かった、取り敢えず話を聞いてくれるみたいだ。

「実はですね……」

(説明中)

……って事です。」

「ちょ、ちよっと待ってよ!!」

今の話からすると、ヒカリは八人目の選ばれし子供って事なの!？」

「そうだよ、アグモン。」

・

・

・

・

「え、ええええええ!？」

少しの間の後、アグモンは大きな声を出して驚いた。

……嫌いぞ、アグモン。

「うるさいなあ、アグモン。」

……此処で太一さんとシンクロした。

「だ、だってヒカリが八人目でパートナーデジモンがテイルモンだよー!!」

太一は驚かないの!？」

アグモンは太一さんに大きな声を出して聞いた。

まあ太一さんは、八割は知ってるから驚く事はしないと思うけどさ。

「テイルモンがヒカリのパートナー以外は知ってたから、特別に驚きはしないが……」

太一さんはアグモンに、呆れた顔をしながらそう言った。

「えっ、な、何で……ま、まさか良い事って……」

「ピンポーン、正解だアグモン!」

……ノリノリ太一さん……だな。

「ずるいよー、何で僕にも教えてくれなかったのさー?」

「航と約束したからな。」

俺は約束は絶対に破らない!!」

「な、何で？」

「今の俺達じゃあ、ヴァンデモンには勝てない。
なのに、ヒカリ達を護ってたらヴァンデモンに気付かれるだろう？」

太一さんは俺が言った事を、そのままアグモンに言った。

「分かったよ、太一。」

……話は決まったみたいだな。

「太一さん、今日の晩、ヒカリちゃんを頼みます！」

「任せとけ！」

……だから無事に帰ってこいよ、航。」

太一さん……

「航君……私、待ってるから!!」

ヒカリちゃん……

「……日が落ちた……さあ、行こうか。」

「嗚呼、行くぞ、航。」

「分かった。」

……太一さん、ヒカリちゃん、行ってくる!!」

俺はそう二人に言って、ウィザーモンの力でヴァンデモンのアジ

トに向かった。

第十四話だよ！（後書き）

次回はヴァンデモンとの戦いです

紋章の本当の力が覚醒する！？

第十五話だよ！（前書き）

少し無理矢理な所もありますが気にしないでください

それからもし変な所があれば感想で教えてください

よろしくお願いします！！

第十五話だよ！

side航

俺はテイルモンとウィザーモンと一緒に、ヴァンデモンのアジトまで来て、茂みでアジトの様子を伺った。

「……見張りはバケモンか。」

バケモン位なら俺でも倒せるが、此処は敵のアジトだ。

下手に騒ぎを起こせば、ヴァンデモンに気付かれる可能性がある。しかし、今日のある時間帯だけヴァンデモンが居ない時間がある。

……今日はパンプモンとゴツモンが渋谷で遊び、それがヴァンデモンにバレてしまい、殺されてしまう日……

助けに行きたいが、コロナモンとルナモンの力じゃヴァンデモンに勝てないし、このタイミングを逃せば二体だけでなくウィザーモンを始めとする多くのデジモンがヴァンデモンに殺されてしまう。

俺は握りこぶしを作って、自分の弱さを恨んだ。

“何かを守ろうとすれば何かを捨てなければならぬ”と言う世界の常識に負けた。

俺は唇を強く噛んでいた。

「……航、辛いかもしれないがそれを背負うのは君だけじゃない。私達も一緒に背負う。」

だから、自分だけ傷付かないでくれ。」

俺はウィザーモンの言葉で我に返った。

「……ありがとう」

俺がウィザーモンにお礼を言った瞬間、アジトの空気が変わった。

「……遂にお出ましの様だ。」

ウィザーモンがそう小さい声で言うと、ヴァンデモンが島の中心から現れ、渋谷の方角へ飛んで行った。

「……行ってみたいだ。

余り時間は無い、急ごう!!」

ウィザーモンの言葉に俺とテイルモンは頷き、見回りのバケモンを気絶させてアジトに入って行った。

アジトは一本道だったので、迷う事なく一番下の部屋まで来た。

「鍵がある……」

「そう言えばさっき、バケモンが落としたこの鍵は使えないか？」

テイルモンは、見張りのバケモンから拝借した鍵を出して、俺とウィザーモンの顔を見ながら聞いてきた。

「試してみよう。」

ウィザーモンはテイルモンから鍵を借り、鍵穴に入れた。

ガチャッ

「ビンゴだな。」

俺は京さんの決めゼリフを呟いた。

「急ごう！」

ヴァンデモンが帰ってくる前に紋章を奪わないと！」

テイルモンにそう言われ、俺達はヴァンデモンの部屋に入った。
そして部屋中心には、棺が一つだけが在った。

「（確か、紋章は棺の中にあっただな……）ウィザーモン、多分紋章はこの棺の中だ。」

俺がそう言うと、ウィザーモンは棺を開けて棺の中を探った。

「……！？」

在った！！」

ウィザーモンはそう言うと、右手を上挙げ紋章を俺とテイルモンに見せてきた。

「さあ、速く此処から出よう！！」

俺がそう言うと二体は頷き、俺達は階段を急いで上がった。
そして地上に出て、帰ろうとしたら……

「お前等ア、何処に行くんだア？」

誰かの声が聞こえたので、俺達は声のした方を見た。

「ヴァンデモン様の命より、お前等を消すぜエ！！」

「マタドウルモンか!!」

「チッ、厄介な奴を連れてきてしまった!!」

テイルモンとウィザーモンは、俺達に殺気を放っているデジモン・マタドウルモンを睨みながら言った。

「（マタドウルモン……此処に来てのイレギュラーか!!）」

「あアレエ？」

そこに居るのはテイルモンにウィザーモンじゃないすかア。此処に来て裏切るすかア？

結構懂れてたんすよオ。

まあ裏切り者は消すのみなんすけどオ!!」

そう言って、マタドウルモンは俺達に突っ込んできた。

「カオススラッシュ!!」

俺達はマタドウルモンの攻撃の“カオススラッシュ”を紙一重で避けた。

「くっ、コロナモン!!」

俺は攻撃を避けた後、コロナモンをデジヴァイスから出した。

「コロナモン、進化だ!!」

俺がそう言うと、デジヴァイスが光り出した

「コロナモン進化ー！！
……ファイラモン！！」

コロナモンはファイラモンに進化して、炎を全身に纏いマタドウルモンに突っ込んだ。

「フレイムダイブ！！」

ファイラモンの必殺技である“フレイムダイブ”は、マタドウルモンに直撃した。

だが……

「おいおい、この程度かよオ？
期待したのにがっかりだぜえ。」

だがマタドウルモンはファイラモンを片手で止めていた立っていた、しかも無傷で。

「な！？
直撃した筈だぞ！！」

「この程度で、俺様が倒せると思ったのかア？
随分と舐めてくれるなア！！
これは舐めてくれたお礼だア！！
ゲイルキック！！」

マタドウルモンは、必殺技の“ゲイルキック”でファイラモンを思いつきりコツチに蹴ってきた。

「!？」

航、避けるんだ!!」

ウィザーモンの言葉で、俺は漸くファイラモンが俺に向かって飛んできたのが分かったのだが、気付くのが遅かった。

俺はファイラモンとぶつかったが、勢いが止まる事なくそのまま海に落ちた。

sideウィザーモン

「航――!!」

航がファイラモンと一緒に海に落ちて、既に5分が経った。

ファイラモンは水が苦手だ。

航は、ファイラモンに巻き込またので泳ぐ事が出来ない筈だ。

速く助けに行かないと死んでしまう!!

「テイルモン!!」

速くマタドウルモンを倒して、航を助けに行かないと!!」

「分かっている!!」

「まさか俺様に勝つつもりなんすかア?

無謀にも程がありますよオ。

それに、アイツ等はもう溺死してますよオ!」

私がテイルモンと話していると、マタドウルモンが私達にそう言うってきた。

「私は航達を信じている!!」

だから私達はマタドウルモン、お前を倒す!!」

「私も航達を信じている!!」

あの程度の攻撃で、航達が死ぬ訳ない!!」

「だったら俺様の攻撃でも喰らうんだなァ!!」

マタドウルモンが私達に突っ込んできた。

……勝ち目が無いのは分かっている。

しかし!!

「誰かを信じていれば、不可能を可能にする!!」

「そんなもんある訳n「それがあるんだな。」だ、誰だ!!?」

マタドウルモンの話を、海から聞こえる声が遮った

私達はマタドウルモンから視線を海に移した。

「人は信頼されてると、無限大の力を手に入れる。

信頼されるって事は、それだけ絆が深いって事だよ!」

ドンドン、話してる者の顔が見えてくる。

「だから俺達は、信頼されてるからお前を倒す!!」

話していた者は陸に上がり、私達に正体を見せた。

その正体は、私達が信じていると言った人物……

加藤 航だつた……

第十五話だよ！（後書き）

次回はマタドウルモンとの戦いです

楽しみにしてください！！

第十六話だよ！（前書き）

今回も短いです

誤字・脱字や変な所などがあれば教えてください

お願いします！

第十六話だよ！

side航

「(や、ヤバイ…………い、意識が…………も、保たない…………)」

俺はマタドウルモンの攻撃の“ゲイルキック”をファイラモンと喰らい、一緒に海に落とされた。

しかも、未だに俺達は海の底に向かって沈んでいる。

ファイラモンは水が苦手で、海の中では自由に行動できない。

俺はルナモンを出そうと思いデジヴァイスを取り出そうとしたが、ファイラモンが俺の上に乗っているのでデジヴァイスを取る事が出来ない。

「(もう…………ダメだ…………)」

俺は目を瞑って諦めて、このまま死のうとした。

だが俺が目を瞑った途端、あの二人の言葉が頭の中に浮かんだ。

「無事に帰ってこいよ」

た…いち…さん……

「航君……私、待ってるから!!」

ひか…り……ちゃん……

「(信じて……信じてくれている…………。俺が……俺が帰ってくる事を……信じてくれている…………。なのに……俺は諦めるのか?…

…信頼されてるのに……俺はその信頼を裏切るのか？……嫌だ…
…俺の事を信じてくれてるのに……裏切るなんてしたくない！！
俺は信頼されているんだ！！…なのに、裏切るなんて嫌だ！！」

俺がそう思った瞬間、信頼の紋章が光り出した。

「（お前だって諦めたくないよな……。さあ行こうぜ！！俺達の事を信じてくれてる奴の所に！！）ファイラモン、進化だ！！」
俺がそう叫ぶと、目を瞑っていたファイラモンが目を開けた。

「ファイラモン超進化ー！！！！」

…………フレアモン！！！！」

ファイラモンは、信頼の紋章の力でフレアモンに超進化した。
成熟期と違い、完全体の強さが俺の体に伝わってくる。

「（これが紋章の力を使った完全体の姿なのか……）」

初めて完全体の姿を見たが、これならマタドウルモンに勝てる気がする。

「行こうぜ、航！！」

フレアモンにそう言われたので俺がゆっくり頷くと、フレアモンは俺を両手で優しく包んでくれて、凄い跳躍力で水を蹴っていき地上に出た。

そしたらウィザーモン達が、マタドウルモンと何かを話していた。

「誰かを信じていれば、不可能を可能にする！！」

そうだ、誰かを信頼していれば、不可能を可能にしてくれる……

「そんなもんある訳n「それがあるんだな。」だ、誰だ!！」

俺はマタドウルモンの話を遮って、マタドウルモンの言葉を否定した。

「人は信頼されてると無限大の力を手に入れる。

信頼されるって事は、それだけ絆が深いって事だよ!」

俺はフレアモンの手から地面に上がり、マタドウルモンにそう叫んだ。

「だから、俺達は信頼されているからお前を倒す!！」

さあ、本当の戦いを始めようぜ!!

第十六話だよ！（後書き）

次回はマタドウルモンとの戦いです

お楽しみに！！

第十七話だよ！（前書き）

今日は体育祭だったので疲れたから話がちやごちやです

・・・すいません、言い訳ですね

第十七話だよ！

side 航

俺はマタドウルモンにそう叫ぶと、マタドウルモンは悔しそうな顔を・テイルモンとウィザーモンは驚いた顔をして俺を見てきた。

「お前は俺が、ファイラモンと一緒に“ゲイルキック”で海に落とした筈だ！！」

何故お前は、此処に無傷で居るんだ！！？」

マタドウルモンが殺気を放ちながら俺に叫んで聞いてきたが、俺はその殺気に怖気付く事無くマタドウルモンに応えた。

「俺は、色んな人達から信頼されているんだ。

俺は、皆の信頼を裏切りたくない！

だから、俺はお前を倒す為に此処に居るんだ！！！」

俺がそう叫ぶと、マタドウルモンは俺を嘲笑いながら俺に言ってきた。

「俺様を倒す？

冗談は止せエ！！

お前一人と二体で、一体何が出来るんだア！！？」

……コイツは何を勘違いしてるんだ？

何で俺一人とデジモン二体しか此処に居ないんだ？

俺はそう思いながら、マタドウルモンにほくそ笑んだ。

「何が可笑しい！！」

マタドウルモンは、俺を睨みながら聞いてきた。

……可笑しいに決まってるじゃないか。
だって……

「俺達は一人と三体居るだからな。」

「な!？」

ふざけも「清々之咆哮!!」グハッ!？」

マタドウルモンが叫んでる途中、紅いデジモンがマタドウルモンを攻撃し、マタドウルモンはその攻撃を喰らってぶっ飛ばされた。

「な!？」

貴様は一体誰だ!!」

テイルモンは、マタドウルモンを攻撃したデジモンに叫んだ。

「おいおい、俺を忘れちゃったのか？」

まあ……俺もこの姿で皆に会うのは初めてだったからな。

……俺の名はフレアモン、ファイラモンから進化したデジモンだ!」

紅いデジモン・フレアモンがテイルモン達にそう叫んだ。

「ま、まさか完全体に進化したのか!？」

ウィザーモンがフレアモンの言葉を聞いて、俺を見て驚いた顔をしながらそう言った。

……流石はウィザーモン、頭の回転が速いな。

「その通りだ、ウィザーモン。
後は……フレアモンに全てを任せよう。」

俺がそう言うと、テイルモンとウィザーモンは驚いた。
そしてウィザーモンは、俺の両肩に手を置いてきた。

「な、何を言ってるんだ、航!？」

マタドウルモンは、完全体とは言え究極体に匹敵する力を持ってるんだ!!

幾ら完全体に進化したからって、一対一で勝てる訳が無い!!
私達も協力しないと!!」

……確かにウィザーモンの言う通り、マタドウルモンは究極体を倒す力を持っているから強い。

一対一で戦えば、フレアモンが勝つ可能性は低い……
普通なら(……)な……

「フレアモンは勝つさ。」

だから、俺の言葉とフレアモンの勝利を信じてくれ。」

俺は真剣な顔をして二体にそう言うと、テイルモンとウィザーモンは少し黙って考え込んだが無言で頷いてくれた。

「ありがとな……。」

フレアモン、お前の力を皆に見せてやれ!!」

「……全く舐められたもんだぜエ……。」

たった一体で、俺に戦いを挑なんてな……ふざけんじゃねエ!!
俺様は、ヴァンデモンの部下の中で最強のデジモンなんだア!!
一瞬でお前を消してやる!!

ゲイルキック!!」

マタドウルモンはそう叫ぶと、フレアモンに一瞬で近付き必殺技の“ゲイルキック”をしようとした。

だが……

「お前の動きは、完全に見切ってたよ。」

フレアモンはマタドウルモンにそう言うと、マタドウルモンの“ゲイルキック”を紙一重で避けた。

「紅・獅子之舞!!」

フレアモンは炎を纏った拳と蹴りを、高速でマタドウルモンの体に叩き込んだ。

「グハッ！」

グフッ！（ry）

マタドウルモンは紅・獅子之舞を喰らう度に声を上げる。

「……何故だ？」

マタドウルモンは、究極体に匹敵する力を持っている。

なのに何故、完全体のフレアモンはマタドウルモンの攻撃を簡単に避け、逆に攻撃を喰らわせるなんて………」

ウィザーモンの疑問は誰でも持つ。

だけど、その疑問の答えは簡単だ。

「その答えは簡単だ。」

マタドウルモンは、現実世界に慣れていないから動きが鈍くなつてフレアモンに負けてるんだ。」

俺はそう言うが、二体はまだよく分かっていない顔をしていた。

「例えば、今迄普通に暮らしていたデジモンが、急に火山地帯なんかで暮らせると思うか？」

俺が簡単に思いついた例を言うと、二体は理解してくれた。

「つまり、慣れてない環境だから……」

「上手く体が動かせない訳だな。」

テイルモンとウィザーモンは、俺にそう言ってきた。
二体とも正解だ！

俺はフレアモン達に視線を移すと、勝負が決まりそうだった。

「さあ、そろそろ勝負が決まるぜ。」

俺達はフレアモン達に視線を戻した。

第十七話だよ！（後書き）

次回は遂にマタドウルモンと決着がつきます

しかも次回は急展開になるかも？

第十八話だよ！（前書き）

今回はマタドウルモンとの戦いのラストですが短いです

しかもラストは意外な展開に！？

きた。

確かにテイルモンの言う通り、速くマタドウルモンを倒さないと
な！

「フレアモン、マタドウルモンに止めを刺せ！！」

俺がフレアモンに叫ぶと、マタドウルモンは『殺す』と言う単語
を何度も叫びながら、必殺技の“サウザンドアロー”をフレアモン
に撃ってきた。

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコ
スコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコ
サウザンドアロー！！！！！！」

しかしフレアモンは、マタドウルモンの必殺技に怖気付く事無く、
冷静に必殺技をマタドウルモンに放った。

「紅蓮獣王波！！！！」

フレアモンが放った必殺技の“紅蓮獣王波”は、マタドウルモン
の必殺技の“サウザンドアロー”を消し去り、そのままマタドウル
モンに当たり、マタドウルモンが居た場所には何も残らなかった。

「やっとヒカリちゃんの顔が見れる。」

俺はマタドウルモンを倒した事を確認して、ウィザーモンとテイ
ルモンを見て頬笑みながらそう言った。

しかし……

「ブラッディーストリーム！！！！」

突然そんな声と一緒に、血の様に赤い紐が俺達の体に括り付けられ、俺とフレアモンとウィザーモンは海に投げ飛ばされた。

そして最後に見たのは、テイルモンを捕まえて高笑いしているヴァンデモンの姿だった。

それを見た俺は、そこで意識を失った。

side 太一

航達がヴァンデモンのアジトに向かって、既に三時間が経った。だけど、余りにも帰ってくるのが遅過ぎる……

「……お兄ちゃん、航君達、無事に帰って来るよね？」

ヒカリが、今にも泣きそうな声で俺に聞いてきた。

「……だ、大丈夫さ！」

航は今迄に約束をして、破った事は一度も無かっただろう？
だ、だから、航達が帰ってくるのを待とうぜ。」

俺は自分にも言い聞かせる様に、ヒカリに無理矢理頬笑みながらそう言った。

「……そうだね。

航君達は、ちゃんと帰ってくるよね。」

「太一！

ヒカリ！

そろそろ眠りなさい！！」

ヒカリが俺にそう言うのと、母さんが俺達に寝る様に言ってきた。

「取り敢えず、今は眠ろう。」

明日になれば、航も何時もの様にリビングに居る筈だからよ。」

「うん!!」

俺達はそう言い合って、電気を消して布団に入って目を瞑った。
航が、無事に帰ってくると思って……

だけど……

明日の朝、航は家に居なくて……

ヴァンデモン達との戦いが始まるなんて……

俺は、否、俺達は予想も出来なかった……

第十八話だよ！（後書き）

次回からはヴァンデモン軍団との戦いです！！

うまく書けないかもしれませんが頑張ります！！

第十九話だよ！（前書き）

今回からVSヴァンデモン編です！！

楽しんでください！！

第十九話だよ！

side 太一

「う……………うう……………朝か……………航は！！！」

俺は朝早くに目が覚め、ヒカリが起きない様にリビングに急いで向かった。

時刻は既に七時過ぎ……

何時もなら、この時間帯はリビングに居る筈のアイツは、今日はリビングに居なかった。

「……………あら太一、お早よう。」

母さんが俺に気付き、何処か元気の無い声で挨拶してきた。

「母さん、航は！？」

「……………それがね、昨日の晩から家に帰ってきてないらしいの。

さっき、航君のご両親が家に来て聞いてきたけど、『知らない』としか答えられなかったわ。

……………今は変な事がずっと起こってるから、無事だと良いんだけど……………。」

母さんは元気の無いの声で、俺に航の事を教えてくれた。

「……………やはり昨日、ヴァンデモンのアジトで何か遇ったんだ！！！」
」

俺は直ぐに自分の部屋に戻り、パジャマを脱いで何時もの服を着

替えた。

「どうしたのお、太一い……」

眠っていたアグモンが起きて、まだ眠たそうな声で聞いてきた。

「航が未だ帰ってない!!」

きつと、航の身に何か遇ったに違いない!!
だから俺、ちよつと探しに行ってくる!!」

俺がアグモンに航の事を教えると、アグモンは驚いた顔をした。
俺は着替え終わったので、部屋から出ようとした。

「ま、待ってよー!!」

アグモンはベッドから出て、俺の背中に隠れて部屋を出ようとした。
た。

「待って、お兄ちゃん!!」

するとヒカリが何時の間にか起きて、俺の服を掴んで俺を止めてきた。

アグモンは俺の背中に居たので、結果的に俺と一緒に止まった。
ヒカリは、不安そうな顔で俺の顔を見てきた。

「……私も、私も行く!」

「な、何を言ってんだ!!
危険だ、お前は家で待ってろ!!」

俺はヒカリに大きな声で、家で待っている様言った。

ヒカリは俺に大声を出されたので、少し驚いた顔をした。

テイルモンが居ない今、もしヴァンデモンがヒカリを襲ってきたら俺はヒカリを絶対に護れるとわ言えない……

だけどヒカリは、俺の目を真剣に見てきた。

「航君は……私の為に紋章を取りに行っただんでしょ？」

航君が危険な目に遇ってるのかもしれないのに、私だけ安全な所で待つなんて嫌だよ!!」

「ヒカリ……分かった、直ぐに準備しろ、着替えたら直ぐに航を探しに行くぞ!!」

「うん!!」

ヒカリの決意は本物、俺が何を言っても決意は変わらない。

俺はヒカリの決意を分かってそう言うのと、ヒカリはパジャマを脱いで何時もの服に着替えた。

「着替えたな？」

じゃあ行け「キャーキャー!!」か、母さん!!」

俺達が部屋から出ようとした時、母さんの悲鳴が聞こえた。

俺達は急いで部屋から出てリビングに行ったが、リビングには誰も居なかった。

俺は急いで玄関に視線を移動させた

「太一!!!!」

ヒカリ!!!!」

玄関を見ると、母さんは俺とヒカリの名前を叫びながらバケモンに連れていかれた。

「母さーん（お母さーん）！！」

俺達は母さんの後を追いつけようとして、バケモン達が俺達に襲い掛かってきた。

「太ー！！」

ヒカリ！！

危ない！！」

アグモンが俺とヒカリの前に立つと、俺のデジヴァイスが光り出した。

「アグモン進化ー！！」

……グレイモン！！」

アグモンはグレイモンに進化し、バケモンを倒して俺とヒカ리를背中に乗せて外に出た。

外に出ると、沢山の人達がバケモンに連れて行かれていた。

「太ー！！」

ヒカリー！！」

すると、少し離れた場所に母さんの姿が見えた。

「グレイモン、母さんをー！！」

「そうはいくか！！」

ソウルチョッパー!!」

俺がグレイモンに指示を出してグレイモンが母さんの所に行こうとすると、マントを羽織ったデジモンに邪魔された。

グレイモンは、マントを羽織ったデジモンの攻撃を喰らって地面に倒れた。

俺達はグレイモンにしっかりとしがみ付いていたので、怪我はしなかったが強い衝撃は受けた。

「イタタ……グレイモン!?!」

「お前達も連れて行ってやる!!
バケモン、奴等を捕まえろ!!」

マントを羽織ったデジモンがバケモンに命令すると、バケモン達が俺達の方へやってきた。

「太一、後で必ずお母さんを救うから、今は逃げよう!!」

グレイモンは立ち上がって必殺技の“メガフレイム”を放った後、俺とヒカリにそう言って母さん達と逆の方向へ歩きだした。

「母さーん（お母さーん）!!」

「太一!!」

ヒカリー!!」

俺達は母さんを見ながらグレイモンに乗って、デジモン達が居ない安全な場所迄逃げた。

Side航

……此処は何処だ？

……あれから一体どうなったんだ？

……冷たい……

……俺、死んだのかな？

……分からない……

……あれ？

……誰かが俺をおんぶしてくれてる？

……だけど、今は物凄く眠たい……

Sideタケル

僕はテレビを観て、お台場が大変な事になってるのを知った。

「大変だ！！」

僕はそう言って鞆に荷物バタモンを詰めて、鞆を背負って玄関へ行って靴を履き始めた。

「タケル、何処に行くの!?!」

ママが僕の後ろに来て、何処に行くのかを聞いてきた。

「パパとお兄ちゃんを助けに!!」

「ダメよ!!」

危険過ぎる!!」

僕がママにパパやお兄ちゃんを助けに行く事を言うと、ママは僕がお台場に行く事を反対してきた。

……確かに危険かもしれない……
でも!!」

「あそこには、パパとお兄ちゃんが居るんだよ!!
僕達が行かないと!!」

お兄ちゃん達が危険な目に遇ってるのに、僕だけ何もしないなんて嫌だ!!」

「……アナタ……ヤマト……!!?」

分かったわ、行きましょう、お台場へ!!」

「うん!!」

ママがそう行ってきたので、僕は大きい声で返事をした。
そして僕達は、お台場に向かう為に家から出て行った。

Side ヤマト

「何でこんな子が海に……」

俺とガブモンは浜辺を散歩していたら、タケルと同じ位の男の子が浜辺で倒れていた。

「!？」

や、ヤマト、この子の腰にデジヴァイスが在るよ!!」

「な、なんだって!!」

俺はおんぶしていた子を地面に下ろし、服を少し捲って腰を見た。

「デジヴァイス……しかも二つだと!？」

男の子の腰には、俺達と同じデジヴァイスが付いていた。
しかも、俺達と違い二つ腰に在った。

「ヤマト、この子が八人目か九人目で、ヴァンデモンの部下にやられたのかもしれないよ!？」

ガブモンが言った可能性は……十分に考えられる
……!？」

こ、この子、怪我をしている!!

「ガブモン!

取り敢えず、この子を応急手当する!
急いで家に帰るぞ!!」

「分かった！

ガブモン進化ー！！

……ガルルモン！！！！」

俺はデジヴァイスを取出しガブモンをガルルモンに進化させ、ガ
ルルモンの背中に男の子を乗せて急いで家に向かった。

第十九話だよ！（後書き）

次回は今回出てこなかった選ばれし子供sideを書きます

お楽しみにー！！

第二十話だよ！（前書き）

V S ヴァンデモンパート2です

頑張った！！

第二十話だよ!

side 空

私はサッカーの朝練があるから今、学校に走って向かっている。
朝、家から出る時、お母さんに挨拶をしたんだけど、何も言ってくれなかった……

私は、お母さんと昔みたいになりたいんだけど、お母さんが私と距離を取っているから話し掛けにくい……

ハア……

私は一度溜め息を吐いて、急いで学校に向かった。

「速く行かないと、朝練に遅刻し……!?!」

学校に向かう為に角を曲がろうとしたら、バケモンが道に沢山居
て、街中の人達を連れて行っていた。

私は角に身を隠して、バケモン達の様子を伺っていた。

「(何で朝からデジモンが……!?!? ま、まさか、八人目と九人目が見
つかったの!?!)」

私はそう考え、一度家に帰ってピヨモン達と合流しようとした。

「逃がさん!!」

だけど、私は後ろに居たバケモンに気付かなかったので、私は逃
げる事が出来ずに捕まった。

「キャアアアアア!!!!!?!」

side 丈

「ハァ……」

「どうしたんだよ、丈？
溜め息なんか吐いてさ？」

階段に座っていた僕がため息を吐くと、相棒のゴマモンが心配そうな顔で僕に聞いてきた。

「溜め息も吐きたくなるさ。」

お台場は謎の霧で覆われていて、船が出ていない。
これじゃあ、帰る事も出来ないよ……ハァ……」

僕はゴマモンにそう言って、もう一度溜め息を吐いた。
全く、何でお台場だけに霧が発生するのさ……

……ん？

お台場だけ……

……ま、まさか！？

「ヴァンデモンがこの霧を！？」

僕は立ち上がって、お台場を見てお台場に発生している霧を見た。
ヴァンデモンの仕業だとしたら、このお台場だけに発生している
霧も説明がつく……！！

「丈、オイラが進化してお台場に乘せて行くよ……！！」

ゴマモンは僕の推理を聞いて、真剣な目で僕に言ってきた。
イツカクモンに乗って行くしか、お台場に向かう方法が無い!!

「分かってる！」

「だけど、此処じゃ目立ち過ぎる!!
少し場所を移動しよう!!」

「おう!!」

僕はゴマモンを鞆に入れ、人気の無い所へ走って行った。

Side ミミ

「もお、一体何なのよお!!!!」

「何で朝からバケモンが、こんなにも居るのよお!!!!」

私はバケモンから逃げて、エレベーターの中でそう愚痴を言った。
するとパパが、私を不思議そうな目で見てきた。

「ミミちゃん、バケモンってあの幽霊の事？」

「パパが私に聞くと、ママも私を見てきた。」

「……あつ、いけない!!」

「余りにも嫌だったからか、口に出ちゃってたんだ……」

「う、ううん、それより早く逃げよ!!」

私はパパとママ、そしてパルモン（布で隠している状態）は、速く一階に着く事を口には出てないけど心の中で願った。そしたら、エレベーター途中で止まった

「僕達の他にも、未だ助かった人が居るんだ!!」

パパがそう言うのと、エレベーターの扉が開いた。

「ざんねーん!!」

扉が開くとバケモン達が入ってきて、私達を捕まえてきた。

「キャアアアア!!」

私達はバケモンに捕まった。

side 光子朗

「光子朗はん!!」

バケモンが近付いてきます!!

はよ逃げな、ワテ等も捕まってしまう!!」

テントモンが、僕の後ろで焦りながら僕に言ってきました。

しかし、ゲンナイさんが送ってくれたプログラムを完成させれば、何とか出来る筈なんです!!

「光子朗、速く逃げましょう!!」

お母さんが僕の部屋に入ってきて、僕にそう言ってきました。
ですが、今は気にしてる時間はありません!!

「お母さん、もう少し、もう少しだけ待ってください!!」

「こ、光子朗!!」「やらせてあげよう」アナタ……」

お母さんが僕に大きな声で怒ると、お父さんが僕を庇ってくれました。

……お父さん……

「光子朗は、何か考えがある筈なんだろう。
信じよう、光子朗を。」

「……そうね。」

私も信じるわ、光子朗。」

お父さんに説得され、お母さんも僕を信じてくれました
お母さん……

「頑張ります!!」

「光子朗はん、バケモンが来たで!!」

僕が二人にそう言うと、テントモンが部屋に入ってきた。

「な、何だこのテントウムシの様な生き物は？」

お父さんが、テントモンを見て驚いた声で僕に聞いてきました。

「ワテの名前はテントモン。

ワテはあんさんらの味方さかい、安心してください。」

「か、関西弁……」

テントモンが二人に自己紹介をすると、お父さんがテントモンに突っ込みました。

僕も最初、モチモンに出会った時は思わず突っ込みそうになりました。

「……それより光子朗はん、バケモンが!!」

テントモンは、僕にバケモン達が此処に向かっている事を教えてくれました。

ドカツ!!

すると、この家の扉が破壊される音が聞こえました。

「あわわ、もうダメや!!」

テントモンがそう言った瞬間、プログラムを無事に完成させる事が出来ました!

僕は急いで、たった今完成したデジタルバリアを始動させました!するとバケモンは僕の部屋を何度か見て、外に行きました。

「お父さん、お母さん!!」

この部屋に居れば安心です!!

だから、絶対にこの部屋から出ないでください!!」

僕はそう言って、テントモンと一緒に外に行こうとしました。

「待って!!」

するとお母さんが、僕を止めてきました。

「お母さん……」

僕は振り返って、お父さんとお母さんの顔を見ました。

「必ず、無事で帰ってきてね。」

「……行ってきます!!」

僕はそう言って、テントモンと一緒に外に出ました。

第二十話だよ！（後書き）

次回は航の話です！

お楽しみにー！！

第二十一話だよ！（前書き）

今回は中途半端！！

御了承ください

第二十一話だよ！

side 航

・

・

・

・

「う……うう……知らない天井だ。」

俺は重たい目蓋を無理矢理開けて、某決戦兵器の三人目のパイロットの台詞を言った。

フザけるのはこの位にして、此処は一体何処なんだろうか？

俺は顔を左右に動かして確認すると、此処は誰かの家で誰かの部屋だと言う事が分かった。

俺は上半身を動かすと、左の脇腹に凄まじい痛みが体を巡った。

俺は腹を両手で押さえて、痛みが自然に納まるのを待った。

少しすると痛みが納まったので、俺は服を捲って何故痛みを感じたのかを確認した。

俺の腹には包帯が巻かれていて、左の脇腹の部分は血で包帯が滲んでいた。

……昨日のヴァンデモンとの戦いで出来てしまった傷だな。

俺は怪我をしている理由を直ぐに解いて、痛みに耐えながら立ち上がり部屋を出た。

「航君!!」

「うわっ!？」

「る、ルナモン?」

俺が部屋を出た瞬間、前から急に誰かが抱き付いてきたので驚いたが、抱き付いてきたのはルナモンだったので直ぐに落ち着きを取り戻した。

「航君、何処か痛い場所はない?」

ルナモンが涙目で俺に上目遣いで見ながら聞いてきた。
痛い場所と言えば左の脇腹だが、ルナモンの所為でまた少し痛みが……

でも、無意識に俺に抱き付いてきたし、俺の事を心配してくれたと思うから、そんな事は言えないよな。

「大丈夫だ、ルナモン。」

強いて言うとしたら、左の脇腹が少し痛い位だ。」

俺はルナモンの頭を撫でながらそう言った。

「浜辺で血を出して倒れていたから心配したぜ、航。」

すると俺の前に、俺より年上の金髪のクールな感じの少年が俺に話し掛けてきた。

……俺は貴方の事を知っていますが、何故貴方が俺の事を知ってるんですか?

「えっ……と、俺の名前は加藤 航です。」

名前を知られているみたいだが、一応自己紹介をした。

「そう言えば、未だ自己紹介をしてなかったな。

俺の名前は石田 ヤマト。

お台場小学校の五年で、お前と同じ選ばれし子供だ。

そして、アッチに居るのが俺のパートナーデジモンのガブモンだ。
よろしくな。」

ヤマトさんはそう言っただけで俺に手を出してきたので、俺はルナモンを片手で支えてヤマトさんと握手をした。

「ルナモンからお前の事を全部聞いた。

お前と太一の妹のヒカリちゃんが、八人目と九人目の選ばれし子供だっただけだ。

テイルモンがヒカリちゃんのパートナーデジモンで在る事。

お前が昨日、ヴァンデモンのアジトに乗り込んでヒカリちゃんの紋章を奪おうとして、ヴァンデモンにその怪我を負わされた事。」

ヤマトさんは真剣な顔をしながら俺にそう言ってきた。

……ルナモンがヤマトさんに全部教えたから、俺の名前なんかを知っていたのか……

コロナモンとウィザーモンが居ないと考えたら、何処かではぐれたって事だな……

あの二体なら何とか出来るだろう。

だから今は、俺が出来る事をするだけだ！

「ヤマトさん、色々ありがとうございます！
ルナモン、急いで東京ビックサイトに行くぞ！」

「うん！」

俺はヤマトさんにお礼を言って、ルナモンにそう言って玄関に向かうとした。

するとヤマトさんが、俺の腕を掴んできた。

「な、何で東京ビックサイトに行くんだよ？」

それに、お前は怪我人なんだからじっとしてろよ！」

「東京ビックサイトには、ヴァンデモンとお台場に住んでいる人が集められているんです！」

そして例え怪我をしても、俺以上の痛みを受けている人や俺以上の恐怖を受けている人が居る。

だから、俺は此処で立ち止まっている訳にはいかないんです！」

俺はヤマトさんにそう言って、手を振りほどき靴を履いた。

「ま、待てよ！」

俺もお前と一緒に行くぜ！

ヴァンデモンを倒すって事も在るが、一番はお前一人にしておけないからな！」

ヤマトさんも靴を履いて、真剣な顔をして俺に言ってきた。

「ありがとうございます！」

急ぎましよう、皆を速く助けないと！」

俺はそう言って、俺達は急いで一階に向かった。

.....

.....

.....

.....

俺達が一階に着くと、ヤマトさんはデジヴァイスを取り出した。

「ガブモン、進化だ！」

ヤマトさんはデジヴァイスをガブモンに向けて叫ぶと、デジヴァイスが光り出した。

「ガブモン進化ー！！」

……ガルルモン！！」

ガブモンはガルルモンに進化して、俺達はガルルモンの背中に乗った。

そして俺達は、東京ビックサイトに向かった。

第二十一話だよ！（後書き）

次回は東京ビックサイトでの戦いです

お楽しみに！！

第二十二話だよ！（前書き）

ヴァンデモンとの最初の戦いまでの話なので短いです

御了承ください！！

第二十二話だよ！

side航

俺はヤマトさんは今、ガルルモンの背中に乗って皆が捕まってる場所・東京ビックサイトに向かっている。

「航、何でヴァンデモンが東京ビックサイトに居るって分かった！？」

ヤマトさんは声を大きくして、俺に聞いてきた。

「朝起きた時、窓の外を覗いたら誰一人この町に居なかった。

だとすれば、ヴァンデモンやヴァンデモンの部下に何処かに連れていかれたと考えるのが普通です！！」

しかも、お台場でそんな大人数を隔離する場所及び戦闘が何時でも出来る場所は、東京ビックサイトしか無いからですよ！！！」

本当の理由は未だヤマトさんには言えないので、俺は思い付いた言葉を整理してヤマトさんに言った。

するとヤマトさんは、俺の説明に納得してくれた。

「確かに、お台場で街中の人達を隔離出来て何時でも戦闘が出来る場所は、航の言う通り東京ビックサイトしか無いな……………急いでくれ、ガルルモン！！」

「分かった、ヤマト！」

ヤマトさんはガルルモンに指示を出すと、ガルルモンは更に走るスピードを上げて東京ビックサイトに向かって走り出した。

side 太一

俺はヒカリと一緒にグレイモンに乗って、安全であろう建設中のマンシヨンの中に隠れた。

「大丈夫、アグモン？」

「まだ少し痛いけど、僕、頑張るよ！」

マンシヨンの奥で、ヒカリとアグモンのそんな会話が聞こえる。

……アグモンの奴、あのデジモンの攻撃で怪我をしたのか……

ヒカリが応急手当をしてくれたから、大丈夫らしいが……

「航の奴……一体何処へ？」

俺はヒカリに達しに聞こえない様に、外を見ながら呟いた。

side 航

俺とヤマトさんが東京ビックサイトに着くと、既にリリモンがヴァンデモンと戦っていた。

「航の言う通りだったな……！」

ガルルモン、ヴァンデモンを此処で倒すぞ……！」

「分かった!!」

ヤマトさんの言葉にガルルモンが応えると、ヤマトさんのデジヴァイスと紋章が光り出した。

「ガルルモン超進化ー!!!」

……ワールガルルモン!!!」

ガルルモンはワールガルルモンに超進化して、ヴァンデモンの所へ行った。

「ルナモン、俺達も行くぞ!!」

「うん!!」

俺がルナモンにそう言って、ルナモンが応えると俺の片方のデジヴァイスが光り出した。

「ルナモン進化ー!!!」

……レキスモン!!!」

俺はルナモンをレキスモンに進化させ、レキスモンと手を握ってヴァンデモンの所へ行った。

「止めろ、ヴァンデモン!!!」

ワールガルルモンはジャンプし、ヴァンデモンと同じ高さ迄行ってヴァンデモンにそう言った。

「フッフ、お前の言う事など……!!?」
「そ、そのデジモン、まさかお前が!!」

ヴァンデモンが、レキシモンと俺に気付いて俺達を交互に見ながら聞いてきた。

「お前は此処で倒す!!」

俺とヴァンデモン・イレギュラーとボスの最初の戦いが切つて落とされた。

第二十二話だよ！（後書き）

次回はヴァンデモンとの戦いです

お楽しみに！！

第二十三話だよ！（前書き）

話の展開が急です

本当にすいませんo r t

第二十三話だよ！

side 航

レキスモン・ワールガルルモン・リリモンは今、ヴァンデモンと激戦を繰り広げている。

「カイザーネイル！！」

「フラウカノン！！」

「ムーンナイトボム！！」

三体は必殺技をヴァンデモンに放ち、三体の必殺技がヴァンデモンに直撃した。

しかし……

「ブラッディーストリーム！！」

ヴァンデモンは三体の必殺技を喰らっても全くダメージがなく、三体に自身の必殺技一つである赤い鞭・“ブラッディーストリーム”で攻撃した。

三体はヴァンデモンの攻撃を避ける事が出来ず、ブラッディーストリームを喰らいぶっ飛ばされた。

「九人目が此処に居る！！」

奴と八人目さえ殺せば、私は負ける事が無い！！！！」

ヴァンデモンそう叫びながら、俺の前に来て殺気を放ってきた。俺はその殺気に怖じ気付いてしまって、逃げる事が出来なかった。

そしてヴァンデモンは、俺に手を近付けてきた。

「させるかアア!!」

ワーガルルモンが下から俺の前に来て、ヴァンデモンに殴り掛かった。

「邪魔を……するなアア!!
ナイトレイド!!」

だがヴァンデモンは、蝙蝠を沢山出現させて攻撃する必殺技・“ナイトレイド”でワーガルルモンに攻撃した。

「ウワアアアアアアア!!」

ワーガルルモンは俺にダメージが無い様にワザとヴァンデモンの必殺技・“ナイトレイド”を喰らった。

そしてワーガルルモンは、悲鳴をあげながら下に落ちて行った。

「ワーガルルモン!!!!?」

ヤマトさんは、下に落ちたワーガルルモンの所に走って行った。それを確認したヴァンデモンは、また俺に手を近付けてきた。

「フラウカノン!!」

「ムーンナイトボム!!」

リリモンとレキスモンは、ワーガルルモンに攻撃して油断していたヴァンデモンに必殺技を放った。

「目障りだ!!」

ブラッディーストリーム!!!!」

「「キャアアアアアアア!!!!?」」

だがヴァンデモンは二体の必殺技を余り喰らっておらず、逆にヴァンデモンの必殺技の“ブラッディーストリーム”を喰らい地面に叩きつけられた。

「（俺の……俺の所為だ……。俺が無謀にも、ヴァンデモンに戦いを挑んだ所為だ……。テイルモンを救おうとしたからだ……。俺の所為で、関係ない皆が傷付けられていく……。俺の所為で!!）ヴァンデモン!!」

俺がヴァンデモンの名前を叫ぶと、ヴァンデモンはリリモン達を攻撃するのを止めて、俺の方へ来て俺を見てきた。

「皆を攻撃するのを止めろ、否、止めてくれ。

俺なら、お前に付いて行くから。

……だから、もう攻撃して誰かを傷付けるのを止めてくれ……」

俺はそう言って、ヴァンデモンの前に歩いて行った。

そして、目を瞑って無抵抗な事を示した。

「待て、航!!」

ヤマトさんが下から叫んでいるが、俺の所為で誰かが傷付けられるのは見たくない。

「フッフ、貴様とテイルモンを餌にし、八人目をおびき寄せるとしよう。」

ヴァンデモンがそう言うのと、バケモンがテイルモンを連れて来た。

「これで私の恐怖が一つ消え去った!!」

ヴァンデモンはそう叫んで、高らかに笑い出した。

するとテイルモンが、俺を心配そうな顔をして見てきた。

「航……お前……」

「……すまない。」

俺はテイルモンに謝った。

謝ったって、もう遅いの……

「航ウウウ!!!」

ごめんなさい……ヤマトさん……

俺とテイルモンは、ヴァンデモンに連れていかれた。

第二十三話だよ！（後書き）

次回は丈とタケルの話です

お楽しみに！！

第二十四話だよ！（前書き）

今回は丈とタケルの話です

楽しんでくれたら幸いです

第二十四話だよ！

航がヴァンデモンと接触する少し前・・・

side 丈

僕はゴマモンが入った鞆を背負って、フェリー乗り場にやって来た。

「丈、あそこに居るのって……」

ゴマモンが鞆から顔を出して、僕に指を差して教えてきた。

……一体、誰が居るんだ？

僕はゴマモンが指差した場所を見た。

「……あつ、タケル君!!」

ゴマモンが指差した場所には、僕達と同じ選ばれし子供の一人でヤマトの弟・高石 タケル君とタケル君のお母さんがそこに居た。僕はゴマモンを鞆の中に隠してタケル君の名前を大きな声で言いながら、タケル君とタケル君のお母さんに走って近付いて行った。

「え？

……あつ、丈さん!!」

タケル君も僕に気付いて、タケル君も僕に走って来てくれた。タケル君のお母さんも、タケル君の後ろに付いてきて僕の前に来

た。

「タケル君、君もお台場へ行くつもりなのかい？」

「うん……だけど、あの霧の所為でフェリーが出なくて。」

僕がタケル君に聞くと、タケル君は暗い顔をして霧を見ながらそう言ってきた。

……確かにあの霧じゃ、フェリーでお台場に行くのは無理だ。

絶対……とは言い切れないが、お台場の近くの海にもヴァンデモンの部下のデジモンが居るかもしれない。

フェリーで行くにはリスクが高過ぎる。

でも、確かにフェリーではお台場に行けないけど、ゴマモンなら！！

「オイラが進化して、二人を乗せてお台場に向かうよ！」

すると鞆の中からゴマモンが顔を出して、僕とタケル君に言ってきた。

それしか、お台場に行く方法はない！！

「タケル君、僕とゴマモンと一緒にお台場へ向かう！！」

「うん！！」「ダメよ、タケル！！」……ママ。」

僕がタケル君に言ってタケル君が返事をした瞬間、タケル君のお母さんがタケル君を止めてきた。

タケル君のお母さんの顔は、不安で一杯の顔をしてタケル君を見ていた。

タケル君のお母さん……

「何でタケル迄無茶をするの？
タケルは私と一緒に此処に居なさい！！」

タケル君のお母さんは、不安そうな顔をしながらタケル君の手を握った。

だけどタケル君は、タケル君のお母さんの手を無理矢理離した。

「嫌だ！！」

パパやお兄ちゃんが危険な目に遇ってるのに、僕だけ安全な所に居るなんて……そんなの嫌だ！！」

「タケル……」

タケル君は、タケル君のお母さんの目を真剣に見ながらそう言った。

タケル君のお母さんは、困った顔をしてタケル君を見た。

……よし！！

「タケル君のお母さん、僕にタケル君の事を任せてくれませんか？」

「えっ？」

僕がタケル君のお母さんにそう言うと、タケル君のお母さんは驚いた顔をして僕を見てきた。

僕はタケル君のお母さんの目を、真剣に見ながら話し始めた。

「僕達の仲間が今、お台場で戦っているんです！！」

僕が責任を持ってタケル君を護りますから！！

お願いします、僕にタケル君を任せてください！！」

僕は頭を下げて、タケル君のお母さんに頼んだ。

タケル君も、僕達と同じ選ばれし子供の一人なんだ。

ヴァンデモンに勝つ為には、選ばれし子供が全員揃わないといけないんだ!!

僕が頭を下げると、タケル君のお母さんは少し間を開けて言った。

「……………分かりました。

タケルの事、よろしくお願いします。」

するとタケル君のお母さんは、僕にそう言って頭を下げてきた。

「任せてください、僕が責任を持ってタケル君を護ります!!」

「ママ、ありがとう!!」

僕はもう一度タケル君のお母さんにそう言って、タケル君はお礼を言った。

僕達はそう言った後、人込みを抜けて波止場に来た。

「ゴマモン、進化だ!!」

僕がそう言うと、ゴマモンは鞆の中から海に出て、僕のデジヴァイスが光り出した

「ゴマモン進化ー!!」

……イツカクモン!!」

ゴマモンはイツカクモンに進化して、僕達に頭を向けてきた。
他の人達は、イツカクモンの姿を見て驚いた声を出していたが、

今は気にしている時間は無い！！

僕とタケル君は、イッカクモンに乗ってお台場に向かった。

第二十四話だよ！（後書き）

次回はズドモンの話です！

お楽しみにー！！

第二十五話だよ！（前書き）

やはり今回も話が急だ・・・

気にしない方どうぞ

第二十五話だよ！

side 丈

僕はタケル君は今、イッカクモンに背中に乗ってお台場を目指している。

すると、僕達の前に大きな橋・レインボーブリッジが見えてきた。

「レインボーブリッジが見えてきたぞ。」

僕は霧で隠れていたレインボーブリッジを見て、タケル君とパタモンに言った。

僕がそう言っていると、パタモンの顔が急に険しくなった。

「……！？」

何か……聞こえる。」

パタモンが険しい顔をしながらそう言ったので、僕達は耳に神経を集中させてパタモンが聞いた音を聞こうとした。

ぐああああああ……

……確かに何か聞こえる。

何か……怪物の声の様な……そんな音が聞こえる。

「！？

じよ、丈、橋にデジモンが！！」

な、何だって！？

イッカクモンがそう言ったので、僕達は霧で隠れているレインボ

ーブリッジを目を細めて見た。

霧の所為でレインボーブリッジの影しか見えないなあ……

……………！？

イツカクモンがレインボーブリッジに近付くと、レインボーブリッジに体を巻き付けている赤い竜が居た。

「あ、あれはメガシードラモンだ！！」

パタモンがレインボーブリッジに体を巻き付けている竜・メガシードラモンを見てそう言った。

こ、コイツは、ヴァンデモンの部下に違いない！！

「イツカクモン、メガシードラモンを倒すんだ！！」

「分かった、ハンフーバルカン！！」

僕がイツカクモンに指示を出すと、イツカクモンは僕の指示に従ってメガシードラモンに必殺技の“ハンフーバルカン”を放った。

ドカンドカンドカンッ！！！！

イツカクモンが放った“ハンフーバルカン”は、全部メガシードラモンに直撃した。

ぐあああああ！！

しかし、メガシードラモンはダメージが無いみたいで、僕達に大きな声で叫んできた。

そしてメガシードラモンは、角から電気を僕達に向けて放ってきた。

「「「うわあああああ！！！？」」「」」」

僕達はメガシードラモンの攻撃を喰らい、僕とタケル君はイツカクモンの背中から海に落ちた。

僕が海の中で目を開けると、イツカクモンは沈んで行って、パタモンは海には居なかった。

タケル君は海に落ちて焦っているから、満足に泳げていない。

僕は近くに沈んでいた木を持って、タケル君に近付いて木をタケル君に持たせた。

「タケル！！？」

「ゲホッゲホッ……丈さん？」

顔を海から出すと、パタモンが空を飛んでいて、タケル君を心配してタケル君に近付いていた。

……良かった……タケル君は無事なんだね……

「僕は君のお母さんに約束したから……。

“君を護る” って約束したから……。

僕はもう……無理かもしれない………」

「丈さん！！？」

僕がそう言う……タケル君とパタモンが……僕に心配そうな顔をしていた……

もう……意識が………」

「君は……………生きるんだよ……………」

僕はそうタケル君に言っ……………海に沈んだ……………

……………良かった……………タケル君を護れて……………

僕がそう思っ……………目を閉じた瞬間、僕の紋章が光り出して隣で沈んでいたイツカクモンの体が光り出した。

「イツカクモン超進化ー！！！」

……………ズドモン！！！！」

イツカクモンはズドモンに超進化して、僕達を背中に乗せて海面に出た。

「丈さん！！？」

タケル君とパタモンもズドモンの背中に乗っ……………僕に近付……………てきて心配……………してきた。

「ゲホッゲホッ……………僕は大丈夫……………ズドモン、メガシードラモンを倒すんだ！！」

僕がズドモンに……………言うと、メガシードラモンは僕達に突っ……………込……………ん……………できた。

……………だけ……………ズドモンはメガシードラモンに焦……………る……………事……………なく、……………右手……………に……………持……………って……………いた……………ハン……………マー……………を……………上……………に……………上……………げた……………。

「ハンマースパーク！！！！」

ズドモンは……………そう……………叫……………んで……………ハン……………マー……………を……………海……………に……………叩……………き……………つ……………けて……………、……………その……………衝……………撃……………で……………生……………まれた……………火花……………が……………メガ……………シード……………ラ……………モン……………に……………方……………に向……………か……………つ……………て……………い……………き……………、……………メガ……………シード……………ラ……………

モンに当たった。

ぐわああああ………

メガシードラモンは悲鳴をあげ、0と1のデータとなって消えていった。

「急ごう、皆の事が心配だ!!」

僕達はズドモンに乗って、お台場に向かった。

第二十五話だよ！（後書き）

次回は丈達と太一達の話です

お楽しみにー！！

第二十六話だよ！（前書き）

丈、太一視点です。

かなり無理矢理ですが気にしないでください

第二十六話だよ！

side 丈

メガシードラモンを倒した僕達は、ズドモンの背中に乗ってお台場に向かっている。

「ん？

……！！？」

じよ、丈さん、あそこに誰かが浮かんでるよ！！」

タケル君が僕の横に来て、海に浮かんでいる誰かを指差しながら僕に言ってきた。

ま、まさか、ヴァンデモンの手下にやられたのか！？

「ズドモン、彼達を助けるんだ！！」

「分かった。」

僕がズドモンに指示を出すと、ズドモンは海に浮かんでいる人達の所へ行き、手で彼達を海から自分の甲羅に乗せた。

僕達は、ズドモンが乗せた彼達を横に寝かせてよく見た。

すると彼達の正体は……

「デ、デジモン！？」

薄い赤色の体をしたデジモン・魔法使いの様な格好をした二体のデジモンだった。

見た所、二体は海で活動するデジモンでは無いと思う。

ヴァンデモンの手下だとしても、何故海に浮かんでいたんだ？

「ん……………んん……………こ、此処は？」

僕が考えていたら、魔法使いの様なデジモンが目を覚まして、体を起こして周りを見渡していた。

するとタケル君が、魔法使いの様なデジモンに近付いた。

「ねえ、君はヴァンデモンの手下なの？」

タケル君が、魔法使いの様なデジモンに質問した。

……………って、タケル君！？

余りにもストレート過ぎるよ！！

僕がタケル君に心の中で突っ込んでいると、魔法使いの様なデジモンは僕とタケル君を交互に見た。

……………何故だ？

「……………否、私はテイルモンの部下のウィザーモン。

今はヴァンデモンとは敵同士だから、安心してくれ。」

魔法使いの様なデジモンは、僕達に自己紹介と自分の立場を教えてくれた。

あのテイルモンの部下なのに、ヴァンデモンの敵？

……………意味が分からないな……………

僕が考え込んでいると、ウィザーモンが説明してくれた。

「……………テイルモンは八人目の選ばれし子供のデジモンなんだ。」

・

・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

な!!??

「な、なんだってエエエエ!!?」

ウィザーモン、今、君は凄い事をカミングアウトしたよ!!?、しかし、テイルモンが八人目のデジモン……

「だから、私とテイルモン・九人目の選ばれし子供と一緒に、ヴァンデモンが持っている“光の紋章”を取りに行った。」

・

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

きゅ、九人目だってエエエエ!!??

「じゃ、じゃあ、コッチのデジモンは……」

「九人目のデジモンだ。」

……だが昨日、ヴァンデモンの所為で九人目と離れ離れになってしまった。

しかし、紋章は此処にある。」

ウィザーモンはそう言って、僕達に“光の紋章”を見せてきた

「頼む、速くお台場に向かってくれ!! じゃないとテイルモンと九人目が!!」

ウィザーモンは真剣な目で僕に頼んできた

「分かってるさ。僕達も今、お台場に向かっている。だけど、焦ったって何も出来ない。だから、少し待っててほしい。」

まだ、ヴァンデモンの部下がこの近くに居るかもしれない

相手を警戒しながら進めば、無駄な戦闘も避けられるし無駄な時間も使わなくてするしね・・・

僕がそう言うのと、ウィザーモンは納得してくれた顔をしてくれた

「・・・分かった。だが、出来るだけ急いでほしい。」

「分かったよ、ズドモン!!」

「分かった!!」

僕がウィザーモンにそう言ってズドモンに指示を出すと、ズドモンは僕の指示に従って泳ぐスピードを上げてくれた。

「……ねえ、ウィザーモン？」

するとタケル君が、ウィザーモンに話し掛けた。

「……何だ？」

……タケル君、何を聞くんだろう？

「八人目と九人目ってどんな子なの？」

あつ、確かにそれは僕も気になるな……

「……八人目はお前達の仲間である八神 太一の妹、八神 ヒカリ。
そして、九人目はその隣に住んでいる加藤 航だ。」

・

・

・

・

な、何だってエエエエ！！！？

ま、まさか太一の妹と、その幼なじみが八人目と九人目の選ばれし子供なんて……

僕が驚いていると、ウィザーモンは暗い顔をして話し出した。

「私達は昨日、ヴァンデモンの技を喰らっている。

。私とコロナモンはデジモンだから大した怪我では無いが、九人目・航は人間だ。

きつと、何処かを怪我しているに違いない！」

そ、それは大変だ！！

只でさえデジモンの技は強力なのに、完全体のヴァンデモンの技を喰らったら、怪我じゃ済まないぞ!!

「ズドモン、何回もすまないが全力でお台場に向かってくれ!!」

「良いのか、丈？」

僕は謝って指示を出すと、ズドモンは僕に聞いてきた。

確かに全速力で向かえば、ヴァンデモンの手下にバレる可能性が上がる……

だけど!!

「嗚呼！」

もし、怪我をしている状態でヴァンデモンに捕まったりしたら、大変な事になる!!

だから、全力でお台場に向かってくれ!!」

「敵の事なら僕とパタモンに任せて!!

行くよ、パタモン!!」

「うん!!」

僕がズドモンにそう言うと、タケル君とパタモンが僕の隣に来てズドモンにそう言った。

すると、タケル君のデジヴァイスが光り出した。

「パタモン進化ー!!

……エンジェモン!!」

パタモンはエンジェモンに進化して、空を飛んで辺りを警戒し始

めた。

「分かった！

それじゃあ、しっかり掴まって！！」

ズドモンは泳ぐスピードを上げて、僕達はお台場に急いで向かった。

side 太一

俺はずっと、マンシヨンの外を警戒しながら見ている。

「「太一ー！！！」」

すると上と前の道から、バードラモンとガルルモンに乗った空とヤマトがやって来た。

「どうしたんだ！？」

「実はさっき……」

（説明中）

「……ってな事があったの！！！」

「その話は本当なんですか？」

「!？」

後ろを見ると、涙を流しているヒカリが立っていた。

「ひ、ヒカリ!!」

こ、これはだな!!」

「!？」

全員伏せろ!!」

ヤマトがそう叫んだので、俺達はその場で伏せぐと、何かの攻撃が俺達の上を通った。

「ちっ、外したか。

まあ良い。

速く八人目を連れて行けば良いのだからな。」

声のした方を見ると、グレイモンを傷つけたデジモンが居た。

……待てよ……アイツ、今、八人目って……まさか!？」

「現れろ!!」

タスクモン、スナイモン、バケモン!!」

デジモンがそう言うのと、沢山のバケモン・タスクモン・スナイモンが現れた。

「お前達にヒカリちゃんは渡さない!!」
ガルルモン!!」

「これ以上、私達の仲間に手を出させない!!
バードラモン!!」

ヤマトと空がそう叫ぶと、二人のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「ガルルモン超進化ー!!!!」
「……ワールガルルモン!!!!」

「バードラモン超進化ー!!!!」
「……ガルダモン!!!!」

二体は超進化してスナイモンとタスクモンの方へ向かった。

「俺達も行くぞ、アグモン!!」

「今度は負けない!
アグモン進化ー!!」
「……グレイモン!!」
「グレイモン超進化ー!!!!」
「……メタルグレイモン!!!!」

俺もアグモンをメタルグレイモンに超進化させ、メタルグレイモンは死神の様なデジモンの方へ向かった。

「我々は八人目の所へ……」

バケモン達はヒカリの所へ行こうとした。
だが……

「ムーンナイトボム!!」

突然現れたデジモンが、バケモンを攻撃しヒカリを守った。

「太一君、早く航君を助けに行かないと!!」

そのデジモンの正体は、航のデジモンのレキスモンだった。

「メタルグレイモン、速く決着をつけてくれ!!」

「わかった、太一」

俺がメタルグレイモンにそう言うと、メタルグレイモンは頷いて死神の様なデジモンを睨み付けた。

「ふん、俺達を甘く見るな!!
現れろ!!」

ギザモン、ダークティラノモン!!」

死神の様なデジモンがそう叫ぶと、ダークティラノモンとギザモンが現れた。

「クソっ、これじゃあ限りがない!!
ワーガルルモン!!」

「お願い!!
ガルダモン!!」

「頼む!!」

メタルグレイモン!!」

「ギガデストロイヤー!!!!」

「カイザーネイル!!!!」

「シャドーウイング!!!!」

俺達が三体のデジモンに叫ぶと、三体は必殺技をデジモン達に放ち、必殺技はデジモン達に直撃した。

「やったか!？」

俺達は勝利したと思い、緊張を解いた。
だが……

「「「ぐわあああああ!!!!」」」

メタルグレイモン達は煙の中から攻撃を喰らい、ぶっ飛ばされてしまった。

「メタルグ「うわああああ!!」や、ヤマト!？」

大丈「キヤアアア!!」そ、空!？」

煙の中から黒い手によって、ヤマトと空が捕まった。

「ふっふっふ、この程度で我々が負けると思ったのか？

……舐めるんじゃないぞ、人間!!」

煙の中から死神の様なデジモンが、手に持った鎌を俺の首元で押

さえながら叫んできた。

「太一ー!!」

や、やばい、このままじゃあ……死んじまう!!
と、どうする事も出来ないのか!?

「待って!!」

すると突然、死神を止める声が聞こえてきたので、俺は声のする方に顔を向けた。

そこには、真剣な顔をしたヒカリが立っていた。

「ヒカリ、何してんだ!!」

速く逃げろ!!」

「黙れ、人間!!」

ゴスッ!!

「グハッ!!」

俺がヒカリにそう叫ぶが、俺は死神の様なデジモンに殴られた。

「私が八人目!!」

私は貴方達に付いて行くから、もうこれ以上誰も傷付けないで!!
!!」

「……よからう、なら我々に付いてくるんだな。」

するとヒカリは、紫の球体に包まれた。

「ひ、ヒカリイイイ！！！！」

ヒカリはデジモン達と一緒に、フジテレビに向かって飛んで行った。

俺達はヒカリによって救われた……

「チクショウ！！！！」

俺は道路を、力一杯に殴った。

「俺は、俺はまた救えなかった！！」

俺は……俺は何の為に此処に来たんだ！！

結局俺は、航も、ヒカリちゃんも救えなかった！！

クソッ！！

クソオオオ！！！！」

ヤマトも、後ろに在るマンションを悔しがりながら殴った。

「二人とも、しっかりしなさい！！」

ヒカリちゃんはフジテレビに連れて行かれた。

……だったら、航君もそこに居る筈よ、今から行けば間に合う筈よ！！

こんな所で後悔してる時間が勿体ないわ！！」

……空……

「ありがとな、空。お前の言う通り、今から行けば間に合う筈だ。お前の言う通り、今から行けば間に合うはずだ。行くぞ、メタルグレイモン！！！！」

「分かった、太一！！」

「二人を助けに行くぞ、ワーガルルモン！！！！」

「当たり前だよ、ヤマト！！」

「最終決戦よ、ガルダモン！！！！」

「今度は負けないよ。
頑張ろう、空！！」

俺達はフジテレビに向かった。

第二十六話だよ！（後書き）

次回はミミ、光子朗の話です

お楽しみに！！

第二十七話だよ！（前書き）

凄いご都合主義・・・

何か最近すいません・・・

次回からもっと頑張ります

第二十七話だよ！

side 光子朗

僕はテントモンと一緒に、無事にフジテレビに来ました。

「……やはり、此処もヴァンデモンの手下で一杯だ。」

僕はヴァンデモンの手下を上手く躲けて行き、フジテレビの放送室に来た。

しかしそこには、誰か人間が居た。

「!？」

だ、誰だ!!」

電気が付いていなかったが、影などから大人だと分かりました。

「待ってください、僕は泉 光子朗。

人間です!!」

僕がそう言うと、その人はコッチにゆっくり歩いて来た。

「すまない、私は石田 裕明。

フジテレビの報道部のディレクターをしている。」

石田って事は……ヤマトさんのお父さんなんですか？

……ってそれより、報道部って事は!？」

「すみません、外と連絡する事は出来ませんか!？」

もしこの事を外に連絡出来れば、何か対策が出来る筈です!!
しかし、返ってきた答えは……

「……それが出来ないんだ。

さっきからやっているんだが、全ての機械が動かない。」

NO……でした。

「じゃあ、一体どうすれば……」

ドカアアアアアン!!

僕が考えていたら、上から大きな爆発音が聞こえてきた。

「一体何が起こったんです!?!」

「光子朗はん、ヴァンデモンが乗り込んで来たでエ!!」

僕が焦りながら大きな声で聞くと、テントモンが教えてくれた。

「ヴァ、ヴァンデモンだって!?!」

ま、まさか、八人目と九人目を見つけたのか!?!

「何が起こったんだ!?!」

僕が自問自答をしていると、石田さんが何が起こったか分からない顔をして僕に聞いてきました。

「この問題を起こした張本人が此処に乗り込んで来たんです!! 速く行かないと、誰かが殺されてしまうかもしれないんです!!」

「な!?!」

わ、分かった、私に付いて来てくれ!!」

僕は石田さんに案内され、ヴァンデモンの所へ向かって行きました。

side ミミ

私はリリモンと一緒に、ヴァンデモンを後を追いつけてる。

「このままじゃあ、九人目が!!」

九人目は私達の為に、自分を犠牲にして助けてくれた……
だけど死んだらきっと、誰かが悲しむ筈、いえ、絶対に悲しむ!!
私は誰かが悲しむ姿なんか見たくない!!
だから私は、全速力で走ってヴァンデモン追いつけている。

「此処は……」

ヴァンデモンが向かった所は、私もよく知ってるフジテレビだった。

「……速く行かないと!!」

「「「「ミミ(君)(ちゃん)(さん)!!!!」」」」

私がフジテレビに入ろうとした時、皆が走って私の前にやって来た。

「み、ミミちゃん!!」

ヴァ、ヴァンデモンは何処に!？」

太一さんが、私の肩に手を置きながら私に聞いてきた。
怖い顔をしていたけど、よく見たら涙を流した跡が在った。

「ヴァ、ヴァンデモンならこん『ドカアアアアアン!!』!？」

私がヴァンデモンの居場所を言おうとしたら、フジテレビから大きな爆発音が聞こえてきた。

「アソコに、テイルモンがいる筈だ!!」

魔法使いみたいな人が、フジテレビを指差しながら大きな声で言った。

……この人、誰だっけ？

「丈先輩、その人は？」

空さんが、私と同じ思った事を丈さんに聞いてくれた。

「私はウィザーモン。」

テイルモンの部下だ。」

「俺の名前はコロナモン！」

航のパートナーデジモンだ!!」

……あれっ？

航って九人目の名前よね？

確か九人目のデジモンは、レキシモンだったと思うんだけどな……

「そんな事はどうだって良いだろ!!」

速く行かないと航とヒカリがヴァンデモンに殺されちゃう!!」

太一さんの言葉で皆が真剣な顔をした。

「今から階段を上っていたら時間が足りない!!」

メタルグレイモン!!!」

太一さんはメタルグレイモンに乗って、フジテレビの屋上に向かって行った。

「俺達も太一も「キシヤアアア!!!」くっ、時間が無いのに!!!」

私達も行こうとしたら、スナイモンとタスクモンが私達の前に現れた。

「ヤマト、此処は俺に任せてくれ!!!」

「オイラも手伝うぜ!!!」

「頼む、ワーガルルモン!!!」

「ありがとう、ズドモン!!!」

スナイモンとタスクモンを二体に任せ、私達は急いで屋上に向かった。

第二十七話だよ！（後書き）

次回は遂にエンジェウーモンが！？

お楽しみに！！

第二十八話だよ！（前書き）

少しグロいシーン？がありますので御了承ください

第二十八話だよ！

side航

俺とテイルモンは、ヴァンデモンに無理矢理フジテレビに連れて来られた。

「まずは貴様、テイルモンに罰を与えないとな。」

そう言つてヴァンデモンは、必殺技の“ブラッディーストリーム”でテイルモンを攻撃しようとした。

「危ない！！」

グハッ！！！！」

俺はテイルモンを庇い、代わりに俺がヴァンデモンの必殺技の“ブラッディーストリーム”を喰らった。

しかも、攻撃を喰らった箇所が左の脇腹だった為、血が服に滲んで出てきた。

「航、何故私を庇った！？」

……何故つてお前、そんなの決まってるじゃんかよ……

「お前が傷付けば……ヒカリちゃんが……ヒカリちゃんが悲しむからだよ。」

「フッフ、美しい友情だな。」

だが、貴様等の言ったヒカリが到着した様だ。」

「なん……だと？」

俺は霞んできた目を大きく開け、ヴァンデモンの視線の先を見た。

「ヒカリ………ちゃん………」

そこには、ファントモンに捕まったヒカリちゃんが立っていた。

「……!？」

わ、航君!!!!」

ヒカリちゃんは俺に気付き、俺の前迄走ってきた。

「航君、血が出てる!!」

速く病院に行かないと死んじゃうよ!!!!」

ヒカリちゃんは泣きながら俺にそう言ってきた。

「フッフ、心配しなくても貴様等は同じ場所に行くんだ。

仲良く死ぬんだな!!」

ブラdd「メガブラスター!!!!」クッ!!!？」

ヴァンデモンが必殺技の“ブラッディーストリーム”を俺達に放とうとした瞬間、大きな雷の固まりがヴァンデモンの邪魔した。

俺は、だけを雷が来た場所に無理矢理目を向けた。

そこには、空を飛んでいたカブテリモンが居た。

「カブテリモン、彼等を護るんです!!!!」

「はいでんがな、メガブラスター!!!!」

「クッ!!」

ヴァンデモンは、カブテリモンの必殺技の“メガブラスター”を避ける為に、窓ガラスを割って外に出て行った。

「……!？」

ガハッ!!!」

安心したのか、それとも体が限界だったのか、ドチラかは分からないが、俺は口から血を吐いた。

「!？」

わ、航君!!」

「い、石田さん!!」

は、速く応急処置を!!!!」

「分かった!!」

俺は方膝を付き、口から血を吐き続けている。

「グフッ!!」

ハア……ハア……!？」

ガハッ!!」

「航君……死なないで……お願い。」

ヒカリちゃんが泣きながら、俺にそう言ってきた。

「……と、取り敢えず応急処置は済んだ!!
直に落ち着くだろう。」

「ハア…ハア…あ、ありがとうございます。」

俺は石田さんにお礼を言い、外に向かって行った。

「ど、何処に行くつもりなんだ!？」

石田さんが俺の肩を掴んで、不安そうな顔をして俺に聞いてきた。

「勿論、ヴァンデモンの所にですよ。ハア……ハア……」

「な、何をバカな事を言っているんだ!!？」

アイツは他の人に任せて、君は安静にしておくんだ!!」

……ありがとうございます、他人の俺の事を心配してくれて……
……ですが!!

「俺はアイツに勝っていない!!」

ヴァンデモンと言う運命に勝てなければ、俺はこの先、ずっと勝てない気がするんです!!

だから俺は、ヴァンデモンの所へ行きます!!」

俺がそう言うと、石田さんは俺の肩から手を離した。

「航君が行くなら私も行く!!」

「ヒカリが行くなら私も行くわ。
航には色々と借りがあるしね。」

……ありがとう、ヒカリちゃん、テイルモン……

「カブテリモンと僕が、ヴァンデモンの所迄連れて行きます!! カブテリモンに乗ってください!!」

俺達は光子朗さんの指示に従って、急いでカブテリモンに乗った。

「頼みます、カブテリモン!!!」

「はいでんがな!!」

俺達はヴァンデモンの所に向かった。

………

………

………

……

外に出るとそこには、攻撃を全く喰らっていないヴァンデモンと、傷だらけの太一さん達が居た。

「太一さアアん!!」

光子朗さんが叫ぶと、太一さん達がコッチを向いた。

「航、ヒカリ!!!」

「お兄ちゃアアん!!」

カブテリモンが地面に付くと、ヒカリちゃんは太一さんに抱き付いた。

「心配を掛けました。」

「気にするな、お前は約束を守ってくれた。

無事で何よりだ!!」

……だが、アイツを、ヴァンデモンを倒さない限り、俺達に未来は無い!!」

「……太一さん、アイツは、ヴァンデモンは俺とヒカリちゃんに任せてくれせんか?」

アイツ、ヴァンデモンには、色々とお礼をしないとな……

「……分かった、信じてるぞ!!」

太一さんはそう言って、メタルグレイモンの背中に乗ってこの場を離れた。

「ヒカリちゃん、俺と一緒に戦ってくれるか?」

勝手に決めてしまったが、もし、嫌なら無理して戦ってほしくない。

「大丈夫!

私、航君が居ると戦える。」

だから、頑張ろうね!!」

……ヒカリちゃん……

「ありがとう、ヒカリちゃん。

コロナモン!!!!

ルナモン!!!!」

俺が上を向いて二体を呼ぶと、二体が空から落ちて来て俺の前に来た。

「無事だったんだな、航!!」

「心配かけたな、コロナモン。」

俺がコロナモンに申し訳なさそうな顔をして言うと、コロナモンは俺に笑ってくれた。

「なあに、航なら生きてるって信じてた!!」

……コロナモン……

「ありがとな!」

俺がコロナモンにお礼を言うと、ルナモンが俺に抱き付いてきた。

「航君、アイツを倒して皆で楽しもうね!!」

……ルナモン……

「勿論だ、ルナモン!!」

俺がルナモンにそう言うと、俺達の前に居るヴァンデモンが突然、不気味な声で笑いだした。

「フッフ、私を倒す?

……笑わせるな!!

貴様等の運命は“死”だけだ!!」

……俺達の運命は死……だけだと?

「もし、それが俺達の運命なら……俺はその運命を乗り越える!!
運命は……運命は……運命は自分で切り開く物だから!!!!」

「私は航君を支える!!」

例え暗い世界に閉じ込められたとしても、私が航君の光になる!!
!!」

俺とヒカリちゃんがそう叫ぶと、“運命の紋章”と“信頼の紋章”
”が光り出した。

「!?

ヒカリ、受け取れ!!」

ウィザーモンが、“光の紋章”をヒカリちゃんに投げた。

“光の紋章”も、俺の“信頼の紋章”と“運命の紋章”と同じで
光っていた。

「クッ、この光は!?!紋章が覚醒したとでも言うのか!?!?!」

ヴァンデモンは、手で顔を隠しながら大きな声を出して驚いた。

「コロナモン！！」

ルナモン！！」

「テイルモン！！」

「進化だ（よ）！！！！！！」

俺とヒカリちゃんがそう叫ぶと、紋章は更に光り出し、デジヴァイスの色が変わった。

「コロナモン進化ー！！」

……ファイラモン！！

ファイラモン超進化ー！！！！

……フレアモン！！！！」

「ルナモン進化ー！！」

……レキスモン！！

レキスモン超進化ー！！！！

……クレシェモン！！！！」

「テイルモン超進化ー！！！！」

……エンジェウーモン！！！！」

コロナモンはフレアモンに、ルナモンはクレシェモンに、テイルモンはエンジェウーモンに超進化した。

「ば、バカな！？」

ヴァンデモンの顔に余裕の笑みが消え、怯えた顔をしながら三体の完全体を見ていた。

「ヴァンデモン、本当の勝負はこっからだ!!」

ヴァンデモン、最後の戦いを始めようぜ!!

第二十八話だよ！（後書き）

次回はヴァンデモン（、、、、、、）戦最後の戦いです

お楽しみに！！

第二十九話だよ！（前書き）

今回でヴァンデモン編は終わりです

次回からはヴェノムヴァンデモン編です

それではどうぞ！！

第二十九話だよ！

side航

「クッ、まさか紋章の力が覚醒するとは！！？」

ヴァンデモンの顔は余裕の笑みが消えて、俺達を睨みながらそう叫んできた。

「ヴァンデモン、貴様は調子に乗り過ぎた。」

「現実世界の人を苦しめ、何の罪も無いデジモン達を殺した。そして何より、航君を傷付けた！！」

「お前には、罪を償ってもらおう！！
セイントエアー！！」

三体がヴァンデモンにそう叫び、エンジェウーモンは必殺技の一つの“セイントエアー”を使った。

「力が……漲ってくる！！
太一、僕、未だ戦えるよ！！」

「私もよ、空！！」

「俺もだ、ヤマト！！」

「オイラだって！！」

「わてもや！！」

「私だって!!」

「僕もさ!!」

デジモン達の体は、エンジェウーモンの“セイントエア”の力で回復した。

「ん？」

……あれ？」

「どうしたの、航君？」

俺は体に異変を感じて間抜けの声を出すと、ヒカリちゃんが不安そうな顔をしながら俺を見てきた。

俺は服を捲り上げて、ヴァンデモンに傷付けられた場所を触った。

「……傷が……傷が塞がってるよ。」

俺は包帯を外して、傷付けられた場所を見た。

だが、血は完全に止まっていて、それどころか傷跡も完全に無くなっていた。

「これもエンジェウーモンの力だね!!」

ヒカリちゃんは、俺に頬笑みながらそう言ってきた。

……デジモンだけでなく、人間も傷も回復させるなんて……

「ありがたいな、エンジェウーモン!!」

俺はエンジェウーモンにお礼を言うと、エンジェウーモンは俺の

方に顔を向け頬笑んでくれた。

「瀕死だった九人目の傷迄……貴様等は死んで償ってもらおう!!」
ナイトレイド!!!」

ヴァンデモンは、蝙蝠を使って攻撃する必殺技の“ナイトレイド”
を俺達に放ってきた。

だが……

「ヴァンデモン、罪を償うのは貴様の方だ!!」
紅蓮獣王波!!!」

「航君の体に傷を付けた事を後悔しなさい!!」
ダークアーチェリー!!!」

「次に生まれてくる時は、もっと違った考えを持ったデジモンになるんだな!!」

ホーリーアロー!!!」

「ギガデストロイヤー!!!」

「シャドーウイング!!!」

「カイザーネイル!!!」

「ホーンバスター!!!」

「フラウカノン!!!」

「ハンマースパーク!!!」

「ヘブンズナックル!!」

フレアモンは必殺技の“紅蓮獸王波”を、クレシェモンは必殺技の“ダークアーチェリー”を、エンジェウーモンは必殺技の“ホーリーアロー”を、メタルグレイモンは必殺技の“ギガデストロイヤー”を、ガルダモンは必殺技の“シャドーウイング”を、ワーガルルモンは必殺技の“カイザーネイル”を、アトラカブテリモンは必殺技の“ホーンバスター”を、リリモンは必殺技の“フラウカノ”を、ズドモンは必殺技の“ハンマースパーク”を、エンジェモンは必殺技の“ヘブンズナックル”をヴァンデモンに放った。

そして十体のデジモンの必殺技は、ヴァンデモンの必殺技の“ナイトレイド”を打ち破り、ヴァンデモンに直撃した。

「ぐわああああああああ………」

ヴァンデモンは十体の必殺技を喰らい、叫びながら0と1のデータになって消えた。

第二十九話だよ！（後書き）

次回はヴェノムヴァンデモン編です

お楽しみに！！

第三十話だよ！（前書き）

今回からヴェノムヴァンデモン編です！！

それではスタート！！

第三十話だよ！

side 航

ヴァンデモンを倒した後、俺達はフジテレビを出て、フジテレビの広場に来ている。

「まずは……自己紹介ですね。

俺の名前は加藤 航です。

年はヒカリちゃんと同じです。

太一さんとヒカリちゃんとは、家が隣通しで幼なじみです。

皆さん、よろしくお願いします！！」

太一さん、ヤマトさん、ヒカリちゃん以外は初対面なので、俺は自己紹介をして頭を下げた。

「航君ね、私の名前は武之内 空。

太一とは幼なじみで、サッカー部に入ってるわ。

これからもよろしくね、航君！」

「はい、よろしくお願いします！！」

俺が自己紹介し終わった後、空さんが俺に自己紹介をしてくれた。

……無印では、太一さんと良い感じだったのに、何故02でヤマトさんと付き合ったのだろうか？

……太一さん、俺は太一と空さんが付き合うように裏方で頑張らせていただきます！！

俺は心の中でそう決心すると、丈さんが俺の前に来て自己紹介をしてくれた。

「僕は城戸 丈、六年だ。

将来は医者になる為に勉強している。

怪我の事に関しては、少なからず知識が在るから、怪我をしたら僕に聞いてくれ。」

「はい、ありがとうございます!!」

……確かデジタルワールドに行って、その知識で骨折しているオーガモンを治療したんだっけ……

この冒険が終わったら、医学に付いて少し聞いておこう。

俺がそう考えていたら、今度はミミさんが俺の前に来て自己紹介してきた。

「私は太刀川ミミ!

小学四年生なの!

航君のお陰でリリモン達は助かったわ。

ありがとうね!!」

「いえいえ、あれは俺が自分の強さに慢心して戦いを挑んで、その所為で、デジモン達が傷付くのを見ていられなくなって、俺が勝手にやった事ですから……」

ミミさんって確か、この冒険で沢山のデジモンの死を見て、一度心が折れるんだよね……

デジモン達を救いたいのが、もし原作通りに進まなかったら、もっと多くのデジモンが死ぬ可能性+現実世界を救えなくなる。

……幾らデジタマで復活すると言えど、死ぬと言う事は誰でも怖い。

俺は握りこぶしを作って、失敗しない様に心に決めた。

「おい、航。

お前、手から血が出てるぞ。」

太一さんに言われ、俺は自分の手の平を見た。

……力強く握っていた所為で、血が出たのか……

「早速僕の番だね。」

丈さんはそう言って、鞆の中から包帯を出して、俺の手に巻いてくれた。

「……これで良し！」

次からは、怪我をした鶴にはちゃんと言うんだぞ？」

「すいません……」

俺は丈さんに注意され、素直に謝った。

「全く……心配掛けるなよ。」

『それは太一^{さん}（はん）にも言える！』

「え、ええ！？」

「あはははははははははは！！！」

太一さんと皆の会話を聞いて、俺は大声を出して笑ってしまった。

「皆、次は僕が自己紹介するんだから、静かにしてよ！！！」

タケル君が少し怒りながら、皆の顔を見てそう言った。

「全くもう……僕は高石 タケル!!
年は航君とヒカリちゃんと同じだよ!!
これからもよろしくね、航君!!」

「よろしくな、タケル君。」

タケル君は、この中で一番希望の光を持ってるんだよね……
どんな絶望の中でも、決して希望の光が消える事が無かったから、
ピエモンに勝てたんだよね……

「最後に僕です。」

僕は泉 光子朗。

ミミさんと同じ年です。

……航君には沢山聞きたい事が在るんですが、良いですか？」

……初対面の人に向かって聞きたい事が沢山在るって……光子朗
さんらしいって言ったら光子朗らしいけどな。

俺は笑いながら直ぐに頷いた。

「まず、一つ目の質問です。」

君はどうして、パートナーデジモンが二体居るんですか？」

……最初から答えられない質問か……

別に答えても良いんだが、答えたって誰も信じてくれなさそうだしなあ……

俺は何も思い付かなかったもので、太一さんに目を向けた。

太一さんは俺の目を見て、理由を察してくれて俺に頷いてくれた。

「航はな、俺達と少し違った選ばれし子供なんだ。」

『俺（私）（僕）達と違った選ばれし子供？』

……お願いします、上手く誤魔化してください！！
俺は心の中で、太一さんが誤魔化してくれる事を願った。

「航の家族は、……航はずっとお台場に住んでいたんだ。
だから、俺達みたいに光が丘でのデジモン事件を見て、選ばれし子供になった訳じゃないんだ。」

……！？

そ、そうだ、あの話を俺が使えば！！

「じゃあ何で、航は選ばれし子供になったんだよ？」

「えっ……と、それはだな……」

ヤマトさんの突っ込みに、太一さんは言葉を詰まらせた。

……此処は、あの話をして誤魔化すしか無いな……

「そこからは俺が話します。」

……太一さん達、つまり皆さんが光が丘でデジモンと出会った日に、俺の家に在ったパソコンから二個のデジタマが現れました。

俺は親にバレない様に育てました。

そして生まれたのが、コロナモンの進化前である“サンモン”、ルナモンの進化前である“ムンモン”でした。

二体が生まれた後に、パソコンから二個のデジヴァイスと二個の紋章が出てきました。」

この話の大半は、『劇場版デジモンアドベンチャー102 前編

デジモンハリケーン上陸!!・後編 超絶進化!! 黄金のデジメンタル』に出てくるウォレスの体験を少し変えた話だ。

この話を聞いて、皆は納得した顔になった。

「成る程、光が丘だけじゃなくお台場にもデジモンが居たなんて……実に興味深いです。」

……光子朗さん、某二人で一人の仮面ライダーの相棒の口癖が出てますよ。

俺は心の中で光子朗さんに突っ込んで、少し離れた場所に居るヒカリちゃんを見た。

ヒカリちゃんは空をずっと見ていた。

俺はヒカリちゃんの所まで行き、ヒカリちゃんに話し掛けた。

「どうしたの、ヒカリちゃん？」

空ばかり見上げてさ？」

ヒカリちゃんが空を見上げている理由は知っているが、此处で俺が聞いとかなないと、ヴァンデモンが完全に死んでいない事が皆に伝わらないからな……

「霧が……晴れない。」

「な、何だって!？」

ヴァンデモンを倒したのに、霧が晴れないってどう言う事だ!？」

太一さんが、俺とヒカリちゃんの会話を聞いて焦った声で聞いてきた。

……確かこの後に、ゲンナイさんから“古代遺跡の予言”を教え

て貰うんだよな？

俺と言うイレギュラーが居るから、古代遺跡の予言も変わってる
かもしれない……

よく聞いとかないとなダメだな……

第三十話だよ！（後書き）

次回は古代遺跡の予言の話です

お楽しみに！！

第三十一話だよ！（前書き）

予言にまさかのイレギュラー！？

それではスタート！！

第三十一話だよ！

side 航

「一体どうすれば霧は晴れるんだ……？」

太一さんは、何時もの元気の在るじゃなく、元気が無い声で霧を見ながらそう言った。

「ウィザーモン、これはどう思う？（ボソツ）」

「多分だが、ヴァンデモンが完全に死んでないから霧が消えないんだと思う。（ボソツ）」

俺がウィザーモンにしか聞こえない位の小さい声で聞くと、ウィザーモンも俺にしか聞こえない位の小さい声で返事してくれた。

……だよなあ、やっぱりヴァンデモンは生きてるよなあ……

「皆さん、ちょっと僕の周りに集まってくださいー！！」

俺がヴァンデモンは生きてる事を改めて実感していると、光子朗さんが大声で俺達に言ってきた。

「取り敢えず行ってみますか……」

多分、否、確実にゲンナイさんのメールだな。

俺はそう思いながら、ウィザーモンと一緒に光子朗さんの所に行った。

……………

.....

.....

.....

「どうしたんですか、光子朗さん？」

俺が光子朗さんに話し掛けると、光子朗さんは笑顔で俺にパソコンの画面を見せてきた。

「たった今、ゲンナイさんからメールが来たんです！」

ゲンナイさんなら、この状況を解決する方法を知ってる筈です!!」

……信じるのは勝手ですが、そのメールは解決法じゃなくて予言を教えるに似たメールですよ。

俺は心の中で突っ込んでいたら、光子朗さんがパソコンのメールを開いた。

『久しぶりじゃな、選ばれし子供達!!』

「やいジジイ!!」

ヴァンデモンが死んだのに霧が晴れない、一体俺達の世界に何が起こったんだよ!!」

ゲンナイさんが俺達に挨拶をした瞬間、太一さんがゲンナイさんに切れた。

……太一さん、パソコンの画面に切れてもしようがないと思います。

そう思いながら皆の顔を見ると、皆も太一さんの行動を呆れなが

ら見ていた。

『落ち着くんじゃ、まずは八人目と九人目の顔が見てみたい。見せてくれんか?』

「……………分かったよ。

ヒカリ、航、コッチに来てくれ!」

「はい(うん)！」

俺とヒカリちゃんは太一さんに呼ばれたので、俺とヒカリちゃんは光子朗さんのパソコンの画面の前に来た。

『ホッホッホッ、お主等が八人目と九人目か。』

「八神 ヒカリです！」

「加藤 航です。」

俺とヒカリちゃんは、取り敢えずゲンナイさんに挨拶をした。

『成る程……………二人とも、良い目をしとる。

特に九人目、お主からは他の子供と違う感じがするが……………まあ、今は置いとくか。』

凄いな……………目を見ただけで俺がイレギュラーだって分かるなんて……………

……………やっぱ、デジタルワールドを守護する存在だからか?

「で、ジジイ!!」

「この世界で何が起こっているんだって聞いてんだよ!!」

……太一さん、少しは落ち着きましょうよ。

デジモン達にも呆れられてますよ……

『分かった、まずはヴァンデモンに付いてじゃ。』

……ヴァンデモンは未だ生きておる。』

『!?!?』

その言葉を聞いて、皆の顔が驚いた顔になった。

だが、俺とウィザーモンは驚かなかったぞ。

「な、何を言ってるんだよ!」

ヴァンデモンはあの時、俺達の目の前で完全に死んだのを、俺達は確認してるんだぞ!!」

ヤマトさんは大声を出して、ゲンナイさんの言葉を強く否定した。

……当たり前だよな、目の前で死んだのに生きてる筈が無いよな。最初は俺だっと思ったが、直ぐに頭を整理して理解したぜ。

『じゃがお主等の世界では、ヴァンデモンが使った霧が消えとらんのじゃろ?』

ゲンナイさんの言葉を聞き、顔を下げて皆は黙り込んだ。

『じゃからワシはお主等の力になろうと、古代遺跡の予言を教えに来たんじゃ。』

『古代遺跡の予言?』

ゲンナイさんがそう言うのと、俺とウィザーモン以外の皆が声を出して頭に？マークを浮かべた。

……古代遺跡の予言はどうなってるんだ？

俺と言うイレギュラーがこの世界に存在から、予言が変わってるかもしれないしな……

『おほん、それじゃあ教えるぞ。』

はじめにコウモリの群れが空を覆った。

続いて人々がアンデッドデジモンの王の名を唱った。

そして時が獣の数字を刻んだ時、アンデッドデジモンの王は獣の正体を現した。

天使達がその守るべき人の最も愛する人へ光と希望の矢を放ち、仲間を信頼する力と運命を乗り越える力が使われた時、奇跡が起きた。

これが予言だ。』

……おかしい……この予言はおかしいぞ。

本来、“信頼と運命の力が使われた時”と言う部分は俺が知っている予言には存在しない。

だが、この部分は俺の紋章の力を使わないといけない事は分かる。俺が黙って考え込んでいたら、太一さんが話し出した。

「全然分かんねえよ。」

何が言いたんだよ……？」

……確かに、原作を知っている俺も、最初に聞いた時は分からなかったな……

『ワシが言える事はこれ位じゃ。

頑張るんじゃぞ、選ばれし子供達イ!!!』

「おい、待って!!

ジジイ、ジジイ!!」

太一さんは、突然消えたゲンナイさんに大きな声で叫んだ。

ゲンナイさんの中途半端なアドバイスの所為で、皆の顔が余計にさっきよりも暗くなった。

『……………』

……き、気まずい……

皆が一瞬にして喋らなくなったし、皆が皆暗い顔だから凄く気まずい……

この空気から出たいので、俺は頑張って話題を皆に振った。

「と、取り敢えず一度家に帰りましょう!!

父さん達の事も心配ですし!!」

俺が皆にそう提案すると、皆の顔が少しだけだが元気になった。

「……父さんと母さんが心配だ。

俺、一度ビックサイトに行くよ。

……ヒカリ、俺と来るか?」

太一さんは原作通りビックサイトに行く様だが、ヒカリちゃんに

聞くなんて……やはり原作と展開が違ふみたいだ。

「ううん、私は航君と一緒に行くよ。」

幾らエンジェウーモンの力で傷が消えても、凄く不安だから……」

ヒカリちゃんは俺の顔を見ながら、太一さんにそう言った。

……心配してくれてありがとう、ヒカリちゃん……

「なら、僕の家に来ると良い。」

僕の親は医者だからね。

それに、包帯なんかを一応持って行った方が良さそうだしね。」

「ありがとうございます、丈さん。」

俺は丈さん頭を下げて、心の底から感謝の言葉を言った。

「僕は一度家に帰って、お父さんとお母さんを連れてビックサイトに行きます。」

「私もお家に帰って服を着替えて、ビックサイトに行くわ!」

「俺は太一同様、親父とタケルと一緒にビックサイトに行く。
だろ、親父、タケル?」

「嗚呼、私が車を運転すれば直ぐにビックサイトに着くからな!」

「うん!!」

「私もビックサイトに行くわ。
お母さんが心配だから……」

ヒカリちゃん以外の皆は、原作と同じ所へ行くのか……

「ウィザーモン、お前は どうする？」

テイルモンが、本来この場に居ない存在だったウィザーモンに聞いた。

「私は航と一緒にいきます。」

私は彼の事が気に入りましたから。
彼に死なれたら困りますしね……」

まあ、ウィザーモンがこの時点で生きてる事がイレギュラーだから、俺は何をしようと構わないが……

ってか、石田 彰ボイスでそう言われるとテンションが上がる……

「それじゃあ一時解散!!」

太一さんがそう宣言したので、俺達は一時解散した。

第三十一話だよ！（後書き）

次回はヴァンデモン復活！！

お楽しみに！！

第三十二話だよ！(前書き)

今回は短いですよ

楽しんでください

第三十二話だよ！

side 航

俺は丈さんとヒカリちゃん・テイルモンとウィザーモン・ゴマモンは今、一緒に丈さんの家に向かって歩いている。

コロナモンとルナモンは、デジヴァイスの中に入ってもらっている。

「しかし、古代遺跡の予言は何を言っていたのか、僕には全然分からなかったなあ。」

丈さんは、先程のゲンナイさんが教えてくれた古代予言の事を思い出しながら、俺達に聞こえる様に言ってきた。

確かに、あれは皆で協力し合って考えないと分からない予言だからな。

俺はそう思いながら、デジヴァイスを腰から外して、今の時刻を確認した。

時刻は午後5時02分24秒になった所だった。

「（確か、ヴェノムヴァンデモンが現れるのは、午後6時6分6秒だった筈だ………余り時間が無いな。）」

「着いた！

此処が僕の家だ！」

俺が考え事をしながら歩いていると、何時の間にか丈さんの家に着いていた様だ。

「取り敢えずそこで少し待っていてくれ、直ぐに包帯なんかを持って

来るよ。」

丈さんは俺達にそう言って、走ってゴマモンと一緒に部屋の奥に向かって行った。

「……航、ヴァンデモンは生きてると思うか？」

すると突然テイルモンが、俺にヴァンデモンが生きているかどうかを聞いてきた。

「……嗚呼。」

奴は、ヴァンデモンは絶対生きてる。

予言の通りならな……」

俺の事を知っている皆に言っても良いんだが、丈さんとゴマモンが聞いている可能性が在るから、本当の事は言えない。

俺は皆の顔を見て、目で皆に合図をした。

皆は俺の目を見て理解してくれのか、黙って頷いてくれた。

「ぎゃあああああああああ！！！！？」

すると突然、丈さんの悲鳴が聞こえてきた。

……多分、否、確実に押し入れの中で寝ていたお兄さんを見て驚いたのだろう。

「いやー、ごめんごめん。」

押し入れの中で寝ていたシン兄さんに驚いちゃって。

あはははははは！！！」

俺が予想していると、丈さんが笑いながら俺の予想通りの事を言

ってきた。

ティルモンとウィザーモンは呆れて溜め息を吐いて、ヒカリちゃんは何とも言えない表情をしていた。

「そ、そうだ!!」

わ、航君、コッチの部屋に来てくれないか？

傷口は塞がっていても、包帯をしておいた方が良さそうだしね。」

「はい。」

俺は素直に丈さんに付いて行って、ヤマトさんが巻いてくれた包帯を換えてもらい、新しい包帯を巻いてもらった。

その後、丈さんから風邪薬などの薬や包帯を少し貰った。

「さて、そろそろ東京ビックサイトに向かおう!」

丈さんが俺達にそう言ってきたので、俺達は丈さんの言葉に頷いて外に出た。

.....

.....

.....

.....

「!？」

な、何なんだだあれは!!？」

丈さんは、上に居るある物を見て大声で驚きながら叫んだ。

「あれは……コウモリか!？」

ウィザーモンの言う通り、空には大量のコウモリが飛んでいた。

「これが……予言の言っていた事なのか？」

「そうだテイルモン……予言が……古代予言が始まったんだ!!」

『!?!?!?』

俺の言葉を聞いて皆の顔が真剣になった。

「急ごう、次の予言でヴァンデモンが復活するかもしれない!!」

丈さんは俺達にそう言ってきたので、俺達は東京ビックサイトに向かって全速力で走り出した。

第三十二話だよ！（後書き）

次回はアンデッドデジモンの王が獣の姿をみせる

お楽しみに！！

第三十三話だよ！（前書き）

遂にヴェノムヴァンデモンとの戦いです！！

それではスタート！！

第三十三話だよ！

side 航

俺はヒカリちゃん・テイルモン・丈さん・ゴマモン・丈さんのお兄さん・ウィザーモンは、全速力で走って東京ビックサイトにやって来た。

外には既に太一さん達が、ヤマトさんのお父さんの車に乗っている所だった。

「太一さん！！」

俺は走って車に近付き、太一さんの名前を呼んだ。

そしたら太一さんは、窓から顔を出してくれて俺達を見てきた。

「俺達は今から、あのコウモリ達を追い掛ける！」

航達は父さん達の事を頼む！」

太一さんがそう言うと、車が動き出してコウモリ達を追い掛けて行った。

「お兄ちゃん」「」

「大丈夫だよ、ヒカリちゃん！」

太一さん達は必ず此処に帰ってくる。

だから俺達は、太一さんに言われた通りに父さん達を守らないと！！」

俺はヒカリちゃんの手を握りながら、ヒカリちゃんの顔を見てそう言った。

幾ら選ばれし子供と言えど、怖い物は恐いしヒカリちゃんは小学二年生だ（俺は体は小学二年だが、中身は既に大人だから）。

だから、俺がヒカリちゃんを守らないと！！

俺が笑いながらそう言うと、ヒカリちゃんの顔にも笑顔が戻った。

「ありがとう、航君。」

……ずっと手を握ってても良いかな？」

手を握る事でヒカリちゃんの恐怖が少しでも減るなら、俺は全然構わない。

俺は笑顔でヒカリちゃんに頷いた。

「……！？

航、6時6分6秒5秒前だ！！」

ウィザーモンが俺達にそう言ってきたので、俺達はデジヴァイスの時計を見た。

5

4

3

2

1

0

ドカアアアアアアン!!!

6時6分6秒になると、大きな爆発音が聞こえてきた。

俺達は爆発音のした方を見るとそこには、アンデッドデジモンの王であるヴァンデモンではなく、アンデッドデジモンの王が獣の姿になったデジモン・ヴェノムヴァンデモンが姿を現していた。

その大きさは、遠くからでも分かる位の大きさだった。

「あれは一体何なんだあ!?!」

隣にいた丈さんは、ヴェノムヴァンデモンの姿を見て驚いていた。

「あれはヴェノムヴァンデモン。」

ヴァンデモンが進化したデジモンですよ……」

「な!?!」

完全体の上に、未だもう一段回の進化が在ったのかあ!?!?」

丈さんがヴェノムヴァンデモンの強さを聞いて、更に驚いた声を出した。

「此処でじっとして居る訳じゃないだろ、航?」

テイルモンが何かを企んだ笑みを浮かべながら、俺の顔を見て聞いてきた。

……そんなの当たり前だろ！！

「勿論アイツの足止めに行くぜ！

コロナモン、ルナモン、行くぜ！！」

俺はコロナモンとルナモンをデジヴァイスから出し、デジヴァイスを二体に向けた。

「テイルモン、私達も行くよ！！」

ヒカリちゃんもデジヴァイスをテイルモンに向けた。

「待って、僕達も行くよ！！」

タケル君も東京ビックサイトから外に出てきて、パタモンにデジヴァイスを向けた。

すると、俺達のデジヴァイスと紋章（タケル君は除く）が光り出した。

「コロナモン進化ー！！」

……ファイラモン！！

ファイラモン超進化ー！！！！

……フレアモンー！！！！」

「ルナモン進化ー！！

……レキシモン！！

レキシモン超進化ー！！！！

……クレシェモンー！！！！」

「テイルモン超進化ー！！！！」

…………エンジェウーモン！！！！」

「パタモン進化ー！」

……エンジェモン！！！！」

俺はコロナモンをフレアモンに、ルナモンをクレシェモンに、ヒカリちゃんはテイルモンをエンジェウーモンに超進化させ、タケル君はパタモンをエンジェモンに進化させた。

「丈さん、俺達は太一さんの援護に向かいます！！」

「お父さんとお母さんをお願いします！！」

「必ず帰ってくるから！！」

俺はフレアモンに、ヒカリちゃんはエンジェウーモンに、タケル君はエンジェモンに乗りながら丈さんに言った。

「嗚呼、此処は僕達に任せてくれ！！」

だが、後で僕達も救助に行く！！

だから、無茶はしないでくれ！！」

「「「はい！！！！」」」

俺達は丈さんの言葉に大きな声で返事をして、太一さんの所へ向かった。

Side太一

「メタルグレイモン!!?」

俺達はヴェノムヴァンデモンの足止めをしているが、全くと言って良い程足止めになっていない。

「ワーガルルモン!!」

ヤマトがワーガルルモンに叫ぶと、ワーガルルモンはヴェノムヴァンデモンの体をよじ登り、顔の所迄行った。

「カイザーネイル!!」

ワーガルルモンは必殺技の“カイザーネイル”をヴェノムヴァンデモンの顔に放ったが、傷の一つも付いていなかった。

「!？」

ワーガルルモン、後ろだ!!」

「!？」

ぐわああああああ!!!!」

「ワーガルルモン」ぐわああああああ!!!!」メタルグレイモン!!?」

メタルグレイモンとワーガルルモンは、ヴェノムヴァンデモンの攻撃を喰らいうアグモンとガブモンに退化してしまった。

「「アグモン（ガブモン）！！！！」

俺とヤマトはアグモンとガブモンの場所に走って向かった。

「ごめん、太一……」

「今迄のデジモンより強いよ、ヤマト……」

アグモンとガブモンは、悔しそうに俺とヤマトに言った。

「!？」

太一さん、ヤマトさん、上！！！！」

光子朗に言われ上を向くと、ヴェノムヴァンデモンの足が俺達の上に来ていた。

俺達はもうダメだと思い、諦めて目を瞑った。
そしたら……

「紅蓮獣王波！！」

「ダークアーチェリー！！」

「ホーリーアロー！！」

「ヘブンズナックル！！」

その声が聞こえたので俺達は目を開けた。

「ぐあああああああああああ！！！！?」

そこには、悲鳴をあげながら倒れているヴェノムヴァンデモンと
……

「助けに来ましたよ、太一さん!!」

フレアモン達に乗っていた航達の姿が在った。

第三十三話だよ！（後書き）

今回は予言の答えが太一達に示される！！

そして、航がしなければならぬ事とは・・・

次回もお楽しみに！！

第三十四話だよ！（前書き）

無理矢理です・・・

本当にすいません・・・

第三十四話だよ！

side 航

「太一さん、ヤマトさん、大丈夫ですか!？」

俺とヒカリちゃんとタケル君は、デジモンから降りて太一さん達の所に向かった。

「助かった、ありがとう。」

……だが、アイツは強い。」

太一さんは、ヴェノムヴァンデモンを睨み付けながらそう言った。確かにヴェノムヴァンデモンは究極体なので、完全体のメタルグレイモンやワールガルモンじゃ歯が立たない。

だから、予言の通りにアグモンとガブモンが究極体に進化しなければ勝てない……

俺はそう思って、光子朗さんの所に向かった。

「光子朗さん、俺達で予言を解説しましょう。」

「……予言ですか？」

俺が光子朗にそう言うと、光子朗さんは間を開けて俺に聞いていた。

「はい。」

今迄起こった事は、全て予言の通りだった。

だけど、最後の予言は未だ起こっていない……。

最後の予言に『奇跡が起こった』と在るでしょ？

だったら、それに賭けてみましょう!!
このまま戦い続けたって、俺達に勝機は在りませんよ。」

俺は光子朗さんに伝えた。

最後迄諦めちゃダメだと言う事を……

希望を捨てちゃダメだと言う事を……

希望の光を見失っちゃダメだと言う事を……

俺の想いが伝わったのか、光子朗さんだけじゃなく、太一さんとヤマトさんの目にも光が戻った。

「ありがとうございます!!」

それじゃあ、早速予言を解説しましょう!! 最初は……

『天使達がその守るべき人の最も愛する人へ光と希望の矢を放ち、
と言う部分ですが……』

「天使達って……あの天使よね?」

光子朗さんのお母さんが、エンジェモンとエンジェウーモンを指
で差しながら言ってきた。

「じゃ、じゃあ次の……

『その守るべき人の最も愛する人』
と言う部分は……?」

「そこはワテ等に置き換えて考えてみましょう。

天使はワテ、守るべき人は光子朗はん、光子朗はんが最も愛する人

は光子朗はんのお父はんとお母はんやから……」

テントモンの話を聞いて、光子朗さんのお父さんが閃いた顔をした。

「家族だ!!」

最も愛する人は親や兄弟だ!!」

「そ、そうか。」

なら、最後の

『信頼する力と運命を乗り越える力が使われた時』
と言う部分に当てはまるのは……航君ですね？」

「はい、そこは俺の事だと思います。」

光子朗さんに聞かれ、俺は頷いて光子朗さんに肯定した。

「だったら僕の希望の矢を!!」

「私の光の矢を!!」

タケル君は希望の紋章を、ヒカリちゃんは光の紋章を手にとって言った。

そうすると、紋章からエンジェモンとエンジェウーモンに、希望と光の矢が渡された。

「無茶だよ、太一!!」

「危ないよ、ヤマト!!」

アグモンとガブモンは、太一さんとヤマトさんに止める為に叫んだ。

しかし……

「俺が無茶するのは何時もの事だろ？」

「俺達はタケル達を信じてる！！
だから、俺達は止めない！！」

太一さんとヤマトさんはアグモン達にそう言っているが、足などが震えていた。

：幾ら口ではそう言っているも“死ぬ”かもしれないのだから、怖くなるのは当たり前だ。

俺は二人に近付いて、二人の手を優しく握った。

「「わ、航？」」

「大丈夫ですよ、太一さん、ヤマトさん。
貴方達には俺達が付いています。

俺達を信頼してください！！

そして、皆で運命を乗り越えましょう！！」

俺が二人に頬笑みながらそう言うと、二人の顔は何時もの笑顔が戻った。

「……ありがとうな、航。」

「……お前のお陰で迷いが消えたよ。」

「なら………行きましょう！！」

「「エンジェウーモン（エンジェモン）、俺に光（希望）の矢を！
！！！！」」

俺が二人にそう言うと、二人は二体に叫んだ。

「「奇跡を起ころ！！！」」

二体は二人の体目がけて希望と光の矢を放った。

太一さんとヤマトさんに矢が刺さると、二人のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「（俺は皆を信頼している……皆と運命を乗り越えるんだ！！）」

俺がそう思った瞬間、俺の二つのデジヴァイスと二つの紋章が光り出した。

「アグモンワープ進化ー！！！！」

……………ウォーグレイモン！！！！！」

「ガブモンワープ進化ー！！！！」

……………メタルガルルモン！！！！！」

「フレアモン究極進化！！！！！」

……………アポロモン！！！！！」

「クレシェモン究極進化！！！！！」

……………ディアナモン！！！！！」

そして今此処に、四体の究極体が生まれると言う奇跡が起こった

!

第三十四話だよ！（後書き）

次回は遂にヴェノムヴァンデモンと決着が！！？

お楽しみに！！

第三十五話だよ！（前書き）

すいません、次回予告したのに少し違ってしまいました

本当にすいません

しかも短い・・・

第三十五話だよ！

Side航

「アグモンワープ進化ー！！！！！」

……………ウォーグレイモン！！！！！」

「ガブモンワープ進化ー！！！！！」

……………メタルガルルモン！！！！！」

「フレアモン究極進化ー！！！！！」

……………アポロモン！！！！！」

「クレシエモン究極進化ー！！！！！」

……………ディアナモン！！！！！」

俺達の目の前で古代予言の通り、四体の究極体が生まれると言う奇跡が起こった。

「（これが予言に書かれていた『信頼する力と運命を乗り越える力が使われた時』に起こる奇跡……………か……………）」

俺はアポロモンとディアナモンの姿を見ながらそう思った。

究極体に進化した二体の姿を見るのは初めてだが、二体の姿やオーラが何処か“神々”しかった。

「ウォーグレイモン、究極体、アグモンが進化した姿。

メタルガルルモン、究極体、ガブモンが進化した姿。

アポロモン、究極体、コロナモンが進化した姿。

ディアナモン、究極体、ルナモンが進化した姿。

四体の究極体……」

光子朗さんはデジモンアナライザーを見て、俺達に聞こえる様に言ってくれた。

「航君!!!」

「うわっ!!?」

俺が光子朗さんの説明を聞いていると、ヒカリちゃんが突然俺に抱き付いてきた。

「ひ、ヒカリちゃん?」

「よかった……」

おにいちゃんも……やまとさんも……わたるくんも……しなないで……よかったよ……」

ヒカリちゃんは、俺に抱き付きながら泣いて俺達にそう言ってきた。

「大丈夫だよ、ヒカリちゃん……。俺達は絶対に死なないよ……。だからヒカリちゃん、泣かないでくれよ……」

俺はヒカリちゃん頭を撫でながら、出来るだけ優しい声でヒカリちゃんに言った。

「ほんと?」

ヒカリちゃんは涙目になりながら、俺に上目遣いで聞いてきた。

か、可愛い……

「あ、嗚呼！」

だから、今はアイツを倒そう！！」

俺はヴェノムヴァンデモンを睨み付けて、ヒカリちゃんにそう言
った。

「うん！！」

ヒカリちゃんは何時もの笑顔になって、俺に笑顔で言ってくれた。

「アポロモン、ディアナモン、頑張ってくれ！！」

「ウォーグレイモン、アイツを倒すぞ！！」

「メタルガルルモン、アイツがした事を後悔させるんだ！！」

俺達は四体の究極体にそう叫んで、現実世界の未来を託した。

第三十五話だよ！（後書き）

次回はヴェノムヴァンデモンとの最終決戦！！

しかし、ヴェノムヴァンデモンを倒した後に待っていたのは・・・

お楽しみに！！

第三十六話だよ！(前書き)

やっとヴェノムヴァンデモン編が終わります！！

しかし、無理矢理だ

すいません

第三十六話だよ！

side航

ヴェノムヴァンデモンと四体の究極体デジモンは、お互い決定打を与える事が出来ない。

それは当たり前の事だ。

お互い、究極体になって未だそんなに時間が経っていない。

お互い体が未だ完全に究極体に慣れていないので、この戦いで勝つ方法は“ドチラかが弱点を突く”しか方法は無い。

しかし、理性を失っているヴェノムヴァンデモンは破壊するしかない。

なので四体の究極体と戦うのを止め、都内を護る為に防戦一方になった。

幸い、俺はヒカリちゃんと手を繋いでいたので離れる事は無かったが、他の皆とはぐれてしまった。

「どうしよう、航君……？」

お兄ちゃん達とはぐれちゃったよ……」

今にも泣きそうな声で、ヒカリちゃんは俺にそう言ってきた。

「大丈夫、ヒカリちゃんには俺が付いてる！！

それに、太一さん達はこんな攻撃で死んだりなんかしない！！」

俺はヒカリちゃんを勇気付け、急いでヴェノムヴァンデモンから離れた。

そしたら、俺の運命と信頼の紋章、ヒカリちゃんの光の紋章が光り出した。

「航君、これは一体……？」

ヒカリちゃんは、自分の光の紋章を見ながら俺に聞いてきた。

俺は紋章が何故急に光り始めたのか知っているので、ヴェノムヴァンデモンを見ながらヒカリちゃんに教えた。

「此処に……九人の選ばれし子供が揃ったんだ！！」

俺がそう言うのと紋章が光の網になって、ヴェノムヴァンデモンの体を縛って行った。

「今だ、アポロモン、ディアナモン！
奴の腹を狙うんだ！！」

俺牙そう叫ぶとアポロモンとディアナモンは俺を見て頷き、必殺技をヴェノムヴァンデモンの腹に放った。

「ソルブラスター！！！！」

「アロー・オブ・アルテミス！！！！」

アポロモンは、背中の火炎球から灼熱の太陽球を発生させる放つ技“ソルブラスター”を、ディアナモンは、背中の突起から細く鋭く長大な眩い氷の矢を引き抜いて放つ技“アロー・オブ・アルテミス”をヴェノムヴァンデモンに放った。

「ぐわあああああああああ！！！！！！！！？」

ヴェノムヴァンデモンは、アポロモンとディアナモンの必殺技を喰い大声で悲鳴をあげた。

そしたら必殺技を受けた部分、つまり腹の部分が開いた。

「エラバエシコドモたち、コロシテヤル！！！」

「キャッ！！！」

ヒカリちゃんはヴェノムヴァンデモンの本体を見て、怯えて俺に抱き付いてきた。

「ウォーグレイモン、メタルガルルモン！！」

腹に居る奴がヴェノムヴァンデモンの本体だ！！！」

俺がウォーグレイモンとメタルガルルモンにそう叫ぶと、二体は俺を見て頷いた。

「「ウォーグレイモン（メタルガルルモン）、ソイツに止めを刺すんだ！！！」」

すると何処からか太一さんとヤマトさんが二体に叫んで、二体は必殺技をヴェノムヴァンデモンに放とうとした。

「ガイアフォース！！！！！」

「コキュートスブレス！！！！！」

ウォーグレイモンは必殺技の“ガイアフォース”を、メタルガルルモンは必殺技の“コキュートスブレス”をヴェノムヴァンデモンの本体に向けて放った。

「ぐわあああああああああ………」

「オボエテイロ、エラバレシコドモタチイイイ………」

ヴェノムヴァンデモンは悲鳴を叫びながら、本体は俺達に向けて復讐する事を叫んだ後、0と1のデータになって消えて行った。

「勝ったんだな……」

「勝ったんだね、私達……」

「……嗚呼！」

さあヒカリちゃん、皆の所に行こうぜ……」

「うん……」

俺達は手を繋いで、太一さん達の所に向かって歩き出した。

……

……

……

……

「太一さ……ん……」

「ん？」

「……！？」

航、ヒカリ……」

「頑張ったな、サンモン、ムンモン。」

俺達はデジモン達を抱き締めて、感謝の言葉を言った。

「あら？」

こんなデジモン居たかしら？」

ミミさんがプロットモンを見て、俺達を見ながら聞いてきた。

「プロットモンです、よろしく。」

ヒカリちゃんがプロットモンの所に行き、プロットモンを抱き締めた。

「力を使いすぎて、退化しちゃったんだね……」

俺はサンモンとムンモンを抱き締めながら、ヒカリちゃんの所に向かった。

「お疲れさん、プロットモン。」

「ありがとう、航」

「皆、無事みたいだね。」

俺がプロットモンにお礼を言われると、空からウィザーモンが降りてきて俺達にそう言った。

「父さん達は？」

「皆、洗脳から解けて起き始めているよ。」

「良かった……………」

ウィザーモンの話を聞いて、俺達は安心した顔をした。

「見て、霧が晴れていく!!」

空さんの言葉を聞いて、俺達は安心した顔のまま上を見た。
だが、そこに映ったのは空じゃなかった……

「な、何だよあれ!!?」

そこには、逆さに映ったデジタルワールドだった……

第三十六話だよ！（後書き）

次回は航がデジタルワールドへ！！

お楽しみに！！

第三十七話だよ！（前書き）

明日から中間テスト一週間前なので、もしかしたら更新出来ないかもしれない日があるかもしれませんが御了承ください

第三十七話だよ！

Side 航

「な、何なんだよあれは！？」

太一さんは、空に浮かぶデジタルワールドを見て大きな声で叫んだ。

否、太一さんだけが空に浮かぶデジタルワールドを見て驚いている訳じゃない。

此処に居る人、否、日本に居る人、違う、世界中に居る人が太一さんと同じ様に空に浮かぶデジタルワールドを見て驚いているに違いない。

誰もが空を見て不思議がっているが、ただ一人だけ、光子朗さんだけある部分だけ集中して見ていた。

「光子朗さん、どうしたんですか？」

俺は光子朗さんに近付いて、ずっと上を見ている光子朗さんに話し掛けた。

「い、いえ、ただ、少し気になるものが在りまして……。」

太一さん、単眼鏡であの山を見てほしいんですが！！」

光子朗さんが太一さんに、デジタルワールドに在る“ムゲンマウンテン”を見る様頼んだ。

「分かった！

えっと………どの山なんだ？」

「あの山です。」

「あの山って言われても山ばっかだからな……あっ!？」

「どうしたんですか!？」

「飛行機だ。」

……!？」

く、クワガーモンだ!!

あっ、ぶつかった!!

お、落ちる!!!!」

「私が行くわ!!」

ピヨモン進化ー!!

……バードラモン!!」

太一さんの話を聞いて、ピヨモンがバードラモンに進化して、飛行機の所に急いで飛んで向かった。

「くっ……うう……」

バードラモンは飛行機を自分の背中に乗せて、落ちない様になっている。

が、その顔はかなり辛そうだ。

「!？」

バードラモン!!」

空さんがバードラモンを見て叫ぶと、空さんのデジヴァイスと紋章が光り出した。

「バードラモン超進化ー！！！！
……ガルダモン！！！！」

「ワテにもやらせてえなあ！！
テントモン進化ー！！
……カブテリモン！！」

バードラモンがガルダモンに超進化した後、テントモンがカブテリモンに進化して救援に向かった。

しかしカブテリモンが飛行機に所に着く前に、クワガーモンがカブテリモンに突撃してきた。

カブテリモンはクワガーモンの攻撃をギリギリ避け、必殺技の“メガブラスター”をクワガーモンに放とうとした。

「メガブラスターー！！！！」

しかし、カブテリモンが放った“メガブラスター”はクワガーモンの体を擦り抜けた。

「な！？

どないなっとなのや！！？」

「カブテリモン、奴に触れてはダメー！！！！」

「！？」

突進してきたクワガーモンを迎え撃とうとしていたカブテリモンだが、ガルダモンに言われてギリギリクワガーモンを避けた。

そして飛行機を東京湾に浮かばせて、二体は俺達の所へ帰ってき

た。

「お疲れさま、ピヨコモン。」

空さんはピヨコモンを抱き上げて、ピヨコモンを撫でながらそう言った。

「あのクワガーモンに触れられた物は皆、凍ってしまうの……」

「ワテ……凍りそうやったんやな……」

「元気出してください……」

ピヨコモンが皆に言うと、テントモンが落ち込んでしまい、光子朗さんがテントモンの背中を撫でながら慰めていた。

「だが、何でクワガーモンが……」

太一さん……否、俺と光子朗さんを除く皆が、太一さんの言葉に疑問を持っていた。

「さっきのクワガーモンで全て解りました。

……あれは……デジタルワールドなんです!!」

『なっ、何だってエエ!!?』

光子朗さんの言葉を聞いて、俺とヒカリちゃん以外の皆が声を出して驚いた。

「プロットモン……あれが貴方の居た世界?」

「違う……あれは、全く違うデジタルワールド……」

ヒカリちゃんがプロットモンに聞くが、プロットモンはヒカリちゃんの言葉を否定した。

ブウウウウウウウン！！！！

皆が驚いていたら、東京ビックサイトの方からバイクの音が聞こえた。

「ん？」

……シン兄さん！！」

バイクに乗っていたのは、丈さんのお兄さんであるシンさんだった。

「大変な事が起きている。

世界中の空にこの謎の大陸が現れた様だ。」

それを聞くと、俺とヒカリちゃん以外の皆は啞然とした。

「ま、まさかヴァンデモンなのか！？」

「それは無いよ！！」

「ヴァンデモンはあの時、完全に倒した！！」

太一さんの言葉にコロモンとツノモンは否定した。
やはり、俺が言っておいた方が良さそうかも知ない……

「多分ですよ。」

俺が話し出すと、皆の視線が俺に集中した。

「俺の予想ですが、デジタルワールドの歪みが酷くなって、俺達の世界に影響が出たんだと思いますよ。」

太一さん達は元々、その歪みを正す為にデジタルワールドに行ったんでしょ？」

俺がそう言うと、皆の顔はハッとした顔になって空に浮かぶデジタルワールドを見た。

「そ、そうだ。」

僕達はデジタルワールドの歪みを正す為に行っていた。

だが、僕達はヴァンデモンを追い掛ける為にコッチの世界に帰って来た。

コッチの世界とアッチの世界では時間の進みが違う。

……コッチの世界で三日は、アッチの世界では何十年もの時間が経っている。

だから、コッチの世界に影響が出たんだと思います!!」

光子朗さんの話を聞いて、俺以外の皆の顔が暗くなった。

「……取り敢えず、家族に会いましょう。」

心配すると思うし……」

「……そうだな。」

俺は空気を替える為に皆にそう言って、太一さんが皆を代表して答えてくれた。

俺はサンモンとムンモンを抱っこしたまま父さんと母さんの所に向かった。

父さんと母さんに真実を話す為に……

……

……

……

……

「……父さん、母さん……」

「!？」

わ、航、良かった……。

無事だったのね!!」

俺が二人に近付いて話し掛けると、母さんが俺に気付いて俺を抱き締めてそう言ってきた。

「……父さん、母さん。

……二人に大切な話が在ります。」

俺は父さんと母さんの顔を真剣に見ながらそう言って、俺の正体つまり秘密を全て話した。

俺は一度、死んだ存在だと言う事を……

神によって、俺はこの世界に転生した事を……

俺は転生者と言う存在だと言う事を……

俺は二人の本当の子供じゃない事を……

俺は嘘・偽り無く全部二人に話した。

「……二人には大き過ぎる嘘を付いていた、二人の子供だって……。本当にごめんなさい！！！」

俺は二人に頭を下げて、真剣に謝った。

だが、謝られても許される事じゃない。

俺は何をされても良い様に、覚悟を決めていた。

しかし、伝わってきたのは痛みではなく父さんと母さんの体温だった。

俺は意味が分からなかったので顔を上げた。

そこには、俺に何時も向けてくれていた笑顔の二人の顔が在った。

「確かに貴方は私達の子供じゃないかもしれないわ……。ただどね、航？

私達は貴方の事を知れて良かったと思うわ。

この事を言うのに勇気が必要だったと思う。

だけど、貴方は勇気を出して私達に伝えてくれた。

……ありがとうね。」

か、母さん……

「航、家族にそんな事はどうでも良いんだ。
必要なのは愛だけだ。」

……確かに、お前は転生者なのかもしれない。
だが、お前が俺の息子である事に変わりは無い。
よく、今迄頑張ったな。」

と、父さん……

「「私（俺）達の息子として生まれてくれてありがとう、私（俺）
達の息子の航。」」

「う、うわああああああああん！！！！！！
ありがとう、おれをうけいれてくれて！！！！！！
ありがとう！！！！！！」

「よく今迄頑張ったわね。
だから……今は思う存分泣きなさい。」

「うわああああああああん！！！！！！」

俺は父さんと母さんに抱き締められながら、父さんと母さんの温
もりを感じながら大声を出して泣いた。

・

・

・

・

「…………父さん、母さん、行ってきます!」

「必ず生きて帰ってこいよ!」

「気を付けてね!」

「うん!!」

俺は父さんと母さんに笑顔で挨拶をして、走って太一さん達の方に向かった。

……………

……………

……………

……………

「…………航、挨拶はしたのか?」

俺が太一さんの所へ着くと、既に俺以外の皆は集まっていて、太一さんが俺を見て聞いてきた。

「はい!」

「……………すみません、待たせちゃって……………」

「良いさ……………じゃあ、行くぞ!!!」

俺は太一さんとヒカリちゃんの間に入れて貰った。

そして、太一さんがそう言うのと俺達皆はデジヴァイスを手にとって前に出した。

「頼む!!」

俺達をもう一度、デジタルワールドに連れて行ってくれ!!」

太一さんがそう言うのと皆のデジヴァイスが光り出し、空に浮かぶデジタルワールドに行く為の虹のゲートが出来た。

「これで、デジタルワールドに……」

「タケル!!!」

太一さんがそう言ったので俺が虹のゲートに入ろうとした時、タケル君の母さんがタケル君を呼び止めた。

「折角皆が集まったのに……ごめんね。」

「ダメよ、貴方はここへ行かせてやれ……」 アナタ……」

タケル君がタケル君のお母さんに謝ると、タケル君のお母さんが止めようとしたがタケル君のお父さんが遮ってそう言った。

「俺がタケルの事を守から安心してくれ!!」

俺達は母さん達を救いたいんだ!!」

ヤマトさんがタケル君のお母さんを真剣な目で見ながら、タケル君の肩に手を置いてそう言った。

……ヤマトさん、凄く格好良いな……

「ヤマト……」

タケル君のお母さんは、目に涙を溜めながらヤマトさんの名前を言った。

そして沈黙がこの場を包んだので、俺はこの沈黙を破る為に頑張っ
て声を出した。

「……じゃあ俺から行きますね、皆さんは準備が出来たら来てくだ
さい。」

俺は皆にそう言って虹のゲートに入った。

「私を忘れてもらっちゃ困る。」

俺が虹のゲートに入ったら、ウィザーモンも虹のゲートに入っ
てきた。

「うい、ウィザーモン!？」

「私は、世界が危険だというのに指を加えて見ていたくないからな。」

「ウィザーモン……ありがとな!!」

「航……!!」

俺がウィザーモンにお礼を言ったら、下から名前を呼ばれた。

俺は名前を呼ばれた所に視線を移すと、父さんと母さんが手を振
ってくれていた。

「父さん、母さん、行ってきまーす！！！！」

俺は父さん達に手を振った。

下を見ると太一さん達も親に手を振っていた。

そして俺達は、皆に見送られながらデジタルワールドに向かった。

第三十七話だよ！（後書き）

次回はダークマスターズの行為に航が暴走する！？

お楽しみに！！

第三十八話だよ！（前書き）

無理矢理な所があります

御了承ください

第三十八話だよ！

side 航

俺は……否、俺達は目の前の景色を見て絶句した。

俺達の目の前の景色とは、地割れを起こした大地、厚い雲の覆われた空など……。

デジタルワールドがまるで闇に飲み込まれた景色だった。

「な、何なんだよ、これは……」

太一さんは目の前の景色を見て、驚きながらそう呟いた。
此処に居る全員が、太一さんが呟いた事を心の中で思っている筈だ。

俺も原作を知っているが、実際に見てみると気分が悪くなる。
ヒカリちゃんは俺の腕に抱き付きながら震えていた。

ガサガサ……ガサガサ

すると突然、俺達の後ろに在る草むらが揺れた。

「!？」

だ、誰だ!!」

太一さんの言葉で俺とヒカリちゃんを除く皆が、警戒しながら草むらを睨んだ。

だが、ヒカリちゃんと俺は草が揺れた所に向かった。

「お、お前等!?!
コツチに來い!?!」

太一さんが俺達にそう言うが、俺達は太一さんの言葉を無視して
草むらに向かった。

「……大丈夫、怖くないよ。」

「俺達はお前を攻撃したりなんかしないから、コツチに來いよ。」

俺とヒカリちゃんがそう言うのと、一体のデジモンが草むらから出
てきた。

「あ、ああ、選ばれし子供だ……」

「あつ、チューモン!?!」

ミミさんとパルモンがチューモンに気付き、コツチに走って來た。

「あ、ああ、ミミちゃん……帰って来てくれたんだ」

チューモンはミミさんに気付き、ミミさんに抱き付いて小さい声
でそう言った。

「一体、何が遇ったの?」

「……スカモンは?」

ミミさんがスカモンに付いて聞くと、チューモンは暗い顔をして
話し出した。

「スカモンは……スカモンは死んだ……」

チューモンは泣きながら俺達に話してくれた。

俺は少し離れた場所にいたウィザーモンの所に行った。

「どうしたんだ、航？」

「ウィザーモン、もし俺がおかしくなったら、無理矢理でも良いから気絶させてくれ。」

「ど、どういう意味だ？」

「それはd「航、敵が来たぞ！！」ちっ、来やがった！！」

俺が説明しようとしたら、太一さん達はメタルシードラモンと戦っていた。

「サンモン、ムンモン、進化だ！！」

「「おう（うん）！！」

サンモン（ムンモン）進化ー！

…コロナモン（ルナモン）！」

俺はサンモンとムンモンを、コロナモンとルナモンに進化させた。
しかし……

「お前達など、俺様の敵ではないわア！！！」

メタルシードラモンは俺達にそう叫ぶと、尻尾を使ってグレイモン達をコッチにぶっ飛ばしてきた。

『ぐわあああああああああ!!!!?』

勿論、俺達も巻き込まれ森の奥深くに飛ばされた。

.....

.....

.....

.....

そして気が付くと、俺達は霧の濃い場所迄飛ばされていた。

「くっ、この近くには確か……「ぐわあああああああ!!!!?」
し、しまった!?!」

347

俺は原作を思い出していたら、遠くからエンジェモンの悲鳴が聞こえてきた。

俺は原作を思い出し、急いでエンジェモンの悲鳴がした所へ向かった。

.....

.....

.....

.....

俺は皆の所に向かうと、エンジェモンはパタモンに退化しており、グレイモン達は超進化して完全体になっていた。だけど、完全体じゃダメなんだ!!

「だ、ダメだ！
ソイツも究極も「ムゲンキャノン!!!」うわあああああああ
あ!!!？」

俺が皆に言おうとしたら、ムゲンドラモンは必殺技の“ムゲンキャノン”を俺達に放ち、俺達はまたぶっ飛ばされ、謎の空間に落とされた。

.....

.....

.....

.....

「クソッ、また皆と離れてしまった!!
急がないとまと「お前等、何やってんだよ!!!？」ピノッキモンか
!!!」

俺が愚痴を言っていたら、ヤマトさんの叫び声が聞こえてきた。
俺は急いでヤマトさんの声のした方へ向かった。

.....

.....

.....

.....

俺がヤマトさん達の所へ着くとそこには、ピノッキモンに操られたワーガルモンとガルダモンが殴り合いをしていた。

「止めて、ガルダモン!!」

「ち、違うの、そ、空……」

「か、体が勝手に……」

反吐が出るやり方だ!!

「おいピノッキモン!

そこに居るのは分かってるんだ!

隠れてないで速く出て来いよ!!」

俺が上を向いて叫ぶと、瓦礫の上から声がした。

「ははははは、まさか僕の事を知ってる奴がいるなんてね♪

……でも、様を付けろよ。

ブリットハンマー!!」

ピノッキモンは俺にそう言うと、必殺技の“ブリットハンマー”を使われ、また俺達はぶっ飛ばされた。

.....

.....

.....

.....

今回は無事に皆と同じ場所にぶっ飛ばされた。

「はいはい、ちゅうもーく!!」

今から紙芝居をよm「気持ち悪い事をすんじゃねえ、ピエモン……」
……まさか、私の正体を見破る奴が居るとわな!!」

ピエモンは俺にそう言い、ピエロの格好を解いた。

「ぐははははは、まあ良い、此处で貴様等を倒せば良いのだから!!
トランプソード!!」

「しまった!!」

俺は原作を思い出すのに少し時間が掛かってしまい、動き出すのに少し遅れた。

ピエモンが放った必殺技の“トランプソード”はミミさんに向かって
っている。

「ミミさん、避けてください!!」

俺は走りながら叫ぶが、ミミさんは恐怖の余り体がそこを動こう
としなかった。

「い、いやあああああああ!!!!!!?」

グサツ!!

「おやおや、まさか自分の命を犠牲にして迄その子を護るとは……」

ピエモンは不気味に笑いながら、トランプソードで刺されたチューモン(……)を見てそう言った。

俺はチューモンを見て、膝を折って手を付いて倒れた。

「変えられなかった……」

チューモンの死を……変えられなかった!!」

俺は涙を流しながら地面を殴った。

「ちゅ、チューモン!!!?」

ミミさんは倒れているチューモンを持ち上げて、涙を必死に堪えながらチューモンの名前を言った。

「……良かった……ミミちゃんが無事で……」

僕はもう……ダメだ……」

「ダメ、チューモン!!」

死んじゃダメ!!」

俺は顔を上げてチューモンを見ると、チューモンはミミさんの言葉に首をゆっくり振った。

そして俺達がギリギリ聞こえる位の声の大きさを小さく呟いた。

「……もし、今度生まれ変わったら……デートして……」

チューモンはミミさんにそう呟いて、0と1のデータとなって消えて行った。

そう言ってチューモンは消えた

ドクン

誰が殺した？

ドクン

ピエモン

ドクン！

奴を許せるか？

ドクン！

許せない

ドクン！！

なら、奴に与えなければならぬ事は？

ドクン！！

死！！

ドクン！！！！

奴等、ダークマスターズを殺せ！！

殺す

ドクン！！！！

殺す

ドクン！！！！

殺す 殺す 殺す 殺す 殺す 殺す

ドクンドクンドクンドクンドクン！！！！！！

殺す 絶対に殺してやる！！！！！！

俺はそう思った瞬間、俺は意識を失った。

sideウィザーモン

チューモンが死んだ途端、航の様子が急に変わった。

「その白髪君、どうしたんだい、そんなに震えて？

目の前で死んだ奴が居るから、怯えているのか！？」

ぐははははははは！！！！」

ピエモンは航を見て、大声で笑っている。

だが航は、私達にも聞こえない位の小さい声で何かを呟いてた。

「一ろ一」

「何を言っているんだ？

小さくて何も聞こえんぞ!!
ぐははははははははは!!!!」

「こーす」

「頑張れ、あと少しで聞こえるぞ!!
ぐはははははは「殺す」は?」

「殺す 殺す 殺す 殺してやる!!!!!!」

航がピエモンそう叫んだ瞬間、航の体にどす黒いオーラの様な物が現れた。

「お前達は絶対に殺してやる!!!!!!」

航がデジヴァイスと紋章を握ると、デジヴァイスと紋章はどす黒い色に変色し、コロナモンとルナモンは黒の光に包まれた。

そして光が納まってそこに立っていたのは、まるで負の感情によって進化した黒いアポモンと黒いディアナモンが立っていた。

「お前達は俺が絶対に殺してやる!!!!!!」

第三十八話だよ！（後書き）

次回は負の力とダークマスターズが激突！！

お楽しみに！！

第三十九話だよ！（前書き）

中途半端です

まあ楽しんでください

「追加」修正しました

すいませんでした

第三十九話だよ！

sideウィザーモン

「殺す 殺す 殺す 殺してやる！！！！！！！！」

航はどす黒いオーラを纏って叫びながら、アポロモンの右肩に乗ってアポロモンに指示を出しピエモンを攻撃している。

「ば、バカな！！？」

人間がこれ程の力を出せるのか！！！！？」

ピエモンは、アポロモンの攻撃を紙一重で避けながら叫ぶ。

「ぐおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

遠くでは黒いディアナモンが叫びながら、メタルシードラモン・ピノッキモン・ムゲンドラモンの三体に攻撃している。

「どうなってんだよ……航達はどうしちゃったんだよ……？」

太一は航達を見て何時もの元気の在る声ではなく、元気の無い声で声で私達に聞いた。

だが私達も太一同様航が何故可笑しくなったのか分からないので只首を横に振るだけだった。

しかし、一人だけ違った反応をした人物がいた。

太一の妹であり、航の守りたい人である人物、ヒカリだった。

「航君……悲しんでる……」

ヒカリは涙を流しながら、航を見てそう呟いた。

「ヒカリ、どういう事なんだ？」

ヒカリの横にいたテイルモンが、真剣な顔をしながらヒカリに聞いた。

「航君、心の中が真っ黒……チューモンが死んで、悲しんでる……」

「な、何を言ってるんだよ、ヒカリ！」

俺達だって悲しいんだぞ……！

俺が聞いているのは、何で航達が可笑しくなっちゃったかだ……！」

太一は大声を出してヒカリにそう言った。

「それは私が説明するっぴ……！」

そんな声が聞こえたと思ったら、私達は何かに包まれた。

そこに居たのは、杖を持っており、ピンクの体、白の羽根を持った小さなデジモンだった。

『びっ、ピッコロモン……！！』

ヒカリを除く選ばれし子供とそのパートナーデジモンがそのデジモンの名を叫んだ。

……どうやら敵では無い様だ。

「久しぶりだな、選ばれし子供達！
よく戻って来てくれたっぴ……！」

「あ、嗚呼。」

それよりピッコロモン、航達に一体何が起こったか分かるか!？」

ピッコロモンが選ばれし子供に挨拶をしたので太一が代表で応え、太一は直ぐに航に付いてピッコロモンに聞いた。

「あれは太一、お前がした物に似ているっぴ!!」

「お、俺がか!？」

ピッコロモンは杖の様な物で太一を刺しながらそう言った。

……太一がした物？

……一体どう言う事だ？

「そうだっぴ!!」

お前は以前、エテモンの罠に掛かりグレイモンを超進化させ様として、スカルグレイモンに暗黒進化させただろ？

航と言う少年は、それをさらに酷くさせた状態だっぴ!!」

ピッコロモン曰く、チューモンの死により航は負の感情が溢れだし、コロナモン達を暗黒進化、そして、航自身も暗黒エネルギーの力である状態になったらしい。

ルインモード

ルインモード

「あの二体はアポロモンRMとディアナモンRMと呼ばれ、世界を破壊する力を持っているんだっぴ!!」

……だが安心するんだっぴ!!

世界が破壊される事は絶対に起きないっぴ!!

何故なら、究極体になったばかりのデジモンなのに、暗黒エネルギーの力を制御できるわけないっぴ!!

……しかし……」

ピッコロモンは私達に一通り説明を終えると、急に言葉を詰まらせた。

「しかし……何なんだよ？」

太一はピッコロモンが急に言葉を詰まらせたので、少し不安な顔をしながらピッコロモンに聞いた。

「……………しかし、あの航と言う少年は最悪の場合……………死ぬ（・・）っぴ。」

『!?!?!?』

私達はピッコロモンの言葉を聞いて、余りにも驚愕の事実を告げられたので言葉を失った。

「暗黒エネルギーは、強大な力を得る代わりに大きな代償が付くんだっぴ。」

……………デジモンなら死んでもデジタマになれるが、人間は……………」

ピッコロモンはそこで話すのを止めた。

航が……………死ぬ？

そんな事……………絶対にさせてはいけない!!

私はそう決心し、ピッコロモンに近付いた。

「ピッコロモン、皆を止めたら航は救われるのか？」

「……………皆を止めれば確かに航は救われるが、代償は絶対に在るっぴ。だが、止めるなら速く止めた方が良いつぴ！」

今の航は、憎しみと殺意だけで動いているっぴ。
航がもし、力を更に望めば手に負えなくなるっぴ……」

「そうか……分かった。」

私はピッコロモンの話を聞いてそう言い、外に向かう為に歩き出した。

「ど、何処に行くんだよ？」

すると後ろに居るヤマトが、戸惑った声で私に聞いてきた。

「航を助けに。」

「な、何を言ってるんだよ……!!
今外に出れば、どうなるか分からないんだぞ……!!」

私がヤマトに答えると、ヤマトは驚いた声で私にそう言ってきた。
……だからどうしたと言うのだ？

「航は今も一人で苦しんでいる、悲しんでいる。
しかし、それ等の感情を取り除けるのは、私達仲間じゃないのか？」

私がヤマトにそう言うのと、ヒカリとテイルモンが私に近付いてきた。

「ウィザーモン、私達も行く……!!」

「航には返しても返せない恩が在るからな。」

私はヒカリとテイルモンの言葉を聞いて頷き、一緒に外に向かった。

太一達が何か後ろで叫んでいたが、私達は無視して外に出た。

「殺す 殺す 殺す 殺す ぶっ殺してやる!!!!!!!!!!」

航はそう叫びながらアポロモンRMと一緒にピエモンと戦っており、ディアナモンRMはメタルシードラモン達と戦っていた。

だがさっきと違い、全員がボロボロで、航も体から血を出していた。

「さあ、航達を救おう!!」

私はヒカリとテイルモンにそう言い、航達に急いで近付いた。

第三十九話だよ！（後書き）

次回は航はもとに戻るが、大きな代償によって・・・！？

お楽しみに！！

第四十話だよ！（前書き）

前話はすいませんでした

修正しました

ごめんなさい

今回もごめんなさい

無理矢理・在り来たり・無茶苦茶です

すいませんでした

第四十話だよ！

side 太一

ウィザーモン達が航達を助ける為に外に出て行った。

ウィザーモン達が出て行った後、俺はウィザーモンの言った言葉を思い出していた。

『航は今も一人で苦しんでいる、悲しんでいる。』

しかし、それ等の感情を取り除けるのは、私達仲間じゃないのか？』

確かにウィザーモンの言う通りだ……

悲しんでる時や苦しんでる時、そういう時こそ支えてやるのが仲間だ。

俺も航達を助けたい、救いたい！！

だが、心の中でそう思っているも足が震えて動いてくれなかった。幾ら動けと頭の中で命令しても、震えている足は動いてくれない。クソッ！！

どうしたら良いんだや！！

「太一……僕も一緒に行くよ。」

俺が動かない足に苛付きながらそう考え込んでいると、突然アグモンが俺にそう言ってきた。

「アグモン？」

「僕達は仲間なんだ。」

辛い時も、悲しい時も、支えないといけないんだ。

……それに、太一は一人じゃないんだよ。」

アグモンがそう言ったので、俺は皆を見ると皆は俺を見て頷いてくれた。

「太一、俺達は仲間だ。

だから、一人で無理をすんじゃねえ！」

や、ヤマト……

「太一は何時も一人で終わらせようとする。

……だけど、私達は仲間なの！

だから、もっと私達を頼ってよ！」

そ、空……

二人の言葉を聞いていたら、何時の間にか足の震えは止まっていた。

……よし！！

「行くのかっぴ？」

「嗚呼！！

俺達は航の仲間だ！！

俺達は航達を救ってみせる！！」

俺はピッコロモンの目を真剣に見てそう言った。

俺がピッコロモンにそう言うと、皆が俺の言葉に頷いてくれた。

俺は、否、俺達はもう迷わない！

「分かったっぴ。

……必ず無事に帰って来るんだっぴよ！！」

『嗚呼^{はい}!!』

ピッコロモンは心配な顔をしながら俺達にそう言ってきたので、俺達に大きな声で返事をして外に出た。

.....

.....

.....

.....

俺達が外に出ると、エンジェウーモンとウィザーモンはダークマスターズとアポロモン達を押さえ、ヒカリは泣きながら航の体に馬乗りになって何かを訴えていた。

「アグモン、エンジェウーモン達の方を頼む！」

「分かったよ、太一!!」

俺はアグモンにそう言ってデジヴァイスをアグモンに向けた。

「アグモン……進化だー!!!!」

俺がそう言うと、デジヴァイスと紋章が光り出した。

「アグモンワープ進化ー!!!!……ウオーグレイモン!!!!」

アグモンはウォーグレイモンにワープ進化すると、エンジェウーモン達の所に向かって行った。

すると皆もデジヴァイスを取り出して、デジモン達に向けた。

『皆も進化だ（よ）（です）！！！！』

『おう（うん）（はいでんがな）（分かった）！！！！』

そして皆もワープ進化や超進化して、エンジェウーモン達の援護に向かった。

「殺す 殺す 殺す 殺す ぶっ殺してやる！！！！！！」

「お願い航君、元に戻ってよ！！！！」

航とヒカリの叫び声が聞こえ、俺達は航の所に向かった。

side航

……………救えなかった……………

……………運命を変えれなかった……………

……………辛い……………

……………悲しい……………

……逃げたい……

……この運命から……

……この辛さから……

……この悲しみから……

……今直ぐに……

……逃げ出したい……

『なら、その記憶を消してやろうか?』

……お前は……誰だ……?

side 太一

「航、お前の気持ちは分かる!!」

だが、その力を使うな、使わないでくれ!!」

「殺す 殺す 殺す 殺す ぶっ殺してやる!!」

「航!!」

俺達は航が暴れない様に押さえ説得しているが、航は一行に正気に戻らない。

「航、俺達はお前と過ごした時間は太一達に比べたら短い。

……だが、辛いなら辛いつて俺達に言えよ!!

悲しいなら悲しいって俺達に言えよ!!

俺達はお前を支えるお前の仲間なんだ!!!!」

ヤマトが航の右腕を押さえながら航にそう言った。

ヤマト……………

「航君、貴方がこんな事をチューモンが望んでいると思ってるの!?

皆を心配させて、貴方はそんな力を望んだの!?

答えて、航君!!」

空は航の左腕を押さえながら航にそう言った。

空……………

「お願い航君!!!!

元の優しい航君に戻ってよ!!

お願いだよ、航君!!」

ヒカリは航を抱き締めて、泣きながら航にそう言った。

「航……お前は俺達に言ったよな?

『皆で運命を乗り越えましょう』って。

……俺達はその言葉を聞いて、ヴェノムヴァンデモンに立ち向かう
ことが出来たんだ。

だから……お前の運命も俺達と一緒に乗り越えてやる!!

何故なら俺達は仲間だからだ!!

帰ってこい、航!!!!!!」

俺は航に俺達の思いを嘘・偽り無く伝えた。

「殺す 殺す ころす ころ…す こ…ころ…:…す」

俺が航に俺達の思いを伝えたと、航は目を閉じて意識を失った。

「「ぐわあああああああ…:…:…」」

航が意識を失った事でアポロモンRMとディアナモンRMは叫びながら退化し、デジタマになった。

「全部終わったんだな…:…」

「はあ…:…はあ…:…未だ…:…終わってませんよ…:…」

『「!?!?」』

俺は安心してそう言ったが、アグモン達の声では無い誰かの声が聞こえてきたので俺達は後ろを見た。

そこにはウォーグレイモン達を倒しているが、体中ボロボロになっているピエモン達が立っていた。

「はあ…:…:…はあ…:…:…まさか此処迄…:…:…僕達が追い詰められるとはね…:…:…」

「グフツ!」

…:…確かに追い詰められたが、お前達を護る奴はもう居ない…:…」

「ハア…:…ハア…:…オマエタチニノコサレタミチハ…:…“シ”ダケダ…:…」

クソッ!!

完全に絶体絶命じゃねえか!!

ど、どうすれば……

「ビットボム!!」

『!?!?』

すると突然後ろから俺達は攻撃が飛んできた方を見た。

そこには……

「ピッコロモンにモジャモン……それにレオモン……」

俺達の後ろには、俺達を今迄助けてくれていたデジモン達がそこには居た。

「選ばれし子供達を傷付ける事は、私達が許さないっぴ!!」

「選ばれし子供達はこの世界に光をもたらす!!」

貴様等が戦うなら私達も戦うぞ!!」

ピッコロモン達は俺達の前に立って、俺達を護ってくれた。

「はぁ……本当なら直ぐに殺してあげるんですが……はぁ……コチ
ラとしては分が悪い。」

はぁ……此処は一度引かせてもらいます……」

そう言ってピエモン達は俺達の前から姿を消した。

……………

.....

.....

.....

俺達は場所を移動して、近くに在った洞窟の中に隠れている。
航は洞窟の奥で未だ寝ている。

コロナモンとルナモンのデジタマも、奥に置かれている。
デジモン達も怪我をしたので、奥で手当てをしてもらっている。
ヒカリ、空、ミミちゃん、丈は手当ての手伝いをしている。

「良かった、お前達が帰ってきてくれて……」

レオモンは本当に嬉しそうな顔をしながら、俺達の顔を見てそう
言ってきた。

「レオモン、この世界は一体どうなっちゃったんだ？」

俺はレオモンに、俺達が居ない間にデジタルワールドに何が起こ
ったかを聞いた。

「嗚呼、この世界h「太一ー!!!」一体何事だ!？」

レオモンが話そうとしたら、奥から空が俺の名前を呼びながら走
ってきた。

「ど、どうしたんだよ、空!？」

「わ、航君が目を覚ましたんだけど、一一一一なのよ!!!」

俺達は空の話を聞いて、俺達は急いで航の所に向かった。

.....

.....

.....

.....

「航!!!!!!」

「グスッ……おにいちゃん!!!」

俺達が航の所に着くと、ヒカリが泣きながら俺に抱き付いてきた。

「わたるくんが……わたるくんが……」

ヒカリが俺に抱き付きながら、泣きながら俺達にそう言ってきた。

「…………航、大丈夫か？」

俺は航を見て話し掛けた。

すると航は、顔だけを俺達に向けてきた。

…………信じたくなかった……

俺は、否、俺達は航が……

「…………貴方は…………誰ですか？」

記憶を無くしたと言う現実を……

第四十話だよ！（後書き）

次回からメタルシードラモン編です！！

お楽しみに！！

第四十一話だよ！（前書き）

今回は短いです

御了承ください

第四十一話だよ！

side 太一

「……………貴方は……………誰ですか？」

航はまるで魂が抜けた様な顔で、俺達の顔を見てそう言ってきた。

「な、何言ってるんだよ？」

太一、八神 太一だって！

お前の家の隣に住んでいて、幼なじみの八神 太一だ！」

俺は航に焦りながらそう言うが、航は俺の事を聞いても顔を横に振った。

「すいません、何も憶えてないんです。

貴方の事も、自分が何をしていたのかも、家族の事も……………自分の事も……………」

航は申し訳なさそうな顔をしながら俺達にそう言ってきた。

俺は航のその話を聞いて、外に向かって歩き出した。

「太一？」

「空……………少し……………一人にさせてくれ……………」

俺は空にそう言って洞窟の外に向かって歩いた。

……………

.....

.....

.....

俺は今、洞窟から少し離れた場所に在る海岸に座って月を見ている。

「楽しい記憶、嬉しい記憶、悲しい記憶、辛い記憶……全部……無くしたんだよな……」

俺は月を見ながら、航の事を思っそう呟いた。
すると、俺の後ろに誰かの気配を感じた。

「・・・太一、大丈夫？」

俺は後ろに居る奴に話し掛けられたので、俺は後ろを向いて誰かを確認した。

俺の後ろには心配そうな顔をしている空が立っていた。

「大丈夫……って言うのと嘘になる。」

俺は空だと分かると直ぐに視線を月に戻して、空にそう応えた。

「隣……座って良い？」

「……嗚呼。」

空が俺に聞いてきたので、俺は少し間を開けてそう応えた。

俺がそう応えると、空はゆっくり俺の隣に座った。

「……皆、航君が記憶喪失になって悲しんだ。
太一が出ていった後、ピッコロモンは『記憶が無くなっただけなら不幸中の幸い』って言ってたけど……それでも悲しいよね。
……ヒカリちゃん、今も航君の事で泣いてるよ……」

空が俺が出て行った後に遇った事を俺に教えてくれた。
だが、空の声は何時もより小さく弱々しかった。
……そうだな、俺だけが悲しい訳じゃないよな。

「……アイツは今も苦しんでる。
一人で……バカだよな、あいつ。」

人には仲間が居るから頼れって言う癖に……自分は俺達を頼らない、
頼ってくれない。

……だけど俺は、アイツの運命と一緒に乗り越えてやるんだ。
例えそれが、どんな運命か分からないが……俺はアイツに笑っていいほしい。

俺がアイツに出来る事は、アイツが笑って過ごせる様にする事だ。」

俺は空に俺の覚悟を言って、空を真剣な顔をして見た。

「空……手伝ってくれるか？」

俺が空に聞くと、空は少し笑って俺を見てきた。

「何バカな事を言ってるのよ。
……手伝うに決まってるでしょ。
私も、それに皆も太一がやりたい事を手伝ってくれる。
だって私達は

仲間なんだから。」

空は何時もの優しい笑顔で俺にそう言ってくれた。
俺は空の言葉を聞いて、ゆっくり立ち上がって空を見た。

「ありがとな、空……」

「どういたしまして。」

俺達はそう言い合って、洞窟に向かって歩き出した。

第四十一話だよ！（後書き）

次回はメタルシードラモンの部下との戦いです！！
記憶を無くした航はこの戦いをどう思うのか！？

お楽しみに！！

第四十二話だよ！（前書き）

今回は戦闘までのお話です

期待した方、すいません

第四十二話だよ！

side 航

僕が皆との大切な記憶を失った日の翌日・・・

僕達は今、一生懸命海辺を歩いていきます。

今日の朝、僕はデジモンの事に付いて八神さん達が説明された。

此処はデジタルワールドと呼ばれる世界。

僕達が住んでいた？世界と異なった世界で、この世界には人間は存在しておらず、代わりにデジモンと呼ばれる生物が住んでいるらしい。

初めて聞く言葉ばかりなのに、何故か知っている様な、そんな気がした。

何故僕達がこの世界にいるのかと聞くと、何でも僕達の世界とデジモンの世界に歪みが生じ、このままでは僕達の世界が滅ぶらしい。なので、僕達はこの世界に来たらしい。

歪みを直す方法を聞いたら、ダークマスターズと呼ばれるデジモン達を倒さないといけないらしい。

なら何故、僕がこの世界に記憶が無いのに来ているのかと聞くと皆が暗い顔をした。

どうしたのかな？っと思ってと聞こうとしたら、太一さんが「また今度話してやるよ。」と言ってきた。

僕も余り気にならないので深く考えなかった。

そしてその後、ピッコロモンとレオモンと言うデジモン達と少し別行動を取る事になったらしい。

僕達はダークマスターズを倒す為に、ピッコロモン達は他の味方のデジモン達を探す為に別行動を取ったらしい。

しかし……………暑い……………

「暑い、何なんだよこの暑さはよお。」

先頭を歩いている八神さんが、本当に辛そうな顔でそう言った。皆の顔を見ると、皆も辛そうな顔で汗が沢山出ていた。僕は何故だか分からないけど、皆より汗が出ていない。暑いのは暑いのだが、汗が出る程の暑さじゃないと思う。

「大丈夫かい、航君？」

すると僕の右隣を歩いていた城戸さんが僕を心配してくれたのか、僕に話し掛けてきました。

「はい、暑いのは暑いんですが汗が出る程暑くありませんから。」

「航君って凄いんだね。」

僕が城戸さんにそう言うと、左隣に歩いていたヒカリさんが僕を誉めてくれた。

「僕も何でだか分からないんですけどね。」

「でも、凄いのは凄いよ。」

僕は謙遜するが、ヒカリさんはそれでも誉めてくれた。
何か恥ずかしいな／／／／

「あっ、小屋だ！！」

僕がそう思っていると、太一さんが小屋を見つけたらしい。皆は走って小屋に向かっていているが、僕は何故か走れなかった。何故かは分からないが……体が動かない、動こうとしてくれない。

「どうしたの、航君？」

僕が歩こうとしないのでヒカリさんにテイルモン・ウィザーモン・城戸さん・ゴマモン・太刀川さん・パルモンが僕の方へ帰ってきた。

「上手く説明できないんですが、体が動こうとしないんですよ。変ですよ、何故かあの小屋に向かおうとしないなんて……」

僕は苦笑いしながら皆にそう言った。

そしたら、皆の顔が急に真剣な顔になった。

「記憶は忘れても、体は憶えてると言う訳か。」

テイルモンがそう言うと、皆も僕を見て頷いた。

……記憶が在った頃の僕って、一体どんな人だったんだろ？

ドカアアアアアン！！！！

僕が考え込んでいると、少し離れた砂から大きな爆発音が聞こえてきた。

僕は直ぐにその爆発音が在った場所を見て身構えた。

「……やはり、体は忘れていない様だな。」

ウィザーモンは僕を見てそう言ってきた。

……あれ？

何で僕は身構えているのだろう？

「あれは多分デジモンだ！」

デジモンは僕とゴマモンに任せてくれ！！

他の皆は航君の事を頼む！！」

『はい（嗚呼）！！』

城戸さんは他の皆にそう言って、ゴマモンと一緒に爆発音の在った場所に向かった。

シエエエエエエエエエル！！！！

すると今度は、海から何かの鳴き声が聞こえてきた。

僕達は海に視線を向けると、貝を背中に背負ったピンク色の体のデジモンがコッチに向かって来ていた。

「あれはシエルモンよ！！」

パルモン、私達も行くわよ！！」

太刀川さんはそう言って、パルモンと一緒にデジモンに向かって行った。

太刀川さんがデジモンを見てシエルモンと言ったので、多分シエルモンと呼ばれるデジモンだろう。

……あれ？

「そう言えば……太一さん達はどうして出て来ないんだろう？」

大きな爆発音やシエルモンの鳴き声が聞こえたら、普通は出てくと思うんだけどなあ。

僕がそう言うと、ウィザーモンが太一さん達が居るであろう小屋

に空を飛んで向かった。

……空を飛べるなんて羨ましいな。

そう思いながらウィザーモンを見ていた。

ピカン ピカン ピカン ピカン

すると突然、僕の腰に付いていたデジヴァイスが光り始めた。
しかも、一つじゃなくて二つとも光り始めた。

「どうしたんだろ、急に光り出して……」

僕はデジヴァイスを腰から外し、両手に持ってそう言った。

「!？」

航、デジヴァイスに向かって『リアライズ』って言うのよ!!」

テイルモンがデジヴァイスを見て、大きな声で僕にそう言ってきた。

僕は意味が分からなかったけど、取り敢えずテイルモンの言う通りにしてみようと思った。

「えっと、リアライズ!!」

ピカーン

僕がそう言うとデジヴァイスが更に光り、駝鳥の卵の様な物が二つデジヴァイスから出てきた。

「こ、これは？」

「それはデジタマ、デジモンの卵よ。
光り出したのは多分、デジモンが生まれるからじゃないかしら。」

テイルモンが僕に説明をしてくると、デジタマが左右に動き始めた。

ピキピキ……

デジタマに罅が入り、次第に罅が大きくなっていった。
そして……

「「サンサン（ムンムン）！！」」

二体のデジモンが生まれた。

「この太陽みたいなデジモンはサンモン、もう一体のデジモンはムンモン。」

航、お前のデジモンよ。」

テイルモンが二体のデジモンの事を教えてくれた。
この二体が……僕のデジモンなんだ……

ナデナデ

「サンサン（ムンムン）！！」

僕が二体の頭を撫でると、二体はとても気持ち良さそうな顔をしてくれた。

「これからよろしくね！！」

サンモン、ムンモン！！」

「遅くなも……デジモンが孵ったのか、おめでとう。」

するとウィザーモンが何時の間にか帰ってきていて、僕と二体を見ておめでとうって言ってくれた。

「ありがとう、それで八神さん達は？」

「嗚呼、やはりあの小屋は罠だった。」

太一達は閉じ込められていた。」

「恐らく敵を倒さない限り脱出は出来ないだろう。
丈とミミの援護に行った方が良さそうだ。」

僕がウィザーモンに質問すると、ウィザーモンは僕達に太一さん達の状況を教えてくれた。

そしてウィザーモンの話を聞いて、テイルモンが僕達がしなければならぬ事を言ってくれた。

「僕達は太刀川さんの所に行きます、だからヒカリさん達は城戸さん達の所に行ってください。」

……安心して下さい、僕はウィザーモンと行きますから。
良いかな、ウィザーモン？」

僕はヒカリさんとテイルモンにそう言った後、横に居るウィザーモンに聞いた。

「嗚呼、その方が良さそうだ。

私は航と行きますので、テイルモン達は丈達の所に行ってください。」

「……航君、気を付けてね。
怪我なんかしないでね。」

ウィザーモンが僕の提案に賛成してくれると、ヒカリさんが不安そうな顔をして僕にそう言ってくれた。

ヒカリさん……

「はい！

心配してくれてありがとうございます！
それじゃあ行こう、ウィザーモン！！」

僕とサンモン、ムンモンは太刀川さんの所に向かって走り出した。

Sideウィザーモン

「……ウィザーモン。」

航が走って行った途端、テイルモンが突然私に話し掛けてきた。
だが、話の内容は予想が付く。

「分かってます、航は私が護ります。
それでは!!」

「ウィザーモン、航君の事、お願いねー!!」

私はヒカリの期待を胸に刻み、航の後を追った。

第四十二話だよ！（後書き）

次回は航が見たデジモンの戦い、デジモンの戦いを見て航の記憶に変化が！？

お楽しみに！！

第四十三話だよ！（前書き）

戦闘がない・・・

どうしよう・・・

第四十三話だよ！

Side 航

「これが……デジモン同士の戦い……」

僕は目の前で行われているデジモン達の戦いを見て、僕は体を恐怖しながら驚愕している。

当たれば怪我じゃ済まない様な攻撃を使っていて、その攻撃を紙一重で避けてカウンターを決める。

その行動がずっと繰り返されていた。

「こんな事して……一体何の得が……うつ……!？」

僕がデジモン達の戦いを見ていたら、突然酷い頭痛が僕を襲ってきた。

「……・航、大丈夫か!？」

少し遅れてやって来たウィザーモンが、僕の側に来て大声を出して心配してくれた。

だけど、今の僕にはウィザーモンを気にする余裕は全く無い。

頭痛が酷くなっていき、何かの映像が頭に流れ込んできた。

………

………

………

……

ビルやマンションが沢山立ち並んでいる街に、一つのマンションの公園が僕の目の前に在った。

そこに、白髪の小さい男の子と茶髪の小さい女の子が楽しく遊んでいた。

『わたしね、おおきくなったら一一一くとけっこんするの！！』

女の子が男の子に嬉しそうな笑顔でそう言った。

……男の子の名前の部分はよく聞き取れなかった。

『嗚呼！』

俺も将来一一一ちゃんと結婚したいさ！！

だから、将来絶対に結婚しような？』

男の子も女の子に嬉しそうな笑顔でそう言った。

……やはり、女の子の名前の部分は聞き取れなかった。

……でも……

……何故か……

……あの二人の事を……

……僕は……

……知っている様な気がする……

……

……

……

……

僕がそう思った瞬間、映像が消えて頭痛が納まった。

「はぁ……はぁ……はぁ……今のは？」

「航、取り敢えず此处から離れた方が、
巻き込まれるぞ。」

僕が考え込んでいるとウィザーモンがそう言ってきたので、僕は
ウィザーモンに肩を借りて近くの岩場に行って隠れた。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

僕は肩で息をしながら、先程の映像を思い出していた。

映像に出てきた二人の子供……

知っていた様な、大切な何かだった様な……

「航、一体どうしたんだ？」

僕が考えていると、横に座っていたウィザーモンが僕に話し掛け
てきた。

「な、何でもないよ。」

只、少し怖かったただけだから……」

僕はウィザーモンや皆に心配を掛けなくなかったから、苦笑いをしながら嘘を吐いた。

「……そうか……そろそろ勝負が決まるみたいだぞ。」

ウィザーモンが僕にそう言ってきたので、僕は太刀川さん達に視線を移した。

花の妖精みたいなデジモンが、シエルモンに必殺技を放った。

シエエエエエ………

シエルモンは悲鳴をあげながら、0と1のデータになって消えて行った。

「……シエルモンは………死んだんだね。」

僕達が生きる為に、何かを殺して生き延びた。

どんな世界でも常識な事らしいが、僕はこの常識が一番嫌いだ。

僕は手を合わせ、シエルモンがまた新しい命を持って生まれてくる事を願った。

S i d e ウ ィ ザー モ ン

航は何か隠している……

……記憶が戻り始めたのか？

だったら……何故隠す必要がある？

……航は戦っているのかもしれない。

自分自身と言う大きな敵と……

私達に出来る事は、航が記憶を取り戻す迄護る事だ。

「航、ミミの所へ行こう。」

「……………分かったよ。」

航は少し間を開けて応えてくれた。

そして私達はミミの所へ向かった。

第四十三話だよ！（後書き）

次回はVSメタルシードラモンです！！

お楽しみに！！

第四十四話だよ！(前書き)

今回も無理矢理だ・・・

スランプかも・・・

どうしよう？

第四十四話だよ！

Side 航

僕は無言であの映像の事をずっと考えている。

何故あの映像が僕の頭に流れたんだ？

何故映像に出てきた二人の事を、僕は知っている様な気がするんだ？

どうしてなんだ？

もう一度見れるなら、もう一度だけ見て確認したい。

『なら、もう少し見せてやるよ。』

「えっ？」

突然声が聞こえたと思ったら、僕は急に意識を失った。

Side ウィザーモン

「わ、航！？」

無言で歩いていた航が、突然砂浜に倒れこんだ。

私は直ぐに航に近付いて、航の心臓に手をやった。

ドクン ドクン ドクン

航の心臓は何事も無く動いているので死んではない。気絶しているだけだった。

……だが、何故突然倒れたんだ？
……一体何故？

私は航を背負って、ゆっくりミミの所へ向かって歩き出した。

side 航

ミーン ミーン ミーン

蝉の鳴き声が煩い位、何処からでも聞こえてくる。

……此処は一体何処なんだ？

僕は周りを見渡して、此処が何処なのかを確かめた。

「此処は……映像に出てきた公園だ。」

そう、僕が居る場所は、先程映像に出てきた公園だった。

「どうして……？」

……あ、あの二人は！？」

僕の目の前には、映像に出てきた白髪の男の子と茶髪の女の子が立っていた。

僕は急いで二人に近付いて、二人に話し掛けた。

「ねえ、君達？」

僕は二人に話し掛けたけど、二人は何の反応してくれなかった。

「ね、ねえって！

……えっ!？」

僕は少し怒った口調になって、白髪の男の子の肩を揺すろうとした。

だけど、僕の手は男の子の肩を擦り抜けてしまった。

「これは……夢？」

『一一くん、だいじょうぶ?』

僕が夢だと分かった瞬間、二人は動き出して話し出した。けど、やはり名前の部分は聞き取れなかった。

『大丈夫だよ、太一さんも反省してくれたみたいだしね。』

……太一さん?

太一さんって……八神さんの事?

何でこの男の子が、八神さんの事を知ってるのかな?

『でも、わたしがかぜをひいたせいで一一くんはおにいちゃんになぐられたんだよ……』

……お、お兄ちゃん?

ま、まさか、この子はヒカリさん!?

じゃ、じゃあこの男の子は一体……!?

『良いんだって、俺はヒカリちゃんを護りたかったから。ヒカリちゃんが気にする事じゃないよ。』

……ヒカリさんを護るだって?

この男の子はヒカリさんの事が好きなのかな？

『で、でも……』

『うーん……じゃあさ、今日からずっと一緒に遊んでくれたら許してあげるよ!!』

反論は認めないから!!』

この男の子、小さいのに言葉遣いや使ってる単語が大人みたいだ……

『わ、わかった。』

『じゃあ早速遊ぼうぜ!!』

『うん!!』

男の子はヒカリさんにそう言って、二人は楽しく遊び始めた。

『どうして他人の僕が、ヒカリさんの記憶を……?』

『今回は此処迄だ』

『!!?』

僕が考えていたら後ろから声がしたので、僕は驚いて直ぐに後ろを向いた。

そこには、さっきの白髪の男の子が立っていた。

「き、君は?」

『答える気はねえ。』

それに、今回はサービスで見せてやった様なもんだ。
後は自分で思い出せ。』

見せる……だって？

ど、どう言う意味なんだ！？

「全然意味が分からないよ！

教えてほしい、どうして僕はヒカリさんの記憶を知っているの！？」

僕は頭を下げて、白髪の男の子に頼んだ。

『フン、さっき言った筈だ、“自分で思い出せ”とな。

……じゃあな。』

だけど白髪の男の子は僕にそう言って、男の子は後ろを向いて歩き出した。

「ま、待って！

僕には記憶が無いんだ！

思い出すって何を思い出したら良いの！？

それに、君は一体誰なの！？」

僕は歩いて行く白髪の男の子に、僕の事情と僕が思っている疑問を言った。

すると白髪の男の子は、立ち止まって顔だけを僕に向けてきた。

「俺は………一一だ、じゃあな。」

な、何て言っただんだ!?

「待ってー！ー！ー！」

僕は白髪の子に叫んだけど、そこで僕は意識を失った。

Sideウィザーモン

私達は今、ホエーモンの胃の中に居る。

何故なら、丈とミミが敵のデジモンを倒した事によって閉じ込められていた太一達を救出する事が出来た。

しかし、メタルシードラモンが現れて私達を攻撃してきて、私達は海に落とされた。

そこへ、ホエーモンが現れて私達を救ってくれた。

だが、私達はメタルシードラモンの部下に追われている。

光子郎がホエーモンに指示を出している為、今の所は安全だ。

しかし、皆の顔は暗いままだ。

何故なら……

「はぁ……はぁ……はぁ……」

航が今だに目を覚まさないからだ。

しかも航は、かなりうなされていて苦しそうな顔をしていた。

「どうしちゃったんだよ、航の奴は……」

太一は航を心配そうな顔をしながら見てそう呟いた。

此処に居る誰もが、太一と同じ事を思っているだろう。

突然倒れて今だに目を覚まさない……
私の力でも分からない……

「はぁ……はぁ……こ、此处は!？」

私がそう思っていたら、突然航が目を覚ました。

「此处は一体!？」
うっ……」

すると突然、航は頭を抑えながら苦しみ出した。

「わ、航!？」

「うっ……はぁ……はぁ……だ、大丈夫……もう平気だから。」

航は無理に私達に笑ってそう言ってきた。

私達は航のその顔を見て、何も言えなくなった。

「はぁ……はぁ……ウィザーモン、此处は何処？」

航は肩で息をしながら、辛そうな顔をして私に聞いてきた。

「……此处はホエーモンと言うデジモンの胃の中だ。
私達は、ダークマスターズの一体のメタルシードラモンに追い掛け
られている。」

私が航にそう言うと、航は「そう……」と言だけ言ってサンモンとムンモンをデジヴァイスから出し、二体の頭を撫で始めた。

Side 航

……あの少年は誰なんだ？

……一体僕に何を思い出せと言うんだ？

……僕は何故ヒカリさんの記憶を知っているんだ？

……僕は一体誰なんだ？

……僕はどうすれば良いんだ？

……分からない……

……只……

……唯一思い出した事と言えば……

……僕は……

……誰かを護りたくて強くなろうとした事だけだ……

僕は誰を護りたくて強くなったのか分からないけど……

僕は誰かを護りたくて強くなった……

僕は唯一思い出した事を考えながら、サンモンとムンモンの頭を撫で続けた。

第四十四話だよ！（後書き）

今回はメタルシードラモンとの戦いです！

ホエーモンの死を目の前で見た航は・・・！？

楽しみに！！

第四十五話だよ！（前書き）

予告した展開と少し違うかも・・・

期待した方、すみません

第四十五話だよ！

side 航

どうしてヒカリさんの記憶を、僕は知っているんだ……

「一た一」

彼は一体誰なんだ……

「わーる！」

僕は何を思い出したら良いんだ……

「一たる！！」

僕はどうすれば良いんだ！！

「航！！！！」

！？

「や、八神、さん？」

突然名前を呼ばれたので顔を上げると、心配そうな顔をしている
太一さんが前に居た。

「お前どうしたんだよ？」

さっきから呼んでるのに返事はしないし……少し変だぞ、航。」

……そうか、一人で考え込んでいたから名前を呼ばれても気付かなかったんだ……

……八神さんにあの事を話してみようか？

……ダメだ！！

八神さん達は、メタルシードラモンの事で僕の話聞いてる暇なんか無いんだ！！

此処で僕が話をしたら、皆に余計な心配と迷惑を掛けてしまう！！

「な、何でも無いですよ。

気にしないでください。」

僕は必死に笑顔を作り、八神さんにそう言った。

「……………そうか。」

僕の話聞いて太一さんは僕にそう言って、八神さんは泉さんの所に歩いて行った。

……これで良いんだ。

これは僕一人の問題なんだ。

僕一人の力で解決しないといけないんだ……

僕一人の力で！！

side 太一

俺は航と会話した後、光子朗の所へ行って光子朗の隣に座った。

「どうしたんですか、太一さん？」

光子朗は俺に気付いて、パソコンから視線は変えなかったが話し掛けてきた。

「嗚呼……航の奴、俺等の事を信用してくれてるのかなって思ってた……。」

「どう思う、光子朗？」

俺は自分の考えを素直に光子朗に言って、どう思うかを聞いた。少し前の俺なら、人に何かを聞くなんてしなかっただろう。

だが、人に聞けるのも航が居てくれたお陰なんだ。

俺が変われたのは航が俺の側に居てくれたからなんだ。

だから、俺は航に信用してもらいたい、頼ってもらいたい。

だけど、現状は全くの逆だ。

航は俺から見たら、俺達を信用していない様な気がする。

だが、これは飽く迄俺一人の考えだ。

俺一人が持てる考えってのはとても小さく狭い。

だから俺は、仲間で在る光子朗に聞いたんだ。

「僕から見たら、航君は信用してるとは思いますが、頼られていないとも思います。」

光子朗も俺と同じ考え……か……

「今の航君は、一人で記憶を取り戻そうとしているんだと思います。その点を見ると、やはり僕達を頼ってくれていないんですよね……」

光子朗は何処か淋しそうな顔をして俺にそう言ってくれた。

……そりゃそうだよな。

仲間なのに頼られないってのは辛い……

俺だって辛い……

……少し航と話すか？

だが今は……メタルシードラモンの事が先だ。
話をするのはその後でも良いよな……？

ドオオオオオン！！！！

「な、何だ！？」

俺がそう思った瞬間、ホエーモンが大きく揺れ始めた。

「光子朗、一体何が遇ったんだ！？」

「メタルシードラモンが攻撃してきました！！」

「な、何だって！？」

このままじゃあホエーモンに被害が及ぶ！！
急いで陸に浮上するんだ、ホエーモン！！！！」

俺は光子朗の言葉を聞いて、急いでホエーモンに指示を出した。

「……分かりました、ですが少し待ってて下さい。
皆さんの戦いやすい場所に浮上します！」

だがホエーモンは、俺の指示に従わず俺達の事を思ってそう言う
てきた。

お、俺達の戦いやすい場所って……

「それは後にでも見つける!!
急いで浮上しろ、ホエーモン!
じゃないと、お前の体が壊れちまう!!」

俺はホエーモンの言葉に急いで反発し、ホエーモンにもう一度指示を出した。

このまま行けば、ホエーモンは……最悪の場合死んでしまうかもしれない!!

もしホエーモンが死んでしまったら、航の心は完全に壊れてしま
う!!

それだけは、それだけは阻止しないと!!

「ホエーモン、これは命令だ!!
急いで浮上しろ!!!!」

俺は声を荒げてホエーモンに命令した。
皆も俺と同じ考えを持っていたので、誰も反対する奴は居なかつた。

「……………分かりました。」

ホエーモンは俺の命令を間を開けて了承してくれて、浮上し始めてくれ。

「アグモン、準備しておいてくれ!!」

「分かったよ、太一!!」

俺はデジヴァイスを持ってアグモンを見てそう言っていると、アグモンは真剣な顔をして俺の顔を見て頷いてそう言ってくれた。

.....

.....

.....

.....

そして俺とアグモンはホエーモンの口から出て、メタルシードラモンの前に走って移動した。

「フン、お前等だけで俺様に勝つつもりか？」

メタルシールドラモンは、俺とアグモンを馬鹿にした言い方で聞いてきた。

「そのつもりさ！
アグモン、進化だ！！！」

俺がアグモンにそう言うと、俺のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「アグモンワープ進化ー！！！！！！
.....ウオーグレイモンー！！！！！！」

俺はアグモンをウオーグレイモンにワープ進化させた。

「イツケエ、ウオーグレイモンー！！！！！！」

俺がそう言うと、ウォーグレイモンはメタルシードラモンに突っ込んだ。

そして、ウォーグレイモンとメタルシードラモンの戦いが始まった。

side航

僕達も八神さんに続いて、急いでホエーモンの口から出た。

出た時には既にウォーグレイモンとメタルシードラモンの戦いが始まっていた。

戦いは略互角で、戦いに進展は無かった。

だけど……胸の中がモヤモヤする。戦いに不安を感じていない

……

もっと……別の何かに不安を感じる……

僕がそう思っていると、ウォーグレイモンはメタルシードラモンによって海中に連れ込まれてしまった。

ドックン！！！

「うっ……！？」

ウォーグレイモンが海中に連れ込まれた瞬間、突然頭痛がして頭の中にある映像が流れてきた。

……………

.....

.....

.....

そこには、ウォーグレイモンを助ける為にメタルシードラモンを攻撃し、死んでしまうホエーモンの映像が頭の中に流れてきた。

.....

.....

.....

.....

そこで映像が消えて、頭痛が納まった。

……まさか!?

「ホエーモン、止めるんだ!!
君は死ぬつもりなのか!?!」

「ど、どうしたんだ、航?」

皆は僕の顔を不思議そうに見ているが、それに構ってる時間は無いんだ!!

「ホエーモン、止めろ!!
止めてくれー!!」

ザバアアアアン！！

僕が叫んだ瞬間、大きな水しぶきが上がった。

ホエーモンに僕の声が聞こえたのかと思い、僕は安心して水しぶきを見た。

だけど……

そこに現れたのは……

ウォーグレイモンを……

メタルシードラモンから救おうとする……

ホエーモンの姿が在った……

「ホエーモーーーーン！！！！」

僕は大声を出してホエーモンに叫んだ。

だけどホエーモンは、メタルシードラモンに攻撃してウォーグレイモンを助けた。

「貴様アアア！！」

雑魚が俺様に触れんじやねエエエ！！！！

アルティメットストーリー!!!!!!」

メタルシードラモンは、鼻のみたいな所から必殺技の“アルティメットストリーム”をホエーモンに放った。

ズボオオオオン!!!!

メタルシードラモンの必殺技“アルティメットストリーム”は、ホエーモンの体を簡単に貫いた。

「ほ…………ホエーモーオオオオン!!!!!!」

「どうだ!!!」

「雑魚が俺 S フレイムトルネード!!!!!!」
ぐわあああああああ

ウォーグレイモンは、隙を見せたメタルシードラモンに必殺技の“フレイムトルネード”を発動させ、その場で高速回転し炎の竜巻を作りだしメタルシードラモンの口から入り、体の中からメタルシードラモンを攻撃した。

メタルシードラモンはウォーグレイモンの必殺技を喰らい、爆発して死んだ。

だけど……僕は泣いた。

「ほえーもん……ほえーもん……ごめんよ……ぼくがもつとはやく

おもいだせば……………しなずにすんだのに……………ごめんよ……………」

僕はその場に座り込んで、ホエーモンに謝りながら泣いた。

「……………見ろよ、海が消えていく……………」

ヤマトさんが言った通り、メタルシードラモンが死んだ事により海が消えていき、スパイラルマウンテンの海の部分も消えていった。僕達はダークマスターズの一体、メタルシードラモンを倒した。

ホエーモンと言う……………

大きな犠牲を払って……………

第四十五話だよ！（後書き）

次回からピノッキモン編です！！

お楽しみに！！

デジヴァイスだよ！（前書き）

今頃説明してすみません

以後気を付けます

デジヴァイスだよ！

松上「今回は、航のデジヴァイスに付いて説明します。」

ウィザーモン「どうして急に説明するんだ？」

松上「嗚呼、『航のデジヴァイスはどんな形？』みたいな感想が何通か在ったから、ちゃんと説明しといた方が良いなっと思つてよ。」

ウィザーモン「理解した。」

松上「それじゃあ説明するぜ！！」

形 太一達と同じ

数 コロナモン用とルナモン用が在る為二つ持っている

超進化している時の色 コロナモンの方は紅、ルナモンの方は蒼

能力 1. 02のD-3と同じ機能を全て持っている。

2. テイマーズのアークと同じ機能を全て持っている

3. フロンティアのデイスキャナと同じ機能を全て持っている

4. セイバースのデジヴァイスと同じ機能を全て持っている

5. ??????????????????????

松上「どうよ？」

ウィザーモン「5番は？になっているが……」

松上「嗚呼、それは航のデジヴァイス専用の力だ。まあ、出るのは先の話だな……」

ウィザーモン「そうなのか……」

松上「そう言う事だ。」

……皆さん、今頃説明してすいません。」

ウィザーモン「次回も楽しみにしていてくれ!!」

デジヴァイスだよ！
(後書き)

次回は航が後悔します

お楽しみに！！

お知らせだよ！

松上「お知らせです。」

ウィザーモン「一体何のお知らせなんだ？」

松上「……今日から執筆活動を休止します」

・

・

・

・

ウィザーモン「一体どうしたんだ、急に休止するって？」

松上「あっワリィ、大事な所が抜けてた。

『テストが在る為、テスト勉強するからに休止する』だ。」

ウィザーモン「理解した。

それで、何時執筆を再開するんだ？」

松上「予定だが、15日に執筆を再開する。
テストが15日で終わりだから。」

ウィザーモン「皆、次に会うのは15日だ。
それ迄待っていてくれ。」

松上「すいません、勝手に休止してしまつて。
それでは15日に会いましょう!!」

第四十六話だよ！（前書き）

な、なんとか更新が出来た

無理矢理ですが・・・

第四十六話だよ！

side 太一

「ほえーもん…………ほえーもん…………」

……航はホエーモンが死んで泣いている。

結局、俺はホエーモンを救えなかった……

航の前に現れる運命を、一緒に乗り越えるって決めたのに……

俺は、航の運命と一緒に乗り越えるどころか、運命の壁を余計に大きくしてしまった！！

ちくしょう！！

「ほえーもん…………ごめんね…………きみをたすけられなくて…………ごめんね…………もつとはやくきづけば…………きみをすくえたのに…………ごめんね…………」

…………ちよつと待て。

『もつとはやくきづけば』って、航はこうなる事を知っていたのか？

だが…………どうしてだ？

・

・

・

！！？

ま、まさか！！

「ないてちゃだめだよね……。

君の様なデジモンは二度と出さない……。

勝手かもしれないけど……安らかに眠ってね、ホエーモン。

……必ず……君を殺したダークマスターズは……僕が殺してあげるから（……………）」

！！？

航がそう言った瞬間、突然黒いオーラが現れて航を包んだ。

「待っててね、ダークマスターズ。

君達は僕が殺してあげるからさ。

殺される迄の間は、しっかり楽しんでおくと良いよ。」

「止めろ、航！！

その力は使うな！！

止めるんだ、航！！」

俺は急いで航の肩を掴んで、航に大声でそう言った。

航に触れた瞬間、負の感情が俺に流れて来たが俺はそれ等の感情に負けない様に堪えた。

確かにダークマスターズは憎い……

だが、暗黒エネルギーを使えば航は！！

これ以上、航にばかり辛い思いをさせたくない！！！！

「八神さんは憎くないんですか？

僕は……ダークマスターズが憎い。

奴等を殺さないと、ホエーモンの無念は消えないんですよ！

……それとも、八神さんも僕の敵ですか？」

すると航は殺気を俺に放ち、俺を睨みながら聞いてきた。
その瞬間、負の感情が更に俺に流れてきた。

「な、何を言ってるんだ……。」

お、俺はお前の敵じゃない!!

だ、だけど、その力は使えない!!」

恨んだり、憎んだりするのは構わない!!

人間は、生きていたらそう言った感情が必ず出来る。

俺だって、今は無いが何時か必ずそう言った感情が出来る日が来る。

だけど、何も知らない航にこの力は使わせちゃダメなんだ!!

「何を言ってるんですか？」

この力は、僕の望んだ力をくれる。

それを何で……!!?

うわああああああ!!?」

すると航は突然頭を手で押さえ、叫びながら地面に倒れ込んだ。
俺達は急いで航の周りに集まり、航と目線を合わせた。

『わ、航(君) (はん) !!?』

「うわああああああ……!!?」

そして航は、叫びながら気絶した。

「やっぱり航は記憶を……」

思い出そうとしてるんだ。」

S i d e 航

ミーン ミーン ミーン

蝉の鳴き声が何処からでも煩く聞こえてくる。

僕は、蝉の鳴き声がよく聞こえるある公園に立っていた。

だけど、僕はこの公園の事を知っている。

此処は……

『やはり、今回も来たな……一……』

すると僕の前に突然、白髪の子が現れて僕にそう言ってきた。

……やっぱりね……

「今回も来たよ……僕……」

S i d e 太一

「……やはり、航の心は読めない。」

……だが、航は記憶を取り戻そうとしているのかもしれない。」

ウィザーモンは航の胸に手を置いて、ウィザーモン本人の仮定を俺達に言ってくれた。

「お兄ちゃん……私達に何か出来る事は無いのかな？」

ヒカリが不安そうな顔をしながら俺に聞いてきた。

俺だって……俺だって航の為に何かしてやりたいさ。

だけど、これは航自身の問題なんだ……

俺達が唯一出来る事は……

「航の事を、見守る事しかないな……」

航の事を信じて、航を見守る事しかない……

俺達は航を信じて、黙って航を見守った。

Side 航

「今回も来たよ……僕……」

僕がそう言くと、もう一人の僕が一瞬驚いた顔をしたが、直ぐに何時もの無表情になった。

『ほう、俺の事を思い出したのか？』

「全部じゃないけどね、君の存在位なら少し思い出したさ。」

『まっ、一歩前進だな。』

……それで、何しに来た？」

もう一人の僕は少し間を開けて、殺気を放ちながら僕に聞いてきた。

「君に確認したい事が在ってね。」

僕はもう一人の僕の殺気に怖じ気付く事無くそう言った。
この事だけは、絶対に聞かないといけないね……

『……何を聞くって言うんだ？』

もう一人の僕は、殺気を更に強くして僕に聞いてきた。

「聞きたい事って言うのは……」

君の存在は、僕の心の闇なのかつという事さ。」

第四十六話だよ！（後書き）

次回は航の心の中の話です

お楽しみに！！

第四十七話だよ！（前書き）

少し無理矢理だなあ

テストのせいでちゃんと書けてないよ

はあ・・・

第四十七話だよ！

side航

『……嗚呼、俺はお前の心の闇だ。

それでどうするつもりだ……俺を消すのか？』

もう一人の僕は殺気を放ちながら、僕を睨んで聞いてきた。

「そんな事はしないさ。

君のお陰で、僕は死なずに生きていられるんだから。」

『……何時から気付いてた？』

僕の言葉にもう一人の僕が一瞬驚いた顔をしたが、直ぐに僕を睨み付けて僕に聞いてきた。

「八神さん達の話を聞いてからかな？

……その頃は未だ確信していなかったんだけど、今日の事で確信したんだ。

記憶を無くす前の僕は暗黒エネルギーを長時間使ったのに、代償が記憶を失うだけって事が気になっていたんだ。

そして今日、僕はホエーモンを殺されて暗黒エネルギーを使ったのに代償も無く自我がはつきりしていた。

八神さん達の話では、初めて暗黒エネルギーを使った時は僕は自我は無かったって言ったのにね。

だから、君が暗黒エネルギーに何かしてくれただと確信したんだ。……どうかな、僕の推理？

何処か間違ってる所が在るかな？」

僕は自分が考えた推理をもう一人の僕に言って、最後にもう一人の僕に聞いてみた。

『……………はあ、お前は本当に賢いよな。』

もう一人の僕は溜め息を吐いて、ジト目で僕を見ながら地面に座ってそう言ってきた。

僕ももう一人の僕が地面に座ったので、少し遅れて地面に座った。

「やはり君のお陰だったんだね。

……………ありがとう、もう一人の僕。」

僕は真剣な顔をして、もう一人の僕に頭を下げてお礼を言った。

『頭を上げろ。

あれは俺が勝手にやったただけだ。

……………それに、お前の記憶を代償にしたんだ。

俺にするのは感謝じゃなくて恨む事だ。」

僕がお礼を言ったただけなのに、もう一人の僕は僕に自分を恨めっ
て言ってきた。

どうして恨まないといけないんだ？

僕が生きていられるのは、もう一人の僕のお陰なのに…………

『それで、お前の記憶……………って言っても俺が持つてる記憶は数年前
迄の記憶しかねえ。

だから、残りの記憶は自分の力で思い出せ。』

もう一人の僕は僕にそう言って、虹色に輝く水晶を出現させて僕
に渡してきた。

『これが俺の持つてる記憶の全てだ。』

「ありがとう……君はどうなるの？」

僕がもう一人の僕から記憶を受け取って聞くと、もう一人の僕は肩を竦めて笑って僕を見てきた。

『俺は此処で暗黒エネルギーの制御をする。

少し位なら暗黒エネルギーを制御出来るからな……』

もう一人の僕……

「ありがとう、時々会いに来るね。」

僕がもう一人の僕にそう言うと、もう一人の僕は面倒臭そうな顔をしながら僕に笑ってくれた。

『さっさと行け……俺。』

「……ありがとうね、もう一人の僕。」

僕がもう一人の僕にそう言うと、もう一人の僕は姿が薄くなりながら僕に言ってきた。

そして僕は意識を覚醒させた。

第四十七話だよ！（後書き）

次回は航が質問攻めにあります

お楽しみに！！

第四十八話だよ！（前書き）

やっぱテストのせいで調子が出ないなあ・・・

早くテスト終わってくれないかな・・・はあ、面倒臭い

第四十八話だよ！

side 航

・

・

・

・

「ん……うん……」

俺は重い目蓋を開けて、眠っていた意識を無理矢理起こした。

「ん？……わ、航、目を覚ましたのか！？」

すると俺の右に座っていたウィザーモンが、驚いた顔をしながら俺に話し掛けてきた。

「嗚呼………んー！！！」

俺はウィザーモンに短くそう応え、両手を上に上げて硬くなった筋肉を解した。

『航（君）（はん）ー！！！！！！』

すると俺の名前を呼ぶ声がしたので、俺は声が聞こえた方を見た。そこには、アグモンを先頭にこっちに向かって来ている皆の姿が

在った。

「……逃げる!!」

ガシッ!!

「……ウィザーモン、今直ぐ離せ、否、離して下さい!!」

俺は逃げようとしたのだが、ウィザーモンに腕を捕まれて逃げる事が出来ない!!

このままでは、ある意味死んでしまう!!
速く離してくれ!!

「ダメだ、航は皆に心配を掛けたんだ。
きっちりと話してもらわないとね、全部。」

……mazide?

『航(君) (はん) ー!!!!!!』

神様、貴方は俺の事が嫌いなんですか……?

俺は貴方を恨みます、絶対に……!!

俺が神様を恨むと思っていたら、全員が俺に突進してきた。

「ぎゃあああああああああ!!!!!!!!?」

あつ、ダメだ……

俺は全員の突進の衝撃に耐えきれず、俺はまた意識を失った。

.....

.....

.....

.....

『はあー、また来たのかよ……』

目の前に立っていたもう一人の俺が、俺を見ながら溜め息を吐いて俺に呆れながらそう言ってきた。

「俺だって好きで来たんじゃないよ。」

『はあー……それで体はどうだった？』

俺は少し不機嫌になってもう一人の俺にそう言くと、もう一人は溜め息を吐きながら俺に聞いてきた。

……そう言えば、全然普通に動けたし痛みも無かったな……

初めて暗黒エネルギーを使った時は、かなり体が怠かったのに……成る程ね……

「全然普通だった、ありがとよ。」

『……また感謝するのか。』

……変わってるな、お前。』

……変わってるって堂々言うなよ……傷付くじゃんかよ————

O r z

『今回はお前の意志で来たんじゃないから、さっさと帰れよ。』

……さ、さっさと帰って……———o r z

……お、俺ってそんなに邪魔なのか……? ———o r z

『はあー、速く帰らねえとお前、また此処に来ることになるぞ。』

……あつ、確かにそう考えたらそうだ。

「じゃあ帰るわ。」

『き、切り替えが速いな。』

俺が素早く切り替えると、もう一人の俺は少し驚いた顔をしながら俺にそう言ってきた。

人間切り替え速くないとな!!

「じゃあなー!!」

俺はもう一人の俺にそう言って、急いで現実に戻った。

………

………

………

………

「ん……くうー!!」

……本日三度目の目覚めだな。

俺はそう思いながら周りを見渡したが、俺の周りには誰も居なかった。

「……よしっ今のうち「ネコパンチ!!!」グハッ!!!」

太一さん達を（から）探そう（逃げよう）とした時、テイルモンが突然砂から現れて俺に必殺技の“ネコパンチ”をしてきた。

「ゲホッゲホッ……いきなり何すんだよ!!!」

俺は咳ををして涙目になりながらテイルモンに怒鳴り声で叫んだ。

「航が逃げない様にする為に決まってるじゃない。」

「……………えっ？」

何で俺が逃げるって考えを持っていたって分かった訳？

確かに一瞬逃げ様としたけど、俺は賢いからちゃんと止めたよ。

……しかし、何故テイルモンだけ？

『今だ、捕まえろ!!!』

そんな掛け声が聞こえると、急に周りから現れたアグモン達に俺はロープで縛り付けられた。

……………は？

俺はそう言う趣味はないんだけど……

「さあ、しっかり話してもらうぜ!!」

すると太一さんが現れて、真剣な顔をしながら俺にそう言ってきた。

……太一さん、俺は話す気満々だったのに……

「はあ、不幸だ。」

某幻想殺しさんの言葉を、俺は上を向いてそう呟いた。

第四十八話だよ！（後書き）

次回は航に質問される話です

お楽しみに！！

第四十九話だよ！(前書き)

今日からまたテスト・・・

はぁ、嫌だなぁー

早く終わってほしい

第四十九話だよ！

side航

……どうしよう……もう一人の俺の存在を話すのは良いんだ。だけど、これを話したら皆は絶対に俺が暗黒エネルギーを使うのを止めさせると思う。

「はあ……それで、何が聞きたいんですか？」

俺は溜め息を吐いて、全員の顔を見てそう言った。
取り敢えず、質問された事で答えられる事は答える。
さっさとしないと、メタルエテモンが来てしまうからな。

「先ず俺から質問だ。」

……航、記憶が戻ったのか？」

すると俺の前に立っていたヤマトさんが、真剣な顔をして少し間を開けて俺に聞いてきた。

……“先ず”って事は皆が質問するのか……はあ……

「少しだけ……ですがね。」

俺は少しブルーな気持ちになりながら、ヤマトさんの質問に答えた。

俺がヤマトさんにそう言うと、皆の顔が急に明るくなった。

「良かった。」

暗黒エネルギーを使っただけから、さらに記憶を忘れたのかと思ったぜ……本当に良かった。」

するとヤマトさんの隣に立っていた太一さんが、俺に涙ぐみながらそう言ってきた。

よく見ると、他の皆も涙目になっていた。

……俺ってこんなにも心配されてたのか……
嬉しい様な、恥ずかしい様な……

「次は俺が質問するぜ、航。

お前は記憶を何処まで思い出したんだ？」

すると今度は太一さんが俺の前に立って俺に聞いてきた。

俺が取り戻した記憶は………最近の記憶は未だ取り戻して無いな
………

「太一さんに殴られた時くらい迄ですかね………」

俺が太一さんにそう言うと、皆が急に太一さんに視線を変えて太一さんを睨んだ。

………太一さん、すいません………

「えっ？」

………航君がお兄ちゃんに殴られたのが大体三年前くらいだったよね
？」

すると俺が太一さんに殴られた理由を知っているヒカリちゃんが、頭に？マークを浮かべて太一さんに聞いた。

「あ、嗚呼………って事はデジモンに付いては未だ思い出せていないんだな、航？」

すると太一さんは物凄く速いスピードで推理して俺に聞いてきた。
……転生前の記憶に原作の内容は在るのだが、既にこの原作知識は参考にするならない。

何故なら、この世界は既に原作から脱線した世界だからだ。

俺は太一さんの言葉を無言で頷いて肯定した。

「そうなの。」

……でも取り敢えず、航君の記憶が戻って良かったわ。」

「そうですね、航君が何故記憶を思い出したのか分かりませんが、これからは十分に戦えますね。」

すると空さんと光子郎さんが、俺の話を聞いてそう言ってきた。

……戦うって言っても、俺のデジモンは未だ幼年期なので戦う事は出来ないんだけど……

「でも先ずは航君の身体の状態を見よう。」

ヒカリちゃん、テイルモン、ウィザーモン、手伝ってくれるかい？」

すると丈さんが俺の横にやって来て、ヒカリ達にそう言った。

……丈さんって本当に優しいよな。

少し生真面目だけど……

「そうだな、このエリアももう直ぐしたら消えてしまうから、あの森に入ろう。」

すると太一さんは、深い森を指差しながら俺達に言ってきた。

……ホエーモン、必ずお前の仇は取ってやるからな！！

俺は心の中でそう決心し、皆と一緒に森に向かって歩き出した。

第四十九話だよ！（後書き）

次回はピノッキモンとの接触です！

お楽しみに！！

第五十話だよ！（前書き）

最近、話を考える時間が減ってきている・・・

良いのか悪いのか分からん

まあ、いいが・・・

第五十話だよ！

Side 航

「うん、何処にも異常は無いみたいだね。」

丈さんが俺の身体を診て、笑顔で俺にそう言ってくれた。

まあ、もう一人の俺が頑張ってくれたから異常は無いんだけど、一応診てもらった方が良さそうだったしな……

「ありがとうございます、丈さん。」

「良いよ別に、僕も君の事が心配だからね。」

俺は丈さんに頭を下げてお礼を言うと、丈さんは少し真剣な声で俺にそう言ってくれた。

……スゲー嬉しいんだけど、それと同じくらい恥ずかしい……

「取り敢えず太一達の所に行こう。
此処は既に敵の本拠地だからな。」

俺が心の中でそう思っていると、テイルモンが俺達にそう言ってきた。

……確かにテイルモンの言う通りだな。

この森はピノッキモンが居るエリア、速く太一さん達と合流してピノッキモンのアジトに向かわないと……

「それじゃあ行きましょう。」

俺は皆にそう言って立ち上がって、皆と一緒に太一さん達が待つ

てくれている場所に向かった。

.....

.....

.....

.....

「.....あれ？」

太一達が居ないんだけど.....？」

俺達は何事も無く太一さん達が待っている所に着いたのだが、丈さんの言う通り太一さん達は其処には誰も居なかった。

しかも、一人二人ではなく全員居ないだ。

「.....テイルモン.....」

「分かっている.....気を付けろ、ウィザーモン.....」

テイルモンとウィザーモンは、俺しか聞き取れない小さな声で会話をしていた。

.....よく考えろ.....俺.....

全員が何処にも居ない.....

誰一人、俺達に移動する事を言いに来てくれなかった.....。

.....言いに来れなかった？

.....どうして？

.....ま、まさか!？

「皆、今直ぐn『ガトンッ!!!』し、しまった!？」

俺が皆に言おうとした時、急に地面が動き始めた。

「な、何で地面が動いてるんだよ!？」

ゴマモンの言った言葉は、此処に居る皆が思っている疑問だ。
だが、俺は何故地面が動きだしたのかを知っている。

「皆、今直ぐに木の上に乗るんだ!

動いているのは地面だけ!!

太一さん達もこの地面の所為で居なくなったんだ!!

ウィザーモン、頼めるか!？」

「だ、大丈夫だ。

行くぞ!!」

俺は皆に太一さん達が居なくなった理由と、動いている地面に付いて簡単に説明してウィザーモンに頼んだ。

ウィザーモンは俺の言葉を肯定して、自身の能力を使って俺達を宙に浮かせてくれた。

そして俺達は、近くの木の枝に座った。

「ふうー、助かった……航君はよく気が付いたね。」

丈さんは一度呼吸を整えて、俺を見ながら誉めてくれた。

「このエリアは森。

ピノッキモンがこのエリアの管理者だと思ったんです。

アイツは、究極体だがまだ精神年齢は俺達以上にガキだから、ガキが考えそうな事を想像したんです。

それが偶然当たっただけですよ。」

この話は全てが嘘ではない。

俺には原作知識は在るが、この世界は既に原作から大きく脱線した世界。

原作と異なる場合が在るかもしれない。

だが、今回は原作と同じだったので俺はそう言った。

……しかし、太一さん達とはぐれた事には変わりない。

原作ではピノッキモンが人形を使って皆をバラバラにして、タケル君を誘うんだよな……。

その所為で、ヤマトさんが皆と別れてしまうだよな……

それだけは阻止しないとな!!

「えっ!?!」

そう思っていたら突然光子郎さんが俺の隣に現れた。

「こ、光子郎!?!」

何でk」

丈さんが突然現れた光子郎さんに話している途中で、丈さんは突然消えた。

「畜生!?!」

ピノッキモン、おm

a えの仕業だろ!!

……ってあれ?

此処は何処だ?

「わ、航!?

何でお前が此処に居るんだよ?」

俺は大声でピノッキモンに花居ている途中で、俺は急に違う場所に移動していた。

そしてそこに居たのはヒカリちゃん達ではなく、ヤマトさんとタケル君だった。

「や、ヤマトさん!?

それにタケル君も!?

まさか、ピノッキモンが!!

……畜生、やられた!!

俺の人形まで持っていたのかよ!!」

俺も予想出来なかった完全にイレギュラーだ!!

もし、俺の人形が壊されたりしたら……

ブルッ!!

か、考えたくもねえ!!

「航、一体何が起こってるんだよ?

地面は突然動きだすし、皆は突然消えちまうし……お前は知ってるだろ?」

するとヤマトさんは、少し思い詰めた顔をして俺に聞いてきた。
……此処で俺が話しておけば、太一さんとの戦闘フラグが折れる
かもしれねえ！

「実はですね、k「あーそーぼー………あーそーぼー！！！！………」
アイツはとことん嫌な奴だな！！」

俺がヤマトさんに話そうとした時、アイツが大声を出して俺の言
葉を遮ってきた。

アイツって本当にKYだよな！！

……えっ、古いつて？

確かに古いが、これ以外の言葉は思いつかん！

「あーそーぼー！！」

あーそーぼー！！」

俺がそう思っていると、声がどんどん俺達に近付いてくる。

「タケル、航、気を付けろ！」

「はい（うん）！！」

ヤマトさんが俺達にそう言ってきたので、俺達はヤマトさんに返
事をして警戒した。

「あっ、居た居た！！」

ねえ君達、僕と一緒に遊ぼう！」

すると俺達の目の前にアイツ、ダークマスターズの一体のピノツ

キモンが現れて、俺とタケル君を見ながらそう言ってきた。

……君達？

……ま、まさか俺まで誘われてんのか？

……コイツは馬鹿なのか？

前の戦いでは、（太一さん達の話によると）俺はコイツにかなりのダメージを与えたんだぞ。

そんな奴と普通遊ぼうって言うか？

やっぱこいつは頭のネジが半分抜けてんだな

……

「黙れ、お前と遊ぶ気はないんだよ!!」

俺が心の中でピノッキモンに呆れていると、ヤマトさんが大声を出してピノッキモンに反発した。

確かこの後って……

「煩い、お前には聞いてないよ!!」

ピノッキモンはそう言うと、ヤマトさんの体を何か組みたな物でグルグル巻きにした。

「お、お兄ちゃん!？」

大丈夫!？」

するとタケル君は、紐で身体を動かせなくなって倒れたヤマトさんに近付いて、膝を付いてヤマトさんに聞いた。

……タケル君がこんな反応をするって事は兄弟喧嘩は無かったのか？

だが、それは後で良い!!

「止めろ、ピノッキモン!!」

ヤマトさんに手を出すんじゃない!!!!」

俺はヤマトさんの前に立ち、ピノッキモンに大声を出してそう言った。

「だったら僕と遊ぼうよ、そしたらその人を助けてあげる。勿論、君と君が僕と遊ぶと言う条件だけど。」

するとピノッキモンは、俺とタケル君を指差しながら言ってきた。

「タケル、航、ソイツの言う事なんか聞くな!!!!」

「へえー、君達は航とタケルって言うんだ。」

名前を覚えてくれてありがとね、だけど……お前には聞いてないんだよ!!!!」

ピノッキモンはそう言って、ヤマトさんの口までも紐で塞いだ。

「止めろって言ってんだろぅが!!!!」

「お兄ちゃん!!!!」

「だったら僕と遊ぶかい？」

コイツ、何処まで腐ってやがる!!!!!!

だが、今は言う通りにしないと……

「分かった、お前と遊んでやるよ。」

「僕も、君と遊ぶよ。」

「んー!!!!」

俺達が遊ぶと言ったら、ヤマトさんが何かを叫んだ。

「大丈夫ですよ、ヤマトさん。

タケル君には怪我はさせません、怪我するのは俺ですから。

……それじゃあ行こうか。」

「んー!!!!?」

ヤマトさんの叫び声を聞きながら、俺達はピノッキモンのアジトに向かった。

第五十話だよ！（後書き）

次回はヤマト達の話です

お楽しみに！！

第五十一話だよ！（前書き）

今回はヤマト達の視点で書いてます

ヤマトの心境が原作以上に悪くなるかも・・・

まあ気にしない！！

第五十一話だよ！

sideやマト

「んー！！」

「んんー！！！！」

俺はピノッキモンに巻き付けられた紐みたいな物を体を動かして外そうとしているが、全く紐は外れず無駄に時間だけが過ぎていつている。

「んー！！」

「んんー！！！！」

は、速く外さないとタケルと航がピノッキモンに……！！
しかも、航は……

『大丈夫ですよ、ヤマトさん。
タケル君には怪我はさせません。
怪我するのは俺ですから。』

って言っていた！！

アイツ、考えたくも無いがもしかしたらピノッキモンと……

死ぬ気かもしれない！！！！

誰か、誰か速く俺を助けに来てくれ！！！！
ガブモン！！！！

sideガブモン
『ガブモン！！！！』

俺は太一とアグモンと一緒に突然消えたヤマトを探していたら、
頭にヤマトの声が聞こえてきた。

「大変だ、ヤマトが俺を呼んでる！！！！」

「な、何を言ってるんだよガブモン。
俺には聞こえなかったぜ。」

「僕も。」

俺はヤマトの声が聞こえたので太一とアグモンにそう言って走り
出そうとしたが、太一とアグモンはヤマトの声が聞こえなかったっ
て言った。

……太一とアグモンは聞こえなかった？
じゃあ今のは、俺の空耳なのか？

『助けてくれ、ガブモン!!!!』

俺がそう思った時、また頭にヤマトの声、しかも今回は助けを求める声が聞こえてきた。

これは空耳じゃない!!

「ヤマトが呼んでる!!

こっちだ!!」

俺は太一とアグモンにそう言って、ヤマトに呼ばれた方角に向かって走り出した。

「ま、待てよ、ガブモン!!」

「一人になったら危ないよ!!」

太一とアグモンは俺にそう言って俺に付いてきてくれた。

Side航

「…………航君、大丈夫かな?」

俺はピノッキモンの後ろを警戒しながら歩いていると、突然タケル君が小さく弱々しい声で俺に聞いてきた。

「大丈夫だよ。

もしもの事があれば、俺がピノッキモンの注意を引く。

だからタケル君はその隙に逃げてくれれば良い。」

「だ、ダメだよ!!」

俺はタケル君にそう言ったが、俺の案をタケル君は大きな声を出して否定してきた。

「僕に内緒で何の話をしてるんだい？」

ピノッキモンは立ち止まって、殺気を放ちながら俺達を見て聞いてきた。

「なーに、お前と何して遊ぶか考えてたんだよ。
なあ、タケル君？」

俺はピノッキモンに心が全く籠もってない言葉を言って、タケル君と肩を組んでタケル君に聞いた。

頼むタケル君、俺の言っている事に気付いてくれ!!

「!？」

……う、うん、そうだよ!」

するとタケル君は俺の言っている事に気付いて、大きな声を出して肯定してくれた。 ナイス、タケル君!!

「そっかー、そんなに僕と遊ぶのが楽しみなんだー!!」

するとピノッキモンは、本当に嬉しそうな顔をして再び歩き始めた。

……やっぱこいつは馬鹿だろ……

タケル君もピノッキモンを見て、俺と同じで呆れていた。

side 光子郎

「どうする、このままジッとしておくのか？」

今まで黙っていたテイルモンが、痺れを切らしたのか僕にそう話し掛けてきました。

……皆さんと突然はぐれたのは、恐らくピノッキモンの力でしよう。

このまま此処に居ても、僕達は奴の手の中で踊らされているだけです。

それなら、皆さんと合流した方が良いでしょう。

「皆さんを探しましょう。」

このまま動かずに時間を減らすくらいなら、動いた方が良いでしょう。

幸い、デジヴァイスの力で皆さんの居場所が分かります。

……急ぎましょう、誰かがピノッキモンと接触しているかもしれないから！」

僕が皆さんにそう提案すると、皆さんは頷いてくれて賛成してくれました。

僕達は木の枝から降りて、皆さんを探し始めました。

side 丈

「丈先輩、さっきから歩いてますけど、この道を進む根拠は在るんですか？」

僕が歩いていると、後ろを歩いている空君が僕に聞いてきた。

「勿論あるさ。」

僕はデジヴァイスが反応した方に進んでいるんだ。

多分、この先に誰かが居るに違いない。

一刻も速く皆と合流したいからね。」

「丈先輩がしっかりしてる……気を付けましょ、ミミちゃん。」

「そうですね、空さん。」

僕は二人にそう言ったら、空君と空君の隣を歩いているミミ君が小さい声でそんな会話をしていた。

……二人とも……全部聞こえてるよ……

「丈、丈。」

僕が落ち込んでいると、僕の隣を歩いていたゴマモンが話し掛けてきた。

ゴマモン、お前って奴はあ!!

「少しくらいしっかりしても丈は丈だ。その内、何時もの鈍臭い丈になるよな?」

「ゴ〜マ〜モ〜ン〜!!!!」

僕はゴマモンの体を持ち上げ、ゴマモンの体を素早く何度も揺らした。

「さ、皆の所に行こう!!」

僕はゴマモンを揺らしながら皆の所に向かった。

第五十一話だよ！（後書き）

次回は航とタケルがピノッキモンと戦う？

お楽しみに！！

第五十二話だよ！（前書き）

テストが終わったー！！！！

テストが終わったので執筆活動を本格的に再開します！！！！

今まですいませんでした！！！！

第五十二話だよ!

side 太一

ガブモンが突然、ヤマトに呼ばれたと言って走り出したので、俺とアグモンはガブモンに後を走って付いて行っている。

「!?」

ヤマトー!?!?!」

すると俺達の前に誰かが倒れていたが、ガブモンがヤマトの名を叫んだので倒れている人物はヤマトだと分かった。

ガブモンが走るスピードを上げたので、俺とアグモンもスピードを上げてヤマトの所へ走って行った。

其処には、赤い紐の様な物を巻き付けられていたヤマトが倒れていた。

「ヤマト!」?

アグモン、ガブモン、この紐を斬ってくれ!」

「「分かった」」

俺はアグモンとガブモンに指示を出して、アグモンとガブモンは俺の指示に従ってヤマトに巻き付けられていた紐を斬り始めた。

「太一さん!」

「太一!」

すると別々の方角から俺の名前が呼ばれた。

俺は声が聞こえた方角を見た。

「光子郎!!」

丈!!」

それに皆も!!」

バラバラになった皆（航とタケルを除く）が、俺達の所へ無事に集まった。

「ゲホッゲホッ!!」

俺が皆が集まった事に喜んでいたら、後ろでヤマトが苦しそうに咳をした。

「大丈夫か、ヤマト？」

俺がヤマトの背中をサスってそう聞くと、ヤマトは咳をしながら俺を睨んで来た。

……何だよ？

「俺の事はどうでも良い!!」
速くタケルと航を!!」

するとヤマトは何かを焦った様な顔をしながら、俺の胸ぐらを掴んでそう言ってきた。

「落ち着けて、ヤマト!!」

どう言う意味だよ？

ちゃんと俺達に分かる様に説明してくれ。」

俺はヤマトを落ち着かせて、俺達に分かる様に説明する様に言った。

「タケルと航が……」

俺がヤマトに言うと、ヤマトは少し落ち着いて話し始めた。
……タケルと航が？

「……ピノツキモンに攫われたんだ!!!」

……

……

……

……

な、何だと!!？

「それは本当なの、ヤマト!？」

ガブモンは此処に居る誰もが思った疑問を、ヤマトに聞いて確認を取った。

だがヤマトは、頭に手を当てて顔を縦に振るだけだった。

「……しかも航は、ピノツキモンと死ぬ気なのかもしれないんだ!」

な、なんだと!？

「急いで航とタケルを探そう!!」
未だ、この近くに居るかもしれないよ!!」

するとアグモンは俺達に、俺達が今やらなければならない事を言ってくれた。

そうだ、今から探せば未だ間に合うかもしれない!

「それじゃあ二人一組か三人一組になってくれ!!」
ピノッキモンを見つけたら、何かしらの合図を出すんだ!!」
良いな!？」

俺が直ぐに指示を出して聞くと、皆は真剣な顔をして頷いた。

「俺が護ってやらなきゃいけないのに……俺はアイツに護っても
らうなんて……チクシヨオオオオ!!!!」

ヤマトは地面を思いっきり殴って、悔しそうに大声を出してそう
叫んだ。

side 航

「タケル君、伏せろ!!!!」

ドキューーーーン!!

俺達は今、ピノッキモンの屋敷の中でピノッキモンと命懸けの遊びをしている。

それは“戦争ゴッコ”と言う遊びらしい。

ルールは簡単、相手を殺すと勝ち、相手に殺されると負け。

これを遊びと言うのだから、ピノッキモンは頭が狂ってるに違いない。

俺はタケル君を護る為に、ピノッキモンに渡されたサイレンサー付きのライフルでピノッキモンを攻撃している。

「アハハハ、やっぱ楽しいね!!」

次は僕の番だよ!!」

ピノッキモンは俺達にそう言って、拳銃を構えて発砲してきた。

俺とタケル君は階段に隠れて弾に当たらない様にして、ピノッキモンに聞こえない位の声で会話を始めた。

「タケル君、この屋敷にピノッキモンが作った人形を置いてある部屋が在る。

その部屋は、俺達を監視出来る様になっているんだ。

俺がピノッキモンの注意を引き付けるから、その部屋に在る物全てを壊してきてくれ。」

「で、でも航君が!!!」

俺がタケル君に指示を出す、タケル君は俺の指示を聞いて驚いた顔をして戸惑った声でそう言った。

……タケル君は優しい、優しすぎる。

だけど、今は俺の心配をしている時間は無いんだ!!

「大丈夫、俺は死なないから!!」

だから行くんだ、タケル君!!
……速く!!」

俺が真剣な顔をしてタケル君に言うと、タケル君は走ってピノツキモンの部屋を探しに行った。

「……あゝれゝ、タケルが何処か行ったなあ？
まあ、航が居るから良いか!!」

すると後ろに居たピノツキモンが、タケル君が走って行く姿を見てそう言った。

……クズが!!

「俺の名前を呼ぶなあ!!」

俺は階段から乗り出して、ライフルを構えてピノツキモンに撃とうとした。

だけど……

ドキューーーン!!!

「ぐわあああああああ!!!!!!?」

だが俺は撃つのが少し遅れた所為で、俺はピノツキモンが撃った弾を喰らった。

ピノツキモンが撃った弾は俺の右肩に当たり、右肩からは血が沢山出てきた。

クソッ、右手の感覚が無くなっちゃった……

「クソがッ!!!」

俺は左手で撃たれた右肩を押さえて、ライフルをピノッキモンに蹴り付けて逃げ始めた。

「ハハハ、良いね！

面白くなってきたね!!!」

ピノッキモンは、ライフルを簡単に避けて俺を見ながらそう言うてきた。

俺にはピノッキモンのその声が、悪魔の囁きの様に聞こえた。

sideタケル

僕は航君に言われて屋敷を走り回って、漸く航君が言っていたピノッキモンの部屋を見つけた。

そして僕は部屋の中に入ると……

「これが僕達をバラバラにした物なのかな？」

僕の目の前にはテレビ、リモコン、この森の地図、そして僕達の人形が在った。

僕は近きに落ちていたりリモコンを拾って、試しにリモコンのスイッチを押してみた。

ポチッ!!

僕がリモコンのスイッチを押した瞬間、テレビに映っていた道が突然動き始めた。

「こ、この所為で道が動いてたの!?!
じゃ、じゃあ、この人形は?」

僕は試しに、お兄ちゃんの人形を丈さん達の所に置いた。

『や、ヤマト、何で此处に!?!
さっき、太一と一緒に別の方角に航君達を探しに行ったんじゃあ…
…?』

『俺にも分かんねえよ!!
一体どうなってんだよ!?!』

するとテレビの画面に丈さんと、太一さんとさっき迄一緒に居たお兄ちゃんが映っていた。

「これの所為で、皆がバラバラになったんだね!!」

僕は皆がバラバラになった原因を分かったので、急いで皆の人形を背中に背負っていた鞆に詰めた。

「タケルー!!」

すると窓から空を飛んできたパタモンが、僕の名前を呼びながら部屋に入ってきた。

「良かった、無事だったんだね!!」
「……あれ、航は？」

パタモンは僕を見て凄く嬉しそうな顔をして言ってくれたけど、今度は顔を傾けて航君の事を聞いてきた。

そ、そうだ!!

「パタモン、今直ぐ進化して航君を助けに行って!!」

航君は今、僕の為に囧になってピノッキモンと戦ってるんだ!!」

僕がパタモンに航君の事を言うと、パタモンは凄く焦った顔をした。

「た、大変だ!!」

航は僕に任せて!!

……タケルはどうするの？」

「僕はこの部屋を壊して行くよ!!」

パタモンは航君を助けたら、この部屋に戻ってきて!!

三人で脱出するんだ!!」

パタモンは僕の作戦を聞いて、黙って僕の作戦に頷いて賛成してくれた。

「パタモン、進化だ!!」

僕がパタモンにそう言うと、僕のデジヴァイスが光り出した。

「パタモン進化!!」

……エンジェモン!!」

パタモンはエンジェモンに進化して、飛んで航君の所に向かった。

「速くこの部屋を壊さないと!!」

僕は床に落ちていたトンカチを拾って、部屋に在る物を壊し始めた。

Side 航

「ハア……ハア……ハア……」

俺は右肩を押さえながら、ピノッキモンからずっと逃げている。拳銃の弾は貫通しているので体の中には残っていないが、血がその貫通した穴から沢山出続けている。

「ハア……ハア……目が……霞んできやがった……」

血を止血もしないで流し過ぎた為、俺の視界が霞んできた。

フラフラして倒れそうになったが、それでも俺は倒れずに歩き続けた。

……タケル君と……タケル君と約束したからな……

『俺は死なない。』って……

「アハハハ、見つけた!!」

俺はそう思いながら歩いていると、ピノッキモンが拳銃を俺に構えて俺の前に現れた。

「ハア……ハア……ハア……」

ピノッキモンが現れたのだが、それと同時に視界がかなり霞んできた。

……俺……死ぬのかな……？

ピカーーーーン！！

俺がそう思った時、腰に付けていたデジヴァイスが光り始めた。

「「サンモン（ムンモン）進化ー！！」

……コロナモン（ルナモン）！！」

するとデジヴァイスからサンモンとムンモンが出てきて進化し、コロナモンとルナモンになって俺の前に立った。

「航は死なせねえ！！」

「航君には指一本触れさせない！！」

コロナモンとルナモンは身構えてピノッキモンにそう言うが、ピノッキモンは余裕の笑みを崩さなかった。

「アハハハ！！」

君達に何が出来るって言うのさ！？
……僕をバカにするんじゃないよ。」

するとピノッキモンは、俺達に濃い殺気を放ちながらそう言った。
きた。

「もう良いや、航も死にそうだし……タケルと遊ぼ!!
だから、死んじゃえ!!」

そう言ってピノッキモンは拳銃を捨て、背中に掛けていたハンマーを持った。

「ブリット「ヘブンズナックル!!!」ギャアアアアアア!!!」

ピノッキモンが必殺技の“ブリットハンマー”をしようとした時、後ろから光の光線みたいなのがピノッキモンに当たり、ピノッキモンは悲鳴を出してぶっ飛んで行った。

俺はフラ付きながら後ろを見た。
視界が霞んでよく見えなかったが、天使が宙を飛んでいて俺に頬笑んでいた。

「迎えが……来たのか……?」

俺は天使を見てそう呟いて、倒れて意識を失った。

sideエンジェモン

「航!!」

私を見た航は、ゆっくり床に倒れた。
私は直ぐに航の側に飛んで行った。

「!？」

こ、これは……酷い。」

私は航の右肩を見てそう言った。

血がかなり出ており、服も血でかなり汚れていた。

「コロナモン、ルナモン、私が航を背負って行く。

タケルとこのまま逃げるから、タケルが居る部屋に行こう!!
ピノッキモンは未だ倒せてないから。」

私がそう言うと、コロナモンとルナモンは無言で頷いてくれた。

私は航を背中に担ぎ、タケルが居る部屋に向かった。

第五十二話だよ！（後書き）

次回はヤマトが航を見て悩み、苦しみ、辛くなります。そこに現れたのが・・・

お楽しみに！！

第五十三話だよ！（前書き）

無理矢理な部分がありますが、気にしないで読んでくれたら幸いです

第五十三話だよ！

sideタケル

「タケルー！！！！」

僕が部屋を壊し終えたと同時に、廊下からエンジェモンが僕の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

僕は急いで部屋を出て、エンジェモンと航君を向かいに行った。

「エンジェモン、航……………く……………ん」

僕は航君の状態を見て何も喋れなくなった。

何故なら、航君はエンジェモンに背負われていたんだ。

……………それだけだったら未だ良いよ。

航君は血だらけで背負われていたんだ。

「……………航君、大丈夫！？」

エンジェモン、航君は大丈夫なの！！？」

僕は正気に戻って、エンジェモンに近付いて航君を見ながらエンジェモンに聞いた。

「……………今は未だ何とも言えない。

だから、急いで脱出しよう！！」

エンジェウーモンの力なら、何とか出来るかもしれないから！！」

エンジェモンは僕が聞いた質問を丁寧に答えてくれた。

そ、そうだ！！

エンジェウーモンは一回、航君の傷を治した事が在るんだ！！

「分かった、急ごう!!」
エンジェモン、お願い!!」

僕は直ぐにエンジェモンに背中に乗って、航君を支えながらエンジェモンにそう言った。

コロナモンとルナモンは、僕がエンジェモンの背中に乗ったから航君のデジヴァイスの中に入った。

「行くよ!!」

エンジェモンは僕にそう言って飛んで、僕達は屋敷を出た。

side 太一

「ヤマトー、タケルー、航ー!!!!」
居たら返事をしてくれー!!!!」

「ヤマトー、タケルー、航ー!!!!」

俺とアグモンとガブモンは、三人の名前を叫びながら森の中を走っている。

ヤマトに至っては突然消えたから、俺達だけで今は行動している。
速く航とタケルを見つけないと、二人はピノッキモンに……………

ブンブン!!!!

俺は首を振り、その考えを頭の中から消そうとした。けど、その考えは頭の中から消えなかった……

『しかも航は、死ぬ気かもしれないんだ！！！』

信じたくない事実。

だが、航は絶対に自分の命を懸けて戦うに違いない……

……ヤマトの言う通り、俺は……否、俺達は護られてるのかもしれねえ。

「ん？」

……！？

太一、あれを見て！！！！！！」

俺がそう思い込んでいると、アグモンがある方向に指を差して俺にそう言ってきた。

「ん？」

……！？

ま、まさか、二人が見つかったのか！！？」

俺達が見たものは、空に浮かぶ雷の固まりだった。

カブテリモンの必殺技の“メガブラスター”だろう。

「急ごう！！！！」

「「うん（分かった）！！！！」」

俺達は雷の固まりが浮いている場所まで、急いで走って向かった。

.....

.....

.....

.....

「うそ……………だろ……………」

俺はその光景を見て目を疑いながら、小さい声でそう呟いた。
何故ならその光景とは……

『航（君）、目を覚ますんだ（覚ましてください）！！！！
航（君）！！！！』

「エンジェウーモン、もっと力を上げてくれ！！！！」

「分かっている、ウィザーモン！！
だが、これが最大なんだ！！」

「わたるくん、めをさましてよ！！！！
わたるくん！！！！」

航が血だらけになっている光景だったからだ。
エンジェウーモンは、自分の力で航の傷を治そうとしているが、
血は止まらず傷口は中々塞がらないので苦戦していた。
ウィザーモンは、エンジェウーモンの体力が切れない様に色々と
自分の力を使っていた。

デジモン達は、ピノッキモンやピノッキモンの部下が来ない様に見張りをしていた。

他の皆は、航に目を覚ます様ずっと叫んでいた。

「……!？」

太一、貴方も手伝ってよ!!

只でさえ、今はヤマト君が居ないんだから!!」

すると俺に気付いた空が、ヤマトが居ない事を言って俺に手伝う様言ってきた。

……ヤマトが居ないだど!?

だ、だけど、今はヤマトの方は後回しだ!!

今は、航を救う方が先決だ!!

「わ、分かった!!

俺は何をすれば良い!？」

アグモンは見張りに向かって、俺は空の所に向かい、何をすれば良いのか聞いた。

その時、ガブモンが何処かに行っていたが、気にする余裕も無かった。

side ヤマト

俺はどうすれば良いんだ……

タケルを護る事が出来ない……

航が死にそうなのにどうする事も出来ない……

俺は、俺は……！！

「どうすれば良いんだ！！」

俺は湖に向かって大声で叫んだ。

「ヤマトー！！」

すると後ろから、ガブモンが俺の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「……何だよ……」

俺はガブモンの顔を見ずに応えた。

「何でこんな所に居るのさ！？」

今は航が大変なんだよ！！

こんな所で、ブラブラしてちゃダメじゃないか！！」

ブラブラ……だと？

「じゃあ俺は、航の所に帰って何が出来るんだよ！！」

俺はガブモンに顔を向けて、ガブモンを睨みながら大声で叫んだ。
そうだ、俺が航の所に帰っても状況は何も変わらない！！

「航は……航は……タケルを庇ってあんな大怪我を負ったんだ!!
俺がタケルを護るって決めたのに……俺は航に、皆に護られたんだ
!!」

……俺は……俺はどうしたら良いのか分かんねえんだよ……」

俺はその場で膝を付いて、顔を下に俯かせてそう言った。

航の怪我を俺が代わりに受けてやりたい……

あの怪我は、俺が受けなきゃダメだった怪我なんだ……

俺は……俺は何時も見てるだけだった!!

エンジェモンがデビモンを倒す時も!!

太一とメタルグレイモンがエテモンを倒す時も!!

皆がピコデビモンの所為でバラバラになった時も!!

何時も俺は見ているだけだった!!

ヴェノムヴァンデモンを倒す時は俺も戦えたと思った!!

俺は漸く変わったと思った!!

だけど!!

こっちの世界に戻ってきてきてチューモンが死んだ時、航が暗黒エネ
ルギーを使った時だって俺は見てるだけだった!!

俺は皆とは戦ってないんだ!!

俺は何も変わってなかったんだ!!

どうすれば良いんだよ……

「ホッホッホ、随分と悩まれていますな。」

俺がずっと後悔していると、横から大きな木の様なデジモンが現
われて、俺に話し掛けてきた。

「お前は誰だ!!」

ガブモンは俺の前に立ち、大きな木の様なデジモンに叫んだ。

「ワシの名はジュレイモン、この森のデジモンじゃ。」

……其処のお主、ワシの言う事を聞けばお主が一番望んでるもの、お主が聞きたい答えを答えてやろう。」

すると大きな木の様なデジモン・ジュレイモンが俺を見てそう言うてきた。

な、何だと!?

「教えてくれ!!」

航はどうすれば救える!?

俺はどうすれば変われるんだ!?

俺は直ぐに立ち上がって、ジュレイモンに近付いてそう聞いた。

「良いですか?

これは覚悟が無いと出来ませんか?

今なら諦める事も可能ですぞ?」

するとジュレイモンは、何処か優しい声で俺に聞いてきた。

覚悟?

……そんなもん!!

「覚悟なら既に在る!!」

俺は航を救いたいんだ!!

俺は今直ぐに変わりたいんだ!!

頼む、教えてくれ!!」

俺は自分の思いを全てジュレイモンに言って、ジュレイモンに頭

を下げて頼んだ。

「……そうですか、なら先ずはこれを。」

するとジュレイモンは、何かの液体が入った一つのビンを俺に渡してきた。

「それを塗るだけで傷口は塞がります。」

「嘘だ!!」

エンジェウーモンの技でも塞がらないでいるのに、そんな液体で塞ぐわけじゃないか!!

ヤマト、ソイツに騙されちゃダメだ!!」

ジュレイモンがこの瓶の中に入っている液体の事を説明してくれたが、ガブモンはジュレイモンの言葉を否定して俺にそう言ってきた。

「ホッホッホ、なら試してみても如何でしょうか?」

ジュレイモンは余裕の笑みを崩さずに俺達にそう言ってきた。

確かにな……

俺は手袋を外し、下に落ちていた木の枝を拾って木の枝で俺の手の甲をを刺した。
ッ!?

「や、ヤマト!?

な、何してるのさ!?!」

ガブモンは俺に近付いてきて、心配した顔をして俺に聞いてきた。

俺はジュレイモンから貰った薬を、血が出ている手の甲に塗った。
そしたら、血が止まって直ぐに傷口が無くなった。

「う、嘘……」

ガブモンは信じられない顔をしていたが、俺自身も驚いている。

「ホッホッホ、どうですかな？」

ジュレイモンが愉快に笑いながら俺に聞いてきた。

……これなら航が救える！！

「ありがとう、ジュレイモン！！

これで航を救える！！

それで、俺が変わるにはどうしたら良い！？」

俺は希望が湧いて、笑顔でジュレイモンに聞いた。
するとジュレイモンの口を開け、喋り始めた。

「……ライバルを倒す事です。」

第五十三話だよ！（後書き）

次回は太一とヤマト、ウオーグレイモンとメタルガルルモンの戦いが始まる！！

お楽しみに！！

第五十四話だよ！（前書き）

やっぱり今回も無理矢理です

本当にすいません

第五十四話だよ！

sideやマト

「……ライバルを倒す事です。」

「ライバル……だと？」

ジュレイモンの突然変な事を言ってきたので、俺はジュレイモンの言葉を鸚鵡返しで聞いた。

「そうです、ライバルを倒す事です！

貴方と常に反対の立場に居る人間、その人間を倒す事で貴方は生まれ変わるんです！！」

ジュレイモンは握り拳を作って、俺に力説をしてきた。

……ソイツを倒す事で俺は変わる……

だが、俺のライバルと呼べる人物は誰なんだ？

「その湖に姿を映して御覧なさい。

貴方のライバルの姿が現れます。」

俺はジュレイモンの言う通りに湖に近付いて、自分の姿を湖に映した。

すると、湖には俺の姿ではない誰かの姿が映ってきた。

「……な、何だと！？」

俺は湖に映し出されたライバルの姿を見て、俺は声を出して驚いた。

side航

此処は何処だ……………？

俺は何で此処に居るんだ……………？

俺は一体何をしてたんだ……………？

だけど、一つだけ分かる事が在る……………

此処は……………

……………冷たい……………

sideヤマト

「……………！？」

や、ヤマト、これは嘘だ……！

だ、だって、だって……！

太一がライバルなんて有り得ないよ……！！」

ガブモンが俺の隣にやって来て、湖に映し出された奴を見て俺にそう言ってきた。

……確かにガブモンの言う通りだな。

「……ハッハッハ!!」

ジュレイモン、冗談は止してくれ!

俺と太一がライバルな訳無いだろ!!」

俺はジュレイモンを睨んで大声でそう叫んだ。

そうだ、太一は仲間なんだ!

俺が倒すべき奴じゃないんだ!

「ホッホッホ、冗談など言いません。

其処に映された人物こそ、お主のライバルなんですぞ。」

!?

「ふざけるのもいい加減にしろよ!!」

俺と太一は仲間なんだ!!

戦える訳無いだろ!!」

俺は更にジュレイモンを睨み付けてそう叫ぶと、ジュレイモンは不気味に笑い始めた。

「だから最初に言ったでしょう、覚悟は在るか?と。お主は在ると答えた。

その湖は心の中を映し出すのです。

……よく思い出してごらんなさい。

太一とお主、全てが正反対。

その為、幾度もなく対立しあった。

お主の中では太一の存在が大きく、憧れておるのですよ。」

俺はジュレイモンの言葉を聞いて、膝を付いて倒れそうになった。

……ジュレイモンの言う通り、俺と太一は何時も対立していた。

……俺は太一に憧れていたのか？

……俺が変わるには、太一を倒さないといけないのか？

「自分が望む自分になるには、彼を越えなくてはならないのです。」

俺は両腕を地面に付けて、首に掛けてある紋章を手にとって見た。

「どうして俺みたいな奴の紋章が友情なんだよ……」

俺は涙を堪えて、小さい声でそう呟いた。

「……ヤマト、俺はどんな事が遭ってもヤマトを信じる。

ヤマトはヤマトのやりたい様にすれば良い。

俺はヤマトに付いて行くから。」

するとガブモンは真剣な顔をして、俺から目を逸らさずに俺にそう言ってくれた。

ガブモンの言葉を聞いて、俺は遂に涙を流してしまった。

「ガブモン……」

俺は泣きながらガブモンの名を言うと、紋章とデジヴァイスが光り出した。

「ガブモンワープ進化ー！！！！」

……………メタルガルルモン！！！！！！」

ガブモンはメタルガルルモンにワープ進化して、俺の前に腰を下ろしてくれた。

「メタルガルルモン……俺と来てくれるか？」

「俺はヤマトに付いて行くよ！
行こう、太一の所へ！！」

そして俺はメタルガルルモンの背中に乗って、メタルガルルモンと一緒に俺達が倒すべき相手・太一とアグモンの所に向かった。

side ジュレイモン

まさか此処迄の友情の紋章の力が在るとは……

しかし、ウオーグレイモンとメタルガルルモン、二体の究極体がぶつかり合えば……

全ては計画通りですな、ほっほっほっ。

「ジュレイモン、どうして薬をあげたのさあ？」

ワシが心の中で一人で笑っていると、後ろに居たピノッキモン様がワシに聞いてこられた。

「ヤマトに太一と戦えと言っても戦わなかったでしょう。
先ずは、ワシの事を信用させなければなりませんでした。
ですが、所詮一人の選ばれし子供の怪我が治ったとしても、ワシ等の勝利は決まったも当然ですぞ。」

ウォーグレイモンとメタルガルルモンは、攻撃・防御・素早さ・テクニク・究極体の強さ、若干の優劣は在ったとしても総合的に見れば略互角。

戦いの結果は考えなくても引き分けでしょう。

二体の究極体を失った選ばれし子供など、ワシ等の敵ではありませんからな。

「よし!!」

こんなスーパーバトルを見逃す訳にはいかないよ!!
急がないと!!」

するとピノッキモン様は二体のバトルを観る為に、選ばれし子供達の所へ走り始められた。

……そうじゃ!!

「ピノッキモン様、くれぐれも選ばれし子供達には気をつけなされ!!」

ワシがピノッキモン様にそう言うと、ピノッキモン様は急に立ち止まられた。

「僕が………負けるんでも思っただのかい？」

するとピノッキモン様は、何時もの声の高さでは無い低い声でワシに聞いてこられた。

「そうです!!」

ピノッキモン様には無く、奴等には在る物が在ります!!
なので、気を付けて下され!!」

ご用心しないとピノッキモン様は負けてしまわれるでしょうから。

「僕が……僕が負ける訳無いだろ……!!」

ピノッキモン様はコチラを向いて、ワシに攻撃してきた。

「ぎゃああああああああ………」

sideピノッキモン

「ふん、僕が負けるなんて言うからだ……」

僕はハンマーを背中に戻して、ジュレイモンが居た場所にそう言
って走り出した。

「航……タケル……お前達は許さない!!
絶対に殺してやる!!」

僕はそう言って、走るスピードを更に上げた。

第五十四話だよ！（後書き）

次回は航の夢の中& a m p; 太一とヤマトの戦いです

お楽しみにー！！！！

第五十五話だよ！（前書き）

ヤバイ・・・

今まで以上に無理矢理& a m p、ご都合主義です

今回は戦闘までの話です

ヤマトのキャラが崩壊しますので気を付けて下さい！！

それでは、スタート！！！！

第五十五話だよ！

Side 航

……冷たい……

……どうして冷たいんだ……？

……どうして俺は此処に居るんだ……？

『まずは貴様、テイルモンに罰を与えないとな。』

……何だ……？

……ヴァンデモンの声が聞こえる……

『危ない！！
グハッ！！』

……この声は……

……俺なのか……？

『航、何故私を庇った！？』

……そしてこの声……テイルモン……なのか……？

……もしかして……

……これは……

……俺の……

……失われた記憶なのか……

『そうだ

……お前の大切な記憶だ。』

……もう一人の……俺……？

『さっさと思い出せよ、俺』

……分かった……

side 太一

「ん？」

……！？

太一、アソコにヤマトが居るよ！！」

何だと！？

俺は航からアグモンが指差した方に視線を移した。

其処には、メタルガルルモンとコッチに歩いてくるヤマトの姿が在った。

「ヤマト、心配したんだぞ。

何処n「来るな！！」な、何を言ってるんだよ！？」

俺がヤマトに近付こうとしたら、ヤマトが俺に近付くのを止めろと言ってきた。

「……丈、これを航の傷口に塗れ。」

ヒューーン

「えっ！？

おっとっと……ふうー、なんとか落とさずに済んだ。

……ヤマト、これを航の傷口に塗って意味が在るのかい？」

ヤマトは液体が入ったビンを丈に投げ、無事にキャッチ出来た丈はヤマトに聞いた。

「さっさと塗れって言っただろ!!」

「わ、分かったよ!!」

丈はヤマトに睨まれながら大声で言われたので、それにビビってヤマトの言う通りにする為に航の所に向かった。

「おいヤマト、その言い方は酷過ぎるぞ!

……ちゃんと丈に謝れよ。」

俺はヤマトの様子が可笑しかったが、それは航が大怪我したからだと思ったので、特に気にする事無くヤマトにそう言った。

「フン、お前は何時から説教する様な偉い奴になったんだ?」

「な、何を言っただよお前は!?

俺が何時お前に説教をしたんだよ!?

ヤマト、お前少し可笑いぞ。」

「俺は可笑しいんだよ、お前と違ってな!!」

俺は少し切れて怒り口調でヤマトに言うと、ヤマトは更に俺に突っかかってきた。

ど、どうなってんだよ!?

今のヤマトは少し、否、かなり可笑し過ぎる!!

「止めて太一、ヤマト!!
喧嘩は善くないよ!!」

するとアグモンが、俺とヤマトの間を割って入って来て俺とヤマトにそう言ってきた。

「煩い、お前には関係ないんだよ!!」

俺は今、太一と話してんだ!!

お前は引っ込んでろ!!」

な!?

「ヤマト、いい加減にしろよ!!」

アグモンは俺達の為に言ってくれたんだぞ!!

アグモンは俺達の仲間だろうが!?

どうしてそんな酷い事を言うんだ!?

俺はアグモンが酷い事を言われて、完全に切れてヤマトにそう言った。

ヤマトが仲間のアグモンに酷い事を言う訳無い!!

このヤマトは偽物なのか?

「……アグモン、俺と戦え!!!!」

すると突然、ヤマトの隣に居たメタルガルルモンがアグモンに戦う事を要求してきた。

「な、何を言ってるのさ!?

僕達は仲間なんだよ!!

どうして「コキュートスブレス!!!!」うわあっ!?

アグモンが話してる途中に、メタルガルモンは必殺技の“コキユートスブレス”をアグモンの足元に放った。

「次は外さない……ウォーグレイモンにワープ進化して、俺と戦え……!!」

……コイツ等、やっぱり偽物だ!!

「いい加減正し」た、大変だー! ヤマトが持ってきた薬を塗ったら、航君の傷口が塞がったんだー!!」な、何だと!？」

俺が目の前に居るヤマト達に正体を出せと言おうとした時、丈が俺の言葉を遮って走りながら俺達にそう言ってきた。

じゃ、じゃあこのヤマトは本物……なのか？
なのに、何で戦わなくちゃいけないんだ!？

「コキユートスブレス!!!!」

するとメタルガルモンは、俺の足元に必殺技の“コキユートスブレス”を放ってきた。

「太一!？」

……本気なんだね？」

「嗚呼、速くワープ進化させて俺と戦え!!」

「ヤマト、俺達がお前の目を覚まさせてやる!!」

「俺の目はとっくに覚めてるよ!!!!」

俺達がそんな会話をし終えた時、俺のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「アグモンワープ進化ー！！！！」

……………ウオーグレイモン！！！！」

「行くぞ、ヤマト（メタルガルルモン）！！！！」

「来い、太一！！！！」
ウオーグレイモン

そして俺とヤマト、ウオーグレイモンとメタルガルルモンの戦いが始まった。

side 航

……………そうか……………

……………そうだったのか……………

……………だから俺が怪我した時、ヒカリちゃんが異常な位迄に心配するのか……………

……俺は怪我をしながらも、ヒカリちゃんと一緒にヴァンデモンを倒したのか……

『また記憶を少し取り戻したみたいだな……』

嗚呼、ヴァンデモンをどうやって倒したのかをな。

『フッ、なら今のお前は此処には用はないだろ。
さっさと意識を覚醒させろ。
何時迄も此処に居る気か？』

そんな訳無いだろ……ありがとな、もう一人の俺。

『どういたしまして、俺。』

じゃあな……

そして俺は意識を覚醒させた。

第五十五話だよ！（後書き）

今回はウォーグレモンとメタルガルルモンの戦いです！！
航は目が覚めるがそこで見たものに対してどう思うのか・・・

楽しみに！！

第五十六話だよ！（前書き）

太一とヤマトの喧嘩の話です

それなのにデジモンが活躍しない・・・

期待した方すいませんo r t

第五十六話だよ！

s h d e 太一

「オラァ！！」

ドスッ！！

「グッ……ハァァ！！」

バキッ！！

「ッ！？

いい加減目を覚ませよ、ヤマト！！」

バカッ！！

「ゲホッ！！

目は覚めてるよ、太一！！」

俺とヤマトは今、今迄やった事の無い殴り合いや蹴り合いをしている。

ウォーグレイモンとメタルガルルモンは、俺達の遙か上空で戦っ

ている。

皆は、少し離れた場所で俺達の戦いを見守ってくれている。

「よそ見してて良いのかよ!!」

ドスッ!!

「グハッ!!」

俺が皆を見ていたら、ヤマトは俺の腹を思いっきり殴ってきた。
俺はよそ見をしていたので、防御する事が出来ずヤマトの攻撃を
もろに喰らった。

「お前は今、俺と戦ってるんだ!!
何よそ見してんだよ!？」

俺にヤマトは睨みながらそう言って、今度は思いっきり俺を蹴ろ
うとしてきた。

「そうはいくかよ!!」

俺はヤマトに突進してヤマトを押し倒して、俺はヤマトに馬乗り
になってヤマトの顔を思いっきり殴った。

「何で俺達が戦わなきゃいけないんだよ!?
俺達の敵はダークマスターズだろ、ヤマト!？」

バキッ!!

「ッ!!」

俺は変わらなくちゃいけないんだ!!

そうでないと、俺は大切な物を失う!!

その為には太一、お前と戦って勝たなくちゃいけないんだよ!!
オラッ!!」

俺はヤマトに殴って問いかけるが、ヤマトは俺が望んだ答えを言うてきた。

そしてヤマトは俺にそう言うのと、馬乗りしていた俺を足を使って吹っ飛ばしてきた。

俺は余りにも突然だった為、意図も簡単に吹っ飛ばされた。

「変わらなくちゃいけないって、何で変わらなくちゃいけないんだよ!!?」

俺と戦って変われる訳無いだろ!!

自分を変えたきゃ、自分で変わるしかないだろ!!」

俺はヤマトにそう言うて、立ち上がってヤマトに殴りに行こうとした。

「俺には...俺にはもう、どうする事も出来ないんだよ!!」

ヤマトも俺にそう行って、立ち上がって俺に殴り掛かってきた。

「止めろ!!」

ドカアアアアアン!!!!!! ×2

すると誰かの声が聞こえたと思ったら、俺とヤマトの間と上空から大きな爆発音が聞こえた。

「何してんすか……？」

俺達は仲間じゃないんですか……？

太一さん、ヤマトさん!!!」

煙が晴れると其処には、フレアモンとウィザーモンと一緒に立っていた航が居た。

時間は少し遡る……

side航

「うっ……此処は？」

「航、目が覚めたか!？」

俺が目を開けて意識を覚醒させると、俺の横に座っていたウィザーモンが心配した顔をして俺に聞いてきた。

「あ、嗚呼……皆は？」

俺は未だ体が怠かったので言葉を詰まらせて応えて、少し間を開

けて明の居場所をウィザーモンに聞いた。

何故なら、俺の周りにはウィザーモン以外の姿が無かったからだ。

「……………皆は太一とヤマトを見守っている。」

・

・

・

・

「は、何で？」

俺はウィザーモンの言葉を聞いて一瞬、脳などが機能停止をしたが直ぐに正気に戻り、間抜けな声でウィザーモンに聞き返した。

何で太一さんとヤマトさんを見守ってる訳？

「太一とヤマト、ウォーグレイモンとメタルガルルモンが戦っているからだ。」

な！？

「な、何で戦ってたんだよ！？意味分かんねえよ！？」

俺はウィザーモンの言葉を聞いて、大声を出して驚いた。

太一さんとヤマトさんの戦闘フラグは俺が完全に折った筈だ！！

ヤマトさんとタケル君の仲もギスギスしてない！！

何処に二人が戦う理由が在るんだ!!

「止めないと!!」

俺は立ち上がろうとするが、ウィザーモンに腕を掴まれてそれを制止された。

「離せ、ウィザーモン!!」

俺は止めないといけないんだ!!」

「航が行って何が出来るんだ!？」

相手は究極体二体、私達では止める事は出来ないんだぞ!!」

俺がウィザーモンを睨みながらそう言うが、ウィザーモンは俺に正論を言ってきた。

……確かに、完全体なら究極体を止める事は出来ない。
普通の(・・・)完全体だったらの話だがな……

「大丈夫だ!!」

コロナモン、ルナモン、リアライズ!!」

俺はデジヴァイスを腰から外して、デジヴァイスからコロナモンとルナモンを出した。

「今から太一さん達を止める、力を貸してくれ!!」

「「嗚呼!!!!」」

二体が真剣な顔をして返事をしてくれたので、俺は目を瞑って心を落ち着かせた。

「（もう一人の俺、聞こえてるか？）」

『嫌と言う程聞こえてるよ。』

「（今から暗黒エネルギーを使う。だから、制御の方を頼む！！）」

『チッ、分かったよ……五分が限界だ。』

其れ迄に説得をしろ。』

もう一人の俺は俺にそう言って、もう一人の俺を感じなくなった。
五分も在れば十分だ！！

「（分かった！！頼むぜ！！）」

俺は目を開け、心の中を負の感情で一杯にした。

そうすると、力が溢れてきたがそれと同時に気分が気持ち悪くな
ってきた。

「わ、航、その力は！？」

「大丈夫、意識は十分保ってるよ。」

……コロナモン、ルナモン、進化だ！！」

俺は気分が悪くなって来た事を隠す為は無表情でウィザーモンに
そう言って、デジヴァイスを持ってコロナモン達にそう言うのとデジ
ヴァイスと紋章が光り出した。

「コロナモン（ルナモン）進化ー！！」

……ファイラモン（レキスモン）！！

ファイラモン（レキスモン）超進化ー！！！！
……フレアモン（クレシェモン）！！！！」

二体は暗黒エネルギーの所為か、少し黒くなっていたが暴走はしていないかった。

「わ、航、暗黒エネルギーを……コントロール出来たのか？」

ウィザーモンは俺と黒いフレアモン達を交互に見ながら、茫然としながら俺に聞いてきた。

「完全にコントロールしていない、五分が限界だ。
さ、速く太一さん達を止めに行こう！！！！」

俺は黒いフレアモンに乗って、ウィザーモンと一緒に太一さん達の所に向かった。

………

………

………

………

俺が戦われている場所に着くと、太一さんがヤマトさんを馬乗りしヤマトさんを殴っていた。

「クレシェモンはウォーグレイモンとメタルガルルモンを頼む。」

「分かったよ。」

俺がクレシェモンにそう指示を出すと、クレシェモンは了解して二体の究極体の所に向かった。

そしたら、ウォーグレイモンとメタルガルモンは必殺技を放とうとし、太一さんとヤマトさんは走り合って殴り掛かろうとした。

「フレアモン、クレシェモン!!!」

俺が指示を出すと、フレアモンとクレシェモンは必殺技を放った。

ドカアアアアアン!!

フレアモンとクレシェモンが必殺技を放つと、大きな爆発音が森に鳴り響いた。

俺とフレアモン、ウィザードモンは太一さんとヤマトさんの間に入った。

「何してんすか……?」

俺達は仲間じゃないんすか……? 太一さん、ヤマトさん!!!」

俺は二人を睨み付けてそう叫んだ。

第五十六話だよ！（後書き）

次回は選ばれし子供の秘密です

ヤマトは原作と違う行動を起こすのか？

お楽しみに！！

第五十七話だよ！（前書き）

話が中途半端だ・・・

次回予告と違います

本当にすいませんo r t

第五十七話だよ！

side 航

「太一さん、ヤマトさん、貴方達は何をやってるんですか……？俺達は仲間なんですよ……。」

何で仲間同士戦ってんすか！！」

「わ、航、無事に目を覚ましたんだな！！」

俺が少し怒りの感情を含んだ目で太一さんとヤマトさんを見て言うと、太一さんが嬉しそうな顔をして俺にそう言ってきた。

太一さん、俺の事を心配してくれるのは嬉しいですが、今は俺の質問に答えて下さい。

「太一さん、俺の事はどうでも良いんです。」

何でヤマトさんと戦ってんすかと、俺は聞いてるんです。

それに答えて下さいよ。」

俺が太一さんを睨みながらそう言うと、太一さんは俺に恐怖したのか黙り込んだ。

「ヤマトさん、貴方も何で戦ってるんですか……？」

貴方は皆を纏めないといけないんですよ……。」

しかも、此処は敵のアジトのど真ん中ですよ……。」

無駄な所で、体力を使ってる場合じゃないでしょ！！」

「だ、だが！！」

俺が変わるには、太一を倒さないといけないんだ！！

俺だけ、何も変わってないのは嫌なんだよ！！」

俺は視線を太一さんからヤマトさんに移してそう言ったら、ヤマトさんは真剣な顔をして俺を睨みながら俺にそう言ってきた。

……変わるって……

「ヤマトさん、人が簡単に変われると思うんですか？

まあ簡単に変われるでしょう。

ヤマトさん、もし貴方が太一さんを倒して変わった後、どうするつもりだったんですか？」

俺がヤマトさんにそう聞くと、ヤマトさんはハッと何かを気付いた顔になった。

今迄気付かなかったんですか……

「太一さんを倒した後、貴方はピノッキモンを残す三体のダークマスターズを倒せるんですか？

しかも、皆は太一さんを倒した貴方に付いて来てくれるんですか？」

俺がヤマトさんにそう言って聞くと、ヤマトさんは俺の言葉に耐え切れなくなったのか顔を下に向けた。

……ジュレイモンに唆れたんだろ。

だが、何でヤマトさんは其処迄変わりがるんだ？

ヤマトさんを追い詰める話は無かった筈だが……

「どうして変わりがかったんですか？

話して下さい。」

ピカーーーン！！！！

俺がヤマトさんに出来るだけ優しい声にして聞くと、俺達の周りが急に光り出した。

こ、このタイミングかよ!?

デジタルワールドの安定を望む者、少しは空気を読んでくれ!!
ヤマトさんが話してくれそうだったのに!!

俺がそう思っていると、目の前にヒカリちゃん、否、デジタルワールドの安定を望む者が現れた。

「ひ、ヒカリ?」

テイルモンが恐る恐るヒカリちゃんに憑依したデジタルワールドの安定を望む者に話し掛けた。だが、ヒカリちゃんは首を横に振った。

「私はデジタルワールドの安定を望む者。

理由が在ってこの子を通して話す事を許してほしい。」

ヒカリちゃんに憑依したデジタルワールドの安定を望む者の言葉を聞いて、皆（俺を除く）は驚いた顔をした。

……あつ、ウォーグレイモンとメタルガルルモンが、コロモンとツノモンに退化してる。

……此処は原作通りだな。

あつ、勿論、フレアモンとクレシェモンもコロナモンとルナモンに退化してるからな。

「デジタルワールドの安定を望む者よ、どうして俺達を此処に連れて来たんだ?」

俺は全員驚いて声が出せなさそうだったので、俺は一步前に出て

デジタルワールドの安定を望む者に聞いた。

原作通りなら聞かなくても良いが、原作と異なっていたら大変だからな。

「はい、実は本当なら太一達がファイル島に来た時にコンタクトを取りたかったのですが、私は実体が無い。

しかも、私の言葉を中継できるのはこの子、ヒカリだけなのです。ですから、今から貴方達に伝えます。

貴方達選ばれし子供になった真実を……」

デジタルワールドの安定を望む者は、俺達の顔を見ながらそう言うてきた。

第五十七話だよ！（後書き）

次回こそ選ばれし子供の秘密です！！

お楽しみに！！

第五十八話だよ！（前書き）

久々に長くなった

なのに無理矢理な話です

暖かい目で見てください

第五十八話だよ！

Side 航

「先ずは順を追って説明します。」

ヒカリちゃん、否、デジタルワールドの安定を望む者が俺達にそう言うと、俺達の体が突然宙に浮き始めた。

「な、何だ!？」

太一さんは大きな声を出して、体をバタ付かせて焦っていた。他の皆は落ち着いていたが……

「……!？」

こ、此処は……」

すると先程迄焦っていた太一さんが、下の光景を見て急に落ち着いて驚いた顔をした。

俺達の下に在る光景は、ちょうど今から4年前の姿をした光が丘になっていた。

「4年前、太一とヒカリ……二人の前に現れたデジタマは誤って現実世界に来てしまいました。

そしてその卵は孵って、グレイモンに迄進化してしまいました。」

デジタルワールドの安定を望む者は、あの時の事件の真相を少しずつ俺達に話してくれた。

「あ、あのデジモンは……」

すると光子朗さんは、俺達の下に在る光が丘に居るグレイモンともう一体の緑の鳥デジモンに気が付いた。

「あれはパロットモン。」

完全体で、デジタマを回収に向かわせたデジモンです。」

するとデジタルワールドの安定を望む者は、パロットモンの事を詳しく説明してくれた。

「あっ、アソコに僕が居る。」

「アソコには私が!!」

すると皆は、自分の姿を見つけ始めた。

だが、俺の姿だけは無かった。

まあ当たり前だな、俺は生まれた時からお台場に住んでたし……

「『何故自分が選ばれたのか?』、『誰に選ばれたのか?』と考えた事は在りませんか?

実は、4年前の事件に遭遇した子供達……つまり君達は、この自転で各々のデジモンを進化させる潜在能力を持っていました。

私達は、デジタルワールドが暗黒の力に覆われた時の為に準備をし始めました。」

「ちよっ、ちよっと待ってくれよ!!」

デジタルワールドの安定を望む者が俺達に選ばれし子供達がどうやって選ばれのかを説明している時、ヤマトさんが突然大声を出してデジタルワールドの安定を望む者の話を止めた。

「確かに俺達八人は4年前の事件に遭遇したぜ。

……けどよ、何で九人目である航は遭遇していないのに、選ばれし子供に選ばれたんだ？」

……ま、マジでヤバイ……

俺は困った顔をしながらデジタルワールドの安定を望む者を見ると、デジタルワールドの安定を望む者は優しい笑みで俺を見て来た。

「その理由は簡単です。

グレイモンとパロットモンが戦闘を開始する前から、貴方達以外にもデジモンを進化させる力を持った子供が居ました。

しかし、私達は其の子供の所へ行っている時間は無かった。

だから、私達は予め用意していたデジヴァイスと紋章・デジタマを其の子供達に送ったのです。

そして其の子供と言うのが、九人目の選ばれし子供である加藤 航なのです。」

デジタルワールドの安定を望む者は、其れなりに筋が通った嘘を皆に言ってくれた。

マジで感謝するよ、デジタルワールドの安定を望む者。

「……そうだったのですか。

だから、僕達と異なったデジヴァイスと紋章を持っていたのですね。漸く謎が解けました。」

「それは良かったですね。」

光子朗さんが嬉しそうにそう言ったので、俺は光子朗さんに頬笑みながらそう言った。

「質問は終わりましたね？」

それでは、次の話に移りましょう。」

デジタルワールドの安定を望む者は俺達の顔を見ながらそう言う
と、空に光る物の中に入っていた。

俺達も急いでデジタルワールドの安定を望む者の後を追った。

.....

.....

.....

.....

「此処で貴方達のデジヴァイスと紋章を作りました。」

俺達は今度は、太一さん達のデジヴァイスなどが作られた工場ら
しき場所にやって来た。

皆はデジタマやデジヴァイス、紋章が在るガラスケースの場所に
走って行った。

俺は皆と別れ、ある場所に来た。

「これが、デジタルワールドと違う世界を結ぶゲート……」

目の前には巨大な扉、ヴァンデモン達や太一さん達が現実世界に
来る時に使ったゲートが在った。

「航、記憶は何処迄思い出したんだ？」

すると俺の隣に居たコロナモンが、俺に聞いてきた。

「ヴァンデモンを倒す所迄だ。

……ヴェノムヴァンデモンをどうやって倒したとか、暗黒エネルギーを初めて使った時の記憶は未だ……」

俺は其処で話すのを止めて、コロナモンとルナモンを見た。

コロナモンとルナモンは、俺の顔を見ながら少し悲しい顔をしていた。

「航、俺は何時迄も航のデジモンだぞ。

だから、困った時や辛い時はちゃんと言ってくれよ。」

「そうです!!

ちゃんと言って下さいよ!!

私達だけじゃなく、皆にも。

私達は仲間なんですから!!」

するとコロナモンとルナモンは、無理に元気に振る舞って俺にそう言ってきた。

……仲間……か……

ドツカアアアアアン!!

すると突然、太一さん達が居る場所から大きな爆発音が聞こえてきた。

「……皆の所に戻ろう、負の感情に呑まれない様に……」

「「……嗚呼^{うん}」」

暗黒エネルギーは使っていないが、此処に居ると負の感情で心が一杯になって、もしかしたら暴走してしまうからな。

俺達は急いで太一さん達が居る場所に戻った。

………

………

………

………

俺達が太一さん達が居る場所に戻ると、其処には若いゲンナイさんはピエモンの攻撃を喰らい悲鳴をあげていたが、直ぐに近くに居たメカノリモンを奪ってデジタマとデジヴァイス、紋章を持って脱走した。

「さ、後を追いましょう。」

デジタルワールドの安定を望む者がそう言うのと、俺達の体は宙を浮いてゲンナイさんの後を追った。

ゲンナイさんが乗ったメカノリモンは、他のメカノリモン達に攻撃されていた。

そして、攻撃された衝撃でテイルモンのデジタマなどが落ちた。

「此処で私は皆と離れたのか……」

するとテイルモンは、悲しい声で小さくそう呟いた。

「テイルモン、今は俺達と一緒にしろ？」

俺はテイルモンの隣に移動して、テイルモンを元氣付けた。

「……フツ、そうだったな。」

俺がそう言うと、テイルモンは何時もの顔に戻って俺にそう応えた。

「……!？」

ファイル島だ!!」

すると太一さんが目の前にある島・ファイル島の名を大きな声で叫んだ。

そして少し時間が経って、デジモン達がデジタマから孵った。

「そして、デジモン達は此处で貴方達をずっと、ずっとずっと待っていました。

気の遠くなる様な時間待ち続け、漸くあの日に貴方達とデジモン達は会えた。」

デジタルワールドの安定を望む者がそう言うと、デジモン達が太一さん達に甘え始めた。

「……こうやって見ると、皆も未だ子供なんだな。」

「航、お前も十分子供だぞ。」

「精神年齢はもう大人だ。」

「フツ、そう言えばそうだったな。」

俺とウィザーモンは、太一さん達を見ながらそんな会話をした。

「……時間の様です。」

選ばれし子供達、デジタルワールドの歪みを正せるのは9人と10匹。

デジタルワールドの未来、貴方達に託します。

……フツ」

ヒュー

バスッ

「やっぱこうなったか。」

俺はデジタルワールドの安定を望む者が消えた瞬間、俺はヒカリちゃんの所に走ってヒカリちゃんをおんぶした。

本当に急に倒れたよ……

俺がそう思った瞬間景色が変わり、元の場所に戻り、ヒカリちゃんも目が覚めた。

「……航、お前の言う通りだった。
ありがとう。」

ヤマト、こんな所で戦ってる暇は無いんだ。
もう一度、俺達と一緒に戦ってほしい。」

太一さんは、デジタルワールドの安定を望む者の願いを聞いて俺にお礼を言って、ヤマトさんに頭を下げて頼んだ。

「悪い、俺は俺の道を探したい。

俺は自分の力で自分を変えたいんだ。

……だが、安心してほしい。

俺は必ず皆の所に帰ってくる。

俺が望んだ俺に変われたらな。

……だから、其れ迄待っててほしいんだ。」

だがヤマトさんは太一さんの誘いを断って、自分が今思っている事を俺達に言ってくれた。

ヤマトさん……貴方は十分変われました。

後は、貴方が望む自分だと思って俺達の所に帰って来るだけです。

「ヤマトさん、俺達は待ってます。

だから、必ず帰ってきて下さい。

自分が望んだ自分になって……」

「……ありがとう。

タケル、航とヒカリちゃんを頼んだぞ。

航は太一と一緒に直ぐに無茶ばっかするし、ヒカリちゃんは女の子だからな。

……出来るか？」

俺がヤマトさんにそう言うと、ヤマトさんは俺にお礼を言ってタケル君を見ながらそう聞いた。

「うん!!」

僕、頑張るよ!!
だから、お兄ちゃんも頑張ってね!!」

タケル君はヤマトさんのお願いを笑顔で応えてそう言った。

「ありがとな。

……太一……」

ヤマトさんはタケル君にお礼を言って、心配した顔をしながら太一さんの顔を見た。

「分かった、お前がそうしたいなら俺は止めない。だけど必ず帰って来いよ、ヤマト!!」

太一さんはヤマトさんにそう言って、ヤマトさんに手を出した。

ヤマトさんは太一さんの手を見て、ガッチリ握手をした。

「……ありがとな、太一。

必ず帰って来るよ!!」

ヤマトさんは太一さんにお礼を言って、俺達の顔を一度見てそう言っ
てツノモンを持って歩き出した。

「必ず帰って来いよ!!」

太一さんがヤマトさんに大きな声でそう言うと、ヤマトさんは歩
きながら手を上げた。

そしてヤマトさんの姿は完全に見えなくなった。

「……太一さん、私はピッコロモン達の手伝いに行きたいの!!」

すると突然、ミミさんが太一さんに大きな声を出してそう言った。

「私、皆の傷付く姿が見たくなかったの。」

……だけど、私達が頑張らないともっと皆が傷付くって気付いたの。
だから、ピッコロモン達と仲間を集めたいの!!
だから……」

ミミさんは其処で言葉を詰まらせて、顔を下に俯かせた。

「太一、僕もミミ君に付いて行くよ!!」

だから、皆と別行動になっちゃうけど行かせてほしいんだ!!」

すると丈さんが、ミミさんの言葉に続けて太一さんにそう言った。

ミミさんも俺が知らない間に変わったんだ……

「……大丈夫だ、ピノッキモンは俺達が倒す。」

だから、丈とミミちゃんは最終決戦の為に仲間を集めてきてくれ。

そしてスパイラルマウンテンで必ず合流しよう。」

太一さんは丈さんとミミさんにそう言って、丈さんに手を出した。

そして丈さんと太一さんはガッチリ握手をした。

「ミミちゃん、辛いつて思ったら一度立ち止まって考えるの。
進むだけが正解じゃないから。」

空さんは、ミミさんの手を両手で包んで優しく撫でながらそう言った。

「ありがとうございます、空さん。」

「あつ、航君、君は無理をしちゃダメだよ。

君は太一以上に無理をするからね。

君が無理をして傷付いたら悲しむ人が居る事忘れないでくれ。」

すると太一さんと握手を終えた丈さんが、俺の所に来て俺と目線を合わせてそう言ってきた。

「分かってます。

でも、丈さんこそ気を付けて下さいよ？

丈さんって抜けてる所が在りますから。」

「うん、約束する。

僕と君、約束を守るんだ。」

「はい!!」

俺が大きな声で返事をする、丈さんは笑って立ち上がった。

「じゃあ太一、僕達は行くよ。」

「嗚呼。

……必ず会おうな!」

「嗚呼、必ず!!」

丈さんはそう言ってゴマモン、ミミさんとパルモンと一緒にピツコロモン達と合流する為に歩き出した。

「……よし、それじゃあ俺達も行こう!!」

『うん（はい）（ええ）!!』

そして俺達も、ピノッキモンと戦う為に歩き出した。

「皆、バラバラになっちゃったね……」

「そうね……」

するとパタモンとピヨモンが、少し悲しそうな顔をしながらそう呟いた。

「貴方達、何も分かってないわね。」

すると呆れた顔をしたテイルモンが二体に話し掛けた。

「皆は必ず会うつて言ったわ。」

それを信じて皆は自分が進む道を選んだ。

私達はそれを信じて待つ、それが仲間よ。」

「「そ、そうか!!」」

テイルモンの言葉を聞いて、漸く二体は納得した様だ。

「テイルモン、パタモン、ピヨモン、速く来いよ!」

「「「分かった（うん）!!」」」

俺が呼ぶと、三体は走って来た。

第五十八話だよ！（後書き）

次回はメタルエテモンの話がメインです

お楽しみに！！

第五十九話だよ！（前書き）

今回は丈達がメインです

あの猿が登場します！！

今回も無理矢理ですが楽しんでください！！

第五十九話だよ！

sideオーガモン

「ハア：ハア：ハア……チツ、もう追い付きやがったのか！！
だが、こんな所でやられるオーガモン様じゃねえぜ！！」

俺様は今、ダークマスターズの部下に追い詰められている。
ダークマスターズは、自分達の命令を聞かなかったり逆らったり
する奴には平気で殺しに来やがる。

俺様は、デビモンの件が在ってから誰の言う事も聞かないでいる。
だが俺様は今、マジでピンチに陥ってるんだ！！

「喰らいやがれ、霸王拳！！！！」

俺様はダークマスターズの部下に必殺技の“霸王拳”を放った。
“霸王拳”はダークマスターズの部下の三分の一を倒した。

「どうだ、お前等に俺様は殺せねえよ！！
……な！？」

俺様が残ったダークマスターズの部下にそう叫ぶと、地面から新
たなダークマスターズの部下が現れた。

『ブランチドレイン！！』

「う、うわああああああ！！！！？」

俺様はダークマスターズの部下達の必殺技を喰らい、後ろの谷底
に落ちた。

ヒューーーーン

すると突然、ダークマスターズの部下達が居る空に隕石が現れた。
そしてその隕石は、次第にスピードを上げていった。
そして……

ドッガアアアアン！！

その隕石はダークマスターズの部下達が居る所に落ちた。
俺様は落ちていきながらも隕石を見続けた。

side 丈

ドッガアアアアン！！

僕達が歩いていると突然、大きな爆発音らしき音が聞こえてきた。

「な、何だ！？」

ゴマモンは焦りながらも、周りを見渡して警戒しながらそう言っ

た。

「……!？」

み、ミミ、丈、あれを見て!!」

するとパルモンがある方向を指差した。

僕とミミ君、ゴマモンはパルモンが指差した方角を見た。

其処には、大きな黒い煙が上がっていた。

「何……あれ？」

ミミ君は煙を見ながら僕達に聞いてきた。

「分からない。

でも、確かめる必要がある!!」

行こう!!」

僕はそう言って、皆と走って煙が上がっている所へ向かった。

.....

.....

.....

.....

僕達は無事に煙が上がっている場所の近く迄やって来た。
そして其処には、木に押し潰されているデジモンが居た。

「は、速く助けないと!!
皆、手伝ってくれ!!」

僕は皆にそう言って、力を合わせてデジモンの上に在る木を退かし始めた。

「こ、コイツは……オーガモン!?」

するとゴマモンは木に押し潰されていたデジモン・オーガモンの姿を見て木を退かすのを止めた。

「ゴ、ゴマモン!!」

何やってるのさ、速く手伝えよ!!」

僕は木を退かしながらゴマモンに少し怒ってそう言った。

「嫌だ!!」

丈、忘れたのか!?

オーガモンは俺達の敵なんだぞ!!
何で敵を助けないといけないのさ!!」

するとゴマモンは、真剣な顔をしながら僕に聞いてきた。

……確かに、オーガモンは僕達の敵だ。

だけど!!」

「僕はオーガモンを救いたい!

手を差し出せば助かる命を、僕は失いたくないんだ!

だから、僕はオーガモンを助けたいんだ!!」

僕はゴマモンにそう言って、オーガモンの上に乗っている木を急

いで退かした。

「う……うう……おい、やめやがれ……おれさまは、おまえにたすけて……もらうきはねえ……」

するとオーガモンは目を覚まし、僕を睨みながら小さい声でそう言ってきた。

「君が助けてもらう気が無くても、僕は君を助けたい。これは僕の意志だから、僕の勝手にやるよ。」

「……丈も言う様になったじゃん!!
オイラも手伝ってやるよ!」

「私も!!
ね、パルモン?」

「ええ!!!」

するとゴマモン・ミミ君・パルモンは僕にそう言って木を退かしてくれた。

「ありがとう、皆!!
それじゃあ頑張ろう!!!」

そして僕達はまたオーガモンの木を退かし始めた。

……

……

.....

.....

「ふう……応急手当ではこれ位かな？」

僕はオーガモンの怪我を持ってきていた物で応急手当をしてそう言った。

オーガモンを無事に助けたが、怪我が思っていた以上に酷かった。だから、持ってきていた包帯などで応急手当をしたんだ。

「丈先輩、何で包帯を持ってたの？」

すると突然、不思議そうな顔をしたミミ君が僕に聞いてきた。

「これは元々、航君の為に持ってきたんだよ。

航君は、太一以上に無理をして怪我をするからね。

家から前もって持ってきたんだよ。」

僕がミミ君にそう言うと、ミミ君達は納得した顔をしてくれた。

そして真剣な顔をして、隣に座っているオーガモンを見た。

「オーガモン、何で木に潰されてたんだ？」

すると真剣な顔をしたゴマモンが、僕が聞こうと思っていた事をオーガモンに聞いた。

「……助けて貰った札に話してやる。
途中で話し掛けるな。」

一度しか言わないからな。」

オーガモンが真剣な顔をして僕達に言ってきたので、僕達は黙って頷いた。

「俺様はダークマスターズに命を狙われてんだよ。」

！？

僕はオーガモンに話し掛け様としたが、グツと我慢をした。皆も、話し掛けない様に我慢していた。

「ダークマスターズは、自分達の命令を聞けない奴を殺す。お前等は知ってるだろ。」

俺様は、デビモンの件が在るから誰の言う事も聞かねえって決めたんだよ。

理由はどうであれ、俺様以外にもダークマスターズの命令を聞かない奴は居る。

だが奴等は、そんなデジモンを殺しにやってくる。

何処に逃げても安全な場所は、このデジタルワールドには存在しねえ。

だから俺様は、ダークマスターズの部下と戦いながら生きてきた。だがさっき、ダークマスターズの部下にやられて崖から落ちちまっただんだよ。」

「……そうだったのか。」

僕は、オーガモンの話を聞いて悲しみの感情が溢れてきた。

……もしかして、これが負の感情なのか？

もしそうだとしたら、航君は何時もこんな悲しい感情を……

「……そう言えば、俺様が落ちた瞬間に隕石がダークマスターズの部下の所に落ちたぜ。

俺様は、運良く落ちていたから助かったがな。」

な、何だって!!??

「つまりあの煙は隕石が落ちたからなのか!?

さSS「ア~~~~アア~~~~!!! ア~~~~アア~~~~」な、何だ!!!

僕は急いで此処から離れ様と立ち上がって皆に指示を出そうとした時、変な声が僕の声を遮って聞こえた。

そしたら、木の枝にグレーの大きな猿が現れた。

「……お久しぶりね、選ばれし子供達。」

!?

「そ、その声は、エテモン!!!

忘れもしないデジモン・エテモン。

で、でもエテモンは、太一とメタルグレイモンによって異空間に飛ばされた筈だが……

「違う違う。」

アチキはエテモンから生まれ変わった、メタルエテモンよ!!! ほら拍手拍手!!!

な!?

ま、まさか進化したのか!?

「早速で悪いんだけど、死んだ」ブリットハンマー!!!」ヒデブツ
」

すると突然、メタルエテモンに誰かが攻撃した。

僕達は急いで後ろを振り向いた。

其処には……

『ピノッキモン!!!』

ダークマスターズの一体、ピノッキモンがハンマーを構えて立っていた。

「選ばれし子供は僕が殺すんだ!!!
おっさんは手を出すな!!!」

し、しまった!!!

囲まれた!!!

「おっさんとは何よ!!!
ボウヤはお家に帰んなさい。」

「ボウヤだってえ!!!」

すると突然、ピノッキモンとメタルエテモンが戦い始めた。

「皆、今の内に!!!」

僕達は二体が戦ってる間に急いで逃げた。

でも二体の戦いは、凄く低レベルな戦いだっただ事を言っておくよ。

第五十九話だよ！（後書き）

次回は航達がメインの話です！！

お楽しみに！！

第六十話だよ！（前書き）

今回は航達がメインです！！

誤字・脱字があれば教えてください！！

第六十話だよ！

丈達がオーガモンと接触してる頃・・・

side 航

俺達はピノッキモンの屋敷を無事に見つけた。

俺達は少し離れた場所から、ピノッキモンの屋敷を観察している。
しかし……

「……余り良い思い出が無いんだが。」

「スマン、航。」

だが、此処でピノッキモンを倒さないといけないんだ。」

俺の小さい声でそう呟くと、俺の呟きを聞いていた太一さんが謝ってきた。

「あっ、気にしないで下さい。
それより、屋敷の方はどうですか？」

俺は直ぐに話を切り替えて、苦笑いしながら太一さんに聞いた。
でも、ヒカリちゃんは常に俺の手を握っているが……

「屋敷の様子はだな。
……！？

外に二体のデジモンが居る。
光子朗、調べてくれ。」

太一さんは単眼鏡を覗きながらそう言って、自分のデジヴァイス

を光子朗さんに渡した。

「待ってくださいね。」

デラモン、完全体。

フローラモン、成長期ですね。」

……ピノッキモンは原作通り、丈さん達の所に居るのか？

それなら、コッチとしては好都合なんだが……

「太一さん、俺の推測が正しければあの二体は俺達の仲間になってくれます。」

ピノッキモンの部下はピノッキモンの性格をしってるので、絶対にピノッキモンの事を嫌ってますから。」

俺は太一さんにそう言うのと、太一さんは俺の言いたい事が分かってくれて頭に手を当てて考え始めた。

しかし、原作の二体は凄かったな。

あの嫌い様は尋常じゃなかったし……

まあ俺もピノッキモンの事が嫌いだがな。

「だが、警戒は解かない方が良いだろう。」

太一さんは手を頭から離して俺にそう言うてきた。

……確かに太一さんの言う通りだな。

もう原作知識は参考程度にしかないからな……

「でも取り敢えず、行ってみましょう。」

俺は太一さんにそう言うて立ち上がった。

「そうだな、行ってみない事には分からないからな。」

そして俺達は、警戒しながら二体の所に向かった。

.....

.....

.....

.....

「む、お前達は誰であるか？」

俺達が屋敷に近付くと植物を背負ったデジモン・デラモンが俺達に話し掛けてきた。

「俺達はピノッキモンを倒しに来た。

もし、お前達が協力してくれるなら俺達はお前達を攻撃しない。」

「ほ、本当!？」

俺が二体にそう言うのと爬虫類のような植物デジモン・フローラモンが嬉しそうな顔をして俺に聞いてきた。

「本当だ。」

俺はフローラモンに頷きながら肯定した。

「う、嘘では無いであるか!？」

「嘘じゃない。」

……それで、手伝ってくれるのか？」

俺が二体に聞くと、二体は首を何回も縦に振った。

「勿論である！！」

あんな奴を倒せるなら、幾らでも協力するである！！」

「えっ？」

でも君達はピノッキモンの仲間なんじゃないの？」

デラモンが俺達にそう言うのと、タケル君が不思議そうな顔をしながら二体に聞いた。

……タケル君、あんな奴に仲間が居る訳無いだろ。

「あんな奴が仲間な訳無いじゃない。」

何時も無理な事ばかりやらされて。

正直な話、鬱陶しかったのよね。」

フローラモンは深い溜息を吐いてタケル君にそう言った。

・やっぱ、アイツは一人なんだな。

「ありがとう、屋敷を案内してくれ。

罾が在る筈だからな。」

「分かったのである。

付いてくるのである。」

そして俺達はデラモンとフローラモンに付いて行って屋敷の中に

入って行った。

第六十話だよ！（後書き）

次回はあのライオンが！！

お楽しみに！！

第六十一話だよ！（前書き）

今回はあのライオンが登場！！

第六十一話だよ！

side 丈

僕達はピノッキモンとメタルエテモンが戦ってる隙に、二体にバレない様にして逃げた。

そして僕達は今、大きな木に出来ていた穴に隠れている。

「まさか、エテモンが生きていたなんて。

……しかも、進化して帰ってきたなんて……」

僕は小さい声でメタルエテモンの事を考えながらそう言った。

奴は元々完全体だったが、進化して世代は究極体だろう。

僕達全員がメタルエテモンに戦いを挑んでも、勝てるか？と聞かれたらその答えはNOだろう。

一体どうすれば良いんだ……？

ドッカアアアアン！！

すると突然、外から大きな何かが倒れる音が聞こえてきた。

僕達は直ぐに木の穴から出て、周りを見渡して外の状況を調べた。

「みつけた！

こんな所に隠れていたのね。」

すると上からメタルエテモンの声が聞こえてきた。

「僕達は顔を上に上げて木の上を見た。

「め、メタルエテモン!?
み、皆、急いで逃げるんだ!!」

メタルエテモンは不気味に笑いながら木の枝に乗っていた。
だから、僕は直ぐに皆にそう指示を出した。

「チッ、これでも喰らえ!
霸王拳!!」

オーガモンは怪我をしていない右腕で、メタルエテモンに必殺技の“霸王拳”を放った。

「あひゃひゃひゃ、そんな攻撃がアチキに効くわけ無いじゃない。
アンタ、アチキを舐めてる?」

だが、オーガモンの必殺技の“霸王拳”は、メタルエテモンには
全く通用していなかった。

「オーガモン、今の僕達じゃ奴には勝てない!
此処は一先ず逃げるんだ!!」

「……クソッ、分かったよ!
だが、これだけはさせてもらうぜ!
霸王拳!!」

するとオーガモンは、僕の言う事を聞く前にメタルエテモンが乗
っている木の枝を必殺技の“霸王拳”を放って折った。

「う、嘘でしょ!!!!?」

するとメタルエテモンは、そう叫びながら落ちて来た。

「今の内に逃げましょ!!」

ミミ君を先頭に、僕達は急いで近くの茂みの中に隠れた。

だが、其処には……

「きゃ、キャアアアア!!!」

大きな牙を持った、黄色のライオンの様なデジモンが居た。

僕とゴマモンは、直ぐにミミ君の前に立って黄色いライオンのデジモンを睨み付けた。

「お前もピノッキモンの仲間か!？」

オイラが相手をしてやる!!」

「待つんだ、私はお前達を捜しに来たんだ。」

ゴマモンはそう言うが、ライオンの様なデジモンはそれを否定した。

「そ、その声は……」

驚く事に、黄色いライオンのデジモンの声が僕達の仲間のデジモンそっくりの声をしていた。

「選ばれし子供達!!!」

何処に居るの!!!」

すると後ろから、メタルエテモンの声が聞こえてきた。

「話は後だ。

取り敢えず、今は私の背中に乗るんだ!」

僕達は黄色いライオンの提案に黙って頷き、黄色いライオンの様なデジモンの背中に乗った。

「オーガモン、ちゃんと付いてくるんだぞ。」

「わ、分かってるよ!!」

黄色いライオンの様なデジモンはオーガモンに注意をしたが、オーガモンはちゃんと返事してくれた。

黄色いライオンの様なデジモンは、オーガモンを見て少し笑った。

「行くぞ!!」

すると黄色いライオンの様なデジモンは走り出した。

.....

.....

.....

.....

少ししたら森を抜け、廃墟が並ぶ場所に僕達はやって来た。

「ん?」

……!?

じよ、丈、あれ!!」

するとゴマモンが突然、ある建物を指差して僕に話し掛けてきた。
その建物は……

「あ、あれは!!」

あのレストランだ!!」

そう、ヴァンデモンの手下のピコデジモンの所為で無理矢理働かされていたレストランが、ボロボロになって其処に在った。

「アソコなら少しは隠れるな。」

黄色いライオンの様なデジモンは、そう言ってレストランの中に入ってしまった。

………

………

………

………

「間違いない、此処は僕とヤマトが働いていたレストランだ。」

僕はレストランを見渡して、そう言って確信した。

ピカーン

すると突然、黄色いライオンの様なデジモンの体が光り出した。

「……無事で何よりだ、選ばれし子供達。」

『レオモン!!』

黄色いライオンの様なデジモンは姿を変え、僕達の仲間のデジモンであるレオモンの姿に変わった。

「レオモン、無事だったのね!!」

ミミ君はそう言って、笑顔でレオモンに抱き付いた。

「レオモン、進化が出来る様になったのか？」

するとゴマモンが顔を傾けてレオモンに聞いた。

「以前、デビモンとの戦いの時にデジヴァイスの光を浴びたお陰で、自らの意志で進化する事が出来るようになってな。」

「……だが、やはり未だコントロールしきれていない。」

レオモンは丁寧に自分が進化出来る理由を教えてくれた。
そうだったのか……

「ケッ、テメエだけ自由に進化出来るなんてな!!」

ドガッ!!

オーガモンは、持っていた棍棒で床を叩いてそう言った。

カシャッ

すると突然、オーガモンが開けた穴から手が出てきた。

「何者だ!!」

それに気付いたレオモンは、穴に近付いて大きな声でそう叫んだ。
僕達も警戒しながら穴の中を見た。

「待つてほしいゲコー!!」

「僕達はダークマスターズの部下じゃないタマー!!」

すると穴の中から、蛙とお玉杓子のようなデジモンが現れた。
……あれ、この二体って確か……

「オタマモンにゲコモン!!」

「生きてたのね!!」

ミミ君とパルモンは二体のデジモン・オタマモンとゲコモンに近
付いて笑顔で二体にそう言った。

この二体は、ピコデビモンの嘘?の所為でミミ君をお世話したデ

ジモンだ。

お世話した理由が確か、この二体のデジモン達のボスであるトノサマゲコモンを起こして貰う為だった筈……

「お城はどうしたの？」

トノサマゲコモンは？」

僕が考え込んでいたら、ミミ君は二体に質問した。すると二体は、悲しい顔をしながら答えてくれた。

「お城は、ダークマスターズの力で沈んじやったゲコ。トノサマゲコモン様も海に……うっ！」

二体は泣きながら僕達に話してくれた。

「……可愛そう。」

ミミ君は話を聞いて、パルモンと一緒に二体を慰め始めた。二体の慰めはミミ君に任せよう。僕はレオモンに近付いた。

「レオモン、ピッコロモン達は？」

「ピッコロモン達は今も尚、ダークマスターズと戦うデジモンを捜している。」

私は、お前達のアシストをするべく此処迄やって来たのだ。」

僕がレオモンに質問すると、レオモンは丁寧に説明してくれた。そうだったのか……

「……!?!」

皆、扉から離れるんだ!?!」

するとレオモンが突然、扉を睨みながら僕達にそう叫んできた。

「どうしたんだよ!?!」

「奴が来やがったぜ。」

ゴマモンがレオモンに聞くと、オーガモンが扉を睨みながら僕達に答えてくれた。

ドッカアアアアン!!

すると扉が簡単に破壊された。

「みつけた!!」

今度は逃がさないわよ。」

「メタルエテモン、私が相手だ!!」

レオモンワープ進化!!!!!!

……………サーベルレオモン!!!!!!」

レオモンはサーベルレオモンに進化し、サーベルレオモンはメタルエテモンと一緒に外に出た。

「良いわよ、邪魔する奴は誰であろうと殺しちゃうから。」

僕達は、サーベルレオモンが作った穴から外に出た。

「サーベルレオモン、僕達も戦うよ！！！！」

「分かった！！！」

だが、奴は究極体だ！！私が前衛で戦う！！
お前達は私のサポートをしてくれ！！！」

「分かった！！！」

ゴマモン、行くよ！！！」

「おう！！！」

僕がゴマモンに叫ぶと、僕のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「ゴマモン進化ー！！！」

……イツカクモン！！！」

イツカクモン超進化ー！！！！！」

……ズドモン！！！！！」

ゴマモンはズドモンに超進化して、サーベルレオモンの隣に移動した。

「パルモン、私達も！！！」

「ええ！！！」

ミミ君がパルモンに叫ぶと、ミミ君のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「パルモン進化ー!!」

……トゲモン!!

トゲモン超進化ー!!!!

……リリモン!!!!」

パルモンはリリモンに超進化して、ズドモンの反対側に移動した。

「さ、どこからでもかかっておいで!!」

「行くぞ!!」

そして僕達とメタルエテモンの戦いが始まった。

第六十一話だよ！（後書き）

次回は航達がメインの話です！！

話がフラフラしてすいません

次回もお楽しみに！！

第六十二話だよ！（前書き）

うん、短い

やっぱ、原作でもピノッキモン編はあっちへ行ったりこっちへ行ったりしていたから小説でもこうなってしまった

本当にすいませんo r t

しかも、今回は話の内容も薄い

マジですいませんo r t

第六十二話だよ！

side 航

俺達は今、デラモンとフローラモンと協力してピノッキモンの屋敷のトラップを破壊している。

「これが最後のトラップである。」

するとデラモンは、目の前に在るビックリ箱を指指しながら俺達にそう言った。

「じゃあ僕に任せてよ。

ベビーフレイム！！」

アグモンは俺達にそう言って、ビックリ箱に向かって必殺技の“ベビーフレイム”を放った。

ポッカン！！

アグモンの必殺技の“ベビーフレイム”を喰らったトラップは、音を出して黒い煙を上げて簡単に壊れた。

「なあデラモン、本当にこれが最後のトラップなんだな？」

俺は隣に居るデラモンに、再度確認を取った。

「間違い無いである。」

我輩達が知っているトラップはこれが最後である。」

するとデラモンは、真剣な顔をして俺達にそう言ってきた。

……そうか、それならもう安心だな。

「それじゃあ二階に上がってピノッキモンを待ち伏せしよう。
何時帰ってくるか分からないからな。」

太一さんが俺達の顔を見ながら太一さんが考えた作戦を言ってきたので、俺達は太一さんの顔を見て無言で頷いて賛成した。

……今、ピノッキモンは何処に居るんだ？

メタルエテモンと戦っているのか？

それとも、既に戦い終わっているのか？

……もし戦い終わっているなら心配だ。

“レオモンの死”

これは、ミミさんの精神の不安定だから起こってしまう事件。

だけど、この世界のミミさんの精神は不安定どころか全然安定している。

……ミミさん達を信じるしかない……か……

「どうした、航？

速く二階に上がろうじゃないか。」

するとウィザーモンが、俺の顔を見ながら俺に話し掛けてきた。

「あ、嗚呼。

直ぐに行くよ。」

俺はウィザーモンにそう返事をして、一緒に二階に向かった。

.....

.....

.....

.....

「此処からならピノッキモンが帰ってきても、直ぐに分かるな。」

太一さんは窓の外を見ながら、俺達にそう言ってきた。

俺はデラモンとフローラモンに近付いた。

「なあ、お前等って大砲を使えるか？」

原作同様、この部屋にも大砲が在る。

原作と同じなら、二体也大砲を使える筈だが……

「使えるのである。」

それがどうしたのであるか？」

デラモンは顔を傾けて、頭に？マークを浮かべながら俺に聞いてきた。

……良かった、それなら原作と同じ事が出来るな。

「大砲を使ってこの屋敷に帰ってきたピノッキモンを攻撃してほしい。」

俺が二体にそう言うと、二体は凄く驚いた顔をして顔を横に振ってきた。

「な、何を言っているのであるか！？そ、そんな事をしたら、我輩達が殺されてしまうのである！！」

「そ、そうよ。」

流石に其処迄はちょっと……」

……やっぱ、この二体も死ぬのは嫌だよな……
まあ当たり前か……

「大丈夫だ、お前等はピノッキモンこの屋敷に近付かない様に攻撃するだけで良いんだ。」

ピノッキモンがこの屋敷の前まで来たらお前等は逃げて良い。

その時は俺等が屋敷から出て行って、ピノッキモンを倒す。

頼む、やってくれ！！」

俺は二体にそう言って頭を下げて頼んだ。

「……分かったのである。」

だが、ピノッキモンがこの屋敷の前に来たら我輩達は逃げるであるよ。

それでも良いであるか？」

「嗚呼。」

だから、大砲を使って帰ってきたピノッキモンを攻撃してくれ。」

俺は二体にそう言って、もう一度頭を下げて頼んだ。

「……分かったわ。」

「分かったのである。」

すると二体は、渋々俺に協力してくれた。

「ありがとう。」

俺は笑顔で二体にお礼を言った。

「おい、ピノッキモンが帰ってきたぞ!!」

すると太一さんが窓から乗り出していた体を部屋に戻して、真剣な顔をして俺達に伝えてくれた。

俺達は太一さんの言葉を聞いて、俺達の警戒心が上がった。

「二体共、頼むぞ。」

俺は二体を目だけを動かして見て頼んだ。

二体は無言で頷いて大砲を撃つ準備をし始めた。

そして少しして、大砲を撃つ準備が整った。

「……撃てー!!!」

ドカァァァン!!

太一さんの合図で、大砲が帰ってきたピノッキモンに撃たれた。

「撃て、撃て、撃てなのであるー!!!」

するとそれが切っ掛けになったのか、デラモンはノリノリでフロ
ーラモンに合図をし始めた。

そしてフローラモンも、デラモンの合図でノリノリで大砲を撃ち
始めた。

……やっぱ、ストレスを此処で発散してるな……

そして俺達は、ピノッキモンがこの屋敷に近付くのを待った。

第六十二話だよ！（後書き）

次回はメタルエテモンとの戦いです
レオモンは原作通り死んでしまうのか？

お楽しみに！！

皆さんに質問だよ！

松上「ども、作者の松上です。」

航「どうも、主人公の航だ。」

松上「突然なんです、皆さんに質問です。」

航「本当に突然だな。」

……それで、何を質問するんだ？」

松上「回りくどい言い方は嫌いだからさっさと話すぜ。
実はな、この小説はデジモンが原作だろ？」

航「嗚呼。」

松上「デジモンって映画化しただろ？」

航「言いたい事が分かった。」

デジモンの映画を小説に書いた方が良いかを聞くんだろ？」

松上「その通り！！」

それで皆さんに聞きたい事は、デジモンの映画をこの小説でも書いた方が良いかと言う事です。」

航「デジモンの映画って……」

松上「3つ在るんだ。」

『ぼくらのウォーゲーム』、『前編・デジモンハリケーン上陸！！』

後編・超絶進化!! 黄金のデジメンタル』、『ディアボロモンの逆襲』の3つだ。」

航「松上は書けるのか？」

松上「嗚呼、一応全部書けるぞ。

だけど、皆さんは映画の話を読みたいですか？」

航「読みたい人は教えて欲しい。

今は未だ大丈夫だが、後少ししたら無印が終わってしまうからな。無印が終わる前に教えてくれ。」

松上「突然すいません。

次回はちゃんと更新しますので……」

航「本当にすいませんでした。」

松上「それじゃあ、質問の答えを待ってます!!」

風邪になりました

どうも、作者の松上です。

実は今日、風邪になってしまいました。

吐き気はMAX、体が怠い、シンドイ……

挙げれば限りがありません。

その為、今日は学校も休んでいます。

正直な話、こうやって書いているのもシンドイです。

ですから、風邪が治るまで執筆活動を休ませてもらいます。

本当にすいません。

風邪が治りしだい、執筆活動を再開します。

応援してくれている皆さん、本当にすいませんでした。

必ず、今週中には復活する（予定）なので！！

待っていて下さい！！

ご迷惑を掛けてしまって、本当にすいませんでした。

第六十三話だよ！（前書き）

お久しぶりです

頑張って風邪を治しました

今回も無理矢理ですが、暖かい目と広い心で読んでください

第六十三話だよ！

side 丈

「ハンマースパーク！！！！」

ズドモンがメタルエテモンに必殺技の“ハンマースパーク”をメタルエテモンに放った。

「無駄よ無駄！」

アチキには、そんな攻撃は効かないわよ。」

だがメタルエテモンは、片腕だけでズドモンの必殺技の“ハンマースパーク”を防いだ。

だが……それは囧だ！！

「フラウカノン！！」

油断していたメタルエテモンに、リリモンが必殺技の“フラウカノン”をメタルエテモンに放った。

「だ〜から、無駄だって言ってんでしょが！！」

だがリリモンの必殺技の“フラウカノン”も、メタルエテモンは簡単に防いで僕達にそう言ってきた。

「俺様を忘れんじゃねえ！！」

霸王拳！！」

すると少し離れた場所から、オーガモンが必殺技の“霸王拳”を

メタルエテモンに放った。

「アンタ達、しつこいわねえ！！
無駄だって言ってるんでしょが！！！！」

だけどオーガモンの必殺技の“覇王拳”も、メタルエテモンは簡単に弾いた。

だが、囧としては十分だ！！

「ネイルクラッシュュ！！！！」

すると今迄気配を消していたサーベルレオモンが、必殺技の“ネイルクラッシュ”をメタルエテモンに突っ込んだ。

これが僕が考えた作戦だ。

ズドモンやリリモンは完全体。

対するメタルエテモンは究極体。

幾ら束になってメタルエテモンに戦いを挑んでも、僕達は九割の確率で負けるだろう。

だから、唯一究極体のサーベルレオモンの必殺技をメタルエテモンに絶対に当てる。

だけど、サーベルレオモンは究極体の力を完全にコントロールしきれていない。

だから、正面から戦いを挑んでも負ける可能性が在る。

なので、僕達を囧にしてメタルエテモンからサーベルレオモンの存在を完全に消す。

そしてメタルエテモンが油断した時に、サーベルレオモンの必殺技でメタルエテモンを攻撃する。

「行っけー、サーベルレオモン！！！！」

僕は勝利を確信して、サーベルレオモンにそう叫んだ。

「アンタ達しつこいわよ。

アチキがこの猫ちゃんを忘れる訳無いでしょうが!!

NO1パンチ!!!!」

するとメタルエテモンは不気味に笑いながら僕達にそう叫んで、サーベルレオモンに“NO1パンチ”と言う必殺技で殴ぐり掛かった。

ドツカアアアアン!!!!

サーベルレオモンとメタルエテモンの必殺技がぶつかり合い、中心で大きな爆発が起こった。

『サーベルレオモン!!!!?』

「だ、大丈夫だ……」

僕達は爆発が起こった瞬間、声を揃えてサーベルレオモンの名を言った。

サーベルレオモンは吹き飛ばされて僕達の所に来て、苦しそうな声をしながら僕達にそう言ってきた。

「何でアイツはあんなに硬いのよ!!」

するとミミ君は、メタルエテモンの無駄に堅い体に、怒った顔をしながら文句を言った。

「よくぞ聞いてくれました!!」

今回はタダで教えてあげるわ。

アチキの体はクロンデジゾイドでメタルコーティングされてるのよ!!

だから、アチキはどんな攻撃も喰らわない!!

だからアチキは最強なのよ!!」

するとメタルエテモンは、誰も聞いていないのに自分の無駄に堅い体の秘密をベラベラと僕達に教えてきた。

……教えると言う事は、それだけ自分の体の固さに自信が在るのだろう。

「丈、オイラに良い考えがあるんだ。」

するとズドモンが、僕に小さい声で話し掛けてきた。

だが、作戦をメタルエテモンが黙って聞かせてくれる筈ないし……
……そ、そうだ!?

「メタルエテモン!!」

「何よ?」

「僕達は今から作戦会議をする!!」

だから、絶対に攻撃しないでくれ!!」

僕がメタルエテモンにそう叫ぶと、この場に居る全員が驚いた顔をした。

「な、何バカな事言ってるのよ!？」

アチキがそんな「最強のデジモンが弱者に作戦会議をさせないなら、君は本当の最強じゃない!!!」あ、アンタ、ふざけんじゃないわよ!!!

良いわ、作戦会議の一つや二つ、やっても良いわよ!!!」

僕がメタルエテモンの言葉を遮って挑発した口調でそう言うと、メタルエテモンは僕の挑発に乗って僕達にそう叫んできた。

やはり、力は成長しても在ってもバカは何時迄経ってもバカなんだ。

「それじゃあズドモン、君が考えた作戦を教えてくれ。」

「あ、嗚呼、分かったよ。」

実は……

(説明中)

・・・だから、この作戦で行けばメタルエテモンを倒せるかもしれないんだ。」

ズドモンの大博打の作戦を聞いて、僕達は溜息を一回吐いた。
大きな賭けだが、それ以外の作戦も無いな。

「サーベルレオモン……」

僕はサーベルレオモンの名を言って、サーベルレオモンを見た。

「任せてくれ。」

するとサーベルレオモンは、真剣な顔で頷いて僕にそう言ってくれた。

「終わったみたいね。
それじゃあ再開しましょうか!!」

メタルエテモンはそう叫んで、僕達に突っ込んできた。

「サーベルレオモン!!」

「任してくれ!!」

僕がサーベルレオモンの名を言うと、サーベルレオモンはメタルエテモンに突っ込んだ。

「ズドモン、頼んだぞ!!」

「おう!!」

「任せてくれ!!」

ドッカアアアン!!!

ズドモンが僕に返事をした瞬間、サーベルレオモンが居る場所から大きな爆発音が鳴った。

僕達は其処へ目を向けると、メタルエテモンにやられて倒れているレオモンの姿が在った。

「あら、もう終わりなの？」

「何の作戦会議だったのかしら？」

メタルエテモンは不気味に笑いながらそう言って、レオモンにゆっくり近付いて行った。

「今だ、ズドモン!!」

「分かってる!!」

「メタルエテモン!!!!」

「ああ、何よ？」

「これでも喰らえ!!!!」

「ハンマーブーメラン!!!!」

するとズドモンは、ハンマーをメタルエテモンに思いっきり投げ

付けた。

「ハン、そんな攻撃がアチキに効く訳無いじゃないのよ!!」

メタルエテモンはそう言って、胸を張ってハンマーが来るのを待った。

……作戦通りだ!!!

ドカンッ!!!

僕がそう思った時、ハンマーはメタルエテモンの体を砕いてズドモンの所に帰ってきた。

「ど、どおして!!?」

メタルエテモンは、自分の体が砕けた事によりかなり動揺していた。

「教えてやるよ。」

このハンマーも、お前の体と同じクロンデジゾイドで出来てんだよ。」

ズドモンはハンマーの事を真剣な顔をしてメタルエテモンに説明した。

「僕達の考えた作戦は、お前の体に傷を付ける事。」

ズドモンのハンマーとズドモンの力が在れば、お前の体は傷付く事は確信していた。

だけどこの作戦には大きな欠点が在る。

それは、お前がハンマーを避ける事だ。
だから、レオモンにワザと負けて貰ってお前が勝つと偽装させた
！！

お前は、僕達の予想通り天狗になり、ハンマーを避けなかった！！
それがお前の負ける敗因だ！！
頼む、皆！！！！」

「う、嘘でしょ！？」

僕がそう叫ぶとメタルエテモンは驚愕し、皆はメタルエテモンの
傷口を狙い必殺技を放った。

「ハンマースパーク！！！！！！」

「フラウカノン！！！！！！」

「獣王拳！！！！！！」

「霸王拳！！！！！！」

皆の必殺技が一つになり、メタルエテモンの傷口を攻撃した。
其れにより、傷口が大きな穴になった。

「アチキは……アチキは最強の筈なのにー！！！！！！」

メタルエテモンは叫びながら0と1のデータになって消えていっ
た。

「はぁ……はぁ……なんとか勝てた。」

僕はそう言って、尻餅を付いて皆の顔を見た。

「やはり、仲間が必要だ。」

するとレオモンも座り込み、僕達の顔を見ながらそう言ってきた。

「レオモン、この後直ぐにピッコロモン達と合流するの？」

ミミ君は突然、レオモンに頭を傾けながらそう聞いた。

「嗚呼、そのつもりだ。」

……何処に行きたい場所でもあるのか？」

レオモンがミミ君にそう聞くと、ミミ君は無言で頷いて其れを肯定した。

「どうしても行きたい場所があるの。
それは

はじまりの町へ。」

第六十三話だよ！（後書き）

次回でピノッキモン編もラスト！！

お楽しみに！！

第六十四話だよ！（前書き）

あれ？ 凄く長いよ・・・

そのくせに、内容は薄い・・・

今回も無理矢理です

今回でピノツキモン編終了！！

ピノツキモンの最期を見届けてください

あつ、航のキャラが壊れる？ かもしれないので注意してください

第六十四話だよ！

Side 航

「撃て撃て撃て撃てなのである！！！！」

ドカンドカンドカン（ry

デラモンとフローラモンは、大砲をピノッキモンに向けて撃っている。

その姿は、笑顔で凄くノリノリだった。

「そ、其処迄しなくても……」

「なんか、日頃のストレスを発散してる感じねえ。」

太一さんは苦笑いをしながら、空さんは少し呆れた顔をしながら二体の姿を見てそう言った。

皆も二人の言葉に頷いていた。

……皆は何も分かっているいな。

ピノッキモンとずっと住んでいたら、ストレスは通常の倍以上溜まるんだって。

それを発散する機会が在るんだから、ノリノリで撃つに決まっているじゃないですか！

「！？」

わ、我らの協力は此処迄なのである！！」

「が、頑張ってねえ!!」

二体は何かに怯えた顔をして、俺達にそう言って逃げて行った。

「二体が逃げたと言う事は……」

「よし、行くぞ!!」

俺とコロナモンとルナモン・テイルモン・ウィザーモン以外の皆は、デラモン達が逃げて行った理由が分かって、直ぐに下に走って降りて行った。

「お前等!!」

住居不法侵入罪で訴えてやる!!!!」

すると外から、ピノッキモンの叫び声が聞こえてきた。

すると俺達と二階に残っていたテイルモンは、ピノッキモンのその声を聞いて大砲の上に乗って、下に居るピノッキモンに姿を見せた。

「あら、ちゃんと家の人の許可は取ったわよ。

まあ、その人も逃げちゃったけどね。」

テイルモンはピノッキモンにそう言って、下に向かって飛んで降りた。

「航、何故皆と下に向かわなかったんだ？」

するとウィザーモンが、頭に？マークを浮かべて俺に話し掛けてきた。

「……ウィザーモン……頼みが在るんだ。」

俺はウィザーモンに、真剣な顔をしてある事を頼んだ。

side 太一

「あら、ちゃんと家の人の許可は取ったわよ。」

まあ、その人も逃げちゃったけどね。」

俺はテイルモンの話が終わると、扉を蹴って開けてピノッキモンに身構えた。

「ピノッキモン、そろそろ決着を着けようぜ!!」

「良いよ、そんなに僕と遊びたいんなら僕に付いて来い!!」

俺がピノッキモンにそう言うと、ピノッキモンは俺達にそう言うって急に走り出した。

「ま、待て!!」

俺達も走って、ピノッキモンを直ぐに追い掛けた。

.....

.....

.....

.....

俺達がピノッキモンに追い付くと、ピノッキモンの周りの地面から大量の赤い野菜の様なデジモンが現れた。

「な!？」

卑怯だぞ、ピノッキモン!!」

俺は驚いた顔をしたが、直ぐに真剣な顔をしてピノッキモンにそう叫んだ。

「卑怯？」

僕が正堂堂と戦う訳無いじゃないか!!
やっちまえ、レッドベジEMON!!」

ピノッキモンが俺にそう言って赤い野菜の様なデジモン・レッドベジEMONにそう叫ぶと、レッドベジEMONはピノッキモンの指示に従って俺達に突っ込んで来た。

「奴等は僕達に任せて!!」

アグモン達は俺達にそう言って俺達の前に出ると、俺達のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「アグモンワープ進化ー!!!!!!」

.....ウォーグレイモン!!!!!!」

「ピヨモン進化ー!!」

……バードラモン！！
バードラモン超進化ー！！！！
……ガルダモン！！！！」

「テントモン進化ー！！
……カブテリモン！！
カブテリモン超進化ー！！！！
……アトラーカブテリモン！！！！」

「パタモン進化ー！！
……エンジェモン！！」

「テイルモン超進化ー！！！！
……エンジェウーモン！！！！」

アグモン達はワープ進化や超進化して、突っ込んで来たレッドベジEMONを攻撃していった。

「お、お兄ちゃん！
わ、航君達が居ないよ！？」

するとヒカリが、不安そうな顔をしながら俺にそう言ってきた。
な、何だと！？

「た、確かに、航君の姿はピノッキモンの屋敷を出る時から見ていません。」

すると光子朗は、ヒカリの話で航達が居なくなった時を俺達に言ってきた。

そんな時ピノッキモンが突然、大きな声を出して笑い始めた。

「ハハハ、きつと怖くて逃げ出したんだよ!!
腰抜けだね、航は!!」

!?

『違う(違います) (違うわ) !!!』

ピノツキモンが航を馬鹿にしたので、俺達の声を揃えてピノツキモンの言葉を否定した。

「航君は腰抜けなんかじゃない!!
航君は、どんな時でも逃げなかったの!!
何も知らないのに航君の事を話さないで!!」

ヒカリは本気で怒った顔をしながら、大きな声でピノツキモンにそう叫んだ。

「フン、幾ら叫んでも本人が出て来なかったら意味が無いんだよ!!
そんな君達に、僕が本当の絶望を見せてあげるよ!!」

ピノツキモンは冷たい視線で俺達を見ながらそう言うと、ピノツキモンは右手の指を鳴らした。

ドツドツドツドツドツ (ry

ピノツキモンが指を鳴らした瞬間、大きな地響きが鳴り始めた。

「な、何だ!?!」

「太一!!
あれ!!」

俺が驚きながら倒れない様に立っていると、空がピノッキモンの屋敷の方向を指差してそう叫んできた。

「あ、あれは!?!」

するとピノッキモンの屋敷が徐々に姿を変えて行って、大きな巨人になって姿を見せてきた。

「皆、僕があれを相手する!!
だから皆は、レッドベジEMONとピノッキモンを頼む!!」

ウォーグレイモンはほかのデジモン達にそう言って、ピノッキモンの屋敷の巨人に突っ込んで行った。

「そうはさせないよ!!」

だが、ピノッキモンの指から糸の様な物が出てきて、その糸はウォーグレイモンの体に絡み付いた。

「うっ!?!
か、体が……皆、逃げてくれ!!」

すると突然、ウォーグレイモンが俺達に突っ込んで来た。
そしてウォーグレイモンは、何故かは分からないが皆を攻撃し始めた。

「ウォーグレイモン!!!?」

「ごめん、太一。」

……か、体が言う事を聞かないんだ……」

ウォーグレイモンは、ピノッキモンの糸の所為で操り人形にされていた。

くっ、どうしたら良いんだ!?

「私に任せてくれ!!」

すると突然、茂みからウィザーモンが現れて、ピノッキモンに向かって攻撃をした。

「チッ!!」

ピノッキモンはウィザーモンの攻撃を避けたが、ウォーグレイモンに絡み付いていた糸がその所為で切れた。

『ウィザーモン!!』

俺達は声を揃えてウィザーモンの名を叫んだ。

「これでも喰らえ!!」

「ガイア……フォース!!!!」

ピノッキモンの操り人形から解放されたウォーグレイモンは、ピノッキモンに向かって必殺技の“ガイアフォース”を放った

「うわあああああああ!!!!!!?」

するとピノッキモンは、悲鳴をあげてぶっ飛んだ。

「くっ、覚えてろ!!!」

ピノッキモンは悔しそうな目で俺達を睨みながらそう言って、尻尾を巻いて逃げ出した。

「ま、待てッ!!」

俺達は逃げ出したピノッキモンを追い掛け様とした。
だが、レッドベジモンと屋敷の巨人が俺達の邪魔してきた。

「クソッ!

どうすれば良いんだ!!」

「大丈夫だ、ピノッキモンはもう負ける!!」

すると俺とヒカリの隣に立っていたウィザーモンが、レッドベジモンを倒しながらそう言ってきた。

「どういう意味だ、ウィザーモン!」

エンジェウーモンが、ピノッキモンの屋敷の巨人に攻撃しながらウィザーモンに聞いてきた。

「ピノッキモンは……航が倒すからだ!!」

!?

「それは本当なの、ウィザーモン!?
航君は逃げたんじゃないんだね!?」

するとヒカリが、嬉しそうな顔をしながらウィザーモンに聞いた。
俺達も耳を傾けながらウィザーモンの話を聞いた。

「嗚呼!

航はピノッキモンが逃げる事を予想して、既に回り込んでいるんだ
!!
決して航は逃げたんじゃない!!」

「良かった。

……やっぱり航君は、私達を見捨てて逃げたんじゃないんだ!
本当に良かった!」

ウィザーモンの話を聞いて、ヒカリは本当に嬉しそうな顔をしながら喜んだ。

俺も、否、俺達も心の中で安心した。

「さ、航を信じてコイツ等を倒そうぜ!!」

『うん(はい)(そうですね)!!!』

そして俺達は、レッドベジーモン達に意識を集中させた。

side 航

「俺を助けてくれよ!!」

「お前が居たら足手纏いなんだよ!!」

「ぐわあああああああ……」

ピノッキモンは背中の中の木のブーメランで、レッドベジーモンを何の戸惑いもなく殺した。

……ムカつく……

コロシテヤリタイ……

「航、落ち着けよ。」

「闇に飲み込まれちゃうよ。」

すると俺の隣に居たフレアモンとクレシェモンが、心配そうな顔をしながら小さい声で俺にそう言ってきた。

「あっ、良い所で出会ったね!!」
「前みたいにアイツと戦って倒しちゃってよ!!」

俺はフレアモン達の忠告を聞いて心を落ち着かせていたら、まるで希望が現れた様なピノッキモンの声が聞こえてきた。

俺は視線をピノッキモンが見ている場所に集中させた。

すると其処には、ピノッキモンを睨み付けているヤマトさんとメタルガルルモンが居た。

俺達はそれを確認すると、茂みから出て行ってピノッキモンに近付いた。

「!？」

……嫌だ。」

ヤマトさんは俺達に気付いたが、直ぐにピノッキモンを睨み付けて冷たくそう言った。

「な!？」

お前達は黙って僕に従っていれば良いんだよ!!!」

ピノッキモンはヤマトさんの反応に切れて、手から糸を出しメタルガルモンに巻き付けた。

そして操ろうとしているが、メタルガルモンは全然動かなかった。

「ど、どうして動かないんだよ!？」

ピノッキモンは動揺しながらヤマトさんに聞いた。

「仲間を平気で殺す様な奴の言う事なんか誰が聞かよ。」

「誰もお前の言うことなんか聞かねえよ。」

お前には、誰一人仲間なんか居ないんだよ。」

俺はヤマトさんの言葉の後に、冷たくゴミに言う様な言い方でピノッキモンにそう言った。

「わ、航!？」

良かった、b「黙れ、クズ。俺はお前みたいなクズを助けに来たんじゃねえ。俺は、お前を殺しに来たんだよ。」な!？」

お前は僕の友達じゃないか!!
僕を見捨てるのか!？」

俺はピノッキモンの言葉を遮って言ったが、ピノッキモンは俺に助けを求めてきた。

「俺はお前の事を友達と認めた覚えは無い。

俺はお前の事をずっと“クズ”としか思った覚えが無い。

俺に話し掛けんな、クズ!!」

俺がピノッキモンにそう言うと、ピノッキモンが完全に切れた。

「僕を……僕を……僕をバカにするなあー!!!!」

ピノッキモンはハンマーを構えて、俺を睨みながら俺達に突っ込んできた。

だが、お前の敗北は決定しているんだよ!!

「コキュートス……ブレス!!!!」

「紅蓮獣王波!!!!」

「ダークアーチェリー!!!!」

メタルガルルモンは必殺技の“コキュートスブレス”を、フレアモンは必殺技の“紅蓮獣王波”を、クレシェモンは必殺技の“ダークアーチェリー”を、三体は必殺技をピノッキモンに放った。

「ギャアアアアアアアア……」

ピノッキモンは悲鳴をあげて、0と1のデータになって死んだ。

「ヤマトさん……」

「すまない。」

……未だお前達とは合流出来ない。

……悪いな。」

ヤマトさんは俺にそう言って、後ろを向いてメタルガルルモンと一緒に歩き出した。

「必ず……必ず帰って来て下さいね!!」

俺が大きな声でヤマトさん達にそう言うと、ヤマトさんは歩きながら手を挙げて返事してくれた。

そしてヤマトさんの姿は完全に見えなくなった。

ガッドドドドド……

すると突然、地面が動き出した。

「航、太一達と合流しよう!!」

「急いで、航君!!」

俺はクレシェモンに乗って、太一さん達の所へ急いで向かった。

s i d e 丈

ガッドドドドド……

僕達が歩いていると突然、僕達の隣に在る森が動き始めた。

「ピノッキモンを倒した様だな。」

「本当なのか!？」

と言う事は、太一達はピノッキモンを倒したんだな!!
やったな、丈!!」

ゴマモンは凄く喜びながら僕にそう言ってきた。

「嗚呼!!」

これで残すダークマスターズは二体だ!!
さ、急いではじまりの町へ行ってピッコロモン達と合流しよう!!」

僕がそう言うと皆は頷いてくれた。

そして僕達は、はじまりの町へ向かって再び歩き出した。

s i d e 太一

ガッドドドドド……

俺達がレッドベジーモンを全体倒し終えた瞬間、地面が突然動き出した。

「な、何だ!？」

「た、太一さん!!
屋敷の巨人が!!」

光子朗がそう叫びながら、ピノッキモンの屋敷の巨人を指差して俺に言ってきた。

俺がピノッキモンの屋敷の巨人を見ると、ピノッキモンの屋敷の巨人は崩れていった。

「恐らくだが、航がピノッキモンを倒したのだろう。」

!?

「ほ、本当か、ウィザーモン!？」

俺は少し驚きながらウィザーモンに聞いた。

「このエリアはピノッキモンが支配していたエリア。
エリアが変化を起こすと言う事は、エリアを支配していた者が死んだと言う事だろう。」

ウィザーモンは丁寧に俺に、否、俺達に説明してくれた。

「皆ああああ!!」

すると突然、航の声が上から聞こえてきた。

俺達は声が聞こえてきた瞬間、直ぐに顔を上に向けた。

其処には、フレアモンとクレシェモン・そしてクレシェモンに乗っている航が居た。

「このエリアは後少しで消えてしまいます!!」

急いでデジモンに乗って非難して下さい!!」

「分かった!!」

皆、急いで非難するんだ!!」

俺は皆にそう指示を出してウオーグレイモンの背中に乗った。

空はガルダモン・光子朗はアトラカブテリモン・タケルはエンジェモン・ヒカリはエンジェウーモンに乗って空に非難した。

ウィザーモンは自分の力で空を飛んだ。

「航、勝ったんだな？」

俺は真剣な顔をして航に聞いた。

「勝ちましたが話は後です!!」

今は此処から離れる事だけを考えましょう!!」

この近くに居たら、俺達も消えてしまいます!!」

「わ、分かった!!」

航の指示は正確だったので、俺達は急いで森エリアから離れて行った。

第六十四話だよ！（後書き）

次回からムゲンドラモン編です！！

まさかの航が行動不能！？

お楽しみに！！

第六十五話だよ！（前書き）

先ずは簡単に暗黒エネルギーの説明。

暗黒エネルギーを使うと少しだけですが身体能力が向上します。

しかし、暗黒エネルギーを使い過ぎると疲労が溜まって体調が崩れたりする。

これが暗黒エネルギーの説明ですね。

まあそれは置いて、遂にムゲンドラモン編！！

だが話は急展開を迎える！！

まあ暗黒エネルギーの説明をしたから、勘の良い人は分かりますがね……

それではスタート！！

第六十五話だよ！

Side 航

「ゲホッゲホッ……ゲホッゲホッ」

「ハアハア……ハアハア……」

おれた、ちはいま、あついで、うろをあるい、ている。

……ひかりちゃ、んがせきをし、ている。

そうい、えばな、つか、ぜがさいは、つするんだ、ったな。

か、ぼんのな、かにかぜぐ、すりがあつたは、ず。

た、いちさん、にとまつ、てもらわ、ないと……

「ゲホッゲホッ……ゲホッゲホッ」

「ハアハア……た、いち、さん……」

あ、れあし、にちか、らが……

お、れはどう、しちまったん、だ……？

あっ……

ドタッ×2

「！？」

航、ヒカリ！！」

side 太一

航とヒカリが、歩いていたら突然倒れた。

俺達は近くのバス停に移動して、バス停のベンチで二人を寝かせている。

「夏風邪みたいね、二人とも。

でも、航君の方はヒカリちゃん以上の熱がある。」

空が二人の額に手を当てながら、俺達の顔を見てそう言ってきた。

「二人とも、どうしてこんな無茶を……」

俺は少し涙声になって二人に聞いた。

「ゲホッゲホッ……ごめんね、おにいちゃん。

……おかあさんたちをたすけたかったから……ゲホッゲホッ」

ヒカリは辛そうな目をしながら、俺を見てそう言ってきた。

「ハアハア……た、いちさん……おれ、のかば、んに……ハアハア……かぜぐす、りがはいっ、てます……ハアハア……そ、れをひかりちゃ、んに……ハアハア」

航は手で頭を押さえながら、辛そうな声で俺にそう言ってきた。

俺は航の鞆の中を開けて、少し漁って航が言っている風邪薬を探した。

そして漸く鞆の中から、航が言っていた風邪薬を見つけた。
だが……

「一人分しかない……」

風邪薬の箱の中には、一人分の薬しか入っていなかった。

「ハアハア……た、いちさん……ひか、りちゃんにの、ませてく、
ださい……」

航は俺にそう言って目を閉じた。

「わ、航!？」

「落ち着くんだ、太一。」

眠っただけだ。

だが、今は航の言う通りヒカリに薬を飲ませた方が良い。
航は、ヒカリの為に風邪薬を持ってきたのだから……」

確かにウィザーモンの言う通りだが、航の方がヒカリより酷い状態だ。

此処は普通、ヒカリよりも航に飲ませるべきなんじゃ……

「太一、確かに航の方がヒカリよりも酷い状態だ。」

だが、それだけ酷いと航が持ってきた薬では治らない。

だから航には、ちゃんとした薬を飲ませないといけない。

だから、その薬をヒカリに。」

……ウィザーモンの言う通りだな。

俺はウィザーモンの言う通り、ヒカリに風邪薬を飲ませた。

すると、ヒカリの表情は穏やかになって呼吸が安定して静かに眠った。

「……光子朗、何処かに休める場所がないか探してくれ！」

「わ、分かりました!!」

俺はヒカリが眠ったのを確認して光子朗にそう頼み、光子朗は直ぐにパソコンを起動させて検索し始めた。

「航君……頑張って!!」

僕達が必ず助けてあげるからね!!」

タケルが航を心配そうな顔で見ながらそう言った。

………

………

………

……

「在りました！」

近くに大きな街が在ります！

其処ならきつと、薬も置いている筈です！

太一さん!!」

少しして光子朗が近くに大きな街が在る事を教えてくれた。

よし、街なら航達が休める場所や薬が在る筈だ！

「急いでその街に向かうぞ!!」

俺は航を、空はヒカリをおんぶした。

「テントモン、頼みます!!」

「はいでんがな!!」

光子朗がテントモンにそう言うのと、光子朗のデジヴァイスが光り出した。

「テントモン進化!!」

「……カブテリモン!!」

「皆さん、カブテリモンに乗ってください!!」

テントモンはカブテリモンに進化して、光子朗はカブテリモンに直ぐに乗って俺達にそう言うてきた。

そして俺達は直ぐにカブテリモンに乗って、カブテリモンは空を飛んで街に向かった。

「ハアハア……ハアハア……ハアハア」

街に向かっている時、航が苦しそうに呼吸を شدした。

「待ってろよ、航!!」

絶対に助けてやるからな!!」

俺は決意した事を少し大きな声で言った。

第六十五話だよ！（後書き）

次回は太一と光子朗が航とヒカリの為に町を搜索する！！

お楽しみに！！

第六十六話だよ！（前書き）

すいません、太一達はまだ薬を探しに行きません

次回予告したのにすいません o r t

今回は、薬を探しに行くまでの話です

太一のキャラがかなり変わってます

今更ですが・・・

第六十六話だよ！

side 太一

「ハアハア…ハアハア…ハアハア…ハアハア…」

航が荒々しく呼吸をしながら、辛そうな顔をして眠っていた。

「カブテリモン、もう少し揺れない様に飛んでくれ！」

俺は少しでも航の負担を減らす為に、カブテリモンに大声を出してそう頼んだ。

「これで精一杯なんですねん。」

だがカブテリモンは、今の飛行が一番揺れない飛行と言ってきた。そうなのか……

「太一さん……

あっ！？

街が見えてきましたよ！！！」

光子朗が大きな声を出して俺達にそう言ってきたので、俺達は下に在る街を見た。

其処には、まるで世界の都市が合体した様な街が広がっていた。

「凱旋門にエッフェル塔、それにコロッセオに自由の女神……凄いですね。」

光子朗の驚いた声の言葉に、俺達は無言で光子朗の言葉に頷いた。

「カブテリモン、何処か休める場所に下りてくれ。」

先ずは、航を寝かせて落ち着かせる事が大事だからな。」

「はいでんがな!!」

俺がカブテリモンにそう指示を出すと、カブテリモンは俺にそう応えて休める場所を探し始めた。

.....

.....

.....

.....

「此処なら休めそうですぬ。」

俺達は今、偶々見つけた大きな屋敷の庭に下りた。

これだけ大きな屋敷なら航とヒカリは休めそうだし、何より葉も在るかもしれないな。

「ハアハアハアハアハアハア」

だが航は、顔を赤くしてさつきより荒い呼吸をしていた。

「取り敢えず、先ずは航とヒカリを寝かせよう。」

俺はそう言って、皆と一緒に大きな屋敷の中に入って行った。

.....

.....

.....

.....

俺達男組は今、この屋敷の中の様々な部屋に入って薬を探している。

航とヒカリは、ベッドが在ったで其処で寝かせている。

航は、少しだけだが呼吸が安定した。

二人の事を空・ピヨモン・コロナモン・ルナモン・テイルモン・ウィザーモンに任せ、俺達は薬が在るかを調べている。

「光子朗、薬は在ったか？」

「ダメです、此処には在りません。
タケル君はどうですか？」

「全然見つからないよ。」

俺達が探している場所には薬は無かった。

「たゝいゝちゝ!!」

薬が在ったよゝ!!!!」

「本当か、アグモン!!?」

すると別の部屋からアグモンが、俺達の所へ走りながら俺にそう叫んできた。

「ハア……ハア……こ、これだよね？」

アグモンは肩で息をしながら、俺に自身が持ってきた薬を渡してきた。

箱には“風邪薬”と書かれていた。

「でかしたぞ、アグモン!!」

俺は笑顔でアグモンを誉めて、喜びながら風邪薬の箱を開けた。
だが……

「嘘だろ……」

俺は箱の中身を見て、余りにも大きなショックだったのでそう呟いた。

「どうしたんで……そんな……」

光子朗は俺の横に来て、風邪薬の箱の中身を見て俺と同じで落ち込んだ。

「どうしたの、太一!？」

ま、まさか、それじゃないの!？」

アグモンは、俺と光子朗の顔を見て焦りながら俺に聞いてきた。
違うんだ、アグモン……

これで風邪薬であってゐるんだ。
だけども……

「中身が……無いんだ。」

『!?!』

俺の言葉を聞いて、俺と光子朗以外の皆は驚愕した顔になった。
……これじゃあ、航を治す事が出来ねえ!!
……行くしかないか

「光子朗、俺と薬を探すのを手伝ってくれないか？」

「ま、まさか、外に行つて探すんですか!?!」

光子朗は俺の言葉を聞いて、大きな声を出して反応した。

「ダメよ、太一!!」

此処は敵の本拠地なのよ!!」

俺達は、その声を聞いて後ろを向いた。

其処には、明らかに怒っている顔をした空が立っていた。

「悪い、空。」

……だけども、このまま俺は航を見捨てる事は出来ねえ。

大丈夫、戦闘は絶対にしない。

薬を探しに行くだけだから。

だから、頼む……行かせてくれ。」

俺は空の目を真剣に見て、空の目を逸らさずにそう言った。

少しすると、空が溜め息を一回吐いて頬笑みながら俺を見た。
俺はその空の顔に一瞬見惚れてしまった。

「分かった……だけど約束して。

必ず葉を見つけたら直ぐに帰ってくる事。

敵に出会ったら戦わず逃げる事。

無事に帰って来る事。」

「嗚呼、約束は守る。

行くぞ「待って、太一さん!! 僕も行くよ!!」タケル……」

俺達が外に行こうとしたら、タケルが俺達を止めてきた。

「僕も一緒に行くよ!

僕も航君とヒカリちゃんを救いたいんだ!!」

タケルは、俺の目を真剣に見てきた。

……その気持ちは凄く嬉しい。

だが……

「タケル、お前は此处で待っていてくれ。」

「た、太一さん!？」

「タケル、俺はお前も大切な仲間だと思ってる。

俺は、誰一人傷付いて欲しく無いんだ。

だから、タケルは此处に残って欲しいんだ。

勿論、タケルに残って欲しい理由は他にも在る。

もしタケルが俺達と一緒に行ったら、此处に残るのは、空とピヨモン・航とコロナモンとルナモン・ヒカリとテイルモン・そしてウイ

ザーモンだけだ。

もし敵が此処を襲って来たら、コロナモンとルナモン・テイルモンは航達から離れられないから戦えるのは空とピヨモン・ウイザーモンだけだ。

だから、タケルは此処に残って航達を護って欲しいんだ。」

本当はこんな事はしたくない。

だけど、今は一刻の猶豫を争う。

俺に出来る最高の判断だと思う。

……ヤマト、お前ならどうしてた？

お前は俺の案に賛成してくれたのか？

「分かったよ、太一さん!!」

僕、此処に残って航君達を護るよ!!

僕は、お兄ちゃんにも航君達の事を頼まれたしね!!」

「頑張ろう、タケル!!」

するとタケルとパタモンは、俺の指示に真剣な顔をして了承してくれた。

「ありがとう。

……アグモン、光子朗、テントモン、行くぞ!!」

俺達は葉を探す為に外に出て行った。

side航

『俺が無茶するのは何時もの事だろ?』

太一さんがアグモンに強気な顔をしてそう言った。

『俺達はタケル達を信じてる!!』

だから、俺達は止めない!!』

ヤマトさんがガブモンに太一さんと同じで強気な顔をしてそう言った。

これは……俺の記憶……

失われた記憶……

『後少しだな……頑張れよ。』

ありがとな、もう一人の俺……

第六十六話だよ！（後書き）

次回こそ薬を探しに行きます！！

絶対に行かせます！！

次回もお楽しみに！！

第六十七話だよ！（前書き）

太一が光子朗に（心の中で）突っ込みます

今回は薬の話です

第六十七話だよ！

side 太一

「……よし、行くぞ！」

俺はビルの陰から誰も居ない事を確認し、光子朗達と同時に次のビルの陰に向かって走り出した。

目指すは病院かドラッグストアなのだが、この街は余りにも広い、広過ぎる。

さっきから走って探しているが、病院やドラッグストアが全く見つからない。

「た、太一さん、僕に良い考えがあります！」

すると俺の隣を走っていた光子朗が、何かを思い付いた顔をして俺にそう言ってきた。

「どうするんだ、光子朗？」

俺はビルの影に隠れて、敵が居るかを確認しながら光子朗に聞いた。

「あれを使えば良いんです。」

すると光子朗は、俺達の前に在る公衆電話を指差した。

……だから？

「まあ僕に任せてください！」

光子朗は俺にそう言って、公衆電話に向かって走り出した。

「ま、待てよ、光子朗！」

「ワテを置いて行かんといてえな！」

「ちょっ!？」

皆、僕を置いて行かないでよ!!」

俺とテントモンは光子朗に、アグモンは俺達にそう言って光子朗を追い掛けた。

.....

.....

.....

.....

「闇雲に探し回っても時間の無駄です。

此処には電気が通ってます。

僕のパソコンを使えば……やった、この街の地図だ!!」

光子朗は自身のパソコンを公衆電話に繋げて、この街の情報を探し出した。

……“公衆電話をジャックした”って言うんだよな、これ？

「光子朗はん、はよ病院かドラッグストアの情報を探してくれまへんか？」

せ、背中が……」

パソコンのテーブルになっているテントモンが、少し辛そうな声で光子朗にそう言った。

……うん、あの態勢はシンドイな。

「待って下さい。

……や、やったあ!!」

見つけましたよ、太一さん!!」

「あ、嗚呼……ご苦労さん。」

……“ハッキング”って言うんだよな、これ？

……本当に光子朗は小学四年か？

結構自信無くすぞ、こんなの見せられたら……

「さ、太一さん、急いで病院へ行きましょう!!」

「わ、分かったよ……ハア」

俺は溜め息一回吐いて、光子朗達と病院に急いで向かった。

side 三人称

此処は何処かの地下エリア……

其処には、歯車の様なデジモンと機械で出来た恐竜の様なデジモ

ンが居た。

「アクセスの信号が途絶えました。」

「選ばれし子供達は、この街の病院・ドラッグストアの情報を盗んだ様です！」

二体の歯車の様なデジモン・ハグルモン達が機械で出来た恐竜の様なデジモン・ムゲンドラモンにそう言った。

「メタルエンパイアグンダン、シュツゲキ！」

ムゲンドラモンがそう命令すると、突然このアジト警報が鳴り始めた。

「メタルエンパイア軍団、出撃！！！！」

「メタルエンパイア軍団、出撃！！！！」

ハグルモン達は、大声で何度も復唱し始めた。
そうすると、道路から戦車みたいなデジモンや機械の羽根が生えたデジモンなどが出現した。

「ビョウイン・ドラッグストアヲコウゲキ！！！」

ムゲンドラモンが命令すると、メタルエンパイア軍団は病院・ドラッグストアを攻撃し始めた。

side 太一

俺達は病院に無事に着き、手分けをして風邪薬を探している。
だが、余りにも沢山有るのでどれが風邪薬なのか分からない。

「ダメだ、全然分かんねえよ。」

「こういう時、丈さんが居れば良かったんですけどね。」

俺の言葉に光子朗は反応して、少し苦笑いしながら俺にそう言うてきた。

「丈ばかり頼っててもダメだ。」

俺達も最低限度の知識を持ってないと。

……何だかんだ言って、丈に何時も助けられてたんだな、俺達……」

ファイル島に居た時は、生真面目で優柔不断で何時もビクビクしてたからハッキリ言って丈の事は余り好きじゃなかった。

だけど、一緒に冒険して行くにつれて丈は俺達にとって掛け替えの無い仲間になった。

だからこそ、今居ない時に丈がどれだけ俺達を助けてくれたか分かる。

……航のお陰で、こんな俺でも他人を誉める事が出来る様成長出来たのかもしれないな。

「太一さん、良い方法を見つけました!!」

光子朗は俺にそう言って、パソコンを電話のコードの所に繋げた。

……またハッキングをするのか。

だけど、今は気にしている時間が勿体無いな。

俺達は光子朗を静かに見守った。

side 三人称

「アクセスされています!!」

ハグルモンが、目の前に在る大きな画面を見ながらムゲンドラモンにそう言った。

「バシヨハ？」

ムゲンドラモンは、冷たく低い声でハグルモンに聞いた。

「えーと、A－25エリアです！」

ハグルモンは、アクセスされている位置の番号をムゲンドラモンにそう言った。

「タダチニ、メタルエンパイアグندانをA－25エリアへムカワセロ。」

「……オレモイク!!」

ムゲンドラモンのハグルモンにそう指令をして、ハグルモン達はメタルエンパイア軍団に指令を出した。

「メタルエンパイア軍団、A－25エリアへ急行せよ!!」

「メタルエンパイア軍団、A－25エリアへ急行せよ!!」

ハグルモン達の指令を受け、メタルエンパイア軍団とムゲンドラモンは太一達が居るA-25エリアへ向かった。

side太一

「……分かりましたよ、太一さん！」

左から二つ目の棚の、上から三段目の、右から四つ目に在る薬がそうです!!」

「分かった！」

俺は光子朗の言う通りの場所に番号を数えながら行った。
そして、一つのビンを取り出して光子朗の所に戻ってきた。

「光子朗、これで間違いないんだな？」

「はい！」

それが航君の薬です！そしてこっちがヒカリさんの薬です！」

光子朗は俺にそう言って、もう一つのビンを俺に渡してきた。

「分かった。

……急いd「ドッカアアアアン!!!」な、何だ!？」

俺達是用が済んだので帰ろうとしたら、下から大きな爆発音が聞こえてきた。

「行ってみよう!!」

俺達は急いで下に向かった。

第六十七話だよ！（後書き）

次回は、回想編ですね・・・

ヒカリが本来、生と死の狭間を彷徨う時、太一と航に何があったのか！？

お楽しみに！！

第六十八話だよ！（前書き）

太一が回想するまでの話です

すいません、次回予告したのに・・・

次回予告は止めた方が良いのかな？

第六十八話だよ！

side 太一

俺達は下に急いで降りて、爆発音がした場所に向かった。
爆発音がした其処には……

「て、敵だあ！！
み、皆、逃げろお！！」

大量の機械のデジモンが建物を破壊していた。

俺が光子朗達にそう言うのと、俺の声でデジモン達は俺達に気付いて攻撃してきた。

俺達はそれを難とか避けながら病院の奥に向かって逃げ始めた。

「太一、僕に任せて！！
ウォーグレイモンに進化すれば、アイツ等なんか簡単に倒せるよ！！」

アグモンは俺の顔を真剣に見ながらそう言ってきた。

「ダメだ、俺は空と約束したんだ！！」

それに、今此処で戦えば、ダークマスターズが必ず来る！！

俺達はダークマスターズと戦いに来たんじゃない！！

航とヒカリ、二人の薬を探す為に来たんだ！！

一刻も早くこの薬を届けないといけない！！

今は逃げる事だけを考えろ！！」

此処でアグモンをウォーグレイモンにワープ進化させて戦えば、楽に勝てるかもしれない。

だが、航は今も一人で苦しんでる。

……それに俺はあの日、航が止めてくれなかったら俺はヒカリを殺そうとしたんだ……

そんな俺を救ってくれた航を、俺は速く助たいんだ！

「……分かったよ、太一。」

アグモンは少し間を開けて素直に了承してくれた。

俺達は逃げながら何処か隠れられる場所は無いかを探した。

………

………

………

………

「ハア……ハア……取り敢えず、無事に撒いた様だな。」

俺は床に座り、呼吸を整えながら皆の顔を見てそう言った。

「敵が余りにも多過ぎる……」

光子朗はそう呟いて、パソコンのコードを電話の回線に繋いだ。

「光子朗、お前何やってんだよ？」

俺は光子朗に近付いて、光子朗のパソコンの画面を見ながら光子朗に聞いた。

「敵の位置を調べるんです。」

敵の方位網さえ分かれば、必ず何処かに突破口が在る筈ですから！」

光子朗は俺にそう言っつて、敵の情報を調べ始めた。

「と、取り敢えず、が、頑張ってくれ。」

俺は途切れ途切れになりながら光子朗を応援した。

……またハッキングだよ、これ……

光子朗の父さんと母さんに、この事を教えた方が良いのか？
でも、光子朗は航達の為に頑張ってくれてるんだよね……
な、悩むな……

side 三人称

此処はムゲンドラモンのアジト……

其処には、大量のハグルモンと大きなこの街の地図が在った。
すると突然、地図に赤いマークが現れた。

「A—24エリアの病院に反応あり！！」

「A—24エリアの病院に反応あり！！」

ハグルモン達は、大きな声で何度も復唱した。
すると一体のハグルモンが、マイクのある場所に近付いてボタン

を押した。

「ムゲンドラモン様、メタルエンパイア軍団、A-24エリアの病院に反応あり!!」

直ちに向かい攻撃せよ!!」

繰り返す!!」

ムゲンドラモン様、メタルエンパイア軍団、A-24エリアの病院に反応あり!!」

直ちに向かい攻撃せよ!!」

ハグルモンは、太一達が居る病院の情報をムゲンドラモン達に伝えた。

side 太一

「!」?

た、太一さん、見つけました!!これならだっしゅt……な、何で……」

光子朗が俺に喜んだ顔をしたと思ったら突然驚いた顔をした。

「ど、どうしたんだ、こ、光子朗?」

俺は少し嫌な予感を感じながら、途切れ途切れに光子朗に聞いた。

「敵の位置が分かったんです。

……ですが皆、僕達が居るこの病院に向かって来ているんです!!」

「な、何だってえ!!?」

光子朗の話を聞いて、俺達は急いで光子朗のパソコンの画面を見た。

パソコンの画面には、俺達を示す黄色のマークの所に敵を示す赤いマークがどんどん集まってきていた。

「ま、まさか!？」

光子朗は突然何かを気付いたのか、急いでパソコンのコードを引っっこ抜いた。

……どうしたんだ？

「迂闊でした。」

……敵は僕がコンピューターにアクセスしたその信号で、敵は僕達の居場所を突き止めていたんです……。」

!?

「光子朗、ふざけるのもいい加減にしろ!!」

迂闊だったじゃ済まないだろ!!」

俺は光子朗の言葉を聞いて、俺は直ぐに光子朗の胸ぐらを掴んだ。
何でコイツは簡単に物事を済ませようとするんだよ!

俺は光子朗に怒りを覚えて、思いっきり手に力を込めて光子朗を殴ろうした。

その時、あの日に航に言われたあの言葉を思い出した。

『良いですか太一さん？』

物事は力だけでは解決するとは限らないんです。

力を使う前に、一度相手と話し合って下さい。
もし太一さんが本当に反省してるなら、二度と力で解決しようとし
ないで下さい。

……分かりましたか?』

!?

な、何やってんだ、俺は……

俺は直ぐに光子朗の胸ぐらから手を離れた。

「……悪い、光子朗。」

……頭に血が上ってた。

……本当にすまなかった。」

俺は光子朗に頭を下げて、申し訳ない気持ちで一杯になりながら
光子朗に謝った。

「あ、頭を上げて下さい!

元はと言えば、僕が悪いんですから!!」

俺は光子朗に謝ったのだが、光子朗は直ぐに俺にそう言ってきた。

光子朗……

ドッカアアアアアアン!!!!

するとこのビルの下から大きな爆発音が聞こえてきた。

「チッ、敵がもう来やがった!!

アグモン、行くぞ!!」

「わ、分かったよ、太一!!」

俺はデジヴァイスを腰から外して右手に持って、アグモンにデジヴァイスを向けた。

「アグモン……進化だ!!」

俺がアグモンにそう叫ぶと、俺のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「アグモン進化ー!!」

……グレイモン!!

グレイモン超進化ー!!!

……メタルグレイモン!!!」

パリーイイイイイイン!!!

アグモンはメタルグレイモンに超進化して、俺達を背中に乗せて窓ガラスを割った。

外に居た敵はメタルグレイモンに気付いて、メタルグレイモンを攻撃してきた。

「メタルグレイモン、今は薬を届ける事が大切だ!!
だから、今は戦わずに逃げてくれ!!」

「分かった、太一!!」

メタルグレイモンは俺の指示に従ってくれて、俺にそう言って攻撃を避けながら逃げてくれた。

.....

.....

.....

.....

「話……ですか？」

「そうだ。」

……お前達に話さなければならぬ事が在るんだ。」

俺達はあの後、難とか逃げ切る事が出来た。

だが、直ぐに敵は俺達を追い掛けて来た。

なので俺達は今、近くに在った協会に隠れている。

俺はあの事を言う為に、少しだけ時間を貰った。

「そうだ……俺がお前を殴ろうとした理由だ。」

俺が光子朗にそう言うと、光子朗は暗い顔をして顔を下に俯かせた。

「光子朗、元気を出せって。

あれは俺が悪いんだからよ。」

「で、ですが!？」

「落ち着けて。」

……理由を話させてくれ。」

俺が光子朗に真剣な顔をしてそう言っていると、皆は俺の顔を真剣に見てきて無言で頷いてくれた。

「あれは三年前の話だ……」

俺はあの事件の事を話し始めた。

第六十八話だよ！（後書き）

次回は太一と航とヒカリの隠されていた話です！！

あの時、太一と航に何があったのか！？

お楽しみに！！

第六十九話だよ！（前書き）

すいません、話が思いつきませんでした

今回は太一と航の過去の話です

心を広くしてから読んでください

第六十九話だよ!

三年前・・・

side 太一

「じゃあなあ、空!!」

「またね、太一!!」

俺は友達の上に手を振って別れた。

今日は、妹のヒカリが風邪を引いて家で休んでるんだ。
父さんも母さんも、今日は仕事で家に居ない。

だけど、隣に住んでる航がヒカリの傍に居るんだ。

「さうて、ヒカリは治ってるかな？」

治ってたら遊びに連れて行ってやる!!」

俺は一人でそう言って、急いで走って家に向かった。

.....

.....

.....

.....

「ただいま!!」

俺は勢いよく扉を開けて、中に居るヒカリ達にそう言った。

「お帰りなさい、太一さん。」

すると白髪の子供・航が俺を出迎えてくれた。

「よう、航！！

ヒカリの調子はどうだ？」

俺は航に短く返事をして、ヒカリの調子を航に聞いた。

・元気だったら良いな、ヒカリの奴。

「熱も下がりましたし、大分良くなりましたよ。」

すると航は、ヒカリの調子を簡単に教えてくれた。

そうか、調子は良くなったんだな！！

「よし、早速三人で遊びに行こうぜ！！」

俺が航にそう言うと、航は目を大きく開けて驚いた顔をした。
何でだ？

「太一さん、ヒカリちゃんも風邪で休んでるんですよ。
なのに、何で遊びに連れて行くこうしてるんですか……」

「何でって……元気なんだろう？
だったら遊んでも大丈夫だろう！」

俺は航にそう言って、走ってリビングに向かった。

「待って下さいよ、太一さん。

貴方はヒカリちゃんを殺す気なんですか？
自己中心的にも程がありますよ。」

俺は航の言葉を聞いて立ち止まって、航を睨み付けた。

バチンッ！！！！

そして俺は、思いつきり航の顔を殴った。

俺に殴られた航はぶっ飛んで床に倒れた。

航は口から血が出ていた。

「お前、調子に乗るのもいい加減にしろよ！！

何でお前なんかに其処迄言われないといけないんだよ！！」

俺は航を睨みながらそう叫んだ。

「太一さんの為に言ってるんですよ！！

貴方は、ヒカリちゃんを殺したいんですか！？

夏風邪は治りにくいし、危険なんです！！

しかも、こんな暑い日に遊びに連れて行ったら、ヒカリちゃんは死
んじゃいますよ！！」

「他人のお前なんかより、兄妹の俺の方がヒカリを理解してる！！
お前は俺に口出しするなよ！！」

「太一さんは何も分かっていない！！」

航にそう言われて俺は完全に切れて、直ぐに航に殴ったり蹴ったり始めた。

航は俺に抵抗する事無く、只俺に殴られるだけだった。

.....

.....

.....

.....

バチンッ!!!

俺は母さんに思いっきり叩かれた。

「太一!!」

貴方、航君に何をしたか分かってるの!?

航君はヒカリの事を知ってて貴方に言ったのよ!!

それなのに、貴方は航君を殴ったりして……」

「おい、それ位にしておけ……」

「うっ……ううう……」

母さんは俺にそう言った後、父さんに言われて母さんは泣き出した。

俺は涙を堪えながら父さんに聞いた。

「と、とうさん……わ、わたるはど、どうなったんだ？」

「……右足を少し酷い骨折していて、顔も少し腫れている。」

俺はその言葉を聞いて、急いで航の病室に走り出した。

………

………

………

………

「わ、航!？」

俺は航の病室に急いで入った。

其処には、ベッドに転がっていて、右足を包帯で巻かれ天井に吊られていて、右頬に湿布を貼っている航がベッドに居た。

「ん？」

どうしたんですか、太一さん？」

すると航は、俺に気付いて笑いながら俺を見てきた。

何で……何で笑ってんだよ……

何で……何で怒ってないんだよ……

何で……何でだよ!？」

「何でお前は俺に対して普通に話し掛けるんだよ!？」

何で怒ってないんだよ!?

お前を怪我させたのは俺なんだぞ!!

何でだよ!!」

俺は泣きながら航に近付いて、航に大声で聞いた。

航は一度溜め息を吐いて、頬笑みながら俺に言ってきた。

「太一さんは反省してるんでしょ?

だったら許すに決まってるでしょ。

だから許したんです。

許したから普通に話すんです。

許したから怒ってないんですよ。」

だ、だからって……

「太一さん、一つ約束してください。」

すると航は、真剣な顔をしながら俺に聞いてきた。

や、約束?

「良いですか、太一さん?

物事は力だけでは解決するとは限らないんです。

力を使う前に、一度相手と話し合って下さい。

もし太一さんが本当に反省してるなら、二度と力で解決しようとし
ないでください。

……分かりましたか?」

「嗚呼……嗚呼!!」

俺は泣きながら、何度も航の言葉に頷いた。

.....

.....

.....

.....

現在・・・

「今迄、俺は航との大切な約束を忘れていた。
俺がちゃんと覚えていたら……やまととけんかせずにすんだことも
あるのに。」

……わたるにあんこくえねるぎーを……ひろうをためすぎてたおれ
ることはなかったのに。

……おれが……おれがやくそくを……おぼえてなきやいけなかった
のに――！！

うつ……うつうつ……」

俺は泣きながら光子朗達にそう言った。

「太一さんの気持ちはよく分かりました。
僕に考えが在ります。」

太一さん、僕に任せてください！」

光子朗は真剣な顔をして俺に言ってきた。

第六十九話だよ！（後書き）

次回は航達と太一達が！？

お楽しみに！！

第七十話だよ！（前書き）

七夕ですね

皆さんは何か願い事がありますか？

俺はバイトが欲しいです

私事が入りました

今回は太一達と航達が・・・

第七十話だよ！

side 太一

「良い考えって……何をやる気だよ？」

俺は泣き止んで、パソコン起動させる準備をしている光子朗に聞いた。

「正面から突破するのは不可能です。
だったら敵の作戦を逆に利用しよう！」

光子朗は俺にそう言ってパソコンを起動させ、インターネットにアクセスし何かのソフトを使い始めた。

side 三人称

此処はムゲンドラモンの地下アジト……

其処には沢山のハグルモン達が居た。

そしてハグルモン達の目の前には、この街の地図が表示されていた。

そうすると、赤いマークが突然現れた。

「A—25……な、何だこれは！？」

「A—25……な、何だこれは！？」

ハグルモン達は驚いた声を出して混乱していた。
何故なら、反応を表す赤いマークが地図全体に広がっていたからだ。

side 太一

「成功です!!」

敵は混乱して動いていません!!」

光子朗は笑顔で俺を見ながらそう言ってきた。

「流石ですわ、光子朗はん!」

「凄いね、光子朗!!」

アグモンとテントモンは光子朗に近付き、光子朗の背中を叩きながらそう言った。

俺は取り敢えず一安心した。

ドッカアアアアアアン!!!

すると突然、遠くから大きな爆発音が聞こえてきた。

「な、何だ!!」

俺は急いでビルの窓に近付いて、窓から外の様子を伺った。
すると遠くから、煙が幾つも上がっていた。

「そ、そんな……」

すると光子朗は突然、パソコンの画面を見て怯えた声でそう呟いた。

「ど、どうしたんだ、光子朗!？」

俺は光子朗に近付き、一体何が起こったのかを聞いた。

「奴らは、この街を壊し始めたんです。」

……奴らは、この街ごと僕達を消すつもりなんです!!」

な!？」

「そ、それじゃあ、あ、あの煙は!？」

俺は煙の上がっている所を指差しながら、光子朗に驚いた顔をしながら聞いた。

「奴らが街を消しているんです。」

そ、それじゃあ、何もしらない空達は……
や、ヤバイ!!

「立て、光子朗!

今直ぐ屋敷に戻るぞ!
このままじゃ航達が!

……今から行けば間に合うかもしれない!!!」

「!？」

わ、分かりました!!」

そして俺達は急いで屋敷に向かって走り出した。

………

………

………

……

「ハア……ハア……よ、良かった、屋敷は無事みたいだ。」

「安心して暇は無い!!」

奴等はまだ其処まで来てるんだ!!」

俺達は難とか敵より先に屋敷に着く事が出来た。

だが、もう其処迄敵が来ていて呑気に息を整えている時間は無い!

俺は光子朗達を置いて、走って屋敷に向かって行った。

「ん？」

……太一、危ない!!」

突然アグモンが俺にそう言って、俺の足を捕まえてきた。

突然足を捕まれたので、俺は勢い良く地面に倒れた。

その直後……

ヒュウウウウン……ドツカアアアアアン!!!!!!!!!!

ミサイルが屋敷に飛んで行き、ミサイルは爆発して屋敷は跡形も無く目の前で消え去った。

「な!？」

う、嘘だろ……!!

折角薬を手に入れたのに……。

空ア!!

ピヨモオン!!

ヒカリィ!!

航ウ!!

テイルモオン!!

コロナモオン!!

ルナモオン!!

ウィザーモオン!!

タケルウ!!

パタモオン!!

居たら返事をしてくれエエ!!!!!!!!!!」

俺は屋敷が在った場所に、泣きそうになりながら大声でそう叫んだ。

「た、太一さん、危ない!!」

光子朗がそう叫だったので俺が後ろを振り向くと、ミサイルが俺達の所に向かってきた。

『う、うわあああああああ!!!!?』

「クソッ!!」

俺は急いで光子朗達の所に行き、光子朗達を抱えて俺が上になる様に倒れた。

「ヘブンズナックル!!!」

ドッカアアアアン!!!!

すると突然、後ろから誰かの声と大きな爆発音が聞こえてきた。
俺達は体を起こして、急いで後ろを向いた。

其処には……

『え、エンジェモン!!!?』

タケルのパートナーデジモンのパタモンが進化したデジモン・エンジェモンが飛んでいた。

「た、太一さん!!」

俺達がエンジェモンの名前を言うと、草むらからタケルが顔を出してきて俺の名前を呼んできた。

「た、タケル!?

じゃ、じゃあ皆は……!!」

俺がタケルの顔を見て未だ驚いているが何処か期待が籠もった声

でそう言うと、草むらから皆が顔を出して俺達の所に来た。

「良かった。」

……皆、無事だったんだな!？」

「タケル君が爆発音を聞いてね。
だから、早く非難していたのよ。」

空は俺達の顔を見て安心した様な顔をして、俺達に丁寧に説明してくれた。

「そっか……偉いぞ、タケル!!」

俺は笑顔でタケルの頭を撫でて、喜びながらタケルにそう言った。

「そ、それより薬は!？」

タケルは心配そうな顔をしながら、俺の顔を見てそう聞いてきた。

「大丈夫だ!」

薬なら此処に在るぜ!」

俺は空達の顔を見ながら、ズボンのポケットから薬を出して皆に見せた。

『良かった。』

空達は俺が持っている薬を見て、安心した顔をしてそう言った。

「∞（ムゲン）キャノン！！！！」

すると突然、遠くから何かの必殺技を言う声が聞こえてきた。そうすると、俺達の足元が急に崩れ出した。

『う、うわあああああああ！！！！？』

そして俺達は、暗闇が広がる地下に落ちていった。しかも、空達とドンドン離れて行っている。

こ、これだけは渡さないと！！

「そ、空！！」

こ、これを！！」

俺は持っていた菓を空に投げて渡した。

「太ーイイイ！！」

空は菓を無事にキャッチして、手を伸ばしながら俺の名前を叫んだ。

しかし、俺達は離れて行って落ちて行った。

第七十話だよ！（後書き）

次回は航とヒカリが目覚め、あのデジモンを救います！！

お楽しみに！！

第七十一話だよ！（前書き）

今回はヌメモン達を助ける話ですね

余り深くはないですが・・・

第七十一話だよ！

Side 航

……そうか、俺はこうやってデジタルワールドに来たのか……

『そうだ、失われた記憶は後一部。』

全てを思い出せ。

そうすれば、お前に新たな力をもたらしてくれるだろう。』

……どう言う意味だよ、もう一人の俺？

詳しく説明してくれよ！

『……時間だ。』

何時か必ず話す。』

お、おい！！

待てよ、もう一人の俺！？

・

・

・

・

「う……う……ん……」

視界が霞んでいるが、誰かが俺の横に居るみたいだ。

俺は重い目蓋を開け、上半身を起こし目を擦った。

「気が付いたか、航？」

「何処か痛い所は無い、航君？」

「取り敢えず、太一の持ってきた薬が効いた様だな。」

コロナモン・ルナモン・ウィザーモンの順番で、俺の顔を見ながらそう言ってきた。

俺は目を擦りながら周りを見渡した。

俺が寝ていた場所は何処かの地下水路だった。

俺はこの場所を見て、俺達が今どんな状況なのか理解した。

ムゲンドラモンの必殺技の“∞（ムゲン）キャノン”の所為で、

俺達は地下に落とされた様だ。

「ウィザーモン……俺は一体何を？」

記憶が曖昧で、少し前迄の記憶を余り覚えていない。

……確か、体が急にしんどくなってきて……ダメだ、其処から記憶に無い。

「実はな……」

（説明中）

……これが今の状況だ。」

「……分かった、ありがとう。」

ウィザーモンの説明を簡単に纏めると……

1. 俺とヒカリちゃんは、高熱や夏風邪で倒れてしまった。
2. 俺とヒカリちゃんの薬を手に入れる為に、太一さんペアと光子朗さんペアが街に行って来れた。
3. 結果、薬は手に入れたが敵に俺達の居場所がバレてしまった。
4. 皆無事だったが敵の攻撃を受けてしまい、太一さんペアと光子朗さんペアとハグれてしまった。

……大体こんな感じだな。

「皆は何処に居るんだ？」

原作通りなら空さんペアとパタモンが太一さん達を探しに行ってる筈だが、原作でこの場所に本来居る筈のヒカリちゃんペアとタケルが居ない。

「空とピヨモン・タケルとパタモンは太一達を探しに行っている。ヒカリとテイルモンは……帰ってきたみたいだな。」

ウィザーモンが俺の後ろを見ながらそう言ったので、俺はゆっくり後ろを向いた。

後ろから、俺（丈さん）の水筒を持ってきたヒカリちゃんとテイルモンがコッチに歩いて来ていた。

……良かった、俺と太一さんが持ってきた風邪薬が効いたみたいだな。

「!？」

わ、航君!!」

「おっと!!」

ヒカリちゃんは俺に気付いて走ってきて、そのまま俺に抱き付いてきた。

俺は倒れそうになったが、頑張ってヒカリちゃんの勢いを抑えた。

「良かった……航君も元気になって……良かった。」

「ありがとな、ヒカリちゃん。」

俺は心配してくれたヒカリちゃんにお礼を言った。

「航君！」

良かった、元気になったんだね!!」

「私達、凄く心配してたのよお！」

「でも元気そうで良かったよ!!」

空さん達も無事に帰ってきて、俺の事を心配してくれた。

「空さん、太一さん達は？」

俺は空さんに太一さん達の事を聞いた。

だが空さんは、俺の質問に首を横に振った。

……やっぱ見つからなかったか……

「取り敢えず、俺の体は大丈夫ですから太一さん達を探しに行きましょう。」

俺が寝ていたから、奥迄調べてはいないでしょ？」

「航の言う通りだな。」

今度は私達も行けるから、もっと奥迄探しに行けるだろう。」

俺が空さんにそう言うと、ウィザーモンは俺の言葉に賛同してくれた。

「そうね。」

奥に太一達が居るかもしれないしね。

……行きましょ!!」

空さんも俺の提案に賛成してくれた。

そして俺達は、奥に向かって歩き出した。

.....

.....

.....

.....

俺達が歩き始めて、大体五分程度の時間が経った。
まあ時間は俺の勘だな……
多分もう直ぐしたら……

パシンッ！！！！

聞こえた、否、聞こえてきてしまった……

「これは……何の音？」

皆は突然聞こえてきた音に、耳を澄ませて聞こうとした。

パシンッ！！

……あのクソパンダ……許さねえ……

「こっちから聞こえてくるよ。」

行ってみよう!!」

俺達は聞こえてくる音を頼りに、音が聞こえてくる場所に向かって走り出した。

.....

.....

.....

.....

「酷い……」

空さんが目の前の光景を見て、辛そうな顔をしながらそう呟いた。その光景は、過酷な重労働を強いられているヌメモン達と鞭を使いヌメモン達を脅しているクソパンダが居た。

「あのパンダは……モンザエモン？」

タケル君が、クソパンダを見てモンザエモンと勘違いしてそう言った。

「違うよ、タケル君。

あのクソパンダはワルモンザエモン。

モンザエモンとは真逆の位置のデジモンだ。

だから、モンザエモンと間違えると可愛そうだ。」

俺はクソパンダを睨みながら、タケル君にクソパンダの事を嫌々

説明した。

ヤベエ……コロシタイ……

「落ち着け、航！

気持ちを抑えるんだ！」

ウィザーモンは俺にそう言ってきたが、この気持ちは抑えきれねえ！！

「可哀想……」

ピカーーーン

するとヒカリちゃんの身体が慈悲の光を輝き出して、暗い地下動力炉を眩しく照らした。

俺はドス黒い暗黒エネルギーを身体に纏わせた。

「き、貴様等！！

し、侵入者だな！！

このワルモンザエモン様が捕まえてやる！！」

クソパンダは俺達にそう言って俺達の所へやって来た。

俺とコロナモン・ルナモン、ヒカリちゃんとテイルモン、ウィザーモンはゆっくり歩きながら下にヌメモン達の所へ向かった。

クソパンダは、空さん達に集中していて俺達に全く気付いていなかった。

そしてクソパンダは、そのまま空さん達を追い掛けて行った。

「コロナモン・ルナモン・ウィザーモン、ヌメモン達的首枷を解い

てやってくれ。」

「テイルモンもお願い。」

俺とヒカリちゃんは皆に頼むと、皆は無言で頷いてヌメモン達の首枷を解いていってくれた。

俺は暗黒エネルギーを使って、無理矢理首枷を解いていった。ヒカリちゃんは優しくヌメモン達を撫でて元気にしていった。そして、全部の首枷を解いたので俺は暗黒エネルギーを使うのを止めた。

クラッ

少し視界が霞んで目眩がした。

……やはり、病み上がりなのに暗黒エネルギーを使ったからだろう。

俺は難とか倒れる堪えて、皆に心配を掛けない様に立った。助けられたヌメモン達が……

『航様……航様』

『ヒカリ様……ヒカリ様』

俺達に何度も頭を下げて崇拝してきた。

「あ、あはははは……」

「良かった、皆が元気になって。」

ヒカリちゃんは笑顔、俺達は苦笑いをした。

第七十一話だよ！（後書き）

次回は追いつけられている空達、航達を探している太一達の話です

お楽しみに！！

第七十二話だよ！（前書き）

空のグループと太一のグループの話です

太一の性格はかなり変わってます

今更ですが・・・

第七十二話だよ！

side 空

私達は今、ワルモンザエモンから必死に走って逃げてる。

ピヨモンとパタモンは、エネルギーが無いから進化が出来なくて私達と逃げてる。

「そ、空さん！！

わ、航君達が居ないよ！！」

私の隣を走っていたタケル君が、走りながら私に航君達が居ない事を教えてくれた。

そ、そう言えば確かに居ない。

……多分ヌメモン達の所でしょ。

無事だと良いけど……

「空！！

私、こんなに速く飛べたの初めて！！」

「タケル！！

僕もだよ！！」

ちよっ、ちよっど！！

「二人とも！！

現実逃避はしないで、早く走ってよお！！！！」

そう二人に突っ込んでいたら、前が壁になって逃げ道が無くなった。

ぜ、絶体絶命じゃないの！

「フッフッフ、もう逃げられないぞ。」

すると後ろで追い掛けて来ていたワルモンザエモンが、指を鳴らしながら私達に近付いてきた。

……ワルモンザエモンに骨なんて在ったんだ。

「そ、空！！」

現実逃避はしないでよ！！」

……はっ！？

ピヨモンに突っ込まれてしまった。

で、でも、どうしよう！？

「空さん、ワルモンザエモンが攻撃してきたら走って来た道を戻りましょう。」

パタモン達は進化出来なくても、コロナモンとルナモンなら進化出来るかもしれませんから。」

タケル君は小さい声で私にそう提案してきた。

……確かにタケル君の言う通りね。

「フッフッフ……死ねえ！！」

「今よ！！」

ワルモンザエモンが攻撃してきた瞬間、私達はワルモンザエモンの足元を潜り抜けて攻撃を避けた。

ズボッ!!

するとワルモンザエモンの腕が、壁にめり込んで動けなくなった。

「し、しまった!!」

今の内に!!

「ま、待て!？」

私達は航君達が居る場所に走って引き返した。

side 太一

「ヒカリー!!」

……航ー!!

……何処だー!!

返事をしてくれー!!」

俺は歩きながら二人の名前を呼んだ。

だが、返事は何処からも返って来なかった。

……!？」

……俺達、誰かに付けられてる。

「太一さん、少し休みましょう。」

すると光子朗がアグモンとテントモンを見て、俺にそう言ってきた。

……俺も休みたい、今直ぐに休みたいさ。
だけど誰かに付けられている今、休みを取ってしまうとどうなるか分からない。

かと言って普通に光子朗に言うのと付けられてる奴に気付かれる可能性が在る。

……よし！！

「ヒカリー！！

航ー！！

……何処だー！！

返事をしてくれー！！」

俺は光子朗の言葉を見殺して、さっきと同じ行動をした。

「……実は僕も疲れているんです。」

……分かってるさ、光子朗。

お前は俺の無茶に付き合ってるから、疲れているのは分かっているだ。

「貴方だって疲れている筈だ。」

……そうだよ、光子朗。

俺もさっきから叫びながら歩いているから、凄く疲れているんだ。だけど、休んでる場合じゃないんだ。

どうすれば光子朗達に伝えられるんだ？

……そうだ、この作戦なら！

「俺に指図するな！」

俺は出来るだけ大声で叫び、尚且つ光子朗にイライラしている風に振る舞った。

「誰も指図なんかしてないじゃないか！」

……光子朗がマジで切れちまった。

……こ、怖エ

「うるせェんだよ！」

「この分からず屋！」

うっ、俺って光子朗にそんな風に思われてたのか……。

……スゲェショックだ。

「何だと！」

俺は光子朗に向かって走り出し、勢い良く光子朗を押し倒した。

あっ、勿論、光子朗やパソコンに負担が無い様に俺の腕をクツシヨンにしてだぞ。

アグモンとテントモンが俺を止め様と俺の体に必死に捕まってくれた。

「これでも……喰らえ!!」

俺が拳を作り、光子朗に殴り掛かる様な演技した。

光子朗は目を瞑って俺の拳が来るのを待っていた。

俺は直ぐに光子朗の肩に顔を置いた。

そして、小さい声で話し始めた

「光子朗、俺達は誰かに尾行されてるみたいだ。」

「えっ!?!」

「静かに。」

俺がそう言っていると皆は話すのを止めた。

ウィーン……ガシャン!!
ウィーン……ガシャン!!

遠くから機会が動く様な音が聞こえてきた。

「俺がお前の話を無視していたのも、相手を油断させる為だったんだ。」

……悪かったな、光子朗。」

俺は小さい声でさっきの俺の態度の説明をして、小さい声で光子朗に謝った。

「太一さん……それで、僕は何をしたら良いんですか?」

流石は光子朗、頭の切り替えが速くて助かる。

「直ぐ横の扉に入るんだ。
だが、喧嘩をしている振りをしながらだぞ。」

「分かりました。」

光子朗がそう良い終えると、俺は光子朗の胸元を掴みながら光子朗を立てせた。

「俺の何処が分からず屋なんだよ!!」

「貴方の全てですよ!!」

グサツ!!

え、演技だと分かってるいるが言われると辛いぞ。
が、頑張れ、俺!!

「ちょっとコッチに来いよ!!」

俺と光子朗は横の扉に組み合っている状態で入った。
アグモンとテントモンも演技しながら扉の中に入った。

「……良いか、敵が来たら直ぐに攻撃するんだぞ。」

俺がそう言うと、皆は無言で頷いた。

ウィーン……ガシャン!!
ウィーン……ガシャン!!

ドンドン機会の音が俺達に近付いてくる。
音が近付くに連れて、俺達の心臓が速く動いていくのを感じる。

ウィーン……ガシャン!!
ウィーン……ガシャン!!

そして遂に、機会の音が俺達が居る扉の近くに来了。
俺は扉の隙間から、尾行していた奴の顔を見た。
其処に居たのは……

『あ、アンドロモン!!!?』

ファイル島で俺達の味方をしてくれたデジモン・アンドロモンが
居た。

第七十二話だよ！（後書き）

次回は航とヒカリがワルモンザエモンに切れる！！

お楽しみに！！

第七十三話だよ！（前書き）

今回はワルモンザエモンの話！！

・・・特に書く事が無いな

それでは、スタート！！

第七十三話だよ！

Side航

俺達は今だにヌメモン達に頭を下げて崇拜されてる。

『航様……航様』

『ヒカリ様……ヒカリ様』

……本当に苦笑いしか出来ねえよ。

ヒカリちゃんは未だに100%スマイルだし……
まあ可愛いから良いけどさ。

「……皆、誰かが此処に向かって来ている。」

ウィザーモンが真剣な顔をして俺達にそう言ってきた。

俺達は真剣な顔をして扉の先を見た。

するとウィザーモンの言う通り、誰かが此処に向かって来ている
のを感じた。

そして其処に現れたのは……

『ハア……ハア……ハア……』

クソパンダから逃げていた空さん達だった。

空さん達は、俺達の前に膝を着いて肩で息をして呼吸を整え始めた。

「ハ……ハア……わ、航君、ヒカリちゃん、無事だったんだね!？」

タケル君が疲れた顔をして肩で息をしながら、俺とヒカリちゃんの顔を見てそう聞いてきた。

本当に優しいよな、タケル君……

「フハハハハ、漸く追い付い……貴様等、一体何をしている!?!」

するとクソパンダが空さん達の後に来て、ヌメモン達を見て気持ち悪い声で俺達に聞いてきた。

ヌメモン達は、クソパンダに反抗的な目で見て何も言わなかった。

「な、何だその目は!?!」

働け!?!

お前達はその程度しか役に立たないんだからな!?!」

……何……だと!?!

俺はクソパンダに怒りを覚えてヒカリちゃんを見ると、俺と同じでヒカリちゃんも怒った顔をしていた。

「おい、クソパンダ……」

俺は冷たく殺気を放ちながら、クソパンダに話し掛けた。

「俺様はクマだ!?!」

それに、俺様はワルモンザエモン様だ!?!

口の利き方には注意しろ、ガキ!?!」

だから……どうしたんだよ!

「貴方は、私が許さない。」

すると突然、ヒカリちゃんはクソパンダにそう言って体の光は更に輝やかせた。

「俺はお前に、生きてきた事を後悔させてやるよ。」

俺はクソパンダにそう言って、自信の体に暗黒エネルギーを纏わせた。

すると、俺とヒカリちゃんのデジヴァイスと紋章が光り出した。

「テイルモン超進化ー！！！！」

…………エンジェウーモン！！！！」

「コロナモン進化ー！！」

…………ファイラモン！！

ファイラモン超進化ー！！！！

…………フレアモン！！！！

フレアモン究極進化ー！！！！！！

…………アポロモン！！！！！！」

「ルナモン進化ー！！」

…………レキスモン！！

レキスモン超進化ー！！！！

…………クレシェモン！！！！

クレシェモン究極進化ー！！！！！！

…………ディアナモン！！！！！！」

テイルモンはエンジェウーモンに超進化し、コロナモンもルナモンはアポロモンとディアナモンに究極進化したのだが……

「雰囲気が普通だな…………」

俺はアポロモンとディアナモンを見て小さい声でそう呟いた。

記憶を思い出し二体を究極体に進化させる事は出来たのだが、記憶に出てきた二体と雰囲気違っていた。

此処に居る二体は究極体のオーラ……って言うのかな、記憶に出てきた二体は神々しいオーラを放っていたが、此処に居る二体はその神々しいオーラを放っていなかった。

……まあ今はそんな事はどうでも良い。

このクソパンダに、生きてきた事を後悔させなければならぬかな！！！

「ば、バカな！！」

クソパンダは、エンジェウーモン達を見て驚いていた顔をしながらそう言ってきた。

だが、こんなもんじゃないぞ！！

「空！！」

私、力が溢れてくる！！」

「タケル！！」

僕もだよ！！」

ピヨモンとパタモンは、空さんとタケル君にそう言った。

ヒカリちゃんの力はどんな能力かは忘れたが、デジモン達に力を与えるんだ。

さ、これで準備は整った！！

空さんとタケル君は、デジヴァイスを右手に持った。

「「ピヨモン（パタモン）、進化よ（だよ）！！！！」」

二人がそう言うのと、二人のデジヴァイスが光り出した。

「ピヨモン進化ー！！」

……バードラモン！！」

「パタモン進化ー！！」

……エンジェモン！！」

ピヨモンとパタモンは、バードラモンとエンジェモンに進化した。

「！！！？」

クソパンダは言葉を放つ事が出来ない位の顔をして驚いていた。

「やってくれ、皆！！！！」

俺がそう言うのと、皆がクソパンダに必殺技を放った。

「ソルブラスター！！！！」

「アロー・オブ・アルテミス！！！！」

「メテオウイング！！！！」

「ヘブンズナックル！！！！」

四体の必殺技はクソパンダに直ぐに直撃した。

「ぐぎゃあああああああああ！！！！！！！！！！？」

クソパンダは四体の必殺技を喰らい、何処かへぶっ飛んで行った。

「さ、急いで太一さん達を探しに行きましょう!!」

そして俺達は太一さん達を探しに行った。

side 三人称

地下エリアのある部屋・・・

この地下エリアのある部屋に、体中ボロボロの黒いクマが居た。
そのボロボロの黒いクマは、ある機械を弄っていた。

「……!？」

ムゲンドラモン様あ!!」

すると画面にこの都市エリアを支配するダークマスターズの一体・ムゲンドラモンが画面に現れた。

「ワルモンザエモンカ……ドウシタノダ、ソノキズハ……」

「選ばれし子供達にやられましたあ!!」

ボロボロの黒いクマ・ワルモンザエモンは泣きながらムゲンドラモンに自分が怪我を説明した。

「私は選ばれし子供達を捕まえ、ムゲンドラモン様に差し出そうとしました。」

……しかし、後一步の所でやられてしまいましたあ！！
ムゲンドラモン様あ、助けてくださいイイ！！」

ワルモンザエモンはまるで神様に頼む様に手を組み、泣きながらムゲンドラモンに助けを求めた。

「エラバレシコドモたちノイバシヨハワカッタ。
モウオマエニハヨウハナイ。」

ムゲンドラモンがワルモンザエモンにそう言った瞬間……

ドツカアアアアアアン！！！！

ワルモンザエモンが居た部屋が爆発した。
そして、ワルモンザエモンの手が地面に落ちた。
その手も、直ぐに0と1に分解し消え去った。

第七十三話だよ！（後書き）

次回でムゲンドラモン編もラスト！！

次回もお楽しみに！！

第七十四話だよ！（前書き）

今回でムゲンドラモン編は終了です！！

楽しんでもらえたら幸いです

誤字・脱字などがあれば教えてください

第七十四話だよ!

side 太一

俺達は今、前の冒険で俺達を助けてくれたデジモン・アンドロモンとお互いの情報を交換している。

アンドロモンは今の今迄、ムゲンドラモン達と一体で戦い続けていたらしい。

体には傷が無いが……心の奥はボロボロだと俺は思っている。

俺がそう思っていたら突然、アンドロモンが話すのを止めて真剣な顔をした。

「どうしたんだ、アンドロモン？」

俺は少し真剣な顔をしてアンドロモンに聞いた。

アンドロモンは、俺達に視線を移す事無く答えてきた。

「何カ……来ル!!」

ドツカアアアアアアアン!!!

アンドロモンがそう言った瞬間、俺達の前の地面が割れた。
そして其処から現れたのは……

『む、ムゲンドラモンッ!!!!?』

ダークマスタースの一体でこのエリアを支配しているデジモン・ムゲンドラモンだった。

アンドロモンはムゲンドラモンが現れた瞬間、ムゲンドラモンに向かって走り出していた。

「貴様ハ私が倒ス!!」

「ヤレルモノナラ……ヤツテミロ!!」

ムゲンドラモンはアンドロモンを力で押しながら、俺達の前につた壁を突き抜けて行った。

『あ、アンドロモンッ!!?』

俺達は直ぐに、ムゲンドラモンが開けた穴に入ってアンドロモン達の後を追い掛けた。

Side航

俺達は今、必死に太一さん達を探している。

クソパンダは、原作通りならムゲンドラモンに殺される。

もし殺されていなかったとしても、あれだけの深手を負っているいるのだから、もう俺達の前には現れないだろう。

「……何、この音?」

すると空さんが突然、何かの音が聞こえたのか俺達にそう聞いてきた。

俺達は耳に意識を集中させて、空さんが聞いた音を聞こうとした。

ガガガガガッ！！！

俺達が聞いた音は、まるで何かを無理矢理壊す様な音が聞こえてきた。

……まさか、この音は！？

ドッカアアアアアッ！！！！

俺がそう思った瞬間、俺達の目の前に在った壁が壊された。其処から、ムゲンドラモンとアンドロモンが現れた。

そして二体は、俺達に気付く事無く更に奥に進んで行った。

「ヒカリ、航！！

それに皆も！！」

するとムゲンドラモンが開けた壁の穴から、離れ離れになってしまっていた太一さん達が穴から出てきた。

「お兄ちゃん！！」

するとヒカリちゃんは、太一さんに走って抱き付いた。

太一さんも、走ってきたヒカリちゃんを優しく受け止めた。

「光子朗君、あれってムゲンドラモンよね？
誰と戦ってるの？」

空さんが光子朗さんに近付き、ムゲンドラモン達を見ながら聞いた。

「……アンドロモンです。」

アンドロモンが今、ムゲンドラモンと戦っているんです。」

光子朗さんは、少し間を開けて空さんにアンドロモンの事を話した。

確かこの後って……

や、ヤバイ！？

「アポロモン！！

ディアナモン！！

急いでアンドロモンの援護に向かってくれ！！」

俺は二体に頼むと、二体は黙って頷いてくれてアンドロモンの所へ向かって行った。

「私達もアンドロモンの援護に向かう！！」

そう言ってエンジェモン・エンジェウーモン・バードラモン・ウイザーモンもアンドロモンの援護に向かった。

「み、皆はん！！

ワテを置いて行かんといてえな～！！」

テントモンがアポロモン達にそう言うと、光子朗さんのデジヴァイスが光り出した。

「テントモン進化ー！！

……カブテリモン!!」

テントモンはカブテリモンに進化し、少し皆より遅れながらもア
ンドロモンの援護に向かった。

side 太一

俺達は今、少し離れた場所で戦っているムゲンドラモンとデジモ
ン達を見ている。

デジモン達の攻撃は全然ムゲンドラモンに効いていない。
なのに、ムゲンドラモンの攻撃は効いている。

「∞（ムゲン）キャノン!!!!」

ドシユウウウウウウン!!!!

するとムゲンドラモンは、肩に付いているバズーカの発射口の様
な所から必殺技の“∞（無限）キャノン”を放った。

『うわあああああああ!!!!!?!?』

デジモン達はムゲンドラモンの必殺技の“∞（無限）キャノン”
を喰らい、吹っ飛ばされて壁や地面に叩き付けられてしまった。

「コレガサイキョウノチカラダ。」

するとムゲンドラモンは、俺達を見ながらそう言ってきた。
……クソッ!!

もう俺達には、どうする事も出来ないのか!?
俺がそう思っていると、ムゲンドラモンの足元から緑色の何かが出てきてムゲンドラモンの体に付き始めた。

「ヌメモン……」

ヒカリはムゲンドラモンの体に付いている緑色の何かを見ながら、
ゆっくりムゲンドラモンに向かって歩いてそう言った。

「止めろヌメモン!!」

ムゲンドラモンは、お前等が適う相手じゃない!!
だから、今直ぐに逃げるんだ!!!!」

航は緑色の何か・ヌメモンに今にも泣きそうな顔をして大声で叫びながら、ムゲンドラモンに走りながら向かった。

ま、まさか、ヌメモン達は!?

「フン、ザコガカタマレバオレサマニカテルトデモオモツテイタノ
カ……」

ムゲンドラモンは冷たい声で、ヌメモン達にそう言った。

「や、止めろおおおお!!!!」

ドシユウウウウウウン!!!!

∞（無限）キャノン”でヌメモン達を殺した。

「……メモリー!!!!!!」

航とヒカリがヌメモンの名前を叫ぶと、二人がそのまま地面に倒れた。

そして、それと同時にアグモンの体が光り始めた。

「力が……体から溢れてくる!!!!」

アグモンがそう言うのと、俺のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「アグモンワープ進化ー！！！！！！」

「ウォーグレイモン!!!!!!!!!!」

アグモンはウォーグレイモンにワープ進化して、ムゲンドラモンを睨み付けた。

俺と空は急いで航とヒカリの所へ行き、二人の体を抱えて起こした。

「「ヒカリ（航君）！！？」」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

そしてウォーグレイモンは大声で叫びながら、ムゲンドラモンに走って近付いて行った。

そして……

ガキンッ！！！！

大きな金属音が地下に響き渡った。

するとウオーグレイモンは、少ししてから直ぐにコロモンに退化してしまった。

「コロモン！！？」

俺はヒカ리를抱えながら、コロモンの名を叫んだ。

「フン、オマエノマケノヨウダナ……」

ムゲンドラモンは、コロモンに目を合わせずにそう言った。

「それはどうかな！！」

僕には……太一やヒカリ、航……皆が付いているんだ！！

だから、僕が、僕達が負ける筈無いんだ！！」

ガシユンッ！！

コロモンがムゲンドラモンを睨みながらそう叫ぶと、ムゲンドラモンの体が少しづつズレ始めた。

ガシユンッ！！

ガシュンッ!!

「グワアアアアアアアアアアア!?!?!?」

ムゲンドラモンはズレた部分から徐々に消えていき、結果的に叫びながら0と1のデータになって消えた。

そうすると、地面が大きく揺れ始めた。

ドドドドドド (ry

「コノエリアヲ支配シテイタムゲンドラモンハ、完全ニ消エタ。

……私ノ戦イモ終ワツタ。」

アンドロモンは穴が開いて見える大空を見ながら、俺達に聞こえる位の声の大きさでそう呟いた。

「アンドロモン、俺達に力を貸してくれないか?」

俺はヒカ리를立たせて、アンドロモンに近付いて聞いた。

「私モダークマスターズヲ倒スノニ力ヲ貸ソウ。」

「ありがとう、アンドロモン。」

アンドロモンは俺達に力を貸してくれると言ってくれたので、俺は笑顔でアンドロモンにお礼を言った。

「もう直ぐ此処も崩壊します!!
急いで脱出しましょう!!」

光子朗は俺達の顔を見ながらそう叫んできた。
俺は急いでコロモンを連れてきて、アポロモンの右肩に乗った。

.....

.....

.....

.....

無事に街から脱出した俺は下の街を見ると、街がドンドン消えて
いった。

そして俺達の前には、スパイラルマウンテンが高く聳えていた。

「待ってろよ……ピエモン!!!」

俺はスパイラルマウンテンを見ながら、スパイラルマウンテンの
頂上に居るであろうピエモンにそう言った。

第七十四話だよ！（後書き）

次回からピエモン編に突入です！！

お楽しみに！！

第七十五話だよ！（前書き）

すいません、スランプになってしまいました

本当にすいません

誤字・脱字などがあれば教えてください

第七十五話だよ！

S i d e ピエモン

……フッフッフ……

遂に此処までやって来たか……

あの時は私達は逃走したが、今回はあの時とは違う……

加藤 航……

私達の知らぬ九人目の選ばれし子供……

まさにイレギュラーの言葉が相応しい子供だな。

「。ピエモン様、私にあの子達を可愛がらせて下さいな。」

暗闇が広がる天井から逆さに現れた我がナイトメアーズの唯一の幹部の一体、レディデビモンがそう言うてきた。

私はコップに入った酒を一口飲んで言った。

「失礼の無い様にな。」

最上級のお持て成しをしてやれ。」

「分かりました……オーホッホッホ！！」

レディデビモンは、高らかに笑いながら消えた。

S i d e 航

俺達は無事にスパイラルマウンテンの頂上に着いた。
辺りは殺風景な景色……

白の岩肌、暗黒の天空……

その二つの言葉しか思い付かない位の殺風景さだ。

「光子朗、何をやってるんだよ？」

太一さんが光子朗さんに近付き、光子朗に話し掛けた。

光子朗さんは、パソコンのケーブルをアンドロモンに差し込んで何かをしていた。

「此処の地形をアンドロモンに解析してもらってるんですよ。

アンドロモンなら、ムゲンドラモンの時みたいなミスをせず此処の地形を調べれますから。

……アンドロモン、お願いします!!」

光子朗さんは俺達に詳しく説明してくれた後、アンドロモンに頼んだ。

「承知シタ……」

アンドロモンは光子朗さんにそう言って此処の地形を解析し始めた。

そうすると、光子朗さんのパソコンに此処の地形が現れてきた。

「す、スゲェ……」

原作を知っている俺は、思わずそう言ってしまった。

アニメでも思っていたが……光子朗さんって本当に小学四年生？歳とか誤魔化してるんじゃないか？

「何カ……来ル。」

俺が光子朗さんの事を考え込んでいると、アンドロモンは何かを察知したらしく俺達に教えてくれた。

確かこの話の展開だと……

「ようこそいらっしやいました、可愛いボウヤ達!」

……出た、色っぽいお嬢様系デジモン……

そう言えば、この話の空さんとヒカリちゃんが……

俺は原作を思い出し、空さんとヒカリちゃんの顔を見た。

「なーんかやな感じのデジモン……! (怒)」

「あれ何てデジモン? (怒)」

……怖ッ!!

二人ともマジで切れてるよ!!

物凄い目でレディデビモンを睨んでるよ!!

「アレハ……レディデビモン」

アンドロモンが二人の問いに答えた。

光子朗さんが、デジモンアナライザーでレディデビモンの情報を調べた。

「レディデビモンは完全体ですね。」

「完全体、か……」

光子朗さんの調べた情報を聞いて、太一さんは何か考え始めた。

「だったら僕n「待て、アグモン！」ど、どうしたの？」

アグモンが戦おうとしたら、太一さんがそれを制止した。

「空、ヤマトを探してきてくれ。」

太一さんが突然、空さんにそうやってきた。

俺は、否、俺達皆は太一さんの言葉に呆気を取られた。

「俺さ、ヤマトにミミちゃん、それに丈が抜けて分かったんだ。俺は一人じゃ何も出来ないって事が。」

レディーデビモンは完全体。

レディーデビモンを倒したら、アイツが、ピエモンが出て来る。こんな所で切り札を使う訳にはいけないからな。」

太一さんはそう言ってアグモンを見た。

「僕が切り札？」

エヘヘヘ……」

アグモンは太一さんの言葉を聞いて、嬉しそうに笑った。

「す、凄い、太一さんはそんな先の事迄考えていたなんて……！？」

光子朗さんは、太一さんの作戦を聞いて、素直に驚いていた。

「だが、奴には勝てない。」

……だから、ヤマトを探してきてほしいんだ。」

太一さんは、真剣な顔をしながら空さんに言った。

「分かった。」

空さんは太一さんにゆっくりと頷いた。

「太一さん、僕も行って良いですか？」

するとタケル君が、太一さんに近付いて聞いた。

「嗚呼、ヤマトを迎えに行ってくれ。」

太一さんがそう言うと、タケル君は笑顔になり、空さんはピヨモンをバードラモンに進化させタケル君と一緒にヤマトさんを迎えに行った。

「だったら、俺r「否、航達も今は戦わないでくれ。」……何故ですか？」

俺達が戦えば直ぐに決着が付くのに、何故太一さんは俺達が戦うのを止めるんだ？

「此処はテイルモン・テントモン・ウィザーモンに任せてくれ。お前達もピエモンと戦う為に此処は我慢してくれ。」

……確かに太一さんの言う通り、俺達は此処で我慢した方が良いな。

「分かりました。」

俺は太一さんの指示に素直に頷いた。

「だったら、私達が戦うのね。」

「頑張りまっせー!!」

「行きますか。」

テイルモン・テントモン・ウィザーモンが気合いを入れる為にそう言った。

「フッフッフ、たっぷり可愛がってあげるわ!!」

「やっぱりあのデジモンはヤな感じ(怒)」

ヒカリちゃんは、レディデビモンを睨みながら言った。

……やっぱり怖ッ!!

「テイルモン超進化ー!!!!」

……エンジェウーモン!!!!」

「テントモン進化ー!!」

……カブテリモン!!

カブテリモン超進化ー!!!!

……アトラーカブテリモン!!!!」

テイルモンとテントモンは、エンジェウーモンとアトラーカブテリモンに超進化した。

俺は、この戦いが始まる前に分かった事がある。

……ヒカリちゃんは、怒らせたら物凄く怖い……

第七十五話だよ！（後書き）

次回は丈達の話です

次回もお楽しみに！！

第七十六話だよ！（前書き）

今回は丈の話です

レオモンが、俺的には格好良いと思います！！

誤字・脱字などがあれば教えてください

第七十六話だよ！

side 丈

僕達は今、はじまりの町へ向かっている。

向かう途中、メラモンとユキダルモンが僕達の旅に加わった。

今居るメンバーは、僕とゴマモン・ミミ君とパルモン・オーガモン・レオモン・メラモン・ユキダルモン・ゲコモン・オタマモンだ。皆ははじまりの町の事で頭が一杯みたいだけど、僕は別の事で頭が一杯だ。

その事とは……

「ヤマト……君は、自分の道を見つけたのかい？
自分の力で自分を変える事が出来たかい？」

僕は小さくそう呟いた。

ヤマトは、自分の道を探す為・自分の力で自分を変える為に皆と別れた。

僕は……

「……丈、どうしたんだ？
顔色が悪いぞ。」

隣を歩いていたゴマモンが、僕に心配そうな顔で聞いてきた。
ダメだダメだ！！

漸く皆がまとまって来たんだ！！

僕の所為で、皆を心配させたくない！！

「だ、大丈夫だから。
心配するなよ。」

僕は出来る限り笑顔でゴモンに言った。
かなり無理矢理な作り笑いだが、皆を心配させたくない為に僕は笑った。

「……そうか。
疲れたんなら、オイラに言ってくれよ。」

ゴモンはそう言って前を向いた。

……言えない……

僕はデジタルワールドを救って将来、どんな道に進めば良いのか分からないなんて……

僕はそう思いながら、重い足取りで歩き続けた。

………

………

………

………

「少し此処で休憩を取ろう。」

レオモンが立ち止まって、僕達の顔を見ながらそう言ってきた。

僕達は、レオモンの言葉を聞いてその場に座った。

僕は不意にミミ君を見ると、ミミ君はゲコモンとオタマモンと何かを話していた。

………だけど、僕はその話に関わる気持ちじゃない。
そう思っていたら、ゲコモンとオタマモンが何処かへ走って行っ

た。

「どうしたのだ、元気が無いみたいだが……」

僕に誰かが話し掛けてきたので、僕は顔を上げて声の主を見た。顔を上げると、僕の前にレオモンが立っていた。

僕がレオモンの顔を確認すると、レオモンは僕の隣に座った。

ゴマモンは、オーガモン達と談笑していた。

「うん……ちよつとね。」

僕は無理矢理笑って、また誤魔化そうとした。

……僕の所為で、皆に心配を掛けたくないから。

「……悩み事か？」

だけどレオモンには、僕の作り笑いが直ぐに見破られてしまった。

「……うん、僕にとって大きな悩みなんだ。」

僕は諦めてレオモンにそう言った。

僕は父さんに言われて、医者になる為に今迄勉強してきた。

だけど、僕の兄さんでの一人のシン兄さんに言われた事を悩んでいた。

『父さんの言う通り、お前は医者にならなくても良いんだぞ。

お前の道はお前が決めるんだ。

父さんじゃなく、お前がな。』

僕はその言葉を聞いて、これからどうしたら良いのか分からなく

なった。

「……精一杯悩むと良い。」

「えっ？」

するとレオモンが突然、立ち上がって僕にそう言ってきた。

……どう言う意味なんだ？

「悩む事は悪い事じゃない。

悩むと言う事は、それだけお前は何かを一生懸命考えているんだ。
無理して今答えを出すんじゃない。

ゆっくり、お前のペースで、お前の意志で解決するんだ。

……お前には、沢山の仲間が居るんだからな。」

レオモンは僕にそう言って前を見た。

僕もレオモンに釣られて前を見た。

そこには、食べ物や飲み物を持って僕の前に立っているミミ君達
が居た。

「丈先輩、私達をもっと頼ってね。

……私達は仲間なんだから。」

ミミ君……

「丈は嘘が下手だから、直ぐに分かったぜ。

丈、オイラは丈のデジモンだ。

だから、一人で悩まないでくれよ。」

ゴマモン……

そう……だな、今直ぐ答えを出さなくて良いんだよな!!
僕は、ゆっくり、僕のペースで、僕の意志で決めれば良いんだ!

「ありがとう、皆」

僕は笑って言った。

この笑顔は、作り笑顔や無理矢理笑った顔じゃない……
心の底から笑った顔だ。

第七十六話だよ！（後書き）

今回は丈が自分の進む道を探すため・ヤマトを探すため、皆と別行動をします

次回もお楽しみに！！

第七十七話だよ！（前書き）

スランプです・・・

本当にすいませんo r t

そうだ、そろそろ映画の事を連絡しますので・・・

第七十七話だよ！

side 丈

「こ、これが……はじまりの町だと言うのか!？」

僕は目の前の景色を見て、驚愕しながら皆に聞こえる位の声の大ききさで言った。

僕達は無事に“はじまりの町”に着いた。

……だけどそこには、はじまりの町だった（・・・）場所が在った黒一色が町らしき物を包んでいて、サイコロ型の大きなクッションはボロボロになり、デジタマは死んでいて、デジモン達も居なく、所々地割れが広がっていた。

「ひ、酷い。」

ミミ君はそう言うと、座り込んで両手で顔を隠した。

……これもダークマスターズの仕業なのか……

「はじまりの町が死んでやがる……クソがっ!!」

オーガモンが砂を蹴る様な事をしながら、悔しがる声でそう言った。

これじゃあ……チューモンやホエーモンが生き返らないじゃないか……



!?

「な、何、この音楽？」

ミミ君が、辺りを見渡しながら聴こえてくる音楽を聴きながら僕達に聞いた。

レオモン達は、警戒しながら辺りを見渡した。

♪♪♪

この音色……ハーモニカ？
!?

や、ヤマトだ!!

「ミミ君!!

この音色はハーモニカだ!!
ヤマトがこの近くに居るんだ!!」

「や、ヤマトさんが!？」

「急ごう!!」

僕達は急いで、ハーモニカの音色が聴こえる方へ走り出した。

.....

.....

.....

.....

♪~~~~♪

僕達の目の前に、ハーモニカを吹いている一体のデジモンが居た。

「君だったのか……ハーモニカを吹いていたのは……」

僕は少し落ち込みながらも、目の前でハーモニカを吹いているデジモンに話し掛けた。

♪~~~~♪

「はぁ……はじまりの町は死んじゃった。」

デジモンはハーモニカを途中で吹くのを止めて、落ち込みながら僕達にそう言うてきた。

その顔はまるで、全てを失い絶望している顔の様に僕は見えた。

……そう言えば、このデジモンってファイル島の時に会ったデジモンだった様な……

確か……エレキモン……だったかな？

「ねえ、はじまりの町に一体何が在ったの？」

ミニ君が、優しい声でエレキモンに聞いた。

「……ダークマスターズが、はじまりの町を破壊して行ったんだ。俺、何も出来なくて……」

エレキモンは辛そうな顔をしながら、僕達にはじまりの町で何が在ったか教えてくれた。

ダークマスターズ……本当に許せない!!

「ねえ、私達と来ない？」

「えっ？」

するとミニ君が突然、エレキモンに聞いた。

エレキモンはミニ君が突然聞いてきたので、驚いた顔をしてミニ君の顔を見た。

「私達、ダークマスターズを倒す為に仲間を集めているの。」

「だ、ダークマスターズを倒すだって!？
スゲー事考えてんだな、お前等！」

ミニ君の話を聞いて、エレキモンは驚きながらも僕達を誉めてくれた。

「だから、私達を来ない？」

ミニ君が、エレキモンに手を差し伸べた。

「で、でも、俺は……」

エレキモンがそこで言葉を詰まらせた。

……そう言えば、エレキモンとタケル君とパタモンが友達だって
ヤマトから聞いた事がある。

「タケル君もパタモンも、ダークマスターズを倒すのに頑張っているんだ。」

僕がそう言うと、エレキモンが驚きながら僕を見てきた。

「タケルとパタモンが!?!」

「そうよ!

タケル君もパタモンも、ダークマスターズを倒す為に頑張っているの!

ダークマスターズさえ倒せば、きっとはじまりの町も生き返る筈よ
!!

だからお願い、貴方の力を私達に貸して!!」

ミミ君はエレキモンに頭を下げて頼んだ。

そうすると、エレキモンの目が何かを決意した様な目をした。

「分かったぜ!

俺もお前等に力を貸すよ!

必ず、ダークマスターズを倒してはじまりの町を生き返させるんだ
!」

エレキモンが、僕達に決意を言って仲間になってくれた。

よし、頼もしい仲間が増えたぞ!

……そうだ……

「ねえ、君の持っているハーモニカを僕に見せてくれないか？」

「ハーモニカか？」

……良いぜ。」

僕がエレキモンにハーモニカを見せてくれと頼むと、エレキモンは僕にハーモニカを渡してくれた。

僕はエレキモンにお礼を言って、渡されたハーモニカを詳しく調べた。

……間違いない、このハーモニカはヤマトの物だ。

でも、何でエレキモンがヤマトのハーモニカを？

「ねえ、どうして君がこのハーモニカを持っているの？」

僕はエレキモンに聞いた。

このハーモニカは、ヤマトが何時も肌に離さず持っていた物だ。

「それか？」

……それは此処に落ちてたんだよ。」

エレキモンは僕の質問に答えてくれた。

……落ちていた？

あのヤマトが落としたのか？

「そう言えば、少し前にこの辺りを散歩していたら一席の船が向こうに向かって行くのを見たぜ。

確かその時に、このハーモニカを見つけたんだ。」

エレキモンは、海の方こうを指差しながら言うてくれた。

……向こうにヤマトが居るのか

「ミミ君、僕、ヤマトを捜しに行くよ！」

「えっ!？」

僕がそう言うと、ミミ君は大きな声で驚いた。

「僕さ、さっきまで悩んでたんだ。

『デジタルワールドを救った後、僕はどんな道を進めば良いのだろうか?』って。

一人で……ずっと悩んでた。

でも、レオモンに言われて、ミミ君に言われて、ゴマモンに言われて、気付いたんだ。

無理して今、答えを出さなくても良い。

今は、僕がしたい事をしようって。

そうすれば、自然と答えが見えてくるんじゃないかなって……。

僕の最初で最後の我儘を聞いてほしい。

ヤマトを捜しに行かせてほしいんだ！

お願いだ、ミミ君！」

僕は頭を下げてミミ君に頼んだ。

僕が今したい事をすれば、必ず僕が進むべき道が見えてくる筈なんだ。

「……分かった、丈先輩。

必ずヤマトさんを捜し出してください!!
そして、アソコで必ず会いましょう!!」

ミニ君は、スパイラルマウンテンを指差しながら言ってくれた。

「ありがとう、ミニ君。」

僕は頭を上げて、ミニ君の顔を見てお礼を言った。

「丈、オイラも付いて行けぜ！」

オイラは、丈のパートナーデジモンなんだからな!!」

ゴマモンが、僕の顔を真剣に見ながら言ってくれた。

……僕は、こんなにも頼れる仲間が居るんだな。

「ありがとう、ゴマモン！」

僕はデジヴァイスを持ってゴマモンに向けた。

「ゴマモン……進化だ!!」

僕がそう言うと、デジヴァイスが光り出した。

「ゴマモン進化ー!!」

……イツカクモン!!」

ゴマモンはイツカクモンに進化して、海の中に入った。

僕はイツカクモンに乗って、ミニ君達を見た。

「必ずヤマトを捜してくるよ!!」

「うん！」

そして、必ず!!」

「「スパイラルマウンテンで!!」」

僕達はそう言った。

そして、僕はヤマトを捜しに・ミミ君達はスパイラルマウンテンに向かって進み始めた。

第七十七話だよ！（後書き）

次回は・・・うん、女の戦いです
多分ギャグの話になります
戦いなのに（笑）

次回もお楽しみに！！

お知らせだよ！2

松上「どうも、『デジモンアドベンチャー 転生したらこうなった』の作者の松上です。」

航「ども、『デジモンアドベンチャー 転生したらこうなった』の主人公の加藤 航です。

……作者、一体どうしたんだ？」

松上「ん？」

前に質問した答えを、そろそろ言おうと思ってさ。」

航「前？」

……ま、まさか、映画の話か！？」

松上「嗚呼、映画をどうするのか皆さんに聞いてやっと答えを言うおもうと思ってさ。」

航「そ、それで、映画はどうするんだ？」

松上「嗚呼、『デジモンアドベンチャー ぼくらのウォーゲーム』、『デジモンアドベンチャー02 デジモンハリケーン上陸！！・超絶進化！！黄金のデジメンタル』、『デジモンアドベンチャー02 ディアボロモンの逆襲』、全てを執筆する事にした。」

・

・
・
・

.....

.....

航「な、何iiiiiiiiiiii!?!?!?!?
ま、マジか!?!」

松上「マジだマジ、大マジだ。

何時執筆するのも既に決めた。

予定では、『デジモンアドベンチャー ぼくらのウォーゲーム』は無印が終わったら、『デジモンアドベンチャー02 デジモンハリケーン上陸!・超絶進化!! 黄金のデジメンタル』はデジモンカイザー編が終わったら、『デジモンアドベンチャー02 ディアボロモンの逆襲』はベリアルヴァンデモン編が終わってエピソードの前に執筆する。」

航「だ、大丈夫なのかよ?」

松上「映画を執筆する時は、休みを一週間貰う。
そして、ゆっくり書いていく。」

航「そ、そうなのか……」

松上「質問に答えてくれてありがとうございました!!

まだまだ執筆するのは先ですが、楽しみにしててください!!!!」

航「本編も楽しみにしていてくれ!」

松上「明日から、また本編を書いていきます!!」

松上・航「それでは!!」

第七十八話だよ！（前書き）

最初に言っておきます

今回はギャグな会話が沢山あります

御了承下さい

誤字・脱字があれば教えてください

第七十八話だよ！

side 航

俺達の前では、凄く怖い戦いが繰り広げられている。

俺達が戦っているのは、“ナイトメアソルジャーズ”の唯一の（・・）幹部の一体である“レディデビモン”だ。

だが、敵の幹部が目の前に居るのに俺達は口を開けて啞然していた。

何故なら、女と女の戦いが余りにも怖過ぎるからだ。

ウィザーモンは戦うつもりだったらしいのだが、女同士エンジエウーモンとレディデビモンの戦いを見て戦うのを止めたらしい。

……懸命な判断だと俺は、否、俺達男達は思っている。

アトラーカーブテリモンはエンジエウーモンの援護をしているが、援護する度に邪魔者扱いをされてる。……アトラーカーブテリモン、ドンマイ……

「…………おつかねえ。」

太一さんは、二体の女同士の戦いを見てそう呟いた。

……女の人を怒らせたら怖いんです。

だから、ディアボロモンの時は空さんと喧嘩しないでくださいね、太一さん……

「怒ると怖いんですね……女の人って。」

光子郎さんは、ヒカリちゃんとエンジエウーモン達を交互に見てそう呟いた。

光子郎さん、新しい知識をゲット出来て良かったですね！

……怖くて無駄な知識ですが……

「……………（ポカーーン）」

アンドロモンは、口を開けて驚いていた。

……アンドロモン、その気持ちは分かるが口を開けて驚いてる顔が凄い事になってるぞ。

「……（ビクビクビクビク）」

アグモン・コロナモン・ルナモンは、互いを抱き締め合って震えていた。

……アグモン、あれより怖くて強い敵と戦うのにビビっちゃダメだろ。

……まあ、ビビるなって言う方が無理だけどさ。

コロナモン、何時もの勇敢な姿は何処に行ったんだ？

……まあ、あの戦いを見たら勇敢で居れなくなるけどさ。

ルナモン、一応お前は♀だよな、性別？

なのに、何で恐がってるんだ？

「航……ヒカリを怒らせないでくれよ。」

俺がアグモン達に心の中で突っ込んでいると、ウィザーモンは俺に近付いてきてそう言ってきた。

……ウィザーモン、それ位俺でも分かってるよ。

俺はそう思いながらヒカリちゃんを見た。

「負けちゃダメだよー！！」

「やっちゃえやっちゃえ！！！！」

ヒカリちゃんは、エンジェウーモンを全身を使って必死に応援し

てた。

……何故だろう？

“ やっちゃんえやっちゃんえ！！！！ ” の部分が “ 殺っちゃんえ殺っちゃんえ！！！！ ” と聞こえてしまう……

……何で？

「……航君？」

「は、はい！！！！？」

ヒカリちゃんが突然、笑顔で俺に話し掛けてきたので、俺は驚いて大声を出して返事をした。

ヒカリちゃんは笑顔で、だが目は笑っていない顔で俺を見てきた。

「エンジェウーモンを……応援しようか？」

俺はヒカリちゃんが、某魔砲少女の白い悪魔に見えた、否、見えてしまった。

「は、ははは、はい！！！！」

エンジェウーモン、頑張れエ！！！！」

俺は大声を出し、全身を使ってエンジェウーモンを必死に応援した。

そうするとエンジェウーモンは、髪の毛をレディデビモンに引っ張られた。

……女子プロ？

俺がそう思った瞬間、エンジェウーモンは地面に投げ付けられた。その所為で、エンジェウーモンを中心とする大きなクレーターが出来た。

「ダークネススパア!!!!」

レディデビモンが、手を槍の様にしてエンジェウーモンに止めを指そうとした。

「防御ならワテに任せてくださいな!!!!」

ガキンッ!!!!

アトラーカブテリモンが、エンジェウーモンを自身の背中で守った。

「ちょっと、どいて!!!!」

「あつ、え、えろうすんまへん。」

……自分を守ってくれたのに邪魔者扱いかよ……

……アトラーカブテリモン、後で慰めてあげるよ。

太一さん達に視線を移すと、皆も俺を見て頷いた。

……よく見たら、アンドロモンやウィザーモンまで頷いていた。

「ヘブンズチャーム!!!!」

「ぎやああああああああ!!!!!!?」

レディデビモンは、エンジェウーモンの必殺技である“ヘブンズチャーム”を喰らい悲鳴を上げながら0と1となって消えた。

「やった、やったよ!!」

ヒカリちゃんは、無邪気に勝利を喜んでいた。

「こ、光子郎はん、せ、背中、何ともなつてまへんか？」

アトラーカブテリモンはテントモンに退化し、光子郎さんに近付いて背中を見せながら聞いていた。

俺と太一さんとウィザーモン・アンドロモンはテントモンに近付き、テントモンの背中を撫でながら慰めた。
そうすると、テントモンは涙目になった。

「皆はん、ワテ、ホンマに嬉しいですわ。」

俺達はその言葉を聞いて、テントモンの背中を更に撫でた。

「……太一、航……」

「……アイツが……」

「……出てきたよ……」

アグモン・コロナモン・ルナモンが、真剣な目をして俺達の後ろを見ながらそう言ってきた。

俺達は、真剣な目で向こうから歩いてくるアイツ（・・・）を見た。

俺と太一さんは、デジヴァイスを持ってアグモン達の隣に立った。

「……ヤマトさん、結局間に合いませんでしたね。」

俺はアイツ（・・・）から目を逸らさずに太一さんに言った。

「大丈夫だ、俺は空達を信じてる。」

太一さんも、アイツ（・・・）から目を逸らさずに俺に言ってきた。

アイツ（・・・）は不気味な笑みを浮かべながら、俺達の所へゆっくり歩いて来ている。

「アグモン！！」

「コロナモン、ルナモン！！」

俺達はアグモン達にデジヴァイスを向けた。
そして……

「「進化だー！！！！」」

俺達が叫ぶと、俺達のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「アグモンワープ進化ー！！！！」

……………ウォーグレイモン！！！！！！」

「コロナモン進化ー！！」

……………ファイラモン！！

ファイラモン超進化ー！！！！

……………フレアモン！！！！

フレアモン究極進化ー！！！！！！

……………アポロモン！！！！！！」

「ルナモン進化ー!!」

……レキスモン!!

レキスモン超進化ー!!!

……クレシェモン!!!

クレシェモン究極進化ー!!!!!!

……ディアナモン!!!!!!」

アグモンはワープ進化しウオーグレイモンに、コロナモンとルナモンは究極進化しアポロモンとディアナモンに進化した。

「最後の戦いだ、ピエモン!!」

太一さんは、ピエモンを睨みながらそう言った。

第七十八話だよ！（後書き）

次回はヤマトの話になります

原作と違い、心の闇が無いヤマトはどうなるのか！？

次回もお楽しみに！！

第七十九話だよ！（前書き）

無印が終わり次第、一話から修正をしますので修正が終わる迄、執筆を休止します

本当にすいません

今回の話はヤマトの話ですが、上手く表現出来たか不安です

誤字・脱字などがあれば教えてください

第七十九話だよ！

sideやマト

「ヤマト、此処は何か変だよ。

……戻ろうよ。」

ガブモンが俺の服を引っ張りながら、震えた声で俺にそう言ってきた。

俺達は今、ある洞窟の中を歩いている。

何故洞窟に入ってるのかと言うと、この洞窟から異様な空気を感じたからだ。

何で異様な空気を感じたのか、俺にも分からない。

だけど、この洞窟は危険だと俺は感じた。

だから、この洞窟を調べる為に中に入っている。

「ヤマト、本当に此処は危険なんだって！！」

「ガブモン、俺だって此処は危険だって分かってるし。

だが、何故此処が危険と感じるのかを調べたいんだ。

もしかしたら、この中に苦しんでる奴が居るかもしれないだろ？」

この世界は、俺達とダークマスターズだけが居る世界じゃない。

此処は“デジタルワールド”と言う一つの世界。

デジモンが沢山この世界に存在する世界。

この中に苦しんでるデジモンが、もしかしたら居るかもしれない。だから、俺は引き返す事は出来ない。

あいつ等なら、太一達なら必ずこうしただろう。

『お前は太一に憧れてるだけだ。』

！？

「だ、誰だ！！」

誰かの声が突然聞こえたので、俺は辺りを見渡しながらかんだ。
だが、ガブモン以外誰も此処には居なかった。

……気の所為……なのか？

『お前は変わる事なんて出来ないんだ。』

！？

き、気の所為じゃない！！

俺はもう一度辺りを見渡した。

だが、やはり誰も此処に居なかった。

「ヤマト、どうしたのさ？」

ガブモンは、俺に心配そうな顔をして聞いてきた。

……ガブモンには聞こえないのか？

『お前は必要とされてないんだよ。』

……違う！！

太一や航達は俺を必要としてくれてるんだ！！

『なら、何故お前は太一達と別行動を取っているんだ？

お前は気付いたんだろ、“自分は必要とされてない”とな。』

ち、違う……

『弟のタケルも、お前より太一を選んだ。皆、お前より太一を選んだ。』

お前は……独りなんだよ。』

俺は……独り……

俺はそう思った瞬間、その場に座り込んだ。

『お前は独り。』

必要とされていない。

お前が幾ら努力して変わろうとしても、無駄なんだよ。』

「俺は……独り……

俺は……必要と……されていない……

……変わろうと努力しても……無駄……

俺は……どうすれば……」

ガブッ!!

!?

俺がそう呟いていると、突然俺の右腕に激痛が走った。

俺は右腕を見ると、ガブモンが俺の右腕を噛んでいた。

俺は直ぐに振り払って立ち上がり、ガブモンを睨み付けた。

「何すんだよ、ガブモン!!」

俺はガブモンを睨みながら叫んだ。

「ヤマトは何で一人で悩んでんのさ!？」

俺はヤマトのデジモンなんだ!!

なのに……何で俺を頼ってくれないんだよ!？」

ヤマトは独りじゃない、俺が居るだろ!!

ヤマトは必要とされてる、俺がヤマトを必要としてる!!

ヤマトは変われる、ヤマトが望めば幾らでも変われるんだ!!

太一達と比べるのはおかしいよ!!

太一達と違うのは当たり前、ヤマトはヤマトなんだから!!

ヤマトには、ヤマトにしかない良い所が沢山ある。

だから、自分を貶しちゃダメだ!!」

!？」

が、ガブモン……

何を考えてんだ、俺は……

俺の傍には、何時もガブモンが居たじゃないか。

太一と航は、俺の力が必要だと言ってくれたじゃないか!

俺が変わろうと望めば、幾らでも変われるじゃないか!

バカだな……俺は……

一人で勝手に悩んで、自分を貶して、他人に嫉妬して……!

俺は俺だ!!

俺にしかない良い所が必ずある!!

……航……やっとな、俺が望む俺に変わったよ!!

太一……今直ぐお前等と合流するよ!!

「ありがとな、ガブモン。」

何時も俺の傍に居てくれて……」

俺は立ち上がって、ガブモンにお礼を言った。

「良いさ、俺はヤマトのデジモンなんだから。」

ガブモン……

「お……い……お……い……お……い……お……い……お……い……」

洞窟の出口の方から、聞いた事のある声が聞こえてきた。
そしてその声は、どんどん俺達に近付いてくる。
そしてその声の主が、肩で息をしながら俺達の前に来た。

「はぁ……はぁ……久しぶりだね、ヤマト。」

声の主は、呼吸を整えながら俺に言ってきた。

「じょ、丈!？」

な、何で此処に？」

俺と同じ選ばれし子供の一人・城戸 丈だった

「君を捜しに来たんだ、僕達は君の力が必要だからね。
太一達は今、ピエモンの所に居る筈なんだ。」

「……僕達にもう一度力を貸してくれないかい？」

俺はその言葉を聞いて、視界が霞んで涙が出そうになった。

俺は、皆に必要とされてると分かったから……

だから……

「俺の力で良ければ力を貸す。」

俺も、漸く俺が望んだ俺になれたから。

だが、太一達と合流するのは洞窟を調べてからだ。

この洞窟は危険だ。

もしかしたら、苦しんでるデジモンが居るかもしれないからな。
……手伝ってくれるか？」

俺は不安な顔をしながら丈に聞いた。

丈は、笑顔で頷いてくれた。

「分かった、だけど急ごう。
時間を無駄にしたくない。」

俺はその言葉に頷き、俺達は洞窟の奥に向かって歩きだした。

第七十九話だよ！（後書き）

次回はヤマト・丈・空・タケルの話です

次回もお楽しみに！！

第八十話だよ！（前書き）

今回はヤマト・空・丈・タケルの話です

誤字・脱字があれば教えてください

第八十話だよ！

sideヤマト

「ヤマト、これは君のдаро？」

丈が突然、俺に話し掛けてきて肩から掛けているスポーツバッグから“ある物”を俺に渡してきた。

「!？」

じよ、丈、これを一体何処で拾ったんだ!？」

俺は丈から“ある物”を受け取り、動揺しながら丈に聞いた。

何故なら、俺が旅をしている時に何処かで“これを”無くしてしまった。

だから俺は丈に聞いた。

これは、俺とタケルの大切な思い出の物と言っても過言ではないからだ。

「これかい？」

これは“はじまりの町”に寄った時、エレキモンが持っていたんだ。……やっぱりその“ハーモニカ”は、ヤマトのハーモニカだったんだね。」

丈は笑顔で俺に説明してそう言ってきた。

「……ありがとな、丈。」

俺は頭を下げて、丈にお礼を言った。

丈が俺が頭を下げてお礼を言った事に凄く驚いていたが、お礼を

言うだけじゃ俺の気が納まらない。

丈はそれだけ、俺に有り難い事をしてくれたんだ。

そして俺は頭を上げてハーモニカをズボンのポケットに入れて、
また洞窟の奥に歩き出そうとした。

その時……

「空さん、どうしたの!？」

「空、しっかりしてえ!!」

洞窟の奥から、誰かと誰かの声が聞こえてきた。

俺は、洞窟の奥から聞こえてきた声の主を知っている!!

「た、タケル!？」

俺の实の弟・七人目の選ばれし子供であるタケルの声だ。

俺はタケルの声を聞いて、丈達を置いて全速力で走って洞窟の奥
に向かった。

丈達も、俺より少し遅れて洞窟の奥に向かって俺の後を付いて来
た。

………

………

………

………

俺達が奥に着くと、地面に座り込んでいる空・空に叫んでいるタ

ケルとピヨモンとパタモンの姿があった。

「タケル！！」

俺はタケルの名を叫んで、タケル達に急いで近付いた。

「お、お兄ちゃん！？

大変なんだ！！

そ、空さんが！！」

タケルは俺の服を掴んで、空を見ながら俺達に言ってきた。

空は、何処かで見た事ある黒いオーラの様な物を体に纏って座っていた。

「この洞窟に入った途端、急に座り込んだの。

私達が何を言っても、全然反応してくれないの！！」

ピヨモンが俺達に、空が何故こうなったのかを説明してくれた。

「丈、この黒いオーラみたいな物……航の暗黒エネルギーに似てる。

」

『！！？』

ゴマモンの言った言葉に、俺達は凄く驚いた。

何処かで見た事が在ると思ったら、航の暗黒エネルギーに似ていたからか。

……じゃ、じゃあこの黒いオーラみたいな物は、空の負の感情が具現化した物なのか？

……あの時、俺も負の感情に飲み込まれて、俺はガブモンに救わ

れた。

なら、俺達が空を救う事も出来る筈だ!!

俺だって、ガブモンに救われたんだからな!!

俺はそう考えて、空にゆっくり歩いて近付いた。

丈も俺と同じで、空にゆっくり歩いて近付いた。

俺達が空に近付くと、空は何かを小さい声で呟いていた。

「私のもっとしつかりしないとダメなの……

私は太一を助けなきゃダメなの……

私はヤマト君を連れて戻らないといけないの……

私は信頼されてるんだから、責任を果たさないといけないの……」

空はずっと小さい声でそう呟いていた。

「その思いを捨てろ!!」

俺は空に視線を合わせ、空の肩を掴みながらそう叫んだ。

空は、光の無い目で俺を見てきた。

「俺達がやっていることは義務じゃない!

したいからやってるんだ!!

やりたく無かったら、無理をしてやらなくても良いさ。

でも……きつと俺達は、やりたかったから此処まで来たんだ!!」

俺がそう言うと、丈も空に視線を合わせて空に言った。

「確かに今、僕達の目の前に待ち構えているのは、絶望的な事かもしれない!

でも、それが出来る僕達だから、きつと此処に居るんだ!

……そう思ったら、自然と勇気が湧いてくるだろ?」

丈……お前も変わったんだ……

俺達の言葉を聞いた空は、目に光を戻して俺と丈の顔を交互に見た。

「……ヤマト君？」

……丈先輩？」

「空あ……!!」

空の意識が戻ると、ピヨモンが空の名前を言って嬉しそうに空に抱き付いた。

俺と丈は、その光景を見て安心した。

「そ、そうだ！」

お、お兄ちゃん、太一さんと航君が……!!？」

……

……

……

……

タケルと空は、俺と丈に太一達の状況を教えてくれた。

「ヤマト君！」

丈先輩！」

急いで太一の所へ……!!

じゃないと太一達が!!」

「分かった、俺も皆と合流するつもりだった!!
俺達を太一達の所へ!!」

俺がそう言うとき空は頷いて、俺達は全速力で洞窟の外に向かって
走った。

.....

.....

.....

.....

そして洞窟の外に出ると、空はデジヴァイスをピヨモンに向けた。

「ピヨモン、進化よ!!」

空がそう叫ぶと、デジヴァイスが光り出した。

「ピヨモン進化ー!!」

.....
「バードラモン!!」

ピヨモンはバードラモンに進化した。

そして俺達は、バードラモンに乗って太一達が居るスパイラルマ
ウンテンの頂上に向かった。

「(太一.....航.....無事で居てくれ!!)」

俺は二人の無事を祈りながら、スパイラルマウンテンに向かった。

side 三人称

此処はスパイラルマウンテンの頂上・・・

先程迄は大きな爆発音が何度も響いていたが、今は何も聞こえない。

そしてそこには、不気味に笑っているピエロの様なデジモン、ロボロになって倒れているオレンジの竜人型のデジモン・太陽の神人型と月の神人型のデジモン、そして体中に傷があり倒れている歳の違う二人の少年が居た。

その場所の近くに、数体のデジモンと二人の男女の子供がその光景を見ていた。

「お兄ちゃん……航君……」

一人の少女・八神 ヒカリは倒れている二人の少年・八神 太一と加藤 航を見て涙を溜めていた。

「お兄ちゃん!!!!」

航くゥん!!!!」

ヒカリは、二人に叫びながら泣いた。

第八十話だよ！（後書き）

次回は航・太一・ヤマトの話です

次回もお楽しみに！！

第八十一話だよ！（前書き）

今回は戦いの前のあの話です

会話ばかりですので、心を広くして読んでください

誤字・脱字があれば教えてください

第八十一話だよ！

side 航

お、俺は……ま、負けねえ……！

「くう……！

はあ……はあ……」

俺は最後の力を振り絞って立ち上がり、ピエモンを睨み付けた。

「クッ……！

お、俺は……ぜ、絶対に……ま、負けねえ……！」

太一さんも最後の力を振り絞って立ち上がり、俺と同じでピエモンを睨み付けた

デジモン達もなんとか立ち上がり、ボロボロになりながらもピエモンに身構えた。

「フッフッフ、まだ立てる力がありますか。

……あれだけ痛め付けたのに……トイワンダネス……！」

『……！？

う、ウワアアアアアアアアアア……！！！！！！……？』

俺達は、ピエモンの“トイワンダネス”を喰らいかなり吹っ飛ばされた。

「た、太一さん、航君……！

ぼ、僕m「光子郎！来るな！……光子郎はヒカリを頼む！」そ、そ

んな……」

光子郎さんが俺達の助けに入ろうとしたら、太一さんは倒れながら光子郎さんに叫んだ。

「太一さん！」

確かにヒカリさんを守る事も大事ですが、このままでは太一さんと航君が……！！」

光子郎さんが、俺と太一さんを心配そうな顔で何度も見ながらそう言ってくれた。

「意固地なお人やなあ」

テントモンは、太一さんを呆れながら見ながらそう言った。

「良いんだ、意固地でも何でも……此処は俺と航に任せてくれ！俺達が何とかするから！」

太一さんがゆっくり立ち上がりながら、光子郎さんにそう言った。

「そんな……、そんなのおかしいですよ！」

「光子郎さん……俺達はまだ……戦えます。

だから……光子朗さんは……ヒカリちゃんを守っていて下さい。」

俺もゆっくり立ち上がり、光子郎さんを見ながらそう言った。

「太一さんと航君は、何時も何もかも背負うつもりなんですか!？」

「そうだ、悪いか……?」

「そうです、悪いですか……?」

俺と太一さんがそう言うと、光子郎さんが俺達を真剣な目で見てきた。

「そんな、どうして……っ、どうして僕にも戦わせてくれないんだ……!」

光子郎さんは、目に涙を蓄めながら俺達に叫んでかた。

だけど、テントモンは先程のレディデビモンとの戦いで進化は無理だろう……

それに、アンドロモンとウィザーモンを光子郎さんとヒカリちゃんから遠ざければ、誰も戦う者が居なくなってしまう……

俺と太一さんは、光子郎さんの言葉を無視した。

「はぁ……はぁ……航、ヤマトは必ず来る。」

太一さんは、ピエモンを見ながら小さい声で俺に言ってきた。

「はぁ……はぁ……だ、大丈夫です。」

や、ヤマトさんが来る事は……はぁ……はぁ……お、俺も信じてますから。」

俺がそう言うと、デジモン達がゆっくりと立ち上がってくれた。必ずヤマトさんは来る、だからそれ迄は……!

「美しい友情……だが、それもお仕舞いだ。
エンディングスぺル……!」

『うわあああああああああああ!!!!!!』

ピエモンの放った“エンディングスぺル”を喰らったデジモン達は、鎧などが碎けて完全に倒れてしまった。

「うお、うおー……ぐれい……モン……」

「あ……ぼろ……もん……でいあ……なもん……」

俺達は、デジモンの名前を途切れ途切れに言って、そのままその場に倒れた。

……クソツ……体に力が入らねえ……

「フッフッフツ、次は……」

……ひ、ヒカリちゃん達が……

……チクシヨウ、結局俺はこんな所で負けちゃうのかよ……
ヒカリちゃんに二度と心配を掛けないって決めたのに……

……ヤマトさん……

すみません……貴方を……待ってるって言ったのに……

俺……もう……ダメみたいです……

「太ー！ー！！！」

航ー！！！！」

……遠くから、俺と太一さんの名前を叫ぶ声が聞こえた。

俺は霞む視界で、声が聞こえた方角を見た。

そこには、青い狼に乗った一人の男の子がこっちに向かって来て

いた。

「太一ー！！！！」

航ー！！！！」

……ああ、帰ってきてくれたんですね……

……よ、良かった……

あ、貴方が来る事を、お、俺と太一さんは信じてましたよ……！！

「しっかりしろ！！」

太一！！

航ー！！」

男の子は俺と太一さんの横に方膝を付いて、俺達にそう叫んできた。

「俺は……お前が来るのを……本当に待ってたんだぜ……」

「太一……」

「俺も……貴方が帰ってくる事を……ずっと信じてました……」

「航……」

「絶対来るって信じてたんだ。

お前は絶対に来るって……」

「お帰りなさい、貴方は変わったようですね。

俺も自分の事のように嬉しいです……」

「「ヤマト（さん）」」

俺と太一さんが男の子・ヤマトさんの名前を言うと、ヤマトさんは涙を流して俺と太一さんを抱き締めてきた。

……泣いたら折角の男前が台無しですよ、ヤマトさん。

「ありがとう、俺を信じてくれて。

遅くなって……ごめん。」

ヤマトさんは、俺と太一さんにお礼と謝罪をした。

そうすると、ヤマトさんの“友情の紋章”が光り出した。

「……体の傷が……」

「……す、凄エ……」

「……これが紋章の力……」

ガルルモンが友情の紋章の力を使い、ウォーグレイモン・アポロモン・ディアナモンの傷を回復させた。

俺と太一さんの傷も、友情の紋章の力で回復した。

「戦いはこっからだ!!」

ヤマトさんがそう言うと、ガルルモンはガブモンに退化した。

「ガブモン!!」

進化だあ!!」

ヤマトさんがデジヴァイスを持ってそう叫ぶと、デジヴァイスが

光り出した。

「ガブモンワープ進化ー！！！！」
「……………メタルガルルモン！！！！」

ガブモンはメタルガルルモンにワープ進化した。

「フン、一体増えただけで何になるんです？
トランプソード！！！！」

ピエモンは、デジモン達に必殺技の“トランプソード”を放った。

「ガイアフォース！！！！」

「コキュートスブレス！！！！」

「ソルブラスター！！！！」

「アロー・オブ・アルテミス！！！！」

ドッカーーーン！！！！

四体の放った必殺技が、ピエモンの必殺技の“トランプソード”を破った。

「よっしゃあ！！！！」

俺はガッツポーズをし、凄く喜んだ。

「漸く手応えのあるバトルが出来ると言った所ですね……」

ピエモンから俺達に、物凄い濃密の殺気が俺達に放たれた。

……遂に……本気で来るんだな……

だが、俺達は負けない！！！！

第八十一話だよ！（後書き）

次回はピエモンとの戦いです

次回もお楽しみに！！

第八十二話だよ！（前書き）

今回の話は、ピエモンとの戦いです

そして、ある重要な人物が登場します

分かる人は分かります

後、夏休みの宿題が多いのでもしかしたら投稿出来ない日があるかもしれませんので、御了承下さい

第八十二話だよ！

side 航

四体の究極体はピエモンと互角、否、ピエモンを超える強さで、次第にピエモンを追い詰めていた。

「トランプソード！！」

ピエモンが必殺技の“トランプソード”を二本、ウォーグレイモンとアポロモンに放った。

「コキュートスブレス！！！！」

「アロー・オブ・アルテミス！！！！」

ドッカアアアアアアン！！！！

だが、メタルガルモンの必殺技の“コキュートスブレス”とデアアナモンの必殺技の“アロー・オブ・アルテミス”によって“トランプソード”はウォーグレイモンとアポロモンに当たらなかった。ウォーグレイモンとアポロモンは直ぐにピエモンに近付き、0距離で必殺技を放った。

「ガイアフォース！！！！」

「ソルブラスター！！！！」

ドッカアアアアアアッ！！！！

ピエモンは避ける事が出来ず、そのまま“ガイアフォース”と“ソルブラスター”の餌食となった。

ウォーグレイモンとメタルガルモンとアポロモンとディアナモンは、俺と太一さんとヤマトさんの前に来た。

「太一……航……分かってるな？」

ヤマトさんが爆煙に包まれたピエモンが居る場所を見ながら、太一さんと俺の名前を言って聞いてきた。

「分かってるさ……ピエモンはこの程度で死んじやいない。」

太一さんがヤマトさんが見ている場所・ピエモンが居る場所を見ながら言った。

「次で決めましょう。」

仮にもピエモンは、ダークマスターズ最強のデジモンなんですから……」

俺がそう言うと、太一さんとヤマトさんは頷いてくれた。

「フッフッフ、面白くなってきたな。」

だが、この程度で私を倒せると思っていたのか？」

煙が晴れると、少しだけ体が傷付いているピエモンが現れて、不気味に笑いながら俺達にそう言ってきた。

……ダメージはちゃんと喰らってる。

後は少しずつ確実にダメージを与えれば、俺達は必ず勝てる！！

「ウォーグレイモン！！！」

「メタルガルモン！！！」

「アポロモン！！！」

「ディアナモン！！！」

俺達が叫ぶと、四体の究極体はピエモンに必殺技を放とうとした。

「私が何度も必殺技を喰らう程、優しいデジモンでは無いぞ！！
トランプソード！！！」

ピエモンは、“トランプソード”を四本全部を俺達に放ってきた。
だが、もうその必殺技は俺達には効かない！！

「ガイアフォース！！！」

「コキュートスブレス！！！」

「ソルブラスター！！！」

「アロー・オブ・アルテミス！！！」

四体の必殺技が一つになって、トランプソードに放たれた。

ドッカアアアアアアアアアン！！！！

「な!？」

ば、バカな!!

ウワアアアアアアアア!!!!?」

四体の必殺技はトランプソードを破り、そのままピエモンに直撃した。

ピエモンは驚いた声を出した瞬間、ピエモンは大きな声で叫びながらぶっ飛んで行った。

俺達は急いでピエモンがぶっ飛んで行った場所の下に走った。

「ピエモンは!？」

倒したのか!？」

太一さんがピエモンがぶっ飛んだ方角を見ながら、俺とヤマトさんに聞いてきた。

「分かんねえ、だが、あの攻撃でピエモンはかなりのダメージを喰らった筈だ!」

ヤマトさんが、後少しで勝てると言った顔をしながら太一さんに言った。

グラッ

「うっ……」

すると突然、目眩が俺を襲ってきた。
い、いきなり何だよ……

『闇の力を使う者よ……光と闇の真実を知る事が出来れば、お主は
闇の力ではなく本当の力を使う事が出来るだろう。』

頭に誰かの声が響く……

……光と闇の真実？

……本当の力？

な、何の事だよ……

って言うか、お前は誰なんだよ！！

『お主とは、近い未来会う事になるだろう。』

今はこれでサラバだ、イレギュラーの選ばれし子供よ。』

！？

ま、待てよ！！

「お、おい航、だ、大丈夫か？」

誰かの声が聞こえなくなった途端、太一さんが俺の肩に手を置き
ながら聞いてきた。

ヤマトさんも、俺の顔を心配そうな顔をしながら見ていた。

「だ、大丈夫です。」

少し、目眩がしただけですから。

……！？

お出ましですよ……」

俺は、真剣な目で上を見ながら二人に言った。
二人も上を見ると、真剣な顔つきになった。

さあ何をする気だ、ピエモン!!

「……何やってんだ、アイツは？」

太一さんは、ピエモンの行動を見ながらそう言った。

ピエモンは白いハンカチを取出し、マジシャンがマジックの時にする『種も仕掛けもございません』という感じにハンカチの裏と表を交互に俺達に見せてきた。

そうすると、ピエモンは白いハンカチを二枚・俺達とデジモン達に投げてきた。

!?

ま、まさか!!?!

俺は直ぐに横に飛んだ。

「皆!!」

そのハンカチの中に入ってはダメだ!!!!」

俺は、急いで立ち上がって皆に叫んだ。

だが……言うのが遅すぎた……

『う、うわああああああああ………』

太一さん達は、白いハンカチの中に入ってしまった。

俺は直ぐにハンカチを退けようと立ち上がり、太一さん達の所へ走り出した。

だが、ピエモンが上から降りてきて……

「フン!!!!」

ドスッ！！！！

「グハッ！！！！」

俺はピエモンに蹴られ、ヒカリちゃん達の所に吹っ飛ばされた。

「わ、航君！？

だ、大丈夫！？」

ヒカリちゃんが俺の隣に座って、心配そうな顔をしながら聞いてきた。

お、俺は大丈夫！！

だ、だけど、太一さん達が！！

「フッフッフッ」

ピエモン、不気味に笑いながら太一さん達が入ったハンカチを上げた。

しかしそこには、太一さん達の姿が無かった。

「た、太一達は何処に行ったんだ！？」

丈さんが立ち上がって、大きな声を出して驚いた。

するとピエモンが、笑いながら自分の指を見せてきた。

そこには、太一さんの人形・ヤマトさんの人形・ウォーグレイモンの人形・メタルガルルモンの人形・アポロモンの人形・ディアナモンの人形が有った。

「チクショウ！！！！」

俺はその人形達を見て、大きな声を出して悔やんだ。

「わ、航君、お兄ちゃん達は何処に行ったの!？」

ヒカリちゃんが俺に聞いてきた

クソッ!!

もっと速く、太一さん達に言っていたら!!

「太一さん達は……。ピエモンが持っている人形だ!!」

『!?!?』

俺がそう言っていると、皆は驚いた顔をした。

「フッフッフツ、貴様等もコイツ等と同じ様にしてやります。
待っていてください。」

ピエモンはそう言って、俺達に向かって歩き出した。

第八十二話だよ！（後書き）

次回は皆がピエモンから逃げる話です

次回もお楽しみに！！

第八十三話だよ！（前書き）

久しぶりに長くなってしまった・・・

今回はピエモンから逃げる話です

区切る場所が無かったので、終わりが中途半端ですが御了承下さい

第八十三話だよ！

Sideゲンナイ

「ケンタルモン、これなのか？」

ワシはメカノリモンに乗り、ケンタルモンの側にやってきた。
ワシ等の目の前には、縦と横の穴から交互に炎が出ていた。

「おお、来て頂けましたか……。

そうです、これがファイル島の古代予言に書かれていた“火の壁”
です！」

ケンタルモンは、火の壁を見ながらワシに言ってくれた。

ワシはメカノリモンの操縦席から出て、火の壁を見た。

「しかし……本当にソイツ（・・・）がこの火の壁を超えてきたのか？」

ワシは火の壁を見ながら、ケンタルモンに聞いた。

火の壁は、休む事なく炎を出している。

ワシにはとても、火の壁を超えてきたと言う事が信じられなかった。

「予言には……そう書かれていました。」

ケンタルモンは、少し言いにくそうな顔をしてワシにそう言った。
しかし……

「いやあ、信じられん！」

ワシとケンタルモンは、その場で驚きながら火の壁を見続けた。

Side航

「フツハツハツハツハツ！！！！」

ピエモンは太一さん達の人形を腰に付けて、俺達を見ながら不気味に笑っていた。

俺達は、全速力で走って洞窟の中に向かった。

「アノ洞窟ノ中へ逃ゲ込メ！！」

アンドロモンは俺達にそう叫んだ。

しかし、アンドロモンは俺達と一緒に来なかった。

「アンドロモン！？」

空さんは、立ち止まって後ろでピエモンと戦っているアンドロモンを見ながら叫んだ。

俺もそれ気付いて直ぐに引き返し、空さんの隣に来てアンドロモンを見た。

「此処ハ私が食イ止メル！！」

スパイラルソード！！」

アンドロモンは俺と空さんにそう言って、ピエモンに必殺技の“スパイラルソード”を放った。

ガキンッ!!

しかしピエモンは、意図も簡単にアンドロモンの“スパイラルソード”を弾いた。

そしてピエモンは、トランプソード二本を取り出してアンドロモンを攻撃し始めた。

アンドロモンは防戦一方だった。

「逃げるんだ、空君!!
航君!!」

丈さんが、俺と空さんの手を引っ張って走りながら俺と空さんに言ってきた。

「丈さん!!
でも、アンドロモンが!?!」

「そうよ!!
アンドロモンが!?!」

俺と空さんは、アンドロモンを見ながら丈さんに叫んだ。
だが、丈さんは止まってくれなかった。

「空君!!
航君!!」

アンドロモンの好意を無駄にしちゃいけない!!!!!!」

丈さんにそう言われて俺達は、洞窟の奥に走っていった。

ガキンッ!!

ガキンガキンッ!!

洞窟の外から、戦闘の音が聞こえる。

ドッカアアアアアアッ!!!!

「チクショウ!!」

俺は悔しくなって叫んで、洞窟の奥を目指して走って行った。

.....

.....

.....

.....

「な、何や此処は!？」

テントモンが、目の前の光景を見て驚きながら叫んだ。
俺達の目の前には、真ん中に大きな穴が開いており、天井から空中ブランコが四つぶら下がっていた。

「まるで、サーカス小屋みたい……」

空さんは、目の前の光景を見てそう呟いた。
確かに、サーカス小屋の一部みたいだな……

「あの穴から、別の所へ通じているようです。」

光子郎さんが、向こうにある穴を見てそう言った。
確か、向こうに行く為には……

「ど、どうやって向こうに行くんだ!？」

丈さんは、光子郎さんの言葉に疑問を持ってそう叫んだ。
すると、テントモンとウィザーモンが空を飛びながら向こうに行った。

「空中ブランコでっせ!!
これでひとつ飛びや!!
はよ来なはれ!!」

テントモンが、向こうから俺達に叫んだ。
そうすると、テイルモンにしがみ付いたヒカリちゃんが前に出た。

「ヒカリ、しっかり捕まって!!」

「う、うん!」

テイルモンとヒカリちゃんはそんな会話をすると、テイルモンが空中ブランコに飛んで行った。

俺はピエモンを警戒する為に、皆の後ろに行った。

「さ、次はタケル君よ!!」

空さんの声が聞こえたので、俺は空さん達の所を見た。

タケル君が、空中ブランコに乗って向こうに行った。

タケル君の上を、パタモンが飛んで行った。

そして、向こうから来たテイルモンの手をタケル君は無事に握って向こうに行った。

「次は航君よ!」

空さんは俺の手を握って空中ブランコの前に連れてきた。

「否、俺はまだ良いです!!」

暗黒エネルギーを使えば、多分ですが、ピエモンの足止めが出来る筈なんです!!

だから、先に空さん達が行ってください!!」

こうなったのも、俺が原作を思い出すのが遅れた所為だ!

だから、俺が空さん達より助かって良いわけない!!

「良いから!!」

空さんはそう叫んで俺に空中ブランコ待たせたので、俺は渋々向こうに向かった。

「航〜!!」

向こうのブランコから、テイルモンが俺に手を出してきた。
俺は自分のブランコを離して、テイルモンの手を掴んだ。

「よしっ!!」

テイルモンは俺の手を掴んでそう言った。

そして俺は無事に、向かい側の崖に着地した。

次に、空さんとピヨモンがこっちに来た。

ピヨモンは、落ちない様に空さんにしっかりと抱き付いていた。

そして、無事に空さん達もコッチに来た。

「ゴマモン行けェ!!」

丈さんと光子郎さんに投げられたゴマモンは、手足をばたつかせながらもテイルモンの手を掴んだ。

そして、ゴマモンも無事にこっちに来た。

そして、光子郎さんがこっちに来ようとした時……

「フッフッフツ、そうはいきませんよ!」

ピエモンがアンドロモンの人形を俺達に見せながら、丈さん達の後ろに現れた。

「あ、アンドロモン!?

光子郎行けェ!!」

丈さんは光子郎さんの背中を押した途端、ハンカチの中に入れてしまった。

「丈さアアアん!!?」

光子郎さんも、泣きながらハンカチの中に入れられてしまった。
そして、後少しの所でテイルモンの手が間に合わなかった。
テントモンは、光子郎さんを助けに行く為にピエモンに向かって
行った。

「光子郎はんに何しはんねん……ウワアアアアアア!!?」

テントモンも、ハンカチの中に入れられてしまった。

光子郎さんとテントモンが入ったハンカチは、ピエモンに向かって
行った。

「ほくらら、捕まえた捕まえた♪
逃げてても無駄だぞ♪」

「丈さアアアん!!」

光子郎さアアん!!

テントモオオン!!」

俺は後ろを見ながら叫んで、洞窟の奥に向かって走り出した。

その時、テイルモンとウィザーモンとピヨモンが何かをする為に
アイコンタクトをして頷いていた。

side ミミ

私達は今、スパイラルマウンテンに向かう為に崖を登ろうとして

るんだけど……腕に力が入らなくて上がれない!!

リリモンに下から押してもらってるんだけど、中々上がらない……

「み、ミミ、重くて上がらない……!!」

リリモンが、苦しそうに私にそう言ってきた。

「う、嘘でしょ!？」

私、そんなに太ってないよ!？」

他のデジモン達も頑張って登ってるけど、私だけ登れなく!!

「ミミ、戦いは始まってるゲコよ!!」

上からゲコモン達が、私の登っているロープを引っ張りながら言ってきた。

「もっ!!」

リリモンの他に、飛べる仲間はいないの……!!」

私がそう叫ぶと、私達の上を飛んでいるデジモンが現れた。

side航

俺達は息を殺しながら、ピエモンに見つからない様に床の下に隠れている。

空さん・ヒカリちゃん・タケル君は、物凄く不安な顔をしていた。

……クソッ!!

俺の……俺の所為だ!!

「逃げてても無駄だと言ったのに……さて、観念して出てきたらどうだ？」

上からピエモンの声が聞こえてきた。

俺達は更に息を殺し、ピエモンが離れるのを待った。

「……他の部屋に行ってみたみたい。」

ザキュンッ!!!

空さんがそう言った瞬間、上から剣が出てきた。

「「キャアッ!?!」」

空さんと、空さんの近くに居たヒカリちゃんは、悲鳴を上げて紙一重で剣を避けた。

「見つけたぞお!!!」

ピエモンの声が聞こえた瞬間、上から沢山の剣が俺達を襲ってきた。

ヒカリちゃんは、ピエモンに恐怖して俺にしがみ付いていた。せめて、ヒカリちゃんだけでも!!

俺は外に出ようとした。

「航君、外に出ては絶対にダメ!!」

空さんが俺の手を掴んで、そう叫んできた。

「ホーリーアロー!!!」

上から、エンジェウーモンの声が聞こえた。
ま、まさか!?

「逃げてヒカリ!!」

「此処は私達に任せて!!」

「航、逃げてくれ!!」

隙間からエンジェウーモンとガルダモンとウィザーモンの姿が見えた。

「エンジェウーモン!!」

「ガルダモン!!」

ヒカリちゃんと空さんは、二体の姿を見て喜んだ。
俺達は急いで奥に進んで行った。

「シャドーウイング!!!」

ドッカアアアアアアン!!!

ガルダモンの声が聞こえたが、ピエモンの悲鳴は聞こえなかった。そして聞こえてきた悲鳴は……

「うわあああああああああ!!!!!!?」

エンジェウーモンとガルダモンとウィザーモンの悲鳴だった……

俺達はピエモンから少し離れた場所であがった。

……此処迄だな。

「皆、ここからは俺が時間を稼ぐ！！」

「その間に逃げてくれ！」

「だ、ダメよ、航君！！」

空さんが俺の手を掴んで言ってきた。

ブ
ウ
ン
・
・
・
・

俺は直ぐに、暗黒エネルギーを体に覆った。

その所為で、空さんは俺から手を離れた。

「少しでも時間を稼げます！！」

「空さん、皆を頼みます！！」

「わ、航！？」

オイラも「ダメだ、ゴモン!! お前は丈さんが居ないから、進
化が出来ないだろ!! 皆と一緒にいけ!!」で、でも!!」

トコン トコン トコン

俺がゴマモンにそう言うのと、ピエモンがコチラに向かってくる音が聞こえてきた。

チクショウ、もう来やがった!!

「速く行って!!」

俺が皆に大声で叫ぶと、皆は急いで奥に向かって走りだした。

「航くウウウン!!!?!」

ヒカリちゃんが、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「フッフッフツ、逃げずに此処に居たのか。
イレギュラーの選ばれし子供よ。」

「嗚呼、時間を稼いでやるよ!!
イレギュラーになりにな!!」

俺はピエモンにそう叫んで、ピエモンに向かって突っ込んだ。
そして、最後に見たのは不気味に笑ったピエモンの顔だった。

S i d e ヒカリ

「タケル君、貴方はヒカリちゃんと逃げて!!」

空さんが急に立ち止まって、タケル君にそう言った。

「で、でも!？」

タケル君は驚いた顔をして、空さんを見ながら言った。

「エンジェウーモンもガルダモンもウィザーモンも……それに航君も、人形にされてしまったわ。

だから、タケル君がヒカリちゃんを護って!」

空さんが、タケル君と同じ目線にしてタケル君の肩を掴みながら言った。

……航……君……

「何があっても、逃げ切るのよ!!」

空さんは、真剣な目でタケル君を見て言った。

「分かった、僕がヒカリちゃんを護ってみせるよ!!」

航君の為にも!!

ヒカリちゃん!!」

「う、うん」

私達は、空さんを置いて走り出した。

でも、ゴマモンだけ私達と一緒に来なくて空さんの所に残った。

ドツカアアアアアアン！！！！

空さん達が居る所から、大きな爆発音が聞こえた。

「タケル君！！」

ヒカリちゃん！！」

空さんの声が聞こえたので、私達は後ろを振り返った。

そしたら、誰かの人形が私達に飛んできていた。

私達はそれを無事にキャッチした。

タケル君がキャッチしたのはヤマトさんの人形・私がキャッチしたのはお兄ちゃんと航君の人形だった。

そして私達は人形をキャッチした後、一番奥にあった扉を押して外に出た。

第八十三話だよ！（後書き）

次回はエンジェモンが遂に超進化ー！！

そして、ピエモン編も次でラストー！！

次回もお楽しみにー！！

第八十四話だよ！（前書き）

夏休みの宿題に集中してたら遅くなりました！！

今回の話はうろ覚えなので、若干会話が抜けてる所があります

説明も理解できない所が有るかもしれませんが、心を広く持つてください

今回でピエモン編も終わりです！！

第八十四話だよ！

Sideタケル

僕達は一生懸命力を出して扉を開けて、急いで外に出た。
でも、扉の外は完全に行き止まりだった。

「そ、そんなぁ！？」

「行き止まりなんてえ！？」

「どうしよう……」

僕達は走って柵に近付いて、落ちない様に下を見た。
僕達が居る所は、地面よりかなり高い場所に在った。

「どうしよう……？」

ヒカリちゃんが、不安な顔をしながら僕に聞いてきた。
どうするって……

「お、降りるしか……」

僕がそう言うと、ヒカリちゃんが驚いた顔をした。

「む、無理だよ、と、途中でおっこちちゃうよ。」

ヒカリちゃんは諦めた様な声で、僕にそう言ってきた。
……諦めちゃ、諦めちゃダメなんだ！

僕は、空さんに、航君に、お兄ちゃんに、皆に約束したんだ！！

“ヒカリちゃんを護る” って！

「タケル、これって何？」

パタモンが、何か坪の様な物を見つけて僕に聞いてきた。

僕達は坪に近付いて、坪の蓋を開けて中身を確認した。

坪の中には、長いロープが入ってた。

……こ、これを使えば……！！

「これを使えば下に降りられるぞ！

……うわっ！？」

僕達が喜んだ瞬間、ロープが突然上に向かって伸びだした。

ど、何処まで続いてるんだろ……

だ、だけど、気にしてる余裕は無いんだ！

「ヒカリちゃん、このロープを使って上に逃げるんだ！」

「う、うん」

僕がそう言うと、ヒカリちゃんがロープを上りだした。

僕も、ヒカリちゃんの後にはロープを上り始めた。

ドツカアアアアアアン……！！

すると突然、扉が爆発して下を爆煙が立ちこめた。

煙が晴れると、不気味な笑いをしているピエモンが立っていた。
すると上から、パタモンがピエモンの所へ行った。

「ピエモンは僕に任せて!!」

パタモンが僕達にそう言うのと、僕のデジヴァイスが光り出した。

「パタモン進化ー!!」

……エンジェモン!!」

パタモンがエンジェモンに進化して、ピエモンと戦い始めた。

「ヒカリちゃん、エンジェモンが戦ってる内に上に!!」

「わ、分かった!」

僕がヒカリちゃんにそう言うのと、ヒカリちゃんが急いで上に上り始めた。

僕も下でピエモンと戦っているエンジェモンを見ながら、ロープを上って行った。

「う、うわああああああああああ!!!!!!」

すると突然、エンジェモンの悲鳴が聞こえたので、僕は下で戦っているエンジェモンを見た。

「え、エンジェモン!!?」

僕が下を見たら、エンジェモンはピエモンに負けて、下に落ちて行っていた。

そ、そんな……

え、エンジェモンが……

で、でも、あ、諦めちゃダメだ!!

僕が諦めたら、ヒカリちゃんも諦めてしまう!!
希望を持たないと!!

「エンジエモンなら大丈夫だから、僕達は上り続けよう!!」

僕は、諦め掛けていたヒカリちゃんに大きな声で言った。

こんな時、お兄ちゃんなら、太一さんなら、空さんなら、光子郎さんなら、ミミさんなら、丈さんなら、そして、航君ならきつとこ
うした筈だから!!!

グサツ!!

すると突然、ロープが落ち出した。

僕は落ちながら、下に居るピエモンを見た。

ピエモンは、剣でロープを斬って僕達を見ながら不気味に笑っていた。

「う、うわああああああああああああ!!!!!!!!」

「きゃ、きゃああああああああああああ!!!!!!!!」

僕達は、凄い勢いで下に落ちて行った。

もう……………ダメなの?

……………お兄ちゃん……………

『諦めるな、タケル。』

』

えっ!?

お、お兄ちゃん!?

僕はポケットに入っていたお兄ちゃんの人形を取り出して、自分の顔の前に持ってきた。

『諦めるな、タケル。』

お前は俺の弟なんだ。

だから諦めるな、希望を捨てるな。』

……お兄ちゃん……

……そうだね、そうだよね!!

諦めちゃダメだ、ダメなんだ!!

「諦めちゃ……諦めちゃ……諦めちゃダメなんだ!!
ヒカリちゃん!!」

僕が大きな声で叫びながら、ヒカリちゃんに一生懸命近付いた。
すると、僕の希望の紋章が輝き出した。

「エンジェモン超進化ー!!!
………ホーリーエンジェモン!!!!」

するとエンジェモンは、希望の紋章の力でホーリーエンジェモンに超進化して、僕達の所に飛んで来て、僕とヒカリちゃんを抱き抱えてくれて下にゆっくり降りて行ってくれた。

「ホーリーエンジェモン!?!」

僕がホーリーエンジェモンの名前を言うと、ホーリーエンジェモ

ンは僕に頬笑んでくれた。

そして無事に地面に着くと、ホーリーエンジェモンはピエモンの所に飛んで行った。

此処からじゃ遠くて見えないけど、多分ピエモンと戦ってるんだと思う。

そして暫くすると、ホーリーエンジェモンが皆の人形を持って降りて来た。

「タケル、ヒカリ、人形を此処に置いてくれ。」

ホーリーエンジェモンは、ピエモンから奪い返した皆の人形を僕達の目の前に置いて、僕達にそう言ってきた。

僕はお兄ちゃんの人形を、ヒカリちゃんは太一さんの人形と航君の人形を置いた。

「ホーリーデイスインフエクション!!!!」

ホーリーエンジェモンがそう言うと、ホーリーエンジェモンの手から虹色の光が出てきて、その光を人形に当てた。

すると、皆が人形から元に姿に戻った。

僕はお兄ちゃんに、ヒカリちゃんは太一さんと航君に走って近付いた。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

僕に勇気をくれて！」

僕はお兄ちゃんにお礼を言ったけど、お兄ちゃんは僕のお礼を聞いて頭に？マークを浮かべていた。

僕はそれでももう一回お兄ちゃんにお礼を言って、航君に走って近付いた。

Side航

俺達は、ホーリーエンジェモンのお陰で元の姿に戻れた。

……タケル君が希望の紋章を輝かせたんだな。

「航君！」

航君のお陰で、僕は希望の紋章を輝かせる事が出来たよ！」

タケル君が俺に走って近付いき、俺にお礼を言ってきた。

……俺のお陰？

俺は何もしてないんだけど……

だけど、俺のお陰ならそれはそれで良い。

原作通り、エンジェモンはホーリーエンジェモンに超進化出来たからな……

「貴様等アアア！！！！！」

俺がそう思っていると、上からピエモンの叫び声が聞こえてきた。すると、俺達の周囲の地面からイビルモンが大量に出てきた。

……遂にラストバトルか！？

「皆、最終決戦だ！！全力で行くぞ！！！」

太一さんが俺達にそう言ってきたので、俺達は太一さんの顔を見て頷いた。

すると、進化していないデジモン達が光り出した。

「テントモン進化ー！！」

……カブテリモン！！

カブテリモン超進化ー！！！！

……アトラーカブテリモン！！！！」

「ゴマモン進化ー！！」

……イッカクモン！！

イッカクモン超進化ー！！！！

……ズドモン！！！！」

「テイルモン超進化ー！！！！」

……エンジェウーモン！！！！」

テントモン・ゴマモン・テイルモンは超進化して、アトラーカブテリモン・ズドモン・エンジェウーモンになった。

確か、この後って……

「獣王拳！！！！」

遠くから誰かの声が聞こえてきたと思ったら、俺達の目の前に居たイビルモン達が獅子の顔をした物によって倒された。

俺達は、声が聞こえた方を見た。

そこには、レオモンを始めとする俺達の仲間デジモンが沢山居た。

「選ばれし子供達！！

私達が助けに来たっぴよ！！」

ピンクの小さい体で白い羽根が背中から生やした妖精の様なデジモン・ピッコロモンが俺達を見ながらそう叫んできた。

ピッコロモン……

「これが最後の戦いだ!!」
私も本気で戦う!!」

ライオンの戦士の様なデジモン・レオモンも、ピッコロモンと同様に俺達を見ながらそう叫んできた。

レオモン……

「皆ー!!」

ダークマスターズと戦ってくれるデジモン達、沢山連れてきたよー!!」

空から声が聞こえてきたので、俺達は上に顔を向けて空を見た。そこには、ユニモンに乗って俺達に手を振っているミミさんが居た。

『ミミちゃん(さん)(君)!!』

これで……選ばれし子供が全員揃った!!

俺達選ばれし子供達はピエモンを、他のデジモン達は大量のイビルモンと戦い始めた。

ホーリーエンジェモンの力と沢山の味方デジモンのお陰で、俺達の士気が上がった。

イビルモン達は味方デジモンの攻撃で、次々に倒されていつてる。ピエモンは、自身の攻撃は全て防がれ俺達の攻撃を全て喰らっている。

……止めた!!

「ガイアフォース!!!」

「コキュートスブレス!!!!」

「シャドーウィング!!!!」

「ホーンバスター!!!!」

「フラウカノン!!!!」

「ハンマースパーク!!!!」

「ホーリーアロー!!!!」

「ソルブラスター!!!!」

「アロー・オブ・アルテミス!!!!」

ウォーグレイモンは“ガイアフォース”を、メタルガルルモンは“コキュートスブレス”を、ガルダモンは“シャドーウィング”を、アトラカブテリモンは“ホーンバスター”を、リリモンは“フラウカノン”を、エンジェウーモンは“ホーリーアロー”を、アポロモンは“ソルブラスター”を、ディアナモンは“アロー・オブ・アルテミス”を、それぞれの必殺技をピエモンに放った。

「ウワアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!?」

ピエモンはホーリーエンジェモン以外のデジモン達の必殺技を喰らい、大きな声で叫びながらぶっ飛ばされた。

ピエモンがぶっ飛んだ先には、聖なる剣“エクスカリバー”を構えたホーリーエンジェモンが居た。

「ヘブンスゲート!!!!」

ホーリーエンジェモンは、エキスカリバーを大きく円を描く様に回した。

するとその円が金色の扉になり、金色の扉がゆっくり開いた。

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

ピエモンはホーリーエンジェモン以外のデジモン達の必殺技を喰らっていたので勢いを殺す事が出来ず、そのまま“ヘブンスゲート”の中に入ってしまった。

そしてピエモンがヘブンスゲートに入ると、ヘブンスゲートはゆっくり閉じられた。

「戦いが……終わったんだ。」

太一さんは、空を見ながらそう呟いた。

……否、まだ戦いは終わっていない……

何故なら……

まだ……

この世界の根本的な敵の……

アポカリモンが……

まだ、この世界に存在しているのだから……

「あっ!？」

ゲンナイさんからメールだ!！」

……来たな、本当のラストバトルのスタートの合図が……

第八十四話だよ！（後書き）

さあ次回からアポカリモン編！！

無印もラストスパート！！

次回もお楽しみに！！

第八十五話だよ！（前書き）

今回からアポカリモン編！！

無印もラストスパート！！

頑張ります！！

明日は、地域野球に参加したり・夏休みの宿題をするので更新出来ないかもしれません

御了承下さい

誤字・脱字があれば教えてください

第八十五話だよ！

side 航

ピエモンをホーリーエンジェモンの“ヘブンズゲート”で倒した後、光子郎さんのパソコンにゲンナイさんのメールが届いた。

俺達はゲンナイさんのメールを見る為に、光子郎さんの周りに集まった。

「それで光子郎、ゲンナイは何てメールを送ってきたんだ？」

太一さんが、光子郎さんの肩に手を置きながら聞いた。

多分、否、確実にメールの内容は悪い知らせを報す物だろう……

光子郎さんは太一さんに「待ってください」と言って、パソコンを動かし出した。

……光子朗さんって絶対に小学四年生じゃないよな、この無駄の無い動きが証明してる……

絶対に歳を誤魔化してますね、光子郎さん？

俺がそう思っていると、ゲンナイさんの声が光子郎さんのパソコンから聞こえた。

「選ばれし子供達、よくぞダークマスターズを倒してくれた！

……じゃが、デジタルワールドの歪みもお主等の世界の歪みも直されておらん。」

ゲンナイさんが、俺達にそう言ってきた。

その事を聞いて、俺以外の皆は驚いた顔をした。

まあ……そりゃそうなるよな。

今迄、ダークマスターズの所為でデジタルワールドと俺達の世界の歪みが起こったと皆は思っていたからな……

「本当の敵は、存在そのものが世界を歪ませる生き物で、ダークマ
スターズはその歪みの所為でパワーを得たにすぎない。」

ゲンナイさんがそう言うのと、今迄黙ってた太一さんが口を開けた。

「じゃ、じゃあ、本当の敵って一体何なんだよ？」

太一さんが不安そうに、ゲンナイさんに聞いた。

バキッバキバキッ！！

太一さんがゲンナイさんに聞いた瞬間、俺達の周囲に地割れが走
った。

チッ、遂にお出ましか！！

「な、何だあ！？」

太一さん、否、皆は地割れを見てかなり焦っていた、
地割れが走ると同時にスパイラルマウンテンが大きく揺れ、俺達
は真っ直ぐ立てない位揺れた。

「な！？」

俺は目の前にある物を見て驚いた。

何故なら、スパイラルマウンテンが闇に飲まれていたからだ。

「わ、航君！？」

ヒカリちゃんは、俺の手を力一杯握ってきた。

ヒカリちゃんの手は、微かだが震えていた。

俺はヒカリちゃんの手を強く握った。

そして遂に、俺達が立っていた地面が闇に飲まれ、俺達は闇に落ちていった。

「うわあああああああああ！！！！！！！！！！？」

俺は、否、俺達は叫びながら闇に落ちていった。

.....

.....

.....

.....

「恐らく、この闇に終わりは無いじゃろう。」

ゲンナイさんが、俺達の居る場所の闇に付いてそう言った。

俺達は闇に落ちたのだが、ゆっくり体が宙に浮いたので怪我をせずに済んだ。

そして光子郎さんが、ゲンナイさんにこの闇に付いて聞くと先程の言葉を言った。

「全ての悪を生み出した最も根源的なものがまだ倒せていない。」

ゲンナイさんはそう言って、“火の壁”からやってきた“暗黒の

もと”・アポカリモンに付いて話し出した。だけど、俺はそれどころじゃなかった。

俺は皆から少し離れた場所で此処の闇を見ながら考え事をしていった。

俺はこの闇の世界・アポカリモンの世界を知っている。

原作を知っているから知っていて当然なのだが、脳じゃなくて体がこの場所を知っている。

「どうしたのだ、航？」

ウィザーモンが、俺の肩に手を置いて聞いてきた。

「い、否、な、何でもない。」

俺は無理矢理笑って、ウィザーモンにそう言った。

ウィザーモンは「……分かった」と言っ、光子朗さん達の所へ行ってゲンナイさんの話を聞き始めた。

……何故俺の体は、この世界を知っているんだ？

何故来た事の無い世界を、俺の体は知っているんだ？

……脳じゃなくて体がこの場所を知っている……否、憶えてる？

……何故なんだ？

「じ、ジジィ!!」

突然太一さんの声が聞こえたので、俺は考えるのを一度止めて太一さん達の所を見た。

太一さん達は、パソコンの画面を見て戸惑っていた。

多分、否、確実にゲンナイさんとの通信が切れたんだろう。
！？

……来やがったな。

俺は太一さん達の所へ戻って、身構えて前を見た。

すると、俺達の目の前に大きな何かが現れた。

そして、一番上にマントを羽織った奴が現れた。

……来たな、アポカリモン……

第八十五話だよ！（後書き）

次回はアポカリモンが航達に叫びます

次回もお楽しみに！！

「すいません」

松上「どうも、『デジモンアドベンチャー 転生したらこうなった』の作者の松上です。」

航「ども、『デジモンアドベンチャー 転生したらこうなった』の主人公の加藤 航です。しかし、松上？」

松上「何だ？」

航「何故この話を書いたんだ？」

松上「……すまん。

今日、地域野球に参加して、熱中症になってしまった。」

航「……MAZIDE？」

松上「マジっす……更新を期待した皆さん、本当にすいません。」

航「体は大丈夫なのかよ？」

松上「体が怠い。

今も、文字を打っただけでシンドイ。」

航「じゃあもう休め。明日に疲れを残すな。」

松上「すまん……本当に皆さん、更新出来なくてすいません。

明日……に更新出来るか分かりませんが、必ず近い内に更新します。
……本当にすいませんでした!!」

第八十六話だよ！（前書き）

お久しぶりです！！

体は完全に治りました！！

心配させてすみません

久々に小説を書いたので、少し不安です

誤字・脱字があれば教えてください

それと明日からバイトなので、毎日更新が出来ないかもしれません

御了承下さい

それから今、一話から修正しています

暇だったら、また一話から読んでください

よろしく願います

第八十六話だよ！

side航

俺達はアポカリモンが突然現れたので、アポカリモンを警戒しながら見た。

光子郎さんは、デジモンアナライザーでアポカリモンの事を調べ始めた。

「……そ、そんな!？」

「どうしたんだ、光子郎!？」

光子郎さんがパソコンの画面を見て驚いた声を出したので、太一さんがアポカリモンを見ながら光子郎さんに聞いた。

光子郎さんは、動揺しながらゆっくりアポカリモンの情報を言っ
た。

「……奴の名前はアポカリモン。

……正体不明で、奴がデジモンがどうかすら分かりません。

究極体……となっていますが、奴がデジモンであるかどうかすら分かりません。」

「な、何だよ、情報が全く無いじゃねえか!!！」

光子郎さんのアポカリモンの情報を聞いた太一さんは、光子郎さんとアポカリモンを交互に見ながらそう叫んだ。

やはり、アポカリモンの情報は無し……か。

「クククク……ハハハハハ。」

私を醜いと思うか？

……そうだろう……

お前達はそう思うのだろう。

所詮、我々は進化の過程でその行く手を阻まれた者……」

アポカリモンは突然、俺達を睨みながら言ってきた。

だが、皆はよく理解していない顔をしていた。

なので、俺が皆に補足した。

「長い年月の中で繰り返される進化の、その過程で消えていったデジモン達、その悲しい恨めしい無念の思いが蓄積された闇の心の集合体なんです。

アポカリモンは……」

俺がそう言うと、皆（一部を除く）は理解してくれた。

俺はアポカリモンを見ると、アポカリモンは不気味に俺達を睨んでいた。

「……進化の過程の中では、消えていく種があるのも仕方ない事です。

やはり環境に順応出来ずに「黙れ!!」!?!」

光子郎さんがアポカリモンに言っていると、アポカリモンが光子郎さんの言葉を大声で遮った。

「仕方がない？

その一言で全てを死なせる気か!!

貴様是我々が生き残る資格の無い者だと決め付けるのか？

……そう、我々はデジモンの進化の過程で消えていった種の、その悲しい、恨めしい無念の思いが蓄積された集合体だ!!
……選ばれし子供達よ。

そして……そのデジモン達よ。

我々はお前達と出会えるのを楽しみにしていたのだ。
良いか。

我々が冷たく悲しく、闇から闇へ葬られていく時……
その片方で、光の中で楽しく笑いながら時を過ごしていくお前達が居る。」

グチュツ!!

「キャツ」

アポカリモンはそう言い終わると突然、自分の爪を体に刺して、刺したまま下に力で身を引き裂いた。

それを見たミミさんは短く悲鳴をあげ、ヒカリちゃんは俺に抱き付いてきた。

他の皆も、その光景を見て驚愕の顔をしていた。

「何故だ!!?」

我々が何をしたと言うのだ!?

何故お前達が笑い、我々が泣かなければならないのだ!?

我々にだって涙もあれば、感情もあるのに……

何の権利があつて、我々の命はこの世界から葬り去られていかなければならない!?

生きたかった!!

生き残って友情を、愛を、正義を語り……この軀を世界の為に役立

てたかったのだ!!

我々は、この世界にとって必要が無いと言うのか!?
無意味だと言うのか!?

俺達はアポカリモンの憎悪の言葉・矢継ぎ早に繰り出される質問に、俺達は恐怖を感じて何も言えなかった。
すると、アポカリモンは俺を見てきた。

「だが、お前だけは違う……

お前はこの世界のイレギュラーであり、我々の気持ちを唯一知る人間……

暗黒エネルギーを使える人間……

負の感情をこの世で一番理解している人間……

イレギュラーである九人目の選ばれし子供……否、加藤 航よ。

……我々の仲間にならないか?」

『!?!?』

俺は、否、俺達はアポカリモンの言葉を聞いて驚いた。

だが俺達は、余りにも驚いたので声が出せなかった。

「お前は光にも闇にも属する……

本来、我々の存在する場所を確立する為に、今生きる者達を排除する予定だった。

だが、お前は光でもあり闇でもある。

……さあ、我々と一緒に生きようではないか!!」

「ふざけるな!!」

お前がやろうとしている事は結局、自分の存在する意味を作ろうとしているだけだ!!

俺はお前等の気持ちを知っている、お前等がどれだけ辛かったか知っている、お前等がどれだけ生きたかったか知っている！！

だがお前等がやろうとしている事に参加すれば、悲劇は必ず繰り返されるんだ！！

もし、お前が俺達を倒そうとするなら……俺達はお前を、闇を倒す！！」

俺がそうアポカリモンに言うと、皆はアポカリモンに身構えた。

そしてアポカリモンは、俺の言葉を聞くと殺気を俺にぶつけてきた。

「なら、貴様には用は無い！！

……この世界は我々が支配する。

我々の場所を確立するのだ……

邪魔する者には全て消えてもらう。

ククハハハハハ……

光ある所に呪いあれ！！！！」

「気を付けろ！！」

アポカリモンが攻撃をしようとしたので、俺はデジモン達に注意する様に言った。

「友情の印だ！！

アルティメットストリーム！！

愛の印だ！！

ブリットハンマー！！

正義の印だ！！

∞（無限）キャノン！！」

『ウワアアアアアアアアア！！！！！！！！！』

デジモン達は、アポカリモンの触手から放たれたメタルシードラモンの必殺技の“アルティメットストリーム”・ピノッキモンの“ブリットハンマー”・ムゲンドラモンの“∞（無限）キャノン”を喰らい、倒された。

皮肉にも良い言葉に乗せられた歪んだ美徳感情が、俺達の体や心を襲ってきた。

クソッ、このままじゃ負ける！！

俺は直ぐに暗黒エネルギーを体に纏わせた。

「無駄だ！！」

デスエボリューション！！！！」

「な！？」

俺とデジモン達は、アポカリモンの触手に掴まってしまったそして、ドンドン力が奪われていくのを感じる。

……や、ヤバイ……

『おい、俺！』

も、もう一人の俺？

『……俺はもうダメだ。

アポカリモンによって存在自体を消される。』

な！？

『だから最後に言うておく。

……光と闇の真実、これが分かればお前、否、お前達は強くなる。』

ま、待てよ!!

『……じゃあな……』

もう一人の俺の存在を感じなくなると、俺は、否、俺達は触手から解放された。

デジモン達は、成長期迄退化していた。

俺は、完全に暗黒エネルギーを使えなくなっていた。

「も、もう一度進化を!!」

太一さんがそう言ったので、皆はデジヴァイスと紋章を出した。

俺も力が抜けているが無理矢理立ち上がって、デジヴァイスと紋章を出した。

「させるか!!」

デスクロー!!」

『あっ(なっ) (きゃ) (うわ) !!?』

俺達は、アポカリモンの触手から放たれたデビモンの必殺技の“デスクロー”で紋章を奪われてしまった。

パリンッ!!

そして、俺達の紋章は粉々に破壊された。

「ど、どうすれば……」

光子郎さんが絶望した顔をして、頭を抱えて小さい声でそう呟いた。

クソッ!!

暗黒エネルギーを使えば、完全体にも究極体にも進化出来るのに!!

光と闇の真実?

そんなの分かる訳無いじゃないか!!

「な、何を言ってるんだ、アイツは?」

するとヤマトさんが突然、アポカリモンを見ながらそう言った。

……まさか!?

「な、何だ、これは!?!」

すると太一さんが大きな声を出したので、俺達は太一さん達を見た。

其処には、体が分解されている太一さん達が居た。

俺は、自分の体を確認した。

「な!?!」

俺は自分の体を見て驚いた。

何故なら、俺の体も分解されていたからだ。

こ、このままじゃあ!!

「貴様等は0と1のデータに分解されている!!
0と1のデータの世界で、永遠を過ごすのだ!!」

ククハハハハハハ！！！」

アポカリモンは、俺達にそう言って大声を出して笑い出した。

そして俺達の体は完全に分解され、デジタルワールドから完全に消えた。

第八十六話だよ！（後書き）

次回は0と1の世界での話です

次回もお楽しみに！！

第八十七話だよ！（前書き）

今回は航がメインの話です

今回は凄く短いです

すいません

第八十七話だよ！

side 航

此処は0と1のデータの世界・・・

俺達は負けた、負けたんだ……

それも、何も出来ずに負けると言う完敗で……

……太一さん達は、存在こそしていないがこの世界に居る事は分かる。

だが、俺の近くには居ない……

遠くで後悔しているんだと思う。

俺の近くには、コロナモン・ルナモン・ウィザーモンが居る。

「……負けたな。」

俺がそう言うと、三体は無言でゆっくり頷いた。

結局、原作通りに負けてしまった……

それに、もう一人の俺は消えちゃった……

「……航、何を悩んでるんだ？」

ウィザーモンが、俺に突然聞いてきた。

……俺が悩んでいる事、それはもう一人の俺が言った“光と闇の真実”に付いて悩んでいた。

一人で悩むより、皆に相談したら解決策が見えてくるかもしれないな
いな……

「実はな……」

（説明中）

……だから俺は、“光と闇の真実”に付いて悩んでるんだ。

└

俺は、三体に“光と闇の真実”や“もう一人の俺の存在”など付いて全て話した。

暗黒エネルギーを、どうやってコントロールしていたか……

俺のもう一人の人格、もう一人の俺の事を……

俺が今、考えている“光と闇の真実”の事を……

俺は、三体に全て話した。

「皆は“光と闇の真実”に付いてどう思う？」

俺が三体に聞くと、三体は困った顔をしながら答えてくれた。

「光と闇？」

……正反対だよな。

……まるでコインの表裏みたいにさ。」

……確かに、コロナモンの言う通りだよな。

光と闇は、対極・反対・表裏の関係だ。

「光と闇は、誰にでもある物だと思うよ。

どんな人やデジモンでも、必ず心には光と闇は存在すると思うよ。」

……確かに、ルナモンの言う通りだよな。

光と闇は、人間やデジモン・その他の生き物の心の中に必ず存在している。

どんな英雄でも心に闇があり、どんな極悪人でも心に光がある……

「闇は、私達が絶対に乗り越えなければならない試練。

そして、私達が一生付き合わなければならない物。

……私はそう思う。」

……確かに、ウィザーモンの言う通りだよな。

闇は、俺達が必ず乗り越えなければならない試練……

そして、一生俺達と生きていく物……

……まさかと思うが、これが“光と闇の真実”だと言うのか？

闇は、俺達の心の中に絶対に存在する物。

どれだけ闇を偽っても、光があれば闇は必ず存在する。

何故なら、光の反対は闇だから……
コインの表裏の様な関係だから……

そして、闇を拒絶するのではなく受け入れて闇を乗り越える物。
何故なら、闇は俺達の心の中に必ず・永遠に存在するのだから……

ピカーーーン！！！！

俺が頭の中で俺なりの“光と闇の真実”を考えたら、俺の胸に“
信頼”と“運命”の紋章のマークが現れた。

……太一さん達が、紋章の意味を理解したんだな。

「行こう、皆の所へ……！！」

俺がそう言うと、三体は無言で頷いた。

俺達は、太一さん達の所に急いで向かった。

第八十七話だよ！（後書き）

次回は太一達がメインの話です

次回もお楽しみに！！

第八十八話だよ！（前書き）

久々に長くなりました！！

今回は最終決戦の前までの話です！！

後、side三人称からside航迄は“Butter-Fly
ピアノバージョン”を頭に流して読んでくださいね！！
その方が、雰囲気が出ますから！！

バイトから帰ってきて直ぐに話を考えたので、少し分かりにくい所
がありますので御了承下さい

誤字・脱字があれば教えてください！

第八十八話だよ！

side 太一

俺達はアポカリモンの技？を喰らい、分解されて0と1のデータの世界に来た。

航は、俺達から少し離れた場所に居るのを感じる。
だけど、今は航の事を気にする余裕は無い。

「何なんだよ、あの強さは！？」

俺はアポカリモンの強さを、大声を出して叫んだ。

「アイツの強さは異常だ！！」

「あんなのに、私達が勝てるわけない！！」

ヤマトと空も、アポカリモンの事で大声を出してそう言った。
そうだ、勝てる訳無い……

アイツは、今迄の敵とは違うんだ……

「こんな事、今迄無かった……」

自分のデータを分解されてしまった時の対処なんて、誰にも分かりません！！」

光子郎は、俺達に聞こえる様に大声でそう言った。
そうだ、今迄の敵にこんな力を使う奴は居なかった。
俺達は一体、どうすれば良いんだよ……

「ほんなら光子郎はんは、今までの戦いでどーやったら勝てるか……

…何時も分かってはったんでっか？」

すると、テントモンが光子郎に、否、俺達に言った。

……そうだ、今迄俺達は、どうやったら良いか・どうやったら勝てるか知らずに戦ってきた。

それでも、俺達は戦いに勝ってきた。

「そうさ、冒険は何時でも初めての事ばかり！！」

「こう言う時はこうしたらなんて、何時だって知らなかったじゃないか！！」

ガブモンとゴマモンは、テントモンの言葉に続けて言った。

そうだ……冒険は、俺達は、初めての事をしてきた！！

「そうだ、何時だって……このデジタルワールドの事は、何も知らなかった。

次から次へと、心臓が止まる様な事ばかり……」

「でも丈が居て、仲間が居て、皆で一緒に切り抜けてきたよ♪」

丈が迄の冒険を思い出しながらそう言って、ゴマモンが丈の言った後にそう言った。

デジタルワールドに初めて来た時は、心臓が止まる様な出来事がずっと続いていた。

でも、何時も仲間がずっと傍に居てくれた……

「そう……始めはこんな所、早く逃げ出したいとばかり思ってたけど……お陰で、受験勉強してるだけだったら気が付かない事を、沢山経験したよ！」

ハハハ、丈らしい発言だな……
……でも、丈の言う通りだ!!

「嫌な事も、泣きたい事も、沢山あったけど……」

ミミちゃん……

「アタシと友達になれて、良かった？」

ミミちゃんがそう言った後、パルモンがミミちゃんに聞いた。
するとミミちゃんは、パルモンの言葉に頷いた。

「……うん！」

皆と出会えて、私、強くなったと思う!!」

ミミちゃんは、俺達を見てそう言った。

そうだ、俺達も皆と出会えて、皆が皆、それぞれ成長し、強くなった!!

「タケルと会う迄は、僕、進化なんてしなくても良いと思ってた。
でも……」

「……僕もね、パタモンと会ってから戦う事も大切なんだって、分かった様な気がするよ!」

パタモン、タケル……

そうだ、戦いから逃げれば何時も絶望が待っていた。

戦う事!!誰かが傷付く事じゃないって、冒険して分かった!
だから、俺達は戦って来れたんだ!!

「空は何時でも、皆の事を考えていてくれたね。」

「ピヨモン……」

「皆もそんな空の事、何時も大好きだったよ！」

ピヨモンの言う通りだ……

空は何時も、俺達の事を一番気に掛けてくれていた……

ピコデビモンの策略の時も、空は一人で俺達の事を陰から支えてくれた。

航が記憶を失った時も、俺達が後悔していると空は俺達を励ましてくれた。……俺は、そんな空の優しさに惹かれたんだ……

……俺は言いたい、お前に……

お前に俺の気持ちを伝える為、こんな所で諦めちゃダメなんだ！！

「光子郎はん。」

光子郎はんが居てくれはったお陰で、色々勉強出来ましたわ。

まあ光子郎はん、コンピュータに向かってると他に目が行かへん様になるのが、玉に瑕ですけどな。」

「テントモン……」

「でもそれがまた、光子郎はんのええ所ですわ。」

……テントモンが話してる内容は、余り関係無いが光子郎のお陰で俺達は今まで助かった事が沢山ある。

航とヒカリが倒れた時、光子郎は一生懸命頑張って薬を探してくれた。

光子郎もまた、空とは違った形で俺達を支えてくれたんだよね……

「ヤマト……」

「……何も言わなくても良い。
分かってるよ。」

ヤマトとは、何回も冒険の途中で喧嘩したよな……
でも、そのお陰で俺は成長出来たと思う。
無闇に考え無しで突っ込むじゃなくて、考えて行動する事をヤ
マトから学んだ。

ヤマトもまた、俺達を支えてくれた……
……俺は、皆を支えていたのか？

「太一、太一は皆を何時も引っ張ってたよ!!
太一が居なかったら、きっと僕達は此処には居ないよ!!
そうだよね、皆!？」

『嗚呼^{うん}(はい)!!』

……アグモン……皆……

「ねえ太一、僕と太一が一緒に居たら、無敵だろ!？」

……へへッ!!

「当然だぜ!!」

俺はアグモンに笑って言った。

「今此処で倒れる訳にはいかない……。」

それでは、何の為にヒカリを探し続けたのか……」

「テイルモン……」

「ヒカリに出会う為、ヒカリを護る為、ずっとその日が来るのを待っていたのだから……!」

ヒカリをずっと、ずっと探し続けたんだよな……テイルモン。

そして、漸くヒカリと出会えたのに、倒れる訳にはいけないよな
!!

side 三人称

此処はお台場……

廃墟と化したお台場には、沢山の人が空に浮かんだアポカリモンの世界を見ていた。

「頑張っ……て……!」

「貴方達なら絶対に出来る……!」

「私達は、貴方達を信じてる……!」

「だから、無事に帰ってきてくれ……!」

選ばれし子供達の親達は、分解された子供達にそう言った。

だが、こう思っているのは彼らだけじゃ無い！
アメリカ・フランス・ロシア・中国……世界中の人が、選ばれし
子供達が勝つ事を・世界を救う事を・無事に帰ってくる事を願って
いた。

side 太一

「もしも、テイルモンと出会わなかったら……！」

ヒカリはそう言った。

「デジタルワールドに来なかったら……！」

丈はそう言った。

「皆と一緒に、旅をしなかったら……！」

ミミちゃんはそう言った。

「僕達は、今の僕達じゃなかった……！」

光子郎はそう言った。

「そうだ、何時だってデジモンが居てくれたから……！」

ヤマトはそう言った。

「仲間が居てくれたから……！」

タケルはそう言った。

「助け合う大切さを知ったから！」

空はそう言った。

そして俺は、皆の言葉に続けて言った。

「俺達は、自分らしくいられたんだ！」

辛い事・苦しい事・逃げ出したい事……

全部乗り越えてこれたからこそ、俺達は前に進む事が出来たんだ
！！

俺がそう思った瞬間、皆の胸から紋章が現れて輝きだした。

Side 航

俺達が太一さん達の所へ行くと、太一さん達の胸に紋章が輝いていた。

「太一さん、ヤマトさん、空さん、光子郎さん、ミミさん、丈さん、タケル君……それにヒカリちゃんにデジモンの皆。」

俺が皆の名前を呼ぶと、皆は俺を見てきた。

「この戦いの後に、大切な話があります。
……聞いてくれますか？」

……もう、秘密にしなくても大丈夫だ。

俺は……皆を信じてる。

俺の秘密を……皆に話したい。

俺が聞くと、皆は頷いてくれた。

すると、光子郎さんは俺に話し掛けてきた。

「航君、君も紋章が輝いたんですね？」

……ですが、何故紋章が勝手に輝き出したんでしょうか？」

光子郎さんは、皆の顔を見ながらそう聞いてきた。

俺が言おうとしたら、ヤマトさんが俺の代わりに光子郎さんに答えた。

「否、違う……俺の中の紋章が勝手に輝いたんじゃない！」

皆の友情が俺の中に集まって、その力で俺の紋章が輝いたんだ！」

「一人の紋章は皆の為に。」

皆の紋章は、一人の為に……！」

その通りです！

ヤマトさん、太一さん……！！

「私の中の光は、皆の為に！」

「皆の希望が、僕の希望！」

ヒカリちゃんとタケル君がそう言うのと、紋章が更に輝き、テイルモンとパタモンが光り出した。

「テイルモン超進化……！！！」

……エンジェウーモン！！！！」

「パタモン進化ー！！」

……エンジェモン！！

エンジェモン超進化ー！！！！

……ホーリーエンジェモン！！！！」

テイルモンとパタモンは、皆のヒカリと希望の紋章の力でエンジェウーモンとホーリーエンジェモンに超進化した。

「純真！」

ミミさんがそう言うと、純真の紋章とパールモンが光り出した。

「パールモン進化ー！！」

……トゲモン！！

トゲモン超進化ー！！！！

……リリモン！！！！」

パールモンは、皆の純真の紋章の力でリリモンに超進化した。

「誠実！」

丈さんがそう言うと、誠実の紋章とゴマモンが光り出した。

「ゴマモン進化ー！！」

……イツカクモン！！

イツカクモン超進化ー！！！！

……ズドモン！！！！」

ゴマモンは、皆の誠実の紋章の力でズドモンに超進化した。

「知識！」

光子郎さんがそう言うと、知識の紋章とテントモンが光り出した。

「テントモン進化ー！！」

……カブテリモン！！

カブテリモン超進化ー！！！！

……アトラーカブテリモン！！！！」

テントモンは、皆の知識の紋章の力でアトラーカブテリモンに超進化した。

「愛情！」

空さんがそう言うと、愛情の紋章とピヨモンが光り出した。

「ピヨモン進化ー！！」

……バードラモン！！

バードラモン超進化ー！！！！

……ガルダモン！！！！」

ピヨモンは、皆の愛情の紋章の力でガルダモンに超進化した。

「友情！」

ヤマトさんがそう言うと、友情の紋章とガブモンが光り出した。

「ガブモンワープ進化ー！！！！」

……………メタルガルルモン！！！！！！」

ガブモンは、皆の友情の紋章の力でメタルガルルモンに超進化した。

「勇気！」

太一さんがそう言うのと、勇気の紋章とアグモンが光り出した。

「アグモンワープ進化ー！！！！！！」

……………ウォーグレイモン！！！！！！」

アグモンは、皆の勇気の紋章でウォーグレイモンに超進化した。

「信頼、そして、運命！」

俺がそう言うのと、信頼・運命の紋章とコロナモン・ルナモンが光り始めた。

「コロナモン進化ー！！！！」

……………ファイラモン！！

ファイラモン超進化ー！！！！！！

……………フレアモン！！！！

フレアモン究極進化ー！！！！！！！！

……………アポロモン！！！！！！！！」

「ルナモン進化ー！！！！」

……………レキスモン！！

レキスモン超進化ー！！！！！！

……………クレシェモン！！！！！！

クレシェモン究極進化ー！！！！！！
………ディアナモン！！！！！！」

コロナモンとルナモンは、皆の信頼と運命の紋章の力でアポロモンとディアナモンに究極進化した。

……ありがとう……そしてさよなら……もう一人の俺……

俺は……闇とちゃんと向き合うから！！

俺はそう心に決意し、目を瞑って両手に力を集中させた。

すると、黒い暗黒エネルギーが両手に集まったのではなく、オレンジと水色の暖かい力が両手に集まった。

「これが“光と闇の真実”を俺なり導きだした答えだ！！
オーバードライブ！！！！」

俺は目を開けてそう叫んで、両手の光をデジヴァイスに全て注いだ。

「アポロモンオーバードライブ！！！！！！………アポロモンB
トモードM！！！！！！！！」

「ディアナモンオーバードライブ！！！！！！………ディアナモンB
バーストモードM！！！！！！！！」

すると、アポロモンとディアナモンの姿が変わった。

アポロモンは炎のエネルギーを体に纏っており、ディアナモンは水のエネルギーを体に纏っていた。

その姿やオーラは、ヴェノムヴァンデモンの時に見た姿、否、それ以上の神々しいオーラを放っていた。

そして俺達は、0と1のデータの世界からデジタルワールドに戻って行った。

.....

.....

.....

.....

そして無事に0と1の世界からデジタルワールドに帰ってきて、俺達の目の前にはアポカリモンが居た。

俺達は、アポカリモンに身構えた。

「お前の……思い通りにはならないぞ!!」

太一さんは、アポカリモンを睨みながらそう叫んだ。

さあ……本当のラストバトルだ!!!!

第八十八話だよ！（後書き）

次回はアポカリモンとの最終決戦！！

次回もお楽しみに！！

第八十九話だよ！（前書き）

今日は初代デジモンアドベンチャーの記念日です！！

最後の戦いなのに、話が今一しっくりこないです

無印が終わったら、修正しないといけないなあ

誤字・脱字があれば教えてください

第八十九話だよ！

Side 航

「テイルモン超進化ー！！！！」

…………エンジェウーモン！！！！」

「パタモン進化ー！！」

…………エンジェモン！！

エンジェモン超進化ー！！！！

…………ホーリーエンジェモン！！！！」

「パルモン進化ー！！」

…………トゲモン！！

トゲモン超進化ー！！！！

…………リリモン！！！！」

「ゴマモン進化ー！！」

…………イツカクモン！！

イツカクモン超進化ー！！！！

…………ズドモン！！！！」

「テントモン進化ー！！」

…………カブテリモン！！

カブテリモン超進化ー！！！！

…………アトラーカブテリモン！！！！」

「ピヨモン進化ー！！」

…………バードラモン！！！！

バードラモン超進化ー！！！！

……ガルダモン！！！！」

「ガブモンワープ進化ー！！！！！！！！」
……メタルガルルモン！！！！！！！！」

「アグモンワープ進化ー！！！！！！！！」
……ウオーグレイモン！！！！！！！！」

「コロナモン進化ー！！！！！！！！」
……ファイラモン！！！！！！！！！！
ファイラモン超進化ー！！！！！！！！！！
……フレアモン！！！！！！！！！！
フレアモン究極進化ー！！！！！！！！！！
……アポロモン！！！！！！！！！！」

「ルナモン進化ー！！！！！！！！！！」
……レキスモン！！！！！！！！！！
レキスモン超進化ー！！！！！！！！！！
……クレシェモン！！！！！！！！！！
クレシェモン究極進化ー！！！！！！！！！！
……ディアナモン！！！！！！！！！！」

「アポロモンオーバードライブー！！！！！！！！！！」
……アポロモンBM^{バーストモード}！！！！！！！！！！」

「ディアナモンオーバードライブー！！！！！！！！！！」
……ディアナモンBM^{バーストモード}！！！！！！！！！！」

……

.....

.....

.....

俺達・選ばれし子供達はデジモン達を超進化・ワープ進化・究極進化させ、0と1の世界からアポカリモンが居る世界へ帰ってきた。俺達の姿を見たアポカリモンは、驚愕の顔をしながら俺達を見ていた。

「ば、バカな、紋章無しで進化をさせるとは……!？」

アポカリモンは、驚きながらそう言った。
すると、ヤマトさんがアポカリモンに笑いながら言った。

「選ばれし子供達を、舐めてもらっちゃ困るな!!」

ヤマトさんがそう言うと、太一さんが笑って俺達を一度見てアポカリモンに目を戻した。

「そう言う事!

……行くぞ、皆ア!!」

太一さんが腕を上上げて、俺達にそう言った。

『おお!!!!』

俺達も腕を上上げて叫んだ。

丈さんはズドモンの左肩に乗り、ミミさんはリリモンと手を繋ぎ空を飛んでいて、タケル君・ヒカリちゃん・光子朗さん・空さんはホーリーエンジェモン・エンジェウーモン・アトラークブテリモン・ガルダモンの背中に乗り、俺・太一さん・ヤマトさんはアポロモン・ウォーグレイモン・メタルガルルモンに掴まってアポカリモンの所に向かった。

するとアポカリモンは、触手を俺達に向けてきた。

「死ねえ!!」

∞（無限）キャノン!!」

「ハンマースパーク!!」

ドツカアアアアアアン!!!

アポカリモンがムゲンドラモンの必殺技の“∞（無限）キャノン”で俺達に攻撃をしようとしたが、ズドモンの必殺技の“ハンマースパーク”によって触手を破壊されて、攻撃が出来なくなった。

「触手は僕達に任せてくれえ!!」

丈さん、俺達に笑いながらそう叫んできた。

「だったら私達も、リリモン!!」

「ええ!!」

ミミさんは丈さんを手伝うとリリモンに言うと、リリモンはミミさんを思いっきり上に投げた。

「ええええええ！！！！？」

ミミさんは、悲鳴をあげながら上にぶっ飛んだ。

リリモンはミミさんを投げた瞬間、手を花にしてエネルギーを溜めて触手に必殺技を放った。

「フラウカノン！！」

ドツカアアアアアン!!!!

リリモンは必殺技の“フラウカノン”で触手を破壊した後、ミミさんをキャッチした。

ミミさんがリリモンに何か文句を言っているみたいだが、遠くで話している内容は分からないが多分原作と同じ事を言っているのだろう。

すると、後ろから触手が丈さん達を攻撃しようとしていた。

「危ない！！」

俺がそう叫ぶと丈さん達は後ろを向いた
だが、触手は二人にかなり近付いていた。

「ヘブンズゲート！！」

「ホーリーアロー!!!」

ドッカアアアアアアン!!!

ホーリーエンジェモンの“ヘブンズゲート”とエンジェウーモンの“ホーリーアロー”を触手に放ち、丈さん達を攻撃しようとした触手は破壊された。

「僕とヒカリちゃんが二人を護るから!!!」

「二人は他の触手をお願いします!!!」

タケル君とヒカリちゃんは、丈さんとミミさんにそう言った。

「助かるよ!!!」

丈さんは笑顔でタケル君とヒカリちゃんに言った。

よし、これで攻撃に集中出来る!!!

俺と太一さんとヤマトさん・空さんと光子朗さんは、アポカリモンに向かった。

「それじゃあ私と光子朗君で、太一とヤマト君と航君のサポートするわ!!!」

「なので三人は、攻撃する事だけに神経を集中させてください!!!」

空さんと光子朗さんが、俺達にそう言ってくれた。

「助かります!!!」

「分かった!!」

俺とヤマトさんは、二人にそう返事をした。
するとアポカリモンは、触手を俺達に向けてきた。

「調子に乗るなア!!
ブリットハンマー!!」

アポカリモンは、ピノッキモンの必殺技の“ブリットハンマー”
を俺達に放ってきた。

「アトラーカブテリモン、空をお願い!!」

「はいでんがな!!」

ガルダモンは、空さんをアトラーカブテリモンの背中に乗せた。

「シャドーウイング!!」

ドツカアアアアアアアン!!

ガルダモンは必殺技の“シャドーウイング”を放ち、ブリットハンマーで攻撃してきていた触手を破壊した。

「ありがとう、ガルダモン!!」

空さんはガルダモンにお礼を言って、アトラーカブテリモンからガルダモンに移った。

「今度はワテの番や!!
ホーンバスター!!」

ドッカアアアアアン!!!

アトラーカブテリモンはそうアポカリモンに言って、必殺技の“
ホーンバスター”を残りの触手に放った。

「私も本気で戦おう!
サンダークラウド!!」

ウィザーモンは、必殺技の“サンダークラウド”をアポカリモン
本体に放った。

「ぐっ!?!」

アポカリモンは、ウィザーモンの“サンダークラウド”を喰らい
短く悲鳴をあげた。

「これで!!」

「お前は!!」

「最後だ!!」

俺・太一さん・ヤマトさんがそう言うのと、ウォーグレイモン・メ
タルガルルモン・アポロモンBM・ディアナモンBMは必殺技を溜
め、アポカリモンに放った。

「ガイアフォー!!!」

「コキユートスブレス!!!」

「ソルブラスター!!!」

「アロー・オブ・アルテミス!!!!」

ドツカアアアアアアアアアアン!!!!

「グワアアアアアアアアアアアアアアアア！」

アポカリモンは悲鳴をあげ、体を球体に戻した。それと同時に丈さん達も俺達の近くにやって来て、アポカリモンを見つめた。

「これでお前の負けは決まった!!」

俺がそうアポカリモンに言うど、太一さん達もアポカリモンを見ながら頷いた。

「フッフッフ、そうかな？」

「何だと!？」

アポカリモンの言葉を聞いて、太一さん、否、俺以外の皆が驚いた。

「確かに我々は滅びる……だが、ただでは滅びんぞ。貴様等を……この世界を巻き添えにしてくれる……！ 喰らえ、究極最終必殺……！」

“グランデス・ビツクバン”
「!!!!」

ドツカアアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!!!

アポカリモンは最後の最後に自爆し俺達、否、世界を消そうとした。

「自爆しやがった!？」

ヤマトさんが言った。

「僕達、これで終わりなのか!？」

丈さんが言った。

「そんなのイヤー！」

ミミさんが言った。

「終わりじゃない……！」

タケル君が言った。

「終わりなもんですか……！」

光子朗さんが言った。

「終わらせない……！」

俺は言った。

「終わってたまるか……！！！」

太一さんが言った。

「絶対に……！」

丈さんが言った。

「だって……！」

空さんが言った。

「私達には……！」

ヒカリちゃんが言った。

『明日があるから……！』

俺達・選ばれし子供達はそう言った。

すると、俺達のデジヴァイスが突然光り出した。

デジヴァイスの光は、“グランデス・ビックバン”の周りを囲い、キューブ状の結界を張った。

そして、デジヴァイスの光で出来た結界はどんどん小さくなっていき、“グランデス・ビックバン”を消した。

第八十九話だよ！（後書き）

次回は航が皆に秘密を話す話です

次回もお楽しみに！！

第九十話だよ！（前書き）

今日は初代デジアドのウィザーモンが死んだ日です

あのシーンは泣いた

格好良かったな、ウィザーモン

無印の最終話を100話で書きたかったので、予定を変更しました

すいません

誤字・脱字があれば教えてください

第九十話だよ！

side 航

『お〜い！！』

遠くから、俺達の味方になってくれたデジモン達が手を振りながら走ってきた。

……良かった、誰も死んでないみたいだ。

味方になってくれたデジモン達は、俺達の所まで来て皆と話し始めた。

「……航、本気で秘密を話すつもりなのか？
今じゃなくても、機会は幾らでもあるだろう？」

ウィザーモンが突然、俺の肩に手を置いて話し掛けてきた。

……そう言えば、ウィザーモンは相手の心の中を読めるんだっとな。

ウィザーモンの話を聞いて、コロナモンとルナモンが心配そうな顔で俺を見てきた。

「……今回話さないと、もう二度と、話す機会が無い。
……大丈夫さ、俺は皆を信じてるから。」

もう、皆に話す機会は二度と無いだろう。

もし、今回言わなければ俺は絶対に言えなくなってしまう。

俺は笑いながら三体にそう言った。

三体は、少し不安そうな顔をしながら分かってくれた。

ヒューーーーン

遠くから、メカノリモンとケンタルモンがこっちに向かってきていた。

……メカノリモンに乗っているのは多分、否、確実にゲンナイさんだろう。

話の内容は憶えてるから、別に聞かなくて良いや。

……今は、心を落ち着かせる事だけに集中だ。

口ではああ言ったが、心の中じゃ拒絶されたりするのが怖い。

……皆を信じてる。

信じているのだが、拒絶されるのが怖い。

落ち着け、航……

マイナスな事ばかりを考えるな……

皆を信じろ……

俺が信じなきゃ、何も始まらない……

信じろ……

信じるんだ!!

「行ってみようぜ!!」

俺が心を落ち着かせていると、太一さんの声が聞こえた。

……太一さん、もう少しだけ心を落ち着かせる時間をくださいよ。

俺は心の中でそう思いながら、ファイル島を目指した。

……

……

……

……

俺達は、フアイル島のはじまりの町にやって来た。

だが皆は、俺を囲う様にして立っている。

否、立ってもらっていると云った方が良いだろう。

原作では、ヒカリちゃん・タケル君・パタモン・エレキモンがデジタマを“撫で撫で”しに行くのだが、俺が皆を呼んで待ってもらってる。

「皆さん……って言っても、俺との約束を知ってるのは選ばれし子供とそのデジモンだけですな。」

一から話します。

皆にこうしてもらったのは、俺から大切な話があるからです。」

俺がそう言うと、太一さん・ヒカリちゃん・アグモン・テイルモン・コロナモン・ルナモン・ウイザーモンが心配そうな顔をした。

俺は不安じゃない……と言えば嘘になる。

心の中は、不安や拒絶されるかもしれない恐怖で一杯だ。

だけど今、俺の秘密を話さないと皆とは100%のキズナを結ぶ事は出来ないと思う。

「スウ……ハア……スウ……ハア……」

俺は深呼吸をし、心を落ち着かせた。

そして俺は、真剣な目で皆を見た。

すると皆も、真剣な目で俺を見てくれた。

……大丈夫

……信じろ

「今から、俺の秘密を全て話します。

今から言う事は、全て事実です。

黙って聞いてくださいね？

？質問は、全て話し終わったら聞きますので。」

俺がそう言うと、皆は頷いてくれた。

……さあ、全てを話そう、加藤 航の真実を……

「実は俺は……」

（真実を話し中）

……つまり俺は、一度死んだ人間で、転生して
この世界に來た転生者なんです。」

俺は全てを、皆に嘘・偽りなく話した。

俺は一度、死んだ存在だと言う事を……

俺は、神様の力のお陰でこの世界に転生した事を……

この世界での出来事は、俺の居た世界でアニメになっていた事を

……

原作本来の未来を……

コロナモンとルナモンの存在を……

俺は全て話した……

『だから？』

・

・

・

・

「えっ？」

き、きつと聞き間違いだ!!

そうだ、きつとそうに違い無い!!

こんな話をして、こんな化け物みたいな人間が居るのに、返事が

『だから？』だけな訳が無い！！

こ、怖いけど、聞き直さないと……

「お、俺は一度死んだ人間ですよ？

転生者ですよ？

化け物ですよ？

なのに、何で誰も驚かないんですか？

何で拒絶しないんですか？」

俺は驚きながらも、皆を顔を見ながらそう聞いた。
すると突然、ヤマトさんが笑って俺の前に来た。

「プハハハ！！

何で驚かないのかって？

何で拒絶しないのかって？

……何故なら、航、お前は俺達の仲間だからだよ。」

ヤマトさんはそう言って、俺の頭を撫でてきた。

「そうよ、航君は私達の大切な仲間よ。

少し私達と違うだけで、拒絶なんかはしないわ。」

空さんがそう言うと、他の皆は頷いてくれた。

「あ、ありがとうございます。」

俺は涙を堪えながら、皆にそう言った。

「皆サン、記念写真ヲ撮リマセンカ？」

アンドロモンが、俺が皆にお礼を言い終わった後、俺達全員に提案してきた。

……アンドロモン、これだけの人数が入るのか？

そう心の中で思いながら頑張ってカメラに入る様に並んだ。

ヒカリちゃんは、原作と一緒にデジタマを持っていた。

「ソレデハ撮リマス。」

「あっ!？」

アンドロモンがそう言った瞬間、ヒカリちゃんが持っていたデジタマが孵化した。

カシャンカシャン!!

撮影された音が聞こえた。

第九十話だよ！（後書き）

次回こそ、現実世界に帰らなければならぬ話を聞く話です

次回もお楽しみに！！

第九十一話だよ！（前書き）

お久しぶりです！

待ってくれてくれた方々、ホントにすいませんでした（待っててくれた方が居るかは分かりませんが）

夏休みの宿題が半分終わったので、書きました

そうそう、今更ですが俺の小説の設定では

現実世界の一分Ⅱデジタルワールドの一日

なので御了承下さい、今更ですが・・・

誤字・脱字があれば教えてください

第九十一話だよ！

side 航

俺達は写真を撮った後、ガブモンがガルルモンに進化した話で出てきた湖に來ている。

あの後、仲間のデジモン達と別れた。

オーガモンは、レオモンと互角、否、それ以上の力を手に入れる為に旅に出た。

パルモンとの会話が、時代劇に出てくる1シーンみたいだったから面白かった（笑）

レオモンは、元通りになり始めたファイル島を回って困ってるデジモンを助けるらしい。

ピッコロモンは、暫くの間はムゲンマウンテンの頂上に住むらしいが、サーバー大陸が復活したらサーバー大陸に戻り家？を建て直すらしい。

ユニモンは、ピッコロモンの付き人的なポジションらしい。

メラモンは、ピヨコモンの村に戻って村の復興を手伝うらしい。

ユキダルモンは、太一さんとヤマトさんがデビモンに流された地域に戻るらしい。

ゲコモン達とオタマモン達は、この湖の近辺で住むらしい。

メカノリモン（ゲンナイさんが乗ってる）とケンタルモン・ウィザーモンは、俺達と同じ場所に居る。

「此処で私達、初めてデジタルワールドで一夜を過ごしたのよね。」

空さんが懐かしみながら、俺達に聞こえる様に言った。

「そうです。

ガブモンがガルルモンに進化して、シードラモンと戦った場所です。

」
光子朗さんが、あの日居なかった俺・ヒカリちゃん・コロナモン・ルナモン・テイルモン・ウィザーモンに説明してくれた。

原作を知っているとは言え、実際に過ごすのは本当に大変だった。俺も（記憶を無くしていた頃だが）デジタルワールドで過ごして、改めてデジタルワールドで過ごす大変さが分かった。

「色々あったけどさ、楽しかったね！
帰ったら僕達、英雄かな？」

『・・・・』

丈さんが立ち上がった俺達にそう言うが、俺達は空気が重くなつて何も言えなかった。

「丈オ」

ゴマモンがこの気まずい空気の中、丈さんに注意した。

「で、でも、また帰ってくれば！」

『・・・・』

丈さんは必死に空気を変えようとしたが、更に空気を重くした。

「丈オ」

ゴマモンがまた気まずい空気の中、丈さんに注意した。

「そっか、帰ってきててもダメなんだ。

僕達の世界とデジタルワールドの時間の進みは違うから、生きてまた会えるかどうか分からないんだ。

……ごめん」

丈さんは俺達に反省した声で謝ってきた。

するとヤマトさんが突然、手を枕にして仰向けに寝転がった。

「夏休みはまだまだ残ってたよな？

俺さ、夏休みの間はコッチの世界で過ごそうと思うんだ。」

ヤマトさんがそう言うと、皆の目が期待に満ちた目になった。

「お兄ちゃんが残るなら、僕も残るよ！」

「わ、私も！」

「ぼ、僕もです！」

「私もよ！」

「ぼ、僕だって！」

「私も！」

良いでしょ、お兄ちゃん？」

「ん？」

……嗚呼！

航、お前もだろ？」

上からタケル君・ミミさん・光子朗さん・空さん・丈さん・ヒカリちゃん・太一さんの順番だ。

太一さんは俺に聞くと、皆は俺を見てきた。

「そうですね。」

俺は原作を知ってるが、笑顔で太一さんに言った。
既にこの世界は原作からかけ離れた世界。
原作通りに進むとは限らない。

だから、俺は原作と違う事を願って笑顔で応えた。

「じゃあデジタルワールドで過ごせる時間は……僕達の世界の一分がデジタルワールドで一日と考えて、三十日だから……」

光子朗さんが暗算で、この世界に居られる日数を計算し始めた。
……普通は無理じゃね、暗算で計算するのは？

「暗算なら僕に任せてくれ！
えっと……」

居たよ、普通じゃない人！
暗算でこれだけの計算が出来るんだから、中学の入試勉強しなくても良くね？

そう思うのは俺だけなのだろうか？

「ざっと110年!!」

否、それだけこの世界に居たら俺達死んじやいますよ。
でも、長くこの世界に居られる事は分かった。

「そんなにあるのか!?!」

ヤマトさんは体を起こして、驚きながら聞いた。

「それだけあれば、また新しい旅が出来るわね!?!」

空さんが声の高さを上げて、皆を見てそう言った。

「嗚呼!

さあ行こうぜ、新しい冒険だ!?!」

太一さんは立ち上がって、腕を上げてそう言った。

『おお!?!』

俺達も腕を上げて、そう叫んだ。

「……ん?

何だろう、あれ?」

アグモンが太陽を見ながら、俺達に聞いてきた。

俺達が見た太陽は、皆既日食の様に太陽に影が出来ていた。

……まさか、違うよな?

「お主達に言わねばならん事がある。」

メカノリモンに乗っていたゲンナイさんが、俺達にそう言ってきた。

「言う事?

良い話？
悪い話？」

ミミさんは、ゲンナイさんに不安そうな顔をしながら聞いた。
するとゲンナイさんは、暗い顔をした。

「多分……悪い話じゃ。」

『ええ！？』

ゲンナイさんの答えを聞いて、俺以外の皆が声を出して驚いた。

「まず初めに、お主達とデジタルワールドの時間の進みが一緒になった。」

「そ、それでも、俺達の夏休みはまだ大分残ってるんだ。
それ位なら大丈夫だよ。」

ヤマトさんは、ゲンナイさんの言葉を聞いてそう応えた。
だけど、ゲンナイさんの顔を暗いままだった。

「あの日食は、お主達の世界とデジタルワールドを結ぶゲートなの
じゃ。」

お主達は、このゲートを使って帰らねばならん。」

「つ、次のゲートが開いた時にでも帰るさ。」

太一さんは、動揺しながらゲンナイさんに言った
……原作通りなのか、やっぱり。

俺は暗い顔をした。

「航……」

ウィザーモンが俺の肩に手を置いてきたが、俺は顔を上げない、否、上げれない。

「次のゲートが開くのは何時なのか、ワシ等でも分からのじゃ。何年、否、何十年、否下手した何百年後かもしれないじゃ。」

「それでも残ると言ったら!？」

ヤマトさんは最後の最後迄諦めずにゲンナイさんに聞いた。

「この世界がお主等を汚物として消去するじやろう。」

『……』

ゲンナイさんの言葉を聞いて、皆も顔を下げた。

「……ゲートが閉じる迄一時間ある。」

それ迄に、ワシとケンタルモンが電車を直しておく。

……別れの挨拶をしてきなさい。」

ゲンナイさんはそう言うのと、ケンタルモンと一緒に路面電車がある場所に向かった。

俺達は暫く動けなかったが、一人ずつ、別々の場所に向かった。

俺は、コロナモン・ルナモン・ウィザーモンと一緒に近くの小川に向かった。

第九十一話だよ！（後書き）

次回は遂に無印の最終回！！

感動の話にさせたいなあ・・・

頑張ります！！

今週中には、投稿出来ると思うので

無印最終回、お楽しみに！！

無印最終回だよ！（前書き）

遂に無印最終回！！

原作通り十航の話を入れた話になりました

頑張って感動出来る話にしました！

感動してもらえると、頑張った甲斐があります

パルモンが転けた時に、頭の中で“Butter-Fly”サビを流してくださいね

さあ無印最終回、楽しんでください！！

無印最終回だよ！

side 空

私とピヨモンは、湖の近くの木の枝の上に乗っている。

ゲンナイさんに言われて別れの挨拶をしようと思ったけど、何を話したら良いのか全然頭に浮かんでこない……

只でさえ、時間が限られてるって言うのに……

「…………向こうに帰ったら、お母さんによろしくって言うておいてね。」

ピヨモンが、何時もと違って元気の無い声で私にそう言ってきた。

……私はピヨモンのお陰で、お母さんと誤解が解けた。
ちゃんとお礼を言わないと……

「ピヨモン、私ね、ピヨモンのお陰でお母さんと誤解が解けたの。」

私がそう言うと、ピヨモンは驚いた顔をした。

「ほ、ホント？」

私、空に甘えっぱなしだったから、迷惑を掛けてたって思ってた。」

ピヨモン……

私は目に涙を溜めて、ピヨモンを優しく抱き締めた。

「そんな事ないよ。」

ピヨモンは、私にとって大切なパートナーよ。」

「空……………」

私とピヨモンは、目に涙を溜めて抱き合った。

side 丈

僕とゴマモンは、湖の近くに座ってる。
な、何か言わないと……

「い、色々あったけどさ、本当に楽しかったよ。
ありがとう、ゴマモン。」

「……どういたしまして。」

ゴマモンは笑って僕に言ってくれた。

僕は右手をゴマモンの前に出した。

ゴマモンは、僕の右手を見て？マークを頭に浮かべていた。

「握手だ、握手をしよう、ゴマモン。」

僕がそう言うと、ゴマモンは頷いて右前足を自分の体で拭いて、
僕の右手を掴んできた。

「あっ!？」

やっぱりそれって手だったんだ……」

僕がそう言うとゴマモンは怒った顔をしたが、直ぐに笑顔になった。

『アハハハハ』

僕とゴマモンは握手をしながら声を出して笑った。

Side 光子朗

僕とテントモンは、路面電車の中で帰る準備をしています。
な、何か話し掛けないと……

「テントモン……」

「光子朗はん……」

テントモンは、今にも泣きそうな声で僕の名前を言ってきた。
そ、そんな声を出されると、折角堪えていた涙が出てきそうです。
でも、お礼を言わないと……

「今迄、お世話になりました。」

「アァァ!!」

テントモンは僕の言葉を聞いて、床に倒れた。

「て、テントモン!？」

僕は直ぐにテントモンを椅子に座らせました。

「光子朗はんは、最後の最後迄他人行儀なんですな。」

……そやけど、何時かは他人行儀じゃなくなりますやろ。」

「僕もそうになったら・・・」

僕は涙を流してテントモンを抱き締めた。

テントモンも、泣きながら僕を抱き締め返してくれた。

sideタケル

「うわああああん！！！」

「なかないで、たけるう！！！」

ぼくとぼたもんは、みずうみのちかくのはなばただでおおごえをだしてないてる。

だって、おわかれなんてさびしいから！

「だって！！」

だってえ！！」

「ぼくたちのせかいとたけるたちのせかいのじかんのながれがいつしよになったから、いつかまたかならずあえるよお！！！」

……パタモン……

「ホント？」

僕は泣くのを止めて目に涙を溜めて、隣に居るパタモンに聞いた。

するとパタモンも、泣くのを止めて目に涙を溜めて僕を見てきた。

「デビモンの時だって、また会えたでしょ？」

パタモンがデビモンの時の事を言ってきた。

あの時はエンジェモンが『何時かまた会える』って言ってくれたから……

「あの時はまた会えるって信じてたから……」

「じゃあ今回もまた会えるって信じてよ!!」

僕もタケルとまた会える事を信じるからさ!!」

パタモン……

そうだね、信じていたら必ずまた会えるよね!

「約束だよ、必ず会おうね!!」

「うん!!」

僕達は笑って握手して約束した。

side ヤマト

俺とガブモンは、湖の近くの丘の上に座っている。
だが、俺達はずっと無言だ。

「……ヤマト？」

ガブモンは、何時もの元気のある声じゃなく、元気の無い声で俺に話し掛けてきた。

俺は視線を変えずにガブモンに聞いた。

「何だ？」

「最後にもう一度聴かせてほしいんだ……ヤマトのハーモニカの音色を……」

ガブモン……

お前は俺のハーモニカの音色が好きだったよな。

「分かったよ。」

俺はそう言ってポケットからハーモニカを取出し、冒険してる時に吹いていた曲を吹いた。

side 太一



遠くから、ヤマトのハーモニカの音色が聴こえてきた。

「たく、ヤマトの奴は……」

俺はそう言うと、目から涙が出てきた。

「どうしたの、太一？」

少し離れた場所から、アグモンが聞いてきた。

「な、何でもないよ！」

俺は涙を手で拭いて、アグモンの所に向かった。

「此処だよ、太一？」

僕が“ベビーフレイム”で、薪に火を付けた場所は。」

アグモンがあの日を思い出しながら、俺に聞いてきた。

そうだよな、火をどうやって起こそうかって考えてた時にアグモンが来て、薪に“ベビーフレイム”で火を付けたんだよね……

「そうだな。」

そしてその薪の所為で、シードラモンを怒らせたんだ。」

俺はアグモンに抱き付きながらそう言った。

するとアグモンは、顔を傾けた。

「あれ？」

それって僕の所為だっけ？」

……待てよ、あの時、シードラモンを怒らせた理由って確か……

「違うわ。」

俺がシードラモンの尻尾を薪の中に入れて、それで怒らせたんだ。」

俺は笑いながらアグモンにそう言った。

「もう太一く！」

アグモンは俺に起こりながらも、俺と一緒に笑ってくれた。

S i d e ヒカリ

私はテイルモンは、湖の近くの林に来ている。

「これをあげる。」

私は首に掛けていた笛を、テイルモンの首に掛けてあげた。

「い、良いのか、ヒカリ？」

テイルモンが不安そうに私に聞いてきた。

「うん！」

凄く似合ってるよ。」

私は笑顔でテイルモンにそう言うと、テイルモンは頬を赤くした。

「ありがとう。」

それじゃあ、ヒカリ。」

「うん、またね。」

私がそう言うと、テイルモンは不思議そうな顔をした。

「また？」

「そう、また。」

私がそう言うと、テイルモンは理解してくれた。

「ええ、また。」

テイルモンがそう言ってくれたので、私は笑顔になった。

side 航

俺とコロナモン・ルナモン・ウィザーモンは、湖の近くに流れる小川に来た。

俺は小川の前に座ると、他の皆も俺の隣に座った。

「……ウィザーモン、お前はこれからどうするんだ？」

原作では此処には居ないデジモン・ウィザーモンに聞いた。

「私か？」

「……私はゲンナイさんと一緒に行く事にしたよ。」

ウィザーモンは小川をずっと見たまま、俺にそう応えてくれた。
ゲンナイさんと一緒に行くなら、取り敢えず安心だな。

俺は上を向いて太陽を見た。

タイムリミットは、既に半分を切っていた。
……ちゃんと伝えないと……

「コロナモン・ルナモン、こんな俺に今迄付いて来てくれてありがとうな。」

俺は何時も、お前達を危険な目に合わせてしまった。
ホントにごめん。」

俺は、コロナモンとルナモンを交互に見て言った。

「……俺こそ、航をちゃんと護ってやれなくてごめんな。
それに、俺は航が相棒で本当に良かったと思ってるぜ。」

コロナモンは、笑顔で俺にそう言ってくれた。

コロナモン……

「私も、航君を危険な目に合わせてごめんね。
私もコロナモンと一緒に、航君が相棒で本当に良かったって思ってるよ。」

ルナモンは、目に涙を溜めて言ってくれた。

ルナモン……

「……ウィザーモン、お前は俺をずっと心配してくれた。
お前のお陰で、俺は何回救われただろうか？
……本当に、ありがとうな。」

俺は、目に涙を溜めてウィザーモンに言った。

「航……もし航が居なければ、私は此処には存在しない。
私は命を救われただけじゃなくて、他にも大切な事を教えてもらっ
たよ。」

こちらこそ、ありがとう。」

ウィザーモンはそう言い終わると、帽子で顔を隠した。

ウィザーモン……………

「……………なかなかいつてきめたのに、みんながそういうから、なみだ
がでてきちゃったよ。」

おれはそういつて、みんなをだきしめた。

みんなも、なきながらおれをだきしめてくれた。

「ありがとう、ころなもん・るなもん・ういざーもん。」

『ありがとう、わたる（くん）』

side ミミ

「パルモン！！」

パルモン！！」

私はパルモンの名前を叫びながら、林の中を歩いている。
ゲンナイさんの話を聞いた後、パルモンが何処かに行っちゃった

……

私は上を向いて太陽を見た。

私達が此処に居られる時間は、もう余り無いのに……

「ミミ、どうしたゲコか？」

私は話し掛けられたので後ろを見た。

そこには、二体のゲコモン達が居た。

……ゲコモン達なら、パルモンの居場所を知ってるかも！

「ねえ、この辺りでパルモンを見なかった？」

私が二体に聞くと、二体は困った顔をした。

「……見てないゲコ。」

「……そう。」

私はゲコモンの答えを聞いて、少し落ち込んだ。

「パルモン！！」

「パルモーン！！！！」

私はパルモンの名前を、さっきより大きい声を出してまた歩きだした。

side 三人称

此処は路面電車がある小島・・・

其処には、パルモン以外の全員が既に集まっていた。

「別れの挨拶は済んだか？」

コッチの準備は出来たぞ。」

「それが……」

「うわああああああああん！！！！！」

パルモンのバカバカバカア！！！！」

ゲンナイが選ばれし子供達に聞くと、空が意味有りげな顔でミミを見ると、ミミが大声を出して泣き出した。

「どうしたんじゃ、一体？」

ゲンナイは、ミミが泣いている理由を皆に聞いた。

「パルモンが居なくなっちゃったんだ。」

アグモンが不安そうな顔をしながら、ゲンナイにミミが泣いている理由を言った。

「もう少しだけ、もう少しだけ時間が欲しいんです！」

航はゲンナイにそう言うが、ゲンナイは困った顔をしながら太陽を見た。

「じゃが、ゲートは待ってくれんよ。」

ゲンナイは、皆にそう言った。

場所は変わり、湖の近くの林の中・・・

其処には、座り込んで泣いているパルモンの姿が在った。

「う、うう、ミミ……」

「あつ、こんな所に居たゲコ!!
ミミが捜してたゲコよ!」

するとパルモンの後ろから二体のゲコモン達が現れ、ミミが捜していた事をパルモンに教えた。

「知ってる……けど、会いたくない。」

パルモンはゲコモン達の顔を見ずにそう言った。

「ど、どうしてゲコか?」

ゲコモンは、パルモンがミミに会いたくない理由を聞いた。

「ど、どうしてって、会ったら悲しくなるから……会いたくないの。」

「ホントにそれで良いゲコか?」

「後悔しないゲコか？」

パルモンの言葉を聞いたゲコモン達は、心配そうにパルモンに問い掛けた。

場所は戻り、路面電車がある小島・・・

「……時間じゃ。」

「うわあああああああん！！！！！」

ゲンナイは時間切れを告げると、ミミはまた大きな声を出して泣き出した。

「さあ、速く電車に乗るんじゃ。」

ゲンナイに促され、九人の選ばれし子供は路面電車の中に乗った。そして、デジモン達が居る方の窓を開けた。

すると、路面電車の向かう先がお台場になった。

「皆、元気だな……」

「太一達こそ、元気でね……」

太一が代表してデジモン達に言うと、アグモンが代表して選ばれし子供達に言った。

ピーーーーーッ!!!

ヒカリから貰った笛をテイルモンが吹くと、路面電車が動きだした。

『さよなら、さよならあ!!!』

ミミ以外の選ばれし子供達は、窓から顔を出して手を振りながらデジモン達に言った。

ミミは、パルモンが来なかった事で手で顔を隠しながら泣いていた。

ペタペタペタ（ry

すると外から、誰かが走っている音がした。

「!？」

「ミミちゃん!!!」

空はそれに気付き、ミミに伝えた。

「うん!!!」

ミミもそれに気付き、窓から顔を出して走っている人物を見た。走っていたのは、先程迄姿を見せなかったパルモンだった。

パルモンは、泣きながら手を振って走っていた。

「ミミ、ミミイ！！！」

パルモンは泣きながらミミの名前を叫んでいた。

「パルモン！！！」

ミミはパルモンに手を振って合図をした。

「ミミ、ごめんなさい！！！」

パルモンは先程の事を泣きながら謝った。

「良いの、パルモン！！」

さよなら！！！」

ミミはパルモンに別れの言葉を言った。

「ミミイ、あっ！？」

するとパルモンは躓き転けてしまった。

それと同時に、ミミが被っていたテンガロンハットが電車の窓の宙を舞った。

『さよならあ！！さよならあ！！』

すると、他のデジモン達も走りながら手を振って、選ばれし子供達に『さよなら』を言い続けていた。

『さよならあ!! さよならあ!!』

選ばれし子供達も、電車の窓から手を出して手を振りながら『さよなら』を言い続けた。

するとデジモン達は走る道が無くなり、選ばれし子供達を乗せた電車はゲートへと入っていった。

ファイル島にある全ての踏み切りが、選ばれし子供達が乗った電車がゲートに入る迄鳴り続けた。

それを見たデジモン達は、選ばれし子供達が帰った事を悟った。

選ばれし子供達とそのデジモン達は何時の日か、再会する日がきつと在るだろう。

何故なら、ゲートはずっと閉じたままでも無ければ、選ばれし子供達とそのデジモン達はまた会える事を信じているから……

そしてこの別れは終わりでも無ければ始まりでも無い。

“ また、何時か…… ”

そして長くて短かい選ばれし子供達の冒険を、もしかしたら貴方も体験するかもしれません。

無
印

E
N
D

無印最終回だよ！（後書き）

長い間応援してくれてありがとうございました！！・・・と言うと小説が完結したみたいですが、まだ完結はしてませんからね（笑）

その話は置いというて、まあ執筆を始めたのは今から約二カ月前ですね・・・

二カ月でなんと、100話（関係ない話も含まれますが）を投稿しました！！

無事に無印を完結出来たのも、100話を投稿出来たのも、応援してくれた皆さんのお陰です！

本当に長い間、応援してくれてありがとうございました！！

さて、今から午後六時迄のPVとユニークの総合を発表したいと思います

俺も先程確認しましたが、凄い数になってました！！

発表します！！

PV↓707571

ユニーク↓71129

何度も言いましたが、ありがとうございました！！

さて、今度から一話から修正したいと思います

最初の方は結構、誤字や脱字・変な所が多々ありましたので・・・

修正が終わり次第、予告していた通り“ぼくらのウォーゲーム”を執筆していきます

最後にもう一度、今まで応援してくださいましてありがとうございます
ました!!

これからも応援、よろしくお願いします!!

ぼくらのウォーゲームだよ! 1 (前書き)

お久しぶりです、皆さん!

久しぶりに書いたので、少し不安な部分は在りますが……

ぼくらのウォーゲームを読む時の注意点!

航は殆ど活躍しません、光子朗と同じでサポートに回ります。

原作の内容と余り変わりません、多少オリジナルの話を入れますが……

其れでも良い方どうぞ!

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 1

side 太一

俺とヒカリが初めてコロモンと出会って早四年、俺達がデジタルワールドと現実世界を救って早半年が経った。

今は西暦2000年の春で、俺が通っている学校は春休みの真っ最中なんだ。

だけど俺は今、椅子に座ってパソコンと睨めっこ中だ。

「そ、ら、へ、こ、な、い、だ、は、わ、る、か、つ、た。
き、げ、ん、な、お、せ、よ。
や、が、み、た、い、ち。」

俺は空に謝罪のメールを打っている。
何故なら……まあ色々遭ったからだ。

……ん？

“太一” って言う字が違うじゃねえかよ……

カチッ！

カチッ！

カチッ！

「……ふうう」

俺は“太一”と言う字をちゃんと“太一”に変換して、息を吐き出して椅子に凭れた。

「あつ、メール書いてる。」

「うえ!？」

カチッ!

すると突然、後ろから誰かが俺のメールを見てそう言ってきたので、俺は間違えて“太一”の後ろにハートマークを押してしまった。後ろを見ると、少しお洒落をした俺の妹の八神 ヒカリが立っていた。

……って!

「か、勝手に見んなよ!

……あれ、お前、何処か行くの?」

俺は手でパソコンの画面を隠してヒカリに文句を言って、お洒落していたので俺はヒカリに何処かへ行くのかと聞いた。

「お友達のお誕生日会。
そしてこれはプレゼント。」

するとヒカリは俺の質問に答えて、綺麗に包装されたプレゼントを俺に見せてきた。

……ふうん……

「呉れ！」

「ダメ」

「呉れ！」

「ダメ」

「呉れ！」

「ダメ！」

俺はヒカリのプレゼントを取ろうと腕を動かしたが、ヒカリは俺の腕を躲して其れを拒否した。

「ケェチ」

俺は諦めて両手を頭の後ろに回して椅子に凭れると、ヒカリが俺の隣にやって来てマウスを動かし始めた。

「メールを出すなら此処をクリック♪」

カチッ！

ヒカリは俺にそう言って、送信ボタンを勝手にクリックして扉に走って行った。

……な！？

「お、おい！？
勝手に送んなよ！」

俺は扉に走って行ったヒカリに文句を言うと、ヒカリはヒョッコリ扉から出てきた。

「誰に送ったの？」

「誰でも良いだろ！」

ヒカリはメールを誰に送ったのかを聞いてきたので、俺は少し怒りながらヒカリにそう答えた。

「ってか、メールを送ったのはお前だろ！！」

「……折角教えてあげたのに……」

ヒカリは不機嫌な顔をして俺にそう言って、友達の日会に向かう為に玄関に行った。

俺でもメールの送り方知ってるよ！

「あら、もう行くの？」

すると玄関から、買い物に行っていた母さんが帰ってきたらしく、友達の日会に行くヒカリに聞いていた。

そして少しした後、ヒカリは友達の家に行った。

俺はパソコンの画面を見ると、其処には「メールの受信は拒否されました」と表示されていた。

「メールの受信は拒否？」

何だよ空の奴、俺からのメールは受け取れねえのか……あ、あああ、
アアアア!?!?」

俺はメールの受信が拒否された事に苛々して、椅子をガタガタさせながら空に文句を言っていたら、椅子がバランスを崩して俺は倒れてしまった。

……地味にイッテェな、これ……

side 航

俺は今、俺にとって大切な仲間の一である泉 光子朗さんの家に遊びに来ていて、光子朗さんの部屋で座布団に座っている。

まあ遊びに来てるって言っても、知りたがり屋な光子朗さんに俺が転生する前の世界の事を質問されに來たって言った方が正しいのかもしれないが……

「……ん？」

何だろう、これ？」

するとパソコンを触っていた光子朗さんが突然、インターネットで何かを見つけたらしい。

俺は少し嫌な予感を肌で感じながらも、光子朗さんの隣に移動してパソコンの画面を見た。

すると光子朗さんがデータを解析して、画面に何かの卵が現れた。

「で、デジモン……?」

光子朗さんは、パソコンの画面に映し出された卵・デジタマを見

て驚いた顔をしながらそう呟いた。

……マジかよ……

ピキィ!!

すると突然、デジタマに罅が入ってデジタマが孵った。

デジタマからは紫色のクラゲの様なデジモンが孵り、デジモンが孵った瞬間メールが届いた。

そのメールには「Hello!」と書かれていた。

俺と光子朗さんは直ぐに荷物を纏めて、急いで玄関に向かって靴を履いて、全速力で太一さんが居るマンション（まあ俺も住んでいるが……）に向かった。

side 太一

俺はリビングに移動して、取り敢えずキッチンに在る冷蔵庫の扉を開けた。

……何にもねえじゃんか……

「ねえ、何か無いの？」

「ん？」

俺は机の上を買ってきた食材を並べる母さんに、少し不機嫌な顔をして母さんに聞いた。

……はあ、ヒカリの奴はきつと今頃……

「はああ、ヒカリの奴は今頃友達の日会でケーキか……」

「ケーキ位私が焼いてあげるわよ。」

俺が小さい声で呟くと、俺の呟きを聞いた母さんが俺にそう言うてきた。

「へええ」

「ホントだって。」

卵出しといて」

俺は疑った声でそう言うと、母さんは声を少し強くして俺にそう言っって卵を出す様頼んできた。

ピンポーン！

ピンポーン！

するとインターホンが鳴ったので、俺は右手で卵を持ちながら玄関に行った。

ガタンッ！！

「はあはあはあはあ」

すると扉は勢い良く開けられて、其処には肩で息をしている光子朗と航が立っていた。

「よう光子朗、航。
上がれよ。」

俺は何時も通りの感じで二人にそう言うのと、二人は真剣な顔をして俺を見てきた。

「た、卵が！」

「あ？」

「「卵が孵ったんです！！」」

二人は声を揃えてそう言ってきたので、俺は右手に持っている卵に視線を移した。

「「ち、違う！」

デジモンの卵です！」」

二人は声をまた揃えて、デジモンの卵が孵った事を言ってきた。仲が良いな、コイツ等……

「あら、光子朗君、航君、いらっしやい。」

「「ど、どうも。」」

すると俺の後ろから母さんが二人にそう言ったので、二人は頭を下げて母さんに挨拶をした。

.....

.....

.....

.....

「何だコイツ、クラゲみたいだな。」

俺は光子朗のパソコンの画面に映し出されたクラゲの様なデジモンを見て、素直な感想を光子朗に言った。

俺達はあの後、場所を移動して俺とヒカリの部屋にやって来た。そして母さんから貰った棒アイス（ソーダ味）を食べながら今、デジモンの事を話している。

「今迄見た事の無い新種のデジモンでしょ？」

すると俺の隣で立っている本日二本目になる棒アイス（ソーダ味）を食べている航が、俺の顔を見ながらそう言ってきた。

……未だ春だったのに、コイツはアイスが好きなんだな。

そんなにアイスを食べたら、絶対に腹を壊すぞ。

俺はそう思いながらデジモンを見た。

「結構可愛いじゃん。」

コイツがどうしたんだ？」

「コンピュータのバグが彼方此方から寄り集まって卵になったみたいですよ。」

「何でそんな事が分かるんだよ？」

幾ら光子朗がパソコンの分野が得意とはいえ、卵が出来た原因を分かんと思うか、小学四年、否、小学五年が？

「ロスに居る僕のメール仲間が、卵の殻のデータ構造を解析したんです。」

ソイツは未だ小学生だけど、大学にも席を置いてるんです。」

俺は光子朗の話を聞いた瞬間、何とも言えない気持ちになった。

航は光子朗の話を聞いて、苦笑いしながら本日三本目の棒アイス（ソーダ味）を食べていた。

……絶対に腹を壊すぞ、お前。

「俺も小学生だけど、小学校にしか通ってないぞ。」

俺は少し妬んだ感じに光子朗に言うと、デジモンが突然姿を変えた。

「「「あっ!?!?」」」

俺達は声を揃えて、デジモンが姿を変えた事を驚いた。

「進化しやがった。」

俺がデジモンが進化した事を声に出して言うと、光子朗のパソコンにメールが一通届いた。

「これ……クラゲからのメールですよ!」

光子朗は俺と航にそう言ってメールを開けると、メールには「オナカスイタ」と書かれていた。

「アア、腹減った?」

俺はメールの内容を読んで、呆れた声でメールの内容を言った。
するとクラゲのデジモンは、データを急に食べ始めた。

「コイツ……データを食べて大きくなるんですよ。
……凄い食欲だ。」

今は未だ幼年期だけど、このまま進化を続けたらネットワーク上のあちこちのデータを食い尽くしちゃいますよ。」

光子朗がクラゲの事を、簡単に仮説を立てて俺達に説明してくれた。

「データが食われると、一体どうなるんだ?」

光子朗の仮説で分からない事が在ったので、俺は頭に?マークを浮かべながら光子朗に聞いた。

「あらゆるコンピューターが暴走しますよ、太一さん!」

すると航が真剣な顔をして、俺の質問に簡単に答えてくれた。
……って、

「マジかよ!?!」

俺は少し反応が遅れて、大きな声を出して驚いた。

side 三人称

此処は太一達のマンションの近くに在るコンビニ・・・

「いらっしゃいませー。」

コンビニの店員は、コンビニに入って来たお客に挨拶をした。

そしてそのお客は品物の一つ取って、カウンターに置いて財布を開けた。

店員は其れをバーコードにスキャンして、品物を袋に入れようとした。

「125円ですー。」

えっ、1、10、100、1000、万、10万……ひゃ、100万125円です。」

チャリーン！

余りの金額に店員も客も驚き、客は財布から取り出していたお金を床に落とした。

・ 場所は変わって此処は太一達のマンションの近くに在るスーパー・

スーパーの鮮魚エリアに、一人の主婦が買い物に来ていた。
主婦はラップに包まれた鰺のバーコードを見た。

「……100万円……」

主婦は鰺を元の場所に戻し、ヒラメを手にとってバーコードを見た。

「……100万円……」

しかしどの商品も、バーコードには“100万円”と表示されていた。

スーパーのレジはコンピューターが暴走して、パニックになっていた。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 1（後書き）

次回もぼくらのウォーゲームです！

バイトが無い日は出来るだけ更新したいですが、バイトが在れば更新が出来ないで……

次回もお楽しみに！

ぼくらのウォーゲームだよ！ 2（前書き）

速く出来たので投稿してきますね！

まあ本当の理由は、バイトが忙しくて更新するのを忘れてたら嫌なので……

誤字・脱字・変な場所が在れば教えて下さいね！

ぼくらのウォーゲームだよ！ 2

side 太一

俺達は急いで荷物を纏めて、立ち上がって部屋を移ろうとした。

コンコン！

すると外から扉を叩く音が聞こえて来たが、俺は気にせずに扉を勢い良く開けた。

扉の向こうには母さんが麦茶を持って立っていて、俺を器用に避けてくれた。

「どうしたの、そんなに慌てて？」

「父さんのパソコンを使うよ！」

母さんに質問にされたが、俺は母さんに顔を合わせずに走って父さんのパソコンが在る部屋に向かいながら、母さんに大声を出して答えた。

side 航

俺と光子朗さんは太一さんが部屋を出た後、俺達も急いで荷物を持って太一さんの後を追いつけた。

「じゃ、じゃあこれを持って行ってくれる？」

俺達が太一さんの後を追いつけ様としたら、太一さんのお母さんが俺達にコップに注がれた麦茶を俺達に渡してきた。

俺達は一気に麦茶を飲んで、コップを太一さんのお母さんが持っていたタライに戻した。

「あら、そんなに喉が乾いていたの？」

「御馳走様です！」

光子朗さんは太一さんの母さんにお礼を言って、太一さんの後を追いつけた。

「アイス、ありがとうございます！」

俺は棒アイスの棒を三本タライに置いて、太一さんのお母さんにお礼を言って太一さんの後を追いつけた。

そして部屋に付くと、光子朗さんが太一さんのお父さんのパソコンを起動させていた。

「……なあ、あのクラゲみたいな奴、ネットの中から消去する事は出来ないのか？」

「消去ってどうやって!？」

太一さんが不安そうな顔をして光子朗に聞くと、光子朗さんは少し怖い顔をしながら太一に聞き返した。

……光子朗さん、その顔はマジで怖いって。

「電話会社とか、コンピューターの専門家にあのクラゲの事を教えて「無理ですね」……」

太一さんが知らせる会社などと言っていたが、光子朗さんが太一さんの言葉を遮ってそれを否定した。

「さっき僕が話したロスのメール仲間が、色んな機関に奴の事を知らせた様ですが、相手にしてくれなかった様です。」

光子朗さんは太一さんに理由を話し終えると、パソコンが無事にネットに繋がった。

そしてパソコンの画面には、先程と全く違った姿をしたクラゲが映っていた。

「アア、もう進化してる……」

「……成長期になっちゃいましたね。」

太一さんが進化したクラゲの姿を見て余りの進化の速さに驚きそう言って、光子朗さんは少し焦った顔をしながら俺達にそう言ってきました。

……確か、コイツの名前はケラモンだったよな？

原作知識を殆ど忘れてるし、コイツの名前位しか覚えてねえ……クソッ、こんな事なら原作の内容をメモしとけば良かった！

俺はかなり後悔しながらケラモンを見た。

「や、ヤベェ……ヤベェよ、光子朗、航！」

「今の内にコイツを倒さないと……」

「どうやって!？」

「そ、其れは……」

太一さんは焦った顔をしながら光子朗さんに聞いたが、光子朗さんは言葉を詰まらせて太一さんから目を反らした。

「コイツが進化するのを、只見てるだけなのかよ……?」

……確かにデジモンが居ない限り、ケラモンを倒す事が出来ないよな……

「………はああ、こんな時アグモンが居てくれたらなあ……」

太一さんは顔を下に向けて、大きな溜め息を吐いてアグモンの事を呟いた。

……はああ、俺もコロナモンやルナモン・ウィザーモンと久しぶりに会いたいな……

「太一」

………えっ?

あ、アグモン?

「ああああ、アグモン」

「太一!」

あ、アグモンの声だよな?
な、何で!?

ど、何処から!?

ってか、太一さんは気付いてないのか!?

「お前さえ居てくれたらあ……」

「たゝいゝち!」

「アグモン!?

アグモンなのか!?

ど、何処に居るんだ、アグモン!?!」

すると太一さんは漸くアグモンの声に気付いて、立ち上がって周りを見渡しながらアグモンを探した。

……幾ら何でも気付くのが遅過ぎでしょ、太一さん。

「太一さん、航君、これを!」

すると光子朗さんは、家から持ってきていたパソコンの画面を俺達に見せながら俺達を呼んできた。

太一さんは光子朗さんの左側、俺は光子朗さんの右側に移動して光子朗さんのパソコンの画面を見た。

「アグモン!」

太一さんがアグモンの名前を言うと、パソコンの画面にアグモンとゲンナイさんの姿が映し出された。

「太一!」

するとパソコンの画面に映っているアグモンは、太一さんの名前を言いながら嬉しそうにジャンプした。

「あ、アグモン」

「ゲンナイさん……」

「ホッホッホッ、久しぶりじゃのう。」

太一さんはアグモンの名前を・光子朗さんはゲンナイさんの名前を言って嬉しそうな顔をして、ゲンナイさんも嬉しそうな顔をしながら俺達にそう言ってきた。

するとゲンナイさんの右側からピンクの煙が現れて、其処にテントモンが現れた。

「光子朗はん、元気でっか？」

「テントモン……」

テントモンは相変わらずの関西弁で光子朗さんに話し掛けたが、テントモンに話し掛けられた光子朗さんはさっきの太一さんの様な嬉しそうな顔をした。

すると今度はテントモン・ゲンナイさん・アグモンの後ろに三つのピンクの煙が現れて、其処からコロナモン・ウィザーモン・ルナモンが現れた。

「航、元気にしてたか？」

「少し見ない間に随分と成長したな、航。」

「また会えて嬉しいよ、航君！」

「コロナモン、ウィザーモン、ルナモン……」

俺は三体から話し掛けられて、さっきの太一さんや光子朗さんの様な嬉しそうな顔をしていると思う。

「ヤッホー！」

「ピヨモン！？」

「オッス！」

「ガブモン！？」

パルモンにパタモン！？
それに皆も！」

するとゲンナイさん達が居る場所の後ろから、俺達の仲間だったデジモン達が全員出てきた。

「ところで、奴の事は知っておるかの？」

「はい、ネットの中に現れた新種デジモンですね？」

ゲンナイさんが俺達にケラモンの事を聞いてきたので、光子朗さんが俺達を代表してゲンナイさんに答えた。

「ホッホッホッ、流石じゃのう。」

「危険だよ太一、ソイツはとても凶悪なデジモンなんだ！」

「ほっといたら、とんでもない事になりまっせ！」

光子朗さんの話を聞いたゲンナイさんは光子朗さんに感心しながらそう言って、アグモンとテントモンが真剣な顔をしながら俺達に言ってきた。

「嗚呼。

だけど、どうやって奴を倒したら良いか……」

太一さんはアグモン達の話聞いて、話を途中で詰まらせた。

確かに太一さんの言う通り、ケラモンをどうやって倒したら良いか俺達には分からない。

02に出てくるD-3の様な“デジタルワールドのゲートを開ける力”を、俺達のデジヴァイスには備わっていない。

俺のデジヴァイスは、セイバーズの“デジモンをデジヴァイスに収納する力”しか無いし……

俺が考え込んでいたら、アグモンが真剣な顔をして俺達を見てきた。

「太一……僕達、戦うよ！」

「アグモン……でもさ、」

「俺達がネットの中に入り込む。」

「太一がデジタルワールドを助けてくれた様に！」

「今度はワテ等が、光子朗はん達をお助けしまっせ！」

「テントモン……」

アグモンの言葉を聞いて太一さんがアグモン達に何かを話そうとした時、ガブモン・パタモン・テントモンが太一さんの言葉を遮って真剣な顔をしながら俺達にそう言ってくれた。

「分かった。」

頼んだぜ皆、お前等だけが頼りなんだ。

光子朗、航、デジヴァイスは？」

……太一さん、何を当たり前な事を聞いてるんですか？

「勿論持ってきてますよ！」

「当たり前じゃないですか！」

俺と光子朗さんは、デジヴァイスを太一さんに見せて笑いながらそう言った。

すると俺達の答えを聞いた太一さんは、笑いながらパソコンの画面に視線を移した。

「よし、俺達のデジヴァイスでお前等を進化させてやるぜ！」

太一さんはアグモン達にそう言って、首から掛けていたゴーグルを頭に装着した。

『オッケーー!!』

アグモン達は太一さんの言葉にそう応えて、アグモン・テントモン・コロナモン・ルナモンはゲートの中に入った。

「よし、今からアグモン達をネットの中に送り込が、其れ迄待つんじや！」

ゲンナイさんは俺達にそう言って、アグモン達をネットの中に送り込む準備を始めた。

「よし、そうと決まれば皆に連絡だ！」

太一さんは立ち上がって、リビングに在る電話を使って皆に連絡しに行った。

俺と光子朗さんも、太一さんの後を追いつけてリビングに向かった。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 2（後書き）

航はもう原作の大まかな流れと主要キャラしか覚えてません。

まあ其の方が俺的には書きやすくなるので……

次回もぼくらのウォーゲームですので！

次回もお楽しみに！

ぼくらのウォーゲームだよ！ 3（前書き）

今回は中途半端ですのでご了承下さい。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

ぼくらのウォーゲームだよ! 3

side 太一

俺はリビングに急いで移動して、電話のボタンを間違わない様に押して俺達の仲間である選ばれし子供に連絡した。

先ず最初に電話を掛けたのは、生真面目と言う言葉が似合う俺より年上の選ばれし子供・城戸 丈だ。

そして少し待っていると、丈の母さんに電話が繋がった。

「もしもし八神ですけど、丈は？」

俺は名前を名乗って、丈の事を聞いた。

「……えっ、入試？」

入試って……中学の？

あっ、はい、失礼します。」

丈は今、私立中学の入試に行っているので家には居ないらしい。

……まあ入試ならしょうがないよな、自分の人生が係ってるんだからな。

俺は丈が戦闘に参加出来ない事を悟って、電話を一度切ってまたボタンを押し始めた。

今度は俺のライバルと呼べる人物で選ばれし子供の中で一番冷静な判断力を持つてる人物・石田 ヤマトの家に電話を掛けた。

丈の家と同じで、少ししてからヤマトの父さんに電話が繋がった。

「もしもし八神ですけど、ヤマトは？」

……えっ、ヤマト出掛けてるんですか？

……タケルも一緒に？」

えっと、二人は何処へ？

……ええ、島根？」

「島根……ですか。」

俺の話を聞いていた光子朗が、声を低くして「島根」と言った。
た、例え島根に居たとしても、戦闘には参加出来る筈だ！

「あ、あの、電話番号を教えてくださいませんか？」

俺はヤマトの父さんからヤマト達が居る場所の電話番号をメモして、「失礼しました。」と言って電話を切って教えて貰った番号に電話を掛けた。

「出る出る出る……！」

俺は焦る気持ちの所為か、何度も「出る」と言う単語を言い続けた。

すると漸く、ヤマト達が居る場所と電話が繋がった。

「もしもし、東京の八神ですけど！」

「……もっぺん言ってくれんかね？」

俺は声を少し大きくして言ったら、電話から婆ちゃんの声が聞こえてきた。

多分ヤマト達の婆ちゃんだと思うけど……ってそんな事を考えてる時間はねえ！

「だ、だから東京の八神です！」

す、すいませんがヤマトに大事な用件が有って！」

「……それはウチの孫ですわ。」

「で、ですから大事な用件が有って！」

「そうですか、ヤマト……ツー、ツー、ツー」

すると会話が途中で終わって、電話が切られた音が聞こえてきた。

「…………切りやがった。」

「あ、あはははは……」

俺が何とも言えない顔をして光子朗達にそう言うのと、航は俺を苦笑いしながら見てきた。

クソッ、だったら次だ次！

次は俺達選ばれし子供の中で一番素直で純真な心の持ち主で光子朗と同じ年の選ばれし子供・太刀川 ミミちゃんの家を電話を掛けた。

そして電話が繋がると、何故か留守電になっていた。

「ミミです！」

伝言よろしくね！」

「ミミちゃん！」

太一だけど、この連絡を聞いたら直ぐに俺に連絡を呉れ！」

俺はそう言って電話を切った。

「クソッ、ドイツもコイツも……」

俺は少し苛立ちながらそう呟いて、忘れていた最後の選ばれし子供を思い出した。

ソイツは少し前迄家に居た九人目の選ばれし子供で俺の妹・八神ヒカリだ。

「ねえ、ヒカリが誕生会に行った家の番号分かる？」

俺は後ろを向いて母さんに聞くと、母さんはケーキの粉作りをしている光子朗と卵をかき混ぜている航にケーキ作りを教えるのに夢中になっていた。

「こ、こうでしょうか？」

「そうそう、粉が固まりにならない様に気を付けてね。」

「母さんってば！」

「はいはい！」

其処にメモが在るでしょ！

森さんってお家。

……あつ、航君は其れ位で良いわよ。」

俺は母さんに少し怒りながら大きな声で母さんを呼ぶと、母さんも俺に少し怒りながら大きな声で俺にそう言って、航を見てそう言った。

俺は電話のファックスの所を探すと、小さいメモが在って其処に電話番号が書かれていた。

「何だよ、全く……」

俺は少し不貞腐れながら、メモに書かれた番号に電話を掛けた。

『おめでとー！』

……ヒカリちゃん。』

「えー、未だ帰れないよ。

お誕生ケーキの蝋燭も吹き消してないんだよ。」

電話が繋がってヒカリに代わって貰って帰って来る様に言ったが、未だケーキの蝋燭も消してないと言ってきた。

「分かったよ！

じゃあ、蝋燭を消したら直ぐに帰って来いよ。」

俺はヒカリにそう言って電話を切って、電話の子機を持って光子朗の方を見た。

「光子朗！

……あ、あのさ、空ん家に電話してくれない？」

俺がそう言うと、光子朗と航は頭に？マークを浮かべて俺の顔を見てきた。

「空さん？

太一さんがした方が……」

「良いから、ほら！」

「うえ!？」

俺はそう言って光子朗に電話の子機を投げると、光子朗は驚きながら電話の子機を受け取って空に電話を掛けた。

「何？」

他のお友達も呼ぶの？」

「……俺もウーロン茶。」

「何よ、質問に位返事をしなさいよ。」

俺は母さんに聞かれたが、俺は椅子に座って素っ気なくウーロン茶を頼むと母さんは呆れた声で俺にそう言ってきた。

side 光子朗

僕は太一さんに何故か空さんの家に電話を掛ける様頼まれた（命令された）ので、僕は素直に空さんの家に電話を掛けた。

すると空さんのお母さんが電話に出たので、僕は用件を空さんのお母さんに伝えた。

「はい、八神さんのお宅にお電話を差し上げれば宜しいのですね？あつ、少々お待ち下さい、帰って来ました。」

「どっから？」

「八神さんのお宅から。」

「……居ないって言って。」

電話の向こうから空さんと空さんのお母さんの会話が聞こえてるんですが、空さんは何故か居留守を使ってくれと空さんのお母さんに頼んでいた。

……太一さんと空さんに何か遭ったんですね。

「でも……」

「良いから!」

バタンツ!

「あの……居ないと言ってくれと申してますけど。」

「すみません、またお電話をさせて貰います。」

僕はそう言って電話を切って、太一さんの顔を真剣な顔をして見ました。

「……何か遭ったんですか?」

「別に。」

「何か遭ったんしょう?」

「何もねえよ。」

僕は太一さんに聞いたんですが、太一さんは僕と目を合わせずに僕にそう答えてきました。

……全く……

「こんな時に喧嘩なんか止めて下さいよ。」

ガタンッ！

「喧嘩じゃねえって！／＼／＼／」

僕が太一さんに鎌を掛けると、太一さんは顔を赤くしてコップを勢い良く机に置いて僕にそう言ってきました。

……太一さん……

「やっぱり喧嘩だ。」

僕が呆れて太一さんにそう言うと、航君がケーキ作りの準備をしながら苦笑いをしていました。

すると太一さんが突然立ち上がって、オドオドし始めた。

「そ、そんな事より、おい、そろそろ時間じゃねえのか？／＼／／／」

太一さんは僕達にそう言ってきたので、僕は太一さんをイジるのを止めました。

side 空

私は片手に持ち運びが出来るパソコン、もう片方の手にある（・・）ヘアピンを持ってベッドに座ってる。

そしてパソコンのメールセンターに問い合わせをしたんだけど、画面には「受信したメールはありません」と表示された。

「……太一の……バカ！」

私は太一に悪口を言って、ヘアピンを握ってパソコンを勢い良く閉じた。

side 航

俺は太一さんのお母さんに渡されたウーロン茶を持って、太一さん達と一緒にパソコンが在る部屋にやって来た。

「太一、今日は何時よりも多く回ってるわよ。」

太一さんのお母さんが近くに在る観覧車を見て俺達に言ってきたが、俺達は其れを気にする時間は無い！

「転送完了成功です！」

光子朗さんがパソコンを操作しながら俺と太一さんに言ってきたので、俺と太一さんはパソコンの画面を見た。

「アグモン！」

太一さんがアグモンの名前を言うと、パソコンの画面にネットの中を移動しているアグモン・テントモン・コロナモン・ルナモンの姿が映し出された。

「太一、光子朗、航！
着いたよ！」

アグモンは俺達の名前を言って、ケラモンが居るサイトに向かって移動した。

「頼むぜアグモン！」

「油断するなよコロナモン、ルナモン！」

「テントモン、先制攻撃です！」

未だ奴はコッチに気付いてません！」

太一さんはアグモンに・俺はコロナモンとルナモンに応援をし、光子朗さんはテントモンにそう言ってケラモンが居るサイトにアクセスした。

するとアグモン達は、光子朗さんがアクセスしたゲートからサイトに入った。

すると下の方で、ケラモンがデータを夢中で食べていた。

「ほな行きまひよか！」

「」「うん（嗚呼）！」「」

テントモンが三体に合図をして、必殺技の“プチサンダー”をケラモンに放った。

ケラモンは完全に不意打ちだったので、避ける事も出来ずにテントモンの必殺技の“プチサンダー”を喰らった。

ケラモンが“プチサンダー”で痺れている間に、バラけたアグモン達がケラモンに必殺技を連続で放った。

アグモンは必殺技の“ベビーフレイム”・コロナモンは必殺技の“メガナパーム”・ルナモンは必殺技の“ティアシユート”を放った。

全体の必殺技を喰らったケラモンだったが、体には殆ど傷が無くアグモン達に玩具を見る様な目で見ていた。

すると光子朗さんのパソコンに、ケラモンからメールが届いた。

光子朗さんがメールを確認すると、其処には「アソブ？」と表示されていた。

「何が遊ぶだ！

こんな奴、さっさと倒しちまおうぜ！」

「うん！」

「油断禁物だぞ、二体とも。」

「分かってる！」

「勿論！」

「テントモン、進化です！」

「はいな！」

俺達がそんな会話をし終えたら、俺達のデジヴァイスが光り出した。

「「「アグモン（コロナモン）（ルナモン）（テントモン）進化

！！！

……グレイモン（ファイラモン）（レキスモン）（カブテリモン）
！！！！
「「「「

アグモンはグレイモンに・コロナモンはファイラモンに・ルナモンはレキスモンに・テントモンはカブテリモンに進化した。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 3（後書き）

次回はグレイモン達の戦い＋αです！

次回もお楽しみに！

ぼくらのウォーゲームだよ！ 4（前書き）

……あれ？

何でこんな話になったんだ？

前半は真面目ですが、後半は……

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

ぼくらのウォーゲームだよ! 4

side航

「「「アグモン（コロナモン）（ルナモン）（テントモン）進化
!!!

……グレイモン（ファイラモン）（レキスモン）（カブテリモン）
!!!」」」

アグモンはグレイモンに・コロナモンはファイラモンに・ルナモンはレキスモンに・テントモンはカブテリモンに進化した。

そして四体は進化した後、壁を思いっきり蹴ってその勢いでケラモンに向かった。

ケラモンはグレイモン達から逃げながら、グレイモン達の方を振り返って必殺技の……確か“クレイジーギグル”だったかな？

“クレイジーギグル”をグレイモン達に向けて放った。

だがグレイモン達はケラモンの放った必殺技の“クレイジーギグル”を避けて、グレイモンはケラモンに向けて必殺技の“メガフレイム”を連続で放った。

グレイモンの必殺技の“メガフレイム”を全て喰らったケラモンは、爆煙の所為で姿が見えなくなった。

「何だよコイツ、弱いじゃん。」

「ま、待って!」

太一さんがケラモンの弱さに驚きながらそう言っていると、光子朗さんはパソコンの画面を見ながら太一さんにそう言った。

俺達はパソコンの画面を見ると、ケラモンの姿が徐々に変わっていった。

そしてケラモンの姿が完全に変わり終えると、爆煙が晴れてケラモン、否、インフェルモンが姿を現した。

「アイツ、進化した……！」

「否大丈夫、コッチと同じ成熟期になっただけです！」

太一さんがインフェルモンの進化の速さに驚きながらそう言ったが、光子朗さんが冷静に太一さんにそう言った。

……インフェルモンって成熟期だったか？

俺が考え込んでいたら、インフェルモンはさっきと比べ物にならない位の速さで動き始めた。

そしてグレイモン達の上に移動したインフェルモンは、突然手足を仕舞い込んで繭状態になってグレイモン達に突っ込んで来た。

グレイモン達は必殺技をインフェルモンに放って応戦した。

「やったか!？」

グレイモンは必殺技の“メガフレイム”が全て直撃したのでそう言ったが、インフェルモンは全くダメージを受けていなくて彼方此方に動き回った。

「全く効かへんで、どないなつとんのや!？」

カブテリモンはインフェルモンを見て、驚きながら俺達にそう言うてきた。

するとインフェルモンはグレイモン達に突っ込みながら、口から発射口を出してグレイモン達に必殺技の……“ヘルズグレネード”だったかな？

インフェルモンは必殺技の“ヘルズグレネード”を連続で放った。

グレイモン達は“ヘルズグレネード”を避けていたが、カブテリモンとレキシモンは避け切れずに喰らってしまった。

「カブテリモン（レキシモン）！？
うわっ！」

カブテリモンとレキシモンの方に意識を集中させていたグレイモンとファイラモンは、インフェルモンの“ヘルズグレネード”を避ける事を忘れていて喰らってしまった。

「グレイモン！？」

「レキシモン！？
ファイラモン！？」

「太一さん、航君、分かりました！」

俺と太一さんがファイラモン達の安否を心配していたら、光子朗さんが焦った顔をしながら俺達に話し掛けてきた。

「「えっ！？」」

「奴は……完全体なんです！」

俺達が声を揃えて光子朗さんに聞くと、光子朗さんはインフェルモンが完全体だって事を教えてくれた。

……やっぱインフェルモンは完全体だったか……
……ん？

ちよっと待って、この後って確か……

「じゃあさっきのは……?」

「二段階進化です。」

「不味い、コッチも完全体に進化だ!」

太一さんは俺達にそう言うのと、太一さんと光子朗さんのデジヴァイスと紋章が光り出した。

するとグレイモンとカブテリモンの姿が変わりだした。

……ここ、このままじゃヤバイ!!

「ファイラモン、レキシモン!

今直ぐにグレイモンとカブテリモンを護れ!」

「「えっ?」」

俺がファイラモンとレキシモンにそう指示を出すと、太一さんの光子朗さんが驚いた顔をした。

その瞬間、インフェルモンがグレイモン達に突っ込みながら“ヘルズグレネード”を放ってきた。

「な!?!」

「進化中に攻撃……!?!」

太一さんと光子朗さんが驚きながらインフェルモンを見たが、俺はずっとファイラモンとレキシモンを見た。

「頼む、防ぎってくれ。」

ドッカアアアン!!

ドッカアアアン!!

ファイラモンとレキスモンはグレイモン達の前に出てインフェルモンの攻撃を防いでいたが、途中で退化してしまいグレイモン達もインフェルモンの攻撃を喰らってしまった。

そしてグレイモン達は、爆煙に覆われて姿が見えなくなった。するとインフェルモンは、グレイモン達を笑いながらネットの何処かに行った。

「コロナモン、ルナモン!?!」

「……ワリイ、航。」

「……全部防ぎれなかった。」

俺はコロナモンとルナモンの名前を言うと、コロナモンとルナモンは苦しそうな声で俺にそう言ってきた。

……もう二体は戦えねえな。

「大丈夫か、アグモン?」

「ごめん、太一。」

「テントモン……」

「アイツ、とんでもない奴や……」

太一さんと光子朗さんはアグモン達に安否を確認すると、アグモン達はコロナモン達よりはダメージが無かった様なので太一さん達に普通に答えた。

「……………はあああ」

太一さんは、完敗した事に大きな溜め息を吐いた。

「コロナモンとルナモンはもう戦えませんか。」

アグモン達はコロナモン達のお陰で助かりましたが、少し休ませてあげないと……」

光子朗さんはコロナモンとルナモンをゲンナイさんの所へ帰して、太一さんにそう言ってパソコンを操作し始めた。

「……………進化中に手出すなんてキタねえじゃねえか！」

太一さんは床を殴って、声を少し大きくしてインフェルモンに対して言った。

「……………すいません太一さん、俺が思い出すのが遅くて……」

「あっ、わ、航が悪いんじゃないんだ。」

悪いのはアイツだから………気にするなよ。

お前のお陰でアグモン達は殆ど怪我をせずに済んだんだからな。」

俺は声を低くして太一さんに謝ると、太一さんは何時もの声に戻って俺を慰めてくれた。

……もう俺には皆と戦う力は無い。
今からはサポートに回らないとな。

「ありがとうございます、太一さん。
今からは俺が覚えている範囲の記憶を使って、皆のサポートをして
いきます！」

俺が真剣な顔をしながら太一さんにそう言うと、太一さんは笑顔
で「頼んだぜ。」と言って頭を撫でてくれた。

精神年齢はもう大人なのに、頭を撫でられるのは嬉しいんだな、
俺って……

「あつ、太一さん、航君、オーストラリアの男の子からメールが来
てますよ。」

光子朗さんが俺と太一さんにそう言ってきたので、俺と太一さん
は光子朗さんの両サイドに移動した。

「デジタルモンスターって初めて見ましただって。」

「見てたのか、今の戦い……」

光子朗さんが俺達にオーストラリアの男の子からのメールを読ん
でくれると、太一さんは少し声の調子を落としてメールの感想を言
った。

「あつ、コッチはシンガポールから。」

四対一なのに負けるなんて弱過ぎる……」

「ウルセエ」

「はあああ」

光子朗さんはパソコンの画面をスクロールさせてシンガポールからのメールを読んでもくると、太一さんは少しイラッとした声でそう言っ、俺は気持ち少し沈んで溜め息を吐いた。

「他にも何通か……あつ、クラゲからのメールだ！」

「今のアイツの名前はインフェルモンですよ、光子朗さん。」

光子朗さんがパソコンの画面をスクロールさせていたらインフェルモンからのメールを見つけて俺達にそう言ってきたので、俺はインフェルモンの名前を光子朗さんに教えた。

そして光子朗さんがインフェルモンのメールを開くと、其処には「モシモシ」が永遠に続いている文が表示された。

「モシモシモシ……何だこりゃ!？」

「大変ですよ！」

太一さんがインフェルモンのメールに呆れながらそう言っ、光子朗さんはメールを見ながら驚いた顔をして俺達にそう言ってきた。

「大変ですよ！」

アドレスを見て下さい！

奴は今……NTTに居るんです！」

「え、NTT？」

光子朗さんがインフェルモンのメールアドレスを指差しながら、
太一さんの顔を見てそう言った。

「太一さん！」

このままじゃ皆と連絡が出来なくなってしまう！
急いで皆に連絡を！」

「わ、分かった！」

俺は焦りながら太一さんにそう言うと、太一さんは今の事態を分かってくれた様で電話の子機をリビングから取ってきて、急いで皆に電話をし始めた。

side 太一

俺は航に言われて、急いで皆と連絡を取る為にボタンを押した。
先ず最初に電話したのは、一番戦いに参加出来そうな奴・俺の妹の八神 ヒカリが居る家に電話をした。

「ああ！？」

「ひょっとしてババ！？
ノリコちゃん怪しい！」

『アハハハ！

……ヒカリちゃん。』

「ダメよ！」

私今一番勝ってるから抜けられないよ。」

ヒカリに電話したが、ヒカリ達はハバ抜きをしていてヒカリが一番勝ってるから抜けられないって言ってきた。

ツタク、ヒカリの奴……そうだ。

「ヒカリ、航に代わるぞ。」

「……えっ？」

俺はヒカリにそう言って電話の子機を航に渡すと、航は俺の顔を電話の子機を交互に見ながら頭に？マークを浮かべていた。

「お前がヒカリを説得しろ、拒否権は無いからな。」

「で、でも太一s「時間が勿体ないんだから速くしろ！」は、はい！」

俺は航に子機を渡した理由を言うと、航は焦った顔をして電話の子機を帰そうとしながら言ってきたが、俺は航の話を遮って少し大きな声でそう言くと、航は返事をしてヒカリを説得し始めた。

「ヒカリちゃん、急いで帰って来て！」

……ババ抜きで一番勝ってるから無理？

ババ抜きの一位をキープする事より、世界を護る方が大切だろ！？

……えっ、話が全然分らない？

理由は帰って来てくれたら話すから、今は速く帰って来て！

……森に謝るから俺も来てくれ？

俺が行ったら、ヒカリちゃんは帰って来てくれるんだな？

……分かった、今直ぐ行くから帰る準備をしていてくれよ！

太一さん、光子朗さん、今から森の家に行ってヒカリちゃんを迎えに行ってきます！」

航は俺に電話の子機を返して、俺達にそう行って走って出て行った。

スゲエ、俺が説得出来なかったヒカリを簡単に説得しやがった。選ばれし子供の立場から見れば嬉しいが、兄としての立場から見たらスゲエ虚しい……

俺は何とも言えない気持ちになりながらも、子機のボタンを押して空の家に電話を掛けた。

「……………話し中？」

俺は直ぐに電話を切って、タケルの家に電話を掛けた。

「……………ああ、また話し中だ。」

空の家と同じで話し中だったので電話を切って、直ぐに丈の家に電話を掛けた。

「……………丈の所も。」

丈の家も空の家やタケルの家と同じで話し中だったので電話を切って、ヤマトの家に電話を掛けた。

「……………や、ヤマトん家もかよ！？
何処も電話中だ。」

俺は四連続話し中だったので、情けない声で光子朗に言った。

「空さん家は！」

光子朗はパソコンを操作しながら、空の家は掛けたのかと聞いてきた。

「掛けたよ、でも……」

p i p i p i p i !

すると突然、電話が掛かってきたので俺は急いで電話に出た。

「もしもし!？」

「モゝシモゝシポシモゝシポシモシポシ（ry」

するとインフェルモンの声が、電話からずっと聞こえてきた。

「……ヤベェ！」

何で電話からインフェルモンの声がするんだよ!？

「どうなってるんだよ!？」

「奴が交換機に潜り込んで電話を掛けまくってるんですよ。

……回線をパンクさせる気なんです!」

俺は事態が飲み込めずに大声を出して言うと、キーボードを素早く打っていた光子朗が俺に説明してくれた。

何だ、だから電話からインフェルモンの声が……って!?

「ヤベエじゃん!

電話が繋がらなきゃ皆と連絡が出来ないし……インターネットだって「あっ!?!」えっ!?!」

俺が電話が繋がらないとヤバい事を光子朗に説明していると、光子朗が突然声を出したので俺も反射して声を出した。

すると光子朗は、凄い顔をしながら俺の方にゆっくり顔を向けてきた。

「……切れちゃった。」

……………

「えええ!?!」

俺も光子朗の話を聞いて、光子朗と同じ顔をしてゆっくり後ろを向いた。

そして少しして、光子朗は荷物をそのまま置いて玄関に向かって走り出した。

俺はゆっくり歩きながらリビングに向かった。

「あら、光子朗君もう帰るの?」

「直ぐに戻ります!!」

ガタンッ!

光子朗は母さんにそう言って急いで自分の家に帰った。

「母さ……ん……」

「どうしたの太一？」

俺が情けない声で母さんに話し掛けると、母さんは何時もと同じ声で俺に聞いてきた。

「もうダメかも……」

俺はそう言ってソファアの背もたれに体を預けた。

「どうしたのよ、アンタ？」

母さんが俺を見て少し心配しながら聞いてきたが、マジでもうダメかも……

sideヤマト

祖母ちゃんから太一から連絡が在ったと聞いて、俺は太一の家
電話を掛けてるんだが……

「ツー、ツー、ツー」

太一の家は話し中で、電話が繋がらなかった。

「太一の奴……一体何の様だったんだ？」

俺はそう言って電話を切ってテレビを観ると、東京都内の電話が掛かりにくくなっている事が分かった。

……これと何か関係してるのか？

俺はそう思いながら祖母ちゃんの肩を優しくマッサージをしているタケルを見ると、タケルは頭に？マークを浮かべて状況が分かっていない顔をしていた。

……ホントに何が遭ったんだ、東京に？

side航

俺は全速力でヒカリちゃんが居る森の家に向かってるんだが……

「……………嘘だろ……………」

目の前にはインフェルモンの所為で壊れた信号・其の信号の所為でパニックになっている自動車達が俺の道を塞いでいた。

……急がば回れって言うのかよ！？

俺は文句を心の中で言いながら、歩道橋を渡って向かい側の歩道に移動した。

……あれ、腹が痛くなってきたが……気の所為だよな？

俺は片手で腹を押さえながら森の家に向かった。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 4（後書き）

次回はバトル迄の話＋αを予定しています。

次回もお楽しみに！

ぼくらのウォーゲームだよ！ 5（前書き）

空が軽いツンデレになってます、はい。

航が残念な事になってます、はい。

バイトを辞めたいです、はい。

関係在りませんでしたね。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 5

side 太一

俺は体を起こして偶々母さんが観ていたニュースを観た。

其のニュースは“災害用伝言ダイヤル171”の説明をしているニュースだった。

「……これだ！」

俺はニュースで知った“災害用伝言ダイヤル171”を利用して、急いで皆に連絡を取った。

「もしもし、ヤマト、この伝言を聞いたら直ぐに返事呉れ！
一大事なんだ！」

俺は直ぐに電話を切って、丈の家に連絡を取った。

「丈、この伝言を聞いたら直ぐ返事を！」

俺は丈の伝言を残して電話を切ってヒカリが居る家に電話をしようと思ったが、ヒカリは航が迎えに行っている事を思い出して空の家に電話をした。

「空……この間の事は謝る。」

だから、この伝言を聞いたら直ぐ返事を呉れ！」

俺はそう言って電話を切って、ミミちゃんの家に電話を掛けた。

side 空

私は今、私の親友……って関係なのかな？
まあ其れは置いといて、私は親友？の八神 太一の家の前にやって来た。

私と太一はとある理由で喧嘩をしていて私としては速く仲直りしたいんだけど、変に強がっちゃって仲直りが出来ないの……
私は勇気を出して太一の家の前にやって来たんだけど……

「……太一のバアカ……はあ……」

私は最後の最後で勇気が出なくて、結局太一の家のインターホンを押せなくて太一の悪口を言った後、溜め息を吐いて太一の家から離れて行った。 はあ……もっと素直になりたいのに……

side 太一

「ミミちゃん、この伝言を聞いたら俺ん家迄返事を呉れ！
頼む！」

「あら、忘れてた。」

「えっ、何!？」

俺がミミちゃんの家伝言を言っていたら、突然母さんが何かを
思い出したので俺は電話を切って母さんを見て聞いた。

すると母さんが、台所から一枚のハガキを俺に渡してきた。

「ハガキ、ミミちゃんからよ。」

「ええっ!？」

俺は直ぐにハガキを受け取って表を見ると、其処には太刀川 ミミと書かれていた。

「み、ミミちゃ……!？」

ど、何処に居るんだ!？」

俺は急いでハガキを裏に向けると、其処には綺麗な海の写真と「HAWAII」と言う文字が書かれていた。

「は、はわ……」

「うーん!

やっぱハワイは良いわー!！」

遠く離れた地の砂浜で、日光浴をしているミミちゃんの声が聞こえてきた様な気がした。

俺はミミちゃんのそんな声が聞こえてきた様な気がした所為で、自分でも分かる位アホ面をしていた。

ガチャッ！

「あら、お帰りなさい。」

「どうも。」

すると、自分の家から何かを取って来た光子朗が帰ってきた。

「……どうしたんです、太一さん？」

すると光子朗は、俺のアホ面を見て話し掛けてきた。

「……あはあああ」

俺は力無い声でそう言って、ソファアの背もたれに倒れ込んだ。

sideヒカリ

ピンポーン！

私が航君が迎えに来るのを待っていると、インターホンが一回鳴った。

「あゝ、ヒカリちゃんのダーリンが迎えに来たゝ。」

すると紀子ちゃんが、私の顔をニヤニヤしながら見てそう言ってきた。

「ま、未だ結婚してないから其の呼び方は可笑いよ！／／／／」

私は顔を赤くして皆にそう言うと、皆は更にニヤニヤして私の顔を見てきた。

な、何か変な事を言ったかな？

「“未だ” って事は、将来は結婚するんでしょ？」

「あっ！？／／／／」

すると紀子ちゃんが私にそう言ってきて、私は声を出したけど直ぐに口を両手で押さえた。

うゝ、学校の皆は私と航君が両思いなのを知ってるから、直ぐに私達をからかってくるんだよね……

航君が悪いんだからね！！

ピンポーン!!

ピンポーン!!

「あつ、航君が迎えに来たから行かなきゃ!／／／／」

私は航君が迎えに来てくれた事を使って、顔を赤くしながら玄関に向かった。

そして扉を開けると、扉の前でお腹を蹲っている航君が居た。

……………えっ?

「ど、どうしたの航君!？」

私は航君と目線を一緒にして航君に聞くと、航君は小さい声で何かを呟いてた。

だから私は、航君の口に耳を近付けた。

「あ、アイスを食べ過ぎては、腹を壊した。

ひ、ヒカリちゃん、と、トイレの場所を教えて……………!

ま、マジでヤバイ……………」

航君が涙目十上目遣いになりながら、私にトイレの場所を聞いてきた。

か、可愛い、この航君……………

何時もと違う顔だから、凄く可愛く見えちゃうんだけど……………

「ひ、ヒカリちゃん……」

「あっ、トイレだったよね？
案内するよ。」

私は航君のお腹に負担が掛からない様に支えて、また家にお邪魔してトイレを借りた。

……凄く大変な事が起こってるって電話で言ってたけど……

「や、ヤバいッス……」

航君がこんな状態じゃ、家に帰る事は当分は無理だね。

side 太一

俺達は父さんのパソコンが在る部屋に移動したが、俺は床に転がって完全にやる気無しモードになっている。

俺はやる気無しモードになりながらも、光子朗にミミちゃんの事を取り敢えず伝えた。

「ハワイですか……」

光子朗が自分のパソコンを何かしながら、俺の話の感想を言った。
全く、何をやってるのさミミちゃん……

「ダメだ、完璧に……」

「僕等って今一纏まりが無いですもんね……」

俺の呟いた言葉に、光子朗がそう応えてくれた。

ホント、俺達って纏まりが無いよな……

って光子朗……

「所で、一体何を取りに戻ってたんだ？」

俺が体を起こして光子朗に聞くと、光子朗は黒い何かを俺に見せてきた。

……何ですか、其れは？

「衛星携帯を取りに戻ってたんです。」

「衛生？」

俺は全く聞き慣れない言葉が光子朗から出てきたので、俺は鸚鵡返しで光子朗に聞き返した。

「これなら、NTTの交換機を通さずに外国のアクセスポイントに直結出来ます。」

ま、マジかよ！？

俺は光子朗の話を聞いて、光子朗の左側に移動して光子朗のパソコンの画面を見た。

「なら其れで、ヤマト達に連絡を……」

「ダメですね。」

国内通話は結局、交換機を通るから。」

俺は光子朗の話を聞いて、また床に寝転がってやる気無しモードになった。

「何だよクソッ……」

俺はそう言って、窓の外の青空を見た。

……そう言えば、航の奴は未だ帰って来ないのか？

もしかして、インフェルモンの影響で中々ヒカリの所にたどり着かないとか……

有り得る話だな……

「171に伝言が入ってるか確認してみたらどうですか？」

「……そうだ、すっかり忘れてた。」

俺が航の事を考えていると、光子朗が171の事を教えてくれた。
俺は光子朗の提案で171の事を思い出して、体を起こしてリビングから電話の子機を取りに行った。

………

………

………

………

「伝言を再生します。」

俺はリビングから電話の子機を持ってきて、光子朗に聞こえる様

にスピーカーボタンを押して171に伝言が在るかを確認した。

「……もしもしヤマトだけど、急ぎの用になんだよ？」

すると電話から、ヤマトの伝言が聞こえてきた。

俺と光子朗はヤマトの声を聞いて、お互い顔を見合わせて喜んだ。

「やった！」

「やっぱアイツ等、頼りになるぜ！」

俺と光子朗は其の会話をして直ぐに、ヤマトの婆ちゃんの家
に171を使って伝言を言った。

sideヤマト

テレビで放送していた171に伝言が在るか確認したら、太一
から急ぎの用が在るから連絡を呉れと言う伝言が在った。

なので俺は太一の家
に171を使って伝言を言って、タケルと一緒に太一からの伝言を待った。

「二人とも、デジヴァイス持ってますよね？」

すると電話から俺達の仲間の泉 光子朗の
声が聞こえてきた。

俺とタケルは、光子朗の
声が電話から聞こえてきたので頭に？マークを浮かべながら171
を使って伝言を言った。

「ちゃんと持ってきたよ！」

「おい、何が遭ったんだ!？」

俺達はそう言って少し待っていると、太一達から返事が来た。

「直ぐにパソコンにセットして下さい！」

ネットの中に、新種デジモンが現れたんです！」

「もう一度、戦う時が来たんだよ俺達。」

俺とタケルは光子朗と太一の話聞いて、東京で起こっている機械のトラブルが新種デジモンの所為だと分かった。

「大変だ……」

タケルが真剣な顔をしながらそう言ったが、直ぐに困った顔をして171に伝言を言った。

「でも……デジヴァイスは在るけど、此処お婆ちゃん家だからパソコンなんて無いよ。」

「無いよな……島根だからな……。」

「だ、ダメだァァ、完璧に!!」

東京に居る筈の太一の情けない声が、俺達が居る島根に聞こえてきた様な気がした。

「お願いします、何が何でもパソコンを探して下さい!」

「島根に位パソコンが在るだろ!」

光子朗と太一の話聞いて、俺とタケルは電話を切って急いで靴を履いてパソコンを探しに外に出た。

「急げ、タケル!」

「うん!」

とは言ったものの、島根にパソコンって在るのか?

俺はそう思いながら、俺達は長い階段を下りて町にパソコンを探しに行った。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 5（後書き）

次回はやっとディアボロモンと戦えるかな？

次回もお楽しみに！！

ぼくらのウォーゲームだよ！ 6（前書き）

バイト、年末迄働いて辞めます。

料理を作ると言う仕事、俺には合っていませんでした。

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 6

side 太一

俺と光子朗がヤマトとタケルにパソコンを探す様に伝えた後、光子朗が持ってきた衛星携帯でパソコンをインターネットに繋げていた。

「よし、繋がった！」

すると光子朗のパソコンが、衛星携帯の力で外国のアクセスポイントからインターネットに繋がった。

「流石衛星携帯。」

俺が衛星携帯の力に驚きながら誉めていると、光子朗は驚いた顔をしながらパソコンを操作し始めた。

「あれ……奴が居ない！」

……NTTを出たのか？」

「おい……」

光子朗の話聞いて、俺は少し呆れながら光子朗のパソコンの画面を見た。

すると突然、誰かからかメールが光子朗のパソコンに届いた。

其処には、インフェルモンの顔とNTTを出た文章が書かれていた。

「居ました！」

奴は……アメリカです!」

「アメリカ?」

光子朗がインフェルモンの居場所を教えてくれたので、俺は壁に貼られている世界地図のアメリカを見た。

sideヤマト

俺とタケルは、パソコンを探して村中を走り回っている。

「パソコン?」

ああけど今壊れちよるわ。」

とか!

「パソコン?」

そりゃあはいからなモンありやせんわ。」

とか!

「パソ……コン?」

……パソ……コン?」

とか!

村中の人の返事はばかりで、未だにパソコンと出会えていない。

「やっぱ島根にパソコンなんて在る訳無いじゃん!」

俺は走りながら弱音を吐いた時、俺とタケルの前に在る家にパソコンが置かれていた。

「「あ、在った！」」

俺とタケルは声を揃えて喜んで、急いで家の人にパソコンを貸して欲しいと頼んだ。

だけど……

「ごめんね、僕。

このパソコン、インターネットに繋がっちゃなんだあ。」

この家の奥さんが、涙目になっているタケルに謝りながらそう言うってきた。

すると奥さんの向かい合わせになっている旦那さんが、タケルを見て同情した目をしながら奥さんを見た。

「良いが良いが、使わせやだがあ。」

「ショウちゃん、配達は良いかね？」

「可哀想だがや！」

「だけえ、インターネットに繋がちよらんけえ！」

「繋げてやろうや！」

すると二人は次第に大声を出して立ち上がって、互いを睨め付けて今にも喧嘩しそうな空気だった。

「ま、まあまあお二人。」

俺が二人の間に入って仲裁をすると、旦那さんが俺とタケルを郵便のバイクに乗せてくれて、何処かへ走り出した。

「アハハハハ！」

タケルはバイクに乗って笑顔で笑っているが、バイクの三人乗りは法律違反なんじゃ……？

島根は三人乗りは許されているのか？

「何処に行くんですか！？」

俺はバイクの三人乗りの事は深く考えない様にして、バイクを運転している旦那さんに大きい声を出して聞いた。

「任しちよいて！」

バックしていた車をギリギリ避けて、完全にスピード違反で捕まるスピードで走りながら俺にそう言ってきた。

……島根の警察は何をしてるんだ？

side 太一

俺と光子朗は今、アメリカに居るインフェルモンの様子をパソコンで見ている。

飛行機の管制塔をジャックしたり、信号を暴走させたり、モニタ

↑の画面に自分の顔を出したりe t c. . .
誰がどう見てもインフェルモンは遊んでいると分かる。

「この野郎、面白がってやがる。」

「完全体とは言え、未だ生まれだての子供ですからね。
何をするか分かりませんよ。」

俺が少し苛立ちながらインフェルモンの事を言うと、光子朗がインフェルモンの事を俺に言ってくれた。

其れ位、俺でも分かってるんだ。

問題は……

「誰か、何とか止められないのか。」

「只のコンピュータの不調じゃない事に気付いている大人だって居る筈です。

でもまさか、原因がこのデジモンだなんて思ってもいないでしょ。」

俺が小さい声でそう呟くと、光子朗が的確な答えを俺に言ってくれた。

……確かに、幾ら半年前にデジタルワールドが現実世界に現れたとは言え、またデジモンが問題を起こしているとは普通なら検討も付かないだろ……

じゃあ……

「なら、どうすりゃ良いんだよ？」

「……アグモン達に戦って貰うしか……」

俺が光子朗に聞くと、光子朗は少し間を開けて小さい声で俺にそう言ってきた。

た、戦うって言ったって……

俺達が無言で気まずい空気になっていると、光子朗のパソコンにヤマトとタケルの顔が映し出された。

「ヤマト!？」

「待たせたな!」

「デジヴァイス接続したよ!」

俺がヤマトの名前を言うと、ヤマトとタケルが俺達にそう言ってきた。

よ、良かった……

俺は安心して光子朗を見ると、光子朗も安心した顔をして俺を見してきた。

「パソコン、見つかったんだな!？」

俺が少し声の高さを上げてヤマトに聞くと、ヤマトは黙り込んで俺から目を反らした。

……どうしたんだ？

side ヤマト

俺とタケルは、とある場所のパソコンにデジヴァイスを接続して、太一達と連絡を取った。

「パソコン、見つかったんだな!？」

すると太一が、嬉しそうな顔をしながら俺に聞いてきた。

俺は後ろを向いて、俺達を此処に連れて来てくれた旦那さんの髭を剃ってる此処の店主を見た。

「子供に触らせて、大丈夫かいなあ？」

「つべこべ言わずに使わせてやだあ！」

俺は苦笑いしながら横に顔を向けると、俺とタケルを珍しそうな顔をしながら見てくるお爺さんとお婆さんと目が合った。

「あらキヌさんとこの孫だと。」

「東京の子は洒落ちよるね。」

お爺さんとお婆さんは俺とタケルの感想を素直に言ってきたので、俺は苦笑いしながらタケルを見ると、タケルは帽子を深く被って困った顔をしていた。

……………

「い、否、な、何でも無いけえ。」

俺は太一に苦笑いしながら、島根弁でそう言った。

……床屋さんでパソコンを使うとは……

side 太一

「い、否、な、何でも無いけえ。」

ヤマトが苦笑いしながら、俺に何かを隠す言い方でそう言った。
た。

……何を隠してるのかは気になるが……

「一時はどうなる事かと思っただぜ。」

「太一さん、ウーロン茶貰います。」

すると光子朗が、俺のウーロン茶が入ったコップを持ちながらそう言ってきた。

「お前、さっきから飲み過ぎじゃないのか？」

俺は少し呆れながら、ウーロン茶を飲む光子朗にそう言った。

……そう言えば、航はアイスを食べ過ぎてたよな？

……腹を壊して、迎えに行った家のトイレに籠もっているとか……
まさかな。

「は、はつくしゅん!!
うっ、今の噓で腹が更に……」

……航の噓と腹痛に苦しむ声が聞こえてきたが、俺は其の声を無視してパソコンの画面を見た。

……航、何に対してかは分からないけど、取り敢えずドンマイ。

sideアグモン

僕とテントモンは、二体でインフェルモンが居るサイトに向かっている。

コロナモンとルナモンは、僕とテントモンを守った所為で酷い怪我をしてゲンナイさんの屋敷に帰った。

「皆まだ捕まれへんのやろうか？」

するとテントモンが、力の籠もってない声で僕に聞いてきた。

「だったらまた僕達だけでアイツと戦うしかない!」

「そやけど……」

「アグモン！」

テントモン！」

僕がテントモンに元氣付ける為にそう言った時、ガブモンの声が右側から聞こえてきた。

僕達は直ぐに右側を見ると、僕達と同じ場所に向かって移動しているガブモンとパタモンが其処に居た。

「あつ、ガブモンにパタモン！」

「僕達も来たよ！」

「遅くなったな！」

テントモンがガブモンとパタモンの名前を言うと、ガブモンとパタモンが僕とテントモンにそう言ってきた。

すると上のディスプレイに、ヤマトとタケルの顔が映った。

「頼むぜ、ガブモン！」

「頑張つて、パタモン！」

ヤマトとタケルがガブモンとパタモンにそう言うと、ディスプレイに光子朗の顔が映った。

「皆、僕が誘導します！」

「」「」「オツケー！」」「」

光子朗の提案に、僕達は声を揃えて賛成して矢印の道に進んで行った。

「今度は絶対に奴を倒してみせる！」

僕はそう言って決意を固めると、インフェルモンが居るサイトの入り口が見えてきた。

そして僕達がサイトの入り口に入ると、遠くにわざわざ自分の居場所を教えているインフェルモンが居た。

「フザケやがってー！」

するとヤマトは、インフェルモンの態度を見て怒っていた。

「ヤマト、一気に行くぞ！」

「究極体だな！」

太一とヤマトがそんな会話を終えた瞬間、僕とガブモンの体が光り出した。

「アグモンワープ進化ー！！！！」

「……………ウォーグレイモンー！！！！」

「ガブモンワープ進化ー！！！！」

「……………メタルガルルモンー！！！！」

僕とガブモンは、太一とヤマトの力で僕はウォーグレイモン・ガブモンはメタルガルルモンにワープ進化した。

そして僕達は、インフェルモンに向かって行った。

ぼくらのウォーゲームだよ! 6 (後書き)

次回はディアボロモンとの戦い＋α (を予定しています。)

次回もお楽しみに!

ぼくらのウォーゲームだよ！ 7（前書き）

今回はディアボロモンとの最初の戦い＋αの話です。

終わり方が中途半端ですが、気にしないで貰えると嬉しいです。

そして確認してみたら、週間アクセスが一位になってました……

ビックリした、マジで、ホントに。

誤字・脱字が在れば教えて下さい。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 7

side太一

アグモン達がインフェルモンが居るサイトにアクセスすると、インフェルモンが「コッコダヨ」と表示して自分に矢印を向けながら自分の居場所を俺達に教えていた。

「ふざけやがって！」

するとヤマトが、インフェルモンに対して怒り口調でそう言った。俺もインフェルモンに対して怒りを覚えたが、直ぐに冷静になってヤマトを見た。

「ヤマト、一気に行くぞ！」

俺がヤマトにそう言うと、ヤマトは俺がしたい事を分かってくれて怒り顔から何時もの顔になった。

「究極体だな！」

ヤマトが俺がしたい事を言ってくれたので、俺はヤマトを笑顔で見た。

すると、俺のデジヴァイスと紋章が光り出した。

「アグモンワープ進化ー！！！！」

……………ウォーグレイモン！！！！」

「ガブモンワープ進化ー！！！！」

……………メタルガルルモン！！！！」

するとアグモンはウォーグレイモンに、ガブモンはメタルガルルモンにワープ進化した。

ワープ進化したウォーグレイモンとメタルガルルモンは、インフェルモンが反応出来ないスピードで突っ込んで、連続で攻撃してインフェルモンにダメージを与えた。

「良いぞー!!」

俺は二体の攻撃を見て、テンションが上がって大きな声で二体を誉めた。

「パタモンも進化だよ!」

「うん!」

タケルが流れに乗る為にパタモンにそう言うと、パタモンは頷いて進化をする準備をした。

すると、パタモンを見ていたインフェルモンがパタモンに向かって突っ込んだ。

そして、一瞬にして究極体に進化した。

「し、進化した!？」

「な、何て素早い!」

ヤマトと俺は、インフェルモンの余りの進化の早さに驚いてそう言った。

するとインフェルモン、否、不気味な姿をした奴は進化の準備をしていたパタモンに腕をゴムの様に伸ばして攻撃した。

パタモンは進化するのに集中していたので、不気味な奴の攻撃を避ける事が出来ずに不気味な奴の攻撃を喰らった。

「パタモン!？」

タケルはパタモンが攻撃されたので、心配した顔をしてパタモンを見た。

「パタモン！」

「うわあああ!!!？」

パタモンを助ける為にパタモンに近付いていたテントモンも、不気味な奴の攻撃を避ける事が出来ずに不気味な奴の攻撃を喰らってしまった。

「パタモン、大丈夫!？」

「テントモン!？」

タケルはパタモンを、光子郎はテントモンを心配した。

「其れより、パタモンを。」

テントモンは、苦しそうな声で俺達にパタモンの事を言ってきた。俺達がパタモンを見ると、目を閉じて完全に気絶していた。

「パタモン、僕もソツチに行くよ！」

パタモン！

パタモン、パタモン!!!」

タケルは今にも泣きそうな声で、目に涙を溜めながらパタモンに
そう言い続けた。

「……よくも……よくもパタモンを!!」

「やりやがったな!!」

俺達がパタモンを攻撃した事に切れて不気味な奴にそう言うと、
ウォーグレイモンとメタルガルルモンが不気味な奴に突っ込んだ。
メタルガルルモンは体中から氷のミサイルを不気味な奴に放つと、
ミサイルは全て不気味な奴に直撃し不気味な奴は一瞬凍ったが直ぐ
に氷から脱出した。

其の瞬間、ウォーグレイモンが不気味な奴をドラモンキラーで殴
った。

殴った瞬間、ドラモンキラーが外れたが不気味な奴に確実にダメ
ージを与えた筈だ!

よし、俺達の方が確実に優勢だ!

「テントモン、パタモンを頼む!
ウォーグレイモン、追撃だ!」

俺がテントモンとウォーグレイモンに指示を出すと、テントモン
はパタモンの所へ行き、ウォーグレイモンは不気味な奴に突っ込ん
だ。

ウォーグレイモンが突っ込んだ瞬間、不気味な奴が腕を伸ばして
ウォーグレイモンのドラモンキラーを攻撃して外したが、ウォーグ
レイモンは気にする事無く左手で不気味な奴を殴った。

「良いぞ、ガンガン行け!!」

「太一さん！」

「な、何だよ！？」

俺がウォーグレイモン達の戦いを見ていたら、突然光子郎が大きな声を出して俺を呼んできたので、俺は少し焦りながら光子郎を見た。

光子郎の顔は、何かを我慢出来ない顔をしていた。
な、何だ！？

「もうダメです……」

「何が！？」

「トイレ、貸して下さい。」

光子郎は俺にそう言って、走ってトイレに向かった。

「お前、何でこんな大事な時に……おい！」

「よし、止めだ！」

俺が光子郎に呆れながらそう言った時、ヤマトの声が聞こえたので俺は直ぐにパソコンの画面を見た。

其処には、追い詰められた不気味な奴と必殺技を放とうとしているウォーグレイモンとメタルガルルモンが映っていた。

「頼む、当たってくれ！」

俺がパソコンの画面を見ながら祈った時、ウォーグレイモンとメ

タルガルルモンが必殺技を放った。

だが、二体の必殺技は不気味な奴に避けられてしまった。

「はっ、クソッ!!」

俺は避けられた事に苛立ちパソコンを叩くと、パソコンが急に動かなくなった。

……えっ？

sideヤマト

ウォーグレイモンとメタルガルルモンの必殺技を新種デジモンが避けた瞬間、太一達との通信が切れてウォーグレイモンが動かなくなった。

「どうした太一、ウォーグレイモンが動かなくなったぞ!？」

俺は太一に呼びかけるが、太一からの反応は無くウォーグレイモンは全く動かなかった。

チッ、何をやってるんだよ、アイツ等は!!

「メタルガルルモン、ウォーグレイモンを守りながら戦うんだ!」

俺はメタルガルルモンにそう指示を出したが、新種デジモンは強くメタルガルルモン一体では全く歯が立たなかった。

そしてウォーグレイモンとメタルガルルモンは新種デジモンにロボロにされ、新種デジモンは俺達を笑いながら何処かへ消えた。

……チクシヨウ!!

side 太一

俺は突然動かなくなったパソコンを、どうにか起動させようと頑張っているがパソコンは全く反応してくれない。

「すみませんでした。」

するとトイレから出てきた光子郎が、ハンカチで手を拭きながら俺に謝ってきた。

「動かねえんだよ、コレ！」

「えっ、何やったんですか!？」

俺が光子郎に情けない声で光子郎にパソコンの事を言うと、光子郎は焦った顔をして俺を突き飛ばしてパソコンのキーボードを押し始めた。

「何もやってねえよ！」

お前こそ何で肝心な時にトイレに行ってるんだよ!？」

俺は少し光子郎に切れて、切れ口調で光子郎に言った。

「ダメだ……太一さんこそ何でフリーズさせちゃうんですか!？」

「やろうと思ってやったんじゃないよ！」

誰がやりたくてフリーズをさせるんだよ！

俺は光子郎に言われて、少し大きな声を出して光子郎に言った。

「そんなんだから空さんと喧嘩するんです！」

「俺は別に……只、プレゼントしたただだよ。」

俺は光子郎に正論を言われて言い返そうとしたが、言葉が浮かばなかったから小さい声で空と喧嘩した原因を言った。
すると光子郎が、目だけを俺に向けてきた。

「プレゼント？」

「空、誕生日だって言うから髪飾り渡してやったんだ。
なのにアイツ、「この帽子が似合わないって事？」なんて言いやがるから……。」

其れで喧嘩になって……」

俺が空と喧嘩した理由を光子郎に話すと、光子郎は呆れた顔をして俺を見てきた。

な、何だよ？

「そんな事で……」

「でもさ、俺はちゃんと謝ったんだぜ？」

光子郎が小さい声でそう呟いたので、俺はちゃんと謝った事を光子郎に伝えた。

其れと同時に、パソコンが起動し始めた。

「元に戻りました!」

「ウォーグレイモン!」

光子郎がパソコンを起動させてインターネットに繋がったので、俺はウォーグレイモンの名前を言ってパソコンの画面を見た。

其処には、ボロボロになったウォーグレイモンとメタルガルルモンの姿と、完全に切れた顔をしたヤマトの顔が映し出された。

「太一、光子郎!

お前等何やってたんだよ!?

馬鹿野郎!」

するとヤマトが、俺と光子郎に切れながらそう言ってきた。
俺はウォーグレイモンが負けた事を、受け入れなかった。

「ウォーグレイモン……

ウォーグレイモン!

ウォーグレイモン!!

ウォーグレイモオオオオン!!!」

俺は何度もウォーグレイモンの名前を叫んだが、ウォーグレイモンは何の反応もしなかった。

俺は視線を下に移して、みっともないが現実逃避をした。

「……俺が……俺が側に居りゃこんな事には……」

「また負けちゃったの。」

「何イ!？」

俺が小さい声で呟いていたら、光子郎が突然そうやってきたので俺は光子郎に切れて大きな声で聞き返した。

「今のはキャンベラから。」

折角勝てそうだったのに何してんだ。

コレはベルリンから……」

俺は完全に切れて、光子郎の胸ぐらを掴んだ。

「何だと、この野郎！」

「届いたメールを読んだだけです！」

俺が光子郎を睨みながらそう言うが、光子郎も俺を睨みながらそう言うてきた。

「光子郎、テツメエ！」

「いい加減にしろ！」

喧嘩してる場合じゃねえだろ！」

俺が光子郎を殴ろうとした時、ヤマトが俺達の喧嘩を制止してきた。

俺は光子郎の胸ぐらを離して、光子郎から目を反らした。

「何がメールだよ！」

俺は未だ頭が冷えないので、少しでも冷える様に少し大きな声でそう言った。

side 三人称

此処はとある軍事施設のインターネット・・・

此処に、先程ウオーグレイモン達と戦っていた新種デジモン・デ
ィアボロモンが居た。

ディアボロモンの手には、何かの時計が握られていた。
そしてディアボロモンが笑いながら両手で時計を覆って手を下ろ
すと、其処には時計は握られていなかった。

side 太一

俺が光子郎と喧嘩している時、光子郎のパソコンに不気味な奴か
ら一通のメールが届いた。

パソコンの画面には「トケイヲモツテイルノハダレダ？」と言
うメールと不気味な奴の姿と時間が表示されていた。

そして時計が動き出すと、不気味な奴が一体から二体になった。

「コピーした……」

ヤマトが不気味な奴がコピーした事に驚いた。

「……この数字は？」

「どうしよう……」

俺はパソコンに表示された数字を見ていたら、突然光子郎が自分のパソコンを見ながら声を出した。

「えっ？」

「ペンダコンに潜り込んだ台湾の中学生が知らせてくれたんですが、今から三十分前、アメリカの軍事基地から核ミサイルが発射されたそうです。」

「えっ!？」

「発射管制コンピューターのミスで……勿論、奴の仕業です!」

俺は光子郎の話を聞いて、直ぐにパソコンに表示された数字を見た。

「じゃあこの数字は!」

「恐らく、其のミサイルが目的地に達する迄の時間。」

俺は光子郎から知らされた事実、頭が着いて行けず光子郎をずっと見た。

「……嘘だろ……」

「核ミサイルはどうやら一発、ピースキーパーと言う名前らしいです。」

射程は二万キロ、ほぼ地球全体ですね。

最高速度は一万五千マイルパワーアワ。」

光子郎が俺に核ミサイルの事を説明してくれたんだが、最高速度が今一分からなかった。

「其れで、時速何キロだ？」

「カッコ、マッハ二十三って書いてます。」

俺は聞いた事の在る、しかし見た事の無い速さを聞いて、黙り込んでしまった。

「……に、二十三……」

「でも、目的地は分かりません。
今、何処を飛んでいるのかも……
只、世界中の何処かで爆発します。
九分後に！」

俺、否、俺達は光子郎から告げられた衝撃的な事実、何も言えず黙っていた。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 7（後書き）

予定ですが、次回でぼくらのウォーゲームの映画の話は終わると思います。

映画の話が終われば、ぼくらのウォーゲームのEDで在った話・02で在ったぼくらのウォーゲームの後の話を書きたいと思っています。

予定ですから、変更するかもしれません。

予定ですから、変更するかもしれません。

大事なので二回言いました。

次回もお楽しみに！！

ぼくらのウォーゲームだよ！ 8（前書き）

頑張った、マジで頑張ったよ！

自分ではかなり頑張って書きましたが、皆さんに伝わるか不安です
……

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

ぼくらのウォーゲームだよ! 8

side太一

俺は、否、俺達は光子郎から知らされた事実を聞いて何も言えず、コピーしていく不気味な奴を見ていた。

「お願い、何とか敵を倒して。

スペインから。

こっちはアルメニアから。

貴方達しかあの怪獣を倒せない。

フィリピンから。

頑張ってください。」

すると光子郎が、世界中の皆が俺達に送ってきたメールを読み始めた。

……頑張れって……

「コイツ等全部倒せる訳無いだろ……」

俺は誰が考えたって分かる事を、小さい声でメールに突っ込んだ。只でさえ一体だけでも強いのに、九分以内に何百体も居るコイツ等を倒せる訳無いだろ……

「核ミサイルは信管さえ作動させなければ爆発しないそうです。もしこれがゲームなら、時計を持っているのは一体だけです。

ソイツさえ倒せば信管は作動しない筈!」

光子郎が核ミサイルの情報と、どうすれば核ミサイルを止められるかを俺達に言ってきた。

確かにそうかもしれないけどよ……

「どうやって其の一体を見つけるんだよ？」

既に不気味な奴は千体を軽く超えている、其の中から時計を持っている奴をどうやって見つけるんだよ？

「其れは……一体ずつ倒していくしか……」

「そんな事をしてたら、日が暮れちゃう！」

光子郎が明らかに無理な作戦を言ってきたので、俺は大声で光子郎の顔を見ながら光子郎の作戦を否定した。

だが光子郎は、今にも泣きそうな顔をしながら俺の顔を見てきた。

「……だって、これしか方法無いでしょ。」

俺は光子郎の言葉を聞いて、何も言えず光子郎の顔を黙って見ていた。

「太一！」

すると突然、ウォーグレイモンが俺に話し掛けてきた。

「太一、しっかりしろ太一。
任せておけ。」

「ウォーグレイモン……」

ウォーグレイモンは、ボロボロの体を無理矢理動かして俺にそう

言ってきた。

「奴の居場所は分かるか？」

「メタルガルルモン……」

するとメタルガルルモンもウォーグレイモンと同じでボロボロの体を無理矢理動かして、光子郎に不気味な奴の居場所を聞いた。俺とヤマトは、二体の名前だけを言って他の言葉は言えなかった。

「皆……今から、アドレスを送ります！」

「頼む！」

すると光子郎は、ウォーグレイモン達の前に不気味な奴が居るサイトのアドレスを送った。

そして光子郎が開けたゲートに、ウォーグレイモン達は入って行った。

「……そうだな……やるしか無いよな。

……ごめん。」

「……いえ。」

俺は光子郎に素直に謝ると、光子郎は俺の事を許してくれた。

そして俺達がウォーグレイモン達を見守っていると、光子郎のパソコンに世界中の皆からのメールが送られてきた。

「す、凄いメールの数です！
頑張れ、ウォーグレイモン。」

アメリカから。

負けるな、メタルガルルモン。

オーストラリアから。

ドンドン増えてます！」

光子郎が世界中の皆から送られてきたメールを読んで、ウォーグレイモン達に応援した。

「お兄ちゃん……負けないで……！」

「諦めるもんか、最後迄……！」

「絶対に……諦めるもんか……！」

タケルはヤマトを応援し、俺とヤマトは小さい声で諦めない事を呟いた。

俺達が呟いていると、ウォーグレイモン達が不気味な奴が居るサイトに入って行った。

其処には……

「こ、コイツ等、何体居るんだ……！」

壁を覆い尽くしている数の不気味な奴がサイトに居た。

俺達は其の数に呆然としていたが、ヤマトが同様しながらどれだけの数が居るのかを聞いてきた。

「四千……八千……またコピーした……一万六千……ドンドン増えてます！」

光子郎が俺達に今居る不気味な奴の数を言った瞬間、騒がしかっ

た不気味な奴達が急に静かになってウォーグレイモンとメタルガルルモンを見てきた。

すると突然、不気味な奴達がウォーグレイモンとメタルガルルモンに一気に攻撃してきた。

ウォーグレイモンとメタルガルルモンは其の攻撃を避けていたが、メタルガルルモンが急に攻撃を喰らい出した。

「メタルガルルモン!？」

俺がメタルガルルモンを心配した瞬間、ウォーグレイモンも攻撃を喰らい出した。

「ウォーグレイモン達の動きが変だよ！」

するとタケルが、攻撃を喰らっているウォーグレイモン達を見ながらそう言ってきた。

タケルの言う通り、動きがさっきの戦いより遅過ぎる！

幾らダメージを受けているとは言え、此処迄動きが変わる物じゃない！

「世界中からのメールの所為です！」

大量のメールが、コチラの処理速度を下げてるんです！」

すると光子郎が、ウォーグレイモン達が遅くなった原因を俺達に教えてくれた。

じゃ、じゃあこのままだったら!？

「これじゃあやられっぱなしだよ！」

「世界中の皆！」

ウォーグレイモン達のレスポンスが下がってしまおう！
メールを送らないで、頼むから！」

光子郎は急いで世界中の皆にメールを送ったが、メールの勢いは全く止まらなかった。

そして不気味な奴達が攻撃を止めると、ウォーグレイモン達はロボロになって空中に浮かんでいた。

「うお、ウォーグレイモン！？」

俺はウォーグレイモンのロボロボの姿を見て、無我夢中でパソコンの画面に手を近付けて行った。

side 光子郎

僕は何度も世界中の皆にメールを送らない様に言ったのに、メールの勢いが全く止まりません。

「どうしよう……メールの勢いが止まらない。
もう五分を切ったのにどうしよう……」

僕は一生懸命メールの勢いを止めようと考えましたが、頭に良い考えが浮かびませんでした。

……太一さんにしてみれば静か過ぎますが、どうしたんでしょうか？

side 太一

俺は無我夢中でパソコンの画面に手を近付けていたら、何時の間にかパソコンの中に入っていた。

俺はゆっくりウオーグレイモンに近付いた。

「ウオーグレイモン！」

俺はウオーグレイモンに近付いてメタルガルルモンを見ると、メタルガルルモンにヤマトが近付いていた。

「メタル……メタルガルルモン！」

俺だ、ヤマトだ、分かるか？

目を覚まして！」

ヤマトは一生懸命メタルガルルモンに呼び掛けていたが、メタルガルルモンは目を覚まさなかった。

「ヤマト……来たよ、俺も来たよ！」

一緒に戦いに来たよ！

もう……お前だけを戦わせやしない。

俺が側に居る、俺が付いて居るよウオーグレイモン！」

俺はヤマトみたいにウオーグレイモンに呼び掛けると、ウオーグレイモンが反応した。

それと同時に、世界中の皆のメールが壁に現れた。

するとウオーグレイモンとメタルガルルモンは大きくなり、体が頭の中に入って何かの腕になった。

そして世界中の皆が二つの腕の間に集まって、人の姿になって光に包まれた。

「おい坊主、兄ちゃん居らんで？」

「此処……」

「えっ!？」

外でタケル達の声が聞こえたと思ったら、俺達を包んでいた光が消えていった。

すると其れと同時に世界中の皆のメールが消えていって、光子郎とタケルの顔がディスプレイに映し出された。

「ウォーグレイモンと……」

「メタルガルルモンが……」

「合体した!？」

光子郎が言った瞬間、ウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンは目を開けた。

其れと同時に、不気味な奴達は一斉に俺達に攻撃してきた。

「「な!？」」

俺とヤマトは何処かに逃げる場所を探したが、何処にもそんな場所は無く焦った声を出した。

だがウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンは其れに戸惑う事も無く、ウォーグレイモンの顔をした左手を横に振った。

するとウォーグレイモンの口から巨大な剣が出てきた。

そしてウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモン

は、其の剣を素早く横に振った。

ドッガアアアアアン!!!!!!!!!!

ウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンが剣を横に振ると、不気味な奴達の攻撃を全て弾いて不気味な奴達に跳ね返した。

其のお陰で俺達に怪我は無かった、それに攻撃を跳ね返したので不気味な奴達が一気に消えた。

するとウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンは、今度はメタルガルルモンの顔をした右手を振った。

するとメタルガルルモンの口から大きな銃口が現れた。

そしてウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンは、其の銃口を不気味な奴達に構えて放った。

ドッガアアアアアアン!!!!!!!!!!

ウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンが放った攻撃で、一瞬にして不気味な奴達は消えた。

ドッガアアアアアアン!!!!!!!!!!×3

其の後、ウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンは、三回不気味な奴達に攻撃した。

余りにも巨大な威力だったので、たった四回でこのサイトは爆煙が巻き上がった。

そして暫くすると、爆煙が収まって彼方此方に不気味な奴達の肉片が飛んでいた。

だが一体、一体だけ生き延びていた。

「居た！」

奴が最後の一匹、時計を持っている奴です！」

光子郎が俺達にそう教えてくれた瞬間、不気味な奴は直ぐに移動し始めた。

俺達は急いで目で追ってウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンはメタルガルルモンの口から出ている銃口を構えたが、其処には不気味な奴の姿が無かった。

「い、居ない！？」

俺達は急いでサイトを見渡したが、何処にも不気味な奴の姿が無かった。

ど、何処に居るんだよ！？

「一分を切りました！」

クソッ、何処だよ！

速過ぎて何処に居るのか分からねえよ！

ヤマトを見ると、ヤマトも一生懸命探しているが何処にいるのか分かっていなかった。

「お兄ちゃん！

速く、奴を見つけて！

もう時間が無いよ！
お兄ちゃん、速く！」

タケルが俺達に言ってきたが、俺達だって頑張って探してるんだ！
クソッ、笑い声は聞こえるのにさ！

side 光子郎

太一さんとヤマトさん・ウォーグレイモンとメタルガルルモンが
合体したデジモンは、時計を持った奴を一生懸命探しています……

「お兄ちゃん！

速く奴を見つけて、もう時間が無いよ！

お兄ちゃん、速く！」

タケル君が焦りながら太一さん達にそう言った。

奴のスピードが速過ぎるんだ、このままじゃパワーで勝手もレス
ポンスの差でアウトだ……

一体どうすれば……

「後三十秒！」

タケル君が、残りの時間を太一さん達に教えました。

僕はふと、自分のパソコンに送られて来ているメールを見た。

………そうだ。

「転送だ！

奴のアドレスに、このメールを転送すれば！」

僕は急いで送信アドレスを奴のアドレスに打った。
そして……

「イッケエエエ!!!」

僕はそう言って送信ボタンを押しました。
するとメールは奴に送られていきました。
メールを転送された奴は急に動きを止めて、僕が転送したメールを受信し始めました。

其の瞬間、動きを止めた奴を漸く見つけた太一さん達は、奴の方に体を向けました。

そしてウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンは、剣を構えて奴に向かって行った。
すると残り十秒だった。

「十……」

「九……」

「八……」

「七……」

「六……」

僕は秒読みをし始めました。
後……

「五……」

「四……！」

「三……！」

「二……！」

「一……！」

僕が秒読みを終えた瞬間、ウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンが奴に剣を刺しました。

ヒュウウウウウ！！

ドツカアアアアン……！！

すると東京湾に、核ミサイルが落ちました。
僕は直ぐにベランダに出て、東京湾を見た。

「間に合わな……ああ？」

僕は間に合わなかったと思いますが、未だに爆発しなかったの
でパソコンの画面を見ました。

パソコンの画面に表示された時計は、00…00…00…00…01と
00…00…00…02を交互に表示していました。

………

「ま……ま……ま……」

「間に合ったァ!!」

すると何時の間にか現実世界に帰ってきていた太一さんが、僕の言葉を安心しきった顔をしながら言ってくれました。

side 空

私は太一の家から寄り道をせずに、自分の家に帰って自分の部屋でパソコンを見ていた。

すると突然、東京湾に何かが落ちた。

其れと同時に、パソコンに一通のメールを受信した。

私は直ぐにメールを確認すると、其処には私が喧嘩している相手からのメールだった。

其処には……

「空へ

この間の事は悪かった

機嫌直せよ

八神太一」

と書かれていて、名前の後ろにハートマークが書かれていた。

太一……全く……

「太一のバァカ♪」

私は太一のメールを読んで、機嫌が良くなって太一に笑いながら悪口を言って太一にメールを書き始めた。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 8（後書き）

今回は映画のEDで在った話＋02で在った02に繋がる話（を予定しています。）

まあ本編よりは短くなりますがね……

次回もお楽しみに！

ぼくらのウォーゲームだよ！ 9（前書き）

ぼくらのウォーゲームのEDはギャグ＋作者の妄想、02に繋がる話は独自解釈＋作者の妄想が在ります。

この話を読まなくても本編はちゃんと分かりますので……

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 9

side 三人称

此処はとある私立中学校の受験会場・・・

この私立中学校の受験は終わり、受験生達は荷物を纏めて部屋から出て行っていた。

だが只一人、この受験に遅刻してやって来た選ばれし子供・城戸丈だけは荷物を纏めず未だに椅子に座っていた。

「……………受験、スベったかも……………」

丈は小さい声でそう呟いて、頭を机にゆっくり近付けて体の力を全て抜いた。

其の姿は、まるで絶望し何もかも諦めた人間の様だった。

此処はハワイのとある空港・・・

此処には今、日本から旅行に来ていた一つの家族が日本に帰る為に来ていた。

「うーん、ハワイは最高だったわ！」

するとハワイで日焼けしたこの家族の娘・選ばれし子供である太刀川 ミミが背伸びをしながらそう言った。

「ミミちゃん、そろそろ飛行機に乗るから荷物を持ってきて。」

ミミと同様に日焼けしたミミの母親が、背伸びをしているミミに
対してそう言った。

ミミは母親に「はーい」と返事をして、自分の荷物とハワイで買った日本に居る仲間や友達のお土産を持って家族一緒に空港のフロントに行った。

・ 此処は太一達のマンションから少し離れた場所に在るマンション・

「……………戦いが終わっていた。———orz」

このマンションのとある部屋で、白髪選ばれし子供・加藤 航がテレビで報道されているニュースを観ながら落ち込んでいた。

航は太一達とディア波罗モン（戦った時はケラモン and インフェルモン）と最初は戦っていたが、航のパートナーデジモンであるコロナモンとルナモンが傷付き、戦いに参加出来なくなった。

なので航は、太一達のサポートをする為に先ずは同じ選ばれし子供の八神 ヒカリを迎えに来た。

だが、太一の家で食べたアイス三本が腹痛を起こし、今の今迄トイレで格闘していたのだ。

そして腹痛が収まりトイレから出ると、既に戦いは終わっていたので航は落ち込んでいるのだ。

「……………アイスを調子に乗って食べ過ぎた……………太一さんに何て言おう？」

航は落ち込みながら、明後日の方角に顔を向けて太一に言う理由を考えていた。

するとこの家の奥さんが、何かの服を持って航に近付いてきた。

「ねえねえ、加藤君？」

「……えっ、どうしたんですか？」

この家の奥さんが何かを企んだ笑みで航に話し掛けると、航は反応が少し遅れたが顔を上げてこの家の奥さんの顔を見た。

「お願いなんだけど、この服を着てくれないかしら？」

するとこの家の奥さんは、黒を基調としたドレスに白のフリルが付いた服・俗に言うゴスロリの服を航に見せて聞いてきた。

航はこの家の奥さんとゴスロリの服を交互に何度も見て、顔を青くしてこの家の奥さんの顔を見た。

「お、俺、男……なんですけど。」

「違うわ、加藤君は男の子じゃなくて男の娘よ。
誰がどう見たって、加藤君の顔は女の子にしか見えないもの。」

航は自分の性別を途切れ途切れになりながら言ったが、この家の奥さんは航の顔を見ながら笑顔でそう言った。

この家の奥さんの話を聞いた航は、「お、男の娘……」と――
――orz状態で呟きながら落ち込んだ。

「加藤君はこのゴスロリの服、または違うゴスロリの服を着てくれたら良いのよ。」

この家の奥さんが航にそう言うと、この家の奥さんの後ろから様々なゴスロリの服を持ったヒカリ達が現れた。

「航君、私達がしっかりコーディネートしてあげる。」

ヒカリはゴスロリの服を持ちながら、航に近付いて航にそう言った。

「……きよ、拒否権は……？」

航は最後の切り札と言わんばかりの言葉を言ったが、ヒカリ達は全く航の言葉に動じず同時に口を開けた。

『無いよ。』

「嫌だアアアアア！！！！！！」

この日、航は男として何か大切な物を失い、ヒカリ達は男の娘化した航を着せ替え人形の様に服を着せ替えて鼻血を出していた。

此処は島根県のとある村の床屋・・・

此処には今、髪を切られようとしている金髪選ばれし子供・石田 ヤマトが居た。

此処のパソコンを使わせて貰ったので、代わりに新作のヘヤースタイルのモデル（犠牲者とも言う）になったのだ。

「格好良くなるけえ、我慢しときい！」

するとヤマト達をこの床屋に連れて来た男性が、ヤマトの頭を撫でながらヤマトにそう言った。

「任しときい、失敗はせえへん。」

ハサミを持ったこの床屋の店主が、ヤマトの顔を見ながらそう言った。

「あ、あはははは………」

ヤマトは苦笑いしながら、外に居る選ばれし子供で実の弟・高石タケルを見た。

タケルは此処に居たヤマト達の祖母の友達 of 老人達と楽しく話していた。

ヤマトは助けしてくれる人が居ないので、「はあ」と短く溜め息を吐いて助けしてくれるのを諦めた。

此処は太一達のマンション……

「お邪魔しました。」

光子朗は苦笑いしながら、太一と太一の母親に言った。

「昼飯を食べていけよ、なあ母さん？」

「そうよ、食べていけば良いわ。」

太一と太一の母親は、帰ろうとする光子朗に昼食を食べる様に提案した。

だが光子朗は、苦笑いしながら二人の提案を断った。

「いえ、流石にあれば食べられませんから。」

すると光子朗は、苦笑いしながら太一達の後ろに在るテーブルの上の物を指さした。

太一と太一の母親は、光子朗の指に吊られて後ろを見ると、二人は光子朗と同じ様に苦笑いをした。

「確かに……あれは無理だな。」

「ゴメンね、マイコン制御なのに焦がしちゃったのよね。」

太一は呆れた顔をして、太一の母親は申し訳なさそうな顔をしてテーブルの上に在る真っ黒なスポンジケーキらしき物を見ながらそう言った。

「それでは太一さん、また後日に来ます。」

光子朗は「お邪魔しました。」と二人に言って太一の家から出て行った。

「……どうするの、あのケーキらしき物？」

「……頑張りましょ。」

「マジですか!？」

マジで食べる気なんですか!?
あの黒こげのケーキらしき物を!？」

「……外はダメでも中身は大丈夫だから。」

太一と太一の母親は、そんな漫才を繰り広げながら黒こげのケーキらしき物を食べた。

此処は空の部屋……

自分の部屋で椅子に座っている空は、太一に謝罪のメールを送っていた。

其の顔は何処か嬉しそうな顔で、誰がどう見ても楽しそうだった。

「た、い、ち、へ。」

わ、た、し、の、ほ、う、こ、そ、ご、め、ん、ね。

ぷ、れ、ぜ、ん、と、あ、り、が、と、う。

そ、ら、よ、り。

……よし、出来た！」

空は太一への謝罪のメールを間違わない様に一文字ずつ打って、最後にもう一度メールを確認して送信ボタンをクリックした。

そしてメールを送信し終わると、空は立ち上がって帽子を脱いで太一から貰った誕生日プレゼントの髪飾りを付けた。

髪飾りを付けて手鏡を持って空は自分の顔を確認すると……

「……太一に悪い思いをさせちゃったな。」

髪飾りを付けた空は帽子を被った時とは別の可愛さが在り、空自身も太一から貰った髪飾りを気に入って太一に申し訳ない気持ちになった。

.....

.....

.....

.....

ディアボロモンが生まれ、オメガモンが倒したあの日から少しの歳月が経った。

此処はデジタルワールドのとある場所の平原。

其の平原に、一人の老人と十一体のデジモンの姿が在った。

十一体のデジモン達は、誰かを待っている様で落ち着きが無くソワソワしていた。

するとデジモン達の前に、一つの大きなゲートが現れた。

そして其の大きなゲートから、年がバラバラの九人の少年少女が現れた。

「アグモ〜〜ン！！」

「太一〜〜！！」

アグモンと呼んだゴーストを付けた少年・八神 太一と、太一と呼んだ黄色の恐竜の様なデジモン・アグモンは走り合ってお互いを抱き締め合った。

太一とアグモンに吊られて、他の子供達やデジモン達も走り合った。

ヤマトとガブモン、空とピヨモン、光子朗とテントモン、ミミとパルモン、タケルとパタモン、ヒカリとテイルモン、航とコロナモンとルナモンとウィザーモン、喜びを表現する方法は違えど、この場に居る全員が再会出来た事を喜んだ。

其の光景を見ていた老人・デジタルワールドの安定を望む者のエージェント・ゲンナイは子供達とデジモン達を頬笑みながら見た。

.....

.....

.....

.....

そして時間が少しして、ゲンナイ・選ばれし子供達・デジモン達は輪の形になる様に座った。

「お主達は既に知っておると思うが、数ヶ月前に新種デジモン・デアボロモンがお主達の世界を滅ぼそうとした。」

ゲンナイの言葉を聞いた戦いに参加していた太一・光子朗・ヤマト・タケルは真剣な顔をし、戦いに参加していなかった空・丈・ミミ・ヒカリは今一分かっっていない顔をし、戦いに最初は参加していたが途中で不参加になった航は青ざめた顔をした。

「.....航、顔が青いがどうかしたのか？」

「い、いえ、な、何も……」

太一が航の顔が青ざめている事に気付いて心配して話し掛けたが、航は途切れ途切れになりながら太一にそう言った。

航は思い出したくない、今直ぐに忘れたい事件（男の娘化事件）を思い出したので、顔が青ざめてしまったのだ。

ヒカリは航の其の顔を見て、苦笑いしながら見ていた。

「簡単に言うんじゃな、少し前に新種デジモンが現れて、現実世界を滅ぼそうとしたんじゃ。」

『!?!?』

ゲンナイの言った言葉を聞いて、戦闘不参加だった選ばれし子供は驚いて何も言えなくなった。

太一とヤマト・光子郎はあのギリギリの戦いを思い出して苦笑い、タケルは途中で不参加になった航にあの戦いの事を話していた。

「デジタルワールドは完全に戻っておらん。」

「どう言う意味だよ?」

ゲンナイの意味深な言葉に選ばれし子供達とデジモン達は頭に?マークを浮かべ、太一が皆を代表してゲンナイに聞いた。

「本来、コンピューターのバグが集まる事は無いんじゃない。

何故なら、デジタルワールドがバグを異物として必ず消去するからの。

じゃが、今回の事件みたいにバグが集まってデジモンが誕生してしまったと言う事は……」

「デジタルワールドは完全に戻りきっていない……って事ですね、
ゲンナイさん？」

「そうじゃ。」

ゲンナイが遠回しの言い方で皆に説明したので、光子朗が結論を
推理してゲンナイに聞くとゲンナイは頷きながらそう言った。

「其処でじゃ、お主達が持っている紋章の力でデジタルワールドを
元のデジタルワールドに戻して欲しい。」

「そ、そんな事が出来るのか!？」

ゲンナイの提案を聞いて、ヤマトが驚いた顔をしながらゲンナイ
に聞くと、ゲンナイは「出来る。」と言って頷いた。

そして少ししてから、選ばれし子供達は互いの顔を見合わせて無
言で頷いた。

.....

.....

.....

.....

ゲンナイとデジモン達は選ばれし子供達から離れて、選ばれし子
供達は目を瞑って手を胸に当てていた。

するとデジタルワールドの空が突然厚い雲に覆われた。

其の瞬間、選ばれし子供達の手が光り始めた。

太一はオレンジ、空は赤、ヤマトは青、光子朗は紫、ミミは黄緑、丈は黒、タケルは黄色、ヒカリはピンク、航は紅と蒼。

其の光が輝きを増すと、選ばれし子供達の手からそれぞれの紋章が現れて上に向かって行った。

そして全員の紋章が一つになった時、デジタルワールドは虹のカラーテンに包まれて行った。

すると選ばれし子供達の足下が、一瞬にして草原から花畑へ変化した。

「ありがとう選ばれし子供達、これでデジタルワールドは元に戻った。」

紋章の力を使ってデジタルワールドを元に戻した選ばれし子供達に、ゲンナイが嬉しそうな顔をして近付き全員にお礼を言った。

「……なあ、ゲートが閉じる迄未だ時間は在るよな？」

「……少しじゃが時間は在るぞ。」

太一はゲンナイに質問すると、ゲンナイは太陽を見ながらそう答えた。

「じゃあさ、久しぶりに皆に会えたからよ……」

「分かつとる、皆でゲートが閉じる迄遊びなさい。」

太一、否、選ばれし子供が言いたい事が分かったゲンナイは、優しい顔をしながら選ばれし子供達に言った。

ゲンナイの言葉を聞いた選ばれし子供達は、凄く嬉しそうな顔を

しながらデジモン達の所へ向かった。
そして選ばれし子供達は、時間が許す限りデジモン達と遊んだ。

ぼくらのウォーゲームだよ！ 9（後書き）

次回は遂に02始動！！

02を楽しみにしていた皆さん、漸く02ですよ！

頑張りますが、余り期待はしないで下さいね？

次回もお楽しみに！

02プロローグだよ！（前書き）

今回から02！！

まあこの話はかなりご都合主義です………すいませんでした！！

後、02突入記念としてキャラ投票をしたいと思います。

詳しい事は後書きで……

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

02プロログだよ！

side 航

決して忘れる事の無いあの夏、あれから三年が経った。

太一さん・ヤマトさん・空さんはお台場中学校に入学し今では中学二年生になりました。

光子朗さんも今年の春にお台場小学校を卒業して、太一さん達と同じお台場中学校に入学しました。

ミミさんはミミさんのお父さんの仕事の転勤で、日本から離れた地・アメリカへ引っ越しました。

丈さんは一人だけ私立中学へ行き、今は受験生なので行きたい高校に合格する為に毎日勉強しています。

俺とヒカリちゃんはお台場小学校五年に進級して、それなりにですが楽しく過ごしています。

タケルは今迄違う小学校に通ってましたが、今年お台場に引っ越して来て俺とヒカリちゃんと同じお台場小学校に転校してくるらしいです。

久しぶりにタケルに会うから、何だか会うのに緊張します。

……えっ、前と喋り方が違うって？

俺の今置かれている状況の所為で、喋り方が可笑しいんです。其の置かれている状況とは……

「久しぶりじゃの、転生者の加藤 航よ。」

「……何だよ。————orz」

俺が俺を転生させてくれた神様の居る神界に居るからです。

……何故だアアア！！？

「動揺するでない、今回はお主に伝える事が在るから此処に読んだだけじゃ。」

すると神様は、何か意味深な言葉を俺に言ってきた。

俺は其の神様の発言を聞いて、立ち上がって真剣な顔をして神様を見た。

「一体何が在ったんですか？」

「お主……喋り方が……まあ良いわい。」

実は、お主のデジヴァイスを強化＋イレギュラーを伝える為に来て貰ったのじゃ。」

「デジヴァイスの強化？」

イレギュラー？

どう言う意味かサッパリ分かりませんから、五十文字以内で説明を求めます。」

俺は神様の全く分からない説明を聞かされて、頭に？マークを浮かべながら神様に説明を求めた。

「言葉の通りじゃ。」

お主のデジヴァイスを強化し、世界のイレギュラーを伝える。」

「……五十文字以内の説明、ワザワザありがとうございます。」

其れで、デジヴァイスの強化ってのはどう言う意味なんだ？」

俺は腰に付けている二つのデジヴァイスを外し、両手に持ってデジヴァイスを見ながら神様に聞いた。

「お主は転生者と言う立場から私利私欲の為の原作ブレイクをせず、誰かを守る為の原作ブレイクをした。」

其の行動に涙したわしは、お主のデジヴァイスに無印（セイバーズのデジヴァイスの機能・クロスウォーズのデジクロス機能を付ける事にしたのじゃ。」

「デジクロスはジョグレスだろ。」

……良いのか、勝手にそんな事をして？」

「お主のデジクロスは少し特殊なデジクロスじゃ。」

後安心せえ、ちゃんと最高神様から許可は貰っとる。」

神様が俺のデジヴァイスの強化する理由や強化するプログラムを説明してきたので、俺は少し間を開けて神様に聞くと神様は一枚の書類を何も無い所から出して俺に見せてきた。

其の書類には、俺の事が細かく書かれているのと最高神様の判子が押されていた。

……神様にも判子が在るのかよ……

「分かった、機能が大きいに越した事は無いからな。」

俺はそう言って神様に二つのデジヴァイスを渡すと、神様は二つのデジヴァイスに神々しいエネルギーを注ぎ始めた。

すると俺の二つのデジヴァイスは、無印の形からティマーズに出てくるデジヴァイスアルティメットバージョン（縁取りは紅と蒼）の形に姿を変えた。

そして神様は二つのデジヴァイスを俺に渡してきた。

……何故にティマーズのデジヴァイスアルティメットバージョン？

「ティマーズのデジヴァイスなら“カードスラッシュ”が出来るじ

「やろ？」

「そんな理由でテイマーズのデジヴァイスにしたのか！？
ってか、俺はカードを一枚も持ってねえよ！」

「安心するじゃ、カードはお主の部屋に送ってある。
無論、全てコンプリートしとるからな。」

「……………其れで、イレギュラーってのは？」

俺は神様の行動に呆れて何も言えなくなり、話を変える為に神様が俺を此処に読んだもう一つの事を聞いた。

「お主と言うイレギュラーの所為でデジメンタルが二つ追加されて、
これからの物語に様々なイレギュラーが発生しておる。」

「……………予想はしていたが此処迄予想通りだと呆れて何も言えない。」

俺は転生して予想していた事が神様の口から言われたので、俺は呆れて何も言えなくなった。

まあ誰がどう考えたって、普通に思う事だよな？

「そうかい。」

それでどうする、お主は原作をかなり忘れておるから記憶を思い出させてやろうか？」

すると神様は自分の横にデジモンアドベンチャー02のDVDを出して、俺にDVDを見せながら俺に聞いてきた。

だが俺は顔を横に振って、其れを拒否した。

「俺が居る世界は既に原作から大きく脱線してるんだ、今更原作を観たって参考にもならないよ。」

「……そうか。」

ならお主はもう此処に居る理由は無いな、元の世界に戻すぞ。」

俺は神様に拒否した理由を言うと、神様は何処か納得してくれた顔をして俺の顔を見てそう言ってきた。

俺が無言で頷くと、突然地面の感覚が無くなった。

俺は恐る恐る下を見ると、俺の居る場所に地面は無く代わりに大きな穴が開いていた。

「またかアアアアアアアア！！！！！？」

俺は大きな声で叫びながら落ちて行った。

あの駄神、次に会ったら絶対にぶん殴ってやる！！

02プロログだよ！（後書き）

キャラ投票の説明。

- 1…一人三票迄持っている。
- 2…好きな選ばれし子供の中から三人、または好きなデジモンの中から三体に投票して下さい。
- 3…絶対に三人や三体に入れなくてもOK！
- 4…一人や一体のキャラに三票全てを入れるのもOK！
- 5…一人一回迄！（↑これ重要）
- 6…締め切りはキメラモンが出てくる前迄！（↑これも重要）
- 7…02に出てくるキャラやデジモンもOK！
- 8…分からない事が在れば感想に書いて！
詳しく説明しますから！

これ等の約束を守る人は是非参加してください！

次回はキャラ設定なので……

次回もお楽しみに！

02 キャラ設定だよ！（前書き）

ザツクリとキャラ設定＋デジヴァイス設定＋原作との相違点です！

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

02キャラ設定だよ！

本作の主人公

名前
かとうわたる
加藤航

CV

宮野真守

性別

男

年齢

タケルやヒカリと同じ年

身長

タケルと一緒に

体重

平均より1〜2kg多い

容姿

イナズマイレブンに出てくる吹雪 士郎（アツヤ状態）

性格

明るい、優しい、心配性、命を大切にしない奴には冷酷

好きなもの

アイス、冷やし中華、ゲーム、大切な仲間（like）、ヒカリ（love）

嫌いなもの

夏、辛い食べ物、熱い食べ物、勉強、命を大切にしない奴、自己中心的な奴

備考

本作の主人公。

神のミスで死に“デジモンアドベンチャー”の世界に転生した転生者。

パートナーはコロナモンとルナモン。

家は太一とヒカリのマンションで、太一達の隣に住んでいる。

ヒカリと両思いなのに未だ付き合っていないと言うよく分からない関係。

昔から原作知識を使って良い方向へ原作ブレイクをした。

だが時間が経つに連れて原作を忘れていき、今では主要キャラの名前と大まかなストーリーしか覚えていない。

アポカリモンとの戦いで“光と闇の真実”と言う力に目覚め、本来存在しないアポロモンBMとディアナモンBMに進化させる事が可能。

ディアボロモンとの戦いの後に女装（男の娘化）されたので、髪を逆立てて少しでも男に見える様に努力している。

女装（男の娘化）した事がかなりのトラウマ。

タケルとは親友で、今は呼び捨てで呼び合う程。

デジヴァイス

形

ティマーズに出てくるデジヴァイスアルティメットバージョン（縁取りの色はコロナモンの方が紅・ルナモンの方が蒼）

能力

無印／セイバーズに出てくるデジヴァイスの機能・クロスウォーズに出てくるデジクロスが可能（しかし、航のデジクロスは普通と少し違う。）

カード

ティマーズのカードスラッシュが出来、カードは全種類持っている。

原作との相違点

- 1..ヒカリが航と両思い。
- 2..太一と空がお互いに恋心を持っている。
- 3..ウィザーモン・レオモンと言った本来死んでいるデジモン達が生きている。
- 4..航のデジメンタルが存在する。
- 5..他にも小さい事の相違点が幾つか在る。

02キャラ設定だよ！（後書き）

次回から原作入り！（決して幻想入りではない）

次回もお楽しみに！

第九十二話だよ！（前書き）

今回は原作の第一話Part 1！

一人称がコロコロ変わりますので……

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

第九十二話だよ！

side 三人称

此処はデジタルワールド・・・

空は厚く黒い雲に覆われ、平和と呼べるには離れ過ぎたデジタルワールド。

其のデジタルワールドに、サングラスをした一人の少年と其の少年から逃げるデジモン達の姿が在った。

少年の後ろには不気味な黒い塔が何本も立っており、少年は手に持っている鞭を地面に叩くと少年の周りから幾つもの黒いリングが現れた。

其のリングは逃げているデジモン達に向かっていき、デジモン達の体に自動的に装着した。

リングを無理矢理装着されたガジモン・ゴツモン・ユニモンは、目が赤色に変化しまるで何かに操られている様だった。

そして其のリングから逃げている白い体をし、尻尾に聖なるリング・ホーリーリングを付けた猫の様なデジモン・テイルモンは必死に走っていた。

テイルモンが走っている時、一つの黒いリングがテイルモンに向かってきた。

テイルモンは其れに気付く何故か光っている尻尾に付いたホーリーリングで其れを弾くと、黒いリングは力を失ったかの様に地面に落ちた。

テイルモンは不思議がってホーリーリングを見てみると、テイルモンの前に赤色の目をしたユニモンが現れた。

テイルモンはユニモンに気付いた瞬間、ユニモンはテイルモンに必殺技の“ホーリーショット”を放った。

「勇気を受け継ぐ者 P a r t 1」

S i d e タケル

僕は母さんが作ってくれた朝ご飯を食べ終わったので、手を合わせて「御馳走様。」と言って食器を持って台所に行って流し台に置いた。

「ごめんね、初登校なのに一緒に行けなくて。どうしても、今日中にこの原稿を上げなくちゃいけないのよ。」

すると仕事部屋で仕事をしている母さんが、一緒に学校を行けない事を謝ってきた。

僕は昨日の内に準備しておいたランドセルを背負って、お気に入り帽子を被って玄関に行った。

「大丈夫だよ、一人でいけるよ。」

僕は母さんにそう言って靴を履いて、仕事している母さんに「行ってきまーす。」と言って扉を開けた。

そしてエレベーターのボタンを押して待っていると、二人の歳の違う少年少女を乗せたエレベーターがやってきた。

エレベーターの扉が開くと、二人は僕を不思議そうな顔をしながら見てきた。

「お早う！」

「お、お早う。」

僕が元気に二人に挨拶をすると、眼鏡を掛けた少女が僕に戸惑いながら挨拶をしてくれた。

「僕、今度このマンションに引っ越してきた五年生の高石 タケルです。」

「よろしく。」

僕は二人に簡単な自己紹介をしてよろしくって言うと、二人は何処か嬉しそうな顔をして僕を見てきた。

「私、六年の井ノ上 京。
いのうえみやこ

京都の京って書いて京って言うの、よろしく。」

すると眼鏡を掛けた少女・京さんが僕に自己紹介してくれた。

「こっちは伊織。」

「三年の火田 伊織ひだ いおりです、よろしくお願いします。」

今度は真面目そうな少年・伊織君が京さんの次に僕に自己紹介してくれた。

伊織君、三年生なのに凄いい丁寧語だ……

まるで光子朗さんみたいだな……

「よろしく。」

僕は二人にそう言って、エレベーターに乗って下に向かった。

.....

.....

.....

.....

僕は京さんと伊織君と楽しく喋りながら歩いていると、僕が今日から通うお台場小学校が見えてきた。

……今日からこの学校で過ごすんだ、楽しく過ごせたら良いな。
僕はそう思いながら校門から入ると、グラウンドでサッカーをしている男子達が居た。

其のサッカーをしている男子達の中に、ゴーグルを付けている一人の男子が居た。

「……太一さん？」

僕はゴーグルを付けている男子が、一瞬僕の仲間の太一さんに見えてしまった。

するとサッカーボールが僕の所に飛んできたので、僕はジャンプしてサッカーボールをキャッチした。

「ワリイワリイ。」

ゴーグルを付けた男子が、苦笑いしながら僕にそう言ってきた。
僕は其の男子を少し見た後、ボールを男子に投げてゴーグルを指

さした。

「其の جوجل、格好良いね。」

「……えっ？」

僕が素直に جوجلを誉めると、男子は目をパチクリさせながら僕の顔を見てきた。

「大輔、何やってるんだよ！」

「お、おお！」

すると後ろの男子の一人が جوجلを付けた少年・大輔を呼んだので、大輔はボールを蹴って男子達の所に走って行った。

……大輔……か。

「太一さんはもう中学生だもんね。」

僕は一人でそう言って、職員室に向かう為に校舎に歩いて行った。

side 航

俺はヒカリちゃんと一緒に学校に向かって、クラス分けを確認して教室に向かった。

俺とヒカリちゃんは同じクラスの5-Aだ。

俺はヒカリちゃんの席の前の席だったので、荷物を机の中に入れてヒカリちゃんの方を向いた。

「また一年間よろしくな、ヒカリちゃん。」

「うん、よろしくね。」

「またヒカリちゃんと同じクラスだね！
序でに航とも。」

俺とヒカリちゃんがそんな挨拶をしてると、
の様に付けた少年・本宮 もとみや だいすけ 大輔が俺達の席の隣にやってきて俺達に
そう言ってきた。

俺とヒカリちゃんは、大輔と去年も同じクラスだったので顔見知りなのだ。

ってか大輔……

「俺は序でかよ。」

俺が大輔にジト目で見ながらそう言うと、ヒカリちゃんは苦笑いしながら大輔に「よろしくね。」と言った。

「まあ其れは置いといて、さっきこのゴーグル格好良いって言う奴が居たんだ。」

知らない奴だけど。」

すると大輔は、俺の嫌味を普通にスルーして机に手を置いて俺達にそう言ってきた。

知らない奴……ねえ。

俺はアイツの顔を思い浮かべながら大輔の話を聞いた。

side 三人称

此処はデジタルワールドのとある森・・・

此処に黄色の小さい恐竜の様なデジモン・アグモンが倒れていた。

「太一……」

アグモンは自分の大切な相棒と呼べる人物・八神^{やがみ} 太一^{たいち}の名前を
呟いた。

「太一 イイイイ!!!」

アグモンが大きな声で太一の名前を呼んだ瞬間、太一のデジヴァ
イスにアグモンの SOS 信号が届いた。

side 航

チャイムが鳴ったので俺達は自分の席に座って待っていると、俺
達の担任の先生が教室に入ってきて供託の前に立って今日の大まか
な流れを言ってくれた。

「この新学期からの、えー、君達の新しい仲間を紹介する。」

先生がそう言うと、教室の扉が開いて一人の男子が入ってきた。
……やっばりな。

「高石 タケル君だ。」

「高石 タケルです、よろしく。」

先生がタケルの名前を言うと、タケルは帽子を外して俺達にそう言ってきた。

「席は……八神の隣だ。」

白髪に加藤の後ろが八神だからな。」

「はい。」

するとタケルは俺の左後ろ、ヒカリちゃんの隣の席に座った。

「久しぶりー。」

「また背が伸びたね。」

「まっ、大体予想してたけどな。」

俺とヒカリちゃんとタケルは、そんな話をしながら一時間目が始まる迄談笑した。

大輔が物凄い目で俺とタケルを睨んでいたが……

side 三人称

此処はデジタルワールド・・・

デジタルワールドのとある森で、テントモン・パタモン・ピヨモンはある者から逃げていた。

そのある者とは、腰に黒いリングを装着したスナイモンだった。するとスナイモンは必殺技の“シャドウ・シックル”を近くに居たテントモンとピヨモンに放った。

パタモンは近くの木の陰に隠れていたので見つからなかった。

「……ピヨモン……テントモン……」

パタモンはスナイモンに怯えながら、ピヨモンとテントモンの名前を呟いた。

場所は変わってアグモンが倒れている場所・・・

「アグモン！」

「太一！？」

アグモンのSOSを受けた太一は、中学をサボってアグモンが居るデジタルワールドにやってきた。

太一は倒れているアグモンを立たせて、手に持っていたデジヴァイスをアグモンに向けた。

「進化だアグモン！」

太一はアグモンにそう言うが、太一のデジヴァイスは全く反応を

示さなかった。

「な!？」

「ダメだ、進化出来ないよ太一!？」

太一とアグモンは、進化出来ない事に驚いた。

「何故だ、何故進化出来ない!？」

太一は思った疑問を声に出して言った。

太一とアグモンの光景を、別の場所で見ている少年が居た。

「フフフフ、無駄だ。」

其のエリアはもう僕のも物だ。

其処で進化する事は、絶対に無い。」

少年は手に持っている太一達と形が違う黒のデジヴァイスを持ちながら、独り言の様に言った。

太一は其の少年の事に気付く筈も無く、パタモンと合流してスナイモンから必死に走って逃げていた。

「コッチよ!」

すると突然現れたテイルモンが、太一達を安全な場所に案内した。太一達は目の前に危険が迫っていたので、テイルモンに素直に付いて行った。

太一達がやってきた場所は、何処にでもある普通の洞窟だった。其の洞窟には、コロナモンとルナモンも隠れていた。

太一達は洞窟の奥の方に隠れて、スナイモンから姿を眩ませた。

太一は持っていたDターミナルを使って、現実世界に居る誰かにSOSメールを送った。

「頼む、誰でも良い。
助けに来てくれ！」

side 京

時刻は既に放課後で、私はパソコンルームで一人インターネットを操作していた。

すると突然、今年卒業した泉先輩宛のメールが届いた。

「あっ、泉先輩にメールだ。
もう卒業したのに……」

私はそう言いながら、泉先輩に送られてきたメールを読むと……

「……何これ？
確か八神って……五年生の……」

書いてある事は全く分かんないけど、八神って言う人がピンチだ
って事は分かる！

私は急いで其のメールをコピーして、走って八神さんの所へ向かった。

side航

俺・タケル・ヒカリちゃんはランドセルを背負って、靴箱の前にやって来ている。

「引っ越しの荷物は片付いた？」

「後少しで片付くよ。」

「だったら今度の日曜に手伝いに行くよ。
どうせ暇だったしな。」

「ホント？」

「ありがとう、航。」

俺はタケルと堅い握手をして友情を確かめ合っていると、ランドセルを背負っていない大輔が走ってやって来た。

……何しに来たんだ？

「おいお前！」

「お前じゃないわ、タケル君。」

「名前を覚える事が出来ないのか、大輔？」

大輔がタケルにお前って言ったので、俺とヒカリちゃんは少し怒って大輔にそう言った。

すると大輔は一瞬変な顔をしたが、直ぐに戻ってタケルを見た。

「タケル、お前ヒカリちゃんとどう言う関係なんだよ！？」

……は？

俺は大輔の余りにも間抜けな質問に、脳が一瞬機能停止をした。

「ん、何の話？

アハハハハ、大輔君って面白いね。」

タケルは大輔の質問を聞いて、笑いながら大輔にそう言った。

……俺達を笑わせる為に言ったのか。

ワザワザ其れを言う為に言いに来たのか？

ご苦労なこった。

「俺は全然面白くない！」

大輔は握り拳を作って、怒った顔をしながらタケルに言った。

じゃあ何しに来たんだよ、お前は……

俺がそう思っていたら、何かの紙を持った京さんがやって来た。

京さんと俺の関係は、まあパソコンを修理する修理される関係だ。

「あっ、京さん！」

するとタケルは京さんの名前を言った。

二人は顔見知りなのか？

そう思っていたら、京さんがヒカリちゃんの前に来た。

……どうしたんだ？

「八神さんって貴方よね？」

「はい、そうですけど……」

「八神 太一って知ってる？」

すると京さんは、ヒカリちゃんに紙の内容を見せながら太一さんの事を聞いた。

俺とタケルはヒカリちゃんの横に移動して、京さんが持っている紙の内容を読んだ。

………！？

「「お兄ちゃん（太一さん）！！」」

俺達は太一さんがピンチだと言う事を知り、急いで靴を履き替えてパソコンルームに向かった。

第九十二話だよ！（後書き）

次回は「勇気を受け継ぐ者Part2」です！

次回もお楽しみに！

第九十三話だよ！（前書き）

ヤバいな、頑張って話が続く様に頑張らないと……

このままだったら350話は普通に超えてしまうかもしれない……

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第九十三話だよ！

「勇気を受け継ぐ者 P a r t 2」

俺達は太一さんからSOSメールを読んで、走ってパソコンルームに向かっている。

すると前に在る階段から、お台場中学校の制服を着た男子生徒が上がってきた。

「あっ、泉先輩！」

京さんが階段を上がって来たお台場中学校の男子生徒・泉 光子朗さんの顔を見て光子朗さんの名前を言った。

「京君、部室のパソコン使わせて下さい！」

光子朗さんが京さんにそう頼むと、京さんは嬉しそうな顔をして光子朗さんの顔を見た。

「どうぞどうぞ！」

卒業しても顔を出してくれるなんて感激です！」

京さんは光子朗さんの頼みを間を開けずに直ぐにOKを出した。
……そう言えば光子朗さんと京さんって、お台場小学校パソコン部の先輩後輩の関係だったな。

「光子朗さん。」

するとタケルが光子朗さんの顔を懐かしそうに見ながら光子朗さんの名前を言った。

「光子朗さん、お兄ちゃんが……」

ヒカリちゃんが太一さんからのSOSメールを光子朗さんに見せて話し掛けた。

「タケル君にヒカリさん、航君も……」

「光子朗さん、今は懐かしんでる時間は在りませんよ。」

光子朗さんが俺達の顔を懐かしそうな顔をしながら見てきたので、俺は真剣な顔をして光子朗さんにそう言った。

光子朗さんは俺の言葉を聞いて「そうでしたね!」と言って走ってパソコンルームに向かったので、俺達は光子朗さんを走って追い掛けてパソコンルームに向かった。

………

………

………

……

「僕の所にもメールが来たんです。返事を打とうとしたら……バッテリーが切れちゃって。」

光子朗さんがパソコンのキーボードを打ちながら俺達にそう言ってきたので、俺達は近くの机に置かれたお台場中学校の鞆と電源の切れたDターミナルを見た。

バッテリーが切れるって……充電してないんですか、光子朗さん？

「中学校からなら、家に帰るより此処の方が近いんです！」

光子朗さんはお台場小学校に來た理由を俺達に教えてくれて、打ち終わったメールを太一さんに送った。

side 太一

ピコーン

現実世界に居る誰かからの返事を待っていると、俺のDターミナルが誰かからのメールを受信した。

「来た!!」

俺は急いで受信したメールを読むと光子朗からの返事で、直ぐに

ゲートを見つけてコッチに来ると書かれていた。

「光子朗からだ！」

タケルや航、ヒカリも居るのか！」

俺は光子朗からのメールを読んで少し希望が沸いてきた時、この洞窟の奥に隠れているアグモン達が何か騒ぎ始めた。

「太一、速くコッチに来て！！」

するとアグモンが俺を洞窟の奥で読んできたので、俺はDターミナルをポケットに入れて奥に向かって歩き出した。

side航

「ねえねえ、デジタルワールドって何？
新しいテーマパーク？」

京さんが俺達の会話を聞いてデジタルワールドについて聞いてきたので、俺・タケル・ヒカリちゃんは互いの顔を見合って困った顔をした。

すると大輔が何かを思い出した様な顔をした。

「俺、ちょっと太一さんに聞いた様な……。
確か、デジモンがどうか。」

「えっ、太一さんを知ってるの！？」

大輔の話を聞いたタケルは、驚いた顔をして大輔に聞いた。
そう言えば、タケルは大輔と太一さんの関係を知らないんだよな。
……まあ今日転校してきたからしょうがないか。

「サッカークラブの先輩後輩なの。」

「あつ、俺もサッカークラブに所属してるから。」

ポジションはMFだから、暇だったら見に来てくれよ。」

ヒカリちゃんが太一さんの関係を言ったので、俺の事をタケルに序でに言った。

まあ本当はFMをしたかったんだけど、MFを守る人が少なかったから守ってるんだけどな。

「だから何、デジモンって何？」

「京さん、家のパソコンの修理……」

京さんがニコニコしながら俺に聞いてきた時、廊下から伊織君が京さんを訪ねてきた。

ナイスタイミング、伊織君！

「あつ、忘れてた。」

京さんは頭の後ろに手を回して、本当に忘れた顔をして伊織君にそう言った。

そして俺達に「明日は絶対に教えて貰うから！」と言って伊織君と廊下を歩いて行った。

「やっぱり、ゲートが開いている。」

光子朗さんが小さい声でパソコンの画面を見ながらそう呟いた。

Side 太一

俺はアグモンに呼ばれて洞窟の奥にやってきた。

其処にはアグモン達と勇気の紋章が描かれた何かが在った。

「これは……」

「勇気の紋章だろ？」

俺は驚きながら勇気の紋章が描かれた何かに近付くと、アグモンが俺に勇気の紋章を確認してきた。

「確かに、勇気の紋章だが……」

俺はアグモンに勇気の紋章だと肯定して、勇気の紋章が描かれた何かに両手で触れた。

すると、勇気の紋章が描かれた何かが突然眩い光りを放って光り出した。

そして光りが収まると、三つの光りが宙に浮かんでいた。

「な、何だあれは!？」

俺が三つの光りを見ながらそう言うと、三つの光りは何処かへ飛んで行った。

side 航

「あれ、航のデジヴァイスが……」

「……今は言えない。」

また後で話す。」

俺の持っているデジヴァイスアルティメットバージョンを見てタケル達が驚きながら聞いてきたので、俺は大輔を横目で見ながら皆にそう言った。

すると皆は俺の言いたい事が分かってくれたので、其れ以上聞いては来なかった。

「俺も行かせてくれよ！」

太一さんがピンチなんだろ!？」

突然大輔が、俺達を見ながらそう頼んできた。

俺達は互いの顔を見合って、困った顔をして大輔を見た。

「そんな簡単に行ける所じゃないんだ。」

「無理でも何でも、俺は行くんだ！」

タケルが俺達の代表で大輔に無理だと言ったが、大輔は無理にでも行くと言って聞いてくれなかった。

大輔がそう言った瞬間、起動しているパソコンが光り出して其の

中から青・赤・黄色の光りが出てきた。

そして青色の光りは大輔の所へ行き、残りの二つは廊下から何処かに行った。

「こ、これは……」

すると大輔はパソコンから出てきた物を俺達に見せて聞いてきた。

「デジヴァイス!？」

「でも、私達のや航君のとは違う……」

タケルは大輔が持っていたデジヴァイスを見て驚き、ヒカリちゃんとは自分と俺のデジヴァイスを見ながらそう言った。

光子朗さんはデジヴァイスが出てきた画面を見ると、ゲートが開いていてデジタルワールドに行ける様になっていた。

「急ごう、太一さんが待ってる!」

「俺も行く。」

これで俺も行けるだろ。」

俺が皆にそう言うと、大輔が俺にデジヴァイスを見せながら聞いてきた。

「そうですね、もし其れが本当にデジヴァイスなら……」

すると光子朗さんが俺の代わりに大輔に答えてくれた。

……確か大輔のデジヴァイスはD-3だから、デジタルワールドに行けるよな。

じゃあ……

「俺が先に行くぜ！」

俺は皆にそう言ってパソコンにデジヴァイスアルティメットバー
ジョンを向けて、デジタルワールドに入って行った。

Side 光子朗

「俺が先に行くぜ！」

航君が僕達にそう言って、僕達のや大輔君と違う形をしたデジヴァイスをパソコンに向けてデジタルワールドに入って行った。

「私は行くわ！」

「僕も！」

ヒカリさんとタケル君はそう言ってデジヴァイスをパソコンを向けて、航君の後を追う様にデジタルワールドに向かって行きました。

「……どうします、大輔君？」

「……………俺だって！」

僕が残った大輔君に聞くと、大輔君は考えた顔をして直ぐに真剣な顔になってタケル君達の後を追いつけました。

僕もデジヴァイスをパソコンに向けようとした時……

「泉先輩!!」

「えっ!?!」

京君が走って戻ってきたので、僕は焦ってデジヴァイスを落としそうになりましたが、直ぐにデジヴァイスを後ろを隠しました。

「何だったんですか、今の光は!?!」

「な、何でもありませんよ!

あ、あはははははは!!」

……どうしよう、デジタルワールドに行けないよ。

京君、タイミングが悪過ぎます。

side航

「此処がデジタルワールド……
って、服が変わってる!?!」

俺達は無事にデジタルワールドに来て、大輔がデジタルワールドを見ながらそう言った。

そして其の後直ぐに自分の服を見て驚いた声を出したので、俺達は大輔の服装を見た。

「僕達のととは違うからかな？」

「其れだったら俺のも違うが、服装は全く変わってないぜ。」

タケルが大輔を見ながら俺に聞いてきたので、俺はデジヴァイスアルティメットバージョンを見せながらタケルに言った。

すると大輔を除く俺達のデジヴァイスが、ある方向に対して反応し始めた。

「……この方向に太一さんが居るんだな。」

「急ごう！」

俺は皆に聞こえる様にそう言うと、タケルが先頭になって太一さんが居る方角へ歩き出した。

俺とヒカリちゃんはタケルについて行き、大輔は挙動不審になりながら俺達の後を追ってきた。

………

………

………

………

「デジタルワールドって俺達の世界に似てるんだな。」

大輔が俺達の後ろで歩きながら、デジタルワールドを見てそう言ってきた。

すると一つの自動販売機が横に見えたが、俺達は其れを無視して止まらずに歩き続けた。

「こ、こんな物迄在るのか？」

大輔は自動販売機を見てそう言ったので、俺達は後ろを向いて大輔を見た。

其れと同時に自動販売機から沢山のヌメモンが出てきた。

「うわあああああああ！！！！！！？」

大輔は尻餅を付いてヌメモンに怯えてたので、タケルとヒカリちゃんとは普通に笑って俺は地面を叩きながら大輔を笑った。

そしてヌメモンが何処かへ行くと、大輔は恥ずかしそうな顔をしながら俺達を睨んできた。

「わ、笑うな！！」

其れから航、幾ら何でも笑い過ぎだ！！」

「ワリイワリイ。

……ププツ」

「笑うのを止めろって！」

俺は大輔と漫才の様な会話をしながら、太一さんが居る場所に向かった。

第九十三話だよ！（後書き）

次回は「勇気を受け継ぐ者 Part 3」です！

次回もお楽しみに！

第九十四話だよ！（前書き）

今回で漸く原作の第一話が終わった……

最後は完全にネタなのでご了承下さい。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第九十四話だよ！

「勇気を受け継ぐ者 P a r t 3」

S i d e 航

俺達は大輔を笑った後（俺は爆笑だが）、俺達に近付いてくる太一さんに向かって歩いていた。

「あれがデジモンなのか？」

すると大輔が、少しビビりながら俺達に聞いてきた。

「他にも沢山居るわ。

もっと可愛いのか。」

「もっと怖いのか。」

「もっと格好良いのか。」

ヒカリちゃん、タケル、俺の順番で大輔に教えた。
他にも美しい奴とかキモい奴とかe t c . . .

「タケルー!!」

「パタモン！
久しぶり！」

すると突然、前からタケルの名前を呼びながらパタモンが飛んできたので、タケルはパタモンを優しく受け止めて嬉しそうにパタモンにそう言った。

大輔がパタモンを見て大声を出して驚いていたが、俺達は大輔を無視して前を見た。

すると前から太一さん・アグモン・コロナモン・ルナモン・ティルモンが俺達の前迄走ってきた。

「皆、来てくれて助かったよ。」

「太一先輩、無事だったんですね!？」

「えっ、何で大輔が？」

太一さんが俺達の顔を見て嬉しそうな顔をして言ってきた時、大輔が先程の顔と打って変わって安心した顔をして太一さんにそう言った。

太一さんは大輔が此処に居る事を驚きながら俺達に説明を求めてきたが、俺達は苦笑いしか出来なかった。

「ヒカリ！」

「「航（君）！」」

すると太一さんの横に居たティルモン・コロナモン・ルナモンが

俺とヒカリちゃんの名前を呼んで抱き付いてきたので、俺とヒカリちゃんは優しく受け止めた。

「テイルモン！」

「コロナモン！
ルナモン！」

俺とヒカリちゃんはコロナモン達の名前を言って抱き締めると、テイルモンの尻尾に本来在る筈のホーリーリングが無い事に気が付いた。

「何が遭ったの？」

「ヒカリ、今は隠れる方が先だ。
此処に居たら奴等に見つかってしまうからな。」

ヒカリちゃんがテイルモンに今迄何が遭ったのかを聞いたが、太一さんがヒカリちゃんの顔を見てそう言った。

……確かに何時迄も此処をウロウロしてたら敵に見つかってしまうな。

「太一さん、何処か隠れられる場所は？」

「俺達がさっき迄隠れてた場所がある。
其処に隠れよう。」

俺が太一さんに隠れられる場所があるかを聞いたら、太一さんはさっき自分が歩いてきた方を見ながら俺に答えてくれた。

そして俺達は太一さんを先頭に隠れられる場所に向かって歩き出

した。

.....

.....

.....

.....

「私はユニモンの“ホーリーショット”を喰らってダメージを受けた。

そしてダメージを受けた私をユニモンは踏み潰そうとしてきたので、私は残った力を使ってユニモンの攻撃を避けた。

其の時にホーリーリングが外れたんだ。

私は何とか逃げる事が出来たが、あの“デジモンカイザー”と名乗る人間が次々とデジモン達を洗脳しているんだ。」

太一さんが案内してくれた洞窟の奥深くにやって来た俺達は、テイルモンからホーリーリングが無い理由と今のデジタルワールドの状況を教えて貰った。

「人間だって!？」

僕達の他にも、コッチに來ている人間が居るの?」

テイルモンの話を聞いたタケルが、本当に驚いた顔をしながらテイルモンに質問した。

デジモンカイザーって……確か選ばれし子供の一人である“一乗寺 賢”って奴だった様な?

デジモンカイザーになった理由は首に植え付けられた暗黒の種が

生長し始めたからだったよな？

でも、やってる事は屑以下のやってる事だな。

「嗚呼。」

ヒカリが持っているのとは違うデジヴァイスを持っていたわ。」

「其れって……」

テイルモンの話を聞いたタケルが、俺と大輔の顔を交互に見てきた。

俺のはティマーズに出てくるデジヴァイスアルティメットバージョンの形をしたデジヴァイスだぞ。

……でも、もしかしたらイレギュラーでデジモンカイザーのデジヴァイスも俺と同じなのかもしれないな。

「テイルモン、俺と大輔のドッチのデジヴァイスだ？

大輔、デジヴァイスを。」

「こ、これか？」

俺はデジヴァイスアルティメットバージョンをテイルモンに見せて、大輔にD-3を出す様に言った。

大輔は少し戸惑いながらもD-3を出して、皆に見える様に見せた。

「航のは違う。」

大輔と言ったな、お前が持っているデジヴァイスに似ている！」

「で、でもさ、これはさっきパソコンから出てきたんだぜ！？」

テイルモンは最初に俺を見て違うと言って、大輔の持っているD-3を指さしてそう言った。

俺はデジヴァイスアルティメットバージョンを違うと言われたので腰に付けた時、大輔が驚きながらテイルモンにそう言った。

すると大輔の話を聞いた太一さんが、突然険しい顔をして大輔を見た。

side 光子朗

「皆は何処に行ったんです？」

「だ、だから、帰ったんですって。」

京君に詰め寄られながら聞かれたので、僕は動揺しながら京君に嘘を吐きました。

すると京君は、僕の顔を怪しそうな顔をして見てきました。

「嘘！」

泉先輩、絶対何かを隠してる！

デジタルワールドって何処ですか！

デジモンって何ですか！」

京君にそう言われたので、僕は嘘がバレた事が悟られない様に出るだけ何時もの顔をしました。

ど、どうして僕は此処迄嘘を吐くのが苦手なんでしょうか？

だ、誰か、僕に嘘の吐き方を教えて下さい！

「コレ、何ですか？」

すると突然、京君がポケットから大輔君が持っていたデジヴァイスの色違いを僕に見せて聞いてきました。

ど、どうして……

「どうしてこれを？」

「伊織も持ってます。」

僕が京君に聞くと、京君は伊織君も持っていると教えてくれました。

大輔君に京君、其れに伊織君に新しいデジヴァイス……

三人が新しい選ばれし子供？

side 航

「あのデジヴァイスの所為で、私達は進化が出来なくなっているらしい。」

テイルモンは悔しそうな顔をして、握り拳を作りながら俺達にそう言ってきた。

……暗黒のデジヴァイス限定の力だったよな、進化を不可能にするのって……

「其れで進化が出来なかったのか……」

「進化さえ出来ればあんな奴！」

太一さんは進化出来なかった理由を聞いて納得し、アグモンは悔しそうな顔をしながらそう言った。

「私はホーリーリングを失ってパワーが半減してしまった。」

「僕はピヨモンやテントモンと離れ離れになっちゃった。」

するとテイルモンとパタモンが、自分の置かれている状況を俺達に教えてくれた。

「人間がデジモンを狩るなんて……自分がデジモンの王なんて……馬鹿みたい！」

ヒカリちゃんがデジモンカイザーの話聞いて、本当に怒った顔をしながらデジモンカイザーを馬鹿だと言った。

………チツ、

「コロナモン！」

俺は後ろを振り向いて宙に浮かんでいる黒いリングを指さしてコロナモンの名前を言うと、コロナモンは“コロフレイム”をして黒いリングを破壊した。

何時気付いたかと言うとパタモンが話している時で、余りにも苛ついたので不意打ちで攻撃したんだ。

ザマアねえな、デジモンカイザー！

Sideデジモンカイザー

「クッ、僕の監視を気付くなんて……！」

僕は椅子の肘置きを叩いて、監視を見つけられ更に破壊された事に苛立った。

僕のやっている事を馬鹿にされて黙っている訳にはいかない！

「消してやる！」

僕は操作パネルを操作して、デジモンを一体選択した。

「行け、モノクロモン！！」

僕は選択したデジモン・モノクロモンに奴等を消す様指示を出した。

Side航

「デジモンカイザーが監視してたのか。
……急いで此处を離れないとな。」

太一さんが破壊されて地面に落ちているリングを見て、冷静な判断をして俺達に指示を出してくれた。

「太一さん、あれは一体？」

俺は此処から出る前に、此処の中心にポツンと置かれている物を指さして聞いた。

「あつ、コレって勇気の紋章。」

「嗚呼、其れ凄く重いんだ。」

タケルが其れに描かれている勇気の紋章を見て驚いて、太一さんは今一分かっていなかったが自分が知ってる知識を教えてくれた。タケルは其れに近付いて、片膝を付いて思いつき其れを引っ張った。

だが、其れは動く気配が全く無かった。

「か、堅い……」

「そんなに小さいのに？」

タケルが情けない声を出してそう言うのと、ヒカリちゃんが其れに近付いてタケルと同様引っ張った。

だが結果は同じで、全く動く気配が無かった。

「何コレ、全然動かないじゃないの！」

……航君、試してみて？」

「俺か？」

ヒカリちゃんが俺に言ってきたので、俺はタケルとヒカリちゃんの間に入って其れを思いつき両手で握った。そして力の限り其れを引っこ抜こうとした。

ドガッ!!

「□□□□□□□□!!!!?」

だが全く其れは動かず、手が滑って勢い良く頭を地面にぶつけてしまった。

俺は余りの痛さに両手で頭を押さえて涙目になって、痛みが治まる迄動かない様にした。

イッテエ!!

マジでイッテエ!!

「そう言うのなら俺に任せろって!」

すると大輔が笑顔で俺達にそう言いながら其れに近付いて、真剣な顔をして其れを睨みつけた。

俺は頭を押さえてタケル達と一緒に大輔から離れて、大輔を見つめた。

……大輔、絶対に俺の二の舞えになるなよ。

大輔は気合いを入れて其れを思いっきり引っ張ると、其れは簡単に抜けて大輔は後ろに倒れた。

……チッ、

「イッテ、全然軽いじゃんか。

って航、何で残念そうな顔をしてるんだよ!?!」

「ゼンゼンザンネンソウジャンナイデスヨー……チッ。」

「片言過ぎるぞ！」

そして最後に舌打ちが聞こえたぞ！」

何だよ、お前は俺に異常にツツコミを入れてくるな。

そんなに俺とコンビを組んで漫才をしたいのか？

俺がそんなしょうもない事を考えていると、大輔が引っこ抜いた所の穴からオレンジの光が出てきた。

そして其の中から、一体のデジモンが現れた。

「ヤッホー！」

デジメンタルが抜けたぞー！」

すると其のデジモンは大輔の周りを飛び跳ねて、嬉しそうにそう言った。

俺達は其のデジモンに驚いて、言葉を発せなかった。

「俺、ブイモン！」

お前、名前何て言うんだ？」

「だ、大輔……」

「よろしくな大輔！」

俺、お前が来るのをずっと待ってたんだ！」

「俺を……？」

「そうさ！」

この“勇気のデジメンタル”を動かしてくれる子供をさ。」

大輔とデジモン・ブイモンは二人で勝手に話を進めていった。
……俺達、完全に忘れられてる？

ズドドドドッ！！

俺がそう思った瞬間、突然洞窟が大きく揺れ始めた。

「じ、地震か！？」

大輔は突然の地震に驚きながら俺達を見てきたが、俺達は上を見て地震の原因を見た。

「うわああああ！？」

怪獣だああ！？

「違う、あれもデジモンよ！」

「モノクロモンだ！」

大輔が突然現れたデジモン・モノクロモンに驚いた声で大声を出す、ヒカリちゃんとタケルが大輔にモノクロモンの事を教えた。

するとモノクロモンは下に落ちてきたので、デジモン達が俺達の前立って身構えた。

「エアースョット！」

「ベビーフレイム！」

パタモンは必殺技の“エアショット”を、アグモンは必殺技の“ベビーフレイム”をモノクロモンに放った。

だがモノクロモンには全く効いておらず、モノクロモンは必殺技の“ヴォルケーノストライク”を俺達に放ってきた。

「ダメだ、逃げよう！」

「大輔！」

タケルが勝てないと悟り逃げると言ってきたので、太一さんは大輔を呼んで急いで洞窟の外に向かって走り出した。

俺はコロナモンとルナモンを抱えて太一さんの後を追い掛けた。

side大輔

「大輔！」

太一先輩が俺の名前を呼んできたので、俺は急いで立ち上がってブイモンと一緒に太一先輩達の後を追い掛けた。

ヤバイヤバイ！！

炎が俺達に迫ってくるって！！

「大輔、早く勇気を出してくれよ！」

すると俺の横を走ってるブイモンが、突然俺に勇気を出す様言ってきた。

はあ？

勇気？

……まさかあの火に飛び込む勇気か？
其れは勇気じゃなくて死にたがりだ！！

「俺は未だ死にたくない！」

俺はブイモンにそう言って、更に走るスピードを上げて出口に向かった。

そして走っていると漸く外に出る事が出来たので、俺は両手を膝の上に乗せて呼吸を整えた。

「大輔エ、コッチだ！！」

すると前から太一先輩が俺を呼んできたので、俺は体を起こして太一先輩の所へ向かおうとした時……

「大輔、危ない！！」

「うわぁ！？」

すると突然ブイモンが俺を押し倒してきた、其の瞬間後ろから炎の弾が俺達の横を通った。

……し、死ぬかと思った。

「大輔、大丈夫か？」

「あ、嗚呼、ありがとう。」

ブイモンが俺の顔を心配そうな顔をして聞いてきたので、俺は起きあがってブイモンにお礼を言った。

「大輔、『デジメンタルアップ』って言ってくれ！」

「は？」

「大輔エ！！」

ブイモンが急に変な事を言い出したので、俺が間拔けな声で反応すると太一先輩が俺の所に来てくれた。

「大輔、無事か！？」

「ええ、何とか……」

「太一ィ、ヒカリが足を挫いたらしい！」

「何だって！？」

太一先輩が聞いてきたので俺は苦笑いをして答えると、タケルとパタモン？とアグモン？がヒカリちゃんが足を挫いたって教えてくれた。

「……………えっ！？」

「ヒカリちゃん！？」

俺は立ち上がってヒカリちゃんを見ると、ヒカリちゃんが足を抑えているのが見えた。

クソッ、さっきの攻撃でか！！

「大輔、『デジメンタルアップ』って言ってくれ！」

そうすれば進化が出来るんだ！」

「な、何だと！？」

ブイモンがまた変な事を俺に言ってくると、太一先輩が異常な反応を見せた。

な、何なんだよ！？

グオオオオオオオオオ！！！！

すると後ろからモノクロモン？が俺達を飛び越えて、ヒカリちゃんと航の所に向かって行った。

こ、このままじゃ二人は……

クソッ！！

俺は壊れたゴーグルを外して、手に持っている勇気のデジメンタルを見た。

そして、

「デジメンタルアップ！！」

俺は勇気のデジメンタルを掲げて叫んだ。

すると俺の持っていた勇気のデジメンタルと、俺の隣に居たブイモンが光り出した。

「ブイモン、アーマー進化ー！！！！

………燃え上がる勇気、フレイドラモン！！！！」

ブイモンは勇気のデジメンタルと合体して、勇気のデジメンタル

を体に纏ったフレイドラモンにアーマー進化した。

フレイドラモンは凄い跳躍力でヒカリちゃんと航の前に移動して、突進してくるモノクロモンを受け止めた。

す、スゲエ……

「オオオオリヤアアアアア！！！」

フレイドラモンは腕の力を使って、叫びながらモノクロモンを投げ飛ばした。

「イツケエ、フレイドラモン！！！」

俺はフレイドラモンを応援すると、フレイドラモンは俺を見て頷きモノクロモンに身構えた。

モノクロモンはフレイドラモンに視線を変えて、さっきの倍の速さでフレイドラモンに突っ込んだ。

フレイドラモンは力で負けて、モノクロモンによって空に飛ばされた。

「頑張れ、フレイドラモン！！！」

俺がフレイドラモンを応援すると、フレイドラモンが突然炎に体を包まれた。

だ、大丈夫なのかフレイドラモンは！？

「ファイアロケット！！！」

フレイドラモンは必殺技の様な言葉を言って、モノクロモンに向かって急降下した。

「黒いリングを狙うのよ!!」

するとテイルモンがフレイドラモンに指示を出したので、フレイドラモンはテイルモンの指示通り黒いリングを攻撃した。

フレイドラモンの攻撃を喰らった黒いリングは粉々に砕け、モノクロモンの目が赤色から普通の目に戻った。

そしてフレイドラモンがブイモンに戻ると、勇気のデジメンタルは俺のD-ターミナルに入って行った。

な、何とか勝てた……

sideデジモンカイザー

「まさか僕のデジヴァイスが在るにも関わらず進化をするとは……
そして僕のデジモンを倒すとは……

退屈しないで済みそうだ。」

僕はモニターで見ていた侵入者達の戦いを見て、退屈しないで済むと思ってデジモンリストを見た。

さて、次はどのデジモンを使おうか？

精々僕を退屈させない様に頑張ってくれよ。

「……賢ちゃん。」

すると後ろから“自称”僕のパートナーデジモンが、小さい声で僕の名前を呼んできた。

だが僕は其れを無視して、デジモンリストを確認した。

side 航

モノクロモンはデジモンカイザーの洗脳から解け、デジモンカイザーが居ない場所に向かって行った。

ヒカリちゃんは足を軽く挫いただけだが、もしもの事が遭ってはいけないので俺がヒカリちゃんをおんぶしている。

大輔が何か言ってきたが、太一さんにゴーグルを貰って頭から俺達の事が消えたらしく何も言って来なかった。

そして俺達は今、俺達がデジタルワールドにやって来たゲートに向かっている。

大輔は俺達の前でタケルにデジモンの事（殆どがヒカリちゃんの事だが……）を質問している。

太一さんは俺の横を歩いて、ヒカリちゃんを心配そうな顔をしながら歩いている。

そう言えば……

「太一さん、今日学校はどうしたんですか？」

「あっ……」

俺が太一さんに学校の事を聞いたら、太一さんは突然止まって汗を沢山出していた。

……サボったんですか、太一さん。

「空とヤマトは分かってくれると思うが、先生と母さんは絶対に分かってくれないよな……」

どうしよう、航、ヒカリ!？」

「どうしようって言われても……なあ？」

「うん……」

太一さんが俺とヒカリちゃんの顔を見ながら聞いてきたので、俺とヒカリちゃんは苦笑いしてそう言った。

「ゲートに着く前に理由を考えないと……」

「ゲートに着いたよ、お兄ちゃん。」

「嘘だアアアア!!?」

「あ、あははははは……」

俺達はそんな会話をしながら、ゲートを通して現実世界に戻った。現実世界には暢気にお萩を食べている光子朗さん・京さん・伊織君が居たが、京さんと伊織君は大輔と同じ新しい選ばれし子供だった。たので問題なかった。

只、太一さんが光子朗さんに頼んで上手い言い訳を考えて貰っていたが……

第九十四話だよ！（後書き）

次回は「デジタルゲートオープン Part 1」です！

次回もお楽しみに！！

第九十五話だよ！（前書き）

今回から原作の一話を二話に分けて書ける様に頑張っていくます。

今回は原作に航の話が追加されてますので。

其れと質問をします。

原作に一乗寺 賢とサッカーの試合をする話が在ります。

其のサッカーの話をこの小説でも書こうと思ってるんですが、イナズマイレブンの必殺技を使っても良いのかを質問します。

使うべきか使わないべきか、質問に答えて貰えると嬉しいです。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

第九十五話だよ！

「デジタルゲートオープン Part 1」

side 航

俺達は今、俺や太一さんの住んでいるマンションの近くに在る公園に來ている。

あの後に起こった事を簡単に、尚且つ短く説明するぜ。

俺達はデジタルワールドから現実世界に帰って來た時、京さんと伊織君が現実世界に居た。

二人も実は新しい選ばれし子供で、京さんがデジタルワールドに行こうと言ったが時間が時間だったので今日は解散し明日に行く事になった。

そして俺達旧選ばれし子供は今日起こった事を今日居なかったメンバーに伝える為に此処に集合したのだ。

あっ、其れと、太一さんの言い訳が出來たらしい。

太一さんのお母さんには本当の理由を言っ、先生にはお母さんと一緒に上手い言い訳を言うらしい。

成功すると良いですね、太一さん。

「ワリイ、遅くなった。」

するとギターを背負った金髪のお台場中学校の制服を着た男子生徒・石田 ヤマトさんが俺達に謝ってきた。

此処には俺・ヒカリちゃん・タケル・太一さん・空さん・光子朗さん・ヤマトさん・丈さんが集まった。

ミミさんはアメリカに居るので集まる事は出来なかったが……

「皆が揃ったの、久しぶりね。」

空さんが俺達の顔を一回見て、懐かしそうな顔をしながらそう言った。

懐かしい、確かに懐かしいが今日集まったのは懐かしむ為じゃない。

「其れじゃあ皆、今日起こった事を話し合うぜ。」

太一さんが真剣な顔をしながら俺達を見てそう言うのと、俺達も真剣な顔をして太一さんの言葉に頷いた。

side 三人称

此処はタケル・京・伊織が住んでいるマンション……

ブウン！

伊織の部屋のベランダで、伊織は竹刀を振っていた。

だが其の顔は竹刀を振る事に集中しておらず、別の何かを考えている顔だった。

「デジタルワールド、一体どんな所なんだろう？」

伊織は明日行くデジタルワールドを自分なりに様々な仮説を考えているが、聞いた事も見た事も無い世界・デジタルワールドに行くので期待半分不安半分の気持ちだった。

ブウン！

伊織はまた別の仮説を考えながら、竹刀を何度も振った。

だが伊織とは逆に伊織の部屋でパソコンしている京は、期待100%の気持ちだった。

「明日は絶対、デジタルワールドに行くんだから。」

京は小さい声でそう呟き、伊織のパソコンを修理しながら伊織の机に置かれた赤と黄色の二つのデジヴァイスを見た。

此処は大輔が住むマンションの大輔の部屋・・・

大輔は自分の部屋のベッドに転がり、サッカーボールを上にも何度か投げては受け止め投げては受け止めを繰り返していた。そして投げるのを止めて、大輔は部屋の天井を見た。

「アイツ、今頃何してるんだろ？」

大輔は今日初めて出会った・自分のパートナー・デジタルワールドに居るブイモンの顔を思い出しながらそう呟いた。

大輔は「明日も会えるから、其の時に聞けば良いか。」と独り言の様に言って風呂場に向かった。

side 航

「アーマー進化だって!？」

ヤマトさんが太一さんからアーマー進化の話を聞いて驚いた顔をして聞き返してきた。

空さん、丈さんもヤマトさんと同じで驚いた顔をしていた。

「嗚呼、見た事も無い進化だった。

アグモン達は進化出来なかったのに、大輔のデジモンだけ進化したんだ。」

太一さんは今日の事を思い出しながら、ヤマトさん達に自分が思った事を素直に言った。

「サッカークラブの大輔がデジタルワールドに？」

空さんは大輔がデジタルワールドに行った事に驚いた顔をしながら太一さんに聞いた。

空さんも元サッカークラブに所属していて、太一さんとFWをし

ていたから大輔の事を知ってるんだ。

「同じマンションの京さんと伊織君も、新しいデジヴァイスを持ってるんだ。」

するとタケルが、空さん達を見ながら京さんと伊織君の事を説明した。

おっと、俺の事も説明しとかないとな。

「今日の事には全く関係が無いんですが、俺のデジヴァイスの事も説明しときますね。」

俺はそう言って腰に付いた二つのデジヴァイスアルティメットバ―ジョンを皆に見せた。

「俺は今年の春休み、俺を転生させてくれた神様に神界に無理矢理移動させされました。

そして俺が行った原作ブレイクに勝手に感動して、俺のデジヴァイスをこの世界以外のデジヴァイスの力を追加してくれました。

なので皆とはデジヴァイスの形が違うんです。

そしてデジヴァイスの強化をしてくれた後、この世界に俺の知らない様々なイレギュラーが生まれたと教えてくれました。

俺一人で解決しなければならぬ事なんですが、俺一人にそんな力は全く在りません。

其の時は力を貸して下さい。」

「「「嗚呼（勿論）（当たり前だ）！」「」」

俺はデジヴァイスの形が違う理由を話し、様々なイレギュラーが生まれたと教えて、最後に力を貸して欲しいと頼むと皆が俺を見て

そう言ってくれた。

「ありがとうございます。」

この事は他言無用でお願いします、勿論大輔達にも。」

俺は皆にお礼を言ってそう言うのと、皆は真剣な顔をして無言で頷いてくれた。

「……それじゃあ其の三人が新しい選ばれし子供なのかい？」

丈さんが話を戻す為に俺達に聞いてくると、光子朗さんは「そうだと思います。」と言って太一さんは無言で頷いて丈さんの質問を肯定した。

「でも、其のデジモンカイザーが無差別にデジモン狩りをしているのなら、ピヨモン達は大丈夫なの？」

「……ミミさんもメールを送ってきたよ、パルモンが心配だって。」

空さんがピヨモン達の安否を心配して俺達に聞いてくると、ヒカリちゃんがさっきアメリカから送られてきたミミさんのメールを俺達に教えてくれた。

するとヤマトさんが何かを決意した顔をして俺達の顔を見てきた。

「俺達も行かないか、デジタルワールドに。」

ヤマトさんがデジタルワールドに行こうと提案してきたが、光子朗さんが浮かない顔をした。

「でも、部屋を出る時にはゲートは閉じてました。」

「其の点は大丈夫です。」

光子朗さんがゲートが閉じていたと言ったが、俺は光子朗さんが言った後にそう言った。

「俺のデジヴァイスはゲートを開く力が備わっています。」

もし、ゲートが閉じていたとしても俺がゲートを開けます。」

俺がそう言うと、皆が驚いた顔をしながら俺の顔を見てきた。

「ほ、ホントなのか、航？」

「ええ、駄神がミスをせずにちゃんとデジヴァイスを強化してれば行けますよ。」

ヤマトさんが俺に聞いてきたので、俺は其れを肯定してデジヴァイスアルティメットバージョンを見た。

強化されてからちゃんと試した事が無いから本当に行けるかどうかは分からないが、もしミスをしていなければD-3の力でゲートを開ける事が出来るからな。

「兎に角、明日にパソコン部のパソコンを調べみようと思うんです。もしゲートが閉じていたとしても、航君のデジヴァイスの力をテストすれば良いだけですからね。」

「そうだな。」

俺も行くよ。」

「私も行くわ。」

光子朗さんが俺達にそう言った後、太一さんと空さんがデジタルワールドに行く事を言ってくれた。

俺・ヒカリちゃん・タケルも頷いてデジタルワールドに行く事を言った。

だけど、丈さんとヤマトさんだけ浮かない顔をした。

「ごめん、僕は明日全国模試が在って……」

「俺も今日、バンドの練習サボっちまったからな……」

丈さんは全国模試、ヤマトさんはバンドの練習が在るので明日は参加出来ないと言ってきた。

丈さんもヤマトさんもしょうがないですよ、急に起こった事なんですから。

原作知識の在った俺も全く分からなかったんですからね……

「分かった。」

俺達に任せておいてくれよ。」

太一さんは椅子から立ち上がって、丈さんとヤマトさんを見ながらそう言った。

「何か遭ったら直ぐに知らせてくれよ?」

「嗚呼。」

ヤマトさんが真剣な顔で太一さんや俺達の顔を見て頼んできたので、俺達は頷いて太一さんはそう言って肯定した。

そして今日は解散となって、俺・ヒカリちゃん・太一さんは一緒

にマンションに入って行った。

「……航、お前が覚えてる事で役立つ情報は無いのか？」

すると突然、太一さんが俺に聞いてきた。

……役立つ情報……か。

「もう原作の殆ど忘れていて、覚えている知識もアヤフヤで……。其れにこの世界は俺の知識は余り役立ちません。すいません。」

「気にするな、航が気にする事じゃないからな。」

俺は素直な事を太一さんに伝えて謝ると、太一さんは気にしていないと言った顔をして俺にそう言ってくれた。

覚えているのは主要キャラの名前と大まかなストーリーの流れ、しかも主要キャラの過去・ストーリーの重要な部分は殆ど忘れて余り役に立たない。

はあ、こんな事なら駄神の所で格好付けずに原作を観た方が良かったのか？

俺はそう思いながら歩いていると、何時の間にか家の扉の前迄来ていた。

「其れじゃあ航、また明日な。」

「航君、じゃあね！」

「あつ、うん、太一さん・ヒカリちゃん、また明日。」

俺達は挨拶をして家に入った。

ふう、今日は濃い一日だったな……
否、今日から濃い一日になるのか……

「お帰り、航。」

「ただいま、母さん。」

俺は母さんに挨拶して、自分の部屋に入って駄神から送られたデジモンのカードを出した。

何枚在るのは分からないが、少しずつ増えて行ってるのは分かる。

「さて、カード編成でもしとくか。」

俺はそう言ってカードを床に並べて、使えそうなカードを探して持っていくカードを編成した。

………

………

………

………

………

………

………

：

あれから時間が経って、今は皆が帰っている放課後だ。
俺と光子朗さんは一足先にパソコンルームに来ていた。

光子朗さんはパソコンを使ってゲートが開いているか確認しているが、ゲートは何度確かめても閉じられたままだった。

「……やはりゲートは閉じたままか。」

ガラッ！

「あれ、泉先輩？」

光子朗さんがそう呟いた時、パソコンルームの扉が開いて京さんと伊織君が入ってきた。

「お邪魔してます。」

ちよっと昨日の事が、どうしても気になって……」

「僕も夕べは眠れませんでした。」

今日こそ連れて行って下さい、デジタルワールドに。」

光子朗さんは二人にそう言うと、二人は俺達に近付いてきて伊織君が光子朗さんの顔を見ながらそう言った。

「でもゲートが……えっ？」

「どうしたんですか、光子朗さん？」

光子朗さんが二人にゲートが閉じてある事を言おうとパソコンの画面を見た時、光子朗さんが変な声を出したので俺は何が在ったのかを光子朗さんに聞いた。

俺は光子朗さんの隣に移動してパソコンの画面を見ると、ゲートが開いていた。

「ゲートが……開いた。」

光子朗さんがそう言った時、大輔を先頭とする今日のメンバーがやって来た。

「いよっす！」

大輔が俺達に挨拶をしてきたので、俺達は大輔達の所に移動した。そして大輔、京さん、伊織君は空さんにD-3を見せた。

「これが新しいデジヴァイス？」

「嗚呼、俺が勇気のデジメンタルから出した新しいデジヴァイスだ。」

空さんが不思議そうに大輔達のD-3を見ながら聞くと、太一さんが空さんにそう言った。

「ねえねえ、速く行きましようよデジタルワールドに！」

「デジタルワールドはおつかないぞ。」

「一回行っただけで偉そうに言わないでよ！」

「多少の危険は覚悟の上です。」

大輔、京さん、伊織君はデジタルワールドをピクニックか何かと勘違いしているのか、何とも緊張感の無い会話をしていた。

太一さんは三人を見て呆れて、空さんは困った顔をしていた。

「他のパソコンに問題は在りません。

どうやら、このパソコンにだけ局地的なゲートが開かれているんです。

でも、二日続けてゲートが開かれる事、今迄に在りませんでした。」

光子朗さんは他のパソコンを見てそう言った後、ゲートが開かれているパソコンの前の椅子に座って俺達にそう言った。

確か、ゲートが開かれるのはD-3の力で、D-3の力を使えばどのパソコンでもゲートを開けるんだったよな？

そして、D-3が近付けば起動しているパソコンにゲートを開ける事が出来る。

でも、俺のデジヴァイスはずっと近くに在ったのに開かなかったって事は駄神がミスをしたんだろう。

……あのクソ駄神が……

「兎に角行こうぜ、デジタルワールドn「おお、八神じゃないか！えっ？」

大輔が俺達にデジタルワールドに行こうと言おうとしたが、誰かが大輔の言葉を遮って太一さんと呼んだ。

俺達は声が聞こえたパソコンルームの出入り口に顔を向けると、其処には眼鏡を掛けたお台場小学校の先生が立っていた。

「藤山先生！」

「武ノ内に泉迄、卒業生が集まって何してるんだ？」

太一さんが眼鏡を掛けた先生・藤山先生の名前を言うと、藤山先生は空さんと光子朗さんの顔を見て三人にそう言いながら近付いてきた。

「せ、先生こそ何しに來たのさ？」

太一さんが藤山先生に聞くと、藤山先生は両手を腰に当て胸を張った。

「俺はパソコン部の顧問だ。」

「「せ、先生パソコン出来るの!？」」

藤山先生が太一さんの質問に答えると、太一さんと空さんは先生の言葉に声を揃えて驚いた。

「勿論出来ん。」

「「……はあ。」」

先生の質問の答えを聞いて、太一さんと空さんは溜め息を同時に吐いて顔を下に向けた。

すると太一さんが何かを思いついた顔をして、藤山先生を押して行った。

「あ、あのさ俺、先生に聞いて欲しい事が在るんだ。」

「な、何だ？」

「最近俺、中学の授業に付いて行けなくて……此処じゃなんだからさ。」

太一さんは藤岡先生に見えない様に俺達にピースをして、藤岡先生と何処かへ行った。

「サンキュー、太一。」

空さんは太一さんにお礼を言って、俺達は光子朗さん達の方を見た。

「其れじゃあ今の内に。」

光子朗さんがそう言ったので、俺達はゲートが開いているパソコンの前に並んで、デジヴァイスを出した。

そして俺達は、デジタルワールドに入って行った。

第九十五話だよ！（後書き）

次回は「デジタルゲートオープン Part 2」を予定しています。

次回もお楽しみに！

第九十六話だよ！（前書き）

過去最多の長さだよ、今回の話は……

自分でもビックリだね！！

あつ、ホルスモンVSスナイモン、ディグモンVSドリモゲモンの
戦闘描写は無しなので……

理由は簡単に言うと本編でも短かったから。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第九十六話だよ！

「デジタルゲートオープン Part 2」

side 航

俺達は平原が広がり、遠くには山が幾つも続く場所にやって来た。初めてデジタルワールドにやって来た京さんと伊織君は、辺りを見渡して不思議そうにデジタルワールドを見ていた。

「此処がデジタルワールド……あれ？
服が変わってる……!？」

伊織君はデジタルワールドを見た後、自分の服が変わってる事に気付いて驚いた顔をして服を見ながらそう言った。

京さんも自分の服が変わってる事に驚いた顔をしたが、直ぐに何時もの顔になって服を確認した。

「うわー、何か格好良い……!」

「見て見て、俺の格好……!」

「まあまあね、私の方が格好良いわ。」

「俺の方が格好良いに決まってるよ!」

「僕の中々です!」

大輔・京さん・伊織君は、自分の服が一番格好良いと張り合って言っていた。

はぁ、皆は此処が現実世界と違って危険な場所って事が分かってるのか?

俺は三人に呆れて溜め息を吐くと、タケルは苦笑いをして俺の肩に手を置いてくれた。

「何かすっかり変わってるのね、今度の選ばれし子供達は。」

……時代なのかしら?」

「そんな、お年寄りみたいに言わないで下さい。」

空さんが大輔達の姿を見て驚きながらそう言うと、ヒカリちゃん
が笑いながら空さんにそう言った。

時代って……三年でデジタルワールドが急成長した事になります
よ、空さん。

大輔達新選ばれし子供達はピクニック気分で、俺達旧選ばれし子
供達は何とも言えない気分でデジモン達を探し始めた。

「ピヨモン!」

「テントモン!」

空さんはピヨモンの名前を、光子朗さんはテントモンの名前を呼
びながら平原を歩いていた。

sideデジモンカイザー

「フフフフ、待っていたよ。」

僕は目の前に在る画面に映し出された奴等を見て、笑ってアイツ等には聞こえないけどそう言った。

僕はコントロールパネルを操作して、一体のデジモンを選択した。

「さあ、ゲームを始めよう。

行け、スナイモン！」

僕は選択したデジモン・スナイモンにそう命令して画面に映し出されたアイツ等を見た。

さあ、僕を楽しませてくれよ。

side航

「ブイモン、何処に居るんだー！！
ブイモンー！！」

「大輔ー！！」

大輔が両手をメガホン代わりにして大声でブイモンを呼んでいる

と、俺達の前からブイモンの声が聞こえてきた。

大輔はブイモンの声を聞いて嬉しそうな顔をして、前から走ってくるブイモンに近付いた。

「大輔！」

「ブイモン！」

大輔とブイモンは互いに近付いて固い握手をして、再会の嬉しさを喜び合った。

するとブイモンが笑って後ろを見たので、俺達はブイモンに釣られてブイモンの後ろを見た。

「パタモン達の仲間、見つけたぜ！」

ブイモンがそう言うと、ブイモンの後ろからピヨモン・テントモン・パタモン・テイルモン・コロナモン・ルナモンの姿が見えた。空さんと光子朗さんは、ピヨモンとテントモンを見て喜んだ顔をした。

「テントモン！」

「ピヨモン！」

光子朗さんはテントモンの名を、空さんはピヨモンの名を言って二体に近付いた。

そして互いに近付いて、嬉しそうな顔をして再会の喜びを分かち合った。

「テントモン！」

「光子朗はん、元気そうで何よりでんな！」

「ピヨモン！」

「会いたかったよ、空！」

「私もよ！」

光子朗さんと空さんがデジモンに会えた事に喜んでいると、俺達の居る場所に巨大な何かの影が突然現れた。

俺は急いで上を見ると、両手の鎌を構えたデジモンカイザーに操られているスナイモンが飛んでいた。

するとスナイモンは空さんとピヨモンに突っ込もうとしたので、俺は急いで空さんに向かって走り出した。

「空さん、伏せて！！！」

俺は走っている勢いを殺さずに空さんを押して倒して、空さんの盾になる様になってスナイモンの攻撃を避けた。

京さんはスナイモンの突然の攻撃に怯えながらも体を屈めて、皆も無事にスナイモンの攻撃を避けた。

そしてデジモン達はスナイモンに攻撃する為に立ち上がったたり飛んだりして、それぞれの必殺技をスナイモンに向けて放った。

「マジカルファイアー！！！」

「プチサンダー！！！」

「エアーショット！！！」

「コロナフレイム!!」

「ティアーシュート!!」

ピヨモンは必殺技の“マジカルファイアー”を、テントモンは必殺技の“プチサンダー”を、パタモンは必殺技の“エアースョット”を、コロナモンは必殺技の“コロナフレイム”を、ルナモンは必殺技の“ティアーシュート”をスナイモンに放ったが、スナイモンは素早い動きで皆の必殺技を簡単に避けた。

「ネコパンチ!!」

テイルモンは飛び上がって必殺技の“ネコパンチ”をしたが、ホーリーリングが無い為威力が小さくカウンターを喰らった。

俺は急いで地面に叩きつけられたテイルモンを抱っこしてヒカリちゃんにテイルモンを預け、コロナモンのデジヴァイスアルティメットバージョンと一枚のカードを取り出した。

クッ、駄神よこの機能もミスしてたらホントにO・H A・N A・S H Iだから!!

「チックシヨウ、アーマー進化してやっつけてやる!!」

大輔、デジメンタル!!」

「応!!」

俺がカードスラッシュしようとした時、ブイモンがアーマー進化してスナイモンと戦うと言って大輔にデジメンタルを要求した。

大輔はブイモンの要求に従う為に自分のD-3を胸ポケットから取り出して、ブイモンをアーマー進化させようとした。

すると突然、大輔の足下の地面が地割れを起こして、大輔は地割れの中に落ちて行った。

「うわあああああああああ!!!!!!」

「大輔!？」

大輔が叫びながら落ちて行ったので、俺はコロナモンのデジヴァイスアルティメットバージョンとカードを直して、大輔が落ちて行った地割れの中を見た。

大輔は地割れの中の岩の出っ張りを掴んでいて、大輔の下にはデジモンカイザーに操られたドリモゲモンが居た。

すると今度は森の方からデジモンカイザーに操られたモジャモンが現れて、地割れの中に居る大輔を心配しながら見ているブイモンに必殺技の“骨々ブーメラン”を放った。

「骨々ブーメラン!!」

「ぶ、ブイモン!!」

「!？」

う、うわあああああああああ!!!!!!?」

俺はブイモンに危険を知らせたが、知らせるのが少し遅れてブイモンは“骨々ブーメラン”を喰らって地割れの中に落ちて行った。

「ブイモン!!」

大輔は岩の出っ張りを離してブイモンの尻尾を掴んだが、ドリモゲモンが大輔達を捕まえて地面の中に消えて行った。

すると京さんと伊織君は大輔が連れて行かれるのを見て京さんは膝を付いて、二人は恐怖で体が震えていた。

「う、嘘……地面の中に吸い込まれちゃった……」

「た、助けなきゃ……」

二人は震えながらそう言ったが、今の状況で大輔達を助けに行くのは不可能に近い。

俺達は直ぐに京さんと伊織君の周りに集まった。

「此処は一先ず逃げましょう！」

「で、でも大輔さんが……」

光子朗さんが二人にそう言うが、二人は大輔の事で頭が一杯でその場を動こうとしなかった。

デジモン達は必死にデジモンカイザーに操られたデジモン達を攻撃して、俺達が逃げれる時間を作ってくれているがそう長くは保たない。

「此処で私達が捕まったら、大輔を助ける事だって出来ないのよ!!！さあ、速く!!！」

空さんは京さんにそう言って京さんの腕を引っ張るが、京さんは動こうとはしなかった。

するとデジモンカイザーに操られたデジモン達が俺達に近付いてきた。

「こんなの………こんなの………嫌アアアア!!！」

京さんが涙を流して叫んで立ち上がったので、俺達は急いで森に向かって逃げ出した。

チッ、俺一人なら戦えるが今は皆が居て戦う事が出来ねェ!!

side大輔

・

・
・
・

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

「……う、ううん……はぁ!?!」

俺は重たい目蓋を頑張って開けて状況を確認すると、俺は何処かの山に捕まっていた。

「こ、これは……?」

「目が覚めたかい?」

俺が小さい声でそう呟くと、上から誰かの声が聞こえてきた。

「誰だ!」

俺は顔を上に向けて聞くと、RPGに出てくる敵キャラの様な格好をした俺と同じ年位の少年が立っていた。

「フフフ、こんな簡単に捕まるなんてね。
もっと骨の在る奴かと思ったのに残念だよ。」

「お前がデジモンカイザーか!？」

「そうさ。」

俺が厨二病の格好をした少年に聞くと、厨二病の格好をした少年は間を開けずに俺に答えた。

デジモンカイザーって太一さん達と同じ位だと思ってたのに……

「俺と同じ子供じゃねェか!!」

俺がデジモンカイザーにツツコムと、デジモンカイザーは声を出して笑い出した。

……頭のネジが抜けたのか、アイツ?

「あっはっはっ、君と同じだって？」

冗談じゃない、僕と君とじゃ大違いだよ。

其の証拠に……」

デジモンカイザーは其処で話すのを止めて指を鳴らすと、俺の前の崖に小さな扉が現れて其処から俺と同じで捕まったブイモンが現れた。

「ブイモン!？」

「大輔!!」

えへへ、捕まっちゃった。」

「チクショウ、アーマー進化さえ出来れば……」

「其れは無理だよ。

これが無いと何も出来ないんだろ？

君達は……」

「な!？」

俺が進化さえ出来ればと言ったら、デジモンカイザーが俺のデジヴァイスとDターミナルを持って俺にそう言ってきたので、俺は驚いた声を出してデジモンカイザーを見た。

side航

俺達はデジモンカイザーに操られたデジモンを上手く撒いて、森の中を只管へひたすら歩いている。

ピッ　ピッ　ピッ

「あれ？」

すると突然、京さんと伊織君が何かに反応して音を出した。

二人はデジヴァイスを取り出して、デジヴァイスの画面を不思議そうに見た。

「これ何ですか？」

デジヴァイスが反応してる……」

伊織君がそう言ったので、俺達はデジヴァイスを取り出して確認したが、俺達のデジヴァイスは何の反応もしてなかった。

「僕達のデジヴァイスには何の反応もしてないけど……」

「私達のも……」

タケルと空さんがそう言うのと、ピヨモンとテントモンが何か心当たりが在る様な顔をした。

「やっぱり、あれの所為？」

「間違いおまへん。」

「あれ？」

ピヨモンとテントモンがそんな会話をしたので、空さんがピヨモンとテントモンに聞くとピヨモンとテントモンは後ろを向いた。

「皆、付いて来て！」

ピヨモンは俺達にそう言って歩き出したので、俺達はピヨモンに黙って付いて行った。

そして少し歩いたら、拓けた場所に出て何かの神殿が在った。

「あ、あれは……」

「まるで、マヤ遺跡のピラミッドの様ですね。」

光子朗さんが謎の遺跡を見て驚いて、伊織君が現実世界に在るマヤ遺跡のピラミッドの様だと言った。

俺達は遺跡の階段を上って、遺跡の中に入って一本道の通路を進んで行った。

そして遺跡の奥に付くと、祭壇に二つのデジメンタルが置かれていた。

「あれを見て、空。」

「あ、あれはデジメンタル！」

俺達は急いで祭壇に置かれてあるデジメンタルに近付くと、京さんと伊織君が持っているD-3の音が速くなった。

「この卵の様な物に反応してます。」

伊織君が俺達にそう言うと、空さんと光子朗さんはデジメンタルに刻まれた紋章を見て驚いた顔をした。

「これ、愛情の紋章だわ！」

「これは知識の紋章！」

二つのデジメンタルに刻まれた紋章は、空さんの“愛情の紋章”と光子朗さんの“知識の紋章”だった。

空さんと幸四郎さんは互いの顔を見合ってデジメンタルを掴んで、力一杯抜こうとしたがデジメンタルは全く動かなかった。

「……ダメだわ。」

「重くて持ち上がらない。」

二人はそう呟いた後、何かを思い出した顔をして京さんと伊織君を見た。

「京ちゃん、試してみて。」

「伊織君も。」

「えっ、私が？」

「あっ、はい。」

空さんと光子朗さんに呼ばれた京さんと伊織君は、少し驚いた顔をしてデジメンタルに近付いてデジメンタルを握った。

そしてデジメンタルを持ち上げると、二つのデジメンタルは簡単に持ち上がった。

「……持ち上がった。」

「大輔君の時と同じだ。」

俺達はデジメンタルが動いた事に驚いて、ヒカリちゃんとタケルは大輔の時の事を思い出してそう言った。

すると突然、デジメンタルが在った場所から赤と紫の光が出てき

た。

そして赤色の方から鳥の姿をしたデジモン、紫の方からアルマジロの姿をしたデジモンが出てきた。

「トォ！」

「ダギャア！」

二体はそう言って祭壇から降りてきて、鳥の姿をしたデジモンは京さんの前に・アルマジロの姿をしたデジモンは伊織君の前に立った。

「私の名はホークモン、貴方が来るのを待っていました。」

「ち、ちよつと……」

鳥の姿をしたデジモン・ホークモンは京さんに礼儀正しく自己紹介したが、京さんは余りにも突然の事だったので驚いた顔をした。

「ふああ、よう寝た。」

俺を起こしてくれたのはおみやか？

俺の名前はアルマジモン、感謝するだぎゃ。」

「あっ、うん。」

アルマジロの姿をしたデジモン・アルマジモンは名古屋弁で感謝と自己紹介をしたが、伊織君は京さんと同じで驚いた顔をした。

「さあ京さん、私と一緒に戦いましょう！」

「ち、ちょっと待ってよ！
わ、私、戦うなんて出来ない！」

ホークモンは京さんに提案したが、京さんは後ずさりをして戦う事を拒否した。

「おや、其れは困った……」

ホークモンが本当に困った顔をしたが、空さんは優しい笑みを浮かべて京さんの手を優しく包んだ。

「空さん？」

「前にも、ミミちゃんって子が同じ事を言ってた。

『戦いなんて嫌だ』って、『誰かが傷付くのなんて見たくない』って。

私だって嫌……だけど何時か、デジモンと出会えてホントに良かったって、一緒に冒険出来てホントに良かったなって思える日がきくと来るから。

だから頑張ってる。」

空さんは自分の体験を京さんに優しい笑みを浮かべて話して、最後に京さんを心から応援した。

すると京さんは、自分の手を包んでくれている空さんの手を見た。

「空さんの手、暖かい。」

京さんはそう言って、何かを決意した顔をして空さんの顔を見た。

「伊織君はデジタルワールドの事、どう思ってるの？」

「どうって、未だ分かりません。
来たばかりだし……」

光子朗さんは難しそうな顔をした伊織君に話し掛けると、伊織君は難しい顔をしながら光子朗さんの質問に答えた。

「でも、考えているんでしょう？」

「はい。」

僕なりに仮説を立ててみました、でも次から次へと疑問が浮かんできて、知りたい事は一杯在るのに……」

光子朗さんの質問に素直に答える伊織君を見て、光子朗さんは嬉しそうな顔をして伊織君を見た。

「伊織君も知りたがる心を一杯持っているんですね。
思った通りだ。」

「知りたがる心？」

光子朗さんがそう言うと、伊織君は鸚鵡返しの様に光子朗さんに聞いた。

「分からない事が在れば何でも聞いて下さい、僕達は仲間です。
何時でも力になります、一緒に考えましょう！」

「はい！」

光子朗さんが伊織君にそう言うと、伊織君は何かが吹っ切れた顔

をした。

そして京さんと伊織君はホークモンとアルマジモンの方に向くと、二人が持っている愛情のデジメンタルと知識のデジメンタルが光り出した。

「さあ京さん、伊織君、『デジメンタルアップ!』と叫んで下さい。」

ホークモンが二人にそう言うのと、二人は真剣な顔をした。
そして……

「『デジメンタルアップ!』」

二人がそう叫ぶと、ホークモンと愛情のデジメンタル・アルマジモンと知識のデジメンタルが光り出した。

「ホークモン、アーマー進化ー!!!!」

……羽ばたく愛情、ホルスモン!!!!」

「アルマジモン、アーマー進化ー!!!!」

……鋼の英知、ディグモン!!!!」

ホークモンはホルスモンに、アルマジモンはディグモンにアーマー進化した。

「さ、私達の仲間を助けに行きましょう!」

ホルスモンとディグモンの威圧感に言葉を失ったが、直ぐに正気に戻って大輔とブイモンの居る場所に向かった。

side大輔

「チクショウ、俺のデジヴァイスを返せェ！
ブイモンを離せェ！」

「そうはいかないね。
人ん家に勝手に入ってきた罰だ、君のデジモンが私の手下になる瞬間を見せてあげるよ。」

俺は大声を出してデジモンカイザーに言ったが、デジモンカイザーは俺を小馬鹿にした様な言い方でそう言って指を鳴らした。
するとブイモンの上に黒いリングが現れた。

「や、止めろオ！！」

俺がデジモンカイザーに止めろと言ったが、デジモンカイザーはずっと笑っていた。

だけどブイモンは今にも操られそうなのに、真剣な顔をしてデジモンカイザーを睨み付けていた。

「へっ、やれるものならやってみろ！
けど、俺はお前の手下なんかにはならないぜ！」

「……何だって。」

ブイモンがデジモンカイザーにそう言うと、デジモンカイザーは

笑うのを止めてブイモンを睨んだ……と思う。

「俺はずっと待ってた、大輔と会うのをずっと待ってたんだ。だから、大輔に会ったばかりでお前なんかの手下になってたまるかよ！」

「……ブイモン。」

俺はブイモンの言葉を聞いて、自分の無力さに苛立ちを覚えてブイモンの名前を言った。

だが黒いリングは止まる事無く、ドンドンブイモンに近付いていた。

「だったら今、試してあげるよ。」

「止めろオオオオオ……！」

「レッドサン……！」

ドツカアアアアアン……！！

俺が叫んだ瞬間、誰かの声が聞こえたと思ったら赤い二つの光線が黒いリングに当たって、黒いリングが爆発した。

「な、何！？」

「大輔……！！」

「京ー!!」

デジモンカイザーの驚いた声が聞こえたと同時に、京の声が聞こえたので俺は喜んだ声で京の名前を言った。

するとブイモンが捕まっていた部分の壁に罅が入っていき、ブイモンは黄色の昆虫の様なデジモンに助けられた。

「助けに来ただぎゃ!」

「助かったぜ!」

Side航

俺達は無事に大輔とブイモンを救出したので、デジモンカイザーが何処かへ行こうとしたので俺達は道を塞いだ。

「此処から先は通さない。」

「諦めな、厨二病。」

俺とテイルモンがそう言うのと、何処からかワームモンが現れてデジモンカイザーの前に立った。

「賢ちゃんには指一本触れさせない!」

ワームモンはそう言って俺達に突っ込んで来たが、テイルモンがワームモンの顔に必殺技の“ネコパンチ”を放った。
うわー、マジで痛そうだな。

ワームモンはデジモンカイザーに向かってぶっ飛ばされ、デジモンカイザーとぶつかった。

其のお陰で、大輔のD-3とDターミナルが落ちた。

「しまったア!？」

「サンキュー!」

だが落ちた大輔のD-3とDターミナルは京さんがキャッチしたので、デジモンカイザーは苛立った顔をして俺達を睨んできた。

「邪魔だアア!！」

デジモンカイザーが手に持っている鞭でテイルモンを捕まえ様としたが、俺がテイルモンの前に立って鞭を掴んだ。

この程度の鞭、ヴァンデモンの攻撃の方が何倍も痛い!

「クソがつ!!！」

「うわっ!？」

「航!？」

だがデジモンカイザーは槌子の原理を使ったのか、俺を崖に落としやがった。

テイルモンは俺が落とされたのを見て、直ぐに俺の背中に乗ってきた。

アイツ、人間離れにも程が在るだろ!

「大丈夫だぎゃ?」

「あ、嗚呼、助かったよデイグモン。」

俺達はデイグモンにキャッチされ、死ぬ事は無かったがマジでヤバかったな……

「出よ、スナイモン！

モジャモン！

ドリモゲモン！」

デジモンカイザーが三体のデジモンの名前を呼ぶと、三体のデジモンが現れて俺達を囲んだ。

「デジモンカイザーの奴め！」

「大輔、はい。」

「おっ、サンキュー。」

よし反撃開始だ、行くぜブイモン！」

大輔は京さんからD-3とDターミナルを受け取って、ブイモンを見てそう言った。

「応！」

「デジメンタルアップ！！」

ブイモンが大輔にそう応えて、大輔がそう叫ぶと大輔のD-3とブイモンが光り出した。

「ブイモン、アーマー進化ー!!!」

……燃え上がる勇氣、フレイドラモン!!!!」

ブイモンはフレイドラモンにアーマー進化した。

「京さん、しっかり掴まって!」

「オツケー!」

ホルスモンは京さんにそう言って、飛んでくるスナイモンに向かった。

「黒いリングを壊すんだ。

そうすれば皆、正氣に戻る!」

「了解!」

フレイドラモンはホルスモンにそう言うのと、ホルスモンは了承して空を飛んで行った。

するとドリモゲモンが地面を掘って地中に潜り出したので、ディグモンがドリモゲモンの後について行った。

「待たんがや!」

そしてディグモンが地中に潜った後、残ったモジャモンが俺達に氷で出来た槍を放つ必殺技・“アイスロッド”を放ってきた。

フレイドラモンは俺達の前に立って、爪に熱を溜め始めた。

「氷なら炎だ。」

そう言つてモジャモンの“アイスロッド”をキャッチすると、“アイスロッド”は一瞬で蒸発して消えた。

モジャモンは驚いた顔をしてフレイドラモンを見た。

「ナックルファイア!!」

フレイドラモンは腕から炎の玉を放つ必殺技・“ナックルファイア”を放った。

モジャモンは“ナックルファイア”を喰らって、黒いリングが破壊された。

「やったぜフレイドラモン!!」

ドッカアアアアアン!!!!!! ×2

すると別々の所から、爆発音が二つ聞こえてきた。

ふう、無事にスナイモンとドリモゲモンのリングを破壊したのか。俺は安心して皆を見た。

Sideデジモンカイザー

「フッフッフ、そうでなくては面白くない。」

僕は椅子に座って、アイツ等の戦いを見てそう言った。

このままデジタルワールドを征服するだけじゃ物足りなかったん

だ。

多少のイレギュラーが在ったとは言え、こうでなくては面白くない。

さあ、次はどんなデジモンで遊んでやろうか？

ふっははははは！！！

side航

「大丈夫か？

ゴメンな、ああするしか手が無かったんだ。」

ブイモンは正気に戻ったスナイモン・ドリモゲモン・モジャモンにそう言った。

「否、これ位の痛み、デジモンカイザーの手下になる苦しみに比べたら何とも無いわい。」

モジャモンはそう言って、三体はデジモンカイザーが居ないエリアに向かって歩き出した。

「デジモンカイザーの奴、何か俺！
スッゲエ頭に来ちゃったぜ！

「京さん？」えっ？

大輔が喋っているのにも関わらず、ホークモンが京さんに話し掛けた。

……ドンマイ、大輔。

つとそうだ、光子朗さんに伝えとかないとな。

「光子朗さん？」

「どうしたんですか？」

「大輔達のデジヴァイスには、ゲートを開く機能が在ります。」

「!？」

「俺のデジヴァイスにも在る筈なんですが、今日で俺のデジヴァイスにはそんな機能が無い事が分かりました。

……あの駄神、少しO・H A・N A・S H Iしないといけねエなア。

」

「わ、航君、キャラが壊れてますよ。」

「……まあ兎も角、今はこの事は他言無用で。」

「わ、分かりました。」

俺達は何だかんだ在って、現実世界に帰った。

はぁ、疲れた……

S i d e 太一

「はぁ、参った参った。」

俺は疲れてそう言いながら、パソコンルームに向かって歩いていった。

最初は俺が藤山先生に話してたのに、途中から藤山先生が熱く話し出して長くなってしまった。

するとパソコンルームが光り出して、皆の悲鳴が聞こえてきた。

俺は急いでパソコンルームの入り口に行くと、皆が倒れて山になっていた。

「皆、無事か!？」

「「ぶ、無事でーす」」

俺が皆に聞くと、皆は声を揃えてそう答えてくれた。

……ん？

「デジモン達迄連れて来たのか!？」

「ええ？

……ええ!？」

「キヤー、可愛い!!」

「別に連れて来た訳ではありません。

勝手に付いて来たんです。

でも、何でこんな形に？」

俺がそう言うと、大輔は驚いた顔をして頭に乗っているデジモンを見て、京は抱っこしているデジモンに頬擦りしながら興奮して、伊織だけが俺の質問に真面目に答えてくれた。

どうすんだ、デジモン達が来たから家に連れて帰らねえとダメだぞ。

俺がそんな事を考えていたら、空達がピヨモンとデジモンカイザーの事を話していた。

……ってあれ？

航と光子朗は？

「「み、皆さん、すみませんが速く退いて下さァァい！！！」」

あつ、一番下に埋もれてた。

俺達は取り敢えず航と光子朗を助けて、時間が時間だったので今日は家に帰ってまた後日話し合いをする事にした。

第九十六話だよ！（後書き）

次回は『アンケート』をします。

次回もお楽しみに！！

アンケートor質問だよ！（前書き）

デジモンの声優に付いて・・・

八神太一役の人は、『キテレツ大百科』の木手英一や『地獄先生ぬ〜べ〜』の立野広の声をしている。

デジモンの声優では空の母の武ノ内淑子の声をしていた。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

アンケートor質問だよ！

松上「タイトル通り！」

航「行き成りどうしたんだ？」

松上「まあネタが切れたと言うか助けを求めたいと言うか……」

航「意味が分からん。」

松上「これからのこの小説の展開に関わる。」

航「超重要じゃねェか!？」

松上「そうだぞ。」

航「おまつ……否、お前はそう言う奴だから何も言わない。」

松上「言えないの間違いだろ? (笑)」

ブチッ!!

航「八神 ヒカリ流O・H A・N A・S H Iをしてやろうか? (黒
笑み)」

松上「すいませんでしたアアア!!! orz」

航「……阿呆な事をしてないで速くアンケートと質問をしろよ。
時間が勿体無いだろ。」

松上「まあ字数稼ぎはこの位にしてだな。」

航「おい。」

松上「今回、この様な話を作ったのにはちゃんとした理由が在ります。

其れは以下の事をアンケート、そして質問するからです。

このアンケートには誰でも参加出来ます。

参加の仕方は感想に書いてくれたらOKです！

感想を初めて書く人も大歓迎！！

全部のアンケート、質問に答えてくれると嬉しいです。

其れでは、質問スタート！！」

1. この小説のPVが110万を超えたので、何か記念的な話を作るべきか。

2. この小説でコラボをした方が良いか。した方が良いたら、誰かコラボをしてくれる人を大募集！！

3. 原作には無いオリジナルの話を作った方が良いか。
4. 航とヒカリ、太一と空をもっとイチャイチャさせるべきか。
5. 本来死ぬ筈の02キャラを生存√にした方が良いか。
6. チンロンモン以外の四聖獣も出した方が良いか。
7. 02に本来出てこないデジモンを出して良いか。
8. ベリアルヴァンデモンの戦いが終わり、ディアボロモンの逆襲の話が終わったら、其の後の話を少し書いた方が良いか。
9. 02のEDは25年後の世界なので、航も大人になっている。其処で、航は大人で何の仕事させた方が良いか。（これは絶対に答えて欲しい。）
10. この小説が完結したら、この小説の続編を読みたいか。（予定ではティマーズ、次にフロンティア、其の次にセイバーズ、最後にクロスウォーズ）

松上「以上です。」

航「ちよつと待てやゴラアアア！」

松上「ん、何だ？」

航「何だじゃねエよ!!」
途中、変な質問が在ったぞ!!」

松上「えっ、マジ？」

「……何処にも無いじゃん。」

航「9の質問は何だ!？」

「お前が普通は考えなきやダメだろ！！」

松上「煩い煩い煩アアい！！！！」

俺だつて頑張つて考えたんだよ、考えたけど良い仕事がい付かなかつたんだよ！！」

航
「
:
:
:
:
:
:
ハ
ア
。
」

松上「溜め息を吐くな！
でも、結構真面目な質問も在っただろ！？」

航「……うん、在ったね。」

松上「あゝ、スツゲエムカつく。

まあ良いわ、質問とアンケートに答えて貰えると嬉しいです。
この小説のストーリーを考えるのは貴方だ!」

航「アウトー!」

ペシッ!

松上「イテッ!!」

アンケートor質問だよ！（後書き）

今回は『デジメンタルアップ Part1』です！

次回もお楽しみに！

第九十七話だよ！（前書き）

アグモンの声優の人は、『地獄先生ぬ〜べ〜』ではゆきべ〜を、『ポケットモンスター』では波乗りピカチュウを演じた。

デジモン関係では、無印ではタケルの母親の高石奈津子を、デジモンクロスウォーズではシャウトモンを演じた。

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

第九十七話だよ！

『デジメンタルアップ Part 1』

side 航

「ただいま。」

「「お帰り。」」

俺は家の扉を開けてそう言うと、中から二人が俺にそう返事をしてくれた。

あの後、現実世界にやって来たデジモン達は取り敢えずパソコンルームに隠れて貰い、今日は解散する事になったんだ。

そして太一さんとヒカリちゃんと一緒に帰って来て、家の前で別れて帰って来た訳だ。

俺は靴を脱いでリビングに移動すると、晩ご飯を作っている母さんとテレビを観ている父さんが居た。

父さん、今日は仕事が終わるのが速いな……俺が帰るのが遅いだけか？

「航、貴方に手紙が来てたわよ。」

俺は父さんを横目で見ながら自分の部屋に行こうとした時、母さんが晩飯を作るのを止めて封筒を俺に渡してきた。

俺は母さんから封筒を受け取って差出人を確認すると、其処には『神田 様太』と言う文字と狸の絵が書かれていた。

「神田 様太さんって珍しいわね。

それに狸の絵も可愛いし……新しい友達？」

「あ、嗚呼。

四年の時に転校した奴なんだ。」

母さんが頬笑みながら俺に聞いてきたので、俺は苦笑いをしながら母さんにそう言って封筒を持って自分の部屋に入った。

そして椅子に座って封筒を開けると、中から数枚の手紙が出てきた。

俺は急いで手紙を綺麗に整えて、『神田 様太』から、否、『駄神』からの手紙を読み始めた。

『久しぶりじゃの、加藤 航。

お主なら簡単に解けたと思ったが、お主を転生させた神様じゃ。』

俺はその後の文を目で読んで行くと自分の自慢話だったので、俺は一枚目の手紙を丸めてゴミ箱に捨てた。

『……っと、まあワシの話は置いといて、お主に伝えなければならん事が在る。

お主の新しいデジヴァイス、デジヴァイスアルティメットバージョンの追加機能に付いてじゃ。

先ず始めに、すまなかった!!

余りにも高性能なデジヴァイスが行き成り世界に入ってきた所為で、世界の容量をオーバーして完全に使えない機能や今は使えない機能が在るんじゃない。

先ず完全に使えない機能は、テイマーズの究極体に一緒に進化する機能、フロンティアの十闘士に進化する機能じゃ。

そして今は使えない機能は、02のデジタルゲートを開ける機能、完全体以上のデジモンカードのカードスラッシュ、クロスウォーズのデジクロス機能じゃ。

今は使えない機能は、日が進むにつれて世界に馴染んで行くからその内使える様になるじゃろ。

まあ世界がその機能が必要とした時は使えるかもしれない……

まあ今使える機能で頑張ってくれ！

さらばじゃー！！

心優しい素敵な神様より

」

・

・

・

・

「あのクソ駄目神がアアアアアアアア！！！！」

俺は手紙を粉々に破いて投げ捨て、天界に居るクソ駄目神に大声で叫んだ。

何の為に新しい機能を付けたんだよ！？

殆どの機能が使えないじゃねェか！！

アイツ、次に会った時は絶対に八神ヒカリ流O・HA・NA・S

HIをしてやる!!

えっ?

何をするかって?

……世の中には知らなくても良い事が在るんだぜ?

「あっはっはっはっはっ!!!!」

「……どうしようアナタ、航が可笑しくなっちゃった。」

「大丈夫だ、あれが思春期と言う時期だ。」

年頃の子はあんな感じになるんだ。

俺達は航を優しく支えて行こう。」

「か、勘違いしないでくれエエエエ!!!!」

俺達はそんな漫才の様な会話を一夜を過ごした。

………

………

………

………

そんな漫才の様な夜の翌日、時刻は放課後で俺達五年生組はパソコンルームに向かっている。

俺は昨日、勘違いした父さんと母さんを睡眠時間を削って説得したので、少し寝不足で今も眠たい。

俺は欠伸しながら歩いていると、何時の間にかパソコンルームの

入り口に來ていた。

そして大輔がパソコンルームの扉を少し開けた。

「……大輔？」

すると中からデジモンの声が聞こえてきたので、大輔は扉を開けてパソコンルームの中を確認した。

「居るか？」

「大輔ー！！」

大輔が中に居るデジモン達に声を掛けると、青と白の体をしたデジモンが大輔の名前を呼びながら大輔に抱き付いた。

俺達は他の人にバレない様にパソコンルームに急いで入った。

「おお、皆元気だったかー？」

するとパソコンルームに隠れていたデジモン達が出てきて、俺達の顔を見てきた。

大輔に抱き付いているのがブイモンが退化したチビモン、京さんと伊織君が居ない事に不思議そうな顔をしているのがホークモンが退化したポロモンとアルマジモンが退化したウパモン、そしてコロナモン・ルナモン・パタモン・テイルモンだ。

「京さんは？」

「伊織は来んのきゃ？」

するとポロモンとウパモンが、京さんと伊織君の事を俺達に聞い

てきた。

「大丈夫、二人とも来てくれるよ。」

ヒカリちゃんがポロモンとウパモンに頬笑みながらそう言うのと、誰かがパソコンルームに向かって走って来ている音が聞こえてきた。

「おっ、来た来た。」

大輔がそう言っただけで後ろを見たので、俺達も大輔に釣られて後ろを見た。

「お待ちせー！
お土産だよー！」

すると京さんが沢山の食べ物や飲み物が入ったコンビニの袋をデジモン達に見せながらそう言った。

「そう言えば京さん家、コンビニなんだっけ？」

「家がコンビニとか良いよなー！
何時でもお菓子食い放題じゃん！」

タケルが思い出したかの様に京さんに言うと、大輔が京さんに羨ましそうな声でそう言った。

京さんはデジモン達に袋を渡すと、微妙な顔をしながら大輔を見た。

「それでも無いよ。
それに手伝いとかさせられるしさ。」

「これでも結構大変なのよ。」

「ふーん。」

京さんが家がコンビニだと辛い事を大輔に教えると、大輔が関心した声でそう言った。

俺は苦勞してる京さんを想像しながら、コンビニの袋を不思議そうに見ているデジモンを見た。

「これ何？」

「食べられるんでしょうか？」

「食べられるよ、美味しいよ！」

チビモンとポロモンが疑問に思った事を言うと、パタモンが二体の疑問に答えて袋の中から今流行りの『CHU×2ゼリー』を飲み出した。

「食ってみるだぎゃ！」

するとウパモンがそう言って袋の中に入って、『CHU×2ゼリー』を飲み出した。

テイルモンは呆れた顔で、コロナモンとルナモンは苦笑いをしてウパモンを見ていた。

……テイルモン、顔が凄い事になってるから帰ってこい。

……コロナモン、ルナモン、速く食べたり飲んだりしないと無くなるぞ。

「……何だか先が思いやられる。」

テイルモンはチビモン達を見ながらそう言って、俺達の顔を見てきた。

俺とタケルはテイルモンに同情した顔をしながら無言で頷いた。

「所で、ゲート開いてる？」

「あっ、待って！」

大輔が京さんにゲートが開いているか聞くと、京さんは何時ものパソコンの前に行ってパソコンを起動させた。

「……開いているわ！」

「よし、行くぞ！」

京さんの言葉を聞いて、大輔がパソコンの前に移動して俺達にそう言ってきた。

……ってちよつと待てよ。

「ちよつと待てよ、大輔。」

「伊織君が未だよ。」

「伊織？」

何してんだ、アイツ？」

俺とヒカリちゃんが大輔にそう言うと、大輔が伊織君の事を忘れていたのか俺達に伊織君の事を聞いてきた。

おいおい、同じ選ばれし子供なのに忘れるなよ……

「さっき様子を見に行ったら、給食を全部食べる迄帰らないって頑張ってた。」

「何だよー、調子狂うなー。」

「テレビでもつけて待ってましょ。」

ヒカリちゃんが伊織君が居ない理由を言うと、大輔が困った顔をしながらそう言ったので京さんが俺達にそう提案してきた。

まっ、それが一番時間を潰せそうだな。

「そうしましょ。」

何かやってる？」

俺達は京さんの居るパソコンの前に移動して、パソコンで今放送しているニュースを観た。

……これ、天才と言われた一乗寺 賢の特集じゃねェか。

……やっぱ目が人を馬鹿にした様な目をしてやがる、暗黒の種の影響とは言えこれは酷いな。

そう思いながらデジモン達の方に顔を向けたら、それと同時に伊織君がパソコンルームに入ってきた。

俺は笑顔で手を上げて伊織君に挨拶をすると、伊織君は頭を下げて俺に挨拶をしてウパモンと遊んでパソコンのニュースを観た。

「それにしても、ホントに一乗寺 賢さんみたいな人って居るんですね。」

「あれ、何時来たの？」

「あつ、さつき。」

伊織君が一乗寺 賢に素直な感想を言うと、皆が伊織君に漸く氣付いて伊織君の顔を見た。

否、どれだけニュースに集中してたんだよ皆……

「でも凄いよ、ホントに天才なんだ。」

タケルが画面に映る一乗寺 賢を観て、ホントに感心した顔でそう言うと京さんがパソコンを消した。

あつ、ちよつと怒ってるな、あの顔は……

「フン、ちよつとしたプログラム位、私だって書けるわよ！」

「でも、スポーツ万能だってよ。」

京さんが腕組みをしてそう言うと、大輔が京さんにツッコんだ。
だ、大輔がツッコんだ……だと？

「航、何だその顔は！？」

「な、何でも無いぜよ。」

「絶対に何か思ってるだろ！！

現に語尾が可笑しいぞ！！」

だ、大輔が此処迄ツッコみスキルが高いとは……

これが駄神が言ってたイレギュラーって奴か？

「ヒカリ。」

「デジタルワールド、どうなったかな？」

するとテイルモンとパタモンが、俺達にデジタルワールドの事を聞いてきた。

こんな所で阿呆な事をしてる場合じゃねエな。

「そうだね、伊織君も揃った事だし……」

そして俺達はデジヴァイスをゲートの開いているパソコンに向けて、デジタルワールドに入って行った。

side 三人称

此処は東京のとある街……

此処には今、世間では天才と騒がれている一乗寺 賢が歩いていた。

一乗寺は一人で無言で歩いていると、突然立ち止まった。

何故なら、小犬が一乗寺の靴を舐めていたからだ。

だが一乗寺は、小犬をゴミを見る様な目で見てテレビに出ていた顔とは全く違う顔をしていた。

「……靴が汚れる。」

一乗寺はそう呟いて小犬を蹴ると、小犬は鳴きながら走って逃げて行った。

一乗寺は不気味に笑いながら小犬を見て、再び歩き出して自分の家に帰ってきた。

「賢ちゃん、ママね、もう直ぐパートに行かなくちゃいけないからおやつ此処に置いてくね。」

一乗寺の母が頬笑みながら一乗寺にそう言うが、一乗寺は興味が無い顔をして自分の部屋に歩いて行った。

そして彼はパソコンを起動させ、部屋から消えた。

side 航

俺達は無事にデジタルワールドに着くと、チビモン達が進化してブイモン達になっていた。

「あつ、元に戻ってる。」

「デジタルワールドに戻ると戻るんだぎゃ。」

伊織君が驚きながらアルマジモン達を見てそう言うのと、アルマジモンが伊織君にそう言った。

ピッ ピッ ピッ

すると突然、俺達全員のデジヴァイスが反応し始めた。

「何これ？」

「デジメンタルです！」

ヒカリちゃんがデジヴァイスの画面を見ながら聞くと、伊織君がヒカリちゃんの疑問に答えた。

「デジメンタル？」

するとブイモン達が不思議そうな顔をしながら、俺達に聞いてきた。

デジヴァイスはデジメンタルに反応して、音がドンドン速くなっていた。

「近くにデジメンタルが在るんです！」

「未だ他にデジメンタルが在るのか？」

「どう言う事？」

伊織君の推理に大輔が質問して、話しに付いて行けない京さんが二人に聞いた。

……此処もデジモンカイザーが侵略したエリアなのか。

俺は遠くにそびえ立つダークタワーを見ながらそう思い、大輔達の顔を見た。

「急いで探そう。」

此処もデジモンカイザーの侵略された地域なんだ、何時襲って来るか分かんねェからな。」

「そうだな、急いで探そう。」

俺が皆にそう言っていると皆は頷いて、大輔が先頭になってデジメンタルを探す為に歩き出した。

第九十七話だよ！（後書き）

次回は『デジメンタルアップ Part 2』です！

次回もお楽しみに！

第九十八話だよ！（前書き）

石田ヤマト役の人は、『ロックマンエグゼAXESS』ではスパークマン役を、『創聖のアクレリオン』ではグレン・アンダーソン役を、『流星のロックマン トライブ』ではイエティ役をやった。

デジモン関係ではガジモンやメタルシードラモン役をした。

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

第九十八話だよ！

『デジメンタルアップ Part 2』

Side 航

「何処お？」

「多分この辺りだと思うんですが……」

俺達は歩きながらデジヴァイスが反応する場所に向かっていたら、京さんが少し疲れた様な声で俺達に聞いてきて伊織君が代表して答えてくれた。

しかし、この辺りに反応しているのに其れらしい建造物や洞窟は見当たらないな……

「今度はどんなデジモンが生まれるのかな？」

「んー、想像付かんだぎゃ。」

するとタケルが今迄の事を踏まえて次に生まれるデジモンに付いてそう言うのと、アルマジモンがタケルの疑問に素直に答えた。

「でもそれって、他にも選ばれし子供が居るって事？」

「さあ、私達にも分かりません。」

タケルとアルマジモンの話を聞いたヒカリちゃんが仮定を考えて俺達に言ったが、ホークモンが代表してそう言った。

否、デジメンタルを持つ新しい選ばれし子供はイレギュラーが起こらない限りは存在しない筈だ。

もしかしたら、俺達が向かっている場所に在るデジメンタルは……

「何をしている！！」

俺が頭の中で仮定を考えていると、突然横から誰かの声が聞こえた。

俺達は声の聞こえた方に顔を向けると、其処には立体映像のデジモンカイザーが立っていた。

「出た！？」

すると京さんがデジモンカイザーを見て、まるでお化けが出た様な言い方でそう言った。

……京さん、もう少し緊張感を持ちましょうよ。

「あっ、テツメエ！

この間はよくも！！」

大輔は俺達の前に来て前の出来事で頭が一杯だったのか、そう言いながら拳を構えて立体映像のデジモンカイザーに殴り掛かった。だがデジモンカイザーは立体映像、実体では無いので大輔は拳を

空振りしてデジモンカイザーをすり抜けて地面に転けた。

「これは立体映像だ、実体じゃ無い！」

「君達のように愚かな人間が、どうしてこの世界に出入り出来るんだ。」

タケルがデジモンカイザーに身構えながら大輔にそう言うと、デジモンカイザーは俺達を馬鹿にした様な言い方でそう言ってきた。コイツ、ホントにデジタルワールドの王様になった気分で居るんだな。

デジタルワールドの神はイグドラシル、そしてその下に四聖獣やロイヤルナイツなどのデジモンが居るのに……

「本当なら此処には、選ばれた者しか入って来れない筈なんだよ。」

「「「……ええっ!?!」」」

デジモンカイザーが俺達にそう言うと、俺と大輔を除く皆が驚いた声を出してデジモンカイザーを見た。

すると大輔が立ち上がり、デジモンカイザーに拳を構えて睨みつけた。

「じゃあ何でお前が此処に居るんだ!!」

「……それは僕が選ばれし子供だからだよ。」

大輔が大声を出してデジモンカイザーに聞くと、デジモンカイザーは少し間を開けて自分が選ばれし子供だと言った。

すると俺以外の全員がデジモンカイザーの言葉を聞いて驚いた顔

をして、俺は警戒しながらデジモンカイザーを睨み付けた。

「選ばれし子供!？」

「貴方も!？」

タケルとヒカリちゃんがデジモンカイザーが選ばれし子供だと言う驚きながらそう言ったが、デジモンカイザーの顔はサングラス越しでも分かる位不愉快な顔をしていた。

「兎に角君達の存在は僕を不愉快にさせる、君達と僕がまるで同じ扱いを受けているみたいだ。」

「同じ扱いを受けてるから選ばれし子供になったんだろうが、厨二病。」

デジモンカイザーの言葉を聞いて少し切れた俺は、立体映像だと分かっていても立体映像に殺気を放ってそう言った。

暗黒の種の影響とは言え、此処迄馬鹿にされたら流石に俺も黙って聞いていられねエよ。

俺だけを馬鹿にされたのなら未だ黙っていたが、タケルやヒカリちゃんと言った俺の大切な仲間達が馬鹿にされたのなら尚更切れるに決まっているだろう。

俺がそう言った瞬間立体映像は消えて、木と木の間からデジモンカイザーに操られたティラノモンとティラノモンの肩に乗ったデジモンカイザーが現れた。

「選ばれし子供と言うのは僕のような完璧な人間の事を言うんだ! 君達じゃない。」

「この世界に完璧な人間が居ると思っているのか!？」

「一体何様のつもりなんだ!？」

デジモンカイザーが偉そうにそう言ってきたので、俺とタケルはデジモンカイザーを睨みながら（俺は殺気を放ちながら）そう言った。

「僕は完璧な人間だ！」

それに此処は僕のデジタルワールドだ、速く出て行け！」

「何それ!!」

デジモンカイザーが俺とタケルの言葉にそう答えて、俺達を見下しながらそう言った。

だが俺達は余りにも餓鬼の考える事十厨二病患者の言いそうな言葉を聞いて、デジモンカイザーに呆れて京さんが俺達を代表してデジモンカイザーにそう言った。

「僕のゲームを邪魔するのなら、それ相当の仕打ちをせざるを得ないな。」

殺れ、ティラノモン!!」

デジモンカイザーが俺達にそう言ってティラノモンに指示を出すと、ティラノモンが俺達に必殺技の“ファイアブレス”を放ってきた。

「危ない!!」

ヒカリちゃんがそう言って俺達は走って“ファイアブレス”を避

け、デジモンカイザーを睨み付けた。

「何するんだよ!!」

「……………フン。」

大輔が握り拳を作りながらデジモンカイザーに聞くが、デジモンカイザーは鼻で笑って何も答えなかった。

「行くぜ、大輔!」

「嗚呼!」

するとブイモンが大輔にそう言うのと、大輔はブイモンに応えてD-3を取り出した。

そして……

「デジメンタルアップ!!」

大輔がそう叫ぶと、大輔のD-3とDターミナル・ブイモンが光り出した。

「ブイモン、アーマー進化ー!!!」

……………燃え上がる勇氣、フレイドラモン!!!」

そしてブイモンは勇氣のデジメンタルと一体化し、フレイドラモンにアーマー進化した。

「フン、何度も同じ手が通用すると思っているのか？
これだから頭の悪い奴は嫌だよ。」

「そうだな。」

「何納得してんだよ、航!!」

デジモンカイザーがティラノモンの肩から飛び降りてほくそ笑みながら大輔にそう言って、俺は思わずデジモンカイザーの言葉に納得してしまい、声に出していたらしく大輔にツッコまれた。

大輔のツッコみスキルは高いな……

「しかし、ホントに頭に来る奴だな!」

「……ティラノモン。」

大輔が俺にツッコんだ後デジモンカイザーに苛立ちながらそう言うのと、デジモンカイザーが不気味に頬笑みながらティラノモンに指示を出した。

するとティラノモンは走ってフレイドラモンに近付き、大きな手でフレイドラモンを殴り飛ばした。

「うわああああ!!」

フレイドラモンは叫びながら吹っ飛んで行ったが、空中で体制を整えて勢いを殺さずに木を蹴って上空に飛んだ。

「ナックルファイア!!」

フレイドラモンは必殺技の“ナックルファイア”をティラノモンに放ったが、ティラノモンは尻尾を振って“ナックルファイア”を消した。

「何!？」

チクショウ!」

大輔はフレイドラモンの“ナックルファイア”が簡単に防がれて、驚いた顔と悔しそうな顔が混じった顔をした。

すると京さんとホークモン・伊織君とアルマジモンが身構えた。

「京さん。」

「うん!

デジメンタルアップ!」

ホークモンが京さんに話し掛けると、京さんはD-3を掲げてそう叫んだ。

すると京さんのD-3とDターミナル・ホークモンが光り出した。

「ホークモン、アーマー進化ー!!!!

……羽ばたく愛情、ホルスモン!!!!」

ホークモンは愛情のデジメンタルと一体化して、ホルスモンにアーマー進化した。

そして京さんはホルスモンに跨がり、ホルスモンはティラノモンに向かって走って行った。

ティラノモンは何度も必殺技の“ファイアブレス”を放ったが、ホルスモンは紙一重で避けていった。

「レッドサン!」

ホルスモンは得意技の“レッドサン”をティラノモンに放ち、テ

イラノモンは“レッドサン”を喰らって地面に倒れた。

「数が多ければ良いと思っているのか？
出てこい、我が下部達よ！」

デジモンカイザーがそう言うのと、俺達の後ろの木の陰からティラノモンが数体現れた。

そして現れたティラノモンによって、俺達は完全に囲まれてしまった。

チッ、完全に“袋の鼠”状態じゃねェか！！

「アルマジモン、頼みます！」

「任せるだぎゃ！」

「デジメンタルアップ！！」

伊織君がアルマジモンにそう言ってアルマジモンがそう応えると、伊織君はD-3を掲げてそう言った。

すると伊織君のD-3とDターミナル・アルマジモンが光り出した。

「アルマジモン、アーマー進化ー！！！！

……鋼の英知、ディグモン！！！！」

アルマジモンは知識のデジメンタルと一体化し、ディグモンにアーマー進化した。

「どうして私達は進化出来ないんだ！？」

「僕達だって戦いたい！」

テイルモンとパタモンが、悔しそうな顔をしながらデジモンカイザーを睨んでそう言った。

するとデジモンカイザーは、二体の言葉を聞いて不気味に頬笑んだ。

「この暗黒デジヴァイスが在る限り、君達は進化出来ない。下部達、あの四匹を集中攻撃しろ！！」

「な、何だって！？」

デジモンカイザーが進化出来ない理由を言って、進化出来ないコロナモン・ルナモン・パタモン・テイルモンを集中攻撃する様ティラノモン達に指示を出した。

そんな卑劣な事をさせるかよ！！

俺は二枚のカードと二個のデジヴァイスアルティメットバージョンを取り出した。

そして、

「カードスラッシュ！！」

一枚ずつデジヴァイスアルティメットバージョンにスキャンさせた。

「グレイモン、メガフレイム！！」

ガルルモン、フォックスファイアー！！」

「メガフレイム！！」

「フォックスファイアー!!」

俺がそう叫ぶと、コロナモンはグレイモンの必殺技の“メガフレイム”を・ルナモンはガルモンの必殺技の“フォックスファイアー”をティラノモン達に放った。

偶々持ち合わせていた成熟期クラスのカード、ホントに入れといて良かったぜ。

「ば、馬鹿な!？」

グレイモンでもガルモンでも無い奴等が、“メガフレイム”と“フォックスファイアー”を使えるなんて!!」

「タケル、ヒカリちゃん!

今直ぐパタモンとテイルモンを連れて逃げろ!」

デジモンカイザーがパニックっている今なら、パタモンとテイルモンを逃がす事が出来ると考えて俺は二人にそう言った。

パタモンとテイルモンは自分が足手纏いと分かっていて、悔しそうな顔をしながら二人の所に来たがヒカリちゃんが動こうとはしなかった。

「何してるんだ!!」

俺達が時間を稼ぐから、急いで此処から離れるんだ!!」

「でも、航君や皆が……!!」

「ヒカリちゃん、今の僕達じゃ皆の足手纏いになるだけだ!」

俺がタケルに目で合図をしながらヒカリちゃんにそう言うが、ヒカリちゃんは動こうとはしなかったので、タケルがヒカリちゃんに

そう言ってヒカリちゃんの手を引っ張って走り出した。

パタモンとティルモンも、二人の後を追い掛けていった。

「伊織君、二人が向かった場所はデジメンタルが在る場所だ！」

デジメンタルに賭けるしか勝ち目が無い、だから二人に付いて行ってくれ！」

「わ、分かりました！」

俺は伊織君にデジヴァイスアルティメットバージョンの画面を見ながらそう指示を出すと、伊織君は俺の指示に従って二人の後を追い掛けた。

「貴様、一体何をしたア！！！」

するとティラノモンの肩に乗ったデジモンカイザーが、苛立ちながら俺の前にやって来てそう言った。

「誰がテメエなんか教えるかよ！！！」

俺はそう言ってティラノモンの攻撃を避けて、デジモン達に今出る最善の指示を出した。

だが、一体のティラノモンがタケル達の後を追い掛けて行った。

チッ、数が多過ぎてタケル達の後を追い掛けて行ったティラノモンに攻撃が出来ねェ！

無事で居てくれよ、皆……

sideタケル

「エアースョット!!」

パタモンは僕達の後を追い掛けて来たティラノモンに必殺技の“エアースョット”を放った。

だけど、パタモンが放った“エアースョット”は全くティラノモンには喰らっていないかった。

「逃げよう!」

ティルモンがそう言ったので、僕達と僕達の後を追い掛けて来た伊織君は全速力で逃げた。

そして少し走っていると森から抜けて、不自然な所に出来た洞窟が在った。

怪しさ満点だったけど、今はそれを気にしている余裕は無かったので僕達はその洞窟の中に入った。

僕達は洞窟の中に入って息を殺してティラノモンが過ぎるのを待っている、ティラノモンの足音が遠くなっていくのを聞いて僕達は荒れた呼吸を整える為に何度も深呼吸をした。

「あれは……!」

すると伊織君が洞窟の奥で何かを見つけたのかそんな声を出したので、僕達は立ち上がって洞窟の奥を見た。

洞窟の奥には太陽の光で光っている二つのデジメンタルが在った。

「デジメンタルよ!」

「と言う事はあのデジメンタルを持ち上げたら、また新しいデジモ

ンが生まれるのかな？」

「でも、選ばれし子供は居ないわ……」

「僕達じゃ役に立てないんだね……」

僕達は自分の無力さに落ち込みながらデジメンタルに近付いた。そしてデジメンタルを見ると、僕の“希望の紋章”とヒカリちゃんの“光の紋章”が描かれていた。

「これは二人のデジメンタルでは！？」

「タケル、デジメンタルを持ち上げてみて！」

すると紋章に気付いたテイルモンとパタモンが、僕達にそう言うてきた。

「えっ……」

「ダメで元々、やってみて！」

「ダメ！」

私達には持ち上がらない！」

「良いから！」

それに、速くしないと航達が！」

僕とヒカリちゃんはテイルモンに説得され、デジメンタルに近付いた。

その瞬間、ズボンのポケットに入っていた僕とヒカリちゃんのデ

ジヴァイスが光り出した。

そしてデジヴァイスを取り出すと、形が変わっていった大輔君達と同じ形のデジヴァイスになった。

「これは、大輔君達と同じデジヴァイス!?」

「どうして?」

僕達は驚いて頭に疑問を浮かべながらデジメンタルを握り持ち上げると、簡単に持ち上がった。

「軽い……」

「持ち上がった……」

僕達がそう言った瞬間、二つのデジメンタルとパタモンとテイルモンが光り出した。

「パタモン、アーマー進化ー!!!」

……天駆ける希望、ペガスモン!!!」

「テイルモン、アーマー進化ー!!!」

……微笑みの光、ネフェルティモン!!!」

するとパタモンは希望のデジメンタルと一体化しペガスモンに、テイルモンは光のデジメンタルと一体化しネフェルティモンにアーマー進化した。

「パタモンとテイルモンがアーマー進化した……」

伊織君がアーマー進化したペガスモンとネフェルティモンを見て
そう呟いた。

僕とヒカリちゃんは嬉しくなってペガスモンとネフェルティモン
に近付いた。

「私達だったんだ、私達のデジメンタルだったんだ！
ネフェルティモン！」

「良かったヒカリ、これで私達も戦える！」

「タケル……」

「うん、これでもう足手纏いじゃないね。」

僕達はアーマー進化出来た事に喜び、僕と伊織君はペガスモン・
ヒカリちゃんはネフェルティモンに乗って航君達の居る場所に向か
った。

side 航

俺達はあれから出来る限り戦ったが、ティラモン五体に対してア
ーマー体三体と成長期二体、戦力的にも圧倒的不利だった。

そしてデジモン達は体力が尽きてアーマー体から成長期に退化し
て、俺達は後ろが崖で完全に追い詰められていた。

チッ、“万事休す”とはこの事じゃねェか！！

何か……何かこの状況を覆す良い方法は無いか！？

「フッ、もう降参かい？」

「そんな訳ねエだろうが!!」

デジモンカイザーが勝利を確信したのか笑いながら俺達に聞いてきたが、俺は大声を出してデジモンカイザーの言葉を否定した。

「今の君達の状況を確認してみろよ。」

デジモン達はもう戦えない、そして後ろは崖……何処に君達の勝利が在るんだ。」

クッ、確かにアイツの言う通りだ……

………ん?

………!?

……否、俺達の勝利は確定した!!

「皆さアアアアん!!!」

すると遠くの空からペガスモンに乗った伊織君が、俺達に大声で呼び掛けて来た。

そしてペガスモンとネフェルティモンはティラノモンの後ろに着地し、二体に乗っていたタケルと伊織君とヒカリちゃんは二体から降りた。

デジモンカイザーはティラノモンの肩から降り、ペガスモンとネフェルティモンを見た。

「所詮仮の進化じゃないか。」

そんな物が何時迄も通用すると思うな!」

デジモンカイザーがそう言うのと五体のティラノモンが一斉に“フアイアブレス”を放ったが、ペガスモンとネフェルティモンは空を

飛んでそれを避けた。

「「サンクチュリーバインド！」」

二体は前足を光らせ交差すると、光の縄が出来てティラノモン全体を拘束する技・“サンクチュリーバインド”をした。

そしてティラノモンを拘束した後、二体は空高く飛び上がった。

「ニードルレイン！！」

「ナイルジュリー！！」

ペガスモンとネフェルティモンは得意技の“ニードルレイン”と“ナイルジュリー”を、ティラノモン達の首に装着されたリングに放った。

そしてティラノモン達が倒れていくと、首に装着されたリングが破壊された。

.....

.....

.....

.....

あれから時間が少し経ち、日が傾き出したが俺達は歩いて行ってるティラノモンを見ていた。

デジモンカイザーは何時も如く消えていた……ぬらりひょんかよ、アイツは。

しかし、今回はマジでヤバかった。

偶々グレイモンとガルルモンのカードが入ってたから戦えたが、無ければコロナモンとルナモンが攻撃を喰らってた……

帰ったらカードを整理しないとな……

「さあ、帰ろうぜ！」

大輔が俺達にそう言ってきたので、俺達は頷いてゲートが在る場所に向かった。

………

………

………

………

「それにしてもあの子ホントに許せない！
進化出来ない弱い相手を狙い撃ちにするなんて！」

俺達は無事に現実世界に帰ってきたんだが、ヒカリちゃんが先程撮ったティラノモンの写真をパソコンで見ながらそう言った。

確かに許せないが、一番許せないのは油断していた俺だ。

俺さえ油断してなかったら、あんな危険な事には成らなかった筈だからな。

「だよな！」

俺が絶対ギャフンと言わせてやる！」

「そう思うでしょ、航君、タケル君？」

大輔がヒカリちゃんに格好良く言ったが、ヒカリちゃんは大輔をスルーして俺とタケルに聞いてきた。

「全くだよ、同じ人間とは思えない。」

それに、デジタルワールドが自分の物だなんてどうかしてるよ。」

「確かに厨二病末期だな、あれは。」

だけど今回は俺が油断したから、俺が一番許せないのは自分だ。」

タケルと俺はそう言い合って最後に俺がそう言っていると、タケルとヒカリちゃんが励ましてくれた。

ホント、良い仲間を持ったよ、俺は……

「それにしても、デジメンタルって人によって違うんですね。」

すると突然、伊織君が思い出した様に俺達にそう言ってきた。

「何？」

「どう言う意味だよ？」

何時の間にか復活した大輔が、伊織君の発言を聞いてそう言った。

「大輔さんと僕、京さんはデジメンタルからデジモンが出てきたけど、タケルさんとヒカリさんは違ってた。」

新しいデジモンは生まれなかったけど、元々居たデジモンがアーマ―進化出来る様になりましたね。」

「うん、全然予想してなかった。」

「でも嬉しかったよ。」

伊織君の話を聞いて、タケルとヒカリちゃんが素直な感想を伊織君に言った。

残すはイレギュラーで生まれた俺のデジメンタル……何時、どのタイミングで出てくるのかね？

「アイツ、ホントにムカつく。」

京さんが腕組みをして、デジモンカイザーに苛付きながらそう言った。

「デジモンカイザーですか。」

あの人は何なんでしょうか？」

「厨二病末期の患者。」

「お前はそればかりだな!!」

伊織君が俺達に聞いてきたので、俺が素直に答えると大輔がツツこんできた。

まあ厨二病末期しか言っていないけど、事実だからしょうがなくね？

「……何にせよ、アイツのやっている事は許せない!」

大輔がそう言うと、俺と伊織君を除く全員が頷いた。

伊織君は何か迷っている顔をしていたので、俺は伊織君を心配して頷くのを忘れていた。

「何かアドベンチャーゲームみたいだね！」

「何だよ、最初はビビってた癖に！」

京さんがそう言うと、大輔が少し声を荒げてそう言った。
そして俺達は、デジモン達を連れて帰った。

第九十八話だよ！（後書き）

次回は完全オリジナルの話、「イレギュラーの進化 Part 1」です。

次回もお楽しみに！！

第九十九話だよ！（前書き）

ガブモン役の人は、『鋼の錬金術師』ではエンヴィー役を、『ロックマンエグゼStream』でディングゴ役をした。

デジモン関係は02ではユニモンを、ティマーズでは季 健良役をした。

今回は完全オリジナルストーリーなので、変な所がもしかしたら在るかもしれません。

今週の木曜からテストなので、もしかしたら更新出来ない可能性が在ります。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

第九十九話だよ！

「イレギュラーの進化 Part 1」

side 航

俺はあの後、コロナモンとルナモンを連れてヒカリちゃんとティルモンと一緒に家に帰った。

道中、デジモンを知らない他人にバレない様にコロナモン達を必死にぬいぐるみとアピールしながら帰ったので、家の扉の前に着いた時はお互いへろへろだった。

そして家の中に入って、父さんと母さんにコロナモンとルナモンの事を紹介した。

俺は最初はゴコチナイ関係で徐々に打ち解けていくんだろうと予想していたのだが……

「王手！」

「こ、コロナ君、待った！」

「ルナちゃん、これを机に運んで呉れない？」

「はい、お母様！」

コロナモンと父さんはリビングで将棋をしていて、ルナモンと母さんはキッチンで料理と一緒に作っている。

……幾ら何でも馴染み過ぎじゃね？

ギコチ過ぎるのはダメだろうと思うけどさ、此処迄馴染んでいたら……なあ？

「……俺、暫く部屋に居るからご飯が出来たら呼んで。」

俺は母さんにそう言って部屋に入ると、直ぐに床に座って駄神から貰ったカードと今日持って行っていたカードを床全体に広げた。理由は分かるだろうが、駄神の所為で完全体以上のカードをカードスラッシュしても無駄だから、整理して明日持つて行く為だ。

今日は偶々グレイモンとガルルモンのカードが入っていたから危機を脱したが、もし入っていなかったら俺達是最悪の場合死んでいたかもしれないからだ。

「さて、どのカードを持って行こうか……」

俺はそう呟いて、取り敢えずデジモンをレベル別に整理する事にした。

究極体二、究極体一、完全体、成熟期、成長期、幼年期、サブカードや装備カード、七つの種類にカードを分け始めた。

カードにはちゃんとレベルが表記されているので間違える事は無いが、全種類のカードが在る為量が以上な迄に多いんだ。

先は長いが頑張つて分けよう……今日中に終わるかな？

「航、飯の準備が出来たぜ！」

俺が明後日の方角を見ながらそんな事を考えていると、コロナモ

ンが扉を開けて部屋に入って来て俺にそう言ってきた。

俺は取り敢えず飯を食う事に頭を切り替えて立ち上がり、部屋を出てリビングに向かった。

リビングでは何故か父さん側が詰み状態に成っている将棋盤の前でorz状態になっていた父さんと、ルナモンと楽しくテーブルの前で雑談している母さんが居た。

……馴染み過ぎてカオスになったのか？

「はあ、不幸だ……」

俺は某幻想殺しさんの迷言を呟いて、カオスの空気が漂うテーブルの前に座った。

………

………

………

………

「あゝ、ヤッベエ、完全に寝不足だ……」

「大丈夫、航君？」

「目の下に隈が出来てるんだから、大丈夫じゃないだろヒカリ……」

俺は今、ヒカリちゃんと太一さんと学校に向かって登校中だ。

昨日は結局、風呂に入った後直ぐにカードを整理して持つて行くカードをケースに入れたんだが、ベッドに入った時刻が午前二時、

つまり今日なんだ。

お陰で睡眠時間は僅か五時間、小学五年生の必要最低睡眠時間に全然達していない。

なので頑張って歩いているのだが、眠気の所為で今にもぶっ倒れそうなのだ。

「授業中に寝よう、じゃないと死んでしまう……」

「それはどうなのかな……？」

「小学生が授業中に寝るとか……これも時代か？」

おっ、俺はコッチだから今日も頑張ってくれよ！」

俺が握り拳を作って授業に寝る事を誓うと、ヒカリちゃんが苦笑いをしながら俺にそう言って、太一さんが明後日の方角を見ながら言って横断歩道を渡りながら俺達にそう言ってきた。

俺達は太一さんに手を振って了解し、俺は重い足取りで学校に向かった。

ヤバイ、視界が霞んで来たよ……

sideヒカリ

「z z z……」

航君は国語の教科書を広げて立てて、教科書を陰にして寝てるの。朝に眠るって言ってたけど、まさか本当に眠るなんて驚くよ……でも、授業中に眠るって事は昨日の晩、何かしてたって事だよね？

航君って勉強が嫌いだから夜更かしする位勉強するって事は無いから、デジモン関係できっと夜更かししたんだと思う。

だって昨日、デジタルワールドから帰って来た時から自分を凄く責めてたから……

航君は何も悪くないのに、航君って変な所に責任を感じちゃうから……

「ねえヒカリちゃん、航が授業中に寝るって今迄に在ったの？」

「……うん、多分昨日のデジモンカイザーの戦いの事で無理して夜更かししちゃったから、授業中に眠ってるんだと思う。」

すると隣の席に座っているタケル君が小さい声で私に聞いてきたの、私も小さい声でタケル君の質問に答えた。

私がタケル君にそう言うのと、タケル君は何処か納得した顔をして窓の外に顔を向けた。

「高石、八神、さっきからよそ見するな！」

加藤、授業中に寝るとは言語道断だぞ！

お前等、放課後に職員室に来い！」

すると先生がよそ見をしていた私とタケル君、そして未だに眠っている航君にそう言った。

……どうしよう、航君の事に集中していて先生に呼び出されちゃったよ……

タケル君の顔を見ると、タケル君は頭を掻きながら苦笑いをしてた。

「Z＼Z Z……」

「加藤オオオオ!!」

何時迄寝てる気だアアア!!!!」

先生が未だに眠っている航君の席に近付いて、耳元で大きな声を出してそう言った。

でも航君は起きなかったんだけどね……

……

……

……

……

「以後、授業は真面目に聞く様に！」

「……ふぁゝい。」

「はい。」

「分かりました。」

先生が私達にそう言ったので、私とタケル君はハッキリと返事をしたんだけど、航君は未だ眠たそうに返事をした。

すると先生はまた怒り出しそうだったので、タケル君が航君の背中を押して、私は「失礼しました!」と言って職員室から出たの。

もう、また先生に怒られてデジタルワールドに行けなくなる所だったよ!!

「航君、眠たいのは分かるけど真面目な場面は真面目にしなければダメだよ!」

私が航君の前に出て少し怒りながら航君に注意すると、航君は眠たそうに目を擦りながら私を見てきた。

えっ、何この小動物的な生き物は?

この状態の航君、今直ぐにお持ち帰りしたいんだけど……

「ヒカリちゃん、鼻血が出てるからちゃんと拭いて。」

すると何時もの顔に戻った航君が、ポケットからティッシュを取り出して私の鼻を拭いてくれた。

か、顔が近い……今の顔も良いけどさっきの顔で近付いて欲しかったな……

「二人とも、イチヤイチャするのは良いけど、速く行かないと大輔君が某決戦兵器みたいに吠えるよ。」

「「い、イチヤイチャ!?!?／／／／」」

タケル君が少し呆れた顔をして私達に言ってきたから、二人同時に反応しちゃって顔を赤くして目を反らし合った。

タケル君って人をカラカって面白がってるから、絶対に隠れSだよ、絶対そうだよ!!

「まあ関係無い事はまた帰りに考えるとして、急いでパソコンルームに行かないとホントに大輔くん三人は未だ来ないのかアアアアアア!?!?!?!?」……さっ、吠えたから急いで行こう。」

タケル君が話している途中に大輔君の声が聞こえてきたから、私

達は急いでパソコンルームに向かった。

……あれ？

パソコンルームから職員室ってかなり離れてるのに、何で大輔君の声が聞こえてきたんだろ？

地声で……まさかね……

side航

俺は何故か職員室に呼び出されていて、意識が覚醒した時は鼻血を出していたヒカリちゃんが目の前に居た。

まあ職員室に呼び出された原因は俺が授業中に寝ていたからだと思うが、タケルやヒカリちゃんが呼び出されたのには全く理解出来なかった。

まあ怒られたらしいが、一時間目から六時間目迄ぶっ通しで寝てたから睡眠不足は解消されたし、授業も転生者の特権と言う物なのか小学五年で習う事は全部覚えているから大丈夫だし、ノートに關してもタケルとヒカリちゃんが何故か俺のノート迄書いてくれた。

マジで良い親友を持ったよ俺は、ヒカリちゃんは何時か恋人同士になりたいが……

そんな事を思いながらパソコンルームの前迄やって来て扉を開けると、物凄く怒った顔をしていた大輔と何とも言えない顔をしていた京さんと現実から目を反らしてデジモン達と雑談している伊織君が居た。

「幾ら何でも遅過ぎるだろ！！」

何やってたんだよ、タケル、航！」

……ヒカリちゃんの名前が無いのは、大輔がヒカリちゃんの事が好きだからか？

ひ、贖罪だ！

今の時代は男女平等なのに、大輔が男女不平等を始めたら日本社会が崩壊するだろ！

「何変な事を考えてるんだよ、航！

お前とタケルが反省した顔をしてないから、俺は怒ってんのによ！」

俺がそう思っていると、大輔が俺とタケルを指差しながらそう言ってきた。

俺は大輔の言葉を聞いてタケルを見ると、タケルは頬を指で掻きながら苦笑いしていた。

……うん、今回は大輔の方が正論だな。

素直に謝るところ、じゃないと大輔って根に持ちそうなタイプみたいだしな。

「スマン、俺が悪かった。」

「ごめんね、大輔。」

「……謝られたのに未だムカつくのは気の所為か？」

俺とタケルは大輔に謝ってゲートが開いているパソコンの前に移動すると、大輔が納得しない顔をしてそう言って俺の隣にやって来た。

「じゃあ行こうぜ！」

大輔がそう言ってD-3を画面に向けたので、タケル達は無言で

額いてDー3・俺はデジヴァイスアルティメットバージョンを画面
に向けた。

そして俺達は、デジタルワールドに入って行った。

第九十九話だよ！（後書き）

次回は『イレギュラーの進化 Part 2』です。

次回もお楽しみに！！

第百話だよ！（前書き）

武ノ内空役の人は、『ちびまるこちゃん』のお姉ちゃん役、『ブラック・ジャック』ではピノコ役を演じた。

デジモン関係では太一の母やオタマモンを演じた。

今更だが、太一の母親は空が演じて空の母親は太一が演じてるってスゴいな。

すいませんでしたアアアア！！！！

今回の話は今迄の話の中で一番のご都合主義です。

そして超オリジナル進化です、はい。

でも、余り厳しい事は言わないで貰えると嬉しいです。

言い訳ですが、色々と話の構成を考えてテスト期間中なのに頑張りましたから……

すいません、見苦しかったですね……

最後にもう一度謝っておきます、すいませんでしたアアアア！！！！

第百話だよ！

『イレギュラーの進化 Part 2』

side 航

俺達は今回も無事にデジタルワールドにやって来て、ブイモン達も成長期に進化していた。

俺は辺りを警戒しながら見渡すと、少し離れた場所にダークタワーが建っていた。

……此処も某鋼の錬金術師と同じ声の厨二病のエリアになっているのか。

ピッ ピッ ピッ

「アア？」

俺は頭の中で無駄な厨二病の事を思っていたら、俺の腰に付いている二つのデジヴァイスアルティメットバージョンが突然音が鳴り始めだした。

俺は腰から二つのデジヴァイスアルティメットバージョンを外し

て、画面を交互に見て何がどうなっているのかを確認した。

二つのデジヴァイスアルティメットバージョンの画面は、同じ場所の何かに反応して音を出していた。

俺は確認の為にタケル達の方を見ると、タケル達のD-3は何の反応もしてなくて音も出ていなかった。

「何だ、またデジメンタルか？」

すると大輔が、自分のD-3を見た後俺が持っているデジヴァイスアルティメットバージョンを見ながら聞いてきた。

俺は無言でデジヴァイスアルティメットバージョンが反応している方向を見ると、タケルとヒカリちゃんが俺の両隣にやって来て真剣な顔をして俺の顔を見てきた。

「私達のデジヴァイスが反応してなくて、航君のデジヴァイスが反応してるって事は……」

「これがあの冒険の後に教えてくれた、この世界には本来存在しないイレギュラーなの？」

「……………多分な。」

ヒカリちゃんとタケルが大輔達に聞こえない様に小さい声で俺に聞いてきたので、俺は真剣な顔をしてタケルとヒカリちゃんにしか聞こえない位の声の大きさでそう言った。

タケル達のD-3は反応してなくて俺のデジヴァイスアルティメットバージョンには反応している……駄神が言っていたイレギュラーによって生まれた俺のデジメンタルに反応しているのか？

俺は今考えられる一番の有力の仮説を頭の中に考えて、無言でデジヴァイスアルティメットバージョンが反応する場所に向かって歩

き出した。

タケルとヒカリちゃんは、真剣な顔をして俺の隣に来て一緒に歩き出した。

「ちょ、ちょっと待てよ!」

「何々、何で三人だけシリアスな空気を出してるの!？」

「僕達にも教えて下さいよ!」

大輔・京さん・伊織君は俺達にそう言って、走って俺達の後を付いて来た。

sideデジモンカイザー

「……フッフッフッ、また新しいエリアが僕のエリアになった。」

僕は目の前に映し出されたデジタルマップを見て、新しいエリアを手に入れた事に喜びそう言った。

このペースだと、デジタルワールドを完全に僕の物にするのも時間の問題だな。

僕はそう思いながら、ふとエリアの監視映像に目を向けた。

「!？」

アイツ等、また僕のエリアに勝手に入って来て……!!」

僕が見ている監視映像には、僕の邪魔ばかりすり五人組が歩いて

いた。

「どうするの、賢ちゃん？」

すると自称“僕のパートナーデジモン”のワームモンが、僕の座っている椅子の横に来て僕に聞いてきた。

チツ、僕はこれから新しく手に入れたエリアに行かなければならないから、コイツ等の相手をしている場合じゃない……今日はアイツ等に任せるとして、速く新しく手に入れたエリアに行くとう。

そうと決まれば、速くアイツ等に指示を出さなければ……

僕はパネルを目の前に出現させて、パネルを操作してアイツ等に指示を出した。

side航

俺はデジヴァイスアルティメットバージョンの画面を見ながら、無言でデジヴァイスアルティメットバージョンが反応している場所に向かって歩いている。

と言ってもこの近くに反応しているから、この近くに洞窟か建造物が在る筈なんだが何処にもねエな……

「……なあ航？」

しかし遂にイレギュラーで生まれた俺のデジメンタルか、デジモンカイザーは何を仕掛けてくるか分かねエな。

「……聞いてんのか航？」

俺の覚えている記憶が正しければ、この頃は未だ完全体をコントロール出来ていない筈だが……この世界は俺の知っている原作から既に大きくかけ離れたオリジナルの世界だ。

「……無視するなよ!!」

もしかしたら既に完全体をコントロール出来ている可能性が在る。もしかしたら今日、完全体を使って俺達を襲って来るかもしれないねエ。

どうした物か……

「良い加減にしろよ!!」

ドガッ!!

「グハッ!!」

俺が考えながら歩いていると、突然大輔が俺の肩を掴んで俺の顔を殴ってきた。

俺は余りにも突然だった為、避ける事も出来ず吹っ飛ばされて受け身も取れずに地面に叩きつけられた。

イッテェ……だ、大輔、テツメェ……

「行き成り何しやがる!?!」

「お前が俺達に何も教えずに黙って歩き続けているから、お前の生意気な顔を殴ったんだよ!!」

俺は立ち上がって大輔の服の胸ぐらを両手で掴んで切れ口調で大輔にそう言っていると、大輔も俺の服の胸ぐらを両手で掴んで切れ口調で俺にそう言って来た。

確かに何も教えずに黙って歩き続けた事に関しては俺が悪い、だがお前等に教えれねエから黙ってたんだよ！

「俺の秘密に関わる事だから何も言わなかったんだよ！

自分の秘密をお前は簡単に他人に話せるのかよ！？

お前は脳天気な暮らしをしてたから、人には言えない秘密なんかはねエかもしれねエがな！！」

「何ッだと！！」

俺が大輔を馬鹿にした顔をして大輔にそう言っていると、大輔は完全に切れて右手に拳を作って殴り掛かろうとして来た。

俺はそれを一瞬で理解して、俺も右手に拳を作って大輔に殴ろうとした。

だがタケル達が俺と大輔を無理矢理引き離したので、互いに相手を殴る事が出来なかった。

「喧嘩はダメだよ、航、大輔君！」

「今はそんな事をしてる場合じゃないよ！」

「喧嘩したって何も解決しません！」

「先ずは話し合おう！
そうしよう！」

タケルとヒカリちゃんが俺を後ろから押さながら、京さんと伊織君が大輔を押さえながら俺達にそう言って来た。

話し合いで解決出来る程これは簡単な問題じゃねえんだ!!

俺はそう思ってたタケルとヒカリちゃんの拘束を解いて大輔に殴り掛かろうとしたら、大輔も京さんと伊織君の拘束を解いて俺に殴り掛かろうとしてきた。

だが……

ドッガアアアアアアアン!!!!!!

「な!?!」

「うわっ!?!」

俺と大輔の間に突然上から誰かの攻撃が割って入って来たので、俺と大輔はその攻撃の爆風によって吹っ飛ばされた。

辺りは土煙が舞っていたが、俺はそれを気にせずに攻撃が飛んできた上を見た。

するとそこには、十一体のエアドラモンと先頭のエアドラモンの胴体に乗っているデジモンカイザーが居た。

「人の家で喧嘩とは見苦しい、これだから馬鹿な奴は嫌いなんだよ。」

「だ、黙れ厨二病!!」

デジモンカイザーが俺と大輔を馬鹿にした言い方でそう言ったので、俺はデジモンカイザーに八つ当たりする声でそう言った。

だがデジモンカイザーは俺の言葉を聞いて鼻で短く笑って、指を鳴らしてエアドラモンに何かの指示を出した。

「僕はこれから行く場所が在るから君達とは遊んでいる時間は無い、此処でエアドラモン達の餌食になるんだな！」

「ま、待てデジモンカイザー！！」

デジモンカイザーは俺達にそう言っただけで何処かへ飛んで行ったので、俺はデジモンカイザーを追い掛けようとしたが十体のエアドラモンに行く手を防がれた。

チクショウ、お前等と戦ってる時間はねエのに！！

「「「デジメンタルアップ！！」」」

すると大輔達がそう言ったので俺は後ろを向くと、大輔達のD-3とDターミナル・パートナーデジモン達が光っていた。

「ブイモン、アーマー進化ー！！！！」

……………燃え上がる勇氣、フレイドラモン！！！！」

「ホークモン、アーマー進化ー！！！！」

……………羽ばたく愛情、ホルスモン！！！！」

「アルマジモン、アーマー進化ー！！！！」

……………鋼の英知、ディグモン！！！！」

「パタモン、アーマー進化ー！！！！」

……………天駆ける希望、ペガスモン！！！！」

「テイルモン、アーマー進化ー!!!」

………微笑みの光、ネフェルティモン!!!!」

パートナーデジモン達はデジメンタルと一体化し、アーマー進化して十体のエアドラモンに向かって行った。

俺もカードを二枚取り出して、デジヴァイスアルティメットバージョンにカードスラッシュしようとした。

「カードスラッス「危ねエ!!!」うわっ!？」

すると突然大輔が俺に体当たりして俺を吹っ飛ばしてきた。

あ、アイツ……こんな状況でも喧嘩の続きをする気かよ!？」

俺は起き上がって大輔を殴ろうとした時、突然俺の前から一体のエアドラモンが突っ込んで来た。

俺はしゃがみ込んでエアドラモンが通り過ぎるのを待ち、通り過ぎたのを確認すると俺は俺は突っ込んで来たエアドラモンを見た。

突っ込んで来たエアドラモンはスピードを上げて上空に飛んでいたが、何故かエアドラモンの鬣に人影が見えていた。

俺は目を凝らして人影を見ると、ゴーグルを付けた短髪の先程迄俺と喧嘩してた奴が居た。

「な、何をしてんだよ馬鹿!!!」

「大輔!!!」

「俺は大丈夫だ、フレイドラモン!!!」

俺とフレイドラモンはエアドラモンの鬣に捕まっている馬鹿・大輔に叫ぶと、大輔は苦しそうな顔をしながらフレイドラモンにそう言っって俺に笑って握り拳を見せてきた。

あの馬鹿野郎が……何で俺を助けたんだよ……

俺はお前と喧嘩してたんだぞ……

俺はお前を貶したんだぞ……

なのにお前は、そんな俺を助けて信頼してくれるのかよ……

お前の運命を、この俺なんかに預けてくれるのかよ……

……ホントにごめんな大輔、絶対に救うからな大輔!!

ピカーン!!

俺がそう思った瞬間、俺の二つのデジヴァイスアルティメットバージョンと俺の目の前の地面が光り出した。

「な、何だ!？」

俺は完全にパニックって挙動不審になりながらそう言うのと、地面の中から二つの紅と蒼のデジメンタルが現れて俺の手に乗った。

そのデジメンタルには信頼と運命の紋章が刻まれていて、デジメンタルから力が溢れてくるのを肌で感じた。

「航（君）!!」

コロナモンとルナモンが俺の名前を呼んで来たので俺は二体に目を動かすと、二体は身構えて真剣な顔をして俺の顔を見ていた。

俺は無言で二体に頷き、両手に持ったデジメンタルを掲げた。

「デジメンタルアップ!!」

俺がそう叫ぶと、俺の二つのデジヴァイスアルティメットバージ

ヨンと二つのデジメンタル・コロナモンとルナモンが光り出した。

「コロナモン、アーマー進化ー！！！」

……灼熱の信頼、シャインSフレアモン！！！」

「ルナモン、アーマー進化ー！！！」

……月光の運命、ミラーージュMクレシェモン！！！」

するとコロナモンは信頼のデジメンタル・ルナモンは運命のデジメンタルと一体化し、今迄見た事も聞いた事も無いデジモンにアーマー進化した。

俺は一瞬呆気にとられたが、直ぐに正気に戻ってデジヴァイスアルティメットバージョンで二体を確認した。

名前…シャインSフレアモン

属性…ワクチン、フリー

世代…アーマー体

種族…神獣型デジモン

通常技…ソルブラスター、フォイボス・ブロウ、アロー・オブ・アポロ

必殺技…コロナブレイズソード、ファイナルシャイニングバースト
説明…コロナモンが信頼のデジメンタルでアーマー進化した姿。太陽の戦士・シャイングレイモンBMの鎧を身に纏い、完全体とも対等に戦えるアーマー体。胸部の部分には信頼の紋章が刻まれている。

名前…ミラーージュMクレシェモン

属性…データ、フリー

世代…アーマー体

種族…神獣型デジモン

通常技…クレセントハーケン、アロー・オブ・アルテミス、グッド

ナイト・ムーン

必殺技…フルムーンメテオインパクト、ファイナルミラージュバースト

説明…ルナモンが運命のデジメンタルでアーマー進化した姿。月の戦士・ミラージュカオガモンBMの鎧を身に纏い、完全体と対等に戦えるアーマー体。腹部の部分には運命の紋章が刻まれている。

俺は二体の情報を読み終えて指示を出そうとした時、二つのデジヴァイスアルティメットバージョンに共通の言葉が表示された。

“このデジモンは本来、この世界に存在しないイレギュラーデジモン”と。

「Sフレアモン、Mクレシェモン、大輔とエアドラモンを救ってくれ！」

「「分かった（よ）！！」」

俺は二体にそう頼むと、Sフレアモンは炎の翼を広げて空に居るエアドラモンの所へ行き、Mクレシェモンは地上に居るエアドラモンの所へ行った。

エアドラモン達は二体に気付いて攻撃してきたが、二体はエアドラモン達の攻撃を簡単に避けてSフレアモンはシャイングレイモンBMの武器・MクレシェモンはミラージュカオガモンBMの武器を構えて、黒いリングへ素早く攻撃して行った。

そして二体の攻撃を喰らった黒いリングは粉々に破壊され、エアドラモン達は正気に戻った。

大輔はSフレアモンに乗って地上に降りてきて、SフレアモンとMクレシェモンはコロナモンとルナモンに退化した。

離れた場所に居たタケル達と退化したパタモン達が俺の周りに走って来て、嬉しそうな顔をしながら俺の顔を見てきた。

俺は大輔に顔を向けて、大輔の頭に軽くチョップをした。

「イテ!？」

何すんだよ!!」

「幾ら何でも無茶し過ぎだ、馬鹿野郎。
だけど、お陰で助かったよ。

ありがとう、そしてさっきは悪かった……」

俺は大輔にそう言って、大輔に頭を下げて謝礼と謝罪をした。
すると突然、鈍い痛みが頭に広がってきた。

俺は頭を押さえながら頭を上げると、笑顔でチョップした後の構えをしている大輔が立っていた。

「これで貸し借り無しだ!
さっ、もう日が沈むから帰ろうぜ!」

大輔は俺にそう言った後に皆の顔を見てそう言ったので、俺達は大輔の言葉に頷いてゲートに向かって歩き出した。

途中、大輔と言い合いになったが、笑いながらの言い合いだったから皆の止めはしなかった。

第百話だよ！（後書き）

次回はPV110万突破記念をします。

『転生したのが無印ではなくタイムーズだったら……』

次回もお楽しみに！！

PV110万突破記念だよ！（前書き）

ピヨモン・泉光子郎の声の人は、余り最近のテレビに出ていない。

代表作が『デジモンアドベンチャー』のピヨモン役と泉光子郎役である。

今回はPV110万突破記念で書いた話なので、本編には全くと言って良い程関係ありません。

まあもしティマーズだったらこんな感じになってただろうって感じの話です。

キャラが著しい位ぶっ壊れてます。

気を付けて読んで下さいね。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

PV110万突破記念だよ！

『転生したのが無印ではなくティーマーズだったら…』

side航

皆さん初めまして……で良いんだよね？

俺の名前は加藤航^{かとうわたる}、現在進行形で第二人生^{セカンドライフ}を楽しんでいる転生者だ。

まあ行き成り過ぎる発言で「頭大丈夫ですか？」って思う人も居るだろう、だが俺は至って健康で頭もふつうだから安心してくれ。

俺は第一人生^{ファーストライフ}を幸せとは言い切れないが、それなりにエンジョイしてたんだ。

だけど神様のミスにより俺はトラックに退かれて事故死し、中学一年で第一人生を終えた。

だが俺は死んだ後に神様に会って、神様が罪滅ぼしの為に俺を好きな世界に転生させてくれるって言うてくれたんだ。

俺は第一人生の中で一番好きなアニメの世界・『デジモンテイマーズ』の世界へ転生させて欲しいって頼んだんだ。

無印や02、フロンティアやセイバーズ、新しく始まったクロスウォーズも良かったんだが、その中でも一番ティーマーズが好きだからティーマーズを選んだんだ。

そして神様の力で俺は選ばれし子供になって、黒色のデジヴァイ

スアルティメットバージョンと相棒のドルモンと一緒にティマーズの世界に転生した訳だ。

ドルモンを選んだ理由は一番の理由は成熟期でも格好良いし、どの進化√であっても格好良いからだ。

ドルモンの他にもコロナモンやルナモンも考えたんだが、コロナモンの究極体は何処か他の究極体と比べて格好良さに欠けるから・ルナモンの究極体の姿は何処からどう見ても女性なので却下になった訳だ。

そして無事に転生して、セカンドライフ只今第二人生の小学校五年生をやっている。

勿論、通ってる小学校はこの世界の主人公で俺の親友の松田啓人まつだ たかとと同じ淀橋小学校だ。

赤ちゃんの頃や幼稚園の頃から自我がはっきり在ったので黒歴史に追加されたので、此処では、否、二度と言わないから分かっておいて欲しい。

そして此処からが重要な事なのでよく聞いて欲しい。

先ず最初に、今の状況はクルモンがスーツエーモンの部下に浚われた。

俺も啓人達と力を合わせて立ち向かったのだが、結局の所クルモンを救えなかった……

第二に、俺と言うイレギュラーが存在する為にこの世界にも幾つかのイレギュラーが生まれた。

まあそのイレギュラーの一つが、俺の幼稚園児からの幼なじみなんだけどな……

「さっきから一人でブツブツと言ってるけど、大丈夫なん？」

すると俺の隣を歩いている俺の幼なじみが、俺に顔を近付けながら聞いてきた。

……って、

「近いわ、似非関西人！」

俺は幼なじみに驚いて尻餅を付いて、少し怒りながら幼なじみにそう言った。

コイツの名前は八神^{やがみ}はやて、某魔砲少女に出てくる最後の夜天の書の主の八神はやてと瓜二つなんだ。

はやては俺と言うイレギュラーによって生まれた命、罪悪感がはやての顔を見る度に俺を襲って来るがその度にはやてに怒られる。

俺が転生者だって事は、俺の両親・啓人達・はやてには既に話してある。

話す切っ掛けになったのは結局の所罪悪感から逃れたいと言う自分勝手な理由で、話す前・話している時・話した後は拒絶される事ばかり考えていたが、皆は俺を受け入れてくれた。

その時にこの世界に転生して多分初めてだと思う、人前で涙を見せたのは……

まあ話を元に戻すが、俺がはやてにそう言うとはやてが膝を曲げて俺と視線を合わせて俺に笑いながら顔を近づけてきた。

「もっと素直にならなアカンで、航君。

まあツンデレやからしょうがないけど、何時もツンツンしとったらモテへんで？」

「だ、誰がツンデレだ！」

そ、それにモテなくても良いんだよ！／／／／

はやてが笑いながら俺にそう言って来たので、俺は顔を赤くしてはやてから顔を逸らしながらそう言った。

べ、別に俺はモテようとも思っていない、でも異性にはちゃんと興味があるぜ。

勿論、好きな異性だってちゃんと居るぜ？
その相手は……

「……どうしたんや、航君？」

「な、何でもねエよ！！／＼／＼／」

俺は大きな声ではやてにそう言って立ち上がって、走って啓人達と決めた集合場所に向かった。

な、何で俺はコイツ（はやて）の事を好きになったんだよ！？

「顔を真っ赤にして、航君可愛いな。」

「俺は可愛くない！！／＼／＼／」

………

………

………

………

「あっ、来た来た！」

「ワリィ啓人、はやての所為で遅れた。」

「人の所為にしたアカンで、航君。」

俺達が集合場所にやって来ると、既に集合していた啓人が俺達に

気付いて俺達に近付いてきたので、俺が遅れた理由を啓人に言うとはやてが俺の腕に抱き付いて来て俺にそう言ってきた。

……って、

「何で抱き付いてるんだよ!? / / / /」

俺は急に抱き付いて来たはやてに顔を赤くして驚きながら離れようとしたが、はやては意外に力が強くて中々離れてくれなかった。な、何でこんなに力が在るんだよ!?

「ハハハッ、相変わらずの仲だね。」

「啓人オ、笑ってねエで助けろやア!!」

啓人が笑いながら俺達にそう言ってきたので、俺は啓人に少し切れながらそう言った。

啓人、他人事の様に言ってるがお前が俺のいとこの加藤樹莉かとうじゅりの事が好きだってバレバレなんだ!

お前が俺にそんな対応をするなら、俺だって考えが在るぜ。

ハハッ、良いねエ良いねエ楽しみだねエ!!

「啓人君、航君が某学園都市のレベル5の第一位さんになってしもうたで。」

「えっ……大丈夫かな、僕?」

啓人オ、今更後悔や助けようとしたって無駄だぜエ。

「何故ならこっから先は一方通行k「何時迄第一位になってるつもりや?」へブシッ!?!」

俺が某学園都市のレベル5の第一位の名言を言おうとしたら、はやてが俺の腕に抱き付きながら器用に俺の頭をチョップしてきた。俺は余りにも突然の攻撃だった為はやての攻撃を喰らって、頭を押さえて膝を曲げて痛みが収まるのを待った。

イッテー、はやては何時から暴力を振るう女になったんだよ……幾ら惚れてても暴力を直ぐに振るう女はタイプじゃねェんだよ……でも嫌いになれないんだよな……チクショウ、これが惚れた弱みかよ……

「ま、まあ速く皆の所に行こう。

皆もう集まってるし、速く行かないと留姫に何を言われるか分からないからね。」

「……啓人くゥんよオ、そんな事を俺の前で言って良いのかなア？」

啓人が苦笑いしながら俺とはやてに言ってきたので、俺はまたしても某学園都市のレベル5の第一位の口調で啓人にそう言った。

口調に関しては何か気に入った、こんな感じの口調。

まあそんな事は置いといて、留姫の事を油断してたのか分からんが俺の前で言った時点でゲームオーバーだな。

留姫・本名^{まさの}牧野留姫^{るぎ}、“デジモンクイーン”って言う厨二病みたいなあだ名を持っている俺達の仲間の一人、俺や啓人と同じテイマーで相棒はレナモン。

あつ、言い忘れてたが啓人の相棒は啓人が作ったデジモン・ギルモンだ。

「ちょ、わ、航、まさかと思うけど……」

啓人が顔色を悪くしながら俺に話し掛けてくると、俺は完全に悪

人面の笑みを浮かべて啓人を見た。

「留姫に報告に決まってるだろォ!!」

俺は啓人にそう言って、はやての拘束を解いて留姫が居る場所に向かってダッシュした。

後ろから情けない少年の声と恐ろしい少女の声が聞こえたが、俺は目から汗を流しながら留姫の所へ走った。

あれ、視界がハッキリしないのは何故だろう？

それと、どうして死亡フラグが建った様な気がするんだろう？

.....

.....

.....

.....

「.....何かウチに言う事は？」

「すいませんでしたアア!!!! orz」

はやてに言われて（脅されて）、俺は誰もが感心するであろう土下座をしてはやてに謝った。

理由は分からんが、今のはやてはデジモンより怖くて目に光が無い（嘘ではない）ので、素直に謝るのが一番なのだ。

プライド？

とっくの昔に捨てたよ!!

「今度からはウチとずっと一緒に居る事、分かった？」

「……………は？」

「……………返事は？」

「はい！！」

俺は立ち上がって敬礼しながら大きな声で返事をする、はやては笑顔になって俺の腕に抱き付いてきた。

よし、もう腕から離れて貰うのは諦めよう。

……………えっ、啓人？

向こうで留姫に正座させられて怒られてますが、何か？

「さっ、啓人達も終わりそうだからそろそろ下に行こう。」

「賛成だ、ガブモン。」

「否、毎回言ってるけど僕人間だから。」

俺が俺に提案してきたガブm「だから、僕は人間だって。」…………
ジェンに俺はそう言っリーて頷いた。

ジェン・本名季健良リー、中国人の父親と日本人の母親なハーフで、俺や啓人と同じ学校・同じクラスのティマー。

頭の回転が速く留姫と言い勝負が出来て特技はカンフー、パートナ―はテリアモン。

余談だが、俺の母さんの方の祖母ちゃんがロシア人らしく俺はクォーター、髪は祖母ちゃんの遺伝子を受け継いで白いんだ。

鏡を見て気付いたが、俺の容姿は某超次元サッカーに出てくるブリザードの必殺技を使う人そっくりなんだ。（覚醒前の弟の髪型）

「ジェン、俺達が来る前に誰か来たのか？」

「えっ？」

……ああ、山木さんが此処にやって来て、啓人にNAVIって物を呉れたよ。」

俺は何となくジェンに聞いたら、ジェンは目を瞑って少し考えて山木さんが来た事を教えてくれた。

山木さん・本名山木満雄さん、この現実世界を守る情報管理局の室長で、前は全てのデジモンを消そうとして敵対していたが、今は俺達の戦いを見て積極的に協力してくれる良き理解者。

実は俺の父さんと小中高全部同じで、父さんの飲み仲間だったりする。

「……ったく、これからデジタルワールドに行くのに、余計な体力を使わさないでよね！」

「ごめん、留姫……」

すると漸く説教していた留姫と説教されていた啓人がやって来た。お疲れさま留姫、ちゃんと反省した様だな啓人。

「よし、点呼するから名前を呼ばれたら返事をしてくれ。」

「遠足に行くんじゃないのよ！」

俺は鞆から先生が学校行事で外出する時に使うファイルを取り出して皆にそう言うと、留姫が俺に渾身のツツコミをしてくれた。

俺的にははやてがツツコミをして来るのかと思ったが、このメン

バーで一番常識の在る留姫がツツコミをしたからまあ良いか……

「留姫、ナイスツツコミだったぞ。」

よし、まずは俺のいとこの加藤樹莉がS「航!!?」……松田啓人。

」

「全く……はい。」

何だよ、何時迄経っても告白出来ないお前の為に切っ掛けを作つてやろうと思ったのに……

「啓人出席だな、よし……次、ガb「本当に怒るよ?」……季健良。」

」

「次言ったらカンフーの試合をして貰うよ……」

よし、今度からジェンには『ガブモン』と言うのを止めよう。

命が惜しい、皆も自分の命がヤバくなったら俺みたいになるだろ?

……でも勿体無いよな、中の人が同じだからさ……

「デジモンクイーンって厨二病のあだ名を持つて……」すいませ
ん!

もう言いませんから殴ろうとしないで!!

牧野留姫、否、留姫さん、否、留姫様!!」

「……はああ、居るわよ。」

アップネエ、留姫の今の目は俺にO・H A・N A・S H Iしてく
るはやてと同じ目だったから、謝らなかったら確実にO・H A・N
A・S H Iされてたな。

何で皆冗談が通じないのかね、お兄さん悲しくなるよ……

「さて、次はたk「……航？」……俺のいとこの加藤樹莉。」

「????」

はい。」

チッ、短時間で俺の言う事が分かる様になるとは……啓人の奴、無駄に成長しやがって……

ってか樹莉の奴、これからデジタルワールドに行くって言うのに、随分と軽装備だな、おい。

「まあ樹莉の天然は今に始まった事じゃないからツッコまないぞ。

……次、厳格な父とヤンママの母を持つ熱血博和。」

「熱血ってよく言われるがが名字は熱血じゃねエ!!」

あつ、父親と母親に関してはツッコまないんだ……

コイツの名前は塩田^{しおた ひろかず}博和、お調子者の啓人のカード仲間で、相棒は居ないが今回の旅で相棒を見つけようと頑張ってる一人。

しかし今は関係ないが、博和の親って凄い組み合わせの夫婦だよな……

「まあ良いや……次、ムツツリナルシストのナル川ナル太。」

「な、何でそれを……」

否、少しは某テストの点で召還獣の強さが決まる学校のムツツリみたいに隠せよ……

コイツの名前は北川^{きたかわ けんた}健太、運動は出来ないが勉強は出来る啓人や

博和のカード仲間で、相棒は居ないが博和同様今回の旅で見つけるらしい。

何でナルシストかと言うと、「テストの平均点を押し上げていると自負してる」ってこの前独り言の様に呟いてたもん。

「ナルシストは置いといて次は……飛ばします。」

「何でやねん！」

「痛ッ!!」

は、はやて、手はそっちには回らなァァァ!!!!」

「じゃあ名前を呼んで？」

「はやて!!」

八神はやて!!」

「居るでー!!」

「…………グスッ」

俺がはやてを飛ばすとはやてが俺の右腕に関節技を決めてきたので、俺は素直にはやての言われた通りはやての名前を言うと、はやては関節技を止めて俺の腕を抱き締めて返事をした。

あれ、視界が霞んで来たなく、何でだろう……？

き、きつと目から汗が出てるんだ、きつとそうだ！

け、決して涙じゃないから！

か、勘違いすんなよ!!

「…………グスッ、と、取り敢えず全員居るな。」

デジモン達も……うん、ちゃんと居るな。」

俺は手で目から流れる汗を拭いて全員居る事を確認して、デジモン達を見て全体居るか確認して全体居たのでファイルを鞆の中に入れた。

某地球育ちの超野菜人さん（ギルモン）も居たし、某海賊一味のコックさん（レオモン）も居たし、某見た目は小学生・頭脳は大人の名探偵さん（ドルモン）も居たし、まあ要するに全体居たんだ。

「皆居るね？」

これから僕達は、ギルモンが掘ったこの穴の中に在るデジタルワールドの入り口に入る。

今迄誰も行った事も見た事も無い世界だけど、僕達はクルモンを助けに行く。

……それじゃあ行くよ。」

啓人が俺達の顔を見てそう言って来たので、俺達は頷いて啓人を先頭にギルモンが掘った穴に入って行った。

啓人も中々格好良い事を言うじゃねエか、まあ主人公だからこそ格好良いんだと思うんだけどさ……

さて、デジタルワールド入りしたら頑張らねエとな。

PV110万突破記念だよ！（後書き）

次回はこの小説のキャラ通しの繋がりを書いた話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

キャラ通しの繋がりだよ！（前書き）

今日、俺の誕生日なんですよ。

16歳……速いな、全く。

今回はキャラ通しの繋がりなので、読んだら今後の話に役立つ……
と思いたい。

まあ航・コロナモン・ルナモンのCVが在るから役に立つか……

テントモンの声の人は、『コロツケ！』ではハンサム・マスタード
役を、『金色のガッシュベル！！』では高嶺清麿役を、『BLEA
CH』では吉良イヅル役を、『D・Gray-man』では神田ユ
ウ役を、『ゼロの使い魔』ではギーシュ・ド・グラモン役を、『N
ARUTOーナルト一疾風伝』ではサソリへ本体役を、『ぬらり
ひよんの孫』では首無役を、『あの日見た花の名前を僕達はまだ知
らない。』では松雪集へよきあつ役を、『トリコ』ではココ役を
演じた。

デジモン関係は、無印では藤山先生・ミミの父・ファントモン・ア
ノマロカリモン・ハンギョモン・レッドベジモン・ハグルモン・
タンクモン役を、02では大人の光子郎・フレアリザモン・ステイ
ーブ・シャコモン・オクタモン・カルサタモン・川田のりこの父の
役を、クロスウォーズではドルルモン・ドンドコモン役を演じた。

……俺の知っているアニメにスッゲエ出てるな、テントモン役の人。

誤字・脱字・変な所が在れば教えてください。

キャラ通しの繋がりだよ！

原作の主人公・八神太一（CV藤田淑子）とその他の選ばれし子供との関係

八神太一と石田ヤマトの繋がり

↓親友でありライバルであり頼もしい相棒。昔は意見の食い違いで何度も喧嘩していたが、あの冒険を終えて互いに成長し固い絆で結ばれている。今はドチラかが必ず大輔達に付いて行く様になっている。

八神太一と武ノ内空の繋がり

↓幼稚園からの幼なじみで似た者同士。幼なじみと言うだけ在ってお互いの考えている事などは大抵分かるが、お互いに抱いている恋心だけは分らずに友達以上恋人未満の関係。互いに何時か告白して、恋人同士になりたいと思っている。

八神太一と泉光子郎の繋がり

↓現実世界ではサッカークラブの先輩後輩の関係、デジタルワールドでは作戦を実行する人間と作戦を考える人間の関係。今は恋を相談する人間と相談される人間の関係。

八神太一と太刀川ミミの繋がり

↓恋に付いて教えて貰う者と恋に付いて教える者の関係。何時迄経っても告白出来ない太一に、時々アドバイスをしたりしている。

八神太一と城戸丈の繋がり

↓勉強を教えて貰う者と勉強を教える者の関係。勉強が苦手な太

一に、スケジュールを上手く決めて空いた時間で勉強を教えている。

八神太一と高石タケルの繋がり

↓情報を受け取る者と情報を渡す者の関係。 デジタルワールドで起こった事をタケルが分かりやすく丁寧に太一に説明し、情報を受け取った太一がデジタルワールドの状況などを光子朗と一緒に考える。

八神太一と八神ヒカリの繋がり

↓血の繋がった兄妹。 お互い似ている部分があるので、時々『どうすれば告白出来るか』と言うテーマで話し合いをしている。

八神太一と加藤航の繋がり

↓小学校からの幼なじみで、サッカークラブの先輩後輩の関係。

昔太一は航を大怪我させて未だにその事を引きずっているが、航は特に恨んでいる訳でも無いので気にしていない。 『告白出来ない男子』と言うサークルを作って、男二人で色々な予定などを作っている。 現在メンバー二人。

八神太一と本宮大輔の繋がり

↓現実ではサッカークラブの先輩後輩の関係。 大輔からヒカリに付いて相談されるが、ヒカリの気持ちを知っている太一は苦笑いしながら出来るだけのアドバイスをしている。 勇気を授ける者と勇気を受け継ぐ者の関係でもある。

八神太一と井ノ上京・火田伊織の繋がり

↓選ばれし子供の先輩後輩の関係。 表記する事は特に無い。

主人公のライバル・石田ヤマト（CV風間勇人）とその他の選ばれし子供との関係

石田ヤマトと武ノ内空の繋がり

↓相談される者と相談する者の関係。 太一が光子朗に相談している様に、空はヤマトに恋に付いて相談している。 ヤマトは太一と空の気持ちを知っているがそれを二人に教えず、二人が自分達で気付く事を信じて相談を受けている。

石田ヤマトと泉光子郎の繋がり

↓色々と苦勞している仲の関係。 太一と空から相談を受けて色々苦勞しており、それでも親友と言う事で相談を断れない良い人達。 冷静な判断力を互いに持っていて、大輔達の作戦と一緒に考えている。

石田ヤマトと太刀川ミミの繋がり

↓太一と空の関係を教える者と教えて貰う者の関係。 太一と空が何処迄言ったかをヤマトがミミに伝え、ミミがヤマトから教えて貰った情報を頼りに太一にアドバイスをしている。

石田ヤマトと城戸丈の繋がり

↓デジタルワールドの状況を教える者と教えて貰う者の関係。 丈は多忙の為中々大輔達と一緒にデジタルワールドに行けないので、ヤマトが丈に時々デジタルワールドの状況を教えている。

石田ヤマトと高石タケルの繋がり

↓血の繋がった兄弟。 お互い苦勞している身なので、色んな事を話し合っとうすれば苦勞せずに過ごせるかを考えている。

石田ヤマトと八神ヒカリの繋がり

↓言葉で表すのが難しいの関係。タケルから聞いた話を頭で考えながら、ヒカ리를優しい目で見ている。その所為かバンドの仲間やヤマトの友からはロリコン疑惑が浮かんでいるが、ヤマトはその事を全く知らない。

石田ヤマトと加藤航の繋がり

↓受けた恩が互いに大きい関係。ヤマトは自分を変えるのに何が必要かを教えてくれた航に・航はピノッキモンとの戦いで自分の命を救ってくれたヤマトに、大きな恩が在る。今はギターを弾く事に憧れる航に、時々部活に呼んでギターの弾き方を指導している。勿論ヤマトはヒカリ同様優しい目で航を見守っているが、クラスではシヨタコン疑惑が浮かんでいるがヤマトはその事は知らない。

石田ヤマトと本宮大輔の繋がり

↓心配する者と周りが見え走って行く者の関係。大輔があのだ冒険の最初の方の太一と似ている為色々心配しているが、大輔はヤマトのそんな気持ちを知らずに走っていくので、何度か衝突してしまう。

石田ヤマトと井ノ上京・火田伊織の繋がり

↓未だ話しか聞いた事のない関係。ヤマトは太一達から、京達は航達からしか話を聞いた事がないので互いに会う事を楽しみにしている。

太一の想い人・武ノ内空（CV水谷優子）とその他の選ばれし子供との関係

武ノ内空と泉光子郎の繋がり

↓頑張っている者とそれを見守る者の関係。 太一から相談を受けている光子郎は、空が頑張っている姿を陰ながら応援している。デジモン達の安否を一番教え合っている関係でもある。

武ノ内空と太刀川ミミの繋がり

↓本当の姉妹の様な関係。 お姉さん肌の空と少し我が儘なミミ、二人を見ていたら本当の姉妹の様に見える。 だがミミも成長して少しだけだが我が儘を言わなくなったので、空は嬉しい様な寂しい様な気持ちになっている。

武ノ内空と城戸丈の繋がり

↓苦労人の関係。 昔から色々な事に苦労していたので、結構固い絆で結ばれてたりする。 しかし苦労人の関係だけであって、それ以上の関係ではない。

武ノ内空と高石タケルの繋がり

↓買い物友達の関係。 買い物をする場所が同じなので時々一緒に買い物をしている、だが特に互いの事を意識してる訳では無い。

只単に買い物友達、只単に買い物友達（大事なので二回言いました。）

武ノ内空と八神ヒカリの繋がり

↓もはや似た者同士。 太一と航同様、此方も太一達と同じ事をしたりしている。 完全に義姉妹の様な関係、太一達は完全に義兄弟の様な関係。

武ノ内空と加藤航の繋がり

↓サッカークラブの先輩後輩の関係、そして助言し合う関係。互いの想い人の気持ちを知っているので、余計なお世話にならない程度の助言をし合っている。

武ノ内空と本宮大輔の繋がり

↓サッカークラブの先輩後輩の関係。これ以外、特に表記する事無し。

武ノ内空と井ノ上京の繋がり

↓愛情を授ける者と愛情を受け継ぐ者の関係。京がミミと似ている部分が在る為、母性本能が働いているのか心配している。

武ノ内空と火田伊織の関係

↓選ばれし子供の先輩後輩の関係。これ以外、特に表記する事無し。

選ばれし子供の参謀長・泉光子郎（CV天神有海）とその他の選ばれし子供との関係

泉光子郎と太刀川ミミとの繋がり

↓成長し合う関係。理論派と行動派の二人な為、意見の食い違いが在るがその度に相手の良い所を自分に生かして成長している。

泉光子郎と城戸丈の繋がり

↓理論的に考える関係。二人は理論的に考える為、色んな所で共通点が在る。意外にピッタリな関係でもある。

泉光子郎と高石タケルの繋がり

↓作戦を伝え合う関係。 太一から教えて貰った状況から光子朗が適切な作戦を考え、タケルにその作戦を伝えてタケル達が実行する。

泉光子郎と八神ヒカリの繋がり

↓色々と面倒臭い関係。 太一達の関係が上手く行ってるかをヒカリが聞くが、光子朗は苦笑いしながらヒカリ達が上手く行ってるかを聞いている。

泉光子郎と加藤航の繋がり

↓知ろうとする者と話す者の関係。 知りたがりな光子朗が航が^{フラ}第一人生の時に居た世界に付いて質問し、航が苦笑いしながら光子朗の質問に答える。

泉光子郎と本宮大輔の繋がり

↓サッカークラブの先輩後輩の関係。 これ以外、特に表記する事無し

泉光子郎と井ノ上京の繋がり

↓パソコンクラブの先輩後輩の関係。 これ以外、特に表記する事無し。

泉光子郎と火田伊織の繋がり

↓知識を授ける者と知識を受け継ぐ者の関係。 知りたがりな伊織を自分と重ねて、デジタルワールドの謎を考え合う仲。

純真な心の持ち主・太刀川ミミ（CV前川愛）とその他の選ばれし子供の関係

太刀川ミミと城戸丈の繋がり

↓夢を応援する者と応援される者の関係。 丈が勉強する理由と将来の夢を知っているので、ミミはそんな丈を全力で応援している。

太刀川ミミと高石タケルの繋がり

↓色んな所が似ている関係。 あの冒険でも二人は色んな所が似ていて、三年と言う歳月が経っても似ている所は似ている。 特に意識はしてないが、やろうとしている事や思っている事が同じ場合が多い。 本人達は全く気にしていないが。

太刀川ミミと八神ヒカリの繋がり

↓タケルと同じで色んな所が似ている関係。 大切な人が自分の為に傷付いたりする姿を見たくない。 大切な人が傷付かない様に努力して、自分が大切な人を守ろうと決めた仲。

太刀川ミミと加藤航の繋がり

↓旅行をどうするか決める関係、また諦めない心の持ち主同士。 夏休み、アメリカに旅行に行こうと考えている航の家族に、ミミが様々な旅行プランを航に提案している。 しかし二人も選ばれし子供なので、やる時は一番やる二人。

太刀川ミミと本宮大輔・井ノ上京・火田伊織の繋がり

↓名前しか聞いた事の無い関係。 これ以外、特に表記する事無し。

代名詞は生真面目・城戸丈（CV菊池正美）とその他の選ばれし子供の関係

城戸丈と高石タケルの繋がり

↓命を救った者と命を救われた者の関係。 レッドベジーモンの時やメガシードラモンの時に、タケルは丈に何度も命を救われている。なのでタケルは丈に大きな感謝をしているので、丈はタケルに少し戸惑いながらも楽しく接している。

城戸丈と八神ヒカリの繋がり

↓医学を教える先生と医学を教えて貰う生徒の関係。 あの冒険を経て、ヒカリは時々医者を目指している丈に医学を教えて貰っている。と言っても、ヒカリでも出来る応急処置だけだが、ヒカリは一生懸命取り組んでいる。丈はヒカリが「航君が怪我をしても私が治す」と言う気持ちを持っている事を知っているので、太一に勉強を教えるのと平行でヒカリに教えている。

城戸丈と加藤航の繋がり

↓勉強を教え合う関係。 航はあの冒険を終えて中学の勉強をし始めたので、中学の勉強がある程度出来る。丈も受験生なので勉強がある程度出来る。だが二人は未だ子供なので、時々勉強会を開いて互いが分からない所を教え合っている。航の事を知らない人が見たら不思議がるが、航の事を知っている人は特にツッコむ事無く二人を見守っている。

城戸丈と本宮大輔・井ノ上京・火田伊織の繋がり

↓名前しか聞いた事のない関係。これ以外、特に表記する事無し。

航の親友・高石タケル（CV山本泰輔）とその他の選ばれし子供の
関係

高石タケルと八神ヒカリの繋がり

↓大切な人を守る為に強くなろうと決めた関係。あの冒険では守
って貰う事が殆どで、（精神年齢は上だが）同じ年である航にすら
守って貰っていた事が、二人を強くなろうと決意させた。何時も
は航を入れた三人で過ごす事が殆どだが、航が居ない時は二人で過
ごしている事が多いので、タケルは大輔から敵視されている。本
人達は全く気にしていないが……

高石タケルと加藤航の繋がり

↓固い絆で結ばれた親友の関係。あの冒険を終えた後も定期的に
連絡を取り合っていたので、二人の仲は普通の友より固い絆で結ば
れている。そして航とタケルと一緒に街中を歩いていると、何故
か女性陣から歓声が上がる。金髪のイケメンと白髪のイケメンが
歩いていたら自然とそうなるってしまうが、本人達は何故歓声が上
っているのか未だに分かっていない。

高石タケルと本宮大輔の繋がり

↓微妙な関係。タケルは大輔があゝの冒険の時の太一と似ていたの
で好印象の感情を持っているのだが、大輔はヒカリと仲の良いタケ
ルが気に入らないのかライバル視されている。

高石タケルと井ノ上京・火田伊織の繋がり

↓マンションが同じ場所と言う関係。　これ以外、特に表記する事無し。

本作のヒロイン・八神ヒカリ（CV荒木香恵）とその他の選ばれし子供の関係

八神ヒカリと加藤航の繋がり

↓幼稚園児の頃からの幼なじみの関係であり、友達以上恋人未満の関係。　互いの恋心は分かっている、分かっているのだが勇気を出して告白が出来ない。　しかし告白が出来ないからと言って、会話が弾まない訳ではない。　互いに勇気を出そうと頑張っているが、頭の中は不安が一杯でずっと友達以上恋人未満の関係である。　同じ学年の女子と殆どの男子は二人の気持ちを知っているので、何かと二人に気を使ってくれたりしている。　だが大輔は二人の気持ちを知らない。

八神ヒカリと本宮大輔の繋がり

↓凄くヤヤコしい関係。　航とヒカリは互いに好きだが、大輔はヒカリが好きで何故か大輔の勘違いでタケルはヒカリが好きで航は何の関係も無いヒカリの幼なじみとなっている。　大輔の積極的なアプローチもヒカリは華麗にスルーする。　……ドンマイ、大輔。

八神ヒカリと井ノ上京・火田伊織の繋がり

↓同じ選ばれし子供の関係。　これ以外、特に表記する事無し。

本作の主人公・加藤航（CV宮野真守）とその他の選ばれし子供の関係

加藤航と本宮大輔の繋がり

↓漫才コンビも羨ましがる様な息ピツタリの関係。同じサッカークラブに所属していて、ボケとツツコミの様な会話や行動ばかりしている。変な所は似ていて、変な所は違う、そんな二人。唯、航は女子に人気でサッカークラブの試合には航のファンが応援に来る、大輔には殆ど応援が来ない。サッカーの上手さは一乗寺と同等とは言えないが一乗寺に近い力を持つ航を、大輔は憧れとライバル視している。大輔は元太一のポジション、航は元光子郎のポジションである。

加藤航と井ノ上京・火田伊織の繋がり

↓同じ選ばれし子供の関係。航は京の両親が経営するコンビニの常連だったりする。伊織の祖父が教える剣道教室に時々通って、剣道を護身術として学んでいる。

02の主人公・本宮大輔（CV木内レイコ）とその他の選ばれし子供の繋がり

本宮大輔と井ノ上京・火田伊織の繋がり

↓同じ新しい選ばれし子供の関係。これ以外、特に表記する事無

し。

井ノ上京（CV夏樹リオ）と火田伊織（浦和めぐみ）の繋がり

↓同じマンションに住む小さい時からの幼なじみ。両親も馴染みの繋がり、結構仲が良い。

此処には表記しなかったが、デジモン達は仲が良い。

アグモン（CV坂本千夏）、ガブモン（CV山口真弓）、ピヨモン（CV重松花鳥）、テントモン（CV櫻井孝宏）、パルモン（CV溝脇しほみ）、ゴマモン（CV竹内順子）、コロナモン（CV井上富美子）、ルナモン（CV今野宏美）、レオモン（CV平田広明）、オーガモン（CV江川央生）、ウィザーモン（CV石田彰）、ケンタルモン（CV相沢正輝）、ピッコロモン（CV田の中勇）、アンドロモン（CV篠田清之）

キャラ通しの繋がりだよ！（後書き）

次回は『闇の王デジモンカイザー Part 1』を予定しています。

次回もお楽しみに！！

第百一話だよ！（前書き）

太刀川ミミ役の人は、『金色のガッシュベル！！』では大海恵役を、『ぬらりひよんの孫』では花開院ゆら役を演じた。

デジモン関係では、無印ではピヨコモン、02ではミーナ役を演じた。

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

第百一話だよ！

『闇の王デジモンカイザー Part 1』

side 航

俺・京さん・光子郎さんは今、パソコンルームの椅子に座って麦茶を飲みながら大輔達の帰りを待っている。

大輔達+太一さんがデジモンカイザーに捕まったデジモン達を解放しに行って、俺達は皆の帰りを麦茶を飲みながら待っている訳だ。まあ俺も行っても良かったんだが、大勢で行ったってデジモンカイザーにバレる可能性が上がるだけなので今回は留守番している訳だ。

「はぁ、もうすっかり春だな。」

「航君、言ってる事がお爺ちゃんみたいだよ。」

俺が麦茶を飲んで校庭に咲く桜を見ながらそう言ったら、京さんが少し呆れた目をして俺にそう言ってきた。

うーん、精神年齢は既に二十歳を超えてるからな。

同い年の皆より大人びてるのは自負してたが、まさか爺さんみたいと言われるとは……少しショックだ。

俺が少しショックを受けていたら、ゲートが開いているパソコンが光り出した。

なので俺達は直ぐに椅子を直してその場から離れると、デジタルワールドに行っていた皆と何故かゴツモン達が其処に立っていた。

…
つて、

「え、ええええええ!!!」

俺・京さん・光子郎さんは大声を出して、太一さん達とゴツモン達を交互に見た。

な、何でゴツモン達も一緒に来てるんだよ!?

……はっ、まさか偶々太一さん達と一緒にコッチに来てしまったのか!?

「そんな訳無いだろ！」

パシッ！！

俺が心の中でゴツモン達がコッチの世界に來た理由を考えていたら、大輔が何処から取り出したハリセンで俺を叩いてきた。

痛く無い……だど？

派手な音が出たのにも関わらず痛く無い、最高のハリセンだな！

！……って違う違う！！

「何処から取り出したんだよ!？」

「此処に置いて在ったんだよ！」

……確かに置いて在ったね、「何故パソコンルームにハリセン？」
って思いながら麦茶を飲んだよ。

でもさ、何で此処にハリセンが置かれてるのさ？

「そのハリセンは藤山先生が何かの記念で貰った物で、家に置く場所が無いから此処に置いてるんだって。」

すると京さんが苦笑いしながら、俺が疑問に思っていた事を答えてくれた。

藤山先生エ、此処はアンタの部屋かよ！？

「あの、話を戻しても良いですか？」

「あつ、すいません。」

光子郎さんが困った顔をしながら俺に聞いてきたので、俺は素直に謝って大輔の頭を軽く叩いておいた。

大輔は痛がって俺を睨んでいたが、俺は特に気にする事も無く光子郎さんを見た。

「それでは……どうしてゴツモン達を連れて来ちゃったんですか！？」

すると光子郎さんは咳をして、大きな声を出して太一さんに聞いた。

……光子郎さんって昔から思ってたけど、本当に面白い人だ、色々な所が。

「仕方が無いだろ、また何時襲われるか分からないんだし。
……なあ？」

「うん。」

太一さんが光子郎さんにそう言ってヒカリちゃんに確認を取ると、ヒカリちゃんは困った顔をしながら太一さんの言葉に頷いた。

まあ確かにデジモンカイザーは何時現れて、何時襲って来るかわからない。

だから救出したゴツモン達を安全な所に避難させたいって気持ちに分かるよ、分かるけどさ……

「藤山先生に見つかったらどうすんだ（どうするのよ）？」

俺と京さんが同じ事を大輔達を見ながら聞くと、大輔はテレビに出てきそうな紳士の笑いをして俺達を見てきた。

……ツツコめって言ってるのか？

「その点は大丈夫だ！

伊織、説明してやれ！」

「はい。」

京さん達は絶対にそう言うだろうと思って、ちゃんと向こうで練習してききましたから。」

大輔が完全に「ツツコンで呉れ！」と言う感じで伊織君にバトンパスしたので、伊織君は大輔のバトンを受け取って俺達の顔を見ながらそう言ってきた。

練習？

……忍者みたいに隠れる術でも練習して来たのか？

「はい、ポーズ。」

伊織君がそう言うのと、ゴツモン達は棚や机に移動して有名な彫刻のポーズを取った。

えっ、まさかと思うけど、これを練習して来たって言うんじゃない……

「ね、何処からどう見ても彫刻でしょう？」

「「……………」」

「ふむ……」

伊織君が俺達に確認を取って来たが、光子郎さんと京さんは目を中心に驚いて、俺は数枚の紙と鉛筆を取り出してある事を書き始めた。

そして俺は一通り紙に書き終わると、一枚ずつゴツモンの体に張り付けていった。

『作品タイトル…考える太郎』

制作者名…本宮大輔』

『作品タイトル…歩く次郎』

制作者名…本宮大輔』

『作品タイトル…バレエをする三郎』

制作者名…本宮大輔』

「何でだよ!!」

パシンッ!!

伊織君の期待の籠もった目やゴツモン達の努力を見てたら悲しく

なって来たから、俺がカモフラージュ出来る様に力を貸してやったんだろうが!!

なのに貴様は人の厚意をハリセンで叩いて踏みにじるのか!!

「ホント、少しの間だけで良いからジツとして呉れよ。」

すると大輔が深い溜め息を吐いて、残念がる様な目で俺を見ながらそう言ってきた。

……泣いて良いかな、泣いても良いよね!?

「京君、京君のデジヴァイスを少し貸してくれませんか？」

光子郎さんもこんな可哀想な俺を無視して、話を進めちゃうんですか!?

フン、別に良いもん、俺は大人だから子供の言う事を聞いてあげるんだから!

す、拗ねた訳じゃ無いんだからね!!

「疲れてるんだね航、今日は早く寝るんだよ？」

「……もう良いよ。」

タケルが俺を慰める様な声のトーンで言ってきたので、俺は疲れたのでタケルにそう言った。

俺はタケルにそう言って光子郎さんを見ると、何時の間にか話は終わっていて京さんはD-3を光子郎さんに預けていた。

……話を聞き損ねた……。——orz

「じゃあ僕、少しお兄ちゃんの所に行ってみるよ。」

……元氣出してね、航。」

タケルは大輔達にそう言って、最後に俺を慰めてヤマトさんの所に行った。

タケル、メツチャ良え子やん!!

イケメンで性格はgood、勉強もそれなりに出来てバスケット部の期待のエース……モテてるんだろうな。

フツ、俺は自慢出来る親友が居たんだな。

「顔が悪人面だって!!」

パシンッ!!

チクソウ、今日で三回目のハリセンだ。
痛く無いのに痛く感じてしまう……

sideタケル

僕はお台場学校から一度出て、お兄ちゃん達のバンド・“TEEN-AGE WOLVES”がライブしている場所にやって来た。

“TEEN-AGE WOLVES”の日本語訳は“十代の狼達”って意味で、航がお兄ちゃんのバンド名を聞いて「……厨二病になったの?」って言うってお兄ちゃん達の事を本気で心配していたのが面白い思い出だ。

僕は部屋に入ると、お客さんは沢山居てその殆どが女子中高生だった。

お兄ちゃん達って容姿が格好良いし、バンドをしてたら格好良さ

が2倍になるから人気なんだよね。

僕はそう思いながらお兄ちゃんを見てると、お兄ちゃんが僕に氣付いて僕を見て来たので僕は「外で待ってる。」と口を動かして伝えて、部屋を出てロビーの椅子に座ってお兄ちゃんを待った。

そう言えばこの前、航が「一緒にバンドをしようぜ！」って言うて来たけど、お兄ちゃん達のライブを見て憧れたんだろう。

今じゃ時々、お台場中学校に行って部活に参加させて貰ってるって言ってたし。

うーん、どうしようかな？

って違う違う、今はゴツモンの事を考えなきゃ！

「どうしたんだ、タケル？」

「あっ、お兄ちゃん。」

僕が考え込んでいたら、何時の間にかライブを終えたお兄ちゃんが来ていて、僕に話し掛けてきた。

僕は少し驚きながらも、お兄ちゃんにゴツモン達の事を話した。

「つまり、差し当たったの問題はゴツモン達の隠し場所と言う訳か……」

「そうなんだ。」

お兄ちゃん、何処か良い所知らない？」

「うーん……」

お兄ちゃんが僕の話聞いて問題を分かってくれたので僕が聞くと、お兄ちゃんは腕を組んで深刻な顔をして考え始めた。

否、其処迄真剣な顔をしなくても……

「スイマセーン!!」

僕が心の中でお兄ちゃんにツッコんでいたら、僕たちより年上の茶髪の女の人が走ってやって来た。

多分、お兄ちゃんのファンでサインを貰いに来たんだろう。

「サイン良いですか？」

「あ、はい。」

女の人はペンをお兄ちゃんに差し出しながら、期待した顔をしながらお兄ちゃんに聞いた。

お兄ちゃんは少し戸惑いながら了承すると、女の人は嬉しそうな顔をして背中をお兄ちゃんに向けた。

やっぱりお兄ちゃんのファンだったか……

「えっと、名前は？」

「“本宮ジュンへ” ってお願いします。」

お兄ちゃんは女の人に名前を聞くと、女の人・本宮ジュンさんはお兄ちゃんに名前を言った。

……本宮？

「もしかして、本宮大輔君のお姉さん？」

「そうだけど……君誰？」

僕が聞くと、本宮さんは大輔君のお姉さんと肯定してくれた。

やっぱりそうなんだ、何処か大輔君と雰囲気似てるもん。

「俺の弟のタケルです。」

「初めまして、大輔君とは同級生なんですよ。」

「ヘエそうなんだ、所で君可愛いね。」

君もサイン！」

お兄ちゃんが僕の名前を言って大輔君のお姉さんに挨拶をすると、大輔君のお姉さんは余り興味が無かったのか薄い反応で僕にペンを渡してきた。

「大輔は全然可愛く無いでしょ？」

君達みたいな可愛い弟か、若菜ちゃんみたいな可愛い妹だったら良かったのに……」

するとお姉さんは大輔君の悪口？を言って、溜め息を吐きながら僕にそう言って来た。

……若菜ちゃん？

「ああ、君達は知らないか……って知る訳無いか。」

この娘、この前大輔の友達の子と一緒に来たの。

余りにも可愛かったから思わず写真を撮っちゃったんだ。

こんな可愛い娘が妹だったら良かったのに……」

お姉さんはポケットから写真を取り出して、僕に渡してそう言うて来た。

その写真には、某魔砲少女に出てくる夜天の書の管制人格のコスプレをした涙目の女の子とその女の子を抱き締めているヒカリちゃ

んがが写っていた。

確かに可愛いけど、これって女装（男の娘化）した航だよね。

……また女装（男の娘化）したんだね、でも本当に女の子にしか見えないよ。

って、航ワザワザ偽名を使ってんだ……

僕は親友が悲惨な目に遭っていた事を知って、何とも言えない気持ちになりながら写真を大輔君のお姉さんに返した。

ピピピピッ!!

突然、お兄ちゃんのデジヴァイスがSOS信号をキャッチした。

すると今度は、僕のDターミナルに航からメールが届いた。

其処には、『デジタルワールドからSOS信号をキャッチ！急いで帰って来い！……後、写真に関しては何も聞かないで欲しい。』と書かれていた。

航……今日は家に遊びに来なよ。

愚痴は聞いてあげるよ、だって僕達親友だからね。

「タケル！」

「あっ、うん！」

「ちょ、ちょっと!？」

僕はお兄ちゃんに言われて、一緒に小学校に向かって走り出した。

Side 航

「……グスッ」

「……何で泣きながらメールを打ってるんだよ？」

俺は視界が霞むが頑張ってタケルにメールを打っていたら、大輔が少し呆れた顔をしながら俺に聞いてきた。

ひ、秘密を知られたから泣いてるんじゃないんだからね！！

「……キャラが最近安定してないな、お前。」

大輔は俺にそう言って、京さんが使っているパソコンの前に移動してD-3を使ってゲートを開けた。

……もう泣く、ガラスのハートの俺には耐えきれない！！

「ごめん、遅くなった！！」

俺が部屋の隅に行こうとしたら、タイミングを狙ってたのか？って思いたくなる様な綺麗なタイミングでタケルとヤマトさんが部屋に入ってきた。

すると部屋に入ってきたタケルは、俺に同情する目をしながら肩に手を置いてきた。

……うう、何で俺って此处迄扱いが酷いんだよ……

「皆、私は泉先輩にデジヴァイスを返して貰いに行ってくる！」

京さんは俺達にそう言って、走って光子郎さんの所に向かって行った。

あつ、そう言えば京さんは光子郎さんにD－3を預けてたな。

「中継は私がします！」

すると机の上に乗っていたポロモンが、俺達にそう言って来た。

そして俺とタケルはパソコンの前に移動した。

未だ心は粉々だよ、粉々だけど頑張る俺を褒めて欲しい！

「行くぜ！」

大輔がそう言ったので、俺達はデジヴァイスをパソコンに向けてデジタルワールドに向かった。

第百一話だよ！（後書き）

次回は『闇の王デジモンカイザー Part 2』です！

次回もお楽しみに！

第百二話だよ！（前書き）

パルモン役の人は、『おジャ魔女どれみ』では島倉かおり役を、
金色のガッシュベル！！』ではナオミ役を演じた。『

今回、後半はかなりグダグダですね。

頑張って書いたんだけどな。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第百二話だよ！

『闇の王デジモンカイザー Part 2』

side 航

俺達はSOS信号が来たエリアにやって来ると、其処には川が流れていてその川の近くにヤマトさんのパートナーデジモンであるガブモンが倒れていた。

「ガブモン！？」

ヤマトさんがガブモンを見て走ってガブモンに近付いたので、俺達も走ってガブモンに近付いた。

ガブモンは体中痣だらけで、まるで何かに叩かれた様な傷だった。

「……や、ヤマト？

き、来てくれたんだ！」

するとガブモンはヤマトさんの声で目が覚めて、嬉しそうな顔をしながらヤマトさんにそう言った。

良かった、傷は命に別状は無いんだな。

俺はホッと一安心したが、このエリアがデジモンカイザーのエリ

アだと思い出して直ぐに真剣な顔をした。

「当たり前だろ？」

「……それより、一体何が遭ったんだ？」

「うん、実はね……」

ヤマトさんがガブモンに聞くと、ガブモンは今迄の事を簡単に、そして詳しく俺達に教えてくれた。

デジモンカイザーが突然ダークタワー（俺命名）をこのエリアに建てて、ベジーモンやレッドベジーモンを操り、このエリアを支配した事。

ガブモンは隙を見て捕まえられたデジモン達と一緒に逃げ出そうとしたが、このエリアの責任者？のレッドベジーモンに見つかり、沢山攻撃を受けて川に落とされて、此処に流れ着いた事。

そして朦朧としていた意識の中、以前アグモンからテレビの事を聞いていたので此処に在るテレビを使ってSOS信号を送った事。

ガブモンは俺達に話し終えると、ヤマトさんの耳に近付いてヤマトさんだけに聞こえる様に話し出した。

しかし……

「このテレビって本当に便利だよな。」

「ゲートを開くキーアイテムで、更にデジモン達からのSOS信号も送れるんだしね。」

俺がテレビを見ながらそう言うと、隣に立っていたタケルが俺の言葉を聞いてそう言った。

しかし此処迄便利なのに汚いよなこのテレビ、やっぱ野外に置いてるから汚くなるのか？

「おーい、目的地が分かったよー！」

するとパタモンがガブモンの話を聞いて、話を聞いてなかった俺達にそう言ってきた。

俺は無駄な思考を頭の片隅に仕舞い込んで、ガブモンを先頭にダークタワーが建っている場所に向かって歩き出した。

.....

.....

.....

.....

「あのサンタゲリアって町だ。

平和な町だったんだけど、デジモンカイザーがやって来て町のデジモン達は牢獄の中。」

ガブモンは俺達の前に広がる町・サンタゲリアの今の状況を俺達に教えてくれた。

俺はガブモンの話を聞きながら町を見ていると、町の一番高い所にダークタワーが建っていた。

「あの塔、ゴツモン達が居たエリアにも建っていた。」

「あの塔はダークタワーって言うんだ、デジモンカイザーが建てて行った。」

テイルモンが少し驚きながらそう言うのと、ガブモンがダークタワーの事をテイルモンに説明した。

……俺が命名したと思っていたのに、まさかデジモンカイザーも俺と同じ名前を命名してたなんて……

何かスッゲェ嫌な気分……

「よし、急いで行こう！」

「待て！」

大輔が何の作戦も考えずに無闇に町に乗り込もうとしたので、ヤマトさんが少し大きな声を出して大輔を制止させた。

「もう一度念を押しておくぞ、俺達の目的は捕らわれたデジモン達の解放だ。」

「分かってるよ。」

何、アーマー進化すればアツと言う間さ。」

「ダメだよ。」

ヤマトさんが大輔に念を押してもう一度俺達の目的を言ったが、大輔はちゃんと分かっている様でヤマトさんにそう言ったが、タケルが大輔の言葉を否定した。

大輔、お前って本当に何も分かってないな……

「大輔、俺達がもしデジモンカイザーに操られたデジモン達と戦うとなったら、操られたデジモン達はどんな行動を取って来ると思う？」

俺は大輔に少し呆れながら聞いてみたが、大輔は腕を組んで顔を

傾けて頭に？マークを浮かべていた。

……何か今日は大輔に失望ばかりしそうだな。

「良いか大輔、俺達が正面から戦いを挑めば、捕らえられたデジモン達はどうなる？」

「きっと人質にして、僕達とそのデジモン達を倒そうとしてくるね。」

「デジモン達を助けに来たのに、人質にされてそんな状況になったら“本末転倒”だわ。」

俺・タケル・ヒカリちゃんの順番で大輔に考えられる可能性を言うのと、大輔は「えええええ……」と少し落ち込んだ声でそう言った。
……うん、今日は大輔に失望する日だな。

「見張りってベジEMONだよね、“ウンチ”を投げってくる……」

「……うえ。」

パタモンが木の枝から耳？を使って降りながらそう言って来ると、タケルがああの時の“ウンチのトラウマ”を思い出して少し嫌な顔をしながら反応した。

俺は未だ（・・）“ウンチのトラウマ”は他の皆より被害が少ないが、タケル達は結構“ウンチのトラウマ”の被害が多いんだよね。
……そう言えば、確か原作ではミミさんの必殺技は“ウンチ掴み”だった様な……

うえ、想像したらスツゲエ気持ち悪くなってきたよ……

「レッドベジEMONって、どんな奴だったけ？」

……え、えええええ……

ヤマトさん、俺ですらレッドベジーモンを覚えているのに……汚い系のデジモンってインパクト半端無いのに……

俺はそう思いながらヤマトさん達を話をしながら大輔を見たら、大輔は不機嫌な顔をしながら拗ねていた。

………親離れ出来ない子供か!?

「お前には言われたくない!!」

ベシッ!!

俺が大輔を見て心の中でツッコんだら、大輔が走って俺の頭にチョップしてツツコンできた。

い、イツテェ……大輔は絶対に超能力者だ!

某学園都市に居る心の中を読みとる事が出来る超能力者だ!!

「航、速く来ないと置いて行くよ!」

俺が頭の中で某学園都市の事を考えていたら、既に町に向かって歩いていたタケルが俺を呼んで来た。

って大輔の顔が赤くて、タケル達は笑ってるじゃん。

……何か大輔がやらかしたのか?

……自分の世界に入っていて聞き逃したアアアorz見逃したアアアorz

「航君、落ち込んでる場合じゃないよ。」

するとヒカリちゃんが俺の所に戻って来て、俺の手を引っ張って走り出した。

あつ、久しぶりに手を繋いだ様な気がする……でも恥ずかしいッス。

大輔は後ろで何か叫んでいたがな……

………

………

………

………

「皆、頼むな？」

「「「^{うん}応（嗚呼）（ええ）！！」」」

俺が顔だけを動かして皆にそう言うと、皆は少し悪人面をしながら頷いて返事をしてくれた。

何故悪人面なのかと言うと、俺達は操られた（設定の）テイルモン達に捕まえられた人間（の設定）だからだ。

まあ何故こんな設定なのかと言うと、怪しまれずに敵の本拠地に乗り込む為だ。

とまあ、そんな事を考えながら歩いていると、何時の間にか町の入り口に来ていた。

「止まれエ、お前等何者だァ!？」

するとベジーモンの一体が、俺達を警戒しながら聞いてきた。

うへえ、やっぱ汚い系のデジモンは無理……仲間デジモンなら全然平気なんだけどな。

「脱走したデジモンと、その仲間を捕まえてきたわ。」

テイルモンは腕に付けたダークリング（俺命名）擬きをベジーマン達に見せながらそう言うと、ベジーマン達は俺達に警戒心が無くなって俺達を町の中に入れた。

「牢獄へぶち込んでやる！」

「ほれえ、さっさと歩くだぎゃ！」

パタモンとアルマジモンが上から落ちて来るウンチを避けて、俺達と一緒に牢獄に向かいながら俺達にそう言って来た。

……ノリノリだね、パタモンさんにアルマジモンさんや。

そんな事を思いながら歩いていると、何時の間にかベジーマン達の気配を感じなくなった。

「偽のリングだって事はバレなかったみたいだね。」

「だけど、油断は出来ない。」

何故なら私達は今、敵の本拠地に居るのだから。」

パタモンが飛ぶのを止めて俺達の方を見ながらそう言うと、テイルモンが真剣な顔をしながら俺達にそう言って来た。

そして俺達は階段を上がって行くと何時の間にか牢屋の前に来ていて、牢屋の前にはベジーマンが居た。

……キモい、此処迄近くに居られるとスッゲム力つくんだけど。

「オラァ、グズグズするなァ!!」

「「「うわぁっ（きゃぁっ）!?!」」」

そして俺達はベジーモンに投げられて、牢屋の中に入れられた。

……………

「ダメだっって航!

少し落ち着いて、気持ち分かるからさ!」

俺は立ち上がってベジーモンにO・H A・N A・S H Iしてやろうとしたら、タケルが俺を抑えてきてそう言って来た。

無理だタケル、彼奴等にO・H A・N A・S H Iしねェと俺の気が収まらねェ!!

「お前達は全員、明日100叩きの刑だ!

だが其処の白髪、お前は1000叩きの刑だ!」

「三下の癖に生意気なんだよォ!

屑は屑らしく、ゴミの所へ帰りやがれェ!!」

「だから航、少しは落ち着きなっって!」

ベジーモンがクソ生意気な事を言って来たので、俺は某学園都市のレベル5の第一位さんの喋り方をして殴り掛かろうとしたが、タケルが未だ俺の体を押さえてきた。

落ち着く?

ンな事、此奴が目の前に居るのに出来るかァ!!

「猫パンチ!!」

すると俺と話していたベジEMONが、後ろからのテイルモンの“猫パンチ”を喰らって気絶した。

他のベジEMON達も、コロナモン達によって全員気絶させられた。
……ザマア。

「航君、元に戻ろうね？」

「……はい。」

目のハイライトが消えたヒカリちゃんが俺に頬笑みながらそう言うて来たので、俺は素直に元に戻って反省した。

うん、やっぱヒカリちゃんは某管理局の白い悪魔、または某魔砲少女であり魔王でもある人になっていたんだ。

何処の世界に居ても魔王は怖いんだよね……ってか、あの冒険での魔王化より怖くなってるんだけど。

「……航君？」

「ごめんなさい。orz」

ヒカリちゃんが俺の腕に関節技を決めながら名前を呼んで来たので、俺は直ぐに関節技を解いて一瞬でDO・GE・ZAをして素直に謝った。

男としてのプライド？

そんな物、ディアボロモンの戦いの後に失ったよ!!

チクソウ!!

「よしっ、今の内に逃げるぞ！」

ヤマトさんは俺達の顔を見てそう言って、警戒しながら皆の先頭になって歩き出した。

……ヤマトさん、少しは俺の事を心配して下さいよ。
もう見慣れてるかもしれませんが、俺的にはスゲー大変なんですよ？

俺は心の中で少し泣きながら、ヤマトさんに訴えかけた。

……………

……………

……………

……

俺達は裏道裏道、ベジモン達に見つからない様にしながらこの町を抜けようとしていた。

だが出口に繋がる道は全てベジモン達が邪魔をして、未だに俺達は町を抜け出す事が出来ずに裏道を走っていた。

「!？」

ま、待って！

コッチにも見張りが居るよ！」

すると先頭を飛んでいたパタモンが急に立ち止まって、小さい声ながらも俺達を制止してきた。

あゝ、マジでベジモンばかりでウザいんだけど……

「あゝ、もう我慢出来ねエ!!」

此処はアーマー進化で!!」

「待てよ、折角助け出したデジモン達も巻き添えにする気か？」

大輔は遂に我慢の出来なくなってD-3を取り出してベジモンをアーマー進化して倒そうとしたが、ヤマトさんが大輔の肩を掴んでそれを制止した。

うん、俺も我慢の限界だけど、此处で爆発してしまったらヤマトさんの言う通り助け出したデジモン達が危険な目に遭ってしまう。でも、今回ばかりは大輔、お前に失望しないから安心しろよ？

「ねえ、ダークタワーの在る丘に行かない？」

「「賛成!」」

タケルがギスギスしている大輔とヤマトさんを見て、咄嗟に思い付いた考えを言うとパタモン達が賛成した。

否、ダークタワーに行くのは何か不味いフラグが建つ様な気がするんだが……

俺が不安になりながらそう思っていると、皆はタケルの案に従ってダークタワーに向かって歩き出した。

うわー、スッゲー嫌な予感がするんだけど……

「何でエ何でエ!!」

「大輔……頑張れ。」

「ブイモン!!」

ブイモンが気を使って応援したが、逆に大輔の気に触って体を持

ち上げられて揺られてるよ……

此処に居ると馬鹿がウツちまうな……

「誰が馬鹿だ!!」

ベシッ!!

「イテッ!!」

チクソウ、大輔だけじゃなくブイモンも超能力者だなんて……
ってか、二人同時に頭をチョップしたら俺の脳細胞が死ぬだろう
が!

「タケルウ、大輔とブイモンが虐めて来るウ!」

「何でだよ!?!」

俺はそう言いながら走って行くと、大輔とブイモンがツツコみな
がら俺を追い掛けてきた。

……リアルに虐められそうなんです……

……

……

……

……

はい、大輔とブイモンにツッコみで頭を叩かれた俺は、頭を抑えながらダークタワーに向かう階段を上ってます。

ツチ、何で俺ばかり殴られなきゃならんだ!?

「自業自得じゃないの?」

「……………」

俺が頭の中で思っていた事にヒカリちゃんが完璧な答えを言ってきたので、俺は何も言う事が出来ずに黙り込んでしまった。

……認めよう、此处は『デジモンアドベンチャー』の世界じゃなくて、某幻想殺しさんや某禁書目録さんが居る世界なんだ!

「そう言えば大輔君、今日君のお姉さんに会ったよ。」

!?

何……だと?

タケル、お前はあの恐ろしい大輔の姉さんに会ったのか!?

……よく無事に帰って来れたな、羨ましい限りだよ。

「……………だから?」

「えっ、だからって?」

だが大輔は姉さんの話をされて先程よりも不機嫌になってタケルに聞き返すと、タケルは困った顔をしながら大輔に聞き返した。

……聞き返し過ぎだ、お前等。

「否、俺の悪口言ってただろ。」

彼奴、会う人ごとに俺の悪口言ってるからな。

まあ、彼奴が俺の事が嫌いでも、俺も彼奴が嫌いだからどうでも良いんだけどね。」

「おい、何悪っているんだ!!」

大輔が面倒臭そうな顔をしながらタケルに自分の姉さんの事を言う、先頭を歩いていたヤマトさんが走って大輔に突っかった。

あの人、歳が離れてるからって毎度毎度大輔の悪口言ってるんだよな。

悪口を言うなどとは言わないが、毎度毎度悪口を言ってるから姉弟の仲が悪くなるんだって。

……っと、このままだと喧嘩になるから仲裁に入りますか。

「……何で止めるんだ、航？」

「……だってあの人、俺の男のプライドを……グスツ」

ヤマトさんは少し切れた顔をしながら俺に聞いてきたので、俺はあの時の記憶を思い出しながら涙声で言った。

あの日、ヒカリちゃんに無理矢理女装（男の娘化）させられて、大輔の家に無理矢理連れて行かれて、偶々家に居た大輔の姉さんに気に入られて写真を何十枚も取らされたんだ……

しかも名前を聞いてきたから、わざわざ『片山若菜』と言う偽名迄作らされて……

あれ、目から汗が出てきたよ……

可笑しいな、目から汗が出る事は先ず無いのに……

「」「航（君）（さん）、ドンマイ。」「」

するとヒカリちゃん以外の皆が、同情を含んだ目をしながら俺に
そう言ってきた。

ヒカリちゃんは苦笑いしながら、両手を合わせて「ごめんね？」
と言うポーズをした。

ってか、何時の間にか大輔とヤマトさんが仲良くなってるな。

仲良くなってくれて嬉しい様な、同情されて悲しい様な……

俺は何とも言えない気持ちになりながら、頂上に向かって歩き出
した。

………

………

………

………

俺は頑張って立ち直り、皆と一緒に歩いて漸く頂上に辿り着いた。
しかし、頂上は断崖絶壁で逃げる道は何処にも無かった。
ほら、やっぱり嫌なフラグが建ってたよ……

「……ロープが在れば良いんだが。」

ヤマトさんが一生懸命考えて、ロープを使って崖を降りる考えを
思い付いてそう言った。

否、ロープが在ったとしてもリスクが高過ぎやしませんか？

それに、この高さから下に届く迄のロープが在るとは思えない。

「じゃあ、俺が持って来るよ。」

「否、此処は俺達が行く。」

するとガブモンがロープを取って来ると言ったが、ガジモン達がガブモンにそう言った。

……また嫌なフラグが建ってそうなんだが……

「そうか、なら俺と一緒に行こう。」

ガブモンはガジモン達にそう言って町に戻ろうとしたら、前からピンク色のソフトクリーム状の物体が飛んで来た。

俺は第六の感覚が危険を察知したので、全速力で後退してそれ等を避けた。

だがガブモン達は、それ等を喰らってしまったって体にそれ等が付いてしまった。

うへえ、やっぱりウンチじゃねエか。

……ガブモン達、後で川で体を洗うかファブリーズしてね？

「お前達、黙って返す訳にはいかないなあ……!!」

するとウンチが飛んで来た方向から、レッドベジEMONとベジEMONの軍団が現れた。

うわぁ、汚い系のデジモンがこんなにも一杯……デジモンカイザー、良い趣味してるなこの野郎……!!

今度から少し距離を開けて喋るから覚悟しとけよ……!!

「タケル達はガジモン達を守れ！」

俺と大輔で此奴等をぶっ倒してファブリーズをする！
分かったか……!？」

「「「分かった（分かりました）（何でファブリーズなんだよ……!？）」」」

「!!」

俺が皆にそう言うのと殆どの人が了解してくれて、一部の奴が俺にツツコミをしてきた。

まあツツコミに関しては無視だ無視、関わると碌な目に遭わないからな。

「『デジメンタルアップ!!!』」

俺は二つのデジヴァイスアルティメットバージョンを・大輔はD-3を構えてそう叫ぶと、俺達のデジヴァイスアルティメットバージョンとD-3・Dターミナルとコロナモン・ルナモン・ブイモンの体が光り出した。

「コロナモン、アーマー進化ー!!!」

……灼熱の信頼、Sフレアモン!!!」

「ルナモン、アーマー進化ー!!!」

……月光の運命、Mクレシェモン!!!」

「ブイモン、アーマー進化ー!!!」

……燃え上がる勇氣、フレイドラモン!!!」

するとコロナモンは信頼のデジメンタルと・ルナモンは運命のデジメンタルと・ブイモンは勇氣のデジメンタルと一体化し、Sフレアモン・Mクレシェモン・フレイドラモンにアーマー進化した。

「こ、これがアーマー進化……」

ヤマトさんは初めて見るアーマー進化に驚いて、小さい声でそう

眩いた。

さて、ファブリーズをして清潔になって貰いたい、先ずは……

「フザけた塔をぶっ壊せ!!」

俺が右手をダークタワーに向けてそう言うと、三体のデジモンは飛び上がった。

そして、

「アロー・オブ・アポロ!!」

「アロー・オブ・アルテミス!!」

「ナックルファイア!!」

三体はそれぞれ得意技をダークタワーに向けて放つと、ダークタワーは三体の技を喰らって罅が入って倒れそうになった。

ダークタワーは放つとけば何時か倒れるだろ、さて次はファブリーズの出番だ!

そう思ってファブリーズ（携帯用）を取り出そうとしたら、ヤマトさんのデジヴァイスが突然光り出した。

「ガブモン進化!!」

……ガルルモン!!」

するとガブモンはガルルモンに進化して、ベジモン達の前に移動した。

「フォックスファイアー!!」

そしてガルルモンは必殺技の“フォックスファイアー”をベジモン達に放ち、“フォックスファイアー”を喰らったベジモン達は吹っ飛ばされた。

「皆ー!!」

すると京さん・ホークモン・太一さん・アグモン・光子郎さんが走ってコッチに来た。

「な、何でガルルモンに進化してるの？」

「さあ、俺も何で進化したのか分からない。」

アグモンが不思議そうにガルルモンに聞いたが、ガルルモン自身も今一分かってなかった。

……ガルルモンが進化したのは、ダークタワーに罅が入ったからだよな？

……って事は、

「Sフレアモン、Mクレシェモン、フレイドラモン、ダークタワーは粉々に破壊してくれ!!」

「「「分かった!」」」

俺はある仮説を考えて三体に指示を出すと、三体は俺の指示に従ってダークタワーを粉々に破壊した。

すると先程迄敵意向き出しだったレッドベジモン達が、急に温和しくなった。

「あれ？」

俺達、こんな所で何をしてるんだ？」

……成る程、ダークタワーはデジモンカイザーの力をキャッチし、そして広める電波塔みたいな物なのか。」

「航、口に出てるぞ。」

後、京も同じ事を言ってるぞ。」

すると大輔が俺に少し呆れながらそう言って、京さんに手を向けながらそう言った。

声に出てた？

……じゃあ今迄、心の中で思ってた事は口に出てたのか？

……そんな訳無いか、もしそうだとしたら大輔が教えてくれる筈だからな。

そんな事を考えていたら、太一さんとヤマトさんが大切な事を言っていた。

……また聞き損ねた！！———orz

……申し訳ないけど、後で太一さんに聞いとう。

そう思っていたら、太一さんと一部の人達がゴツモン達の居たエリアに向かった。

ダークタワーの破壊活動か……良いねエ良いねエ最ツ高だねエ！

「……今日は疲れた。」

大輔はそう言ってゲートに向かって歩き出した。

俺も疲れた、今日は速く帰って早めに眠るとしよう。

そして俺達は、無事に現実世界に帰った。

現実世界に帰って早々、光子郎さんにデジモンカイザーが侵略したエリアを見せられて、先は未だ未だ長いと教えられた。

第百二話だよ！（後書き）

次回は『ダークタワーを倒せ Part 1』です。

次回もお楽しみに！！

第百三話だよ！（前書き）

城戸丈役の人は、『キャプテン翼』では葵新伍役を、『HUNTER×HUNTER』ではウイング役を、『コロツケ!』ではネギマ役を、『金色のガッシュベル!!』ではキャンチョメ役を、『ハヤテのごとく!!』ではヒナギクの父役を演じた。

デジモン関係では、無印では城戸シン・泉政実・地岡・ガジモン・ゲコモン・ハンギョモン・ジュレイモン役を、02では城戸シュウ・モジャモン・シェルモン・ビッグマメモン・ギロモン・デーモン役を、テイマーズではドルフィン・グラニ役を、フロンティアではネーモン・ナレーションを、セイバーズでは倉田明夫・ベルフェモン・レイジモード役を、クロスウォーズシリーズではダメモン・モニモン長老・アカリの父・ツワーモン役を演じた。

全デジモンシリーズに出演している、ホントにデジモンの声優を代表する人。

今年最後の更新、まあ最後にも関わらずしっくりしないけどね……

まあ、決定した続編のテイマーズで、究極体に進化して戦える様にした話なんですがね。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第百三話だよ！

『ダークタワーを倒せ Part 1』

Side 航

俺とタケルは今、パソコンルームに向かってランニング程度の速さで廊下を走っている。

まあ走っている理由は特に無いが、強いて言うとなれば掃除をさせられてたので何時もより行くのが遅れているんだ。

大輔とヒカリちゃんは、未だ先生と話をしていたので先にパソコンルームに行っている訳だ。

そしてタケルがパソコンルームに向かう階段を上って俺もタケルの後を追いつける為に階段を上ろうとしたら、下校する為に階段を下りている俺の知っている人物が居た。

「あつ、伊織君！」

「……あつ、航さん、どうしたんですか？」

俺達と同じ選ばれし子供の一人・伊織君が階段を下りて行っていたので、俺は思わず伊織君に声を掛けると伊織君は立ち止まって俺の顔を不思議そうに見てきた。

可笑しいな、何時もなら俺達と一緒にパソコンルームに行くのに

……

「今日は何か用事が在るのか？」

「はい、今日は剣道が在りますので帰ろうと思ってます。」

俺は頭に？マークを浮かべながら伊織君に聞くと、伊織君は申し訳なさそうな顔をしながら俺にそう言って来た。

伊織君のお祖父さんが剣道の先生をしていて、俺も護身術の為に時々剣道を教えて貰ってるんだ。

そうか、今日は剣道だから来れないのか……

「分かった、今日は俺達だけでデジタルワールドに行くよ。」

「すいません。」

……そうだ、お祖父様が航さんと久々に勝負がしたいと言ってたよ。」

俺が心配すると言った顔をしながら伊織君にそう言っていると、伊織君はもう一度頭を下げて謝って俺にそう言って来た。

えー、俺の剣道は見様見真似で覚えた時雨蒼燕流擬きの型なんだよ。

某最強の赤ん坊が家庭教師のアニメに出てくるボンゴレ10代目の雨の守護者の様に彼処迄凄い感じに出来る訳じゃないが結構良い感じの型で、自分で言うのも何だが俺ってかなり強い部類に位置してるらしいんだよ。

と言っても、原作の時雨蒼燕流みたいに水を使う型は出来ない、出来るのは水を使わないで使う型擬きだけだな……

それに、俺の時雨蒼燕流擬きは対人間用だからデジモンと戦っても勝てない……成長期の弱いデジモンなら勝てると思う、例えばピ

コデビモンの様なデジモンとか。

まあ色々と長々しく話したが、簡単に言うとな俺は護身術の為に時雨蒼燕流擬きの一部が使えて、強さを表すと同年の奴≦一般の人≡俺≡弱い成長期デジモン≡成熟期以降のデジモンってなってる（ってコロナモンとルナモンが言ってた）。

話が変わるが、剣道では時雨蒼燕流擬きはやはり珍しい太刀と言う事で、伊織君のお祖父さんと剣道の練習に行く度に試合を申し込まれるんだよ。

精神はもう既に大人だけど、肉体は未だ小学生だから竹刀を綺麗に振れないし、時雨蒼燕流擬きを使うと何時もの三倍は疲れるから毎回理由を作って断ってるんだけどな。

こうやって考えると、未だ未だ護身術として使える訳じゃないから頑張らないといけねェな……

「あー、気が向いたらやるって言っておいてよ。」

「分かりました。」

お祖父様にそう伝えておきます。

それでは、失礼します。」

俺は苦笑いして頭を掻きながら伊織君にそう言うと、伊織君はまた頭を下げてそう言って階段を下りて行った。

「あれ、何で未だ此処に居るんだ？」

「どうしたの？」

すると、教室で先生と話をしていた大輔とヒカリが、何時の間にか追い付いて来て俺に話し掛けてきた。

「あー、伊織君は剣道が在るから今日は来れないってさ。」

「はあああ!？」

こんな大変な時に剣道!？」

「そうなんだ。」

俺は頭を掻きながら二人に伊織君の事を言うと、大輔は大声を出して驚いてヒカリちゃんは特に驚く事無くそう言った。

大輔の言う通り、今は確かに大変で“猫の手も借りたい”って言う諺が俺達に当てはまる。

だけど家の事情で来れないのなら仕方が無い、俺達第三者が横から言えないし家族との交流もデジタルワールドを守るのと同じ位大切なんだから。

「確かに大変だけどさ、俺達が横から言う事じゃないだろ？」

大輔だって、家の用事で来れなくなって俺達にそんな事を思われたら嫌だろ？」

「確かにそうだけどよ……」

俺が大輔にそう言うと、大輔は頭が冷えたのかさつきより声を低くしてそう言った。

まっ、大輔は正義感と責任感が俺達より何倍も在るからこう言った事が起こると頭に血が上ってしまうが、根はスツゲェ良い奴なんだよな。

……大輔ってこんなキャラだったか？

「まあ俺達全員行かないって言ってる訳じゃないし、今日は伊織君抜きでデジタルワールドに行こうぜ？」

「ヒカリちゃんもデジタルワールドに行くよね？」

「う、うん、勿論だよ。」

俺が大輔にそう言った瞬間、大輔はヒカリちゃんに顔を向けてヒカリちゃんに聞き、ヒカリちゃんは苦笑いしながら大輔に応えた。

……大輔、テツメエ……

「ゴットハンド！」

パシンッ！！

「イテッ！？」

俺は大輔に某超次元サッカーアニメの主人公の必殺技の名前を言
って大輔の頭に張り手をする、大輔は短く大きな声でそう言って
頭を押さえてしゃがみ込んだ。

人が折角慰めも含めてお前に良い話をしてたのに、お前は俺より
ヒカリちゃんを選びやがって……

「ヒカリちゃん、其処の馬鹿は放っておいて俺達だけでパソコンル
ームに行こうぜ。」

「あっ、うん。」

俺はヒカリちゃんにそう言って馬鹿（大輔）を放ってパソコンル
ームに向かう為に階段を上って行くと、後ろから「誰が馬鹿だァ！

？」って言う馬鹿の声が聞こえてきたので俺とヒカリちゃんは笑いながらパソコンルームに向かって走り出した。

.....

.....

.....

.....

「遅れてゴメン……って、どうしたんだ？」

俺は少しフザケた感じで謝りながらパソコンルームに入ると、何故か皆真剣な顔をしながらパソコンを覗いていた。
どうしたんだ？

「何か遭ったのか？」

俺達は皆の近くに移動して、パソコンの画面を覗ながら俺はタケルに聞いた。

「あ、ああ、デジタルワールドからSOS信号が来たんだ。」

タケルは俺に話し掛けられて少し驚いていたが、直ぐに真剣な顔をして俺に今の状況を教えてくれた。

SOS信号が来てるのはデジモンカイザーが侵略しているエリアだった。

……俺達の仲間デジモンだって事は分かるが、一体誰なんだ？
アグモンとガブモンはグレイモンとガルルモンに進化してるし、

ピヨモンとテントモンは一緒に行動してる、コロナモン達は此処に居るから…… SOS 信号を送って来たのはゴマモンかパールモンだろう。

「SOS 信号が来てるエリアは今迄私達が行ってたエリアからかなり離れてるわ。」

「厨二病の野郎、侵略範囲を広げやがって……」

京さんが少し驚いた顔をしながらそう呟いたので、俺は握り拳を作りながら厨二病に怒りの籠もった口調でそう言った。

俺は厨二病に切れながら不意にヒカリちゃんを見ると、ヒカリちゃんは悲しそうな顔をしながらパソコンの画面を覗いていた、

……ヒカリちゃん……

「よしっ、皆居る事だし、急いで助けに行こう！」

「大輔の言う通り、急いで助けに行こうぜ！」

「皆って、伊織が居ないだぎゃ！」

大輔と俺はD-3とデジヴァイスアルティメットバージョンを取り出してそう言うのと、ウパモンが焦りながら俺と大輔に言って来た。

「伊織君は今日は剣道が在るから来ないよ。」

「剣道？」

「……剣道って何だぎゃ？」

「面！」

胴！
籠手！」

俺がウパモンに伊織君が来ない理由を言うと、ウパモンが剣道に付いて聞いてきたので俺が答えようとしたら、冊子を丸めた大輔がウパモンを叩きながら剣道の技を使った。

大輔、技は間違っではないが同じ所しか叩いてないぞ？

「痛い、痛いだぎゃ！
何するだぎゃ！？」

「これが剣道なんだよ。」

「違うだろ！
良いかウパモン、剣道って言うのは時雨蒼燕流をつk「航君、それも違うよ」えゝ……」

ウパモンが痛がりながら大輔に文句を言うと、大輔はそれが剣道だと言ったので俺は透かさずツツコんで、ウパモンに時雨蒼燕流の構えをしながら説明しようとしたら、ヒカリちゃんが苦笑いしながらツツコんできた。

ヒカリちゃん、大輔の説明よりは全然良いだろ？

俺がそう思っていると、誰かが走ってパソコンルームに向かって来ていた。

ウパモンは伊織君が来たと騒いでいたが、タケルは伊織君ではないと言ってデジモン達を彼方此方に隠した。

えっ？

何で俺は何もしないのかって？

だって、SOS信号が仲間から来てるのに助けに来ないティマーは居ないでしょ？

走る音から推測するに、今走って此処に来ているのはゴマモンの
テイマーの丈さん、パルモンのテイマーのミミさんのどっちかだと
思うんだ。

俺がそう思いながら扉を見てみると扉は勢い良く開かれて、其処
にはコンビニ袋を持っているゴマモンのテイマーの丈さんが立っ
ていた。

「丈さん、ついこの間ぶりですね。」

「やあ航君、皆。」

ヤマトや光子郎から聞いてはいたが、此処にデジモンが居るのは変
な感じだな……」

俺は丈さんに挨拶をすると、丈さんは俺達に挨拶をしてデジモン
達を見てそう言った。

丈さんが来たって事は、SOS信号を送って来たのはゴマモンか
……？

「大輔君、京さん、僕達と同じ選ばれし子供の城戸丈さんだよ。」

「宜しくお願いしまーす！」

「ウォー！」

偏差値が高そうって感じ！」

タケルが丈さんを知らない大輔と京さんに丈さんの事を説明する
と、大輔は笑顔で挨拶をし京さんは丈さんの第一印象を素直に言っ
た。

大輔は良いが京さん、ちゃんと挨拶をしましょうよ……

俺はそう思いながらポーチの中からカードを全部出して、今日使

いそうなカードを何枚か取り出してデジモンを確認した。

……よし、取り敢えずカードに関しては何処も不備が無いから大丈夫だな。

「お菓子お菓子！」

「こ、これは向こうで食べるんだよ！」

「じよ、丈さんも行ってくれるんですか!？」

チビモンが丈さんの持っているコンビニの袋から歌いながらお菓子を食べようとしたが、丈さんはコンビニの袋をチビモンに盗られない高さに持ち上げてそう言ったので、ヒカリちゃんは少し驚いて嬉しそうな顔をしながら丈さんに聞いた。

「あ、うん。」

ゴマモンからSOS信号が来たからね。」

丈さんが真剣な顔をしながらそう言ったので、俺とタケル以外の三人は喜んだ顔をした。

俺はタケルに目で合図してD-3を出す様に促すと、タケルは無言で頷いてD-3を取り出して丈さんに見せる様に出した。

「新しいデジヴァイスは、ゲートを開く機能が在るんです。」

「それもヤマトや光子郎から聞いてるよ。」

タケルがD-3の説明をしたが、丈さんはヤマトさんと光子郎さんから聞いていたらしく既に知っていた。

「それじゃ、ゲートを開くわよ！」

「スミマセン！！」

京さんがゲートを開こうとした時、扉が物凄い勢い良く開かれて伊織君が入って来た。

伊織君……剣道を途中で抜けてきたんだね？

大切な剣道の練習を途中で止めて来てくれるなんて……好意に値するよ。

「某決戦兵器の五番目のパイロットであり最後の敵でもあるダブリスか！？」

「長いわ！！」

大輔がまたしても俺の心の読んでツツコむ為に俺にチョップしようしてきたが、俺は余りのツツコミの長さに逆にツツコんで大輔のチョップを両手で真剣白刃取りをして受け止めた。

……へっ、俺だってちゃんと進化……じゃなくて、成長してるんだ！

「伊織、来るのが遅いだぎゃ！」

「ご、ごめんね。」

「漫才してる二人は放っておいて、伊織も来た事だし……選ばれし子供達、出動オ！！」

伊織君とウパモンがそんな会話をして、京さんがゲートを開けて俺と大輔を置いて皆先にデジタルワールドに行った。

俺と大輔は無言で目を合わせて、デジヴァイスアルティメットバージョンとD-3を取り出した。
そして、

「俺達を置いて行くってどう言う神経をしんだよ!!?」

皆に大声を出してツッコんで、皆を追い掛けてデジタルワールドに向かった。

第百三話だよ！（後書き）

今回は『ダークタワーを倒せ Part 2』です。

一年間、『デジモンアドベンチャー 転生したらこうなった』を応援してくれて有り難う御座いました！！

未だ02も始まったばかりで完結は先ですが、来年も頑張ってくださいますので応援よろしくお願いします！！

それでは、良い年末年始を！！

次回もお楽しみに！！

第百四話だよ！（前書き）

ゴマモン役の人は、『こちら葛飾区亀有公園前派出所』では電極プラス役を、『HUNTER×HUNTER』ではゴンⅡフリークス役を、『遊☆戯☆王デュエルモンスターズ』では海馬モクバ役を、『NARUTO』ではうずまきナルト役を、『家庭教師ヒットマン REBORN!』ではランボ役を、『Yes!プリキュア5』では夏木りん役を、『イナズマイレブン』では円堂守役を、『ONE PIECE』ではサボ役を演じた。

デジモン関係では、無印ではピヨコモン・ゲコモン・デラモン・ガルーベモン役を、フロンティアでは神原拓也役を演じた。

今年の抱負

『バイトを見つける事と小説を完結させる事、後は欠点を取らない様にする』

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第百四話だよ！

『ダークタワーを倒せ Part 2』

side 航

俺と大輔は直ぐにデジタルワールドにやって来て、皆に文句を言おうとした。

だけど、

「「さ、寒い……」」

やって来たエリアが雪も積もる位の寒さだったので、俺達は少しでも暖まろうとして体を丸めて両手を使って体を擦った。

ふ、冬や冷たい物が好きな俺でも、この寒さは異常なんだけど……ゴマモンが居るエリアだから寒いエリアだとは予想してたけど、此処迄寒いとは予想を遙かに凌駕してたよ。

うゝ、季節は春だから手袋やカイロなんか持って来て無いし……

「はい、準備して持って来ておいたカイロ。

これで少しは寒さも和らぐよ。」

すると丈さんがコンビニの袋から事前に買っていたカイロを、頬

笑みながら俺に渡してくれた。

じよ、丈さん、貴方はマジ神だよ!!

寒さ対策の用意出来てるとかマジ神だよ!!

俺は感動しながら丈さんに頭を下げて、カイロを受け取って寒くなつた体を暖めた

あ、暖かい……

「さ、寒い……あっ!？」

すると京さんが、余りの寒さにカイロを落としてしまった。

俺は直ぐに京さんに近付いてカイロを拾って京さんに渡そうとしたら、カイロの熱でカイロが落ちた部分の雪が溶けて誰かの目が出て来た。

この目……ま、まさか!？

「ぐ、ゴモモン!!」

俺はそう言っただけで雪を手で払っていくと、俺の声を聞いた皆がやって来て協力して雪を払っていった。

そして暫く雪を払っていると、体中傷だらけのゴモモンが雪の中から現れた。

ヒデエ傷だ……これも厨二病の仕業か。

ゼツテエ許さねエ、否、許しちゃいけねエんだ。

俺はそんな事を思いながら不意に視線を明後日の方角に向けると、明後日の方角に黒いタワーが建っていた。

チッ、やっぱり此処にもダークタワーが建っていたか……って、黒いエリアになってたから建ってるに決まってるか。

しかし、此処からだとかダークタワー迄かなり距離が在るよな……

「丈先輩、スキー板かスノーボードを持って来ます?」

「さ、流石に僕も其処迄持つて来てないよ。」

「航君ってスノボー出来るんだ……」

俺は純粋な気持ちで丈さんに聞くと、丈さんは苦笑いしながら俺にそう答えてくれた。

そして俺と丈さんの話を聞いていた京さんが、不思議そうな顔をしながら俺を見てそう言っただ。

俺の祖母ちゃんが居る所は北海道だから、父さんが俺の夏休みや冬休みの時などに休みを取れたら遊びに行ってるんだ。

そして北海道と言う事で、冬休みに遊びに行ったら雪が積もっているのでスノボーをして遊んでるんだ。

スキー板でも滑る事は出来るんだが、風を感じるならやっぱスノボーで滑る方が良いんだよ。

「……って大輔、さっきから黙り込んでどうしたんだ？」

俺は先程から黙り込んでいる大輔に、俺は考え事を頭の片隅にしまい込んで話し掛けた。

大輔はずっと目の前に生えている木を見ていて、何かを頭の中でイメージしている顔だった。

木……ん、木を使えばこの雪原を越える事も可能なんじゃ……？

「丈さん、ロープって持って来てます？」

すると大輔は何時の間にか目が覚めていたゴマモンと会話をしていた丈さんに聞いた。

否、確かに良い案かもしれないけど、流石にロープを持って来ている訳無いだろ……

「ロープかい？」

……持って来てるけど……」

「何でエエエエエエエエエエ！！？」

丈さんがコンビニの袋からロープを出したので、俺は大声を出して丈さんにツツコんだ。

だ、だって幾ら何でも可笑しいでしょ！？

幾ら準備をしていたとしても、ロープを持ってくる（買ってくる）って丈さんは超能力者なんですか！？

俺が心の中で丈さんにツツコんでいると、コロナモンとルナモン以外のデジモン達は木を倒し始めた。

……何で皆ツツコまないの、何で皆疑問に思わないの？
そして、ツツコミ役の大輔は何故ツツコまないんだ！？

「航、航の思っている事は普通に思うから大丈夫だ！」

「航君は常識人だから苦労する事も在るけど、私達は航君の味方だから安心してね！」

するとコロナモンとルナモンが俺に近付いて来て、コロナモンは真剣な顔で・ルナモンは笑顔で俺にそう言ってきた。

コロナモン、ルナモン、お前等……

「航、時間が無いから速く手伝って！」

「……………はい。」

タケルが少し怖い顔をしながら俺に言って来たので、俺はタケル

の怖さに負けて素直に手伝いに行った。

丈さんがロープを持って来ていた事は深く考えちゃダメなんだろう、だから俺も深く考えないでいよう。

俺は心の中でそう誓いながら、デジモン達が倒した木をロープで括り付けた。

.....

.....

.....

.....

俺達は先程出来た木のソリに乗って、デジモン達に引っ張って貰って雪原を移動中だ。

ソリを作ったのはやはり正解で、デジモン達に引っ張って貰っているのも在るが、やはり移動するのは歩くより速い。

そして暫くソリで移動していると、前に雪だるまが幾つも見えてきた。

雪だるまかー、昔ヒカリちゃんと近くの公園で作ったっけなー。
懐かしいなー……って、あれは雪だるまじゃなくて!!

「あれはユキダルモン、デジモンだ!!」

俺がそう言うと、ユキダルモン達が必殺技の“絶対零度パンチ”を俺達に放って来た。

デジモン達が上手く避けてくれているが、“絶対零度パンチ”が俺達の真横を通るので……寒いッス……

「よし、このまま塔の方へ突っ切って逃げよう！」

「に、逃げる！？」

丈さんが一番的確な行動を俺達に言うと、大輔が異常な反応をして丈さんを見た。

確かに大輔は逃げる事が考えられないのかもしれない、だけど俺達の本来の目的はダークタワーの破壊、無用な戦いは出来るだけ避けるのが一番だ。

「大輔君、僕達の目的は飽く迄ダークタワーの破壊だ。

それに、ダークタワーを破壊すればユキダルモン達の洗脳は解ける
！」

「そ、そうか！」

タケルが俺の言いたい事を代わりに大輔に言ってくれと、大輔は理解してくれた。

そして俺達の話聞いていたデジモン達は、ユキダルモンとユキダルモンの間を抜けてスピードを上げて走り出した。

俺は不意に後ろを見ると、ユキダルモン達は“絶対零度パンチ”で前の方に在る丘を攻撃し始めた。

何故突然、丘を攻撃し始めたんだ？

丘に在る物と言えば、雪しか……雪？

……ま、まさか！？

「彼奴等、雪崩を起こす気だ！？」

「「「えええええ！？」」」

俺がそう言うのと皆が大声を出して驚いて、それと同時に雪崩が俺達に迫って来た。

や、ヤバいって!!

「き、緊急回避イイイ!!!!」

大輔がデジモン達にそう言うのと、デジモン達は走る方向を90度横に変更した。

そのお陰で雪崩を避ける事が出来て一安心……と思ったら、今度は道が無くなって崖が迫って来た。

「何なんですかこの不幸はアアアア!!!!?」

「と、飛べエエエエ!!!!」

俺は不幸続きだったので某幻想殺しさんの言葉を言うと、大輔が大声でデジモン達にそう指示を出した。

し、死ぬウウウ!!!!

俺がそう思った瞬間、俺達は崖を飛んでいて科学の常識を破って向こうの崖に辿り着けた。

ふう……やっと不幸から抜け出せたよ……

「み、湖だアアア!!!!?」

「ま、曲がれエエエエ!!!!」

俺がホッと一息を吐いた瞬間、タケルが前を指さしながらそう言うって大輔がデジモン達にそう言った。

デジモン達は急ブレーキをして方向転換しようとしたので、俺達の体は慣性の法則でソリから落ちそうになった。

「うわっ!？」

「伊織君!!」

俺達は何とか踏み留まる事が出来たが、伊織君は踏み留まる事が出来ずに湖に落ちた。

なので俺は、直ぐに湖に入って伊織君を助けに向かった。

.....

.....

.....

.....

何とか伊織君を助けた俺だったが、湖の異常な冷たさに結局途中で溺れ掛けた。

だが俺達を助けに来てくれたゴマモンが、必殺技の“マーチングフィッシューズ”を使って助けてくれた。

なので結局、助けに行った俺も助けられると言う不甲斐ない結果になり、今は近くに在った穴の中で薪を燃やして必死に暖まろうとしている。

さ、寒い……

「航君、伊織君、風邪薬だ。」

「「あ、有り難う御座います……」」

丈さんがコンビニの袋から風邪薬を渡されたので、俺と伊織君は丈さんにお礼を言って風邪薬を受け取って直ぐに飲んだ。

や、ヤバい、体が寒さで固まって、と、とてもじゃないが今は動けねエぞ……

「へ、ヘックシュー!!」

「大丈夫……な訳ないか。」

俺は寒さの余り大きな噓をしてしまい、ヒカリちゃんが俺の体を擦りながら言ってきた。

た、確かにみ、皆と行くのはむ、無理だな……

「……航、伊織、俺達は塔を破壊しに行くから、二人は無茶をせず
に此処で待ってろ。」

「いえ、僕も行きます!」

大輔が俺と伊織君の体の事を考えてそう言って来たが、伊織君は立ち上がって大輔にそう言った。

「い、伊織君、き、君の気持ちは分かるけど、い、今無理をしたって……」

「でも此処で帰ったら、剣道を途中で抜け出してきたのにお祖父様に会わす顔が在りません!」

俺は震える声で伊織君にそう言うが、伊織君は俺の顔を真剣な顔をして見てきた。

……似てる、他人に頼らずに自分で解決しようとする昔の俺みた

いだ……

「……伊織君、君と大切な話がしたいから此処に残って欲しい。」

「で、でも……！」

「僕も大切な話が在るんだ。」

……残ってくれるかい？」

「は、はい……」

俺と丈さんが真剣な顔をして伊織君に言うと、伊織君は俺と丈さんの気迫に負けて頷いてくれた。

「兎に角、俺達で何とかしてくるよ。」

「航君、伊織君、温和しくして待っててね。」

「丈さん、二人の事を頼みます。」

大輔・ヒカリちゃん・タケルの順番でそう言って、ダークタワーに向かって洞窟の外に出て行った。

「……じゃあ伊織君、先ずは俺の話を聞いてくれ。」

「……はい。」

俺が伊織君に言うのと伊織君は少し間を開けて応えてくれた。

コロナモン達や丈さんは、俺の話を聞く為に無言で俺の顔を見ていた。

「俺は昔、独りで何でも出来るって思ってたんだ。」

「……えっ？」

「俺は丈さん達より速く選ばれし子供になって、デジモンの事もあの程度の知識が在ったから、殆ど太一さん達と協力せずに戦ってたんだ。」

そして、『俺が皆を守らないといけない』って勝手に思い込んで、死ぬ様な怪我也負ったし皆にも沢山の心配や迷惑も掛けた。」

俺は伊織君に言い終えると、服を脱いで一生消える事の無い傷跡を皆に見える様に見せた。

「……その傷跡は消えないのかい？」

「はい、一生消える事は無い傷跡です。」

……例え治せば消える傷跡だったとしても、俺は傷跡は消しません。」

丈さんが俺の傷跡を見ながら聞いてきたので、俺は真剣な顔をして本心を言いながら服を着た。

「……では何故、そんな無茶をした航さんは僕を止めたんですか？」

「……昔の自分を見て腹が立ったから、そして昔の俺の二の舞えに成って欲しく無かったから。」

……要するに自己満足だよ、まあ丈さんは違うと思うけどね。」

伊織君が不思議そうな顔をしながら聞いてきたので、俺は最初は

自嘲気味な顔で言って頬笑みながら丈さんの顔を見ながら言った。

「相変わらず鋭いな。」

伊織君、僕は今日塾の実力テストが在ったけど、サボって来ちゃった。」

「ええっ!？」

すると丈さんが頭を掻きながら伊織君にそう言ったで、伊織君は驚いた顔をしながら大声を出した。

……ヘエ、丈さんは昔以上に生真面目に成ったのに、塾の実力テストをサボって来るなんて……中々の悪だな。

「僕達は選ばれし子供って言われてるけど、ずっと自分で選んで来た事なんだよね。

今迄だって、自分で選んだ事に従って行動してきたんだけど、伊織君は少し焦ってるんだよ。

少しは周りに頼っても良いと思うよ。」

「俺達は中途半端な人間なんだ、完璧な人間なんてこの世に居ない。

……だけどさ、独りだけなら中途半端だけど皆となら完璧になれる。

苦手な事は仲間の力を借りて補う、苦手な事も自分独りでやろうとすれば後悔する。

だからさ、完璧に成る為に助け合おうぜ?」

丈さんと俺が頬笑みながら伊織君に言うと、アルマジモンがゆっくり伊織君に近付いた。

「伊織、俺も居るだぎゃ。

相談位はして欲しいだぎゃ!」

「アルマジモン……」

ドオオオオオオオン！！！！！！

伊織君とアルマジモンが良い感じの空気だったのに、突然外から轟音が聞こえて来て洞窟が揺れ始めた。

「な、何だ！？」

丈さんは突然の事で一瞬パニックに成ったが、直ぐに冷静に成って俺達は洞窟の外に出た。

すると外には、厨二病に操られたシエルモンと今回もイタイ格好をしている厨二病が居た。

「僕から逃げられると思わないで欲しいな。」

「誰も逃げてないわ！

勘違いしてんじゃないやねエよ、厨二病！！」

厨二病が的外れも良い所の勘違いを言ったので、俺は思わず厨二病に大声でツッコんだ。

……大輔のツッコみスキルが伝染したのか？

しかし、この状況は完全にバトルする空気だよな……

未だダークタワーは破壊されていないから、ゴマモンは戦えないな……よし！

「伊織君、完璧に成る為に一緒に戦ってくれるかい？」

「も、勿論です！」

俺は隣に居る伊織君に聞くと、伊織君は真剣な顔をして了承してくれたので俺は頬笑んだ。

そして俺はデジヴァイスアルティメットバージョンを、伊織君はD-3を構えた。

そして、

「「デジメンタルアップ！！！」」

俺と伊織君がそう言うと、俺のデジヴァイスアルティメットバージョンと伊織君のD-3・Dターミナル・コロナモン、ルナモン、アルマジモンが光り出した。

「コロナモン、アーマー進化ー！！！」

……灼熱の信頼、Sフレアモン！！！」

「ルナモン、アーマー進化ー！！！」

……月光の運命、Mクレシェモン！！！」

「アルマジモン、アーマー進化ー！！！」

……鋼の叡智、デイグモン！！！」

コロナモンはSフレアモンに・ルナモンはMクレシェモンに・アルマジモンはデイグモンにアーマー進化した。

伊織君にはああ言ったが、体が完全に冷えから解消された訳じゃないから俺達に長期戦で戦う事は不可能だ。

……だったら、

「一気に叩き潰すだけだ!!」

俺はそう言ってカードを一枚取り出して、コロナモンの方のデジヴァイスアルティメットバージョンにスキャンさせた。

「カードスラッシュ!!」

バードラモン、メテオウイング!!」

「メテオウイング!!」

俺がカードをスキャンさせると、Sフレアモンは空に飛び上がり炎の翼からバードラモンの必殺技の“メテオウイング”をシエルモンに放った。

シエルモンはSフレアモンの放った“メテオウイング”を避ける事が出来ず、“メテオウイング”を全て喰らって怯んだ。

「伊織君、今だ!」

「はい!

デイグモン!!」

「ゴールドラッシュ!!」

俺が伊織君に呼び掛けると、伊織君は直ぐにデイグモンに指示を出した。

そしてデイグモンは必殺技の“ゴールドラッシュ”をシエルモンに放った。

するとダークリングが碎けて、シエルモンは洗脳が解けた。

「ば、バカな!?

イービルリングを!?!」

厨二病は意図も簡単にリングを破壊された事に驚いた声を出した。
あのリング、イービルリングって言うのかよ……ってか、リングは耐久力が無いから別に簡単に破壊されたって仕方がないと思うがな。

バツシャアアアアン!!!!!!!!!!

俺がそう思っていたら突然湖の中からエビドラモンが現れて、デ
イグモンを湖の中に引きずり込んだ。
な!?!?

「でい、デイグモン!!」

ドッガアアアアアン!!!!!!!!!!

伊織君がデイグモンの名前を言った瞬間、遠くに在るダークタワー
が破壊された。

大輔達、上手く破壊出来たみたいだな!

「よし、これで進化が出来る!」

丈さんは破壊されたダークタワーを見てそう言って、デジヴァイ
スを取り出した。
そして、

「ゴマモン、進化だ!!」

丈さんはそう言うのと、デジヴァイスとゴマモンが光り出した。

「ゴマモン進化ー!!」

……イツカクモン!!」

ゴマモンはイツカクモンに進化して、湖の中に入って行った。

「Mクレシェモン、イツカクモンを援護してくれ!」

「分かったよ!」

俺はMクレシェモンにそう言うのと、Mクレシェモンは了承してくれて湖の中に入って行った。

俺達は湖に近付いて落ちない様に中の状況を見ると、ディグモンを拘束していたエビドラモンはイツカクモンとMクレシェモンの攻撃を喰らいディグモンの拘束を解いた。

そしてディグモンが水面に上がって来たのと同時に、イツカクモンは必殺技の“ハーブーンバルカン”を・Mクレシェモンは得意技の“アロー・オブ・アルテミス”をエビドラモンに放った。

二体の攻撃を喰らったエビドラモンは、イービルリングが破壊されて何処かへ行った。

「あつ、デジモンカイザーが居ません!!」

「彼奴、逃げ足だけは速いな……」

伊織君の言葉を聞いて俺は辺りを見渡したが、何処にも姿が無か

ったので呆れてそう言った。

.....

.....

.....

.....

あの後大輔と合流して、伊織君が律儀に丈さんに自己紹介したり、
イツカクモンがあのだりのエリアを守る事になったり、ルナモンが
湖で冷えた体を暖める為にコロナモンに抱き付いてコロナモンが切
れたり、色々在って俺達は現実世界に帰って来た。

そして俺は一度家に帰って、未だ少し冷えた体を暖める為に河川
敷に来て走っている。

20分を一定のペースで走っていたので、体の冷えも無くなった
ので俺は近くに在った椅子に座った。

そしてカードケースに入れていた数枚のカードを取り出して、今
日の事を思い出した。

「……今日はバードラモンのカードしか使わなかったが、何れは他
のカードも使わないとダメだよな……」

俺は持っていたカードを見ながら、これからの事を予測しながら
そう言った。

俺の手には、グレイモン・ガルルモン・バードラモン・カブテリ
モン・トゲモン・エンジェモン・テイルモンのカード、そして……

「このカードを使って吉と出るか凶と出るか……」

エクスブイモン・ステイングモン・アクイラモン・アンキロモン・
ガルゴモン・ウェンディモンのカードを持っていた。

第百四話だよ！（後書き）

次回は『危険なピクニック Part 1』です！

次回もお楽しみに！！

第百五話だよ！（前書き）

無印の高石タケルと02の高石タケル役の人は、これと言って代表作は無い。

代表作がデジモンの高石タケル役。

今回はタケルのキャラが崩壊、そして最後は何故かコロナモンとバトル……どうしてこうなった？ or z

航が使う時雨蒼燕流に付いてはまた何れ書きます。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

第百五話だよ！

『危険なピクニック Part 1』

Side 航

俺は今、母さんとキッチンに立って一緒に弁当を作っている。

何故弁当を作っているのかと言うと、今日は学校が休みなのでダークタワーの建っていないエリアでピクニックをするんだ。

厨二病の阿呆な野望を速く打ち砕いた方が良いだろうが、偶には息抜きも必要だろうと言う事でピクニックに行くんだ。

荷物はもう纏めてあるから、後は俺・コロナモン・ルナモンの弁当を作ったら完了だ。

ルナモンは部屋の掃除をしていて、コロナモンは父さんとまた将棋をしている……父さんは大分敗色濃厚だけどな。

「よし、完成だ！」

「ふふっ、息子と弁当を作るのって楽しいわね。」

俺はそう言って三つの弁当をリュックに入れると、母さんが頬笑みながら俺の顔を見てそう言って来た。

きゅ、急に言われたら、何か照れるな……

ピンポーン

俺が頭を掻きながら照れていると、インターホンが鳴った。

すると掃除を終えたルナモンと父さんに圧勝したコロナモンが、俺に近付いてきてデジヴァイスアルティメットバージョンに入った。

俺は弁当などが入った鞆と袋に入った竹刀を背負って、玄関に行つて靴を履いた。

「それじゃ、行って来まーす！」

「行ってらっしゃい。」

俺は父さんと母さんに言うと、母さんが笑顔で俺にそう言ってくれた。

父さん？

父さんなら将棋盤の前で——orz状態に成ってたよ……何時か勝てるよ、父さん。

そう思いながら扉を開けると、笑顔で立っているヒカリちゃんが居た。

「お早う、ヒカリちゃん。」

「お早う、航君。」

俺とヒカリちゃんは朝の挨拶をして、俺は辺りを見渡した。

あれ、テイルモンが居ない……

「ヒカリちゃん、テイルモンは？」

「えっ、鞆の中だよ。」

俺が聞くとヒカリちゃんは笑顔で背負っている鞆を指さして答えてくれたが、鞆の中に入っているテイルモンは何かを訴えているのか鞆の中で動いていた。

……大体分かった。

「ヒカリちゃん、テイルモンが苦しんでる。」

「えっ？

……て、テイルモン、だ、大丈夫!？」

俺がヒカリちゃんにそう言うと、ヒカリちゃんは鞆を下ろして鞆を空けた。

すると鞆の中からグツタリとしたテイルモンが出てきたので、ヒカリちゃんはテイルモンを抱っこして聞いた。

大丈夫じゃないだろ、小さい鞆の中に入れられていたら……

結局、テイルモンはヒカリちゃんが抱っこして学校に行く事になった。

堂々と歩いていたら、案外バレないもんなんだって分かった。

……

……

……

……

テイルモンを救出して学校に向かって歩いてみると、門の前には既に俺とヒカリちゃん・京さん以外のメンバーが集まっていた。

「お早うさん。」

「「「お早う（御座います）」」」

俺が皆に挨拶をすると、皆は声を揃えて挨拶をしてくれた。

……デジモン達の姿が見当たらないって事は、皆もヒカリちゃんと同じで鞆の中に入れているのか。

「航、何で竹刀を持って来てるのさ？」

「ん？」

ああ、伊織君が稽古を付けて欲しいって頼んで来たから。」

するとタケルが俺に近付いて来て聞いてきたので、俺は苦笑いしながら伊織君の顔を見てそう言った。

否、前の冒険で伊織君とかなり友好的に成って、前よりは甘えてくれてるんだよ。

昨日、『ピクニックに行ったら、僕に時雨蒼燕流を教えて下さい。』って電話が来たから、甘えろって言ったのは俺だから断れずに了承して竹刀を持って来た訳だ。

勿論、伊織君も竹刀を持って来てるからな。

「ふうん、そうなんだ。」

あつ、無茶したらダメだよ。」

「“させたら”じゃなくて“したら”かよ……分かってるよ。」

「皆ー待ったー？」

俺とタケルがそんな会話をしていると、京さんが走ってやって来て聞いて来た。

京さんも鞆の中に……デジモン達も大変だな。

「よし……入るぞ。」

俺がデジモン達に同情していると、大輔が小さい声でそう言っている中に入ってしまった。

俺は直ぐに大輔達の後を追いつけて、先生達にバレない様に物音を立てずにパソコンルームに向かった。

えっ、不法侵入？

ナニソレ、オイシイノ？

「全く、何でパソコンクラブの私がパソコンルームに行くのにこそと……」

「仕方が無いですよ京さん、休日は学校の施設を使用出来ないんですから。」

「静かにしろー。」

不貞腐ている京さんに伊織君が宥めていると、大輔が何時もとは考えられない位小さな声で二人に注意をした。

京さん、余りグチグチ言っていると結婚出来ませんよ。

パシンッ！！

「ぐおおおお……!？」

「な、何をしてるんですか京さん!？」

「えっ……と、今物凄く失礼な事を言われた様な気がして……」

「だくかくらく、静かにしろ。」

すると京さんが突然頭を叩いてきたので俺は頭を抑えて声を出来る限り殺していると、伊織君が俺の後ろに立って京さんに叩いた理由を聞いてくれた。

すると京さんは俺の思った事を超能力で読み取ったのか叩いた理由を言うと、大輔がまたしても小さな声で注意してきた。

……うん、この世界は心を読み取る人が居るから変な事は、本人が居る前で思わない様にしよう。

そして何事も無かったかの様に皆は歩き出したので、俺は少し泣きそうになりながらも皆を追いつけた。

………

………

………

………

俺達は何とか無事にパソコンルームにやって来れた……あんだけ大きな声を出したのに、先生にバレてないなんて奇跡だな。

そして俺以外の皆は鞆を下ろしてパソコンの前に移動したので、

俺・コロナモン・ルナモン・テイルモンで鞆の中に入っているデジモン達を救出した。

チビモン・ポロモン・ウパモンは未だ余裕が在ったが、パタモンは余裕が無かったのか鞆を空けた瞬間鞆から飛び出してきた。

俺は余りにも可哀想だったので、パタモンに今日飲もうと思っていたCHU×2ゼリーをあげた。

そしてパタモンが嬉しそうな顔をして受け取って握手を求めたので、俺はパタモンと力強く握手をした。

パタモンとの友情がアップした……的な？

「よし、パソコンの準備完了！」

京さんがそう言うと、皆は鞆を背負ってD-3をパソコンの画面に構えたので、俺もパソコンの前に立ってデジヴァイスアルティメットバージョンを構えた。

「デジタルゲートオープン！
選ばれし子供たち」

ガラガラ

京さんが決め台詞的な物を言おうとした時、パソコンルームの扉が突然開いた。

……って、

「「「うわあああああ！！？」」」

「「今頃かよ！？」」

ヒカリちゃん達はパニックって大声で驚き、俺と大輔は思わずハモってツツコんでしまった。

だか扉を開けたのは、俺達より少し年上で髪の毛をピンクに染めている女の子だった。

……………えっ？

「貴方達……なにしてるの？」

「否、えーと……」

「「「ミミさん！」」」

女の子が不思議そうな顔をして聞いて来たので、大輔が戸惑っていたが俺・タケル・ヒカリちゃんは女の子・ミミさんの顔を思い出して名前を呼んだ。

いやー、髪の毛がピンクだったから全然分からなかったよ。

「タケル君にヒカリちゃん、それに航君も……」

ミミさんは俺達三人の顔を見て驚いた顔をしたが、大輔達三人はミミさんの事を分かってないので戸惑っていた。

「大輔達三人は名前しか知らないよな。」

前の選ばれし子供の一人の太刀川ミミさん。」

俺がミミさんの事を説明すると、三人は理解したのか手をポンつとした。

それにしても、ミミさん向こうに行って更にチャラく成ったな。

「それより、皆何してたの？」

「これからデジタルワールドへピクニックに行くんです。」

ミミさんが聞いて来たので、タケルがピクニックの事を説明した。
……今から行くエリアはダークタワーが無い場所だから、ミミさんも誘おうか？

問題は弁当だけど、京さんが何か色々持って来てるし俺達のを分けたら良いだけだな。

「ミミさんも一緒に行きます？」

「えっ？」

うーん、従姉妹の結婚式に呼ばれてるけど、結婚式は明日だし……
うん、一緒に行かして貰うわ！」

俺がミミさんを誘うと、ミミさんは日本に来た理由を呟いて一瞬黙り込んだが一緒に行くと行ってくれた。

なので俺達は気を取り直してデジヴァイスをパソコンの構えた。

「じゃあ改めて……デジタルゲートオープン、選ばれし子供達出動
！」

京さんの掛け声で俺達はデジタルワールドに向かった。

……思ったんだが、今回はピクニックだから出動じゃない様な？

……

……

.....

.....

「ダークタワーは……無い！」

大輔が辺りを見渡してそう言うのと、俺以外のメンバーがホッと一息吐いた。

ミミさんはデジタルワールドが懐かしいのか、周りを見渡してあの冒険の事を思い出している顔をしていた。

そして俺達は歩き出し、ミミさんに歩きながら今デジタルワールドで起こっている事を話した。

「デジモンカイザー……」

「ダークタワーを建てて、デジタルワールドを支配しようってお子様の考えを持っている厨二病の格好をした奴ですよ。」

ミミさんが彼奴の名前を言ったので、俺が彼奴の事を言ったら皆が苦笑いした。

あれ、俺って間違った事を言った？

「この辺はダークタワーが建ってないから、安全って事？」

「だからピクニックに来たんですよ！」

ミミさんが疑問に思った事を聞くと、京さんが笑顔でミミさんに答えた。

「でもデジタルワールドへピクニックだなんて、私達の時代では考

えられなかったわね。」

ミミさんは空を見ながら、あの冒険の事を言った。
確かに、あの冒険は俺は途中参加だったけど大変だったよな。
自給自足で死と隣り合わせの冒険、でもあの冒険のお陰で俺達は
成長出来た。

「私達もこれ迄はダークタワーを壊す為だけに来てたんですけど、
今日はゴールデンウィークだし偶には息抜きも良いんじゃないかっ
て思ってる。」

「大輔くん、そろそろお昼にしない？」

京さんが今日の事をミミさんに説明し終わると、タケルが先頭を
歩いている大輔に昼食を提案した。
そうだな、結構歩いたしこの辺りは見晴らしが良いからタケルに
賛成だな。

「未だ早いんじゃないか？」

「……私お腹空いちゃったな。」

「よし、お昼にしよう！」

パシンッ！！

い、今起こった事を説明するぜ？
タケルの提案に反対した大輔だったが、ヒカリちゃんの一言で昼

食にするって言ったんだ。

大輔がそう言った瞬間、俺の後ろを歩いていたタケルがハリセンで大輔の頭を叩いたんだ。

……って、

「何してんだよ、タケル!？」

「……否、今ちよっとイラッって来たから……」

「ハリセンは持って来てたのかよ……」

俺がタケルからハリセンを取り上げて聞くと、タケルはドークタケルに成っていて大輔にちよっと切れた顔をして言った。

た、タケルってこんなキャラだったか？

こ、怖エ……男版の魔王じゃん。

えっ、女版は誰だって？

そんなの言わなくても分かるだろ、女版の魔王はh

「航君？」

「ご免なさい。orz」

ヒカリちゃんがハイライトの消えた目で話し掛けてきたので、俺は直ぐに土下座をして謝った。

ミミさんが苦笑いしてたけど、命が惜しいので気にしない。

……

……

.....

.....

まあ何だかんだ遭ったが、俺達は草原が広がるこの場所にシート
ん引いて、弁当を出している。

勿論、男版と女版の魔王も機嫌が戻ったよ。

大輔がウダウダ言っていたが、ヒカリちゃんが笑顔で話し掛ける
と何故かビビって黙り込んだ。

……俺の気持ちがあったか、大輔。

「ミミさん、家のコンビニのお握りなんですけど、食べますか？」

京さんはツナマヨを取り出してミミさんに渡すと、ミミさんは目
に涙を溜めた。

Why?

「ツナマヨ……夢に迄見た、ツナマヨオオオオ!!!!」

ミミさんは涙を流す様な顔をしながら、京さんから受け取ったツ
ナマヨを食べ始めた。

アメリカにはツナマヨは無いからな……ん、あれって……

「京さん、それって……」

俺が京さんに“ある物”を指さして聞くと、京さんは“ある物”
を取り出した。

間違いない……あれは、

「家って他の店より結構速く売り始めるのよね、“冷やし中華”。」

「俺に下さい!!」

京さんがある物・冷やし中華を俺に見せてそう言ったので、俺と何故かコロナモンがミミさんにそう言った。
って、

「何でコロナモンが欲しいんだよ!？」
俺と母さんが作った弁当を食べろよ!」

「俺は“冷やし中華”を食べたいって三年間ずっと思ってたんだ!それから、弁当は既に食べた!何で航は“冷やし中華”を食べたいんだよ!？航こそ、弁当を食べろよ!」

「た、食べたって速過ぎだろ!俺が夏の食べ物が好きだって知ってるだろ、それが目の前に在ったら食べたいに決まってるだろ!!」
それに、俺も既に弁当を食べたわ!!」

俺とコロナモンは“冷やし中華”を食べたい理由を言って、互いに譲る気は無くて睨み合っていた。

……そうかい、譲る気は無いんだな……

「勝負だコロナモン、勝った方が“冷やし中華”を食べる。」

「良いぜ、その勝負乗った!!」

俺は竹刀を持って、コロナモンと一緒に皆に迷惑が掛からない場所に移動した。

大輔が「子供か!？」ってツツコんでいたが、コロナモンは分かんが俺は子供だ!

はっはっは、参ったか大輔!!

「……行くぜ、航。」

「!？」

あ、嗚呼、この勝負……ゼツテエ負けられねエ。」

コロナモンが真剣な顔をして言ってきたので、俺は考えていた事を全部頭の片隅に置いて竹刀を構えた。

勝利以外認められない、敗者には無様に勝者の至福な顔を見なければならぬ。

「時雨青燕流、攻式五の型……」

俺はそう言って原作の人の八の型を使う体勢に入り、コロナモンは手に炎を出現させた。

竹刀に少しでも掠ったら俺の負け……不利だけど絶対に勝つ!そして、

「篠突く雨!!」

「コロナツクル!!」

技名を言って走り出して、互いに技を体にブツケようとした。

そしてお互いの距離がほぼ0に成った瞬間、地面の感覚が急に無くなった。

なので俺達は技を途中で止めて、下を見た。

「「……………マジかよ。」」

俺達は下を見てそう言った、何故なら地面が無くて足下は暗闇が広がっていたからだ。

なので俺達は……

「「俺の冷やし中華アアアアアア！！！」」

暗闇に叫びながら落ちた。

第百五話だよ！（後書き）

次回は『危険なピクニック Part 2』です。

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2884t/>

デジモンアドベンチャー 転生したらこうなった

2012年1月9日22時47分発行